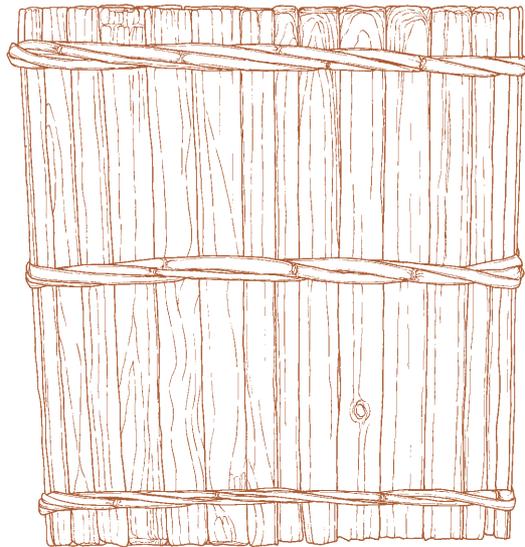


天神遺跡 ・ 林口遺跡

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書



2001.2

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

天神遺跡 ・ 林口遺跡

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書

2001.2

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



天神遺跡 区完掘状態(上空より)



林口遺跡 区完掘状態(上空より)



天神遺跡 区SA - 1 ~ 4(西より)



天神遺跡 区SU - 1 ~ 4(西より)



林口遺跡 区SE - 1(南より)



林口遺跡 区SE - 1半裁(南より)



林口遺跡 区SE - 2(西より)



林口遺跡 区SE - 2半裁(南より)



天神遺跡 区弥生土器鉢(129),瓦器椀(84,85),東播系須恵器片口鉢(115)・椀(139),土師質土器杯(31,146,195)



林口遺跡 区縄文土器深鉢(234)・浅鉢(242),弥生土器壺(152)・甕(168),土師質土器杯(62,146)



林口遺跡 区SE - 1桶側井筒(185), 林口遺跡 区SE - 2桶側2~6段目(214~218)

序

土佐市は高知県のほぼ中央部，四国山地を源とする仁淀川の右岸に位置し，南は太平洋に面しています。漁業も盛んな自然環境に恵まれた豊かな土地であり旧高岡郡内では最も遺跡数が多いことも頷けます。また，土佐市の中心である高岡町には江戸時代以来用水路が引かれ，水が生活に密着している様子も伺えます。

今回の発掘調査は土佐市バイパス建設に伴うもので，本書で報告している天神遺跡など今まで知られていなかった遺跡も新たに確認されました。

天神遺跡では12世紀後半から13世紀にかけての屋敷跡が確認され，多量の搬入品が出土しています。また，林口遺跡では縄文時代後期の遺構，遺物を始め，溝に囲まれた屋敷跡や井戸跡も確認されました。丁度，石組みの井戸跡は長宗我部地検帳に記載された屋敷跡との関連も考慮されます。

土佐市ではこれまで本格的な発掘調査がなされていませんでしたが，土佐市バイパス関連の発掘調査を始めとして各種開発工事に伴う発掘調査が増加し，土佐市の歴史が少しずつ明らかになってきています。これを機に地域の方々にも広く埋蔵文化財の重要性をご理解頂き，活用して頂きたいと願っております。

最後に，調査にあたり多大な御理解と御協力を頂いた建設省高知工事事務所，土佐市都市計画課，地元関係者の方々，発掘調査に従事して下さった作業員の皆様に心より御礼申し上げます。

平成13年2月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 門田 伍朗

例言

1. 本書は土佐市バイパス建設に伴い平成8年度に発掘調査を実施した天神遺跡第 調査地区(天神遺跡 区ともいう。)と平成8・10年度に発掘調査を実施した林口遺跡第 調査地区(林口遺跡 区ともいう。)の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県教育委員会が建設省四国地方建設局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 天神遺跡と林口遺跡は高知県土佐市高岡町に所在する弥生時代から近代にかけての複合遺跡である。今回報告する調査区からは、中世の屋敷跡が中心に検出されており、天神遺跡では屋敷跡と低湿地との境からまとまった遺物が出土し、林口遺跡では石組み井戸跡(中世末)と桶側を6段積み重ねた井戸跡(近世)が検出されている。発掘調査面積は、平成8年度の天神遺跡が2,371㎡(延べ面積2,583㎡)、林口遺跡A区が2,645㎡、平成10年度に実施した林口遺跡B区が519㎡、林口遺跡C区が385㎡であった。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

平成8年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 古谷碩志

総 務：同次長兼総務課長 田岡英雄，同主幹 吉岡利一，同主事 石川 馨

調査総括：同調査課長 岩崎嘉郎

調査担当：同調査第四係長 廣田佳久，同専門調査員 泉 幸代，同主任調査員 伊藤 強，
同調査員 小野由香・田中涼子，技術補助員 有田千帆・大原直美

臨時職員：大崎奈智子，滝本幸子

平成9年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 古谷碩志

総 務：同次長兼総務課長 津野洲夫，同主幹 吉岡利一・石川 馨

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 宮地早苗・泉 幸代，同主任調査員
伊藤 強，同調査員 田中涼子，技術補助員 有田千帆・大原直美

臨時職員：滝本幸子，中村美樹

平成10年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 古谷碩志

総 務：同総務課長 津野洲夫，同主幹 大原裕幸・石川 馨

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 名木 郁，同主任調査員 伊藤 強，
同調査員 田中涼子，技術補助員 大原直美

臨時職員：中村美樹，福留美穂

平成11年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 河崎正幸

総 務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 大原裕幸

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 高橋厚彦，同主任調査員 伊藤 強・
畠中宏一，同調査員 田中涼子・下村 裕，技術補助員 大原直美

臨時職員：福留美穂，市村敏江

平成12年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 門田伍朗

総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 大原裕幸

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 高橋厚彦・岩本繁樹，同主任調査員 伊藤 強・江戸秀輝，同調査員 田中涼子・下村 裕・技術補助員 大原直美

臨時職員：原真由美，福留美穂

5. 本書の執筆は調査を担当した廣田，泉，田中がそれぞれ執筆し，編集等は廣田が行った。現場写真は4名(発掘調査を担当した廣田，泉，小野，田中)が行い，遺物写真は廣田が撮影した。
6. 遺構については，SB(掘立柱建物跡)，SA(塀・柵列跡)，SK(土坑)，SD(溝跡・暗渠)，P(ピット)，SU(畝状遺構)，SX(性格不明遺構)，SE(井戸跡)等の略号も併用している。遺構番号は遺跡，遺構ごとに通し番号とした。また，掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記しており，方位Nは公共座標におけるGNであり，遺跡付近(国土基本図 - ID18)の真北はGNに対し東に $0^{\circ} 16'$ ，磁北はGNに対し西に $5^{\circ} 48' 35''$ 振っている。なお，D9(X=55,200, Y=-7,100)は北緯 $33^{\circ} 29' 52''$ ，東経 $133^{\circ} 25' 25''$ である。
7. 遺物については，原則として縮尺1/3で掲載し，一部の遺物については縮尺を変えているが，各挿図にはスケールを表示している。遺物番号は遺跡，地区ごとに通し番号とし挿図と図版の遺物番号は一致している。なお，報告書中で土師質土器としているものはロクロないし回転台を使用しない土師器に対しロクロないし回転台を使用した素焼き土器の総称として使用している。所謂「回転台土師器」，「ロクロ土師器」などと云われるものに当たる。
8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたって，下記の方々のご指導並びに貴重なご教示，ご助言を賜り協力頂いた。記して感謝の意を表したい。
山中敏史(奈良国立文化財研究所)，久保智康(京都国立博物館)，鈴田由紀夫(九州陶磁文化館)，森島康雄(京都府埋蔵文化財調査研究センター)，鈴木康之(広島県立歴史博物館)，百瀬正恒(京都市埋蔵文化財研究所)，橋本久和(当時高槻市教育委員会)，前田佳久(神戸市立博物館)
9. 整理作業は下記の方々に行って頂いた。また，同センターの諸氏から貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。
整理作業員
島村加奈，森田史子，岸本洋子，元木恵利子，坂本エリ，岸田美智，竹村小百合，森田直美，松田美香，岩井涼子，井上紹子，安岡明子，吉野絵里，森川 歩，森沢美紀，石元清香，片山紀子，岡宗裕美，横山めぐみ，原真由美
10. 調査にあたっては，建設省四国地方建設局高知工事事務所，土佐市バイパス監督官詰所，土佐市都市計画課，社団法人高知県建設技術公社のご協力を頂いた。また地元住民の方々に，遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き，厚く感謝の意を表したい。
11. 出土遺物は，平成8年度の天神遺跡が「96 - 5TT」，林口遺跡が「96 - 6TH」，平成10年度の林口遺跡が「98 - 6TH」と註記し，財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第 章 序 章(廣田)

1. はじめに.....	1
2. 遺跡の概要.....	2

第 章 天神遺跡

1. 調査の経過(泉).....	7
(1) 調査の経過.....	7
(2) 調査日誌抄.....	7
2. 調査の概要(泉).....	9
(1) 調査区の概要.....	9
(2) 層序.....	10
(3) 堆積層出土遺物.....	12
3. 遺構と遺物(泉).....	23
(1) 中世.....	23
(2) 近世.....	46
(3) 近代.....	47

第 章 林口遺跡

1. 調査の経過(廣田).....	53
(1) 調査の経過.....	53
(2) 調査日誌抄.....	53
2. 調査の概要.....	56
(1) A区(廣田).....	56
層序.....	56
堆積層出土遺物.....	57
(2) B区(田中).....	73
層序.....	76
堆積層出土遺物.....	77
(3) C区(田中).....	77
層序.....	77
堆積層出土遺物.....	79
3. 遺構と遺物.....	80
(1) A区(廣田).....	81
中世.....	81
近世.....	109
近代.....	120

(2) B区(田中).....	123
(3) C区(田中).....	123
縄文時代	123
中世	125
近世	125
近代	126
第 章 考 察	
1. 天神遺跡について.....	127
(1) 中世(泉).....	127
(2) 近世(泉).....	128
(3) 近代(泉).....	129
(4) 低湿地縁辺部(SS - 1)出土遺物について(廣田).....	129
(5) 瓦器について(泉).....	130
(6) まとめ(泉).....	133
2. 林口遺跡について.....	133
(1) 縄文時代(田中).....	134
(2) 中世(廣田).....	134
(3) 近世(廣田).....	135
(4) 近代(廣田).....	136
(5) 井戸について(廣田).....	136
(6) 屋敷跡と長宗我部地検帳の関連について(廣田).....	137
(7) まとめ(廣田).....	138
3. 結語(廣田).....	138
第 章 自然科学分析	
1. 光永・岡ノ下遺跡の自然科学分析報告.....	141
はじめに.....	141
(1) 試料.....	141
(2) 方法.....	141
珪藻分析	141
花粉分析	143
植物珪酸体分析.....	143
土壤理化学分析結果.....	143
(3) 結果.....	144
珪藻化石	144
花粉化石	144
植物珪酸体.....	146

土壤理化学分析	146
(4) 古環境変遷	152
(5) 土坑の遺体埋納について	153
2. 天神遺跡 区・林口遺跡 - A区の自然科学分析報告	155
はじめに	155
(1) 試料	155
(2) 方法	157
珪藻分析	157
花粉分析	157
植物珪酸体分析	157
種実同定	157
土壤理化学分析	157
(3) 結果	158
珪藻化石	158
花粉化石	162
植物珪酸体	162
種実同定	162
土壤理化学分析	162
(4) 古環境変遷について	171
堆積環境	171
古植生変遷	172
(5) 総括	173
(6) 天神遺跡・林口遺跡出土動物遺体	174
試料	174
方法	174
結果	174
3. 土佐市バイパス発掘調査に関わる胎土分析の実例とその展望	176
はじめに	176
(1) 試料	176
(2) 分析方法	177
(3) 結果	179
薄片観察	179
蛍光X線分析	181
(4) 考察	181
高知県の地質学的背景	181
地質学的背景と胎土	186

(5) 今後の展望.....	187
近畿地方産瓦器試料との比較.....	187
高知県内の瓦器の分析.....	187

挿 図 目 次

Fig. 1	高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡群位置図.....	1
Fig. 2	土佐市バイパス関連遺跡群位置図(S = 1/100,000).....	2
Fig. 3	土佐市バイパス関連遺跡及びグリッド設定図(S = 1/10,000).....	3
Fig. 4	周辺小字(ホノギ)図(S = 1/10,000).....	4
Fig. 5	記者発表.....	8
Fig. 6	産業ヘリコプター撮影風景.....	9
Fig. 7	天神遺跡の範囲と調査対象区域図(S = 1/2,500).....	10
Fig. 8	天神遺跡調査区設定図(S = 1/2,000)(公共座標値の後のカッコはグリッド番号を示す。).....	11
Fig. 9	南壁セクション図(SK - 5 , SS - 1付近).....	12
Fig. 10	第 層出土遺物実測図.....	13
Fig. 11	第 層出土遺物実測図.....	14
Fig. 12	第 層出土遺物実測図1.....	16
Fig. 13	第 層出土遺物実測図2.....	18
Fig. 14	第 層出土遺物実測図.....	20
Fig. 15	第 層出土遺物実測図.....	22
Fig. 16	SB - 1.....	23
Fig. 17	SB - 2.....	24
Fig. 18	SB - 3.....	25
Fig. 19	SB - 4.....	25
Fig. 20	SB - 5.....	26
Fig. 21	SB - 6.....	27
Fig. 22	SB - 7.....	27
Fig. 23	SB - 8.....	28
Fig. 24	SB - 9.....	28
Fig. 25	SB - 10.....	29
Fig. 26	SA - 1.....	29
Fig. 27	SA - 2.....	29
Fig. 28	SA - 3.....	30
Fig. 29	SA - 4.....	30

Fig. 30	SA - 5.....	30
Fig .31	SA - 6.....	30
Fig. 32	SK - 3.....	31
Fig. 33	SK - 5.....	31
Fig. 34	SK - 7.....	32
Fig. 35	SK - 12.....	33
Fig. 36	SK - 14.....	33
Fig. 37	SD - 4 ~ 8.....	35
Fig. 38	SD - 9・11・13.....	36
Fig. 39	SD - 15 ~ 17.....	37
Fig. 40	SB - 1・3・4・9,SA - 2,SK - 4・6・7・11,SD - 2・11・12・14・17,P - 1・2出土遺物実測図..	38
Fig. 41	SS - 1出土遺物実測図1.....	40
Fig. 42	SS - 1出土遺物実測図2.....	41
Fig. 43	SS - 1出土遺物実測図3.....	42
Fig. 44	SS - 1出土遺物実測図4.....	43
Fig. 45	SS - 1出土遺物実測図5.....	44
Fig. 46	SS - 1出土遺物実測図6.....	45
Fig. 47	SU - 1 ~ 4.....	47
Fig. 48	SD - 21・23・27出土遺物実測図.....	49
Fig. 49	SX - 1出土遺物実測図.....	51
Fig. 50	現地説明会1.....	54
Fig. 51	現地説明会2.....	55
Fig. 52	林口遺跡の範囲と調査対象区域図(S = 1/2,500).....	57
Fig. 53	林口遺跡調査区設定図(S = 1/2,000)(公共座標値の後のカッコはグリッド番号を示す。)... ..	58
Fig. 54	A区西側(S = 1/400).....	59
Fig. 55	A区北壁セクション図(SD - 1・2付近).....	59
Fig. 56	A区西側西壁セクション図.....	60
Fig. 57	第 層出土遺物実測図1.....	61
Fig. 58	第 層出土遺物実測図2.....	62
Fig. 59	第 層出土遺物実測図.....	64
Fig. 60	第 層出土遺物実測図1.....	65
Fig. 61	第 層出土遺物実測図2.....	67
Fig. 62	第 層出土遺物実測図3.....	68
Fig. 63	第 層出土遺物実測図4.....	69
Fig .64	第 層出土遺物実測図5.....	71
Fig. 65	第 層出土遺物実測図6.....	72

Fig. 66	B区遺構平面図(S = 1/200)	74
Fig. 67	B区北壁セクション図	75
Fig. 68	B区下層トレンチセクション図	76
Fig. 69	第・層出土遺物実測図	77
Fig. 70	C区縄文時代遺構平面図1	77
Fig. 71	C区縄文時代遺構平面図2	78
Fig. 72	C区中近世遺構平面図	78
Fig. 73	C区セクション図	79
Fig. 74	第・・XI・XII層出土遺物実測図	80
Fig. 75	SB - 1	81
Fig. 76	SB - 2	82
Fig. 77	SB - 3	82
Fig. 78	SB - 4	83
Fig. 79	SB - 5	84
Fig. 80	SB - 6	84
Fig. 81	SB - 7	85
Fig. 82	SB - 8	85
Fig. 83	SB - 9	86
Fig. 84	SB - 10	86
Fig. 85	SB - 11	87
Fig. 86	SB - 10・11出土遺物実測図	88
Fig. 87	SA - 1	89
Fig. 88	SA - 2	89
Fig. 89	SA - 3	89
Fig. 90	SA - 4	89
Fig. 91	SA - 5	90
Fig. 92	SA - 6	90
Fig. 93	SA - 7	90
Fig. 94	SA - 8	90
Fig. 95	SA - 9	90
Fig. 96	SA - 10	91
Fig. 97	SK - 2	92
Fig. 98	SK - 3	92
Fig. 99	SK - 7・26	92
Fig. 100	SK - 9	93
Fig. 101	SK - 10	93

Fig.102	SK - 12.....	93
Fig.103	SK - 16.....	94
Fig.104	SK - 1・11・13・15・16出土遺物実測図.....	94
Fig.105	SD - 1・2.....	96
Fig.106	SD - 1出土遺物実測図.....	97
Fig.107	SD - 2出土遺物実測図.....	99
Fig.108	SD - 3～6.....	101
Fig.109	SD - 8・10・11・14.....	102
Fig.110	SD - 17.....	103
Fig.111	SD - 3・4・12・17・19出土遺物実測図.....	104
Fig.112	SD - 21.....	105
Fig.113	SE - 1.....	105
Fig.114	SE - 1出土遺物実測図.....	106
Fig.115	P - 1～6出土遺物実測図.....	108
Fig.116	SB - 12.....	109
Fig.117	SK - 17.....	110
Fig.118	SK - 18.....	110
Fig.119	SK - 19.....	111
Fig.120	SK - 20.....	111
Fig.121	SK - 21.....	111
Fig.122	SK - 22.....	112
Fig.123	SK - 23.....	112
Fig.124	SK - 28.....	114
Fig.125	SK - 17・19・21・25・27・28出土遺物実測図.....	114
Fig.126	SE - 2.....	116
Fig.127	SE - 2出土遺物実測図1.....	116
Fig.128	SE - 2出土遺物実測図2.....	117
Fig.129	SE - 2出土遺物実測図3.....	118
Fig.130	SE - 2出土遺物実測図4.....	119
Fig.131	SX - 1・2出土遺物実測図.....	119
Fig.132	SD - 26～29・31・33出土遺物実測図.....	122
Fig.133	SK - 1.....	123
Fig.134	SK - 1出土遺物実測図.....	124
Fig.135	SD - 1.....	125
Fig.136	SD - 1出土遺物実測図.....	125
Fig.137	出土遺物グラフ.....	132

Fig.138	調査地点の模式柱状図.....	142
Fig.139	A区土坑内分析試料採取位置.....	143
Fig.140	A・B区堆積物断面の土壤理化学性の層位変化.....	149
Fig.141	A区土坑の土壤理化学性層位分布.....	151
Fig.142	遺跡断面の分析試料採取層.....	156
Fig.143	天神遺跡 区(3)の主要花粉化石層位分布図.....	166
Fig.144	天神遺跡 区・林口遺跡 - A区の土壤理化学性の層位変化.....	170
Fig.145	林口遺跡 - A区SK - 20出土上下顎歯の部位.....	175
Fig.146	各遺跡出土試料の胎土ノルム鉱物組成三角ダイアグラム.....	185

表目次

Tab. 1	天神遺跡塀・柵列跡計測表.....	30
Tab. 2	林口遺跡掘立柱建物跡計測表.....	88
Tab. 3	林口遺跡塀・柵列跡計測表.....	91
Tab. 4	林口遺跡中世土坑計測表.....	95
Tab. 5	林口遺跡近世・近代土坑計測表.....	115
Tab. 6	天神遺跡掘立柱建物跡計測表.....	127
Tab. 7	天神遺跡土坑計測表.....	128
Tab. 8	天神遺跡出土遺物一覧表.....	131
Tab. 9	珪藻分析結果.....	145
Tab.10	花粉分析結果.....	146
Tab.11	植物珪酸体分析結果.....	147
Tab.12	土壤理化学分析結果.....	148
Tab.13	A区土坑の土壤理化学分析結果.....	150
Tab.14	珪藻分析結果1.....	159
Tab.15	珪藻分析結果2.....	160
Tab.16	珪藻分析結果3.....	161
Tab.17	花粉分析結果1.....	163
Tab.18	花粉分析結果2.....	164
Tab.19	花粉分析結果3.....	165
Tab.20	植物珪酸体分析結果.....	167
Tab.21	各遺跡の土壤理化学分析結果.....	169
Tab.22	胎土薄片観察結果.....	178
Tab.23	各遺跡出土試料のX線回折分析による同定鉱物と回折強度.....	179

Tab.24	各遺跡出土試料の蛍光X線分析結果(化学組成).....	182
Tab.25	各遺跡出土試料の補正化学組成.....	183
Tab.26	各遺跡出土試料の胎土ノルム鉱物組成.....	184

図版目次

巻頭図版1	天神遺跡 区完掘状態(上空より)	南壁セクション2
巻頭図版2	林口遺跡 区完掘状態(上空より)	PL.7 SB - 2(南より)
巻頭図版3	天神遺跡 区SA - 1~4(西より)	SB - 3(南東より)
	天神遺跡 区SU - 1~4(西より)	PL.8 SB - 5(西より)
巻頭図版4	林口遺跡 区SE - 1(南より)	SA - 1~4(西より)
	林口遺跡 区SE - 1半裁(南より)	PL.9 SK - 1,SD - 1~3(南より)
巻頭図版5	林口遺跡 区SE - 2(南より)	SK - 9,SD - 11(西より)
	林口遺跡 区SE - 2半裁(南より)	PL.10 SK - 14(北より)
巻頭図版6	天神遺跡 区弥生土器鉢(129),瓦 器(84,85),東播系須恵器(115,140), 土師質土器杯(31,146,195)	SK - 16,SD - 15~17(西より)
		PL.11 SD - 6~8(西より)
		SD - 11・12(北より)
巻頭図版7	林口遺跡 区縄文土器深鉢(234)・ 浅鉢(242),弥生土器甕(56)・壺 (152),土師質土器杯(61,146)	PL.12 SD - 11(南より)
		SD - 12(南より)
		PL.13 SK - 3,SS - 1(北西より)
巻頭図版8	林口遺跡 区SE - 1桶側井筒(185), 林口遺跡 区SE - 2桶側2~6段目 (214~218)	SS - 1(南より)
		PL.14 SU - 1~4(西より)
		SU - 1~4(北より)
天神遺跡第 調査地区(天神遺跡 区).....	PL.15 SX - 1セクション(南西より)	
PL.1	調査前全景(東より)	SX - 1完掘状態(東より)
	調査前全景(西より)	PL.16 東西トレンチ完掘状態(西より)
PL.2	遺構検出状態(西上空より)	トレンチ中央部北壁セクション1
	遺構完掘状態(東上空より)	PL.17 トレンチ中央部北壁セクション2
PL.3	遺構検出状態(東より)	トレンチ中央部北壁セクション3
	遺構完掘状態(東より)	PL.18 トレンチ東部北壁セクション
PL.4	遺構検出状態(西より)	トレンチ西部北壁セクション
	遺構完掘状態(西より)	PL.19 第 層瓦質土器(46)出土状態,第 層
PL.5	東壁セクション1	瓦器(85)出土状態,SB - 3土師質土器
	東壁セクション2	(103)出土状態,SB - 5礎板検出状態,
PL.6	南壁セクション1	SB - 9遺物出土状態,SA - 2土師質土

- 器(113)出土状態,SK - 6東播系須恵器
(115)出土状態,SK - 7(東より)
- PL.20 SK - 8(北より),SK - 9(南より),SK -
16(西より),SD - 5(西より),SD - 7(西
より),SD - 8(東より),SD - 9(東より),
SD - 10(東より)
- PL.21 SD - 11(南より),SD - 17瓦器(125)出
土状態,SD - 17(東より),SD - 18(北
より),P - 1土師質土器(126)出土状態,
柱穴礎板検出状態,SS - 1土師質土器
(147)出土状態,SS - 1土師質土器(150)
出土状態
- PL.22 SS - 1土師質土器(161)出土状態,
SS - 1土師質土器(163)出土状態,
SS - 1土師質土器出土状態1,SS - 1土
師質土器出土状態2,SS - 1土師質土
器出土状態3,SS - 1遺物出土状態,
SS - 1白磁(190)出土状態,SD - 24(東
より)
- PL.23 瓦器(椀)
瓦器(椀)
- PL.24 常滑焼(甕)
瓦質土器(甕)
- PL.25 青磁(碗)内面
青磁(碗)外面
- PL.26 青磁(碗)
土師質土器(小皿)
- PL.27 東播系須恵器(片口鉢),須恵質土器(甕),
土師質土器(杯,小皿,皿,椀)
- PL.28 瓦器(椀),東播系須恵器(片口鉢),土
師質土器(杯),東播系須恵器(片口鉢)
- PL.29 東播系須恵器(椀),土師質土器(杯)
- PL.30 土師質土器(杯),土師質土器(小皿)
- PL.31 土師質土器(椀),備前焼(播鉢),瓦質
土器(羽釜),青磁(皿)
- PL.32 須恵器(杯),瓦器(椀),東播系須恵器
(片口鉢),土師質土器(杯,小皿)
- PL.33 弥生土器(甕),須恵器(高杯),土師質
土器(杯),石製品(石鍋,砥石)
- PL.34 瓦器(椀),東播系須恵器(椀,片口鉢),
土師質土器(羽釜),堺・明石産焼締陶
器(播鉢),近世陶器(鉢),瓦質土器(甕),
白磁(碗,皿),土製品(土錘)
- PL.35 瓦器(椀),土師質土器(杯,羽釜),瓦質
土器(三足羽釜),青磁(碗),金属製品
(刀子),土製品(土錘),古銭
- PL.36 瓦器(椀,小皿),土師質土器(杯,小皿),
瓦質土器(羽釜),瀬戸・美濃系磁器
(皿)
- PL.37 弥生土器(鉢),土師器(甕),瓦器(椀),
東播系須恵器(椀),土師質土器(杯,小
皿)
- PL.38 土師質土器(杯,小皿,椀)
- 林口遺跡第 調査地区(林口遺跡 区).....
- PL.39 調査前全景(東より)
調査前全景(西より)
- PL.40 遺構検出状態(東より)
遺構完掘状態(東より)
- PL.41 遺構検出状態(南西上空より)
遺構完掘状態(南西上空より)
- PL.42 遺構完掘状態(南上空より)
調査区西部遺構完掘状態(東上空より)
- PL.43 A区西側確認トレンチ(北より)
A区西側確認トレンチ西壁セクション
- PL.44 SB - 2(北より)
SB - 3・11(東より)
- PL.45 SB - 5(北より)
SB - 6・7(東より)
- PL.46 SB - 8,SK - 13(東より)
SB - 10(北より)
- PL.47 SB - 11(南西より)
SB - 12(北より)

- PL.48 SK - 20(南より)
SD - 1(北より)
- PL.49 SD - 1・2(南上空より)
SD - 1・2完掘状態(北より)
- PL.50 SD - 2北バンク(南より)
SD - 2南バンク(南より)
- PL.51 SE - 1検出状態(南東より)
SE - 1完掘状態1(南より)
- PL.52 SE - 1完掘状態2(南より)
SE - 1半裁状態(南より)
- PL.53 SE - 2検出状態(北東より)
SE - 2掘方半裁状態(北より)
- PL.54 SE - 2(西より)
SE - 2半裁状態(南より)
- PL.55 SK - 8(南より), SK - 9(西より), SK - 12(南より), SK - 16備前焼(142)出土状態, SK - 17(南より), SK - 23(南より), SD - 1土師質土器(146)出土状態, SD - 2土師質土器(159)出土状態
- PL.56 SD - 2下駄(167)出土状態, SD - 3(南より), SD - 3遺物出土状態, SD - 3瓦器(169, 170)出土状態, SD - 11北バンク(南より), SD - 11南バンク(南より), SD - 13(南より), SD - 15(南より)
- PL.57 B区遺構検出状態(西より)
B区遺構完掘状態(北東より)
- PL.58 C区中世遺構検出状態(北より)
C区中世遺構完掘状態(北西より)
- PL.59 C区第XV層上面遺構検出状態(東より)
C区第XV層上面遺構完掘状態(東より)
- PL.60 B区北壁セクション, B区下層確認トレンチ(東より), C区北壁セクション西部, C区北壁セクション東部, C区下層確認トレンチ(東より), C区SK - 1(北より), C区SD - 1(東より), C区SD - 3(西より)
- PL.61 備前焼(播鉢), 白磁(碗, 皿)
- PL.62 白磁(小杯, 皿, 溝縁皿), 肥前系陶器(碗)内面, 白磁(小杯, 皿, 溝縁皿), 肥前系陶器(碗)外面
- PL.63 青磁(碗, 杯, 盤)内面, 青磁(碗, 杯, 盤)外面
- PL.64 青磁(碗), 染付(碗), 肥前系陶器(碗, 溝縁皿, 紅皿, 火入), 染付(小碗, 皿)
- PL.65 土師質土器(鍋, 羽釜, 火鉢), 瓦質土器(羽釜)
- PL.66 備前焼(甕, 播鉢), 白磁(碗, 杯), 青磁(皿)
- PL.67 青磁(碗), 石製品(白, 砥石)
- PL.68 須恵器(杯蓋), 緑釉陶器(皿), 土師質土器(羽釜), 青磁(碗), 土師器(甕), 東播系須恵器(椀, 片口鉢), 土師質土器(羽釜), 備前焼(甕), 白磁(皿), 青磁(碗), 石製品(石鍋)
- PL.69 木製品(下駄)表面, 木製品(下駄)裏面
- PL.70 須恵器(壺), 東播系須恵器(片口鉢), 瓦質土器(三足鍋), 青磁(碗), 木製品(桶側)
- PL.71 白磁(皿), 青磁(碗), 染付(碗, 皿), 肥前系陶器(碗), 石製品(砥石), 常滑焼(甕), 白磁(碗), 染付(碗)
- PL.72 土師質土器(火鉢), 備前焼(播鉢), 白磁(多角杯), 土製品(土錘), 土師器(杯蓋), 中国系陶器(皿), 染付(皿), 肥前系磁器(紅皿), 瀬戸・美濃系(皿, 匣鉢)
- PL.73 弥生土器(壺, 甕), 土師質土器(小皿), 石製品(空・風輪)
- PL.74 木製品(桶側)
- PL.75 土師質土器(鍋), 白磁(皿), 肥前系陶磁器(碗), 近世陶磁器(播鉢), 古銭
- PL.76 縄文土器(深鉢, 浅鉢), 土製品(紡錘車), 石器(石包丁)

PL.77	縄文土器(深鉢),土師質土器(羽釜), 備前焼(鉢),青磁(碗),石製品(砥石, 火輪)	PL.82	珪藻化石2
PL.78	縄文土器(深鉢,浅鉢),石製品(砥石)	PL.83	花粉化石1
PL.79	土師質土器(杯,小皿),常滑焼(匣鉢), 備前焼(壺),陶器(天目茶碗),肥前系陶 磁器(皿,香炉)	PL.84	花粉化石2
PL.80	瓦器(小皿),土師質土器(杯・小皿),青 磁(碗),瀬戸・美濃系(菊皿)	PL.85	植物珪酸体,種実遺体
自然科学分析		PL.86	胎土薄片顕微鏡写真1(試料番号1)
PL.81	珪藻化石1	PL.87	胎土薄片顕微鏡写真2(試料番号2)
		PL.88	胎土薄片顕微鏡写真3(試料番号3)
		PL.89	胎土薄片顕微鏡写真4(試料番号4)
		PL.90	胎土薄片顕微鏡写真5(試料番号5)
		PL.91	胎土薄片顕微鏡写真6(試料番号6)

付図目次

付図1	天神遺跡第	調査地区遺構平面図(S = 1/200)
付図2	天神遺跡第	調査地区暗渠平面図(S = 1/200)
付図3	林口遺跡第	調査地区遺構平面図(S = 1/200)
付図4	林口遺跡第	調査地区暗渠平面図(S = 1/200)

第 章 序 章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が建設省四国地方建設局から業務委託を受けた土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査について、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成8年度並びに平成10年度に実施した天神遺跡と林口遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。この一連の調査は建設省四国地方建設局高知工事事務所が実施している土佐市バイパス建設工事に伴い工事区域内に所在する遺跡(埋蔵文化財)の内、工事の影響を受けるものについて事前に発掘調査を行い記録保存を図ることを目的としている。

天神遺跡は平成7年度に実施した事前の試掘調査によって確認された遺跡で、本書で報告するのは平成8年度に本調査を実施した部分であり、平成9・10年度に実施した天神遺跡とは隣接しており、それらについては『天神遺跡』で報告する。また、平成4・5年度に実施された高知県遺跡詳細分布調査で発見された三島遺跡とは近接しており、今後の発掘調査によっては同一の遺跡として捉え得る可能性がある。土佐市、中でもその中心部である高岡町は、現在比較的平坦な地形をなすが、発掘調査の結果から推察すると低湿地部分が比較的多く、遺跡の立地に適した平坦部分から急激に低湿地となる箇所も見受けられ、平坦部は限られ起伏に富んだ地形であり、遺跡の範囲を明確にするには発掘調査の結果を待たなければならないであろう。

林口遺跡は縄文時代、弥生時代、中世の複合遺跡として従前から周知されていた遺跡である。本書で報告する調査地区はこれまでの遺跡範囲の南端に当たり、事前の試掘調査を平成7年度に実施した。その結果、12世紀後半から13世紀の遺構と遺物が検出されたことにより本調査を実施することとなった。本調査は、土地の買収が完了した箇所から行い、平成8年度にA区、平成10年度にB・



Fig.1 高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡群位置図

2. 遺跡の概要

C区の発掘調査を実施した。ここで報告するのは土佐市バイパスが西進する部分に当たり、高知自動車道にアクセスする部分については平成11年度に本調査を行い、『林口遺跡』、蓮池城跡北面遺跡(土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書)で報告する。

2. 遺跡の概要

本書で報告する天神遺跡及び林口遺跡は平成7年度から平成11年度にかけて実施した一連の発掘調査によってその性格が徐々に明らかになってきている。これらの調査は、土佐市バイパスが建設される道路幅34m及び50mについて行われたものであり、両遺跡とも遺跡の範囲が比較的広く、調査箇所が遺跡の全体像を明らかにできた調査区はないが、その性格や遺跡の立地する土佐市高岡町の古環境について多くの資料を得ることができ、仁淀川右岸に展開する土佐市の歴史の空白部分を少なからず埋めることができたものとする。ここでは、両遺跡についてその概要を記す。

(1) 天神遺跡

三島神社が鎮座する低位段丘の残丘(以下「残丘」という)の裾部に展開する遺跡で、平成7年度に実施した試掘調査でその存在が明らかになった。この残丘は現在2ヵ所で掘り切られているが、かつては一連のものであったことが裾部の等高線などで推測される。調査はこの残丘の北側(平成9・10年度調査)と西側(平成8～10年度調査)で行い、弥生時代、古代、中世、近世そして近代の遺構が検出された。また、遺構は確認できなかったものの縄文時代後期から晩期の土器片も出土しており、周辺に遺構が存在する可能性もあろう。これらの中で注目されるものとして、弥生時代の祭祀関連遺構(土器集中)、官衙との関連を想定する方形の掘方を有する掘立柱建物跡、古代、中世、近世と3時期の畝状遺構(畠の可能性が考えられる)及び瓦器を中心に12世紀後半から13世紀にかけての多量の搬入品の出土などを挙げることができる。なお、本書で報告するのは12世紀後半から13世紀にかけての瓦器を中心とした多量の搬入品が出土した調査区(天神遺跡第 調査地区)である。遺構自体は決して多くはないが、屋敷跡と低湿地の境で多量の遺物が出土し、搬入品のみに関わらず土師質土器の様相の方向性を示唆する資料をも得ることができたことは南四国における古代から中世にかけての素焼土器の様相解明に大きな手がかりとなるものと期待される。

遺跡全体の様相をみると、まず、弥生時代では遺構は確認されなかったものの前期前半の土器が出土したことは注目される。遺構、遺物の多くは残丘の裾部を中心に分布し、その中心となるのは後期後半の時期

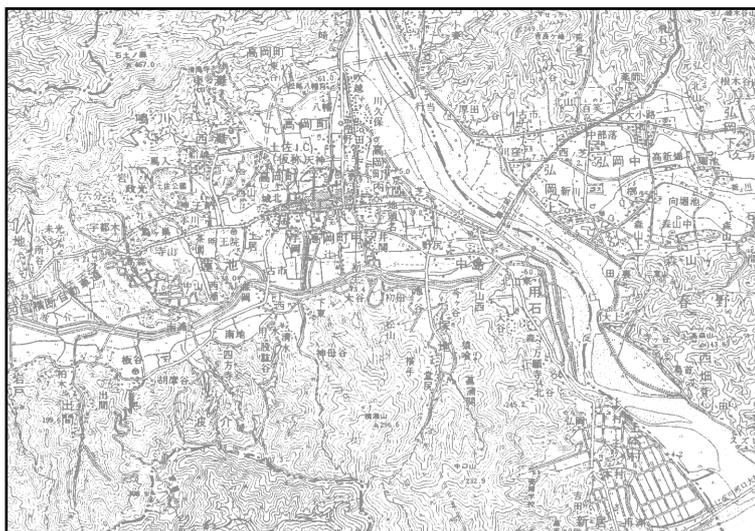


Fig.2 土佐市バイパス関連遺跡群位置図 (S=1/100,000)

で、竪穴住居跡1軒と住居跡とは断定できなかったが竪穴状遺構を確認した。特に、確認された竪穴住居跡は一般の住居とはやや様相を異にし、周囲で検出された祭祀関連遺構¹⁾との関連も考えられることから残丘の北側(天神遺跡第 調査地区)は、明確に集落を構成している部分とは言い難く、祭祀的要素の強い部分であったのではないかとみられる。当然、集落が構成されていたことが考えられ、立地に適した残丘の南側にその可能性があるのではなかろうか。古代では、残丘の西側の裾部を中心に掘立柱建物跡、溝跡、畝状遺構などが検出されている。前述のとおり一般の集落とは異なり、方形の掘方を有する掘立柱建物跡が確認されたことから周辺に官衙関連の施設の存在を想定させる。光永・岡ノ下遺跡から出土している9世紀代の洛北産とみられる緑釉陶器を始めとした官衙関連遺物との関連も注目されよう。また、畝状遺構が検出された残丘西側裾斜面部からは重複して中世、近世の畝状遺構(これらは『天神遺跡』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 で報告する)も検出されており畝状遺構の立地を考察するうえで貴重な資料となっている。特に、県内には類例に乏しく、畝の様相解明に役立つものと考えられる。中世はほぼ遺跡全域で遺構が確認され、本書で報告する調査地区(天神遺跡第 調査地区)では低湿地と隣接した屋敷跡の一角を検出している。屋敷跡と低湿地の境からは丁度投棄した状態で土器がまとまって出土している。これ以外にも屋敷跡を区画する溝跡や前述の畝状遺構など数多くの遺構を検出している。全般に排水用とみられる溝跡が多い。また、現在の土地区画と重複する溝跡(天神遺跡第 調査地区)も確認されており、

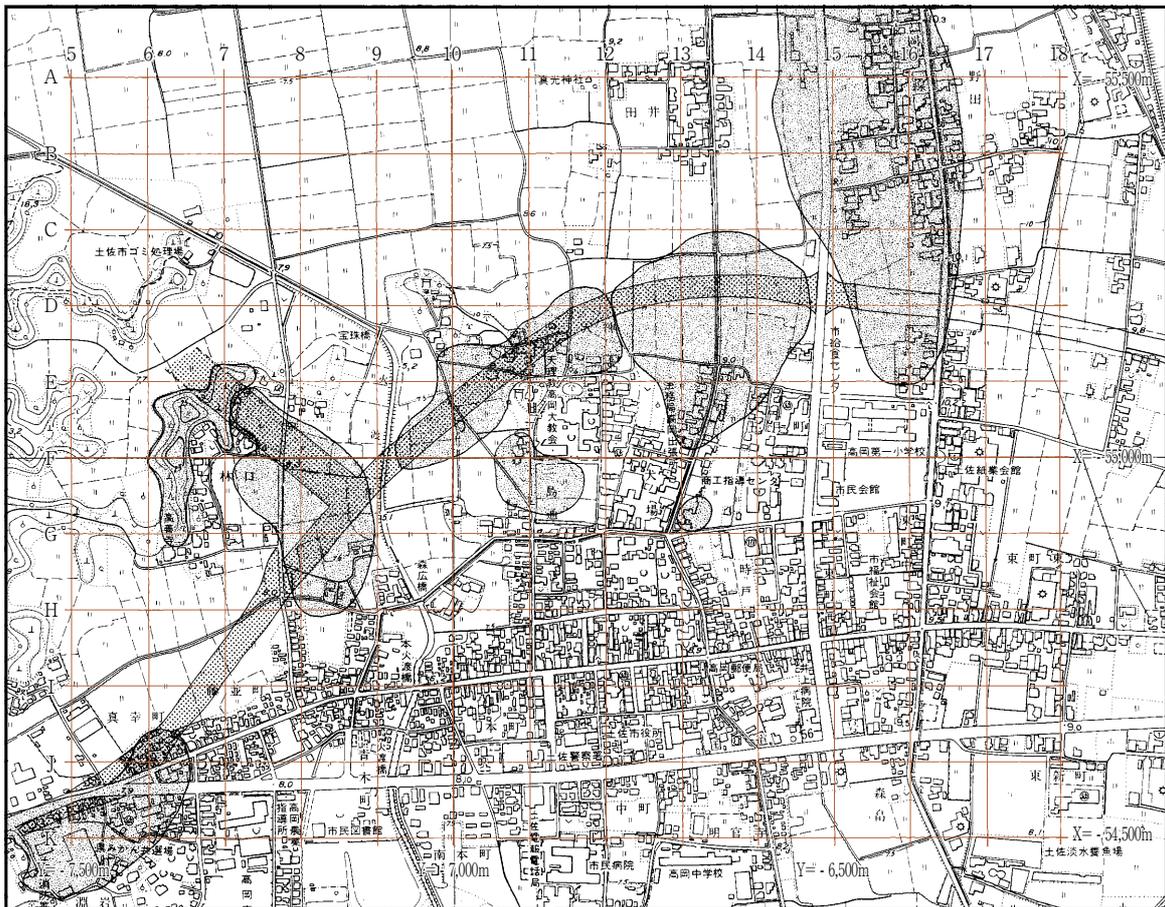


Fig.3 土佐市バイパス関連遺跡及びグリッド設定図 (S = 1/10,000)

2. 遺跡の概要

土地区画が今日まで踏襲されていたことが窺える。近世では、残丘の北側と西側の山麓部を中心に遺構が分布し、集落の一部と判断される。また、前述の畝状遺構も検出されている。近代では、残丘北側で検出された廃棄土坑や第二次世界大戦後から昭和30年代に埋設されたとみられる水田の排水施設である暗渠が各調査区で検出された。この暗渠はこの地区が水捌げが悪い土地であったことを物語っている。

このように天神遺跡からは弥生時代以降、主だった時期の遺構が確認されており、綿々とした人間の生活の痕跡を辿ることができる。

(2) 林口遺跡

土佐市バイパス関連で唯一周知されていた遺跡で、火渡川右岸に所在する。遺跡は火渡川と林口城跡の所在する残丘との間に位置し、縄文時代、弥生時代、古代、中世の遺構が残存する複合遺跡であり、平成7年度に行った試掘調査でその範囲が南に大きく拡大した。当時の地形は現状とは異なり比較的起伏しており、残丘から延びる微高地上に生活の痕跡を留め、低湿地が隣接する。本書で報告する調査区(林口遺跡第 調査地区)は前述のとおり遺跡の南側に当たり、『林口遺跡 蓮池城跡北面遺跡』(土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書)で報告する調査区(林口遺跡第 調査地区)は遺跡の北側である。なお、平成8年度には市道の改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期前半の土坑と中世の掘立柱建物跡などの遺構が確認されている⁽²⁾。今回の調査(平成8・10・11年度の調査)では縄文時代と古代から近代にかけての遺構が確認された。その大半は中世に属するも



Fig.4 周辺小字(ホノギ)図(S=1/10,000)

ので、多くは屋敷を構成する遺構の一部とみられる。これら遺構の中で注目されるのは、林口城跡の東山麓部で検出された土橋とそれに伴う遺構と遺物(林口遺跡第 調査地区)、屋敷を区画すると考えられる溝跡と土坑から出土した多量の土器と県内初出土の蝙蝠扇などの木製品(林口遺跡第 調査地区)、石組み井戸跡と木製円形桶側を6段重ねた井戸跡(林口遺跡第 調査地区)などである。一方、遺物では弥生時代前期前半の土器も出土しており、それに伴う集落の所在も注目されよう。なお、本書で報告するのは2基の井戸跡を含む屋敷跡及び縄文時代後期の遺構を検出した調査区(林口遺跡第 調査地区)である。

遺跡全体の様相をみてみると、まず、縄文時代では遺跡の南端部の微高地斜面部で土坑とピットなどを検出している。その状況から周辺に遺構が広がる可能性もあり、天神遺跡出土の縄文土器や縄文時代の木製鍬や土偶が出土した居徳遺跡群との関連も注目される。また、後期初頭に位置付けられる松ノ木式土器の出土は高知平野では初めてである。弥生時代では遺物の出土は認められるものの遺構は前述の市道改良工事に伴う調査で確認された土坑1基のみで、集落跡の確認には至っていないが、前述の天神遺跡で検出された後期後半と考えられる竪穴住居跡や祭祀関連遺構との関連も考慮される。古墳時代では、6世紀後半から7世紀初頭須恵器が数点出土しているが、それ以外に遺構等は確認されなかった。数は少ないが市内からは古墳³⁾も確認されており、丁度県内では各地域に主要な古墳が築造される時期でも、今後周辺の調査では当該期の遺構も発見されよう。古代では、遺物包含層から黒色土器を含む平安時代後期の土器類⁴⁾が比較的まとまって出土している。集落を構成する遺構はみられないものの県内では出土例の少ないもので、当該期の土器編年を行ううえで貴重な資料となっている。中世は本遺跡を特徴付ける時代であり林口遺跡第 調査地区とも屋敷の一角を確認している。本書で報告する調査区(林口遺跡第 調査地区)では屋敷を区画すると考えられる溝跡(規模からすると堀とみた方がよいのかもしれない。)、掘立柱建物跡、井戸跡(石組み井戸で井筒に桶側を使用)など比較的多くの遺構を検出しており、長宗我部地帳に記された土地利用の状況と関連が注目される。一方、林口遺跡第 調査地区からは県内初の蝙蝠扇の出土や土器の廃棄場所の検出など当時の生活様式を考察する資料も得ている。また、林口城跡山麓部で検出した土橋など一連の遺構は城が機能していた時期のものである可能性が強く、城の構成を考えるうえで重要であろう。近世以降では、本書で報告する地区(林口遺跡第 調査地区)から井戸跡を含む屋敷の一角を確認している。この井戸跡は木組円形桶側を6段積み重ねたもので、県内では初めてであり、井戸の変遷を考えるうえで注目されよう。近代では、各地区から天神遺跡でも検出された暗渠が数多く埋設されていた。

このように林口遺跡からは縄文時代後期、弥生時代、古代以降の遺構が確認されており、長期に亘る人間の生活の痕跡を辿ることができる。中でも中世初頭の12世紀後半から13世紀にかけて集落としての最盛期を迎え、第 調査地区では引き続き近世にかけて集落が営まれる。明治以降は水田等の耕作地となり今日に至ったものと考えられる。(廣田)

註

(1) 土器が集中して出土し、手づくね土器も含まれることから祭祀関連遺構として位置付けた。類例として、

2. 遺跡の概要

中村市具同中山遺跡群からもタタキ目を有する土器で構成された当該期の土器集中が検出されており、古墳時代中期の祭祀に先駆けて弥生時代後期後半にも祭祀が行われていたものとみられている。なお、同遺跡群は高知のみならず四国を代表する古墳時代中期、中でも5世紀後半から6世紀初頭にかけての祭祀遺跡で、初期須恵器を始めとして石製模造品や土製模造鏡など膨大な量の祭祀遺物が出土している。また、平成12年度の調査では、竪穴住居跡1軒と掘立柱建物(倉庫)跡2棟が確認されており、遺跡群の意味付けに一石を投じている。

- (2) 土佐市教育委員会『林口遺跡』土佐市々道改良工事に伴う発掘調査報告書 1998.1
- (3) 『光永・岡ノ下遺跡』(土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書)の中の「地理的歴史的環境」に記している。
- (4) 土師質土器を中心に復元できるものが300点以上出土している。

第 章 天神遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

天神遺跡は平成7年度に実施した土佐市バイパス工事に伴う事前の試掘調査によって所在が確認された遺跡である。調査対象地は現在宅地、畑地、段状の水田になっており、現地表面の標高は宅地跡の北東部で8.1m前後、畑地の東南部で7.5m前後、西南部で7.2m前後であった。東側から順次土層の掘削並びに遺構検出を行った結果、西半分は掘立柱建物跡等の遺構が検出され、集落跡を構成し、東半分は低湿地状を呈していたことが判明した。調査期間は平成8年7月4日から同年11月13日までの実働80日間で、調査面積は2,371m²（延べ面積2,584m²）であった。

(2) 調査日誌抄

1996年7月4日～11月13日

- | | |
|---|---|
| 7.4 調査前全景の写真撮影を行う。 | 7.25 東部北壁に沿って下層確認トレンチを設定する。 |
| 7.8 本日から発掘調査を開始する。調査区の周囲に安全柵を打ち、東部から重機により土層掘削を行う。 | 7.26 東部の遺物包含層の掘削と土層セクションの写真撮影および実測を行う。 |
| 7.9 調査区東部の宅地跡の土層掘削を行う。 | 7.29 中央部南側の遺物包含層の掘削を行い遺構4基を確認する。 |
| 7.10 引き続き土層の掘削を行う。 | 7.30 昨日に引き続き遺物包含層の掘削並びに遺構検出作業を行う。 |
| 7.11 引き続き土層の掘削を東側から順次行う。 | 7.31 東壁に沿って下層確認のためのトレンチを設定する。 |
| 7.12 東部北側を重機で遺物包含層直上まで掘削する。 | 8.1 中央部の遺物包含層の掘削並びに昨日設定したトレンチの土層セクションの写真撮影と実測を行う。 |
| 7.15 東部南側を重機で遺物包含層直上まで掘削する。 | 8.2 昨日に引き続き遺物包含層の人力掘削を行う。 |
| 7.16 土層確認のため西部北側にサブトレンチを設定する。 | 8.5 引き続き遺物包含層の掘削と遺構検出作業を行う。 |
| 7.17 西部北側を機械で遺物包含層直上まで掘削する。 | 8.6 引き続き遺物包含層の掘削と遺構検出作業を行うと共に出土遺物の写真撮影を行う。 |
| 7.18 西部南側を機械で遺物包含層直上まで掘削する。 | 8.7 引き続き遺物包含層の掘削と遺構検出作業を行う。南北に延びる溝状の土器溜まりを確認する。 |
| 7.19 雨天のため、作業中止。 | 8.8 引き続き遺物包含層の掘削と遺構検出作業を行う。 |
| 7.22 土層の掘削並びにベルトコンベヤーの設置を行う。 | |
| 7.23 本日より東部から遺物包含層の人力掘削を開始する。 | |
| 7.24 引き続き遺物包含層の人力掘削を中心に | |

1. 調査の経過

8.9 引き続き遺物包含層の掘削と遺構検出作業を行う。

8.12 引き続き遺物包含層の掘削と遺構検出作業を行うと共に出土遺物の写真撮影を行う。

8.13 雨天のため、作業は中止。

8.14 西部南側の遺物包含層の掘削と遺構検出を行う。

8.19 西部南側の遺物包含層の掘削と遺構検出を行う。

8.20 昨日に続き西に向かって遺物包含層を掘削する。調査区ヘグリッド杭を設置する。

8.21 昨日に引き続き遺物包含層を掘削する。西部南壁の写真撮影を行う。

8.22 昨日に続き遺物包含層を掘削する。

8.23 西部南側の遺物包含層の掘削および遺構検出を行う。

8.26 西部南側の遺物包含層の掘削および遺構検出を行う。溝跡を数条検出する。降雨のため、午後より現場作業を中止する。

8.27 昨日の雨のため現場作業は中止する。

8.28 西部南側の遺構検出を終了し、東部北側の遺物包含層の掘削を行う。降雨のため、午後より作業を中止する。

8.29 東部北側の遺物包含層の掘削並びに調査区中央から南西部の遺構配置図を作成する。

8.30 昨日に続き遺物包含層を掘削並びに西部南壁のセクションを実測する。降雨のため、午後より現場作業を中止する。

9.2 北東部の遺物包含層の掘削並びに西部の遺構配置図を作成する。

9.3 東部の遺物包含層の掘削並びに東壁のセクションを実測する。

9.4 昨日に続き遺物包含層の掘削並びに東壁の写真撮影を行う。

9.5 遺物包含層の掘削並びに北壁のセクションを実測する。

9.6 北西部の遺物包含層の掘削を行う。

9.9 東部の遺構検出を中心に行い、溝状遺構

等を確認する。

9.10 西部の遺構配置図を作成する。

9.11 北壁の写真撮影及び土層の実測を行うと共に中央部の遺構配置図を作成する。

9.12 遺構検出状態の写真撮影を行う。

9.13 雨天のため現場作業を中止する。

9.17 昨日の雨のため現場作業を中止する。

9.18 明日の空撮に備え、調査区の水汲みと掃除を行う。

9.19 遺構検出状態の空撮並びに櫓からの撮影を行う。

9.20 遺構の調査を開始する。

9.24 溝、ピット、土坑を中心に遺構の調査を行う。溝から瓦器椀が目立って出土する。

9.25 引き続き遺構の調査を行う。溝から動物の歯が出土する。

9.26 雨天のため現場作業を中止する。

9.27 中央部の遺構の調査を行う。

9.30 雨天のため現場作業を中止する。

10.1 昨日の雨のため現場作業を中止する。

10.2 中央部と西部の遺構の調査を行う。

10.3 西部の遺構の調査を行う。午後3時頃より降雨のため現場作業を中止する。

10.4 遺構の調査並びに遺構出土遺物の写真撮影と遺構の平面実測を行う。

10.7 引き続き遺構の調査を行う。礎板を据えた柱穴等を確認する。

10.8 雨天のため現場作業を中止する。

10.9 引き続き中央部と西部の遺構の調査を行



Fig.5 記者発表

う。

10.11 中央部の遺構の調査を行う。

10.14 雨天のため現場作業を中止する。

10.15 集落跡の縁辺部で検出した土器溜りの調査を行い多量の土器が出土する。

10.16 土器溜りを中心に調査を行う。土師質土器並びに瓦器が中心に出土する。

10.17 土器溜りを中心に調査を行う。中央部で建物跡と柵列跡を確認する。

10.18 引き続き土器溜まりの調査を行う。

10.20 土器溜まりと東部の遺構の調査を行う。遺構の大半は近代の暗渠であった。

10.21 中央部は土器溜りのバンクを残し完掘する。

10.22 残りの遺構の調査を行うと共に完掘状態の写真撮影に備え、調査区全体の清掃を行う。

10.23 昨日に引き続き、調査区の清掃を行う。

10.24 午前中記者発表を行い、午後から遺構完掘状態の写真撮影を産業ヘリコプターと櫓から撮影する。

10.25 現地説明会に備えて調査区周辺等を清掃する。

10.26 午前中、実機により航空測量を行い、午後現地説明会を開催する。約100人の参加があった。

10.28 遺構平面の補足測量を行う。

10.29 引き続き、遺構平面の補足測量を行う。

10.30 昨日に引き続き、遺構平面の補足測量を行う。

10.31 雨天のため現場作業を中止する。

11. 1 引き続き遺構平面の補足測量を行う。

11. 5 遺構平面の補足測量を行う。

11. 6 遺構平面の補足測量を行う。

11. 7 引き続き遺構平面の補足測量を行い、本日で終了する。

11. 8 北壁を中心に土壌のサンプリングを行う。

11.11 低湿地部分を中心にトレンチを設定して、堆積状態を確認する。

11.12 トレンチの写真撮影及びセクションの実測を行う。

11.13 残りの調査を行い発掘調査を終了する。



Fig.6 産業ヘリコプター撮影風景

2. 調査の概要

(1) 調査区の概要

調査区の旧地形が東西に起伏しており、北東部と西南部が微高地となり、東壁から約3mの地点から中央部にかけて低湿地になっている。また、南部から北部にかけて緩やかに傾斜しており、南部が北部より30cmほど高くなっている。遺構はその微高地上に存在し、特に南西部を中心に検出された。北側半分は宅地跡のため、客土が1.2~2.0mと厚く、地表下約1.4mで遺物包含層を確認したのに対して、南側中央部から西部にかけては客土はなく、地表下約30~50cmで中世と近世の遺物包含層が確認された。遺構も検出され、中世から近代までの複合遺跡であることが判明した。

2. 調査の概要

(2) 層序

- 第 層 表土層(黄褐灰色粘土質シルト層で鉄分とマンガン粒を含む。)
- 第 層 旧耕作土層(黄褐灰色粘土質シルト層で鉄分,マンガン粒を含む。)
- 第 層 淡灰黄色粘土質シルト層(鉄分,マンガン粒を多く含む。)
- 第 層 暗黄灰色粘土質シルト層(鉄分,マンガン粒を含む。)
- 第 層 灰褐色粘土質シルト層
- 第 層 褐灰色粘土質シルト層
- 第 層 灰黄褐色粘土質シルト層
- 第 層 褐色粘土質シルト層
- 第 層 黄褐色粘土質シルト層

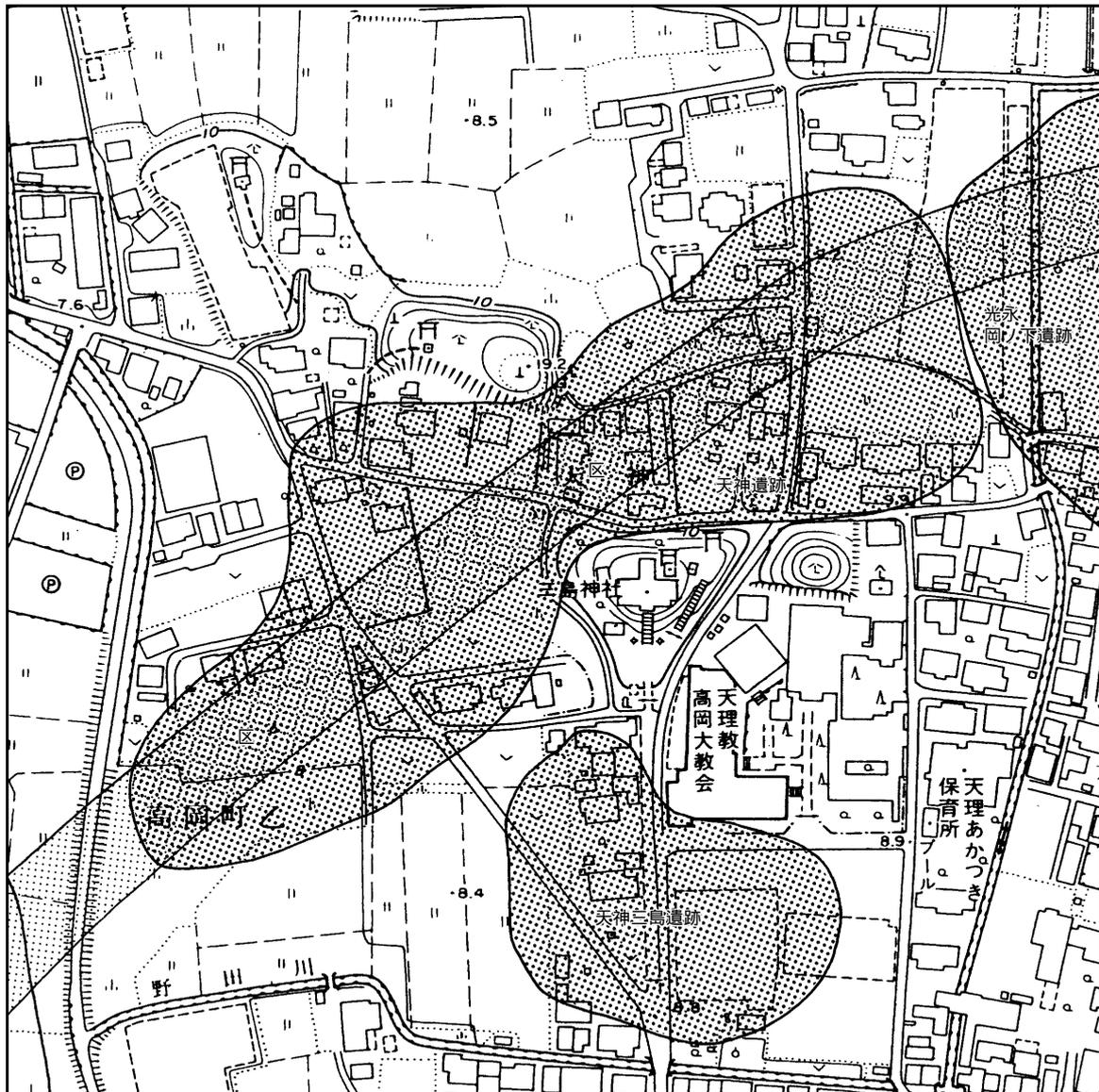


Fig.7 天神遺跡の範囲と調査対象区域図(S=1/2,500)

第 層 暗褐色粘土質シルト層

層位中、遺構が検出されたのは第 層から第 層と第 層上面であった。しかし、第 層から第 層までの遺物包含層はほぼ同系色を呈しており、遺構埋土が褐色を基調としているため、平面上は検出することが難しく、第 層上面まで掘り下げて検出した部分もあった。

第 層の表土層は、現在の耕作土である。北東側は宅地跡のため、客土が1.2~2.0mほどあり、東南側は客土40cmの上面が畑地となっていたため、耕作土は6~40cm畝状に堆積していた。北中央部も客土0.5~0.8mの上に耕作土が5~40cm畝状に堆積していたのに対して、南部は客土なしで10~20cmの堆積となっていた。北西部は水田で南部より約1.0m下がっていた。

第 層は旧耕作土層で下層部に床土の堆積が認められた。中央部より西側で1~10cm堆積している。

第 層は近代の整地層で、東部の客土がなくなった所から西側の微高地付近まで確認された。第 層との間には鉄分とマンガン粒を多く含み、若干土器を含む。遺構としては湿田を乾田化する

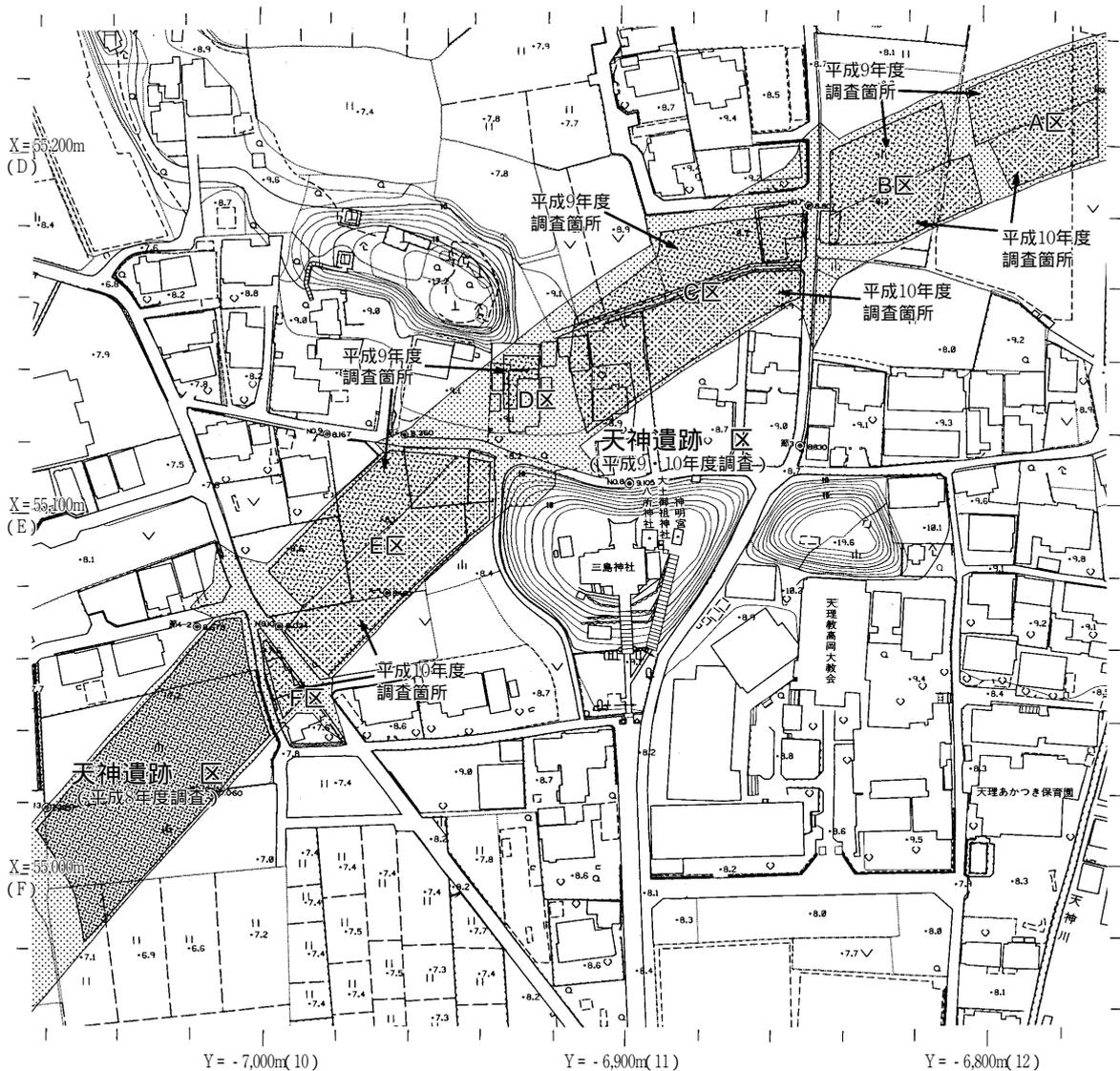


Fig.8 天神遺跡の調査区設定図(S=1/2,000)(公共座標値の後のカッコはグリッド番号を示す。)

2. 調査の概要

ことを目的とした暗渠が検出されており、土師質土器から近代・近世陶磁器類が出土している。

第層は近世の遺物包含層である。東部と西部に5～25cmの堆積がみられ、中央部は近代の整地によって削平されている。遺物は須恵器から近世陶磁器類までが出土している。

第層は出土遺物から中世の遺物包含層と考えられる。東部から中央部にかけての低湿地の上部に2～18cm堆積しており、12～15世紀の遺物が認められた。

第層は中央部から西側の微高地上に確認されており、厚さ8～20cmを測る。出土遺物から12～14世紀の遺物包含層と考えられる。

第層は今回の調査の中心となる遺物包含層である。調査区全体に比較的多くの遺物を包含しており、弥生土器から14世紀までの遺物が出土した。低湿地以外の下層に中世以前の遺物包含層が確認されないことを考えれば、古代以前の遺物包含層を削平しているものと考えられる。

第層は東部から中央部にかけての低湿地堆積層である。調査区中央部からの落ち込みに多量の遺物が認められ、弥生土器から14世紀段階のものまで出土している。

第層が基盤の層であり、調査区東端と西側を中心に検出され、中世遺構の検出面となっている。

(3) 堆積層出土遺物

第層出土遺物

第層は調査区中央部の耕作土直下にあり、中世の瓦器、土師質土器、瓦質土器及び近世から近代陶磁器類まで出土している。

土師質土器 (Fig.10 - 1・2)

1・2は小皿で、底部から口縁部にかけて残存する。1は口径7.8cm、器高1.6cm、底径5.2cmを測る。口縁部から体部にかけては回転ナデ調整を施す。底部は摩耗しており、残りも少ないため詳細は不明

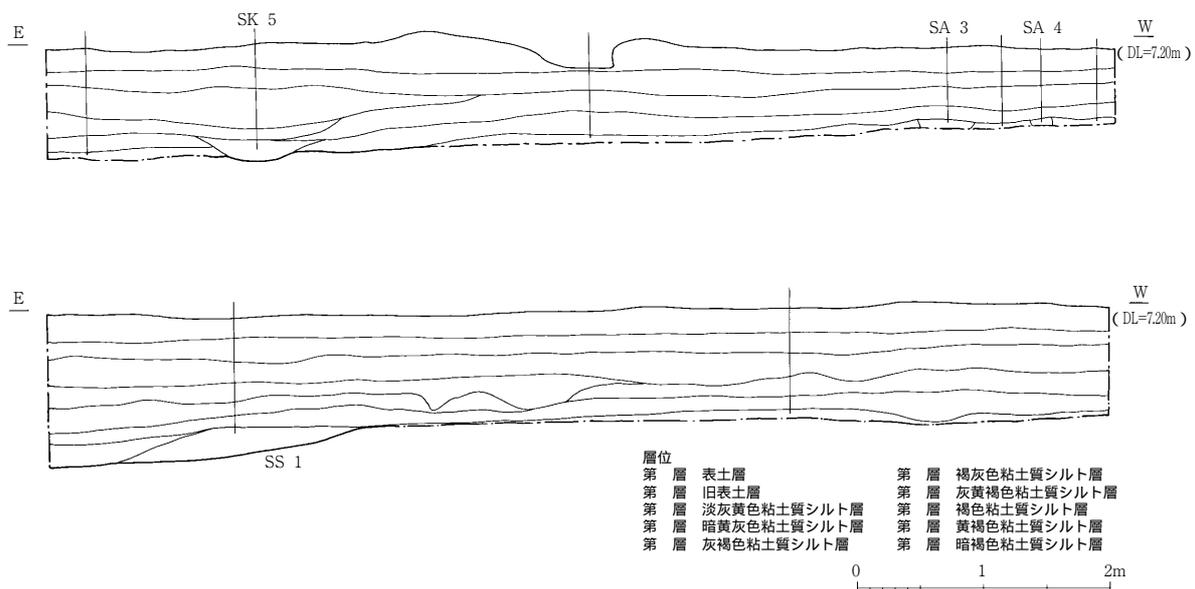


Fig.9 南壁セクション図(SK - 5, SS - 1付近)

である。2は口径8.4cm，器高1.7cm，底径4.2cmを測り，底部外面には回転糸切りが僅かに確認できる。

瀬戸・美濃系陶磁器 (Fig.10 - 3・4)

3・4は磁器の皿である。3は約6分の1ほど残存しており，口径11.2cm，器高2.1cm，底径5.7cmを測る。見込には鶴の文様の赤絵がかすかに見られ，全体に透明釉がかかる。しかし，畳付には砂が僅かに付着する。4は底部の破片で，底径6.0cmを測る。全体に透明釉がかかるが畳付は釉剥ぎである。見込には草花文様がみられ，桃色を呈する。胎土が精緻で透明感があるため，瀬戸・美濃産と考えられる。

堺・明石産焼締陶器 (Fig.10 - 5)

5は播鉢の口縁部の破片で，摺り目が7条確認されている。口縁部は大きく上下に拡張し，ヨコナデ調整であり，2本の沈線が巡る。堺・明石産のものとみられる。

近世陶器 (Fig.10 - 6・7)

6・7は鉢の底部の破片である。6は底径9.6cmを測り，削り出し高台で露胎である。胎土には長石粒が入っており，やや密ではあるが円裂孔がみられる。焼成は不良で，内面の釉は溶けていない。産地は不明である。7は4分の1ほどの底部が残存し，底径15.3cmを測る。円盤状高台脇はヨコナデ調整を施しており，露胎であるが，その上の体部は鉄釉がかかる。内面は灰釉を施釉しており，貫入もみられる。見込には直径1cmほどの円形の目跡がみられ，重ね焼きの痕跡が顕著に表れている。

古銭 (Fig.10 - 8)

8は両面とも錆化が著しいが，形は元の円形を保っている。銭径27.3～27.8mm，銭厚1.3～1.4mm，重さは6gを測る。銭貨の判定は難しいが，明治時代の一銭が銭径27.8～27.9mm，銭厚1.8mm，重さ7gであることから当時の一銭とみられる。

第 層出土遺物

中央部を除く東部と西部に堆積しており，古代の土師器から近世陶磁器まで出土しているが，細片が多く図示できたものは3点であった。

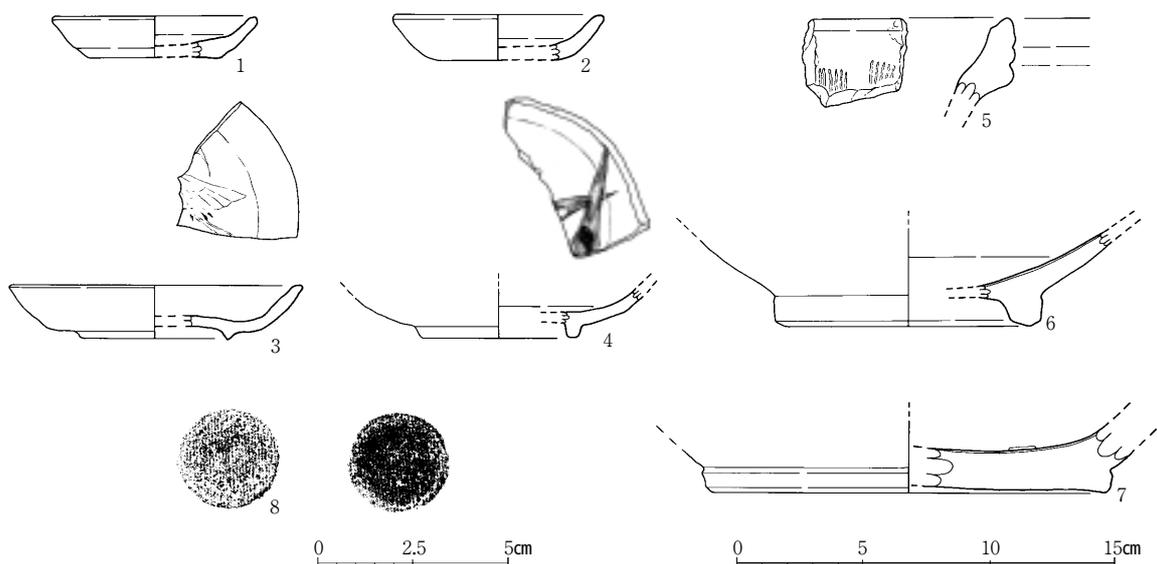


Fig.10 第 層出土遺物実測図

2. 調査の概要

堺・明石産焼締陶器 (Fig.11 - 9)

9は播鉢の口縁部の破片で、摺り目が7条確認できた。口縁部は大きく上下に拡張し、端部外面は2本の沈線が明瞭に確認でき、内面は僅かに摺り目がみられる。口縁部全体は回転ナデ調整を施している。18世紀後半から19世紀の堺・明石産とみられる。

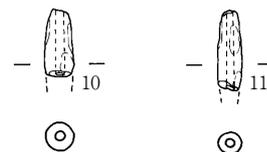


Fig.11 第 層出土遺物実測図

土製品 (Fig.11 - 10・11)

10・11は管状土錘の破片である。10は長さ2.7cm、全厚1.1cm、全幅1.1cm、孔径0.4cm、重量2.7gを測る。11は長さ3.1cm、全幅0.9cm、全厚0.85cm、孔径0.3cm、重量2.0gを測る。2点とも紡錘形で、全体が摩耗している。

第 層出土遺物

中世の遺物包含層で、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世須恵器、土師質土器、陶器、瓦質土器、貿易陶磁器、石製品、金属製品等が出土している。

土師器 (Fig.12 - 12~14)

12・13は甕の口縁部の破片である。12は長胴甕の口縁部と考えられ、外上方に開く口縁部は端部を強くヨコナデ調整し、やや丸みを帯びた断面三角形状になっている。口縁部の内面は僅かにハケ調整の跡がみられる。13は口縁部がくの字状に屈曲しており、胎土中に雲母が多く入っている。14は高杯脚部の破片である。杯部の近くは回転ナデ調整で、その下部は指頭圧痕が残る。

須恵器 (Fig.12 - 15)

15は高杯の脚部の破片で、裾端部の一部が残存する。焼成は不良で、色調は灰白色を呈する。

黒色土器 (Fig.12 - 16)

16は椀の底部であり、約4分の1が残存する。底部からやや内湾気味に立ち上がる。全体的に摩耗しているが、外面下部は回転ナデ調整が顕著にみられる。内面には部分的に炭素吸着の痕が残り、銀色に発色している。底部はヘラ切り後ナデ調整し、断面方形の高台を貼付する。

瓦器 (Fig.12 - 17~25)

17~25は椀である。17は底部の破片であり、底径4.9cmを測る。焼成はやや良好であり、内外面ともに灰色で内面は一部銀色に発色している。体部外面は指押えが見られ、内面にはヘラ磨きによる粗い平行線状の暗文が施される。底部には八の字状に開く断面方形の高台が貼付される。18・19は口縁部の破片である。2点とも口縁部は強いヨコナデ調整が施され、体部外面は指押えが認められる。内面には平行線状の丁寧なヘラ磨きが密に施される。18は口縁部の破片であるが比較的大きな椀とみられる。19も口径16.0cmと大きい器高は低く、扁平な椀である。焼成がやや不良で、体部外面は炭素の吸着が不十分で浅黄色を呈する。20は約半分が残存し、口径14.9cm、器高4.0cm、底径4.9cmを測る。口縁部は強いヨコナデ調整を施し、体部はやや腰が張るタイプで、外面には指押えが顕著である。内面には圏線状、内底面には平行線状のヘラ磨きを施し、底部外面には断面三角形の扁平な高台が付く。21は底部の破片で、約4分の1が残存する。底径4.4cmを測り、体部外面は指押えが明瞭に残る。外面は炭素の吸着が不十分であるが、内面は黒く銀色に発色する。内底面には平

行線状のヘラ磨きを施し、底部外面には扁平高台が付く。22は口縁部の破片で、口径14.4cmを測る。口縁部は強いヨコナデ調整で、端部を丸く仕上げる。部分的に焼成不良で炭素も吸着不十分である。体部外面は指押えと削りによる砂粒の動きがみられる。内面は細かい平行線状のヘラ磨きが施される。23は口縁部の破片であり、約6分の1が残存する。内外面ともに灰色で、断面は淡黄色で焼成は不良である。口径14.4cmを測り、口縁部は強いヨコナデ調整である。体部外面は指押えが顕著に表れており、内面は摩耗しているが僅かにヘラ磨きがみられる。24は口径13.0cm、器高3.8cm、底径2.2cmを測るやや小型の椀で、約4分の1が残存する。焼成はやや不良で炭素吸着不十分のため灰白色を呈する。口縁部に強いヨコナデ調整を施し、体部外面は指押えが明確に残る。内面には圈線状のヘラ磨きを施し、底部外面には断面三角形の扁平高台が付く。25は口縁部の破片で、口径11.2cmを測る。口縁部に強いヨコナデ調整を施し、体部外面は指押えが明瞭に残る。内面には平行線状のヘラ磨きを施し、内底面にも僅かに暗文が残る。

須恵器 (Fig.12 - 26)

26は壺の底部の破片で、底径9.6cmを測る。下胴部外面は回転ヘラ削りで、内面はヨコと斜めのナデ調整を施す。胎土はやや密で、石英などの砂粒が多い。灰白色で焼成はやや良好である。

東播系須恵器 (Fig.12 - 27 ~ 29)

27は椀の口縁部の破片である。口径15.2cmを測り、内外面共に回転ナデ調整である。28は椀の底部の破片で、底径5.6cmを測り、底部外面は回転系切りである。焼成はやや不良である。29は片口鉢の口縁部の破片である。口縁部はヨコナデ調整を施し、両端を上下に拡張する。焼成はやや良好で、重ね焼きの跡が黒く残る。

土師質土器 (Fig.12 - 30 ~ 41)

30~32は杯である。30は外上方に延びる体部から外反気味に上がり、端部を丸く仕上げる。口径13.4cm、器高3.9cm、底径7.2cmを測り、内外面ともに煤が付着する。31はほぼ完形の杯である。口径11.9cm、器高3.9cm、底径6.8cmを測る。胎土には黒色礫、赤色礫、石英粒などを含み、焼成は良好である。口縁部は底部から外上方に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。器面は摩耗するが、体部は回転ナデ調整で、底部は回転系切りとみられる。内底面には粘土紐巻き上げ痕がみられる。32は口縁部から底部にかけての約5分の1が残存し、口径12.0cm、器高3.7cm、底径5.6cmを測る。焼成はやや不良で断面はにぶい橙色を呈する。口縁部は底部から外上方へ立ち上がり、端部を丸く仕上げる。33~40は小皿である。33は口縁部から底部にかけての約6分の1が残存する。口径9.6cm、器高2.0cm、底径5.1cmを測る。口縁部は底部から丸みを持って外上方へ立ち上がる。34は口縁部から底部までの約4分の1が残存し、口径9.6cm、器高1.4cm、底径6.8cmを測る。底部外面は回転ヘラ切りである。35は口径8.2cm、器高1.7cm、底径5.0cmを測り、約5分の1が残存する。底部が平らで、やや内湾気味に立ち上がりながら外反する。内面は回転ナデ調整であるが、底部は摩耗しており不明である。36は口径8.6cm、器高1.2cm、底径6.6cmを測る扁平な器形である。口縁部は回転ナデ調整であるが、底部は摩耗のため不明である。37は36より少し小さく、口径7.8cm、器高1.6cm、底径4.8cmを測る。口縁部は外上方へ立ち上がり、端部を丸く仕上げている。全体の5分の1が残存しているが、摩耗しているため、調整は不明である。38も口縁部から底部まで5分の1が残存し、口径8.0cm、器高1.4cm、底径

2. 調査の概要

5.2cmを測る。口縁部は外反気味に外上方へ立ち上がり、端部を丸く仕上げている。口縁部はヨコナデ調整で、器壁は薄い。底部は摩耗のため、調整不明である。39も体部が外反気味に立ち上がり、口径8.0cm、器高1.5cm、底径6.0cmを測る。口縁部は回転ナデ調整で、端部はやや丸みを帯びる。底部は平らであるが、摩耗のため調整不明である。40も体部から口縁部が外反し、口径7.2cm、器高1.3cm、底径4.9cmを測る。口縁部は回転ナデ調整で、端部を摘み出してやや丸く仕上げる。底部は回転ヘラ切りである。41は羽釜の口縁部の破片である。口径21.5cmで、やや内傾する口縁外面には幅0.9cmの小さな鍔が付き、その下半には煤が付着する。口縁部は回転ナデ調整を施し、内面には粘土の

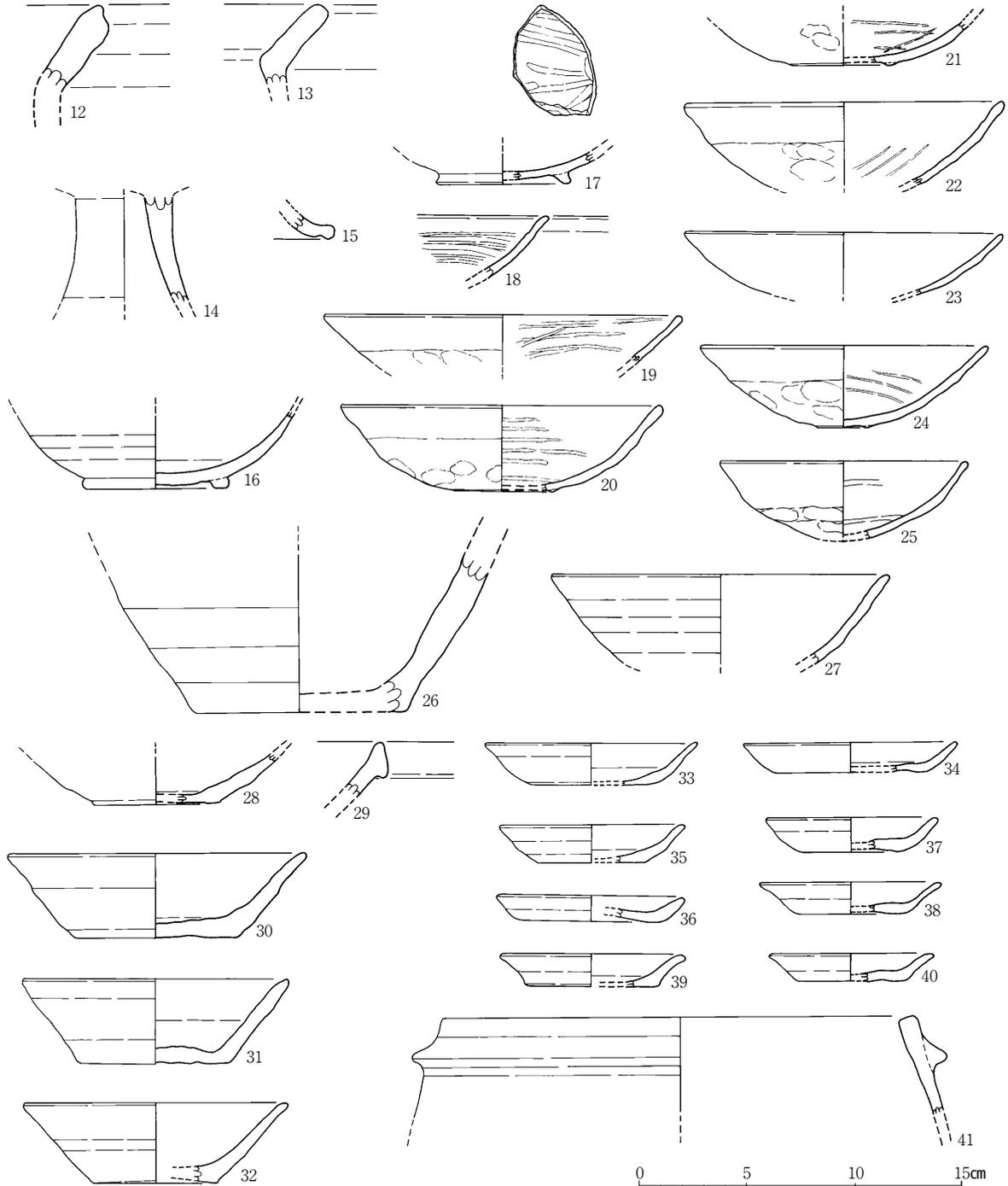


Fig.12 第 層出土遺物実測図1

重ね痕跡がみられる。

常滑焼 (Fig.13 - 42 ~ 44)

42・43は甕の口縁部の破片で、口縁の端部を折り返して縁帯状をなす。2点とも同タイプで口縁部はヨコナデ調整し、外面には自然釉がかかる。42の断面には接点の痕跡が明瞭に残る。43は口径24.0cmで、41よりやや小型である。44は甕の底部の破片で、底径30.6cmを測る。胎土は粗雑で円裂孔が多く、焼成は不良である。胴部下端はヨコハケ調整の後、強いナデ調整を加え、その上はタテハケ調整を施す。内面はヨコハケ調整で、底部はやや上げ底気味となる。

瓦質土器 (Fig.13 - 45 ~ 51)

45は甕の口縁部の破片で、口径19.6cmを測り、口縁部は肩部から大きく外反する。胎土はやや粗雑で、石英粒等の砂粒を多く含む。焼成は不良であるが、外面の炭素の吸着は良い。46は甕の底部の破片である。底部全体の4分の3が残存する。平らな底部から外上方に立ち上がる。体部外面の一部は指頭圧痕が残り、内面は僅かにナデ調整が見られる。底径は11.0cmで、底部の外面はヘラ切りとみられる。47は鍋の口縁部の破片で、口径30.0cmを測る。口縁上半部の屈曲が顕著になり、受け口状を呈するものである。胎土には石英や雲母を多く含み、焼成はやや不良で、外面は褐灰色を呈する。外面は摩耗のため調整不良であるが、内面は回転ナデ調整を施す。48は口縁部の破片で、幅1cmの鐳が付く。口縁部は内湾気味で、外面はやや膨らんでいる。端部は外傾する平面をなす。鐳には煮溢れ痕とみられる煤が付着する。焼成はやや不良で内面は摩耗しているが、部分的にハケ目が残る。49は口縁部が3分の1残存し、口径28.0cmを測り、幅1.4cmの鐳が付く。鐳の周辺はハケ調整後回転ナデ調整を施す。口縁部にヨコ方向のハケ調整、胴部内面にはヨコナデ調整がみられる。50は幅1.4cmの鐳が付くもので、口縁部は欠損する。焼成はやや不良で灰白色から暗灰色を呈する。鐳付近はヨコナデ調整で、体部外面は指押えが明瞭に残る。内面には僅かにハケ調整の痕跡がみられる。51は三足羽釜の脚部である。羽釜の付根部分から約5cmが残存する。脚径は2.0cmで、断面は円形である。焼成はやや良好で、長石などの砂粒を多く含む。外面は指押えが見られる。

白磁 (Fig.13 - 52・53)

52は碗の口縁部である。口径15.8cmで、灰白色を呈する。胎土は精緻だが、円・裂孔があり、黒色砂粒を多く含む。口縁部全体に0.2~0.3mmの長石釉を施釉する。53は皿の口縁部で、口径10.2cmを測る。体部上位で内湾し、その屈曲部の内面に沈線状の段を持つ。色調は灰白色を呈し、胎土には、黒色砂粒を多く含む。

青磁 (Fig.13 - 54 ~ 60)

54~60は碗で、すべて龍泉窯系である。54は口縁部の破片で、口径14.8cmを測る。色調は灰オリーブ色を呈し、全体に0.2mmの緑釉を施釉する。断面は灰白色で、焼成はやや不良である。胎土はやや粗く、裂孔が多く残る。内面には飛雲文が描かれる。55も口縁部の破片で54と同様のタイプと考えられる。全体の4分の1が残存し、口径13.8cmを測る。焼成はやや不良である。全体に0.2~0.4mmの釉を施釉し、内面には飛雲文とみられる文様が施される。56は底部の破片で削り出し高台となり、底径は6.4cmを測る。外底面以外には厚さ0.5~1.4mmの淡緑釉を施釉する。焼成は良好であるが、胎土は粗く円・裂孔が残り気泡も多い。見込はスタンプ文で、「金玉満堂」の「満堂」一部が欠けてい

2. 調査の概要

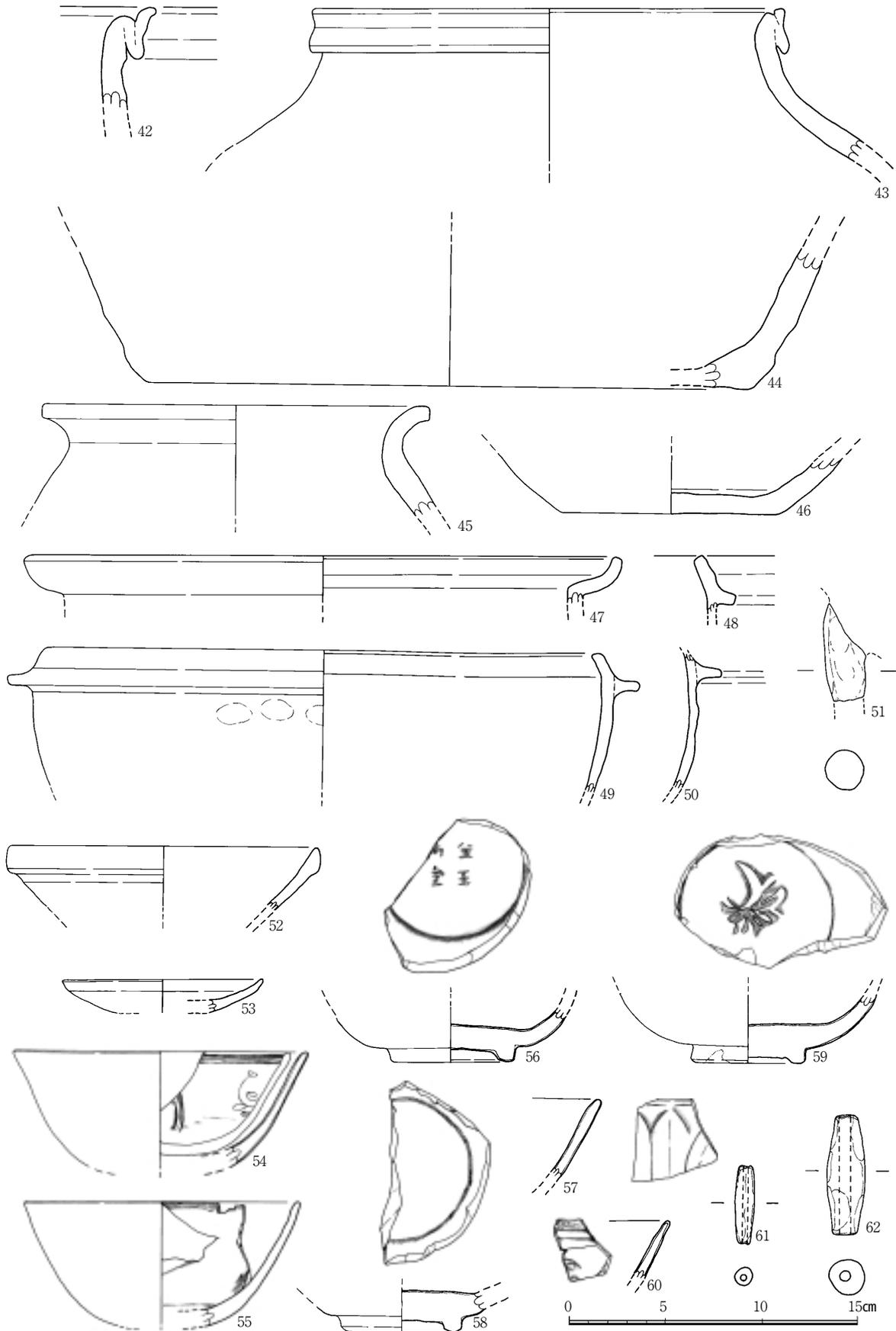


Fig.13 第 層出土遺物実測図2

る。57は口縁部の細片である。外面には鎬蓮弁文が施される。色調は灰オリーブ色を呈する。胎土には円・裂孔が残り、器面には厚さ0.3~0.5mmの釉を施釉しており、わずかに貫入が入る。58は底部の破片で削り出し高台となる。底径は5.5cmを測り、胎土はやや粗く円・裂孔が残る。焼成はやや良好で、内外面共にオリーブ黄色を呈する。器面には厚さ0.2~0.4mmの釉を施釉しており、高台内にも僅かに釉がかかる。気泡が多く、大きな貫入もみられる。畳付には重ね焼きの際の砂が付着している。見込の文様は不明である。59も底部の破片で、見込には印花文があり、その周りには沈線状の窪みがある。焼成はやや不良で、胎土は粗く円・裂孔も多い。器面には厚さ0.2~0.5mmの釉を施釉しており貫入も見られ、高台内面と畳付は露胎となる。60は口縁部の破片である。焼成は良好で、灰オリーブ色を呈する。胎土には円・裂孔がみられる。器面には厚さ0.3~0.5mmの釉を施釉しており、僅かに貫入がはいる。外面には鎬蓮弁文が施される。

土製品 (Fig.13 - 61・62)

61・62は管状土錘で2点とも紡錘形である。61は長さ4.1cm、全厚1.0cm、全幅1.0cm、孔径0.3cm、重量2.7gを測る。表面は摩耗するが、ナデ調整がみられる。62は長さ6.3cm、全幅2.0cm、全厚1.9cm、孔径0.6cm、重量2.0gを測る。

第 層出土遺物

瓦器 (Fig.14 - 63~66)

63~65は椀である。口縁部を強くヨコナデ調整し、体部外面には指押えが明瞭に残る。63は口径13.4cmで、内面は圈線状、内底面は平行線状のヘラ磨きを施す。焼成は不良で断面はにぶい黄橙色を呈するが、炭素はほぼ吸着している。64も同タイプで、口径13.3cmを測る。焼成はやや不良で炭素の吸着が不十分である。65は口径12.5cm、器高3.1cm、底径3.0cmで、約3分の1が残存する。焼成は良く、体部外面には黒い重ね焼きの痕跡がみられる反面、底部近くは炭素の吸着が不十分である。また、底部外面には断面三角形の扁平な高台が付く。66は皿である。口径7.6cm、器高1.5cmを測る。口縁部はヨコナデ調整で、端部を丸く仕上げている。

東播系須恵器 (Fig.14 - 67)

67は片口鉢の口縁部である。口縁部は体部から直線的に立ち上がる。端部は少し摘み上げるように三角形を成し、口縁部全体に回転ナデ調整を施す。焼成は不良で、外面は橙色、内面は黄橙色を呈する。

土師質土器 (Fig.14 - 68~75)

68~70は杯である。68は口径14.5cm、底径6.5cm、器高4.8cmを測る。口縁部はやや外反気味で、端部を丸く仕上げている。底部は摩耗しているが回転ヘラ切りとみられる。69は口径12.2cm、器高3.7cm、底径7.0cmを測り、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。体部は摩耗しているが部分的に回転ナデ調整が見られる。底部は回転系切りである。70は全体の4分の1が残存し、口径12.2cm、器高4.0cm、底径6.7cmを測る。底部から体部は少し内湾気味に立ち上がり、体部から口縁部にかけては直線的に立ち上がる。底部は円盤状高台で、切り離しは回転系切りである。71~75は小皿である。71・72は同タイプで、底部から体部にかけてやや内湾気味に立ち上がり、外反しながら口縁部に至る。端部を丸く仕上げる。71は約3分の1が残存し、口径7.6cm、器高

2. 調査の概要

1.7cm, 底径4.6cmを測る。内底面には粘土紐巻き上げ痕が残る。72はほぼ完形で、口径7.3cm, 器高1.7cm, 底径4.8cmを測る。口縁部は部分的に外反が強くなっている。底部外面は2点とも回転糸切りである。73は口径7.0cm, 器高1.3cm, 底径5.4cmを測り, 平底で, 口縁部は外上方に真直ぐ延びる。焼成は良好で, 胎土はやや粗く, 赤色礫を含む。口縁部と体部は回転ナデ調整を施す。74は口径6.8cm, 器高1.3cm, 底径4.8cmを測る。平らな底部から外反気味に立ち上がり, 端部を摘んで細く仕上げる。底部外面は回転糸切りが認められる。75は口径6.8cm, 器高1.8cm, 底径4.8cmを測る。口縁部は短く外上方に延び端部を丸く仕上げる。器面は摩耗しており調整は不明である。

瓦質土器 (Fig.14 - 76・77)

76は甕の口縁部で口径25.2cmを測る。断面は焼成不良のためにぶい黄褐色を呈するが, 内・外面共に炭素は充分吸着している。胎土は粗く, 大きな砂粒を多く含む。口縁の端部を上下に大きく拡

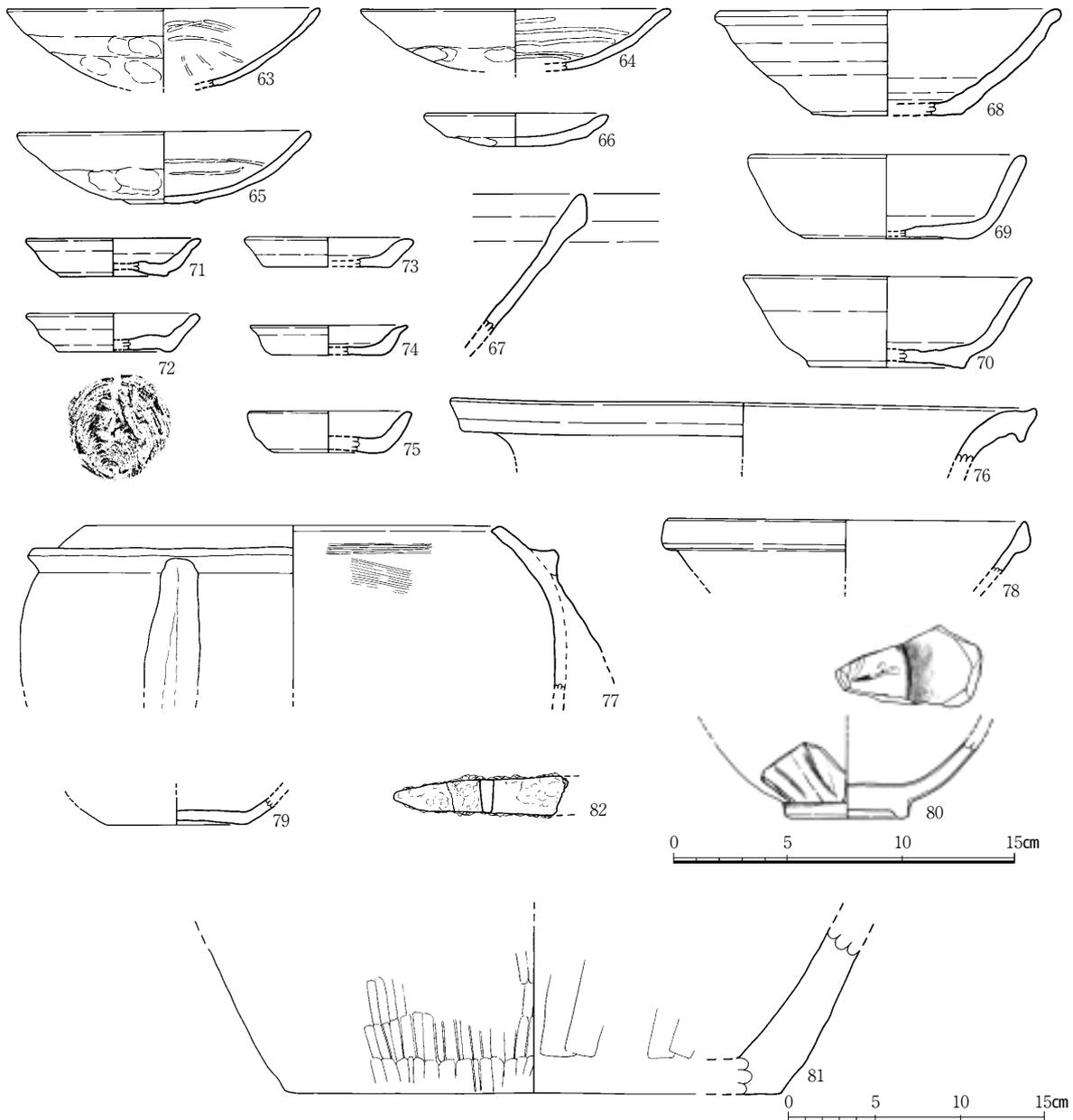


Fig.14 第 層出土遺物実測図

張する。口縁部はヨコナデ調整である。77は三足の羽釜である。口径は18.0cmで、内湾する口縁部に幅0.9cmの鏝が付く。胴部には三足の脚部が付く、3分の1以上残存する。胎土には0.5～2.0mmの砂粒を含み、焼成はやや良好で、断面は灰黄色を呈する。外面はヨコナデ調整を施し、内面の上部はヨコ方向のハケ調整がみられる。

白磁 (Fig.14 - 78・79)

78は口縁部の破片で、口径15.6cmを測る。口縁部は内湾気味に上がり、玉縁状をなす。焼成は良好で、灰白色を呈する。胎土はやや密であるが、円孔がみられ、器面には貫入がはいる。79は皿の底部で、底径5.8cmを測る。底部外面以外に明オリープ灰色の釉を施し、焼成は良好である。胎土はやや粗く、円・裂孔がみられる。底部外面は回転ヘラ切りである。

青磁 (Fig.14 - 80)

80は龍泉窯系の碗の底部で、底径4.6cmを測る。内外面ともに明緑灰色で、断面は灰白色で、胎土中には円裂孔がみられ、厚さ0.2～3.0mmの青磁釉を施釉する。外面は鎬連弁文、見込は花文のスタンブ文を施す。底部は削り出し高台で、露胎である。

石製品 (Fig.14 - 81)

81は滑石製の石鍋の底部で、底径21.4cmを測る。外面は4段にノミ痕が残り、煤の付着も見られる。内面は研磨している。

金属製品 (Fig.14 - 82)

82は鉄製の刀子で、残存長7.6cmを測る。刃部約半分が残存する。平造りで、扁平な形姿をなし、棟は平棟である。錆化が進んでおり、刃部は磨滅する。

第 層出土遺物

須恵器 (Fig.15 - 83)

83は杯身の底部で、底径7.0cmを測る。底部外端部にはほぼ真下を向く高台が付く。器面は回転ナデ調整で、底部外面は回転ヘラ切りとなる。体部外面には自然釉の付着がみられる。

瓦器 (Fig.15 - 84・85)

2点とも椀である。口縁部外面にはヨコナデ調整を施し、体部外面は指押えが明瞭に残る。84は口径14.7cm、器高4.9cm、底径4.2cmを測り、底部が比較的深い。胎土は粗く、長石などの粗粒砂を含む。焼成は不良で、断面はにぶい黄橙色を呈する。内面には圈線状のヘラ磨きが施され、内底面には斜格子の暗文がみられる。底部外面には断面三角形の扁平な高台が付く。85は口径12.6～13.0cmとやや歪みのある椀で、器高4.9cm、底径4.2cmを測る。胎土は粗く、長石などの粗粒砂を多く含む。焼成はやや不良で、断面は灰黄色を呈する。内面には圈線状・平行線状のヘラ磨きが施される。底部外面には断面半円状に潰れた扁平な高台が付く。

須恵質土器 (Fig.15 - 86)

86は甕の口縁部の破片であり、口径26.0cmを測る。外反する口縁部は端部を丸く仕上げる。焼成は良好であり、胎土は精良である。

東播系須恵器 (Fig.15 - 87～89)

87～89は片口鉢の口縁部である。口縁部はヨコナデ調整で、重ね焼き痕が見られる。87は口縁部

2. 調査の概要

の破片で、端部を若干拡張する。88は口径23.8cmを測り、口縁端部を大きく拡張する。89も口縁部の破片であり、口径19.6cmを測る。88よりも小さいタイプで、口縁端部を上下に少し拡張する。焼成は良好で、灰白色を呈する。口縁部には注ぎ口が残る。3点とも胎土には長石の砂粒を多く含む。

土師質土器 (Fig.15 - 90~94)

90・91は杯である。90は口径13.5cm、器高3.9cm、底径7.8cmを測る。体部は内湾気味に上がり、口縁部は外上方へ上がる。底部は円盤状高台をなし、切り離しは回転系切りで、板状圧痕が残る。91は全体の4分の1が残存し、口径11.2cm、器高3.9cm、底径6.8cmを測る。内面には粘土紐巻上げ痕がみられる。92・93は小皿である。2点とも焼成は良好だが、器面は摩耗しており調整は不明である。92は口径8.9cm、器高1.5cm、底径5.4cmを測る。底部外面は回転ヘラ切りとみられる。93は全体の3分の1が残存し、口径6.4cm、器高1.0cm、底径4.8cmを測る。底部の切り離しは回転系切りとみられる。94は羽釜の口縁部で、短い口縁部には幅1.4cmの鐳が付く。鐳周辺はヨコナデ調整が施される。胎土はやや粗く、焼成はやや不良である。

青磁 (Fig.15 - 95~97)

95~97は龍泉窯系の碗で、すべて口縁部の破片である。95は鎚なしの蓮弁文であるが、96・97は鎚蓮弁文である。胎土は精良で、色調は、95が明緑色、96が緑灰色、97が灰オリーブ色を呈する。

土製品 (Fig.15 - 98)

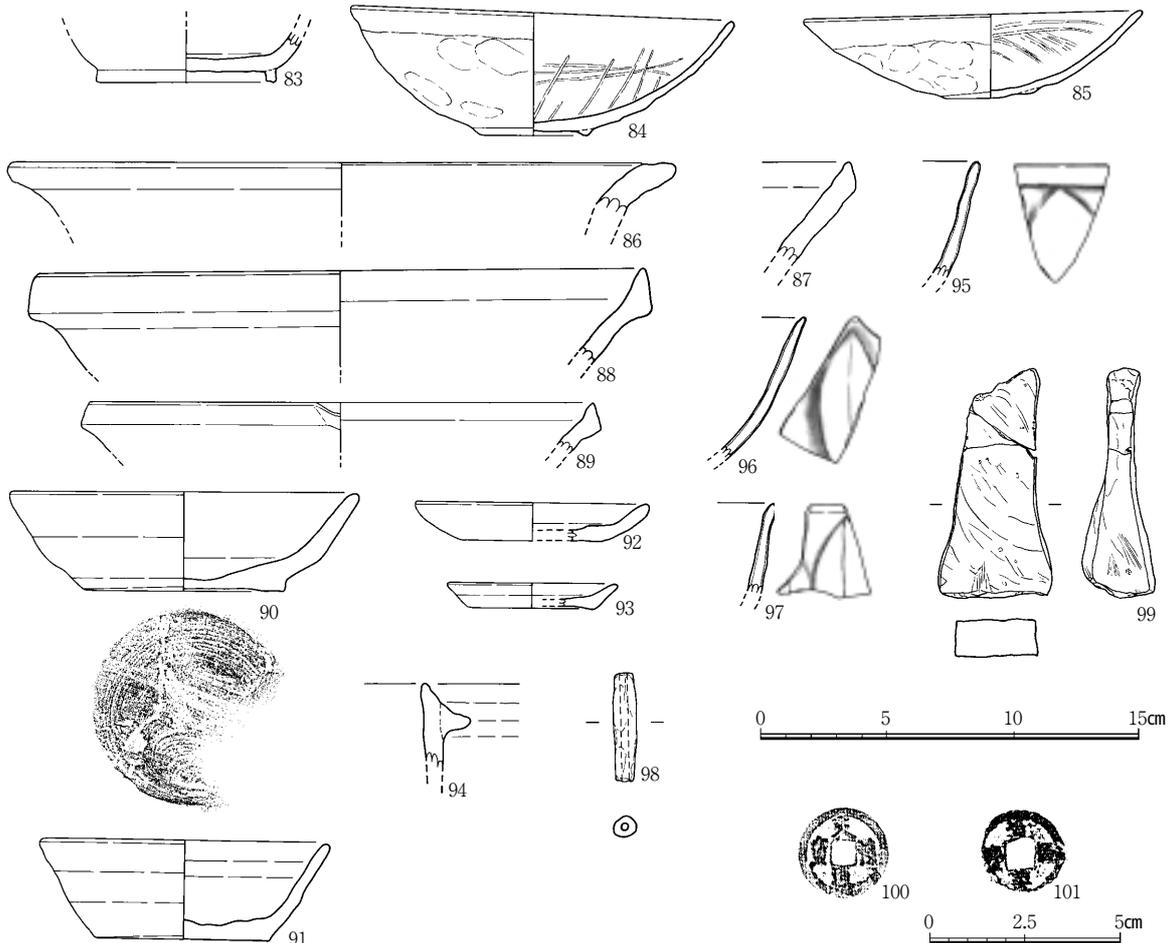


Fig.15 第 層出土遺物実測図

98は円筒形の管状土錘で、長さ4.3cm、全厚0.9cm、全幅1.0cm、孔径0.3cm、重量2.6gを測る。全体は摩耗しているが、指頭圧痕がみられる。

石製品 (Fig.15 - 99)

99は砥石である。断面形は長方形で、全長9.0cm、重量88.0gを測る。4面を使用し、良く使い込まれている。

金属製品 (Fig.15 - 100・101)

100・101は古銭である。100は銭径24.3～24.4mm、内径19.4～19.7mm、銭厚1.4～1.5mm、量目3.7gを測る。北宋銭で真宗の1017年(天禧元年)初鑄の天禧通寶である。天禧通寶の字体は真書一種のみであり、銭表には部分的に緑青がみられる。比較的残存状態が良い。101は全体的に錆化するが、1064年初鑄の治平通寶の篆書とみられる。銭径21.5～22.9mm、内径18.8mm、銭厚1.3～1.4mm、量目2.0gを測る。

3. 遺構と遺物

(1) **中世**

中世の遺構は調査区の東端と中央部より西側に多く認められた。全般に近世以降の削平と整地等による影響がみられ、遺存状態はよくないが南西部にその中心があったものとみられる。今回の調査で確認された遺構は掘立柱建物跡10棟、塀又は柵列跡6列、土坑16基、溝跡17条、ピット2個、低湿地状遺構である。

掘立柱建物跡

SB - 1 (Fig.16)

調査区中央部やや北側で検出した梁間2間(3.60～3.70m)、桁行2間(4.65～4.85m)とやや歪みのある東西棟建物跡である。棟方向はN - 80° - Eである。柱間寸法は梁(南北)が1.35m、2.25m、桁(東西)が2.15m、2.70mと区々である。柱穴は径15～33cmの円形または楕円形で、柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としていた。遺物には土師器片1点、土師質土器8点、鉄滓が1点みられたが、図示できたのは東妻柱真中の柱穴から出土した土師質土器1点(102)のみである。

出土遺物

土師質土器 (Fig.40 - 102)

102は椀の底部で、底径6.8cmを測り、底部外面は回転系切りである。底部は円盤状高台で、体部は丸味を持って外上方へ延びる。体部外面には口ク口成

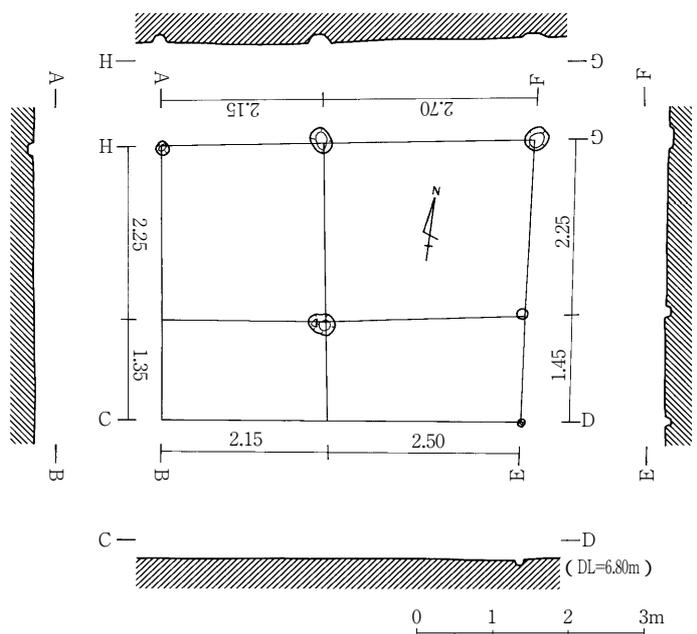


Fig.16 SB - 1

3. 遺構と遺物

形の痕跡が明瞭に残る。

SB - 2 (Fig.17)

調査区中央部で検出した梁間2間(5.20 ~ 5.45m) , 桁行3間(6.70 ~ 6.90m)とやや歪みのある南北棟建物跡である。SB - 1の南隣りに位置する。棟方向はN - 18° - Wである。柱間寸法は梁(東西)が2.15 ~ 3.15m , 桁(南北)は1.95 ~ 2.85mと区々である。柱穴は径20 ~ 30cmの円形または楕円形で、柱径は10cm前後とみられる。北から1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としていた。遺物には須恵器片4点, 土師質土器片38点がみられたが、細片のため復元図示できるものはなかった。

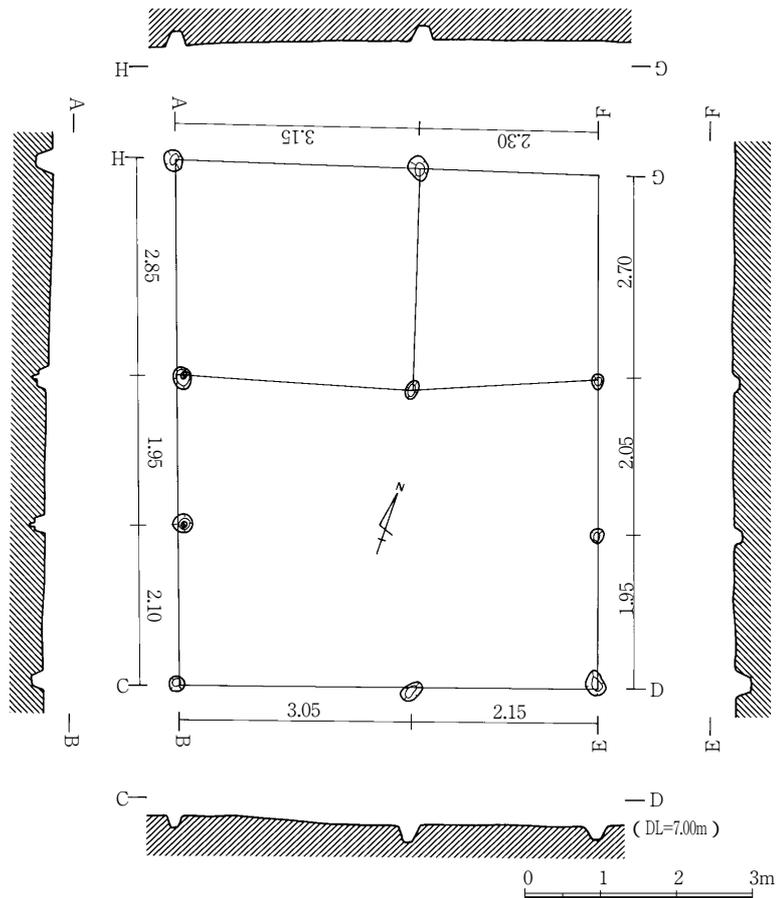


Fig.17 SB - 2

SB - 3 (Fig.18)

調査区中央部の西南側で、SB - 2の南隣りで検出した梁間2

間(3.80m) , 桁行4間(7.20 ~ 7.25m)とやや歪みのある南北棟建物跡である。棟方向はN - 9° - Wである。柱間寸法は梁(東西)が1.65m , 2.15m , 桁(南北)が1.35 ~ 2.35mと区々である。柱穴は径15 ~ 33cmの円形または楕円形で、柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としていた。遺物には土師器1点, 瓦器2点, 土師質土器104点, 炭化物が少量と出土量は多かったが、復元図示できたのは土師質土器3点(103 ~ 105)である。103は西側柱北から2間目の柱穴, 104は北隅柱, 105は東妻柱の真中からそれぞれ出土した。

出土遺物

土師質土器 (Fig.40 - 103 ~ 105)

103は手づくね成形の皿で、口径12.6cmを測る。口縁部は体部から内湾気味に上がる。口縁部は丁寧なヨコナデ調整が施され、体部外面には指押えの痕が残る。内面はナデ調整を施す。104と105は小皿で、104は口径7.6cm, 器高1.75cm, 底径5.7cmを測る。口縁部は真直ぐ立ち上がり、器面は回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りとみられる。105は口径7.0cm, 器高1.35cm, 底径4.8cmを測る。口縁部は体部から緩やかに外上方へ立ち上がり、端部を外反させて細く仕上げる。外面は摩耗しているが、内面はナデ調整がみられる。

SB - 4 (Fig.19)

調査区中央部のやや西南側で検出した梁間1間(1.35 ~ 1.55 m) , 桁行3間(8.70 m) とやや歪みのある東西棟建物跡である。一部はSB - 3と重複する位置にあるが約半分は東へ延びる。棟方向はN - 79° - Eである。柱間寸法は梁(南北)が1.35 m , 1.55 m , 桁(東西)が2.85 m , 3.00 mとなっている。柱穴は径35 ~ 45 cmと比較的大きな円形または楕円形で、柱径は10 cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。遺物は土師質土器が最も多く92点出土し、他に土師器1点、須恵器1点、瓦器2点、青磁1点、炭化物が少量みられ、土師質土器(106 ~ 108)3点と青磁(109)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.40 - 106 ~ 108)

106 ~ 108は杯である。106は口径12.8 cm , 器高3.8 cm , 底径8.0 cmを測る。口縁部は底部から外上方に向かって真直ぐに延びる。体部外面にはヘラ削りの後に回転ナデ調整を施す。107は口径10.4 cm , 器高4.3 cm , 底径5.6 cmを測る。口縁部はやや内湾気味に真上方向に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。底部の切り離しは回転糸切りで、円盤状高台となる。108は底部から体部の破片

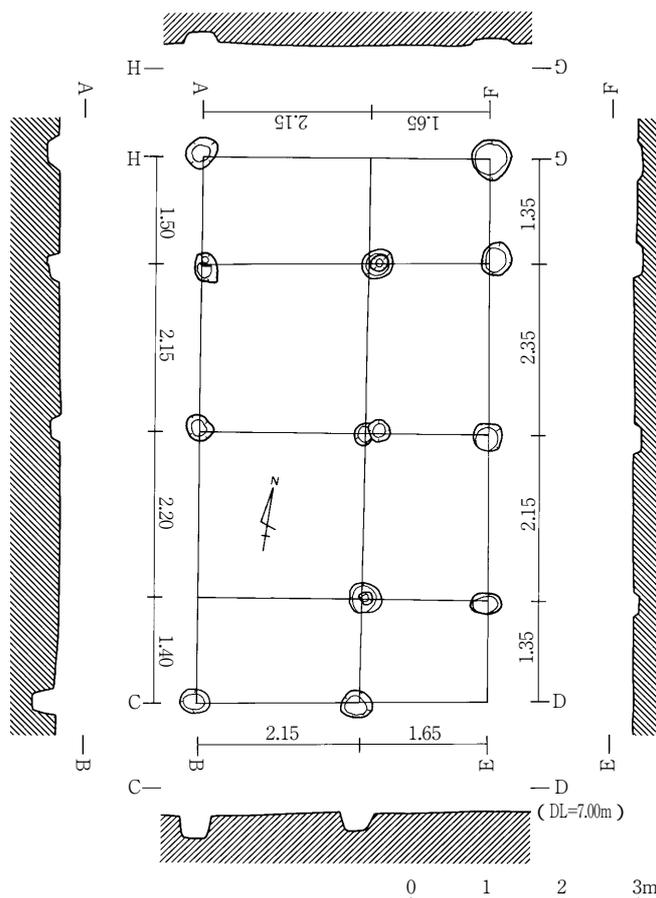


Fig.18 SB - 3

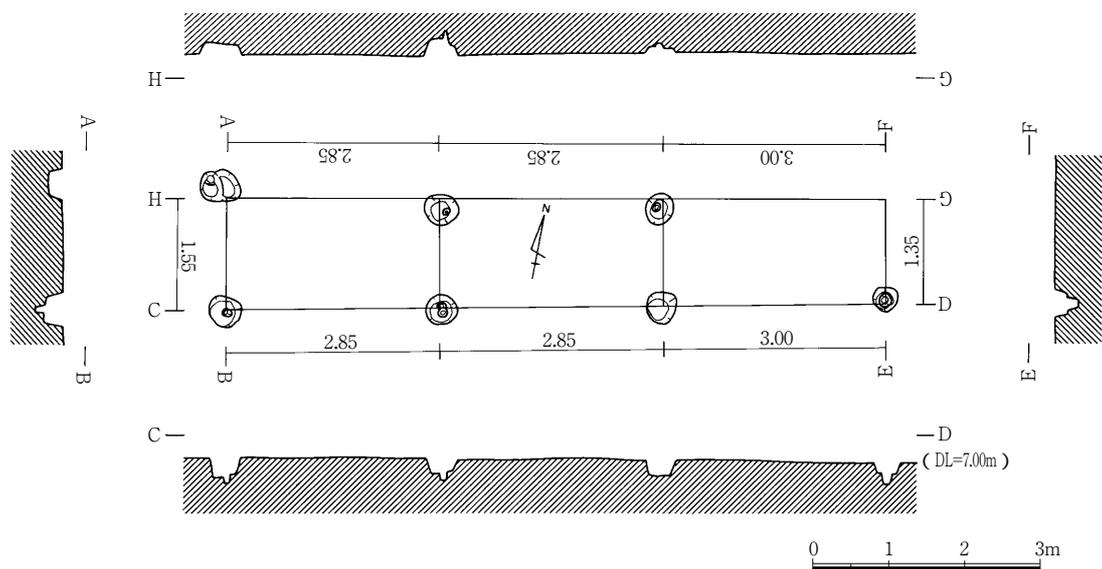


Fig.19 SB - 4

3. 遺構と遺物

で、体部は外上方へ外反気味に上がる。外面は摩耗しており調整不明であるが、内面は回転ナデ調整を施す。

青磁 (Fig.40 - 109)

109は口縁部の破片で、口縁部内面には2条の界線がみられる。器面には0.1～0.2mmの極薄いオリブ灰色の釉を施す。

SB - 5 (Fig.20)

調査区中央部の西南側、SB - 4の南隣で検出した東西棟建物跡である。梁間2間以上(4.15m以上)、桁行4間(7.15m)の建物跡であるが、東南端は調査区外のため検出できていない。棟方向はN - 81° - Eである。柱間寸法は梁(南北)が1.90m、2.25m、桁(東西)が1.75m、1.80mである。柱穴は径25～45cmの円形または楕円形で柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。出土遺物には土師質土器33点、桃とみられる種1点、鉄滓1点、少量の炭化物がみられたが、復元図示できるものはなかった。

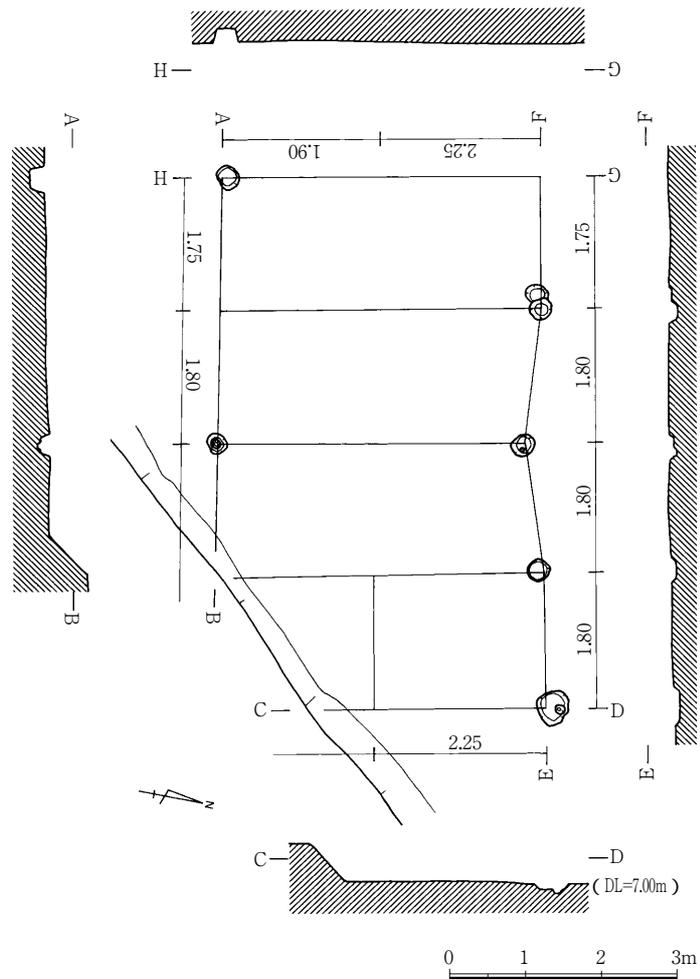


Fig.20 SB - 5

SB - 6 (Fig.21)

調査区中央部の南側で検出した梁間3間(5.50m)、桁行3間(6.25m)の南北棟建物跡である。SB - 5の西南隣に位置しているが、建物の南側は調査区外のため調査できていない。棟方向はN - 10° - Wと考えられる。柱間寸法は梁(東西)が1.35m、2.05m、2.10m、桁(南北)が2.00m、2.10m、2.15mと区々である。柱穴は径15～40cmの円形または楕円形で、柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。出土遺物には土師質土器片32点、少量の炭化物がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB - 7 (Fig.22)

調査区西部の南側で検出した梁間1間(2.40m)、桁行3間(4.31～4.35m)の東西棟建物跡である。SB - 6の西隣に位置し、棟方向はN - 88° - Eである。柱間寸法は梁(南北)が2.40m、桁(東西)が1.15m、1.35m、1.50m、1.58mと区々である。柱穴は径15～33cmの円形または楕円形で柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。出土遺物には土師質土器片13点、

瓦器片1点,少量の炭化物がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SB - 8 (Fig.23)

調査区西部の南端で検出した梁間2間(5.50m),桁行3間(6.35m)の東西棟建物跡である。建物跡の東南端は調査区外のため検出ができていない。棟方向はN - 4° - Wである。柱間寸法は梁(南北)が2.70m,2.80m,桁(東西)が2.10m,2.15mと区々である。柱穴は径25~30cmの円形または楕円形で柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。出土遺物には土師質土器片9点,少量の炭化物がみられたが,復元図示できるものはなかった。

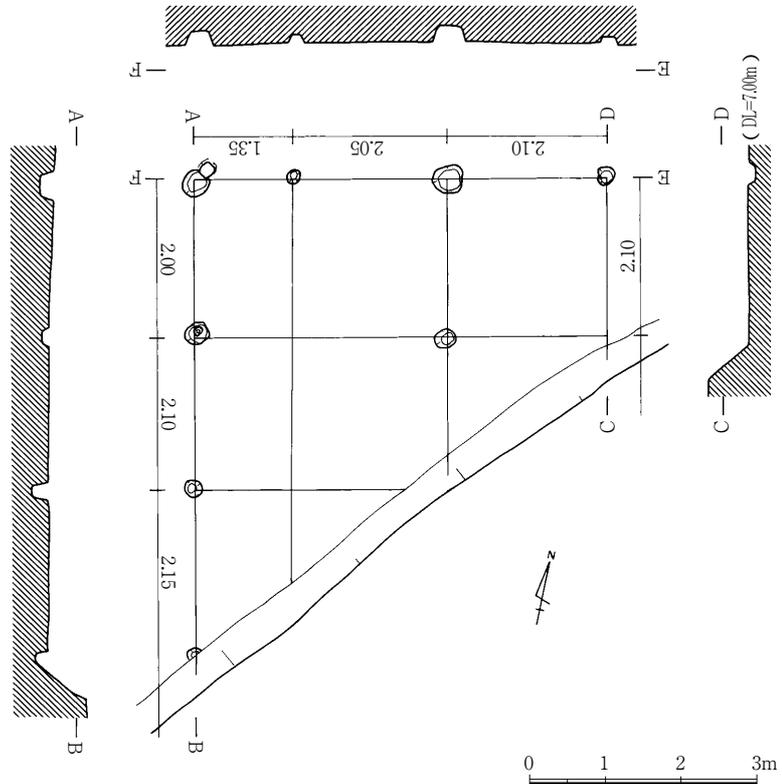


Fig.21 SB - 6

SB - 9 (Fig.24)

調査区西部の南側で検出した梁間2間(3.40~3.65m),桁行3間(6.60~6.80m)とやや歪みのある東西棟建物跡である。棟方向はN - 84° - Eである。柱間寸法は梁(南北)が1.70~1.85m,桁(東西)が1.25~3.15mである。柱穴は径15~33cmの円形または楕円形で,柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。出土遺物には土師質土器100点,瓦器3点,土製品1点,桃とみられる種1点,少量の炭化物がみられたが,復元図示できたのは土師質土器(110・111)2点と土錘(112)1点であった。

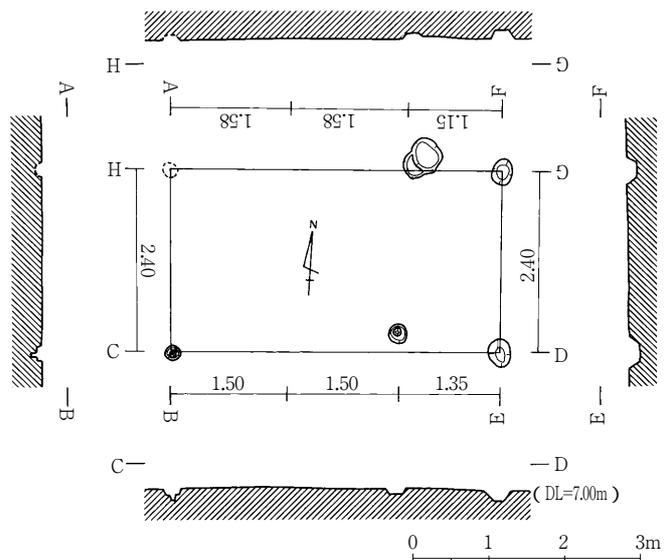


Fig.22 SB - 7

出土遺物

土師質土器 (Fig.40 - 110・111)

110は小皿の口縁部で,約4分の1が残存し,口径7.4cm,底径4.1cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。胎土は赤色礫などの細粒砂を含み,焼成は良好である。器面は摩耗し,底部もほと

3. 遺構と遺物

んど残っていないため調整は不明である。111は羽釜の脚部である。残存全長は4.0cm, 全幅1.7cm, 全厚4.6cmを測る。胎土はやや密で, 細粒砂を多く含む。外面はにぶい黄橙色だが, 焼成がやや不良のため中央部が褐色を呈する。表面は摩耗しているが部分的に指頭圧痕が残る。

土製品 (Fig.40 - 112)

112は紡錘形の管状土錘の破片で, 約4分の3が残存する。残存長3.5cm, 全厚0.95cm, 全幅0.95cm, 孔径0.3cmを測る。表面は摩耗しているが部分的に指頭圧痕が残る。

SB - 10 (Fig.25)

調査区西部の南端で検出した梁間1間(1.85~2.00m), 桁行3間(6.35~6.40m)の南北棟建物跡である。棟方向はN-45°-Eである。柱間寸法は梁(東西)が1.85m, 2.00m, 桁(南北)が1.80m, 1.90m, 2.15m, 2.45m, 2.65mと区々である。柱穴は径25~30cmの円形または楕円形で柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。出土遺物には土師質土器片21点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

塀・柵列跡

SA - 1 (Fig.26)

調査区中央部の南端で検出した東西柵列で, 重複するSA - 2に切られる。方向はN-59°-Eである。7間分(4.95m)を検出し, 柱間距離は0.65~0.80mである。柱穴は径20~30cmの円形または楕円

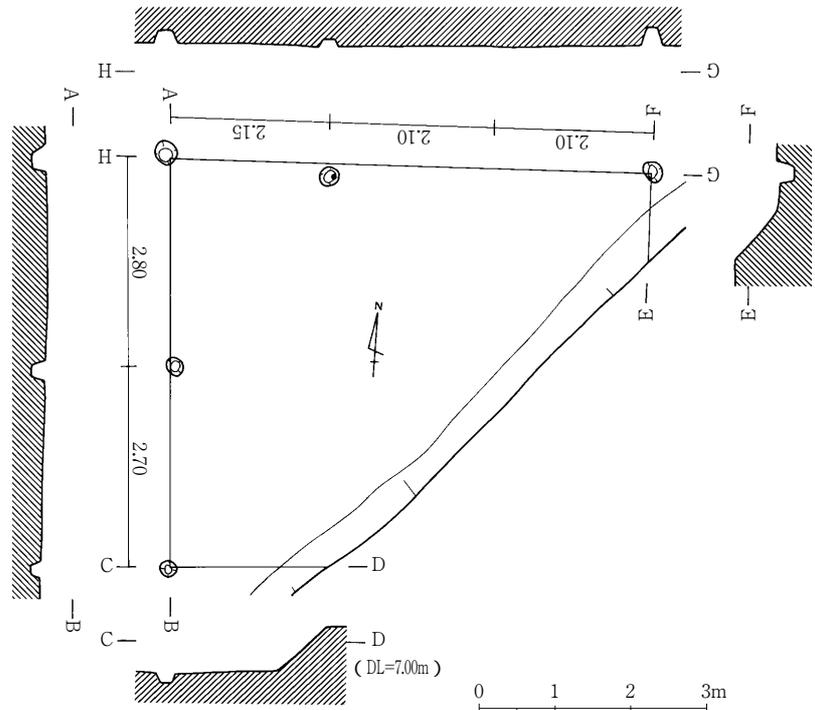


Fig.23 SB - 8

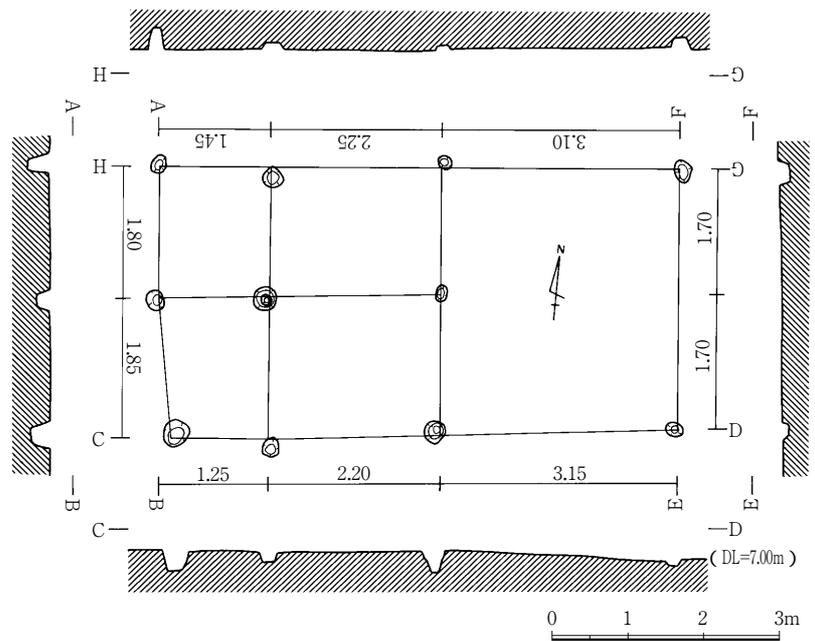


Fig.24 SB - 9

形で柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。遺物は西端から3番目の柱穴より土師質土器片1点が出土するが、細片のため復元図示できなかった。

SA - 2 (Fig.27)

調査区中央部の南端で検出した東西柵列である。SA - 1を切っており、同規模で方向も同じことからSA - 1の建て替えと考えられる。方向はN - 54° - Eである。7間分(4.85m)を検出し、柱間距離は0.50~0.85mである。柱穴は径21~36cmの円形または楕円形で柱径は15cm前後とみられ、土師質土器が出土した西端の柱穴は径36cmとSA - 2では最も大きな柱穴である。これら柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。出土遺物には土師質土器5点みられ、内1点(113)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.40 - 113)

113は口縁部の一部が欠損しているがほぼ完形の小皿で、口径7.0cm、器高1.4cm、底径5.2cmを測る。口縁部は底部から段を持ち内湾気味に立ち上がる。端部は丸く仕上げる。胎土は密で、赤色礫などの細粒砂を含み 焼成は良好である。体部と内面は回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りによる。

SA - 3 (Fig.28)

調査区中央部の南端で検出した東西柵列で、一部重複するSA - 4に切られている。方向はN - 55° - Eである。4間分(2.70m)を検出し、柱間距離は0.65~0.70mである。柱穴は径30~38cmの円形または楕円形で、柱径は15cm前後とみられる。東端は調査区外のため6間以上になる可能性もある。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。出土遺物は皆無であった。

SA - 4 (Fig.29)

調査区中央部の南端で検出した東西柵列である。SA - 3の建て替えと考えられる。方向はN - 53° -

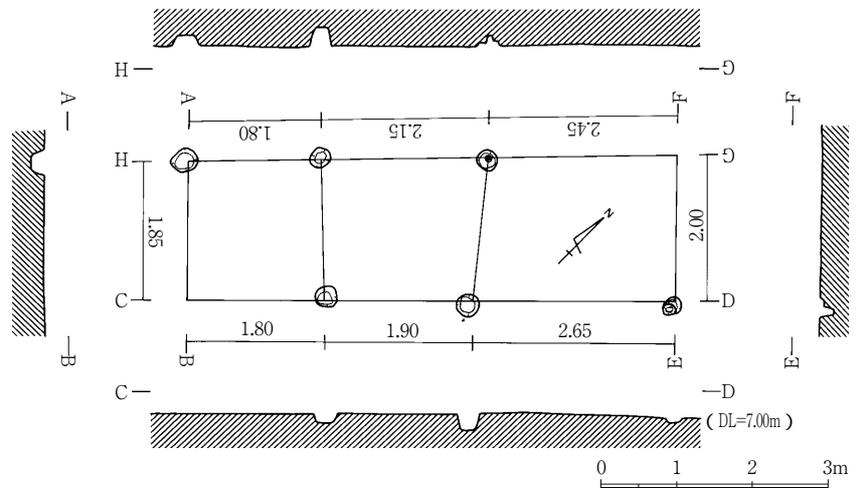


Fig.25 SB - 10

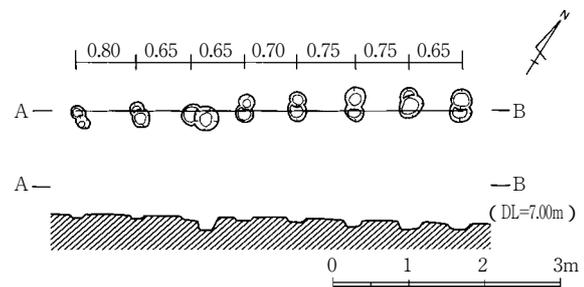


Fig.26 SA - 1

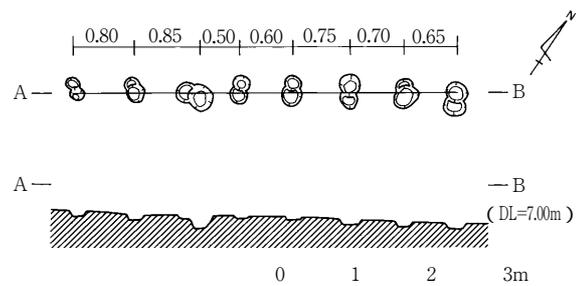


Fig.27 SA - 2

3. 遺構と遺物

Eである。3間分(2.05m)を検出し、柱間距離は0.65~0.70mである。柱穴は径28~38cmの円形または楕円形で、柱径は15cm前後とみられる。SA-3を切っており、同規模で方向も同じことからSA-3の建て替えと考えられ6間以上になる可能性がある。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。出土遺物は皆無であった。

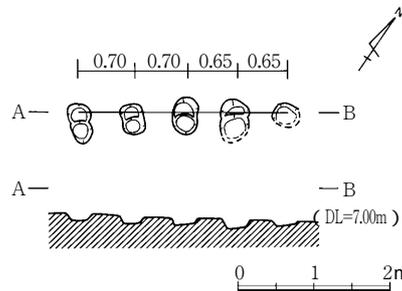


Fig.28 SA - 3

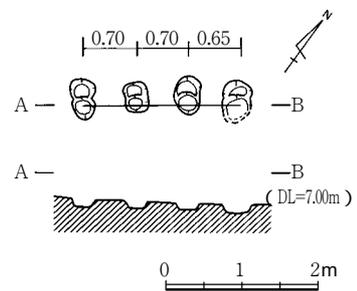


Fig.29 SA - 4

SA - 5 (Fig.30)

調査区中央部の南端で検出した東西柵列である。方向はN - 51° - Eである。4間分(3.20m)を検出し、柱間距離は0.65~1.25mである。柱穴は径23~40cmの円形または楕円形で柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

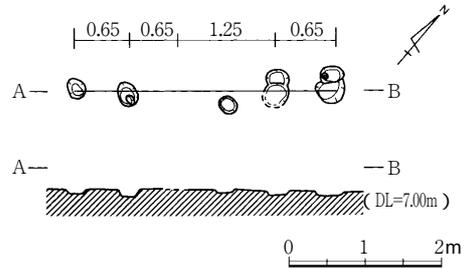


Fig.30 SA - 5

SA - 6 (Fig.31)

調査区中央部で検出した東西柵列で、東端の柱穴はSB-3の西南隅の柱穴と重複する。方向はN - 50° - Wである。3間分(5.70m)を検出し、柱間距離は1.35~2.35mである。柱穴は径15~30cmの円形または楕円形で柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主としている。出土遺物には土師質土器片21点、鉄滓1点みられたが、復元図示できるものはなかった。

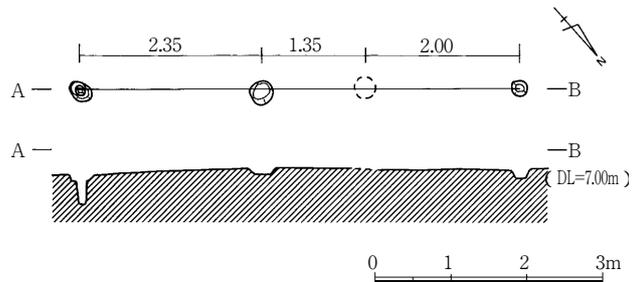


Fig.31 SA - 6

Tab.1 天神遺跡堀・柵列跡計測表

遺構番号	規模			方向 (NはGN)	備考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA - 1	8	4.95	0.65~0.80	N - 59° - E	
SA - 2	8	4.85	0.50~0.85	N - 54° - E	
SA - 3	5	2.70	0.65~0.70	N - 55° - E	
SA - 4	4	2.05	0.65~0.70	N - 53° - E	
SA - 5	5	3.20	1.35~1.25	N - 51° - E	
SA - 6	3	5.70	1.35~2.35	N - 50° - W	

土坑

SK - 1

調査区東端で検出した土坑である。長径3.00m,短径0.15mと舟形遺構である。深さは6cmを測り,長軸方向はN - 12° - Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトに少量の黄褐色粘土質シルトが混ざるものであった。出土遺物は皆無であった。

SK - 2

調査区東南端で検出した隅丸方形とみられる土坑で,南側は調査区外に延びている。確認できたのは長辺0.80m,短辺0.30mで,深さ19cmを測り,長軸方向はN - 31° - Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトに黄褐色粘土質シルトを少量含むものであった。出土遺物には須恵器細片1点のみであった。

SK - 3 (Fig.32)

調査区中央部で検出した楕円形を呈する土坑である。長径2.74m,短径0.84m,深さ7cmを測り,長軸方向はN - 32° - Wを示す。断面形は皿状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトに黄褐色粘土質シルトを少量含むものであった。出土遺物には弥生土器1点,須恵器1点,土師質土器3点,瓦質土器1点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

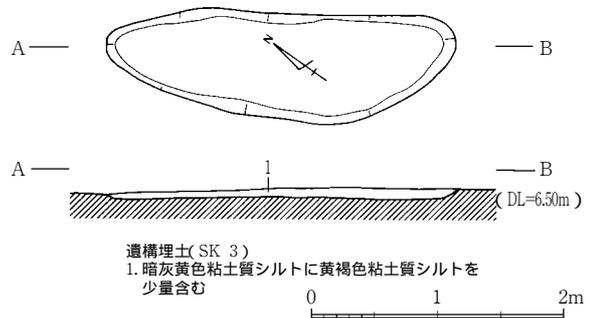


Fig.32 SK - 3

SK - 4

調査区中央部の南側で検出した楕円形を呈する土坑である。長径7.78m,短径1.62m,深さ11~14cmを測り,長軸方向はN - 40° - Wを示す。断面形は皿状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には土師器1点,瓦器6点,土師質土器33点,少量の炭化物がみられたが,図示できたのは土師質土器(114)1点のみであった。

出土遺物

土師質土器 (Fig.40 - 114)

114は杯の底部の破片で,約半分が残存し,底径7.0cmを測る。底部はベタ高台状をなし,切り離しは回転糸切りによる。内底面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや密で,粗粒砂を含む。焼成はやや不良で,外面はにぶい赤橙色,内面は灰黄褐色,断面は暗灰色を呈する。

SK - 5 (Fig.33)

調査区中央部の南端で検出した楕円形の土坑で,SK - 4の南側に位置する。南端は調査区外のため確認できた長径は2.46m,短径は1.18

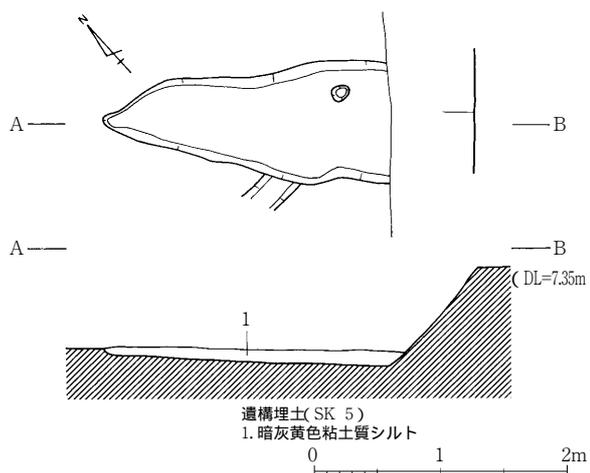


Fig.33 SK - 5

3. 遺構と遺物

mである。深さは北側で4cm,南側で12cmを測り,長軸方向はN - 46° - Wを示す。断面形は皿状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SK - 6

調査区中央部の西南側で検出した楕円形の土坑であり,SB - 3の西側に位置する。長径1.53m,短径は1.22m,深さ4cmを測り,長軸方向はN - 55° - Eを示す。断面形は皿状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物は東播系須恵器(115)1点のみであった。

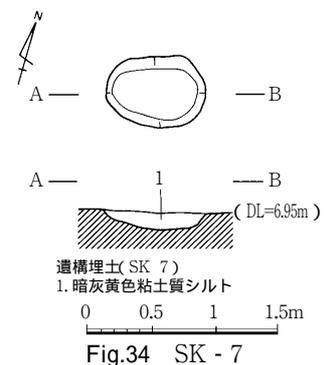
出土遺物

東播系須恵器 (Fig.40 - 115)

115は片口鉢で,口径28.4cm,器高10.8cm,底径9.0cmを測り,半分以上が残存する。口縁部は肥厚しやや内湾気味に立ち上がり,端部を上向きに摘み上げ,丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整,体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部は回転系切り後丁寧なナデ調整を加える。口縁部外面には重ね焼きの痕が明瞭に残る。

SK - 7 (Fig.34)

調査区中央部の西南側で検出した楕円形の土坑であり,SK - 6の西北側に位置する。長径0.82m,短径0.60m,深さ22cmを測り,長軸方向はN - 84° - Eを示す。断面形は皿状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片20点,瓦器片3点がみられ,瓦器(116)1点が図示できた。



出土遺物

瓦器 (Fig.40 - 116)

116は椀の底部で,底径3.2cmを測る。体部は底部から緩やかに立ち上がり,底部外面には断面三角形の小さな高台が付く。体部外面には指押えが明瞭にみられ,内面には圈線状のヘラ磨きが施され,内底面には平行線状の暗文がみられる。胎土はやや密で長石他の砂粒を含み,焼成はやや良好である。

SK - 8

調査区中央部の西南側で検出した楕円形の土坑で,SK - 7の西側に位置する。長径0.80m,短径0.44m,深さ10cmを測り,長軸方向はN - 4° - Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片9点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SK - 9

調査区中央部の西南側で検出した楕円形に近い隅丸方形の土坑で,SK - 8の南側に位置する。長辺5.95m,短辺1.50mで,深さは北側で20cm,南側で15cmを測る。長軸方向はN - 11° - Wを示す。断面形は舟底形から逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトで,多量の炭化物が含まれていた。出土遺物には弥生土器片1点,土師器片1点,瓦器片5点,土師質土器片82点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SK - 10

調査区中央部の西南側で検出した舟形の土坑であり、SK - 9の南西側に位置する。長辺3.20m、短辺0.30m、深さ6cmを測り、長軸方向はN - 6° - Wを示す。断面形は浅いU字状を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片1点がみられたが、復元図示できなかつた。

SK - 11

調査区西部の南側で検出した楕円形の土坑で、SK - 7の西側に位置する。西側は畝状遺構に切られる。確認できた長径は1.00m、短径は0.30mで、深さは6cmを測り、長軸方向はN - 79° - Wを示す。断面形は浅いU字状を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトであった。出土遺物には東播系須恵器(117)1点があった。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.40 - 117)

117は片口鉢の口縁部の破片である。口縁部は端部を上下に拡張し、玉縁をなす。口縁部はヨコナデ調整を施しており、外面には重ね焼き痕が明瞭に残る。

SK - 12 (Fig.35)

調査区西部の南側で検出した楕円形の土坑であり、SB - 8と重複する。長径2.64m、短径0.76m、深さ8～13cmを測り、長軸方向はN - 20° - Wを示す。断面形は舟底ないし皿状を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物には土師質土器片10点がみられたが、復元図示できるものはなかつた。

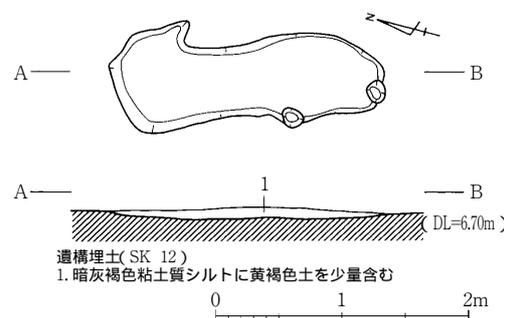


Fig.35 SK - 12

SK - 13

調査区西部の南側で検出した不整形の土坑であり、SK - 12の南側に位置する。長径0.88m、短径0.45m、深さ6～7cmを測り、長軸方向はN - 89° - Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SK - 14 (Fig.36)

調査区西部の南端で検出した楕円形とみられる土坑で、SK - 13の南側に位置し、土坑の南側は調査区外へ延びる。確認できた長径は0.88m、短径は0.45mで、深さは6～7cmを測り、長軸方向はN - 89° - Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は2層に分層され、上層が暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むもの、下層が暗灰黄色粘土質シルト層であった。出土遺物には土師質土器2点、鉄滓1点がみられたが、復元図示できるものはなかつた。

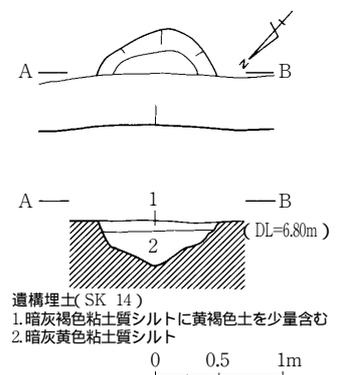


Fig.36 SK - 14

SK - 15

調査区西部の西南端で検出した楕円形とみられる土坑で、SB - 10の

3. 遺構と遺物

南側に位置し、土坑の西側は調査区外へ延びる。確認できた長径は1.40m、短径は0.76mで、深さは15cmを測り、長軸方向はN - 55° - Eを示す。断面形はU字状を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SK - 16

調査区西部の西南端で検出した楕円形の土坑で、SK - 15の南側に位置する。長径0.96m、短径0.63m、深さ6～9cmを測り、長軸方向はN - 89° - Eを示す。断面形は皿状を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物は皆無であった。

溝跡

SD - 1

調査区東端で検出した南北溝で、調査区外へ延びる。確認できた長さは5.80m、幅は20～45cmで、深さ9cm前後を測り、主軸方向はN - 13° - Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物は弥生土器の細片のみであった。

SD - 2

調査区東端、SD - 1の南側、SK - 1の東隣で検出した南北溝で、溝の北側は調査区外へ延びる。確認できた長さは10.80m、幅は15～75cmで、深さは7cm前後を測り、主軸方向はN - 13° - Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物には弥生土器3点、須恵器1点、土師質土器6点がみられ、弥生土器(118)1点が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.40 - 118)

118は壺の底部である。底径3.4cmで、平底である。胴部は底部から内湾気味に上がる。外面にはハケ調整、内面には指頭圧痕が残る。胎土はやや粗く、細・粗粒砂を多く含む。焼成はやや不良で、外面は赤褐色、内面は暗灰色を呈する。

SD - 3

調査区東端部で検出した南北溝で、SD - 2の西側に位置する。幅40cm、深さ19cm前後で、5.00mを検出した。主軸方向はN - 8° - Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物には弥生土器2点がみられたが、復元図示できなかった。

SD - 4 (Fig.37)

調査区中央部で検出した南北溝で、SK - 3の南側に位置する。幅25～60cm、深さ7cm前後で、15.10mを検出した。主軸方向はN - 40° - Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物には土師器1点、瓦器1点、土師質土器8点がみられたが、すべて細片で復元図示できるものはなかった。

SD - 5 (Fig.37)

調査区中央部の北側で検出した東西溝である。溝は低湿地へ流れ込む。幅33～48cm、深さ7～12cmで、15.10mを検出した。主軸方向はN - 84° - Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土と炭化物を少量含むものであった。出土遺物は土師質土器片1点のみ、復元図示できなかった。

SD - 6 (Fig.37)

調査区中央部の北側で検出した東西方向の溝で、SD - 5の南側に位置し、低湿地へ流れ込む。幅16~46cm、深さ12cm前後で、10.40mを検出した。主軸方向はN - 79° - Wを示す。断面形はU字状を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物には土師質土器片4点がみられたが、復元図示できなかった。

SD - 7 (Fig.37)

調査区中央部で検出した東西溝で、SD - 6の南側に位置し、低湿地へ流れ込む。幅23~40cm、深さ11~19cmで、12.70mを検出した。主軸方向はN - 76° - Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SD - 8 (Fig.37)

調査区中央部で検出した東西溝で、SD - 7の南側に位置し、溝は低湿地へ流れ込む。幅25~45cm、深さ6~11cmで、13.00mを検出した。主軸方向はN - 86° - Eを示す。断面形は皿状を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物は皆無であった。

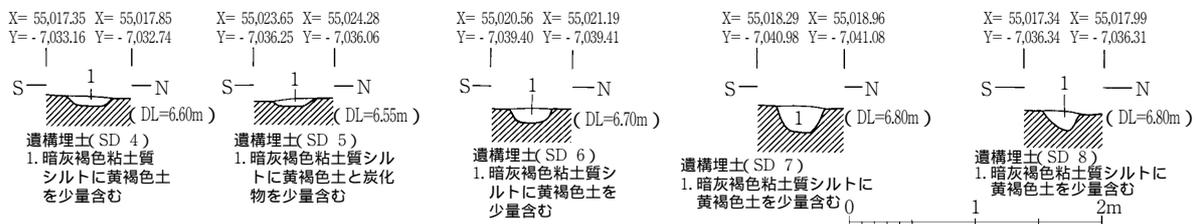


Fig.37 SD - 4 ~ 8

SD - 9 (Fig.38)

調査区中央部で検出した東西溝である。幅は0.40~1.00m、深さ11~16cmで、基底面は東に向かって傾斜し、9.10mを検出した。主軸方向はN - 67° - Eを示す。断面形は皿状を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SD - 10

調査区中央部で検出した東西溝で、SD - 9の南側に位置する。幅40cm、深さ4~6cmで、基底面は東に向かって傾斜し、4.00mを検出した。主軸方向はN - 67° - Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SD - 11 (Fig.38)

調査区西部で検出した南北溝で、SK - 9の西側に位置する。幅0.70~1.80m、深さは北側で41cm、南側で37cmを測り、10.00m検出した。主軸方向はN - 67° - Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は3層に分層ができ、1層が暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むもの、2層が褐灰色粘土質シルト、3層が2層よりマンガン粒が少なく、粘質性が強いものであった。出土遺物には弥生土器2点、須恵器2点、瓦器8点、白磁1点、青磁1点がみられ、青磁(119)1点が図示できた。

出土遺物

青磁 (Fig.40 - 119)

119は龍泉窯系の碗の口縁部で、外面には鎬蓮弁文が施される。器面には0.1~0.2mmの緑釉が施さ

3. 遺構と遺物

れ、貫入がみられる。胎土はやや密で、円・裂孔がみられ、焼成はやや不良で、内・外面ともにオリブ黄色を呈する。

SD - 12

調査区西部で検出した南北溝で、SD - 11の西側に位置し、北側は後世の削平を受けており、南側は調査区外へ延びる。幅30～60cm、深さは北側で47cm、南側で39cmを測り北に向かって傾斜し、18.00mを検出した。主軸方向はN - 8° - Wを示す。断面形はU字状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトに黄褐色土を少量含むものであった。出土遺物には弥生土器4点、土師器2点、須恵器2点、瓦器6点、青磁1点、土師質土器36点、常滑焼2点、動物の歯が数本みられ、弥生土器(120・121)2点、瓦器(122)1点、青磁(123)1点が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.40 - 120・121)

2点とも甕で、120は肩部から頸部の破片である。頸部内外面にはハケ調整、肩部外面はタタキを内面はハケ調整の後、ナデ調整を加える。色調は内外面ともにぶい黄橙色ないし橙色を呈し、胎土には細砂粒を多く含む。121は底部と下胴部の破片であり、半分以上残存する。外面は丁寧なナデ調整を施し、体部の一部は二次的な熱を受け、黒く変色している。内面は上下のヘラ削りと指頭圧痕がみられる。底部は丸底と考えられる。胎土は粗く、粗粒砂を多く含む。焼成はやや不良で、断面は褐灰色を呈する。

瓦器 (Fig.40 - 122)

122は小皿である。口径8.2cm、器高1.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、外面と内面には指押えの痕が残る。色調は灰白色を呈し、胎土はやや密で、砂粒を少量含む。焼成は良い。

青磁 (Fig.40 - 123)

123は龍泉窯系の碗の口縁部の破片である。外面には蓮弁文が施され、0.1～0.2mmの緑釉を施す。色調はオリブ灰色を呈し、胎土はやや密で、円・裂孔がみられる。焼成は良好で、器面には貫入が認められる。

SD - 13 (Fig.38)

調査区西部で検出した東西溝で、SD - 11と12を切っている。幅20～50cm、深さ7cmで西に向かって傾斜し、5.10mを検出した。主軸方向はN - 81° - Wを示す。断面形は皿状を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師器1点、土師質土器8点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

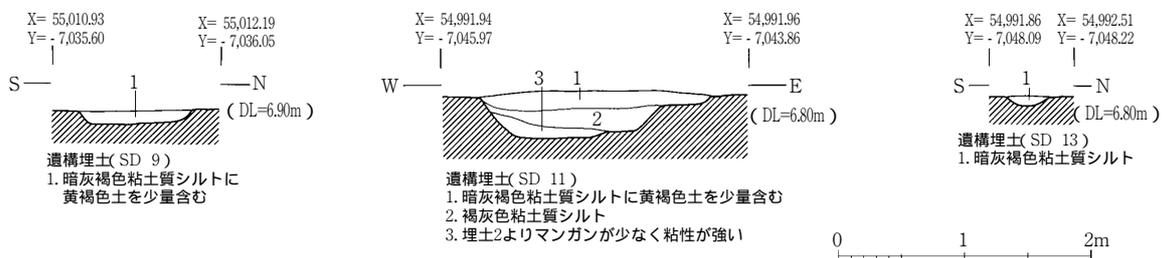


Fig.38 SD - 9・11・13

SD - 14

調査区西端で検出した東西溝で、溝の北側は暗渠に切られる。確認できた幅は28cm、深さは6cmで西に向かって傾斜し、5.20mを検出した。主軸方向はN - 85° - Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器(124)1点であった。

出土遺物

弥生土器 (Fig.40 - 124)

124は甕の口縁部の破片である。口縁部はくの字状をなし、端部は内傾する浅い凹面をなす。外面にはタテ方向、内面にはヨコ方向のハケ調整を施す。色調は内外面ともにびい橙色を呈し、胎土はやや粗く、粗粒砂を多く含む。焼成はやや不良で、断面は暗灰色を呈する。

SD - 15 (Fig.39)

調査区西南端で検出した東西溝で、溝の東は調査区外に延びるため確認延長の9.6m以上である。幅40~64cm、深さ9cmで、9.60mを検出した。主軸方向はN - 79° - Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 16 (Fig.39)

調査区西南端で検出した東西溝で、溝の両端は調査区外に延びる。幅50cm、深さは17~20cmで東に向かって傾斜し、6.20mを検出した。主軸方向はN - 87° - Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は2層に分層でき、上層が褐色粘土質シルトに青灰色粘土を含むもの、下層が暗灰褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片3点、瓦器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 17 (Fig.39)

調査区西南端で検出した東西溝である。溝の両端は調査区外に延びる。幅50~80cm、深さ40~45cmで東に向かって傾斜し、5.40mを検出した。主軸方向はN - 87° - Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は3層に分層でき、1層が暗灰黄色粘土質シルト、2層が暗褐色粘土質シルトに灰白色土を含むもの、3層が暗褐色粘土質シルトに黒灰色土を含むものであった。出土遺物には瓦器1点、土師質土器4点、鉄滓1点がみられ、瓦器(125)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.40 - 125)

125は椀であり、口径15.2cm、器高5.3cm、底径4.8cmを測る。口縁部は2段にヨコナデ調整を施し、体部外面は指押えを行う。内面には圏線状のヘラ磨きが密に施され、内底面には斜格子の暗文がみ

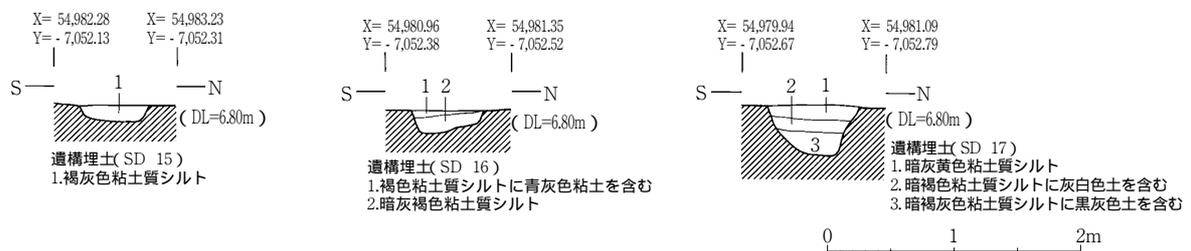


Fig.39 SD - 15 ~ 17

3. 遺構と遺物

られる。底部外面にも指押えの痕跡が見られ、八の字状に外反する高台が付く。胎土はやや密で、金雲母・長石他の砂粒を含む。焼成は不良であり、断面はにぶい黄褐色を呈する。

ピット

P - 1

調査区中央部の西端で検出した柱穴で、SD - 8の南側に位置する。長径32cm、短径30cm、深さ9cmを測り、柱痕は14cm前後とみられる。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土と炭化物を少量含むものであった。出土遺物には土師質土器9点がみられ、内1点(126)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.40 - 126)

126は小皿で、完形品である。口径7.8cm、器高1.6cm、底径4.8cmを測る。口縁部は内湾気味に短く

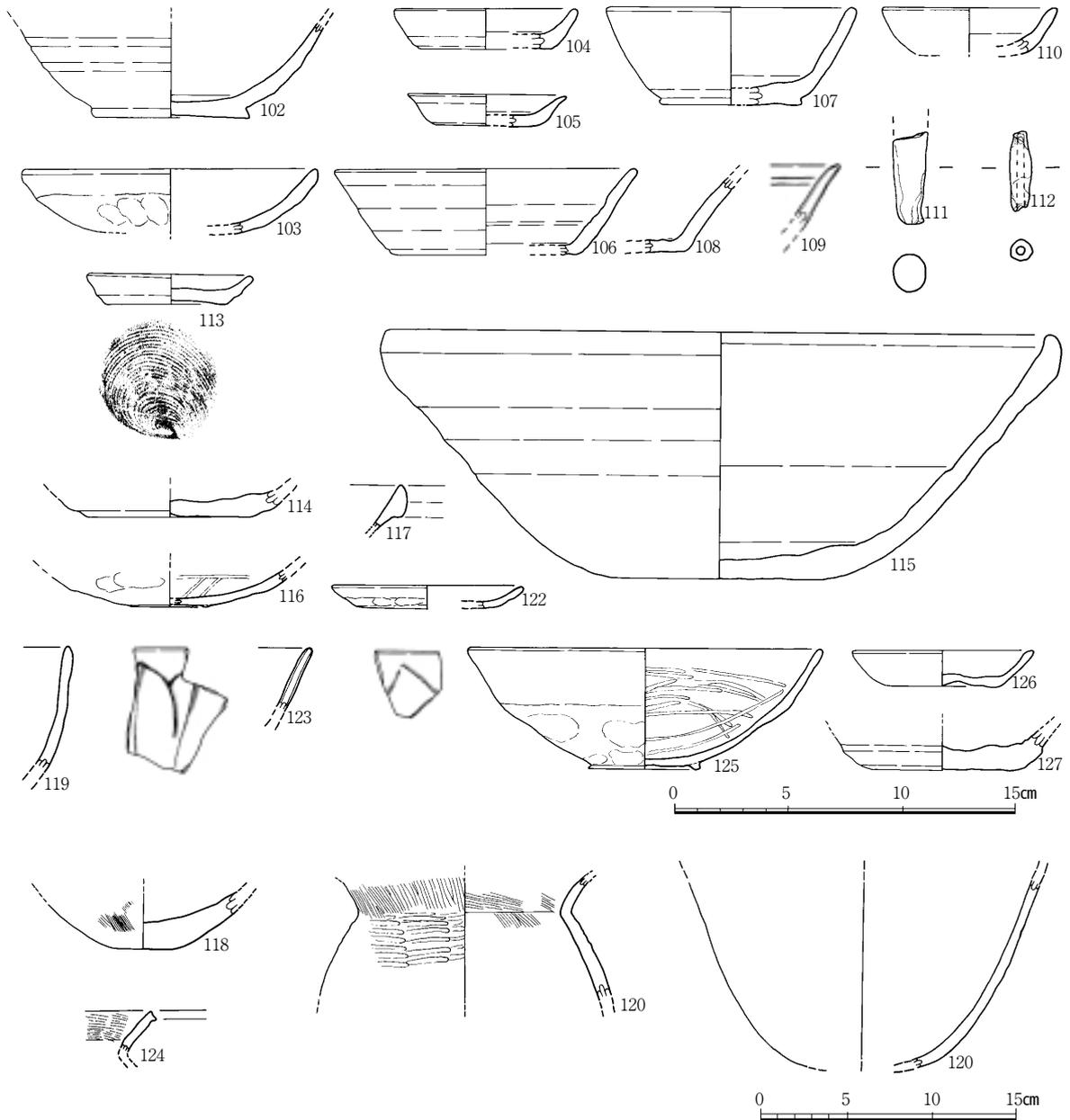


Fig.40 SB - 1・3・4・9, SA - 2, SK - 4・6・7・11, SD - 2・11・12・14・17, P - 1・2出土遺物実測図

立ち上がり、端部を丸く仕上げる。調整は内外面とも回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。外底面は摩耗するが、回転ヘラ切りとみられる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土はやや密で、細粒砂を少し含む。焼成は良好である。

P - 2

調査区中央部の南側で検出した柱穴である。SB - 3の内側に位置し、径26cm前後の円形で、深さは12cmを測り、柱痕は10cm前後とみられる。埋土は暗灰褐色粘土質シルトに黄褐色土と炭化物を少量含むものであった。出土遺物には土師質土器9点があり、内1点(127)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.40 - 127)

127は杯の底部の破片で、約半分が残存する。底径7.2cmを測る。底部は平らで、体部は外上方へ延びるとみられる。内底面は回転ヘラ削り後ナデ調整を加える。外面底部は摩耗するが、回転ヘラ切りではないかとみられる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土はやや粗く、粗粒砂を多く含む。焼成は良好である。

低湿地状遺構

SS - 1 (Fig.9)

調査区の東半分で認められた低湿地状の落ち込みで、等高線が示すように境は、東が調査区東端、西が調査区中央部、南が若干調査区外、北がさらに調査区外に広がっており、規模は東西約43m、南北28m以上である。基底面は北に向って傾斜しており、最深部は西の落ち込み肩から約1.10mを測る。堆積土は全体がシルト質粘土から粘土質シルトとなっており、西側の縁辺部に沿って幅約2.50mの帯状に多量の土器が投棄された状態で出土した。これら遺物は西半分に展開する遺構に伴うものとみられる。出土遺物は弥生土器42点、土師器3点、須恵器3点、瓦器96点、東播系須恵器28点、土師質土器2,032点、備前焼1点、白磁1点、青磁2点、瓦質土器8点などであり、弥生土器(128・129)2点、須恵器(130)1点、土師器(131～133)3点、瓦器(134～138)5点、東播系須恵器(139～145)7点、土師質土器(146～187)42点、備前焼(188)1点、瓦質土器(189)1点、白磁(190)1点、青磁(191)1点が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.41 - 128・129)

128は甕であり、口頸部と肩部が残存する。口径は18.8cmを測り、口縁部は頸部から外反してのび、端部を丸く仕上げる。頸部外面はタテ方向のハケ調整を施す。口縁部の外面には煤が付着する。胎土は粗く、粗粒砂を多く含む。129は小形の鉢で、ほぼ完形品である。口径10.3cm、器高5.7cm、底径2.4cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。外面にはタタキ、内面にはハケ調整を施し、口唇部のみヨコナデ調整を加える。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土は粗く、粗粒砂を多く含む。焼成は良好である。

須恵器 (Fig.41 - 130)

130は高杯の脚部であり、底径11.0cmを測る。脚部は緩やかに外湾して下り、裾部で大きく開く。

3. 遺構と遺物

裾部の境には一条の凹線が巡り、長方形の透しが三方に穿たれる。調整は回転ナデ調整で、内面には絞り目とヘラ記号がみられる。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土には細砂粒を含む。焼成は良い。

土師器 (Fig.41 - 131 ~ 133)

131と132は甕である。131は口径32.8cmを測り、口縁部は胴部から屈曲しやや内湾気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整、胴部外面は指押えの後にナデ調整を加え、部分的に煤が付着する。132は外傾する口縁部の破片で、口縁部はハケ調整の後にヨコナデ調整を加える。胎土が粗く、粗粒砂を多く含む。

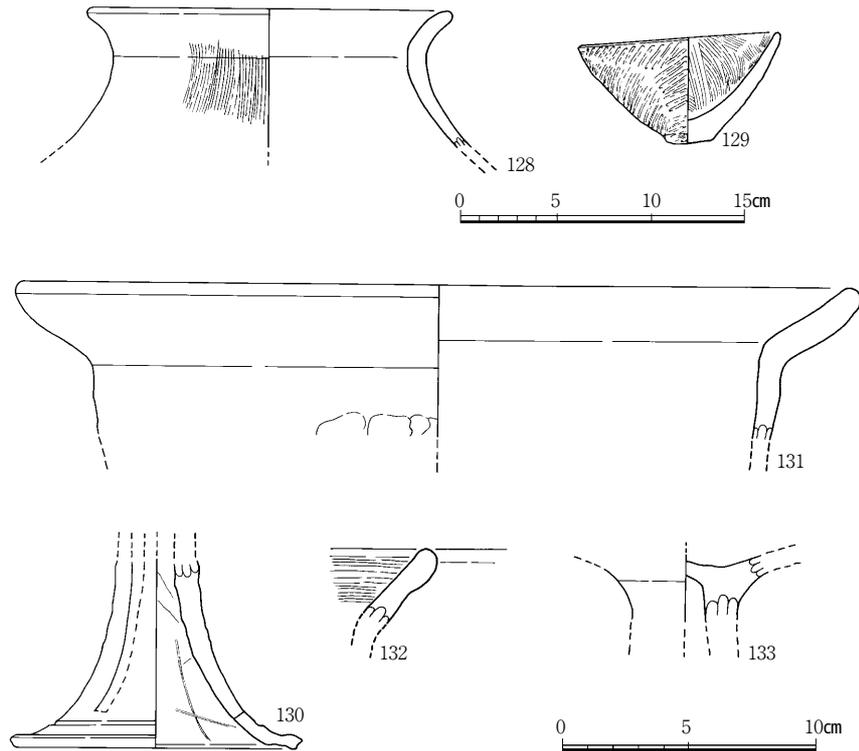


Fig.41 SS - 1出土遺物実測図1

133は高杯基部の破片

である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、焼成はやや不良で、断面は黒褐色を呈する。

瓦器 (Fig.42 - 134 ~ 138)

すべて椀である。134と135は器壁が厚く、胎土も類似している。2点とも焼成はやや不良であり、底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がる。134は全体の約3分の1が残存し、口径14.7cm、底径7.0cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整、体部には指押えの痕、底部外面には高台の剥がれた跡が残る。135は底部と体部の破片であり、底径6.6cmを測る。内外面は摩耗のため、調整は不明である。外面底部には断面方形の高台が付く。136は口縁部の破片で、口径14.8cmを測る。口縁部をヨコナデ調整し、外面には指押えの痕が顕著に残る。内面は圏線状のヘラ磨きが行われ、銀色に発色する。137と138は3分の1以上残存する。2点とも口縁部はヨコナデ調整、外面は指押えが行われる。焼成は不良であり、灰黄色を呈する。内面は圏線状のヘラ磨きが施される。137は口径11.8cmを測り、器高は低くやや扁平な椀である。138は口径12.4cm、器高3.2cmを測り、底部は丸味を有する。

東播系須恵器 (Fig.42 - 139 ~ 145)

すべて椀で、口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げ

ロクロ成形で、器面は回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。139は約5分の3が残存し、口径15.5cm、器高5.1cm、底径5.3cmを測る。胎土はやや密であるが、粗粒砂が多い。焼成は不良で、内外面ともに灰白色を呈する。140は約半分が残存し、口径16.4cm、器高4.9cm、底径4.4cmを測る。内底面には凹みがみられる。胎土はやや密であるが、粗粒砂が多い。焼成は不良で、内外面ともに灰色を呈する。141は約4分の1が残存し、口径16.0cm、器高5.0cm、底径6.2cmを測る。内底面には凹みがみられる。胎土はやや粗く、粗粒砂が多い。焼成はやや良好で、内外面ともに灰色を呈する。142はほぼ半分が残存し、口径16.0cm、器高5.5cm、底径6.0cmを測る。口縁部には重ね焼き痕が残る。胎土はやや粗く、粗粒砂が多い。焼成は良好で、内外面ともに灰色を呈する。143は口縁部の破片で、約3分の1が残存し、口径16.0cmを測る。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土は円孔が多く、細粒砂を含む。144は底部と体部の破片で、底径6.0cmを測る。体部は回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土には粗砂粒を多く含む。焼成は良い。145も底部と体部の破片である。色調は内外面とも青灰色を呈し、胎土はやや粗く、粗粒砂を多く含む。焼成はやや良好である。

土師質土器 (Fig.43 - 45 - 146 - 187)

146～165は杯である。146と147は中空の円柱状の高い高台が付くもので、底部から内側に向かって円柱状に立ち上がり、中空となる。体部は大きく開き口縁部に至る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、調整は回転ナデ調整である。146はほぼ完形で、口径14.5cm、器高6.7cmを測る。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。147は146より小型で、口径13.5cm、器高4.0cm、底径7.8cmを測る。全

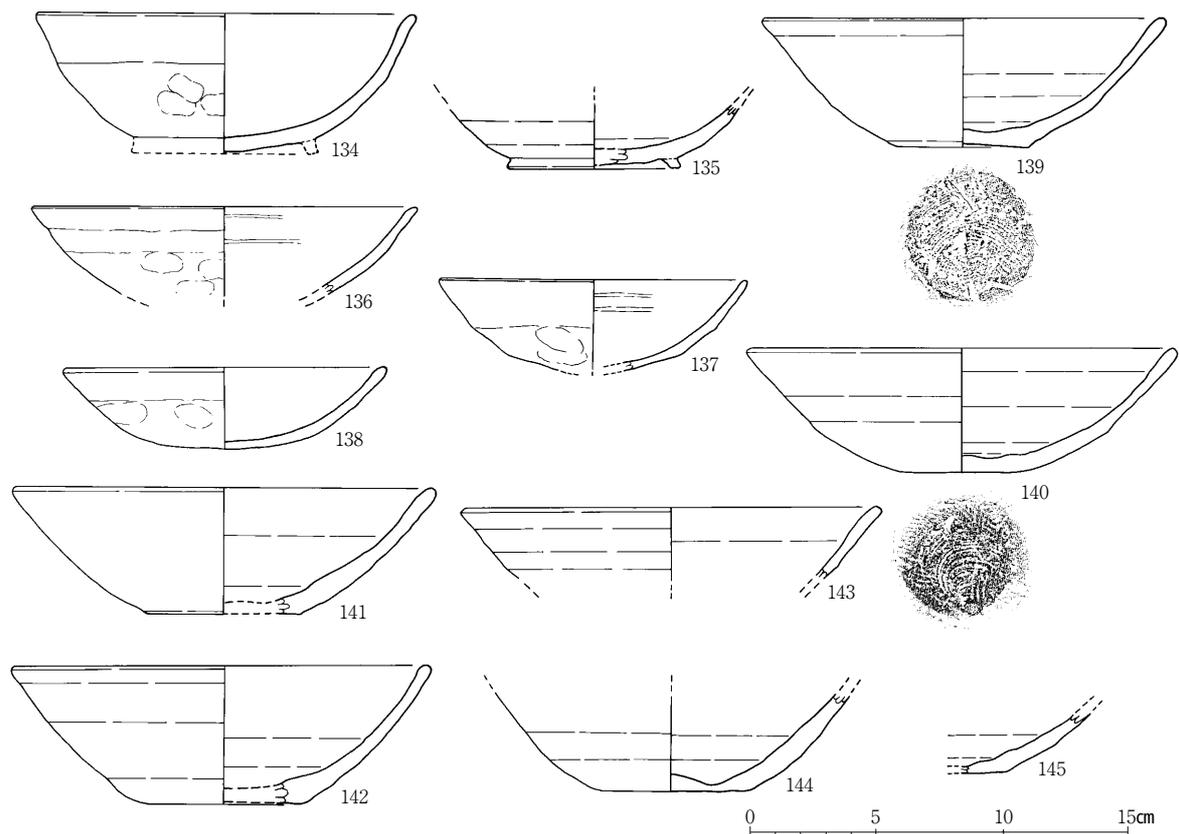


Fig.42 SS - 1出土遺物実測図2

3. 遺構と遺物

体的に摩耗するが、底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。148は円盤状高台の底部の破片で、全体の約3分の1が残存し、底径は7.0cmを測る。器面は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。149はほぼ完形で、口径15.0cm、器高4.0cm、底径6.6cmを測る。全体的に摩耗しており、調整は不明である。150は口径14.8cm、器高4.5cm、底径7.2cmを測る。全体的に摩耗しており、調整は不明である。底部の切り離しは形状からして回転系切りとみられる。151はほぼ完形で、口径14.6cm、器高4.8cm、底径6.7cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。152～155は平底で、口縁部は底部からやや内湾気味に立ち上がる。152は底部と体部の約半分が残存し、わずかに段が認められる。底径7.7cmを測る大きな杯である。胎土は粗く、

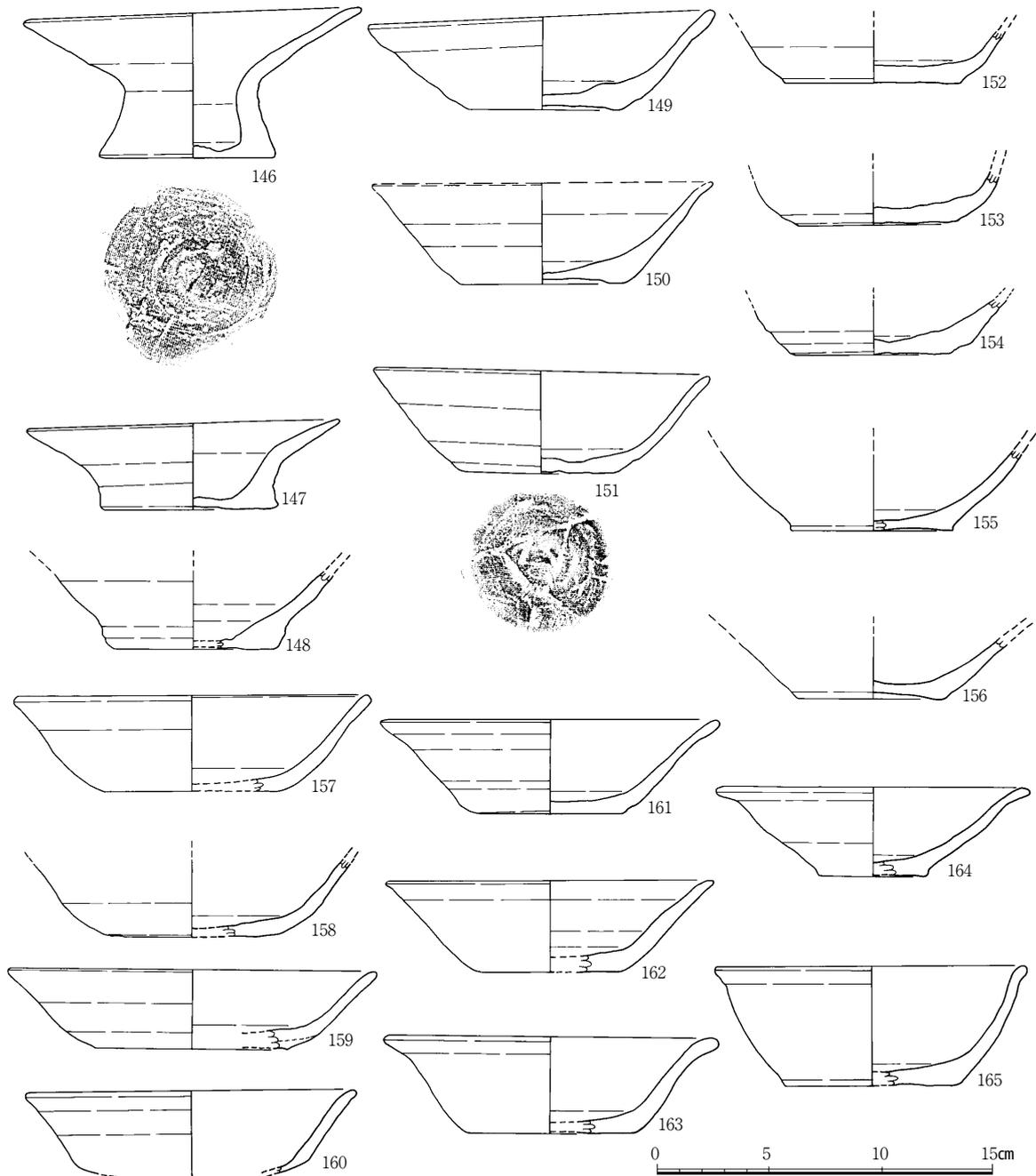


Fig.43 SS - 1出土遺物実測図3

粗粒砂を含む。焼成は良好であるが、摩耗しているため調整は不明である。底部外面は回転糸切りである。153は底部の全面と体部の一部が残存し、底径6.9cmを測る。外面は摩耗のため調整は不明であるが、内面は回転ナデ調整、内底面はヘラ磨きが見られる。底部外面は回転ヘラ切りである。焼成はやや不良で、内面は黒色を呈する。154も僅かに段差が見られる円盤状高台となり、底径6.7cmを測る。調整は回転ナデ調整で、内面と内底面はヘラ磨きが見られる。底部外面は摩耗しているが回転糸切りである。155も円盤状高台で、底径7.0cmを測る。体部は内外面ともに回転ナデ調整で、体部外面は橙色を呈する。底部外面は回転糸切り、胎土は粗く、粗粒砂を多く含む。156も円盤状高台の底部で、底径6.6cmを測る。口縁部は底部からほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。色調は内外面共ににぶい橙浅黄色を呈する。底部外面は回転糸切りである。157は底部から口縁部にかけて約6分の1が残存する。口径15.6cm、器高4.2cm、底径8.0cmを測るやや大きく扁平な杯である。焼成はやや不良で、内面はやや灰色を呈する。全体的に摩耗しているため、調整は不明である。158も157と同様の大きく扁平な杯で、径7.6cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。器面は摩耗が著しく、調整は不明である。底部の切り離しは形状からみて回転ヘラ切りとみられる。159と160も扁平な杯である。159は約3分の1が残存し、口径16.0cm、器高3.5cm、底径8.3cmを測る。口縁部は底部から外上方に外反気味に延び、端部を丸く仕上げる。器面は回転ナデ調整で、内面には炭素が吸着し黒褐色を呈する部分が見られる。焼成はやや不良である。160は口径14.2cmを測り、約4分の1が残存する。全体的に摩耗しているが、回転ナデ調整を施している。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。焼成は良い。161・162は底部から口縁部にかけてほぼ直線的に延びるもので、161は口径14.8cm、器高4.2cm、底径6.2cmを測る。器面は摩耗しており、調整は不明である。胎土はやや密で、粗粒砂を含む。162は約4分の1が残存し、口径14.2cm、器高4.1cm、底径6.0cmを測る。器面は摩耗しており、調整は不明である。胎土には細粒砂を含む。焼成はやや不良で、断面は黄灰色を呈する。163～165は口唇部を肥厚させたように太く丸く仕上げるものである。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、底部の切り離しは回転糸切りである。163は口径14.0cm、器高4.3cm、底径7.2cmを測る。胎土はやや粗く、細粒砂を含む。焼成はやや不良で、断面は黄灰色を呈する。164は口径13.2cm、器高4.0cm、底径4.6cmを測り、口縁端部が外反する。胎土はやや密で、細粒砂を含む。焼成はやや不良で、断面はにぶい黄橙色を呈する。165は口径13.6cm、器高5.3cm、底径7.6cmを測り、比較的深い杯で、体部は内湾気味に上がり口縁部に至る。底部は低い円盤状高台になる。器面は回転ナデ

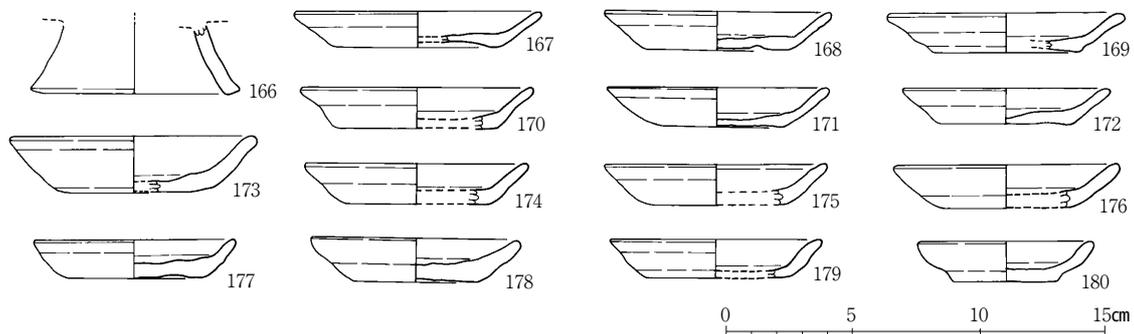


Fig.44 SS - 1出土遺物実測図4

3. 遺構と遺物

調整で、内面にナデ調整を加える。166は台付皿の脚部の破片で、約5分の1が残存し、底径7.4cmを測る。底部には八の字状に開く高さ2.8cmの高台が付く。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土はやや密で、細粒砂を含む。167～180は小皿である。167～172は、器壁が薄く、口縁部が直線的に開くものである。167は最も扁平な小皿で、全体の5分の1が残存し、口径9.4cm、器高1.4cm、底径6.4cmを測る。全体が摩耗のため調整は不明である。168は全体の4分の1が残存し、口径8.6cm、器高1.5cm、底径5.6cmを測る。全体が摩耗のため調整は不明であるが底部の切り離しは回転ヘラ切りである。169は全体の4分の1が残存し、口径8.8cm、器高1.6cm、底径5.5cmを測る。口縁部はやや肥厚しており、端部を丸く仕上げる。器面は摩耗しており調整は不明である。焼成はやや不良で、断面は褐灰色を呈する。170は全体の6分の1が残存し、口径8.6cm、器高1.6cm、底径6.2cmを測る。器面は摩耗しており調整は不明である。焼成はやや不良で、断面は明褐灰色を呈する。171は3分の2が残存するもので、口径8.4cm、器高1.6cm、底径5.4cmを測る。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。172は口径8.0cm、器高1.4cm、底径5.2cmを測る。口縁部は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。173～179は器壁が比較的厚いもので、口縁部を中心に回転ナデ調整を施し、口縁端部を丸く仕上げる。173は口径9.2cm、器高2.2cm、底径5.7cmを測るやや大きな小皿である。約半分が残存し、外底面は回転ヘラ切りである。174は口径8.6cm、器高1.6cm、底径5.6cmを測る。口縁部を中心に4分の1が残存し、底部は少ないが回転ヘラ切りが確認できる。175は口径8.6cm、器高1.6cm、底径5.2cmを測る。胎土がやや粗く、砂粒を多く含む。内外面ともに灰白色を呈し、口縁部は赤色に発色している。176は全体の6分の1が残存し、口径8.6cm、器高1.7cm、底径5.0cmを測る。底部外面は少ないがわずかに回転ヘラ切りが確認できる。177は全体の4分の1が残存し、口径7.8cm、器高1.5cm、底径5.4cmを測る。底部外面は回転ヘラ切りである。178はほぼ完形で、口径8.1cm、器高1.7cm、底径4.9cmを測る。内底面は未調整のため粘土紐巻き上げ痕が残る。底部外面は回転ヘラ切りである。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土はやや密で、焼成は良好である。179は全体の4分の1が残存し、口径8.0cm、器高1.5cm、底径5.6cmを測る。底部外面は回転糸切りとみられる。焼成はやや不良で、断面は黒褐色を呈する。180は底部が円盤状高台で、口縁部が内湾気味に立ち上がるものである。口径6.7cm、器高1.6cm、底径4.0cmを測る。全体的に摩耗しているため調整は不明であるが、内面の一部にナデ調整

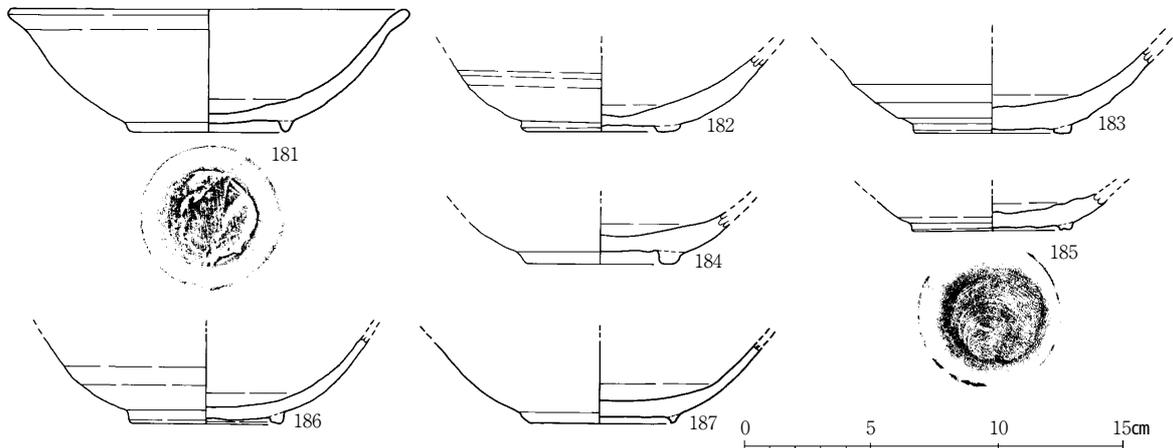


Fig.45 SS - 1出土遺物実測図5

が認められる。181～187は椀である。7点とも貼付高台で、体部は底部から内湾気味に立ち上がる。181は口径15.4cm，器高4.9cm，底径6.2cmを測り，口縁部は外反し，端部を丸く仕上げている。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で，底部の切り離しは回転ヘラ切りであり，外底面にはほぼ真下を向く高さ5mmの高台が付く。色調は赤褐色ないし浅黄橙色を呈し，胎土には赤色砂粒を含む。焼成は良い。182～187は底部の破片で，6点とも体部は内湾気味に立ち上がる。その内182～185は器壁が厚く，底部外面には扁平な高台が付く。182と183は底径6.0～6.1cmを測り，底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を加える。器面は回転ナデ調整で体部外面には回転ヘラ削り調整を加える。胎土は粗く，焼成は不良である。184は底径6.0cmを測る。器面は，摩耗しており調整は不明である。185は底径6.2cmを測る。底部の切り離しは回転系切りで，底部外面には小さな高台が付く。186は底径5.8cmを測る。器面は回転ナデ調整で，体部外面の下半に回転ヘラ削りを加える。底部の切り離しは回転系切りである。187は底径5.6cmを測る。底部の切り離しは回転系切り，底部外面には断面三角形状の小さな高台が付く。

備前焼 (Fig.46 - 188)

188は搦鉢の口縁部の破片で，口縁部をヨコナデ調整で上下に若干拡張する。内外面共に回転ナデ調整を施しており，内面には条線が残る。胎土は粗く，粗粒砂を含む。焼成はやや不良で，断面は灰赤色を呈する。

瓦質土器 (Fig.46 - 189)

189は羽釜の口縁部と胴部の破片である。口径23.0cmを測り，口縁部の外面には1.5cmの鰐が付く。内外面ともに指押えとヨコナデ調整を施している。色調は内面が灰黄褐色，外面が黒褐色を呈し，胎土はやや密で，細・粗粒砂を含む。

白磁 (Fig.46 - 190)

190は碗の底部の破片であり，約半分が残存する。底径7.2cmを測り，底部外面は削り出し高台である。体部は内湾気味に立ち上がり，下半から底部は露胎である。体部の施釉部分には大きな貫入がみられる。胎土はやや粗く，裂孔が多くみられる

青磁 (Fig.46 - 191)

191は皿の口縁部の破片で，口径10.6cmを測る。体部中位で屈曲し，口縁部は外上方を向く。口縁部を中心に0.1～0.2mmのオリーブ灰色釉を施し，貫入がみられる。胎土はやや密だが，円・裂孔が多くみられる。

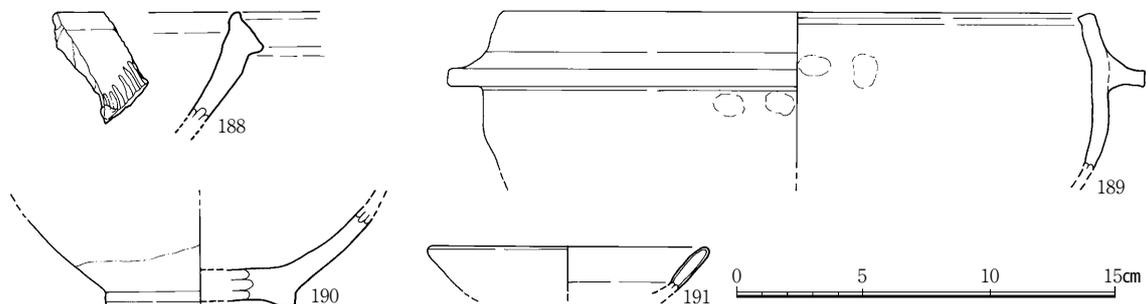


Fig.46 SS - 1出土遺物実測図6

3. 遺構と遺物

(2) 近世

遺構は調査区西部に位置し、その大半は畝状遺構で、土坑1基、溝状遺構2条も畝状遺構に関連するものとみられる。これら遺構の北側は後世の掘削を受けていた。

土坑

SK - 17

調査区西部で検出した舟形状の土坑で、SK - 9、SD - 11・12を切っていた。長辺4.50m、短辺0.80m、深さ7～10cmを測る。長軸方向はN - 76° - Wを示す。断面形は皿状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトで炭化物を少量含んでいた。出土遺物には瓦器片4点、土師質土器片20点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

溝跡

SD - 18

調査区西部で検出した南北溝で、SD - 12の西側に位置する。幅23～42cmで、深さは北側で9cm、南側で7cmを測り北に向かって傾斜し、11.20mを検出した。主軸方向はN - 8° - Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトで炭化物を少量含んでいた。出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片16点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 19

調査区西部で検出した南北溝で、SD - 18の西側で平行して延びる。幅30cm前後、深さは北側で11cm、南側で10cmを測り、北に向かって傾斜し、10.20mを検出した。主軸方向はN - 8° - Wを示す。断面形は箱形を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトで炭化物を少量含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点、常滑焼片1点、砥石1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

畝状遺構

調査区西部で後世の削平の影響を受けているものの平行して延びる浅い溝状遺構を検出した。遺構の埋土は暗灰黄色粘土質シルトを基調とし、砂の堆積や水路としての痕跡がみられないこと、同方向に同間隔で検出されていることからはたけの畝間の痕跡と考えられる。このことから畝状遺構とした。これら畝状遺構は大きく4グループに分けることができ、かつ切り合っていることから時期差が看守される。また、これらの畝状遺構の北東でみられる浅い溝状の遺構も同様のものとみられるが、大半が削平されており判然としない。

SU - 1 (Fig.47)

調査区西部で検出した6本単位の南北方向の畝状遺構で、1.30～2.00m間隔に配置されている。幅20cm前後、深さ5cm前後を測り、3.00～6.00mを検出した。主軸方向はN - 0°～4° - Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片3点、土師質土器片16点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SU - 2 (Fig.47)

調査区西部で検出した3本単位の南北方向の畝状遺構で、1.80～2.20m間隔となっている。幅18cm前後、深さ4cm前後を測り、2.20～4.20mを検出した。主軸方向はN - 5°～10° - Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点がみられ

たが、復元図示できるものはなかった。

SU - 3 (Fig.47)

調査区西部で検出した4本単位の東西方向の畝状遺構で、0.70~1.20m間隔となっていた。幅20~30cm前後、深さは5cm前後を測り、8.70mを検出した。主軸方向はN - 66°~76° - Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は暗灰褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片7点がみられたが、復元図示できなかった。

SU - 4 (Fig.47)

調査区西部で検出した2本単位の東西方向の畝状遺構で、2.50m間隔となっていた。幅は20~30cm前後、深さ5cm前後を測り、6.35mを検出した。主軸方向はN - 84°~87° - Wを示す。断面形は皿状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片4点、土師質土器16点がみられたが、復元図示できなかった。

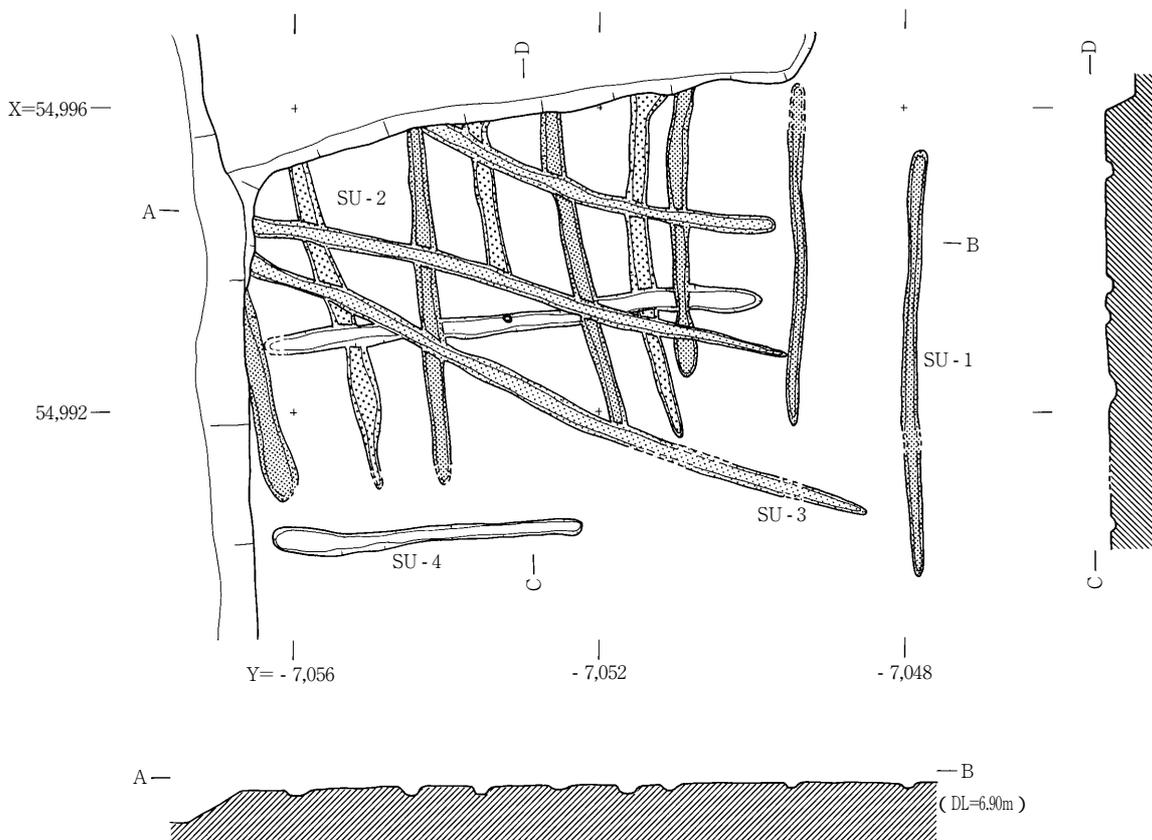


Fig.47 SU - 1~4(S=1/100)

(3) 近代

近代の遺構としては暗渠と中世の遺物包含層の削平に伴うとみられる部分(SX - 1)を検出した。暗渠は湿田を乾田化し、食糧増産することを目的に造られた遺構で10条確認され、表土層直下から掘削されており、断面形はすべて箱形を呈する。

3. 遺構と遺物

溝跡（暗渠）

SD - 20

調査区東端で検出した南北の暗渠(N - 12° - W)で、SD - 21に繋がる。幅15~32cm、深さ13cmを測り、11.00mを検出した。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片2点、土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。なお、暗渠施設として竹管も出土している。

SD - 21

調査区東部で検出した東西方向の暗渠(N - 78° - W)で、SD - 20に直行する。幅30cm前後、深さ42cmを測り、33.50mを検出した。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には土師器1点、土師質土器片7点、染付片1点がみられ、土師器(192)1点が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.48 - 192)

192は無頸壺で、口径11.2cm、胴部最大径15.4cmを測る。胴部は丸く、小さく屈曲して僅かな口縁部となる。口縁部はヨコナデ調整を施し、内面は8~10本単位のハケ調整、外面はヨコ方向のタタキ目が残る。胎土は粗く、焼成はやや不良で、内面は黒色を呈する。

SD - 22

調査区東部で検出した東西の暗渠(N - 81° - W)で、SD - 21に平行し、両端は調査区外に延びる。幅34cm前後、深さ28cm前後を測り、42.00mを検出した。埋土は暗灰黄色粘土質シルトないし粘土となっていた。出土遺物には土師質土器片11点がみれたが、復元図示できたものはなかった。

SD - 23

調査区東半で検出した東西の暗渠(N - 81° - W)で、SD - 22に平行し、東端は調査区外に延びる。幅27cm前後、深さ40cm前後を測り、39.00mを検出した。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器26点、鉄滓1点がみられ、土師質土器(193~195)3点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.48 - 193~195)

193・194は杯の底部である。193は約6分の1が残存し、底径7.4cmを測る。底部は0.8cmの段がある円盤状高台を有し、外面は回転ヘラ切りである。器面は回転ナデ調整で、内底面にはナデ調整を加える。焼成はやや不良で、断面は灰白色~灰色を呈する。194は底径6.3cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロク口成形であるが、全体的に摩耗しているため調整は不明である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は粗く、焼成はやや不良で断面は灰色を呈する。195は椀であり、約半分が残存し、口径16.0cm、器高5.0cm、底径5.8cmを測る。口縁部は底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部で外反する。底部には逆台形の高台が付く。成形は粘土紐巻き上げロク口成形で、器面には回転ナデ調整を施し、体部外面には回転ヘラ削りを加える。色調は、内面が浅黄橙色、外面が浅黄橙色ないし赤褐色、断面が灰白色を呈する。胎土は精良で、焼成は比較的良い。

SD - 24

調査区中央部で検出した東西の暗渠(N - 86° - W)で,SD - 23に平行し,東端は調査区外に延びる。幅30cm前後,深さ40cm前後を測り,26.90mを検出した。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片1点,土師質土器片1点,青磁片1点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SD - 25

調査区中央南部で検出したL字状の暗渠で,SD - 24に繋がる南北に延びる部分(N - 34° - W)は直行せず,東西に延びる部分(N - 87° - W)はSD - 24とほぼ平行し調査区外に延びる。幅30cm前後,深さ44cm前後を測り,12.60mを検出した。埋土は暗灰色粘土質シルトであった。出土遺物には常滑焼片1点がみられたが,図示できなかった。

SD - 26

調査区西部で検出した東西の暗渠(N - 86° - W)で,SD - 24に平行し,東端は調査区外に延びる。幅34cm前後,深さ40cm前後を測り,19.50mを検出した。埋土は暗灰色粘土質シルトで炭化物を少量含んでいた。出土遺物には弥生土器片1点,瓦器片5点,土師質土器片6点,近世磁器片1点,鉄片がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SD - 27

調査区西部で検出した東西の暗渠(N - 84° - W)で,SD - 26に西端は後世の整地等による削平のため切られており,東端は調査区外まで延びる。幅30cm,深さ38cm前後を測り,17.20mを検出した。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点,白磁片1点,染付片1点,瓦がみられ,SD - 28と接する所で出土した瓦(196)1点が図示できた。

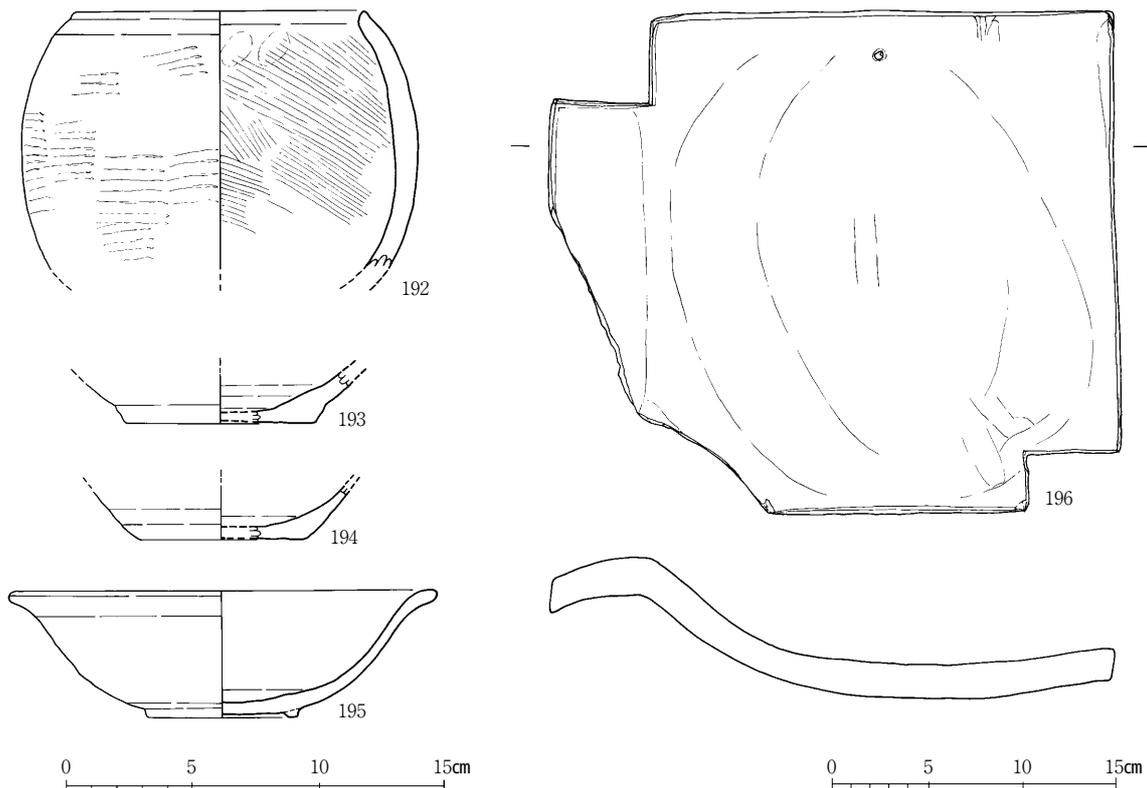


Fig.48 SD - 21・23・27出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

出土遺物

瓦 (Fig.48 - 196)

196は棧瓦で、一部は欠損しているがほぼ完形で、全長29.6cm、全幅26.3cm、全厚1.6～1.9cmを測る。

SD - 28

調査区西端で検出した南北の暗渠(N - 6° - W)で、SD - 27に直行して繋がる。南端は調査区外に延びる。幅30cm、深さ40cmを測り、8.50mを検出した。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には青磁片1点、土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 29

調査区西端で検出した東西の暗渠(N - 84° - W)で、SD - 27と平行し、両端が調査区外へのびる。幅33cmで、深さ40cm前後を測り、6.90mを検出した。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。基底面に竹管が認められた以外に遺物が出土しなかった。

性格不明遺構

SX - 1

調査区の西側北端で検出した不整楕円形とみられる遺構で、半分以上は調査区外に延びる。後世の整地等により二次堆積したもので古代から近代の遺物がみられた。長径9.15m、短径7.00m以上、深さ28cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は大きく2層に分層でき、上層が黒褐色粘土質シルトに暗灰黄色粘土質シルトや円礫を含むもの、下層が黄褐色粘土質シルトに角礫を多く含むものであった。出土遺物には須恵器11点、瓦器12点、土師質土器13点、東播系須恵器4点、青磁14点、瓦質土器1点、近世陶磁器(肥前系含む)22点、土製品2点、石製品1点がみられ、須恵器(197)1点、瓦器(198)1点、土師質土器(199～205)7点、東播系須恵器(206～208)3点、備前焼(209)1点、青磁(210・211)2点、肥前系陶器(212)1点、土製品(213・214)2点、石臼(215)1点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.49 - 197)

197は杯の底部である。約4分の1が残存し、底径7.2cmを測る。底部外面から内底面まで回転ナデ調整を施し、外底面には断面三角形の高台を貼付する。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を加える。色調は内外面とも灰白色で、胎土はやや密だが、粗粒砂を含む。焼成はやや不良である。

瓦器 (Fig.49 - 198)

198は椀の底部から体部の破片で、底径3.4cmを測る。体部は底部から内湾気味に上がる。底部外面には八の字状をなす断面三角形の高台が付く。体部外面には指押えの痕が残る。色調は、外面が褐灰色、内面が灰色を呈する。胎土はやや粗く、細粒砂を多く含む。焼成はやや不良である。

土師質土器 (Fig.49 - 199～205)

199～201は杯で、成形は粘土紐巻き上げロク口成形である。199は全体の3分の1が残存し、口径15.0cm、器高4.2cm、底径6.6cmを測る。口縁部は底部から直線的に延び、端部を丸く仕上げる。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は密で、砂粒も少ない。焼成は良好である。200は底部から体部の破片で、底径6.8cmを測る。体部は底部からやや外反気味

に立ち上がる。体部外面下半には回転ヘラ削りがみられる。底部外面は摩耗のため調整は不明である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は比較的密で、細砂粒を僅かに含む。焼成はやや不良である。201も底部から体部の破片で、底径7.2cmを測る。体部は底部から外上方にほぼ直線的に延びる。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや粗く、粗粒砂を多く含む。焼成はやや不良である。202~205は小皿で、成形は粘土紐巻き上げロク口成形で、器面には回転ナデ調整を施す。202は口径8.7cm、器高1.6cm、底径5.4cmを測り、口縁部は底部から外上方に短く延びる。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。203は口径8.5cm、器高1.7cm、底径5.7cmを測る。口縁部は短く内湾気味に延びる。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、焼成は良い。204は口径8.0cm、器高1.7cm、底径5.5cmを測る。口縁部は底部から直線的に短く延び、端部を細く仕上げる。器面は摩耗しており調整は不明である。色調は内外面とも濃い橙色を呈する。205は歪みがあるがほぼ完形で、口径7.0cm前後、器高1.5cm、底径5.0cm前後を測る。口縁部は底部から直線的に短く延び、端部を丸く仕上げる。底部外面も摩耗するが、形状から見て回転ヘラ切りと考えられる。

東播系須恵器 (Fig.49 - 206 ~ 208)

206~208は片口鉢の破片である。206は口縁部の破片で、端部を上下に拡張する。色調は灰黄色を呈し、胎土は粗く、細粒砂を多く含む。焼成はやや不良である。207と208は底部の破片で、平底である。207は底径19.5cmを測る。内面は回転ナデ調整で、体部下半には回転ヘラ削りを施す。底部外面は回転ヘラ切りとみられる。胎土は細粒砂を含み、焼成は良好である。208は約3分の1が残存

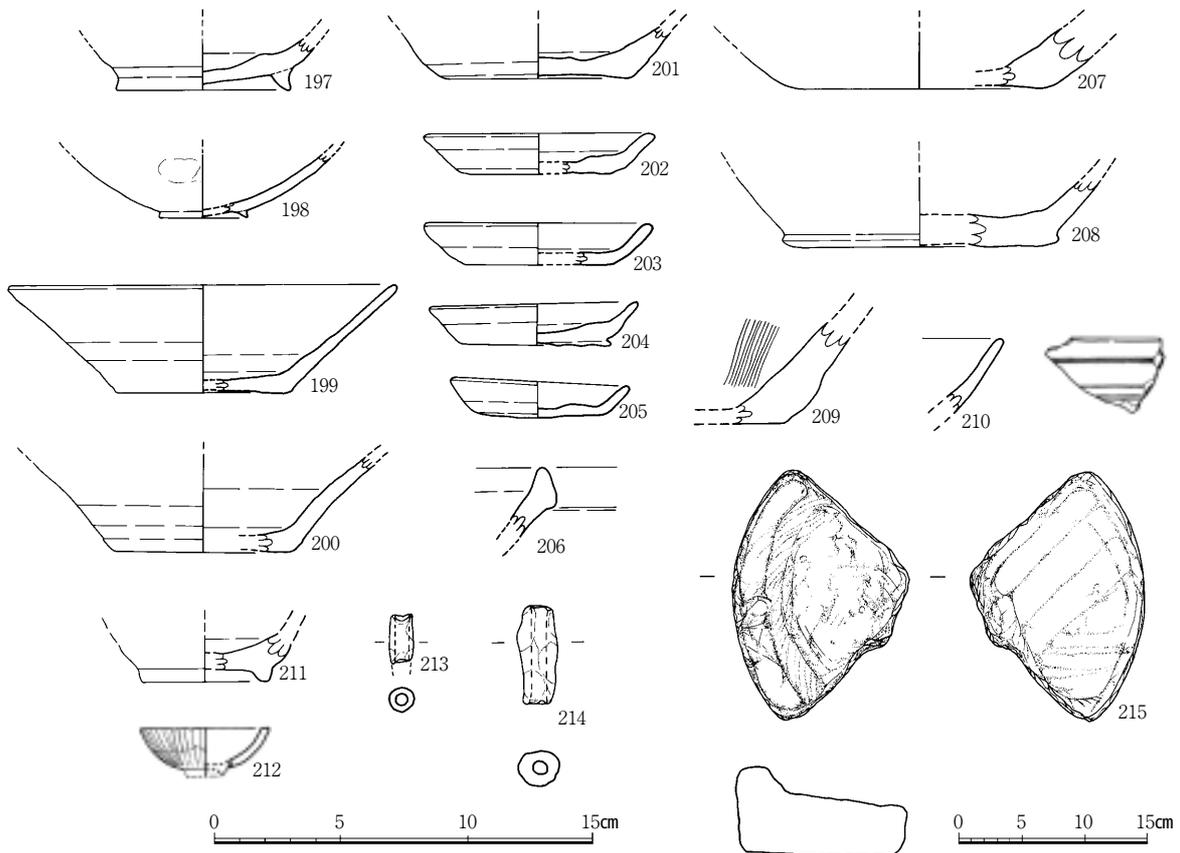


Fig.49 SX - 1出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

し、底径は11.0cmを測る。器面は摩耗しており、調整は不明である。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土は比較的密であるが、粗粒砂を含む。焼成は不良である。

備前焼 (Fig.49 - 209)

209は播鉢の底部の破片である。内面には10本の条線が残る。色調は内外面とも明赤色を呈し、胎土は粗く、粗粒砂を多く含む。

青磁 (Fig.49 - 210・211)

210は碗の口縁部の破片である。外面には沈線状の釉溜りがみられる。焼成は不良で、オリーブ色の釉は薄く、器面の荒れが激しい。胎土は精緻で、剥離面も滑らかである。211は小碗の底部で、約半分が残存する。底径は4.9cmを測り、高台脇から見込にかけて0.1mmの薄い釉を施す。施釉箇所には貫入がみられる。置付には砂が付着し、高台内は露胎である。焼成はやや不良である。

肥前系磁器 (Fig.49 - 212)

212は口縁部の破片であり、型押し成形による菊花形の紅皿である。口径5.0cmを測り、約5分の1が残存する。口縁部から内面にかけて施釉され、体部外面以下は露胎である。

土製品 (Fig.49 - 213・214)

213・214は管状土錘の破片である。214は紡錘形で、両端が欠ける。残存長3.9cm、全厚1.5cm、全幅1.5cm、孔径0.6cmを測る。215は円筒形で、両端が欠けている。残存長2.0cm、全厚1.0cm、全幅1.0cm、孔径0.5cmを測る。表面は摩耗しているため、調整は不明である。

石製品 (Fig.49 - 215)

215は石臼の上臼部分で、約4分の1が残存する。径28cm、厚さ7.1cmを測る。摺目は摩耗するが、僅かに3～4本単位で斜行する条線が2カ所認められる。

第 章 林口遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

林口遺跡は散布地として従前より周知されていた遺跡であり、平成7年度に実施した事前の確認調査によって初めて遺構が確認された。今回の調査箇所は周知されていた遺跡範囲の南端部分であり遺跡の拡がりを把握するうえで重要な意味を持つ調査であった。その結果、南西端の調査区(C区)で縄文時代後期の遺構、遺物が確認され、遺跡範囲はさらに南東に拡大する可能性が強まった。一方、土層の堆積状態からみると中近世の遺構が検出されたA区と縄文時代の遺構が検出されたC区とでは立地を異にする可能性も考えられ、今後の周辺部の調査によって確認する必要がある。

なお、平成8年度時期をほぼ同じくして実施された市道改良工事に伴う発掘調査¹⁾では弥生時代後期前半の土坑1基、12世紀後半から13世紀にかけての掘立柱建物跡4棟、塀又は柵列跡1列、溝跡1条、ピット46個などを確認している。調査箇所は林口遺跡の北側に当たり、平成11年度の調査区A・B区とC・D区の間である。

調査は、A区を平成8年度、B・C区を平成10年度にそれぞれ実施した。平成8年度の発掘調査は高知県では最初の工事請負方式で行い、平成10年度の発掘調査は調査面積が限られていたため直営方式で実施した。調査期間は、A区が平成8年11月19日から平成9年2月18日、B区が平成10年11月16日から11月30日、C区が11月16日から12月4日であった。なお、A区の調査は工事請負方式であったため遺物包含層直上までの機械掘削期間(10月15日から10月21日)は調査日誌抄では割愛している。

(2) 調査日誌抄

A区 1996年11月19日～1997年2月18日

11.19 本日から遺物包含層の人力掘削を開始する。後世の削平の影響のため遺物包含層が遺存していたのは西側約三分の一であった。

11.20 引き続き遺物包含層の人力掘削を行い、並行して遺構検出も実施する。

11.21 引き続き遺物包含層の人力掘削並びに遺構検出を行う。ピットを中心に遺構を検出する。

11.22 本日も遺物包含層の掘削と遺構検出を行う。現在の水田の境で地形の落ち込みが認められる。

11.26 先週に引き続き遺物包含層の掘削と遺構検出を行う。

11.27 朝方雨が降ったため午後から作業を行う。作業内容は昨日と同じであった。

11.28 埋蔵文化財センター職員研修のため現場作業は中止とした。

11.29 遺物包含層の掘削と遺構検出を行う。午後は雨天のため現場作業を中止した。

12.1 A区西側の宅地部分の確認調査を行う。本日の段階では明確な遺構面は確認できない。A区は引き続き遺物包含層掘削並びに遺構検出を行う。

12.2 A区西側の宅地部分の確認調査では明確な遺物包含層並びに遺構は確認できず、調査を完了する。A区は引き続き遺物包含層の掘削並びに遺構検出を行う。調査区西側で比較的幅の広い溝跡を確認する。

12.3 遺物包含層の掘削並びに遺構検出を行う。

12.4 遺物包含層の掘削はほぼ完了し、遺構検

1. 調査の経過

出に主力を移す。

12.5 本日は雨天のため現場作業は中止した。

12.6 遺構検出を主に行う。検出遺構配置図の作成も行う。

12.9 昨日に引き続き遺構検出並びに遺構検出配置図を作成する。

12.10 本日は雨天のため現場作業は中止した。

12.11 遺構検出並びに検出遺構配置図の作成を行う。

12.12 引き続き遺構検出並びに検出遺構配置図を作成する。

12.13 引き続き遺構検出並びに検出遺構配置図を作成する。

12.16 残りの遺構検出並びに検出遺構配置図を作成する。

12.17 本日は雨天のため現場作業は中止した。

12.18 明日の遺構検出状態の航空撮影の準備を行う。

12.19 遺構検出状態の写真撮影をローリングタワーと産業ヘリコプターを使用して行う。

12.20 遺構の調査を西側から開始する。まず、暗渠の調査から行う。

12.24 調査区中央部で検出している暗渠の調査を主に行う。また、調査区西側で検出した2条の溝跡(堀跡)の深さの確認を行う。東側の溝跡(SD-1)は幅1.8m、深さ約0.8m、検出長約30m、西側の溝跡(SD-2)は幅2~3m、深さ約1m、検出長約30mであった。2条とも本調査区を中心となる遺構と考えられる。

12.25 暗渠の調査を主に行う。また、調査区全体図の平板測量と北壁セクションの実測を行う。

12.26 暗渠の調査を完了し、西側からピット等の遺構の調査に移る。井戸跡(SE-2)は検出面から約30cm掘り下げた段階で石組の輪郭を確認する。本日で年内の調査は終了する。

1.6 遺構の調査を引き続き行う。SE-2は検出面から約1m、石組頂部から約60cmのところから桶側を検出する。井戸周辺の遺構は近世のものが多い

ようである。

1.7 井戸跡、土坑、溝跡、ピット等の調査を行う。SE-2は2段の桶側を確認した段階で、上からの調査をひとまず置き、半裁した際に再調査することとした。ピットの中には石の礎板を置く柱穴も見られた。

1.8 西側の調査と主となる溝跡(堀跡)の調査を開始する。礎板を有する建物は梁間が広く、遺物と埋土からみて近世のものとみられる。西側の溝から近世の遺物に混じって完形に近い弥生土器の壺が出土する。

1.9 調査区南西部の遺構の調査を主に行う。2条の溝跡(堀跡)以西の遺構の調査に主力を注ぐ。

1.10 調査区西側の調査を引き続き行う。

1.13 2条の溝(SD-1・2)の調査を主に行う。

1.14 昨日に引き続き2条の溝跡の調査を主に行う。また、土坑墓の調査も行い、桶板と歯を検出する。

1.15 引き続き2条の溝跡の調査を行う。

1.16 引き続き2条の溝跡の調査を行う。

1.17 東側の溝跡はセクション並びに基底面の状態からほぼ同一位置で掘り代えが行われたことを確認する。

1.20 引き続き2条の溝の調査を行い、西側の溝跡はほぼ完掘し、主力を東側の溝に移す。

1.21 東側の溝跡の調査を主に行う。

1.22 溝跡の残りの調査を行い、東側の調査に移る。

1.23 調査区南側で一段高く残っていた部分の



Fig.50 現地説明会1

調査を完了し、北側の調査に移る。一段高くなった部分は比較的遺構の残りが良い。

1.24 雨天のため現場作業は中止した。

1.27 東側の遺構の調査を行う。東側は西側に比べ地形が火渡川に向かって下がっていることと近世以降の削平によって遺構密度が低い。

1.28 東側の遺構の調査を行う。井戸跡(SE - 1)の調査を開始し、河原石を小口積みした石組を確認する。

1.29 井戸跡を含めた東側の遺構の調査を引き続き行う。

1.30 引き続き東側の遺構の調査を行う。井戸跡基底部から桶側の井筒を確認する。

1.31 引き続き東側の遺構の調査を行う。

2.1 引き続き東側の遺構の調査を行う。

2.3 残りの遺構の調査を行う。

2.4 完掘状態の写真撮影に向けての調査区の清掃作業並びに遺構の再精査を行う。

2.5 午前中残りの清掃作業を行い、午後から完掘状態の写真撮影をローリングタワーから行う。

2.6 午前中記者発表を行ったうえで午後から産業ヘリコプターで空撮を行う。

B・C区 1998年11月16日～12月4日

11.16 B・C区の機械掘削を始める。B区は第Ⅱ層上面、B区は第Ⅰ層上面まで掘削し、並行して遺構検出を行う。ハウス、倉庫、やぐら等を設置し、安全柵をはる。

11.17 雨のため作業中止。基準点を設置する。

11.18 引き続きB・C区の機械掘削、遺構検出を行う。

11.19 B区は調査区北部の機械掘削、遺構検出を行う。B区は機械掘削を終了し、遺構検出とグリッド杭の設置を行う。

11.20 B区は調査区東部の機械掘削、遺構検出を行う。B区は遺構検出を終了し、遺構検出状態の写真撮影と遺構配置図の作成をする。

11.24 B区は調査区南部の機械掘削、遺構検出を終了する。遺構検出状態の写真撮影、遺構配置図の

2.7 補足測量を行うと共に実機による航空写真測量を実施する。

2.8 現地説明会を実施する。約80名の参加があった。

2.10 補足測量を行う。

2.11 補足測量を引き続き行う。

2.12 補足測量を引き続き行う。

2.13 残っていた補足測量を行い、完了する。

2.17 2基の井戸跡の半裁を行う。SE - 1は石組井戸で井筒には円形桶側を使用していた。SE - 2は上部のみ石組で主体は円形桶側を6段積重ねていた。

2.18 断面測量後、桶側を取り出す。本日で、A区の発掘調査を完了する。



Fig.51 現地説明会2

作成、調査区全体の平板測量を行い、遺構の調査を始める。C区は遺構の調査を始める。

11.25 B区・C区共に引き続き遺構の調査を行う。

11.26 B区は遺構の調査を終了し、精査を始める。C区は遺構の調査、精査を終了し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。

11.27 午前のみ調査を行う。B区は精査を終了し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。平面測量、土層断面図の実測を始める。C区は平面測量、レベル測量、土層断面図の実測を行う。

11.30 B区は引き続き平面測量、土層断面図の実測を行う。C区は下層確認のため、機械掘削を行い、第Ⅰ層上面、第Ⅱ層上面で遺構検出を行うが遺構は検出されなかった。

2. 調査の概要

12.1 B区はレベル測量を行う。C区は引き続き下層確認を行い、第Ⅰ層上面で遺構検出を行うが、遺構は検出されなかった。

12.2 B区は土壌サンプルを採取し、調査をすべて終了する。C区は引き続き下層確認を行い、第Ⅱ層上面で遺構検出を行うが、遺構は検出されなかった。

12.3 C区は調査区の東部にトレンチを設定し、

第Ⅳ層(地山)上面まで掘削する。中央部に土層確認のためトレンチを設定する。また、第Ⅰ層上面で確認していた縄文時代後期の土坑の調査を行う。

12.4 C区は第Ⅰ層上面で遺構検出を行い、ピットを多数確認する。遺構検出状態の写真撮影、遺構配置図の作成、遺構の調査、遺構完掘状態の写真撮影、トレンチの土層断面図の実測、平板測量を行い、調査をすべて終了する。

2. 調査の概要

調査区は、市道によってA～C区に分れる。調査年度は土地の買収の関係上、A区が平成8年度、B・C区が平成10年度であった。平成8年度のA区の調査では多数の遺構が検出され、南に隣接するB区にも同様の遺構の存在が想定されたが、市道を境に土地が落ち込んでいることが判明し、予想される遺構は検出されなかった。また、市道を境とするC区では微高地状を呈し、中世の遺構を始めとして土佐市バイパスの調査では初めての縄文時代の遺構を検出することができた。この微高地がどのような範囲に広がっているか現状では判然とせず、A区南東部との繋がりまたは単独の微高地を形成しているかは周辺の今後の調査結果を待たなければならないであろう。なお、平成8年度にA区西側の確認調査を実施したが、低湿地状態を呈しており、A区で確認されたような遺物包含層や遺構は検出されなかった。

発掘調査面積は、遺構面が1面であったA区が2,645㎡、B区が519㎡、遺物包含層が5枚、遺構面が2枚あったC区が総合で385㎡であった。

(1) A区

遺構検出面は、調査区西部が標高約7.0m、東部が標高約6.7mとなっており、西部から東部の火渡川に向かって比高差約30cmで傾斜している。基本的には自然地形の傾斜に起因するものであろうが、調査区北壁の土層断面には近世以降の削平等による影響が少なからず見受けられた。また、調査区西部から南部は中央部から東部に比べ現況でも標高が10cmほど高くなっており、その部分には中世の遺物包含層が認められたのに対し、遺構検出面の標高の低い調査区中央部から東部にかけては近世の遺物包含層は認められたものの中世の遺物包含層は確認できず、近世段階に削平されたものと考えられる。さらに、井戸跡(SE-1)周辺では、近世の遺物包含層も削平されており、遺構の遺存状態は良くなく、特に調査区中央部から東部にかけての中世の遺構については削平の影響を少なからず受けているものと考えられる。

層序

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 黄褐色(2.5Y 6/8)粘土質シルト層

第Ⅲ層 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土質シルト層

第 層 灰黄褐色(10YR 4/2)粘土質シルト層

第 層 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土質シルト層

層位中遺構が確認できたのは、第 層上面であった。

第 層の表土層は、現代の耕作土であり、厚さ20~25cmを測る。現況は水田であった。

第 層は第 層に伴う床土で、鉄分の沈殿したものであり、調査区西部を中心に認められた。

第 層は調査区中央部を除く西部と東部で認められた近世の遺物包含層である。

第 層は標高の高い調査区西部でのみ認められた弥生時代から16世紀の遺物までを含む遺物包含層であり、西端に近い部分では第 層ないし第 層直下で検出し、東に行くに従って上層に近世の遺物包含層が認められるようになり溝跡付近では消滅していた。

堆積層出土遺物



Fig.52 林口遺跡の範囲と調査対象区域図(S=1/2,500)

2. 調査の概要

第 層出土遺物

本層には、遺物包含層である第 層が削平され、遺存していない部分が多かったことから破片ではあるが比較的多くの遺物が混入していた。遺物は古代の須恵器から19世紀代の陶磁器まであり、12世紀後半から13世紀の磁器類と16世紀及び17世紀の陶磁器類の出土頻度が高く、遺構の時期を推測さす。また、本遺跡が従前から周知されていたのはこのような状況によるものと考えられる。

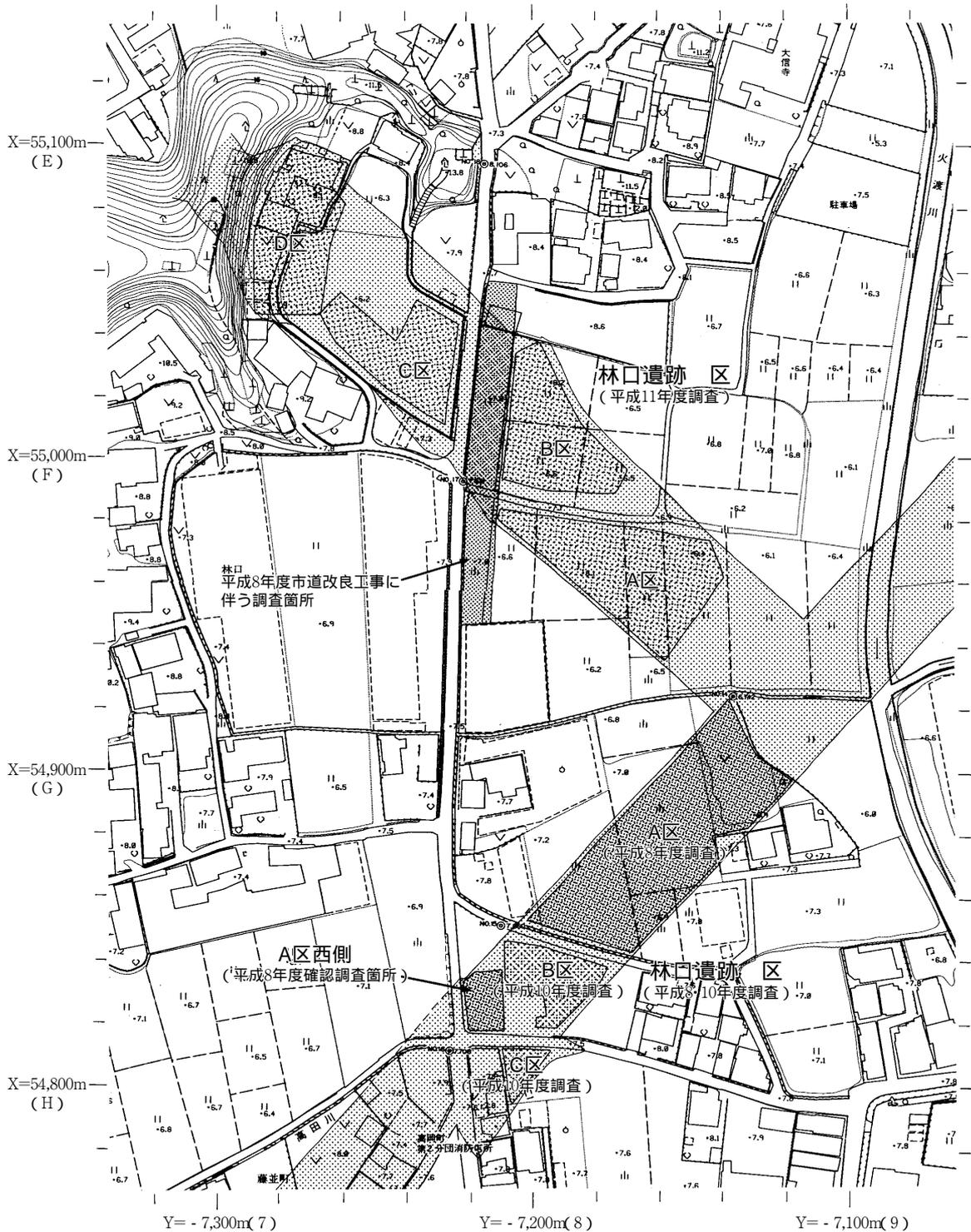


Fig.53 林口遺跡調査区設定図(S=1/2,000 X 公共座標値の後のカッコはグリッド番号を示す。)

須恵器 (Fig.57 - 1)

1は杯底部の破片である。底部は平らで、端部に真下を向く高さ7mmの高台が付く。体部は斜め上方を向く。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整、他は回転ナデ調整で内底面にはナデ調整を加える。色調は内外面とも灰白色を呈すが、焼成は比較的良好。胎土には白色砂粒を含む。

緑釉陶器 (Fig.57 - 2)

2は小杯の底部で、約三分の一が残存する。底部は平らで体部は斜め上方を向く。底部外面は静止糸切りで、体部内外面には緑釉を施し、濃緑色を呈する。胎土は精良で、焼成は良好。

灰釉陶器 (Fig.57 - 3)

3は皿口縁部の破片である。口縁部は斜め上方を向く体部から外反する。器面には灰釉をハケヌリし、内面がオリブ黄色、外面が浅黄色を呈する。胎土は精良で0.1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好。

備前焼 (Fig.57 - 4・5)

4は壺口縁部の破片である。口縁部は肩の張った胴部から屈曲し、短く外傾する。口唇部はヘラ状工具で外側に折り、輪花状をなす。器面は回転ナデ調整を施す。断面は灰白色で、内面は暗赤褐色、外面は赤褐色を呈する。胎土には黒色砂粒を多く含み、焼成は良好である。5は擂鉢で、口径は29.3cmを測り、底部を除いた約三分の一が残存する。体部は外上方に上がり、口縁部は肥厚し、外面には2条の凹線を巡らす。内面には10本単位の条線をほぼ全面に施す。内外面ともほぼ赤褐色を

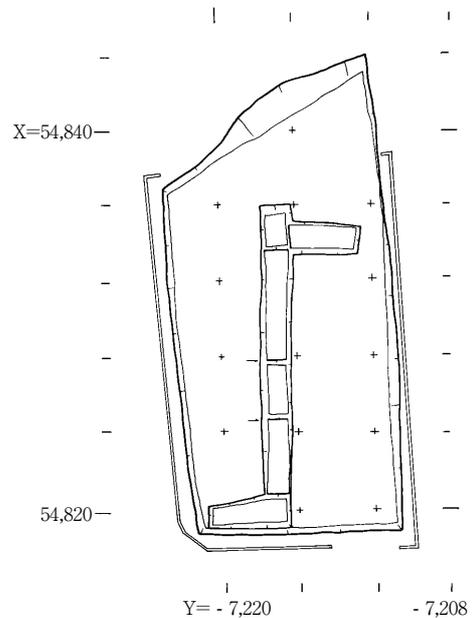


Fig.54 A区西側 (S = 1/400)

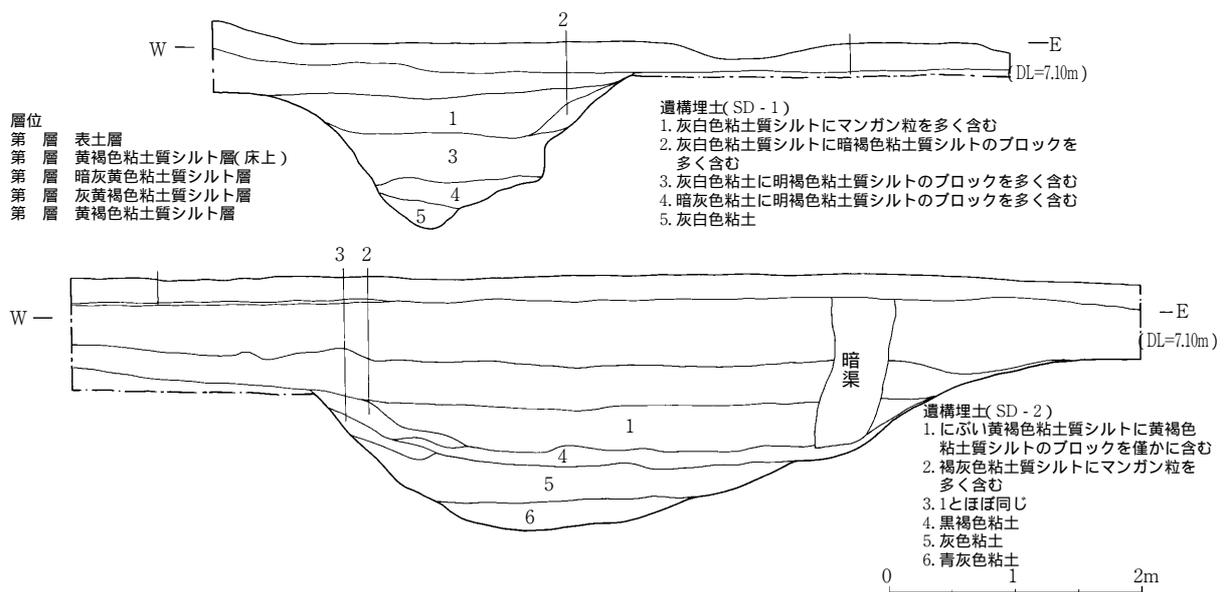


Fig.55 A区北壁セクション図 (SD - 1・2付近)

2. 調査の概要

呈す。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

白磁 (Fig.57 - 6 ~ 17)

6 ~ 11は碗である。6は口縁部の破片で、内湾する体部からそのまま上がり、端部を短く摘み出す。内面には片彫りとみられる文様が2条施される。内外面とも灰白色を呈する。7・8とも口縁部の破片で、8は口径15.2cmを測る。2点とも口縁部は外上方を向き、端部を短く摘みだす。7の内面には1条の沈線が巡る。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には黒色砂粒を多く含む。焼成は良好である。9 ~ 11は底部の破片である。9は高台をアーチ型に削り出しており、畳付に砂が付着する。全面に白色釉を施し、貫入がみられる。10は削り出し高台の底部と内湾気味に上がる体部が残る。内面には白色釉を施し、底部と体部の境に1条の沈線が巡る。体部外面は回転ヘラ削り調整を施す。底部外面は畳付を中心に摩滅する。11は削り出し高台となった底部で、内面には灰白色ないし淡緑色の釉を施す。外面は無釉である。12 ~ 16は皿で、12は外反する口縁部の破片である。残部には灰白色の釉を施し、口唇部は釉ハゲ(口禿)が行われる。13は口径12.8cm、器高3.3cm、底径6.0cmを測る。底部は削り出し高台で、高台は真下を向く。体部は内湾して上がり、口縁部で外反する。内面から畳付にかけて灰白色の釉を施す。14は粗製白磁の口縁部から体部の破片である。体部外面は回転ヘラ削りとなり、口唇部から内面にかけてやや緑色のかかった灰白色の釉を施す。15・16は溝縁皿で、2点とも体部から口縁部の破片である。15は胎土に黒色細粒を多く含む粗製の白磁で、口径14.4cmを測る。口縁部は斜め上方に延びる体部から屈曲し、端部で上方を向く。全面に淡灰白色の釉を施す。16も15とほぼ同形態のもので、口唇部から内面にかけて灰オリーブ色の釉を施す。胎土はやや粗く、細砂粒を含む。17世紀第1四半期の肥前系磁器の可能性もある。17は17世紀前半の肥前系磁器の可能性もある小杯で口径5.8cmを測る。体部は外上方に上がり、口縁部で小さく外反する。外面にはタテの鑄が施され、全面に灰白色の釉を施す。

青磁 (Fig.57 - 18 ~ 27)

18 ~ 23は碗である。18 ~ 20は口縁部の破片で、龍泉窯系とみられる。18は内面に2条の界線と劃花文の一部が残る。器面には約0.2mmの厚さに灰オリーブ色の釉を施す。19は内面に1条の界線と外面には鑄蓮弁文が施され、器面には淡灰オリーブ色の釉を施すが、摩滅が著しい。20は内面に劃花文が施されるもので、器面には約0.2mmの厚さにオリーブ灰色の釉を施す。また、全面に貫入がみられる。21 ~ 23は底部の破片である。21は底径5.6cmを測り、見込には劃花文が施される。見込から畳付にかけてオリーブ灰色の釉を施す。22は底径4.9cmを測り、削り出し高台はほぼ真下を向く。全面にオリーブ灰色の釉を施し、高台内面に蛇ノ目状の釉ハギを施す。23は底径4.6cmを測り、削り出し高台は断面逆台形を

なし、体部は内湾気味に上がる。器面には明オリーブ灰色の釉を施し、畳付以内が露胎となり、見込は蛇ノ目状に釉ハギを行う。24は

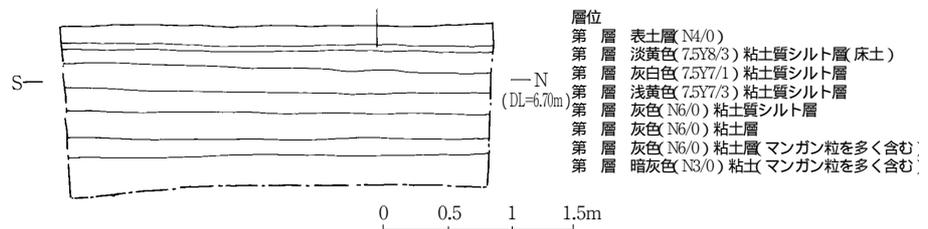


Fig.56 A区西側西壁セクション図

皿で口径9.6cmを測る。体部から口縁部は内湾気味に上がり、端部を細く仕上げ。口縁部と内面に灰オリーブ色の釉を薄く施す。25・26は杯でそれぞれ輪花となる。25は外反する口縁部の破片で、内面に片彫りによる草花文が施される。器面には約0.5mmの厚さにオリーブ灰色の釉を施し、貫入がみられる。25は口径11.8cmを測る。口縁部は外反気味に上がり、端部を丸く仕上げる。内面には片彫りによる文様を施す。器面には約0.5mmの厚さにオリーブ灰色の釉を施し、貫入がみられる。27

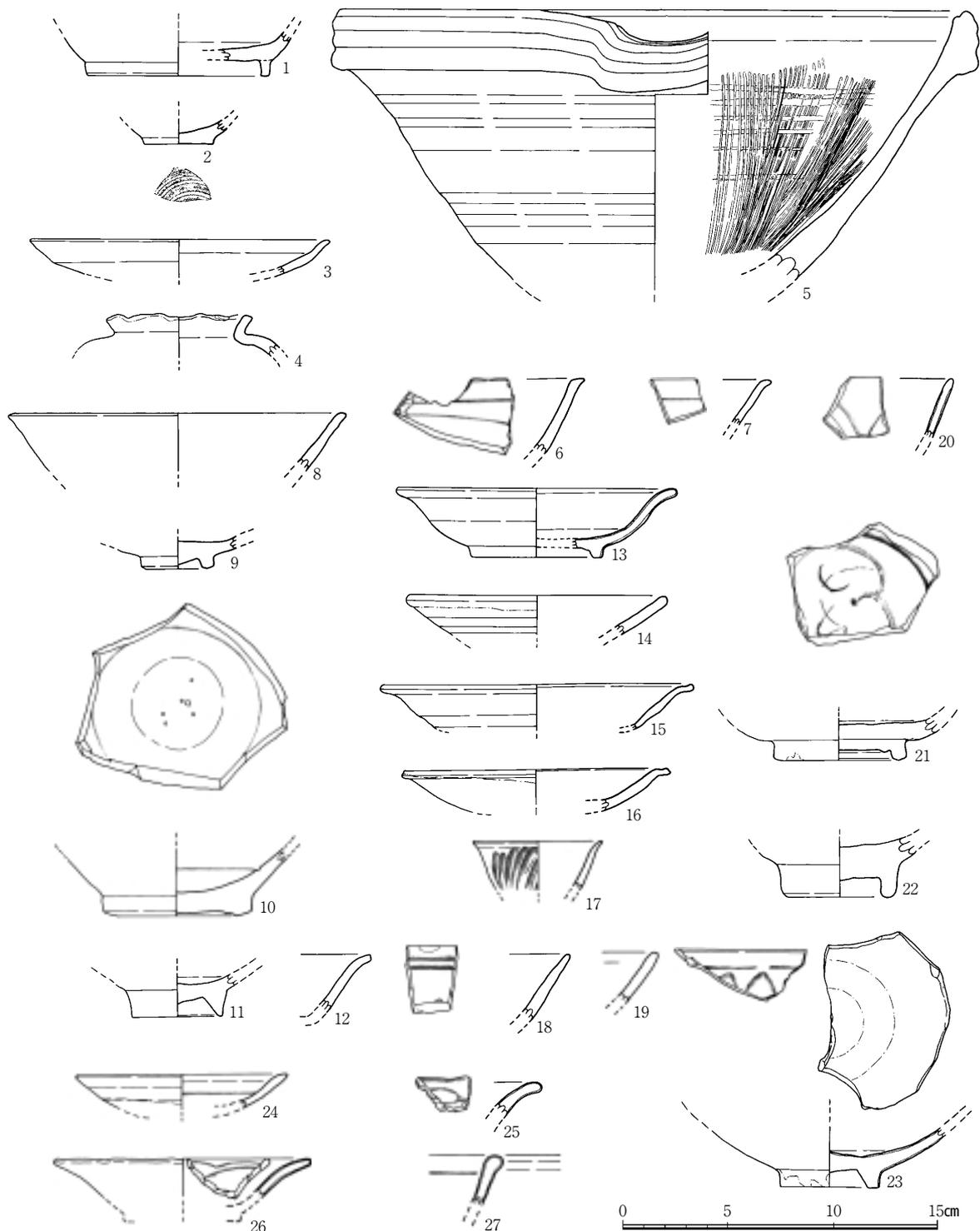


Fig.57 第 層出土遺物実測図1

2. 調査の概要

は盤の口縁部の破片とみられるもので、外上方を向く口縁部の端部は丸い。内面には1条の界線が巡り、器面には約0.5mmの厚さにオリブ灰色の釉を施す。

染付 (Fig.58 - 28・29)

2点とも碗の口縁部の破片である。28は17世紀の景德鎮産とみられるもので、器壁は薄く内湾気味に上がる。内面には文様、外面には1条の界線が施される。器面には白色釉を施す。29も16世紀末から17世紀初めの景德鎮産とみられるもので、器壁は薄く内湾して上がる。内外面には草花文とみられる文様が施され、器面には透明釉を施す。

陶器 (Fig.58 - 30)

中国系とみられる天目茶碗で、底部は削り出し高台で、体部は外上方に上がり口縁部で上方を向く。体部外面は回転ヘラ削りとなり、外面体部から内面にかけて鉄釉を施し、高台は露胎となる。

肥前系陶器 (Fig.58 - 31~41)

31~37は碗である。31は底部と体部の破片で、底径4.4cmを測る。底部は削り出し高台で、体部は内湾気味に上がる。高台は露胎で、それ以外にオリブ灰色の釉を施す。見込には胎土目痕が残る。32は内外面に刷毛目が施された碗で、口径11.4cmを測る。体部は外反気味に上がり、口縁部で外上方を向く。33は17世紀後半から18世紀前半のものとみられるもので、口径12.8cmを測る。体部は外上方に上がり口縁部もそのまま外上方を向く。器面には透明釉を施し、細かな貫入が全面にはいる。

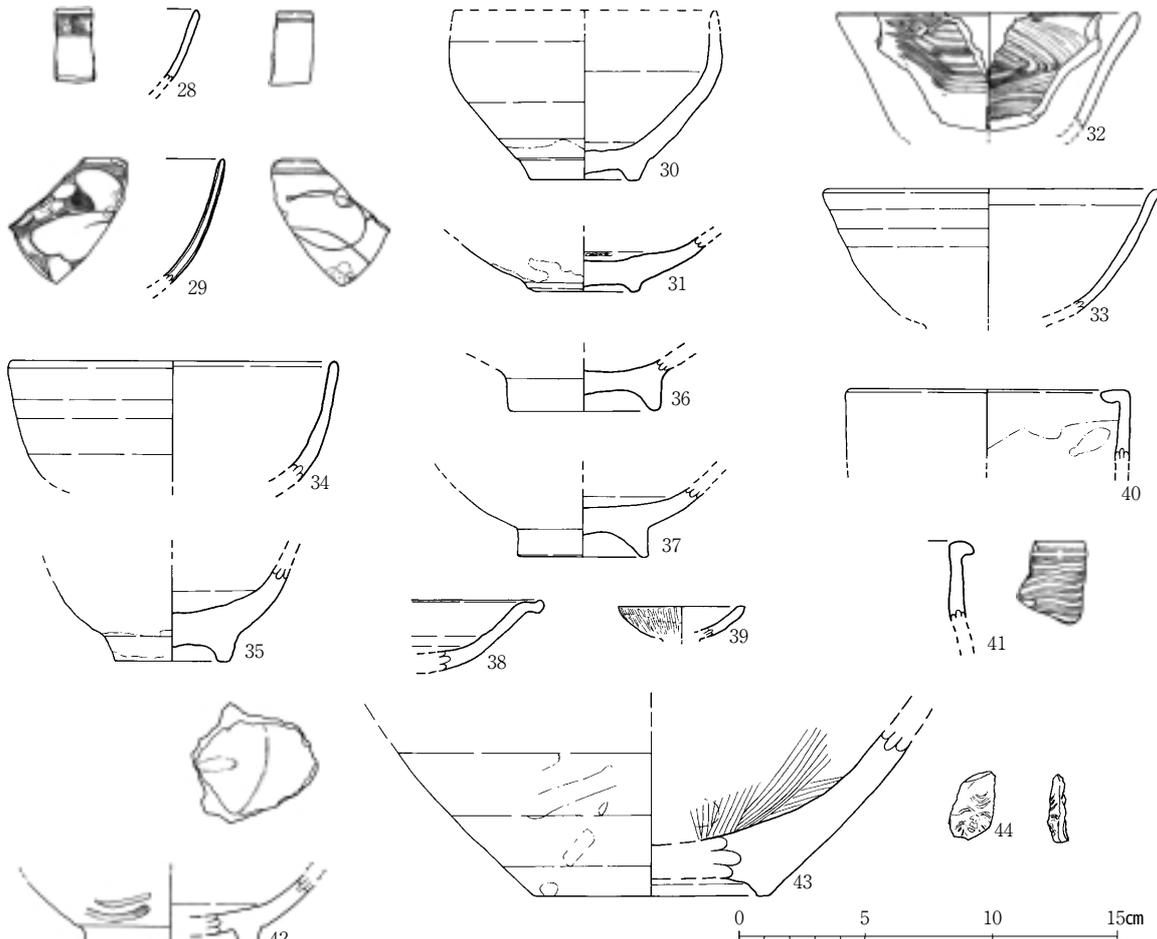


Fig.58 第 層出土遺物実測図2

34は17世紀から18世紀にかけてのものとみられ、口径12.6cmを測る。体部は内湾して上がり、口縁部で外上方を向く。器面には黄緑色を呈する透明釉を施し、全面に貫入がみられる。35は17世紀代とみられる碗で、底部と体部の約二分の一が残存し、底径4.4cmを測る。底部は削り出し高台で、体部は内湾気味に上がる。内面には透明釉、外面には白色釉を施し、畳付は釉ハギする。高台内側は釉が剥落している。36は17世紀後半の碗とみられ、底径6.0cmを測る。底部は比較的高い削り出し高台となる。器面全面に淡黄色の釉を施し、畳付を釉ハギする。また、器面には細かな貫入がみられる。37も36とほぼ同形態のものである。38は溝縁皿で、17世紀第一四半期のものとみられる。体部は斜め上方に上がり、口縁部で屈曲し、端部で上方を向く。体部下半には回転ヘラ削り調整が施され、体部外面から内面にかけて明緑色の釉を施す。また、体部外面には部分的に煤の付着がみられる。39は18～19世紀とみられる紅皿で、口径4.9cmを測る。口縁部は内湾して上がる。外面には放射線状の刻み目を施し、口縁部外面から内面にかけて白色釉を施す。40は17世紀後半とみられる香炉で、口径11.0cmを測る。体部は直立し、口縁部で内側に屈曲する。口縁部内面から外面にかけて明緑色の釉を施す。41も17世紀後半とみられる火入または香炉である。口縁部は直立し、端部を外側に屈曲さす。外面にはハケ目を施した上で口縁部内面から外面にかけて銅緑釉を施す。

瀬戸・美濃系陶器 (Fig.58 - 42)

碗で、底部と体部の一部が残存し、底径6.4cmを測る。底部が削り出し高台で露胎となり、体部は内湾気味に上がる。見込には1条の界線、外面には不明瞭ではあるが文様が施される。器面には透明釉を施す。

近世陶磁器 (Fig.58 - 43)

擂鉢で、底部と体部が残存し、底径9.0cmを測る。底部は削り出し高台風となり、体部は斜め上方に上がる。内面には7本単位の条線が全面に施される。外面には鉄釉が部分的に付着する。

土製品 (Fig.58 - 44)

急須の把手に付けられた型作り人形の顔の破片で、寿老人の顔型ではないかとみられる。長さ2.7cm、幅1.7cmが残存していた。

第 層出土遺物

遺物は古代の須恵器から17世紀の陶磁器までがみられたが、土層の残存状態が不良であったことから包含する遺物は少ない。

須恵器 (Fig.59 - 45)

蓋のつまみで、径4.1cm、高さ2.1cmを測る。宝珠形を呈し、比較的大きなつまみである。

備前焼 (Fig.59 - 46)

擂鉢の口縁部の破片である。肥厚された口縁部外面には凹線が2条巡り、内面には条線6本が確認できる。

染付 (Fig.59 - 47・48)

2点とも皿の口縁部の破片である。47は口径10.0cmを測り、口縁部は外上方を向き、器壁は薄い。内面には四方禪文の帯、外面には1条の界線が施される。呉須は鮮やかな藍色を呈する。素地はやや粗く、灰白色を呈する。48は内湾する体部から外反する口縁部を有するもので、内面には2条の

2. 調査の概要

界線，外面には1条の界線と牡丹唐草風の文様が施される。呉須は鮮やかな藍色を呈する。素地はやや粗く，灰白色を呈する。

肥前系陶磁器 (Fig.59 - 49・50)

49は碗の底部から体部の破片で，底径4.4cmを測り，17世紀第1四半期のものとみられる。底部は削り出し高台で，体部は内湾気味に上がる。体部上部から内面にかけて灰オリーブ色ないし灰黄色の釉を施す。見込には砂目が残る。50は1650～1660年代のものとみられる皿で，口径13.0cm，器高3.1cm，底径6.1cmを測る。底部は削り出し高台で，体部は内湾して上がり，口縁部で外上方を向く。内面には3条の界線と文様が施される。

石製品 (Fig.59 - 51)

砥石の破片であり，残存長は6.8cmを測る。材質は砂岩で，1面を使用している。

古銭 (Fig.59 - 52～55)

すべて北宋銭である。52は行書の淳化元寶(990年)で，銭径23.3～24.0mm，内径18.8mm，銭厚1.3mmを測る。53と54はくっついた状態で出土し，錆化が著しく剥すことができなかった。53は篆書の至和通寶(1054年)で，銭径22.0～23.0mm，内径18.3～19.0mm，銭厚0.8mmを測る。54は篆書の聖宋元寶(1101年)で，銭径23.0～23.2mm，内径20.0mm，銭厚1.2mmを測る。55は篆書の紹聖元寶(1094年)で，銭径19.8～24.0mm，内径19.0～23.9mm，銭厚1.2mmを測る。

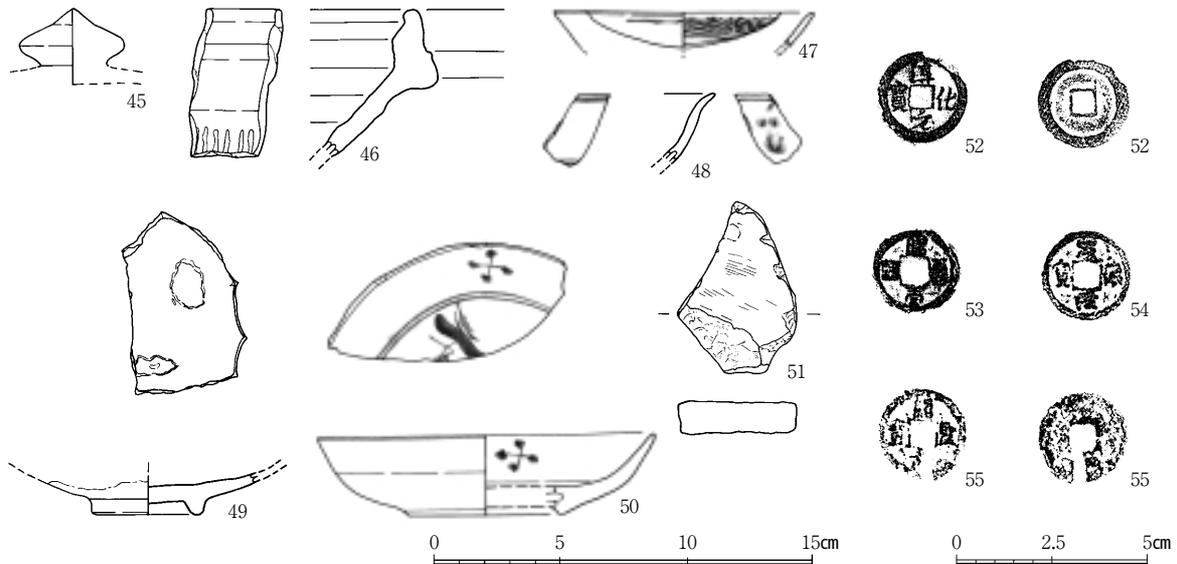


Fig.59 第 層出土遺物実測図

第 層出土遺物

弥生土器 (Fig.60 - 56)

甕で口縁部から中胴部にかけての約三分の一が残存し，口径15.8cmを測る。胴部は砲弾形を呈し，口縁部はくの字状に外傾する。端部は内傾する平面をなす。胴部外面にはタタキ目，内面にはハケ調整を施し，口縁部にはヨコナデ調整を加える。色調は，内面が浅黄色，外面が橙色を呈し，胎土には3～5mm大の砂粒を比較的多く含む。焼成は良好である。

須恵器 (Fig.60 - 57・58)

57は小皿であるが，底部を中心に焼成時の歪みが著しく，細かな気泡が多く見られる。口径は8.6

cm, 器高は2.6cm, 底径は5.2cmを測る。底部外面は回転系切りで中窪みとなり, 口縁部は外上方に短く延びる。器面は回転ナデ調整を施す。色調は, 内面が橙色, 外面がにぶい橙色, 断面が灰白色を呈する。胎土には白色砂粒を比較的多く含み, 焼成は良い。58は甕の口縁部の破片である。口縁部は外反し, 端部外側を肥厚する。器面は回転ナデ調整を施し, 口縁部内面には肌荒れがみられる。色調は内外面とも灰色ないし灰白色を呈し, 胎土には0.1~2.0mm大の白色砂粒を含む。焼成は良い。

須恵質土器 (Fig.60 - 59)

杯で, 底部が残存し, 底径6.2cmを測る。平らな底部外端部には外にやや開く短い高台が付く。底部外面はヘラ切りで, ヘラ状工具による圧痕が付き, 内底面には磨きが施される。それ以外は回転ナデ調整である。色調は内外面とも灰白色を呈し, 胎土には黒色砂粒を含む。焼成はやや不良である。

東播系須恵器 (Fig.60 - 60)

片口鉢の底部とみられるものである。底径は12.0cmを測る。底部は平らで, 体部は斜め上方へ延びる。底部外面は未調整である以外はナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色で, 胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良い。

土師質土器 (Fig.61 - 61~76)

61~64は杯である。61は口径13.6cm, 器高3.0cm, 底径7.2cmを測る。底部はほぼ平らで, 体部は斜め外上方に上がり, 口縁端部でやや外反する。成形は, 粘土紐巻き上げロクロ成形で, 器面は回転ナデ調整を施す。底部切り離しは回転ヘラ切りによる。内底面にはナデ調整を加える。色調は, 内面が浅黄橙色, 外面がにぶい黄橙色を呈する。胎土には細砂粒を比較的多く含む。焼成は良い。62は61とほぼ同形態を呈し, 口径11.8cm, 器高2.3cm, 底径5.8cmを測る。底部は平らで, 体部が斜め外上方に上がり, 口縁部でやや角度を変え上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ, 器面は回転ナデ調整を施す。底部切り離しは回転ヘラ切りとみられるが, 丁寧なナデ調整を加えているため不明瞭である。色調は, 内面が橙色, 外面がにぶい橙色を呈する。胎土には細砂粒を比較的多く含む。焼成は良い。63は底部と体部の破片で, 底径7.8cmを測る。底部はやや中窪みで, 体部は外上方に上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ, 底部の切り離しは静止ヘラ切りである。その他調整は器面が摩耗しており不明瞭である。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には白色砂粒を比較的多く含む。焼成は不良である。64は底部の破片で, 底径6.6cmを測る。底部は高高台となり, 体部は底部から屈曲して斜め外上方へ上がる。成形は底部内面にロクロ目が良く残ることからみるとロクロ水挽の可能性も考えられる。器面は回転ナデ調整で, 底部切り離しは回転系切りによる。色調は内外面とも赤橙色を呈し, 胎土には細砂粒を比較的多く含む。焼成は良好である。65・

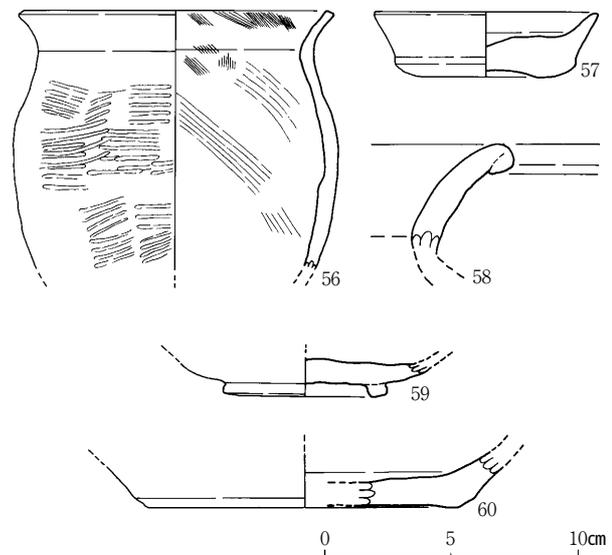


Fig.60 第 層出土遺物実測図1

2. 調査の概要

66は小皿である。65は口径8.3cm, 器高1.5cm, 底径5.1cmを測る。底部は中窪みとなり, 口縁部は斜め外上方に短く上がる。成形はロクロ水挽で, 器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転系切りによる。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し, 胎土には細砂粒を含む。焼成は良好である。66はやや底部が深い小皿で, 口径8.4cm, 器高2.6cm, 底径5.7cmを測る。底部は平らで口縁部は外上方に上がる。成形はロクロ水挽で, 器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転系切りによる。色調は橙色ないし黄橙色を呈し, 胎土には細砂粒を含む。焼成は不良である。67~71は羽釜である。67・68は口縁部の破片で, 内湾する口縁部外面には断面三角形の鏝が付く。口縁部はヨコナデ調整で, 他はナデ調整である。鏝下方には煤が付着する。68の胴部外面にはタタキ目がみられる。色調は橙色ないしにぶい橙色を呈し, 胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。69は口径16.8cmを測る。内湾する口縁部外面には断面三角形の鏝を作り出す。口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整で, 胴部外面にはタタキ目が残る。また, 鏝下方には煤の付着がみられる。色調, 胎土, 焼成は68と同じである。70は口径17.1cmを測る。口縁部は内傾し, 外面には断面三角形の鏝を巡らす。口縁部はヨコナデ調整, 胴部外面にはタタキを施し, 他はナデ調整である。71は口径21.8cmを測る。胴部は内傾して上がり, 口縁部でさらに内傾する。口縁部外面には断面三角形の鏝を作り出す。色調, 胎土, 焼成は68とほぼ同じである。72は鍋の口縁部の破片である。口縁部は外傾する胴部からさらに外傾する。内面にはヨコ方向のハケ調整, 胴部外面にはタテ方向の粗いハケ調整を施した上に内面と口縁部にヨコナデ調整を加える。73は鍋の把手とみられるもので, 棒状工具により円孔を穿ち, 半輪状を呈する。把手は長さ4.7cm, 幅3.3cm, 厚さ1.3cm, 孔径0.7cmを測る。74も鍋の把手とみられ, 長さ4.5cm, 幅3.5cm, 厚さ2.4cmを測る。中空で棒状をなし, 先端に向かって細くなる。表面はヘラナデした後にナデ調整を加える。75は火鉢の口縁部とみられる破片で, 口径29.6cmを測る。口縁部は胴部からそのままほぼ真上に上がり, 端部は段をなす。内面ヨコナデ調整, 外面ナデ調整を施す。色調は橙色ないしにぶい橙色を呈す。胎土には砂粒を多く含み, 焼成は良好である。

瓦質土器 (Fig.61 - 76~79)

76~78は羽釜である。76は口径22.0cmを測る。胴部は内湾気味に上がり, 口縁部で直立気味に内湾する。口縁部外面直下には断面U字形をなす鏝が付く。口縁部内面にはハケ調整, 鏝および口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はヘラ削りの後にナデ調整を加える。色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土には砂粒を多く含む。焼成は良い。77は口径29.6cmを測る口縁部の破片である。内傾する口縁部外面直下には幅2.4cmの鏝が付く。また, 口縁部外面には3条の凹線が巡る。鏝から口縁部にかけてヨコナデ調整, 内面はヨコ方向のハケ調整を施す。鏝から下には煤が付着する。色調は内外面とも暗灰色を呈し, 胎土には最大5mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。78は77と口縁部の高さに違いがみられるもののほぼ同形態を呈し, 調整等もほぼ同じである。79は三足鍋の足の一部である。断面はほぼ円形で, 表面にはナデ調整を施すものの指頭圧痕が残る。

常滑焼 (Fig.62 - 80・81)

80は甕の底部の破片で, 底径15.0cmを測る。底部は平らで, 胴部は外上方に上がる。器面はナデ調整を施すものの内面には成形時の指頭圧痕が明瞭に残る。色調は内外面とも褐灰色を呈し, 胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。81は匣鉢の破片で, 口径20.0cm, 器高5.3cm, 底径20.6cm

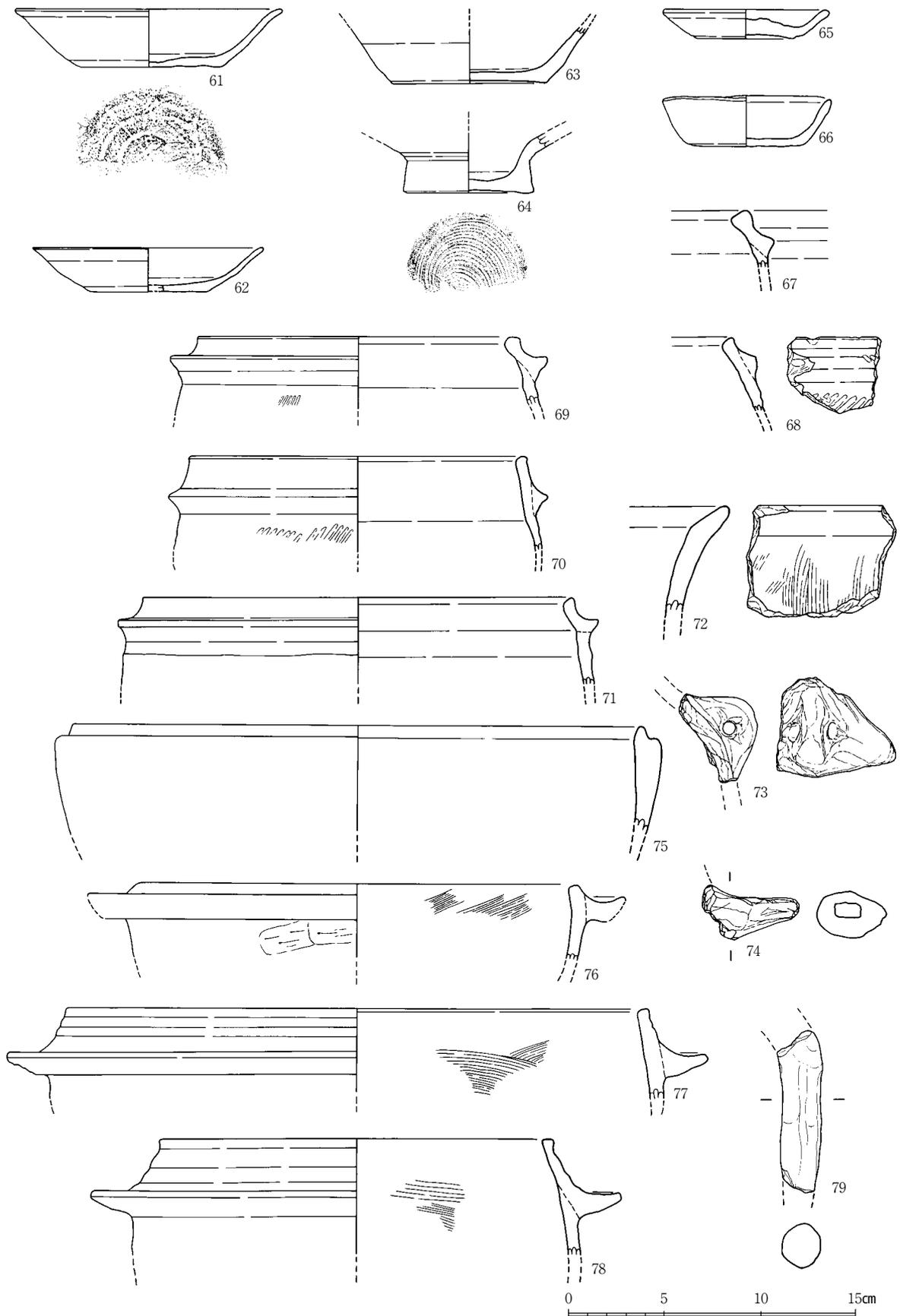


Fig.61 第 層出土遺物実測図2

2. 調査の概要

を測る。底部は平らで、口縁部はやや内傾して延び、端部は外傾する凹面をなす。底部外面はナデ調整，他は回転ナデ調整を施す。色調は，内面が褐灰色，外面が黒褐色を呈し，胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。

備前焼 (Fig.63 - 82~92)

82は甕の口縁部の破片で，口径30.8cmを測る。口縁部はやや内傾し，外側を肥厚し玉縁口縁をなす。器面は回転ナデ調整で，部分的に自然釉がかかる。

色調は，内面が暗赤色，外面がオリーブ黄色を呈する。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。83~92はすべて擂鉢で，83以外はすべて 期に属する。83は口縁部の破片で，他の擂鉢に比べ際立って古い。口縁部は斜め外上方へほぼ真直ぐ立ち上がり，端部はやや内傾する凹面をなす。口縁部はヨコナデ調整，他はナデ調整を施す。色調は内外面とも灰赤色を呈する。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。84~86は口縁端部をやや拡張したもので，84は口径28.0cm，85は口径24.0cmを測る。内面の条線は，84・85が7本単位，86が6本以上の単位で施される。色調は暗赤灰色ないし灰褐色を呈する。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良い。87は84~86に比べ口縁部下端をさらに拡張したもので，口径29.4cmを測る。条線は7本単位のものが部分的に施される。88・89は87に比べ口縁部上端を拡張したものである。88は口縁部の破片で，焼成は良いが，内外面とも橙色を呈する。89は口径23.0cmを測り，内面には5本単位の条線が残る。口縁部はヨコナデ調整，他はナデ調整である。色調は，内面が褐灰色，外面が暗褐色を呈する。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。90は口縁上端部をさらに拡張し，上に立ち上がらせたもので，口径27.0cmを測る。口縁部は回転ナデ調整，体部内外面にはロクロ目が明瞭に残る。内面には6~7本単位の条線が部分的に施される。色調は内外面とも紫灰色を呈し，胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。91・92は底部の破片で底部外面は未調整である。91は底径11.2cmを測り，器面はナデ調整で，内面には7本単位の条線が施される。色調は内外面とも暗赤灰色を呈する。92は口径18.0cmを測り，内面はヨコナデ調整，外面はナデ調整を施し，内面には9本単位の条線が施される。色調は，内面が褐灰色，外面が明褐灰色を呈する。2点とも胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。

白磁 (Fig.64 - 93~95)

93は碗で，底部が残存し，底径は8.0cmを測る。底部は浅い削り出し高台で，体部は内湾気味に上がる。体部外面には回転ヘラ削り調整が施され，内面にはやや黄色を帯びた釉が施され，細かな貫入がはいる。高台は露胎である。94は杯で，口縁部が残存し，底径3.2cmを測る。底部は削り出し高台で，体部は斜め上方に上がり，途中で屈曲し上方を向く。高台は露胎で，内側に「方」の墨書がみられる。体部外面から内面にかけて白色の釉を施す。また，部分的に貫入がはいる。胎土はやや粗いが，焼成は良好である。95は皿で，底部が残存し，底径4.8cmを測る。底部はヘラ切り底で平ら

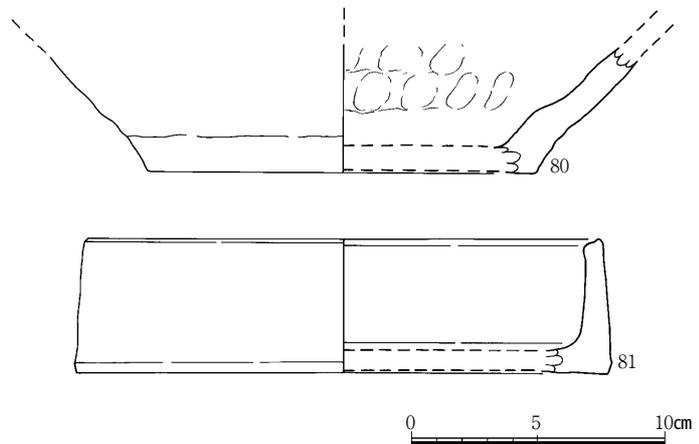


Fig.62 第 層出土遺物実測図3

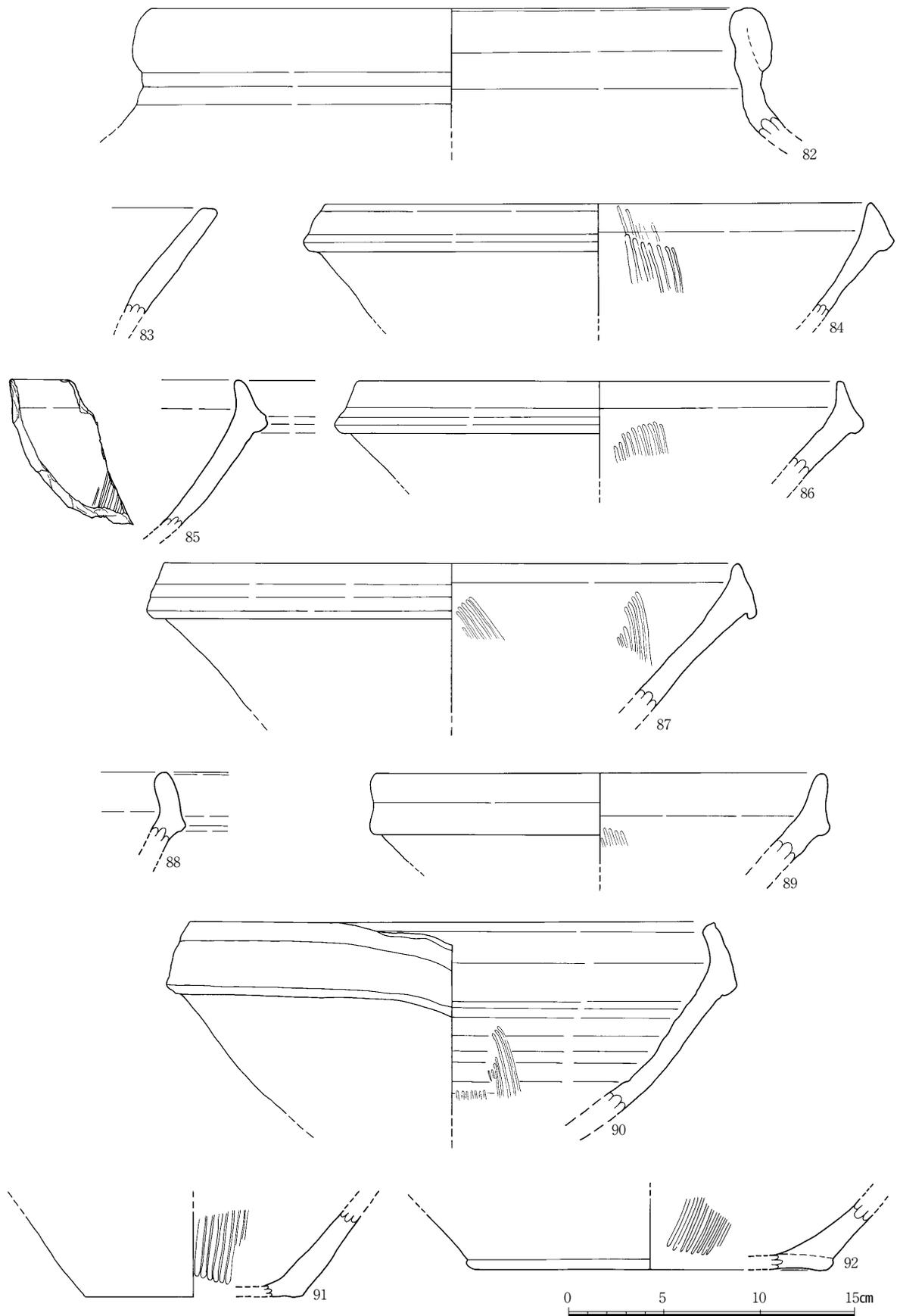


Fig.63 第 層出土遺物実測図4

2. 調査の概要

となり、体部は斜め上方を向く。見込には草花文のスタンプが施され、全面にややくすむ透明釉を施す。底部外面は釉八ギを行う。胎土は精良で、焼成は良好である。

青磁 (Fig.64 - 96 ~ 107)

96~98は同安窯系である。96は口縁部の破片で、口径14.0cmを測る。外面には細かな櫛目が施され、器面には黄色が強い釉を施す。胎土は精良で、焼成は良好である。97・98は皿である。97は口径10.4cm、高さ2.2cm、底径5.0cmを測る。底部外面は回転系切り底でやや中窪みとなり、体部は斜め上方へ上がり、屈曲して外上方にほぼ真直ぐ延びる口縁部となる。内面にはヘラによる片彫りと櫛描文が施され、器面には青緑色の釉を施し、底部外面は釉八ギを行う。胎土は精良で、若干細砂粒を含み、焼成は良好である。98は口径10.7cm、器高2.3cm、底径6.6cmを測る。底部外面は回転系切り底でやや中窪みとなり、体部は斜め上方へ上がり、屈曲して外上方に外反して延びる口縁部となる。内面にはヘラによる片彫りと櫛描文が施され、器面には青緑色の釉を施し、底部外面は釉八ギを行う。胎土は精良で、焼成は良好である。99~107は龍泉窯系の碗である。99は口径17.0cm、器高7.4cm、底径6.5cmを測る。底部は削り出し高台で露胎となる。体部は内湾気味に外上方に上がり、口縁端部でやや外反する。内面には片彫りによる劃花文が施され、畳付から見込にかけて青緑色の釉を施す。胎土は精良で、焼成は良好である。100は口縁部の破片で、外面には鎬蓮弁文が施される。器面には約0.5mmの厚さに青緑色の釉を施す。胎土は精良で、焼成は良好である。101も口縁部の破片で、外面には摩滅して不明瞭ではあるが蓮弁文がみられる。器面には約1.0mmの厚さに青緑色の釉を施す。胎土は精良で、焼成は良好である。102も口縁部の破片で、口径12.6cmを測る。外面には鎬が僅かにわかる程度に細長い蓮弁を削り出す。器面には淡い青緑色の釉を施す。胎土はやや粗いが、焼成は良好である。103は底部と体部の破片で、底径6.0cmを測る。底部が削り出し高台で、体部が内湾して上がる。見込には草花文とみられるスタンプ文を施し、外面には蓮弁文の一部が残る。器面には緑色の強い釉を施し、高台内側を蛇ノ目状に釉八ギする。胎土は精良で、焼成は良好である。104も底部と体部の破片で、底径5.2cmを測る。底部は削り出し高台で露胎となり、体部は内湾して上がる。見込には線彫り風の蓮弁文が施される。高台外側から見込にかけて青味の強い釉を施す。胎土は精良で、焼成は良好である。105は口縁部を欠き、底径5.0cmを測る。底部は削り出し高台で露胎となり、体部は内湾して上がる。外面には2条の沈線と小さな鎬蓮弁文が施され、高台外側から見込にかけてオリーブ色の釉を施す。見込は円形に釉八ギを行う。また、全面に貫入がはいる。胎土はやや粗いが、焼成は良好である。106は底部と体部の破片で、底径5.6cmを測る。底部は削り出し高台で、体部は内湾して上がる。内面には線状の文様、外面には雷文とみられる文様が施される。器面には青緑色釉を施し、高台内側を蛇ノ目状に釉八ギする。胎土は精良で、焼成は良好である。107も底部の破片で、底径6.4cmを測る。底部は削り出し高台で露胎となり、体部は内湾して上がる。高台内側から見込にかけて濃緑色の釉を施す。また、貫入がみられる。

染付 (Fig.64 - 108 ~ 112)

108・109は小碗であり、口縁部が欠損する。108は底径3.7cmを測る。底部は削り出し高台で、体部は内湾して上がる。内面には2条の界線と文様、外面には3条の界線が施される。呉須は濃い藍色である。畳付と高台内側を釉八ギする。胎土はやや粗いが、焼成は良好である。109も底部と体部の

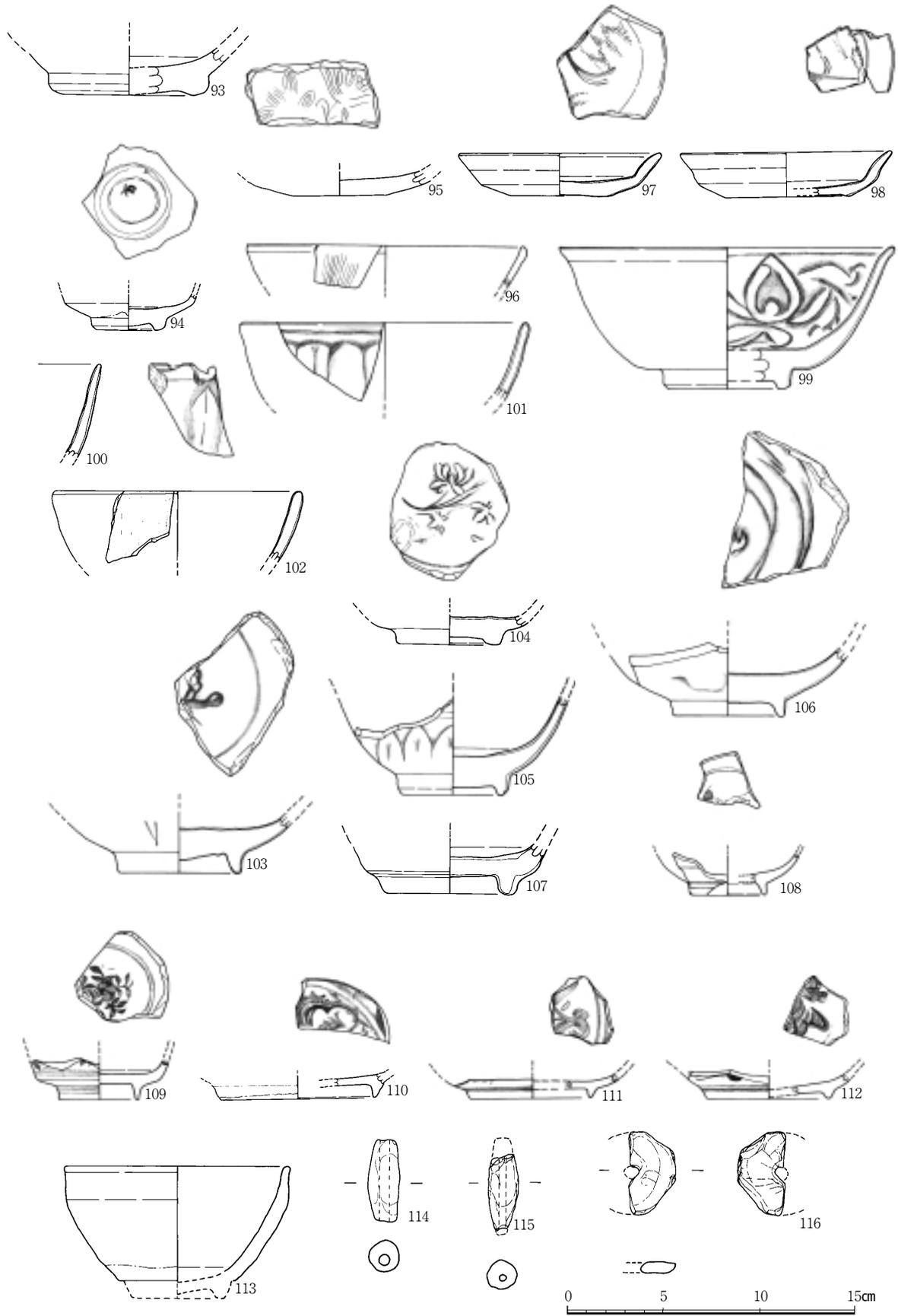


Fig.64 第 層出土遺物実測図5

2. 調査の概要

破片で、底径4.0cmを測る。見込には2条の界線と牡丹唐草文、外面にも界線と文様が施される。呉須はくすんだ藍色である。全面に透明釉を施し、畳付を釉ハギする。110~112は皿であり、3点とも口縁部を欠く。110は底径7.8cmを測り、底部は削り出し高台となる。見込には唐草文が施される。呉須は濃い藍色である。全面に透明釉を施し、畳付と高台内外を釉ハギする。胎土はやや粗いが、焼成は良好である。111は底径6.0cmを測る。底部は削り出し高台で、体部は内湾して上がる。内面にはアラベスク文とみられる文様、外面には唐草文と2条の界線が施される。呉須はやや発色の悪い藍色である。全面に透明釉を施し、畳付と高台内外を釉ハギする。胎土はやや粗いが、焼成は良好である。112は底径6.3cmを測る。底部は削り出し高台で、体部は内湾して上がる。内面には玉取り獅子文、外面には唐草文と2条の界線が施される。呉須は濃い藍色である。全面に透明釉を施し、畳付と高台内外を釉ハギする。胎土はやや粗いが、焼成は良好である。

瀬戸・美濃系 (Fig.64 - 113)

天目茶碗である。口縁部と体部が残存し、口径11.4cmを測る。体部は外上方へ上がり、口縁部は角度を変え外反気味にほぼ真上に延びる。見込から体部外面下端まで鉄釉を施す。色調は内外面が黒色、素地が灰白色を呈する。胎土はやや粗いが、焼成は良好である。

土製品 (Fig.64 - 114 ~ 116)

114・115は紡錘形の土錘である。114は長さ4.3cm、厚さ1.6cm、重さ7.5g、孔径0.6cmを測る。115は両端を欠損するが、長さ4cm前後とみられる。厚さは1.5cm、孔径は0.4cmを測る。116は紡錘車で土師質土器(皿)の底部を転用したものとみられ、円孔は径0.6~0.7cmを測る。

石製品 (Fig.65 - 117 ~ 122)

117は石包丁で、紐孔2個とやや外湾する刃部が残る。表面は研磨されているが、裏面は剥離する。118は下臼の一部である。外面は成形時の敲打痕が残る。119~122は砥石で、材質はすべて砂岩である。119は柱状を呈し、両端を欠くが4面を使用している。120は板状を呈し、表面と側面の2面を使用している。121は扁平な河原石を転用したとみられる砥石で、1面を使用している。122は細い柱状の砥石で、4面を使用している。

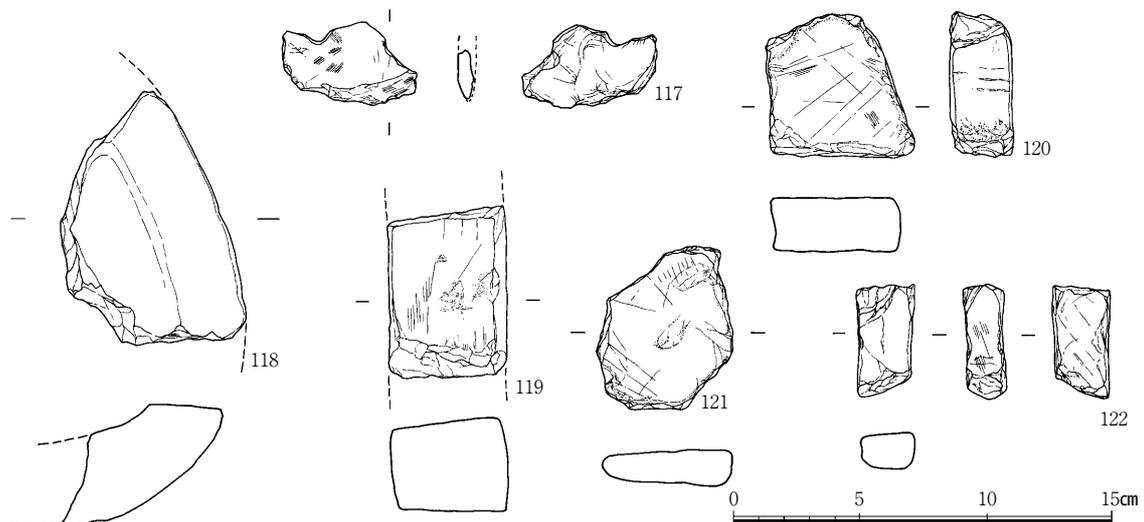


Fig.65 第 層出土遺物実測図6

(2) B区

B区は平成8年度に調査を行ったA区の南側に位置する。A区では中世の屋敷跡などを確認している他、本調査区の南側のC区でも中世の遺構が確認されているが、本調査区では中世の明確な遺構は確認されなかった。中世の遺物包含層からは細片ではあるが土師質土器や須恵器が数点出土しているのも後世に削平を受けた可能性が高い。また、下層確認を行った結果、中世以前の段階で隣接する調査区より地形が落ち込んでいたことが判明している。

層序（北壁セクション）

調査区北壁で認められた層序は以下のとおりである。

- 第 層 暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト層
- 第 層 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土質シルト層
- 第 層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土質シルト層
- 第 層 褐灰色(10YR5/1)シルト層
- 第 層 灰色(5Y6/1)シルト層
- 第 層 褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト層
- 第 層 褐灰色(7.5Y5/1)シルト層
- 第 層 灰白色(5Y7/1)粘土質シルト層
- 第 層 灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト層
- 第 層 明黄褐色(10YR7/6)砂質シルト層
- 第XI層 褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト層
- 第XII層 灰色(10YR6/1)シルト層
- 第XIII層 灰色(10YR6/1)粘土質シルト層
- 第XIV層 灰色(5Y6/1)シルト層
- 第XV層 黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層
- 第XVI層 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト質砂層
- 第XVII層 灰色(5Y6/1)砂質シルト層

遺構検出は第XIII層上面で行った。

調査区のほぼ全面で客土が認められた。調査区北側では厚さ約70cm、南側では約10cm堆積しているが、調査区の中央部では客土が見られない部分もあった。

第 層は旧耕作土で、厚さ約10～40cmの堆積がみられる。

第 層は調査区の東半で見られる層で、厚さ約20cmを測る。マンガンを多く含む層で、土器の細片、炭化物を含んでいるが、遺構は確認されなかった。この層の上面より近代の暗渠が掘削されているが、表土層の下面のため、若干削平されている可能性もある。

第 層は調査区の全面で見られる層で、厚さ約20cmを測る。

第 層は調査区の西側の一部で見られた層である。

第 層は調査区の西端でのみで見られた層である。

第 層は調査区の西端を省き、全面で見られた層で、中世の遺物包含層である。

2. 調査の概要

第 層は調査区の西端でのみ見られた層である。厚さは約10cmを測り、5mm大のマンガン粒を多く含んでいる。

第 層は調査区の西側の一部でのみ見られた層である。厚さは約10cmを測り、5mm大のマンガン粒を多く含んでいる。

第 層は調査区の中央部の極一部でのみ見られた層である。厚さは約8cmを測り、1~2mm大の黒色のマンガン粒を含んでいる。

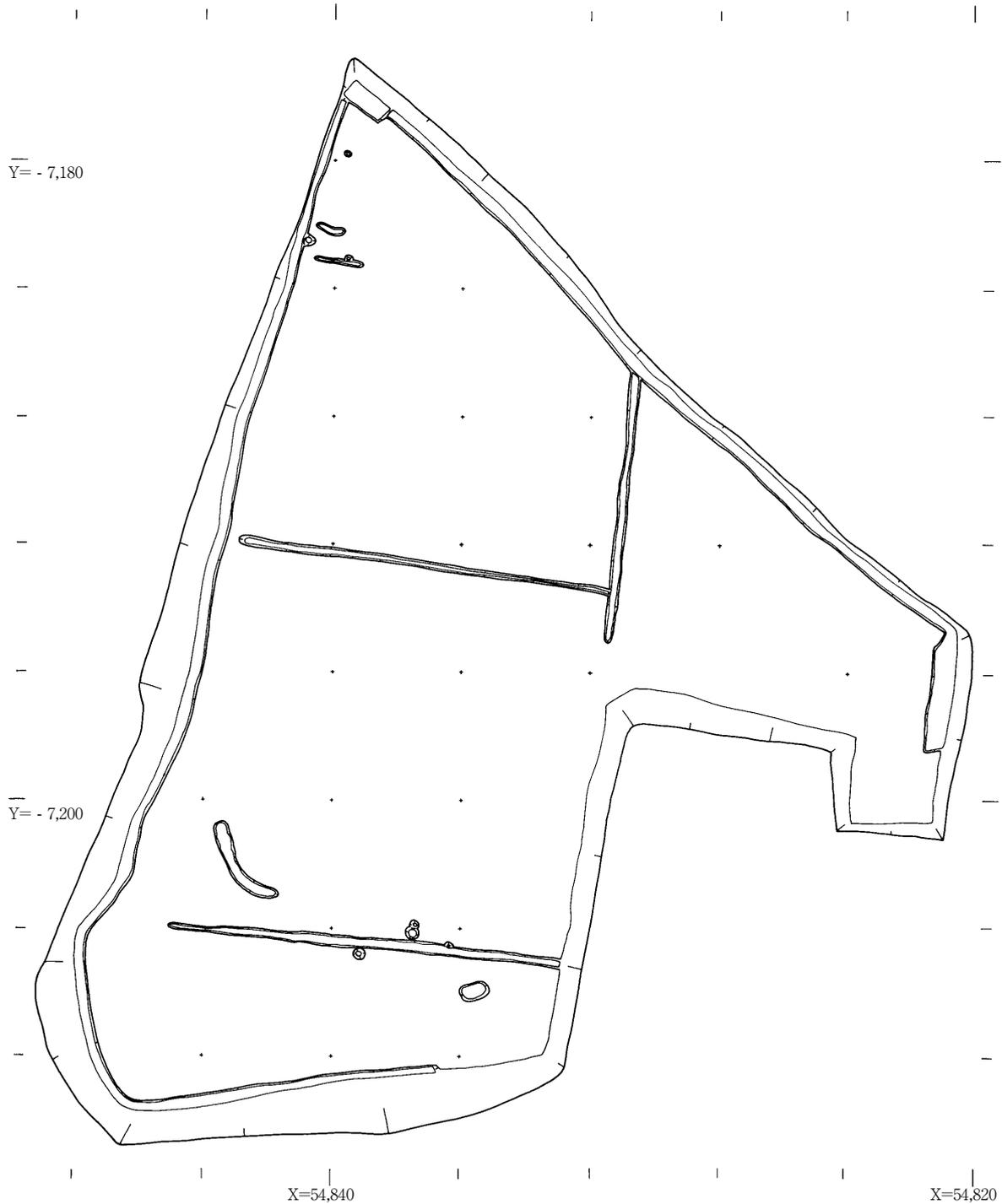


Fig.66 B区遺構平面図 (S=1/200)

第 層は調査区の中央部の極一部でのみ見られたマンガンの堆積層である。厚さは約10cmを測る。

第XI層は調査区の西端のみで見られた層である。厚さは約20cmを測り、3mm大のマンガン粒を多く含んでいる。

第XII層は調査区の西端を除く、ほぼ全面で見られた層である。5mm大のマンガン粒を多く含んでいる。この層の上面で遺構検出を行った。

第XIII層は調査区の西端の一部のみで見られた層である。5mm大のマンガン粒を多く含んでいる。第XII層が粘土化した層とみられる。

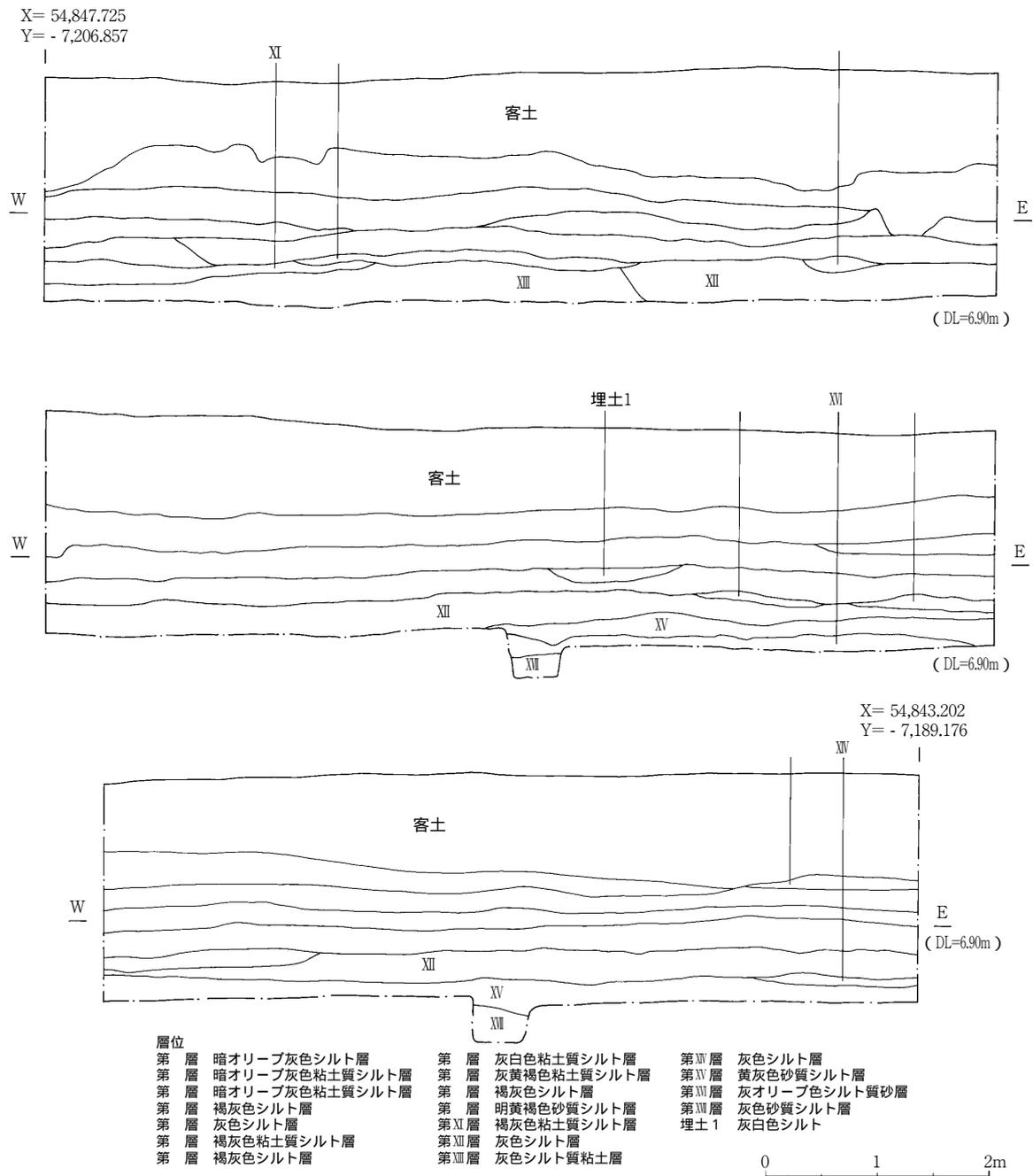


Fig.67 B区北壁セクション図

2. 調査の概要

第XIV層は調査区の東半で見られた層で、厚さ約20cmを測る。5mm～1cm大のマンガン粒を含んでいる。

第XV層は調査区の東半で見られた層である。調査区の東側が若干地形が高いため、東でのみ見られたが、西方にも続くとみられる。厚さ約20cmを測り、5mm大のマンガン粒を多く含んでいる。微砂を少し含んでいる。

第XVI層は調査区の中央部で見られたが、東と西に続くとみられる。微砂を多く含んでいる。

第XVII層は調査区の中央部の深く掘り下げたところで確認した層である。マンガンを含んでいる。

また、下層を確認するために調査区の北壁に沿ってトレンチを設定し、南北方向にバンクを設けた。

下層確認トレンチ層序

- 第 層 灰色(10YR6/1)シルト層
- 第 層 褐灰色(10YR4/1)シルト層
- 第 層 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト層
- 第 層 黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層
- 第 層 灰オリーブ色(5YR6/2)シルト質砂層
- 第 層 灰色(5Y6/1)砂質シルト層

第 層は北壁の第XII層に対応する。ほぼ水平に堆積している。

第 層は北壁には見られない層で、細砂とマンガンを含んでいる。南に向かって緩やかに下がっている。

第 層も北壁にはみられない層で、微砂を少し含んでいる。南に落ち込んでいっている。

第 層は北壁の付近でのみ見られる層である。北壁セクション第XV層に対応する。

第 層は北壁セクションの第XVI層に対応している。南に落ち込んでいっている。

第 層は北壁セクションの第XVII層に対応している。南に落ち込んでいっている。

遺構検出を行った北壁セクションの第XII層より上層は水平に堆積しているが、それ以下の層は南に向かって地形が下がっている。出土遺物はなく、自然堆積層とみられる。

堆積層出土遺物

第 層出土遺物

近世陶器 (Fig.69 - 123)

123は碗で、底径4.4cmを測る。体部外面と高台内に口口目が残る。畳付を除く全面に黄味が

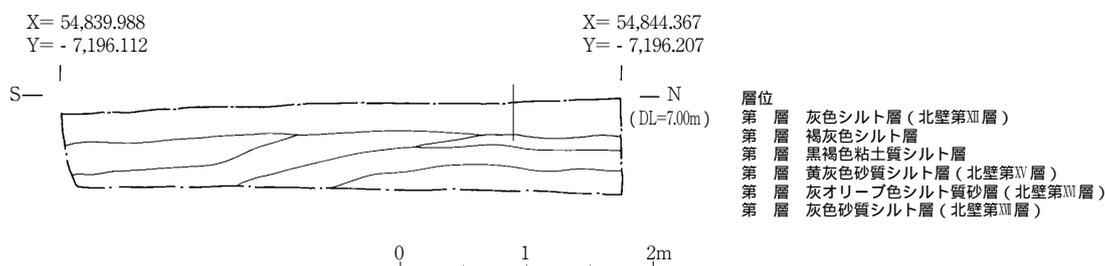


Fig.68 B区下層トレンチセクション図

った透明釉を薄く施釉する。全面に細かい貫入が入る。19世紀の肥前系とみられる。

第 層出土遺物

土師質土器 (Fig.69 - 124)

124は椀の底部の破片ある。円盤状高台をもち、底径6.8cmを測る。磨滅しており調整は不明瞭であるが、底部外面は回転ヘラ切り調整、体部は回転ナデ調整とナデ調整とみられる。

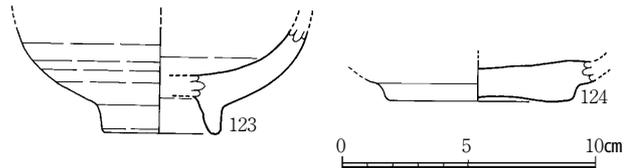


Fig.69 第 層出土遺物実測図

(3) C区

C区の南側に位置する調査区である。この調査区では客土の堆積や後世の攪乱がみられ、遺物包含層や遺構が削平されたとみられるが、縄文時代晩期、中世の遺物包含層を確認したほか縄文時代後期の遺構も確認した。また、隣接する調査区とは全く異なった様相で、中世の段階ではほぼ水平に堆積しているが、それ以前は微高地であったとみられ、各層が北西に向って斜めに堆積しており、当時の地形が起伏に富んでいたことが判明した。

層序

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

- 第 層 褐灰色(10YR6/1)シルト層
- 第 層 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト層
- 第 層 浅黄色(10YR7/3)砂質シルト層
- 第 層 にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土質シルト層
- 第 層 にぶい黄橙色(10YR7/3) X=54,816 砂質シルト層
- 第 層 にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土質シルト層
- 第 層 浅黄色(10YR7/4)粘土質シルト層
- 第 層 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質粘土層
- 第 層 灰黄褐色(2.5Y6/1)シルト質粘土層
- 第 層 灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粘土層
- 第XI層 灰黄色(2.5Y6/2)粘土質 X=54,800シルト層

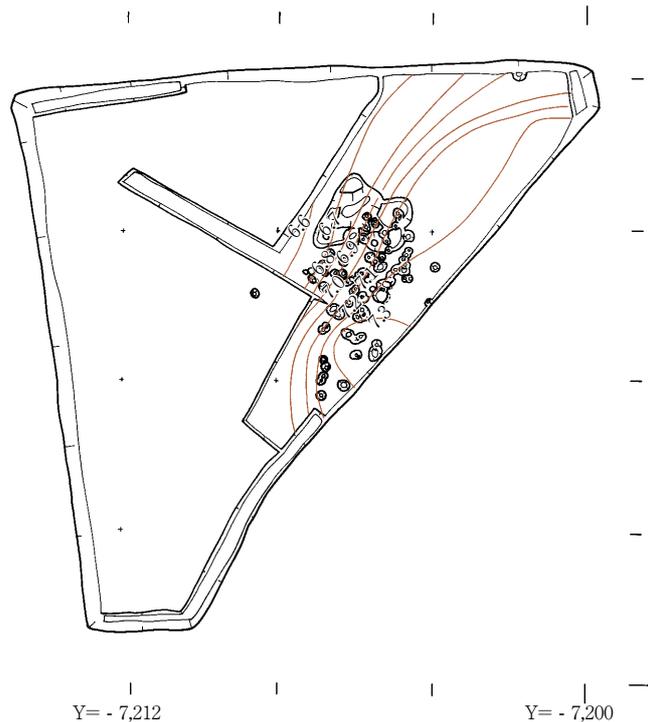


Fig.70 C区縄文時代遺構平面図1

2. 調査の概要

- 第Ⅻ層 浅黄色(2.5Y7/4)粘土質シルト層
- 第Ⅲ層 黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト層
- 第Ⅳ層 にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土質シルト層
- 第Ⅴ層 黄橙色(10YR7/8)砂質礫層

層位中、遺構検出を行ったのは第Ⅰ層上面、第Ⅱ層上面、第Ⅲ層上面、第Ⅳ層上面、第Ⅴ層上面、第Ⅵ層上面、第Ⅶ層上面である。遺構が検出されたのは第Ⅰ層上面であった。

第Ⅰ層は調査区の西部で認められた層で、5mm大の礫を少し含んでいる。中世の遺物包含層であるが、後世の削平を受けており、調査区西部の一部にしか残存していない。

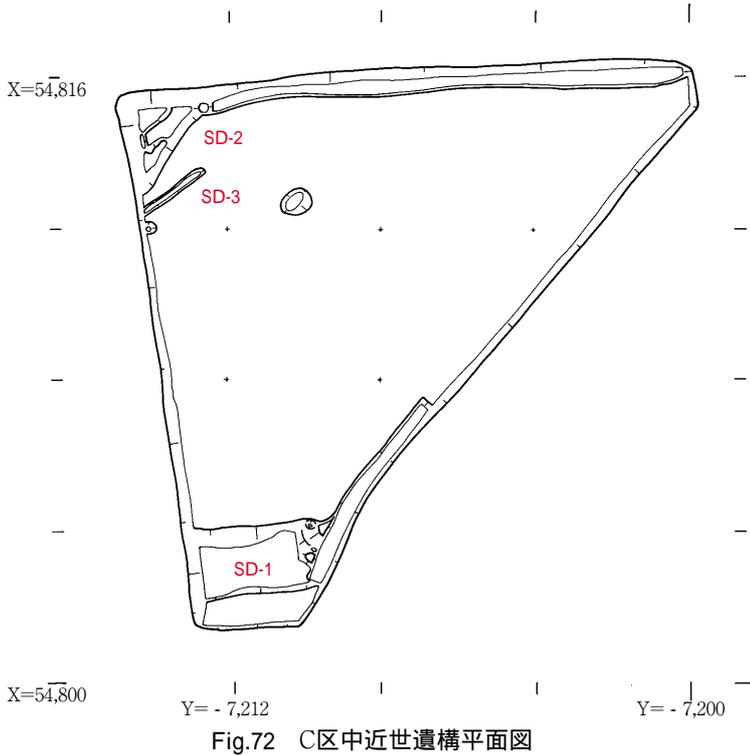
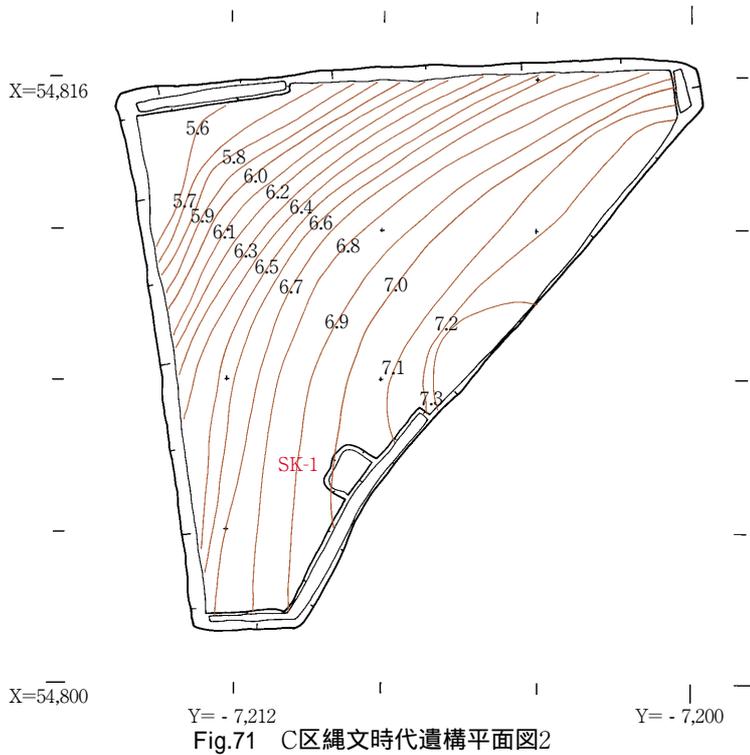
第Ⅱ層、第Ⅲ層は後世の削平、攪乱を受けていたため調査区の北部でのみ残存していた層である。

第Ⅳ層から第Ⅴ層は調査区の全面で認められた。第Ⅵ層は炭化物と縄文時代晩期の遺物を含んでいたが、遺構は検出されなかった。

第Ⅶ層は調査区の西側でのみ確認された層である。

第Ⅷ層は調査区のほぼ全面で見られた層である。5mm大の礫を多く含んでおり、縄文時代晩期の遺物、炭化物も認められたが、明確な遺物包含層とは言えず、遺構も確認できなかった。

第Ⅸ層は調査区の東部で認められた層である。5mm大の礫を多



く含んでおり、炭化物と縄文時代晩期の遺物も認められたが、遺構は確認できなかった。調査区の西部にも続いていくとみられるが、地形が下がっていたため調査することはできなかった。

第XIII層は5mmから1cm大の礫を多く含む層で、縄文時代晩期、後期の遺物と炭化物が混入していた。

第XIV層は5mmから1cm大の礫を多く含む層で、炭化物も混入していた。縄文時代後期、晩期の遺物を含んでいた。

第XV層は地山である。調査区の北西に向かって地形が下がっているため、調査区の南東部でのみ確認した。

堆積層出土遺物

第 層出土遺物

縄文土器 (Fig.74 - 125)

125は深鉢で、器壁が非常に厚いものである。外反する口縁部を有し、端部には浅い刻み目があり

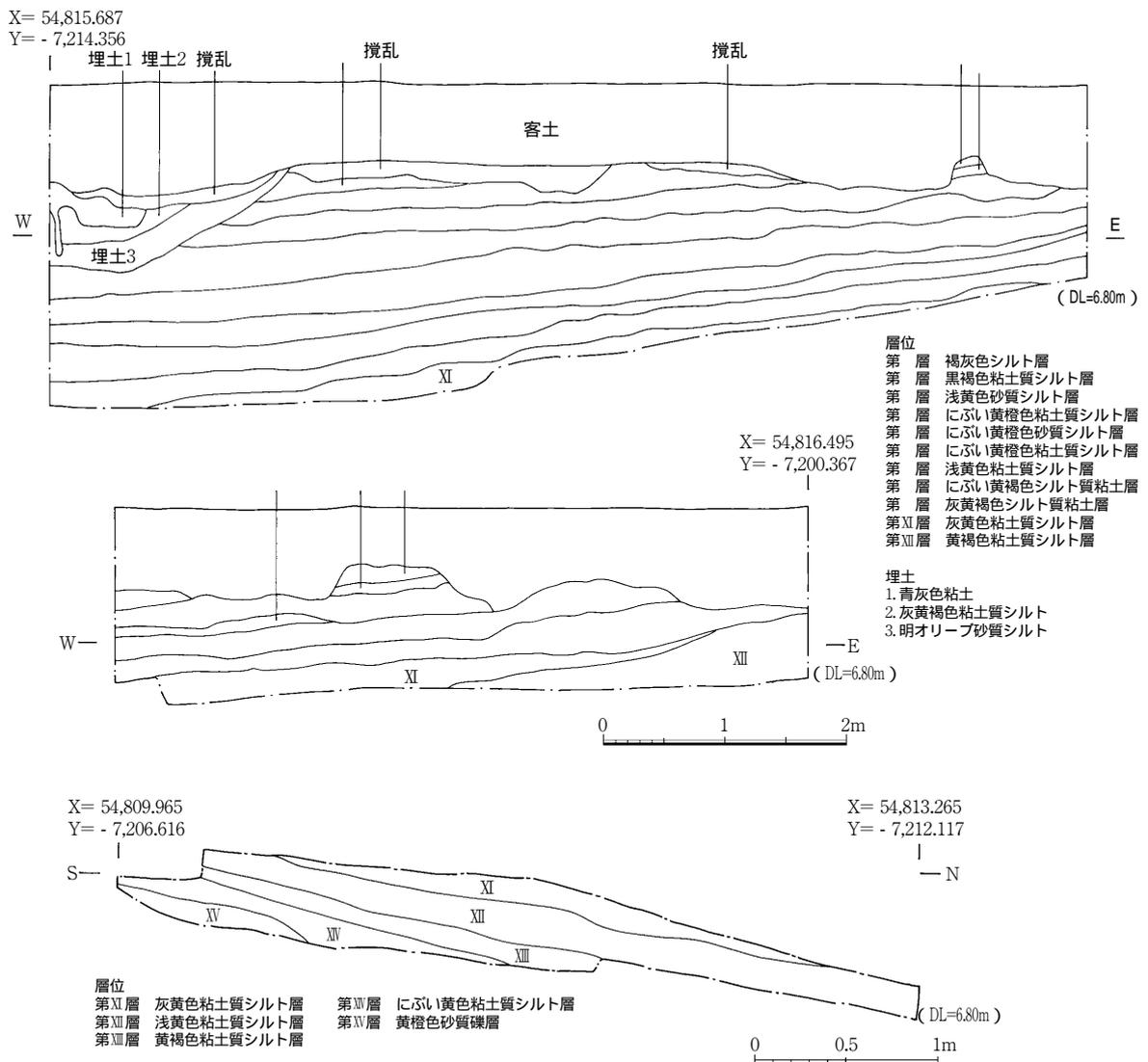


Fig.73 C区セクション図

3. 遺構と遺物

られる。外面には幅の広い断面三角形の刻目突帯が付く。調整はナデ調整である。晩期末とみられる。

第 層出土遺物

縄文土器 (Fig.74 - 126・127)

126は深鉢である。口縁部の破片で、やや外反気味に立ち上がる。調整は内外面ともナデ調整で、残存部には文様は見られない。時期は後期とみられる。127は浅鉢とみられるが、細片のため不明確である。外面には弧を描いたような沈線がみられる。調整はナデ調整である。

第XI層出土遺物

縄文土器 (Fig.74 - 128・129)

128・129は深鉢である。128は頸部の破片である。体部は外方に張り出し、頸部は直線的に立ちあがり、内傾する口縁を有する。口縁部は斜行沈線文、体部には沈線と縄文がみられ、その他はナデ調整を行っている。内面は磨滅しているため調整は不明瞭であるが、ナデ調整とみられる。また、器面には白色の珪酸体が付着している。129は底部の破片で、底径9.8cm、器高2.3cmを測る。底部は低い上げ底になっている。表面は磨滅しているが、調整は内外面ともナデ調整とみられる。器面には珪酸体が付着しており、白色を呈する。

第XII層出土遺物

縄文土器 (Fig.74 - 130・131)

130は深鉢の破片とみられる。調整は内外面ともナデ調整で、外面には幅1.4cm、断面半円形の突帯が付く。松ノ木式とみられる。131は浅鉢の破片である。調整は内外面ともナデ調整で、口縁端部に刻目、外面に幅3mmの沈線が2条めぐる。

3. 遺構と遺物

A～C区は、現況ではほぼ平坦な地形を呈するが、調査の結果、A区は東の火渡川に向って傾斜するものの比較的広い平坦面をなし、中世の屋敷跡を中心に多くの遺構を検出することができた。隣

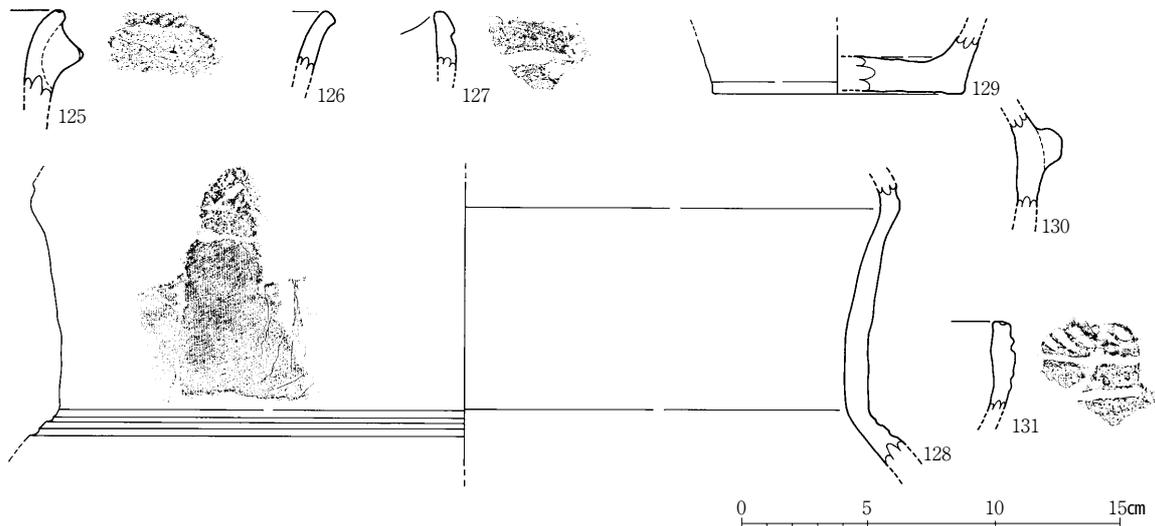


Fig.74 第 層・XI・XII層出土遺物実測図

接する西側は試掘調査の結果地形が落ち込んでいることが判明し、遺物包含層並びに遺構は確認できずまた南西側であるB区もA区のような状況ではなく、その数は少なかった。さらに南側のC区では一転して微高地になり、縄文時代と中世の遺構が遺存していた。これらの調査区は土佐市の旧地形を如実に表したものである。以下、調査区ごとに時代をおって遺構とその出土遺物について記す。

(1) A区

本調査区では、中世、近世、近代の遺構を確認することができた。確認された遺構は掘立柱建物跡12棟、塀・柵列跡10列、土坑29基、溝跡36条、井戸跡2基と柱穴とみられる多数のピットなどである。これら遺構は、13世紀前後の屋敷跡を構成すると考えられる掘立柱建物跡と区画をなす溝跡及び戦国時代末前後の掘立柱建物跡と石組井戸跡、17世紀前後の掘立柱建物跡と桶側を使用した井戸跡、昭和の始め頃とみられる暗渠などである。

中世

i 掘立柱建物跡

11棟を確認しているが、全般に削平の影響を少なからず受けており、遺存状態は決して良いものではない。特に、SD - 1の東側、すなわち屋敷内とみられる部分の北三分の二は20cmほど現況で削平されており、確認できなかった建物跡も少なからずあるものと考えられる。

SB - 1 (Fig.75)

調査区北東部、調査区の境で検出した梁間2間(3.85m)、桁行2間(4.10m)の東西棟建物で、北西隅柱は調査区外にあるとみられ未検出である。棟方向はN - 84° - Eである。柱間寸法は梁(南北)が1.80m、2.05m、桁行(東西)が2.05m等間隔である。柱穴は径28~50cmの円形で、柱径は20cm前後とみられる。埋土は暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を僅かに含むものであった。遺物は弥生土器4点、土師器1点、土師質土器16点が出土しているが復元図示できるものはなかった。

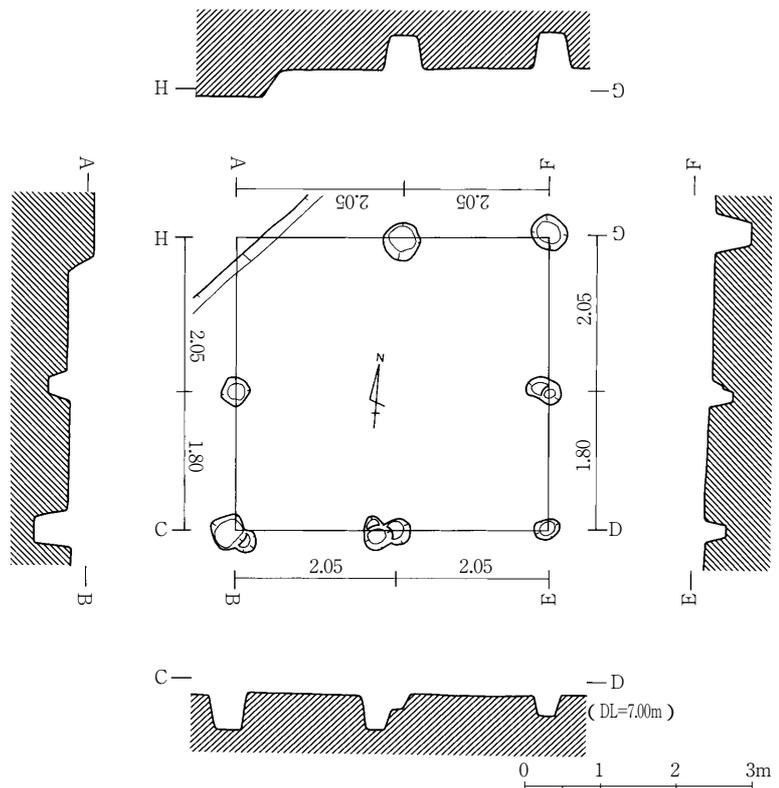


Fig.75 SB - 1

SB - 2 (Fig.76)

調査区北東部、SB - 1の西隣で検出した梁間2間(3.75m)、桁行2間(4.60m)の東西棟建物で、北西隅柱、北側柱の柱穴1個、西妻柱の柱穴1個は調査区外等で未検出である。棟方向はN - 89° - Eであ

3. 遺構と遺物

る。柱間寸法は梁(南北)が1.80m, 1.95m, 桁(東西)が2.30m等間隔とみられる。柱穴は径40~50cmの円形で, 柱径は20cm前後とみられる。埋土は暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を僅かに含むものであった。遺物は弥生土器1点, 土師質土器13点が出土しているが復元図示できるものはなかった。

SB - 3 (Fig.77)

調査区中央部東寄りで検出した梁間2間(4.10m), 桁行6間(11.60m)の東西棟建物で, 東西真中の柱通りに間仕切柱が建つが, 東西妻柱の柱穴1個と北側柱の柱穴1個が未検出である。棟方向はN - 76° - Eである。柱間寸法は梁(南北)が1.95~2.15mとみられ, 桁(東西)が1.80~2.10mとまちまちであるが, 南北の側柱同士は等間隔となっている。柱穴は径33~51cmの円形で, 柱径は20cm前後とみられる。

埋土は暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を僅かに含むものであった。遺物はほぼすべての柱穴から出土しており, 各器種の総数は弥生土器1点, 須恵器1点, 土師質土器53点, 備前焼1点, 常滑焼1点, 青磁1点であったが復元図示できるものはなかった。

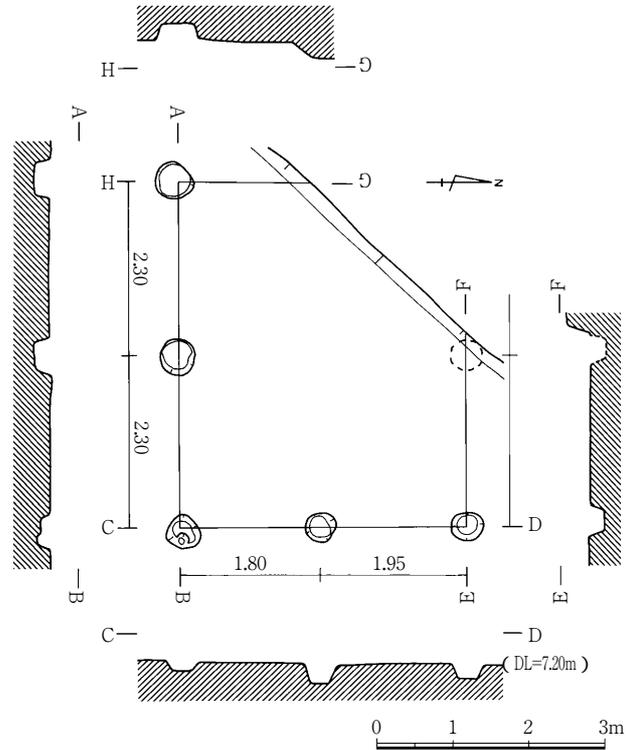


Fig.76 SB - 2

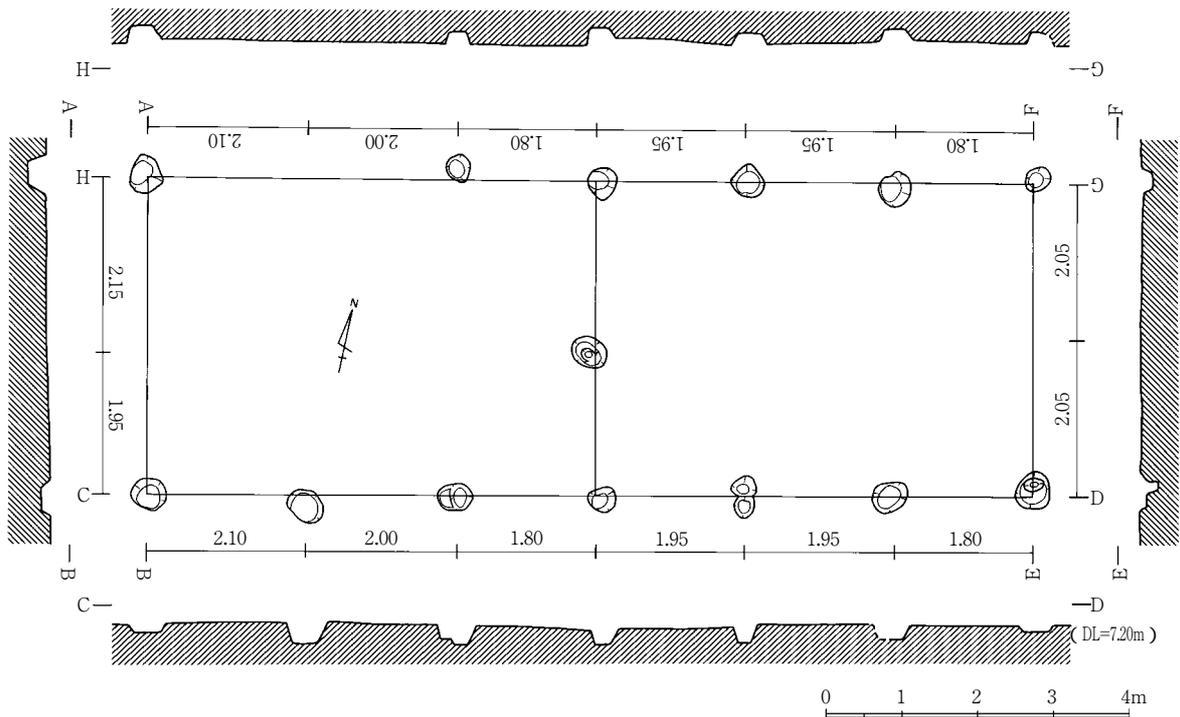


Fig.77 SB - 3

SB - 4 (Fig.78)

調査区中央部西よりで検出した梁間2間(5.10 ~ 5.30 m) , 桁行5間(9.65 m) の東西棟建物で , 西側柱南から2個の柱穴がSD - 31(近代の暗渠) によって掘削されたものとみられ未検出である。棟方向はN - 9 ° - Wである。柱間寸法は梁(東西) が2.30 ~ 3.00 m とまちまちで , 桁(東西) が1.65 m と2.00 m で , 東西側柱北から4間分は2.00 m 等間隔となっている。柱穴は径10 ~ 33 cm の円形で , 柱径は10 cm 前後とみられる。埋土は暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を僅かに含むものであった。遺物は東側柱の柱穴を中心に土師質土器が総数67点出土しているが , 復元図示できるものはなかった。

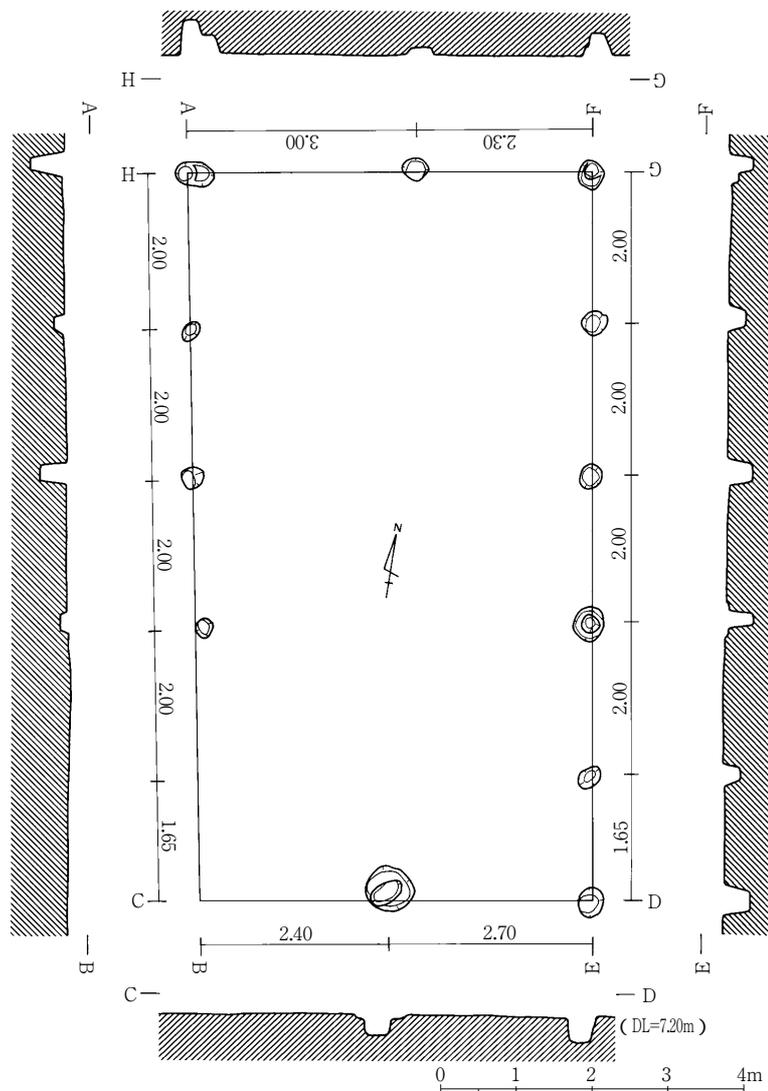


Fig.78 SB - 4

SB - 5 (Fig.79)

調査区中央部 , SB - 3 の西隣で検出した梁間2間(3.15 ~ 3.25 m) , 桁行3間(5.50 ~ 5.60 m) と歪みのある南北棟建物で , 東西妻柱中央の柱穴1個が未検出である。棟方向はN - 8 ° ~ 12 ° - Wである。柱間寸法は桁(南北) が1.70 ~ 2.10 m とまちまちである。柱穴は径20 ~ 43 cm の円形で , 柱径は10 cm 前後とみられる。埋土は暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を僅かに含むものであった。遺物は少なく , 北西隅柱と南東隅柱から土師質土器が1点と6点出土しているのみで , 復元図示できるものはなかった。

SB - 6 (Fig.80)

調査区南部の削平の影響が少ないと見られる部分で検出した梁間2間(2.90 ~ 3.10 m) , 桁行2間(4.25 m) と歪みのある東西棟建物で , 東妻柱から1間目の柱通りに間仕切柱が建ち , 東西妻柱中央の柱穴1個と南東隅柱の柱穴1個が未検出である。棟方向はN - 81 ° ~ 85 ° - Eである。柱間寸法は梁(南北) が1.40 ~ 1.60 m , 桁(東西) が1.70 ~ 2.55 m とそれぞれまちまちである。柱穴は径23 ~ 35 cm の円形で , 柱径は10 cm 前後とみられる。埋土は暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を僅かに含むものであった。遺物は少なく土師質土器が6点出土しているのみで , 復元図示できるものはなかった。

3. 遺構と遺物

SB - 7 (Fig.81)

調査区南部, SB - 6の西隣で検出した梁間2間(2.70m), 桁行2間(4.35 ~ 4.45m)と若干歪みのある東西棟建物で, 東妻柱の柱穴1個と南東隅柱の柱穴1個が未検出である。棟方向はN - 81° ~ 83° - Eである。柱間寸法は, 梁(南北)が1.35m等間隔, 桁(東西)が2.10 ~ 2.55mとまちまちである。柱穴は西妻柱真中の柱穴が径12cmと小さい以外は径18 ~ 29cmの円形で, 柱径は10cm前後とみられる。埋土は暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を僅かに含むものであった。遺物は瓦器1点, 土師質土器9点が出土しているが, 復元図示できるものはなかった。

SB - 8 (Fig.82)

調査区南部, SB - 7の南側柱と重なって検出した梁間2間(2.80m), 桁行2間(4.00m)の総柱東西棟建物で, 東妻柱の柱穴2個と北西隅柱の柱穴1個が未検出である。棟方向はN - 86° - Eである。柱間寸法は, 梁(南北)が1.30m, 1.50mで, 桁(東西)が1.95m, 2.05mである。柱穴は径28 ~ 41cmのほぼ円形で, 柱径は10cm前後とみられる。埋土は暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を僅かに含むものであった。遺物は弥生土器1点, 須恵器1点, 瓦器1点, 土師質土器8点が出土しているが, 復元図示できるものはなかった。

SB - 9 (Fig.83)

調査区西部, SD - 2の西側で検出した梁間1間(2.15m), 桁行2間(3.05m)と小さな南北棟建物で, 西側柱の柱穴1個と南西隅柱の柱穴1個が未検出である。棟方向はN - 6° - Eである。柱間寸法は, 梁(東西)が2.15m, 桁(南北)が1.40m, 1.65mである。柱穴は径21 ~ 29cmの円形で, 柱径は約8cmとみられる。埋土は暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を僅かに含むものであった。遺物は西側柱真中の柱穴から須恵器1点が出土しているが, 復元図示できなかった。

SB - 10 (Fig.84)

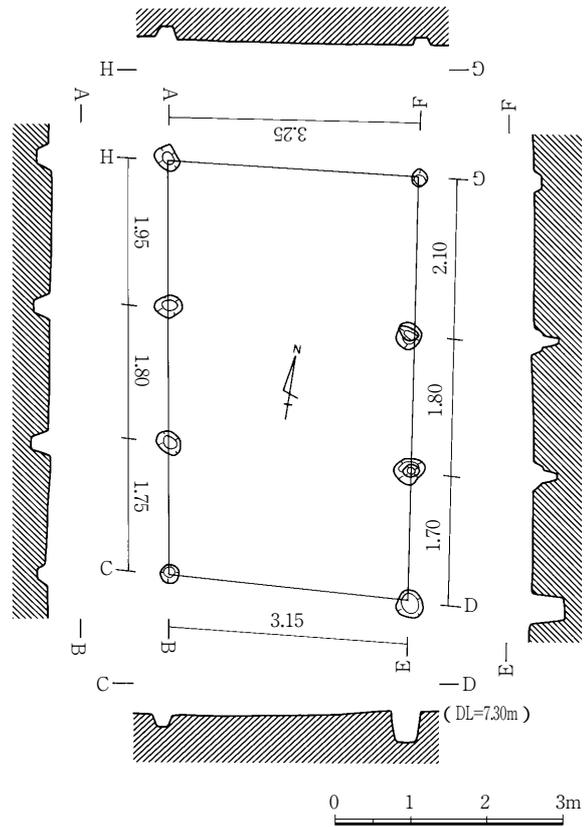


Fig.79 SB - 5

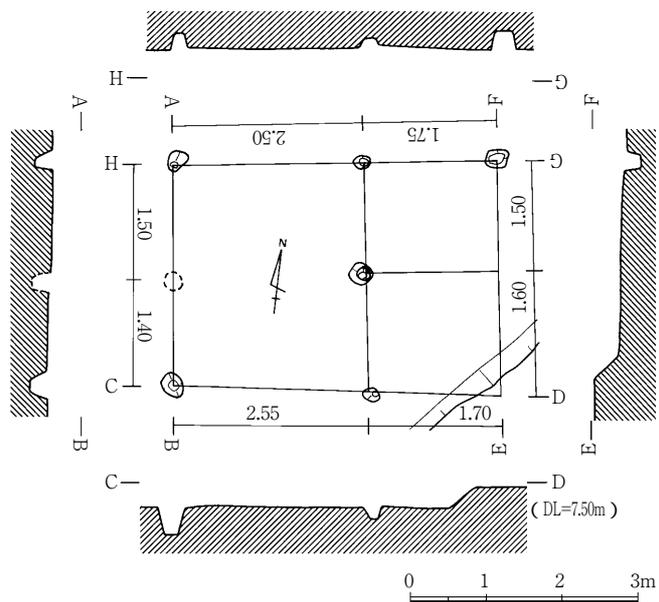


Fig.80 SB - 6

調査区西部, SB - 9の西側約8mのところ
 で検出した梁間2間(3.30m), 桁行3間
 (3.40m)の南北棟建物で, 南妻柱の柱穴2
 個が未検出である。棟方向はN - 5° - Eで
 ある。柱間寸法は, 梁(東西)が1.55m , 1.75
 m , 桁(南北)が0.90 ~ 1.55mとまちまちで
 ある。柱穴は径21 ~ 35cmの円形で, 柱径は
 10cm前後とみられる。埋土は暗灰黄色粘
 土質シルトにマンガン粒を僅かに含むも
 のであった。遺物はほぼすべての柱穴か
 ら出土しており, 総数は瓦器2点, 土師質
 土器29点あり, 東側柱北から1間目の柱穴
 から出土した土師質土器の羽釜(132)1点
 が復元できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.86 - 132)

羽釜の口縁部から胴部にかけての約五分の一が残存していた。胴部は内湾して上がり, 口縁部はそのまま内湾して上がる。端部はやや外傾する凹面をなす。口縁部外面には幅1.3cmの鐙が巡る。器面は摩耗が著しく調整は不明であるが, 胴部外面には粘土紐接合時の指押さえの痕が残る。色調は内外面ともにぶい赤褐色を呈し, 胎土には細砂粒を多く含む。焼成は不良である。

SB - 11 (Fig.85)

調査区ほぼ中央部, SB - 3の北隣で検出した梁間2間(4.00m), 桁行7間(14.35m)と大きな東西棟建物で, 東西妻柱真中の柱穴1個, 北側柱の柱穴1個, 北東隅柱の柱穴1個が未検出である。棟方向はN - 84° - Eである。柱間寸法は, 梁(南北)が約2.00m等間隔と考えられ, 桁(東西)が1.90 ~ 2.25mとまちまちである。柱穴は径30 ~ 70cmの円形で, 柱径は15cm前後とみられる。他の建物の柱穴に比べ大きい。埋土は灰黄褐色粘土質シルトにマンガン粒を比較的多く含むものであった。遺物は比較的多く出土しており, 各器種の総数瓦器3点, 土師質土器73点, 常滑焼1点, 白磁1点, 青磁1点, 瀬戸焼1点, 染付2点, 煙管1点, 釘1点があり, 土師質土器の小皿(133)1点, 青磁の碗(134)1

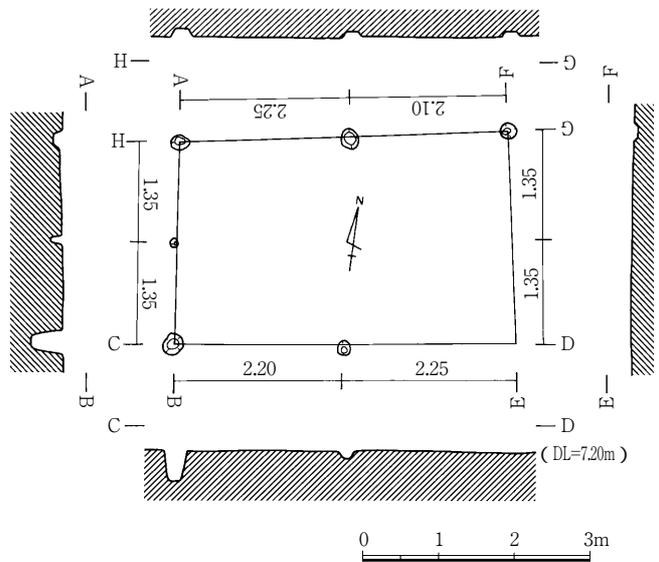


Fig.81 SB - 7

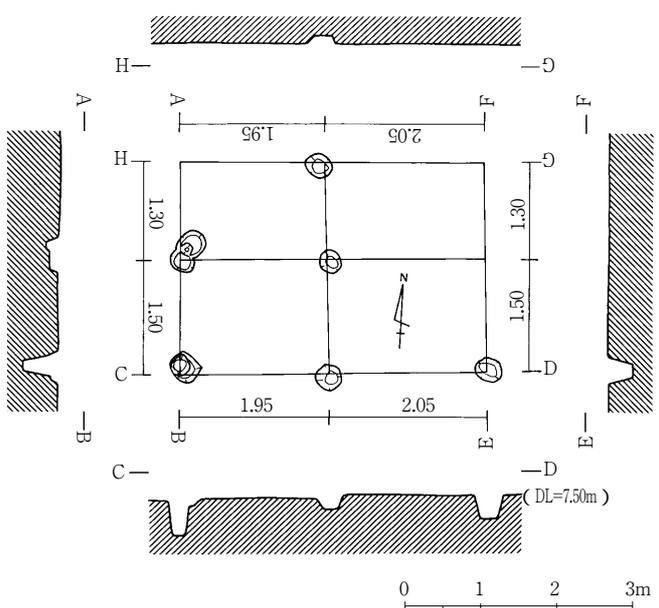


Fig.82 SB - 8

3. 遺構と遺物

点, 染付皿(135)1点, 煙管(136)1点, 釘(137)1点が図示でき, 他の建物よりやや新しい様相を呈する。

出土遺物

土師質土器 (Fig.86 - 133)

小皿で, 口径6.0cm, 器高1.8cm, 底径3.2cmを測る。底部は平らで, 体部と口縁部は内湾して上がる。成形はロク口水挽で, 器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転系切りとみられる。色調は内外面とも橙色を呈し, 胎土は精良で焼成は良好である。

青磁 (Fig.86 - 134)

龍泉窯系青磁碗の口縁部の破片である。内面には片彫りの劃花文が施される。器面には青緑色の釉を施す。胎土は精良で, 焼成は良好である。

染付 (Fig.86 - 135)

精製染付皿で, 底部と体部の一部が残存し, 底径3.8cmを測る。底部は削り出し高台で, 体部は内湾気味に上がる。外面には1条の界線が施され, 見込から体部外面に透明釉を施し, 見込を蛇ノ目状に釉ハギする。胎土には黒色細粒を多く含み, 焼成は良好である。

金属製品 (Fig.86 - 136・137)

136は煙管の吸口であり, 長さ4.6cm, 径0.9cmを測る。成形は厚さ0.5mmの銅板を曲げて作る。表面は錆化し, 緑青が見られる。137は短い角釘で, 長さ3.2cm, 幅0.5~0.6cmを測る。

ii 塀・柵列跡

SA - 1 (Fig.87)

調査区北部, SB - 1・2の南側で検出したL字形をした塀である。SB - 2とは隣接し過ぎていることからSB - 1との関連が考慮される。3間分(7.05m)を検出し, 柱間は2.15~2.55mである。柱穴は径36~44cmのほぼ円形で, 柱径は約10cmとみられる。埋土は暗灰褐色粘土質シルトでマンガン粒を比較的多く含むものであった。遺物は北端の柱穴から土師質土器2点, 東から2間目の柱穴から弥生土器8点, 土師質土器4点が出土しているが, 復元図示できるものはなかった。

SA - 2 (Fig.88)

調査区中央部東よりで検出した東西塀(N - 83° - E)である。SB - 11の身舎内に位置し, SB - 11とは時期差が認められる。3間分(6.05m)を検出し, 柱間は1.90~2.10mである。柱穴は比較的小さく径20~28cmのほぼ円形で, 柱径は10cm前後とみられる。埋土は暗灰褐色粘土質シルトでマンガン粒

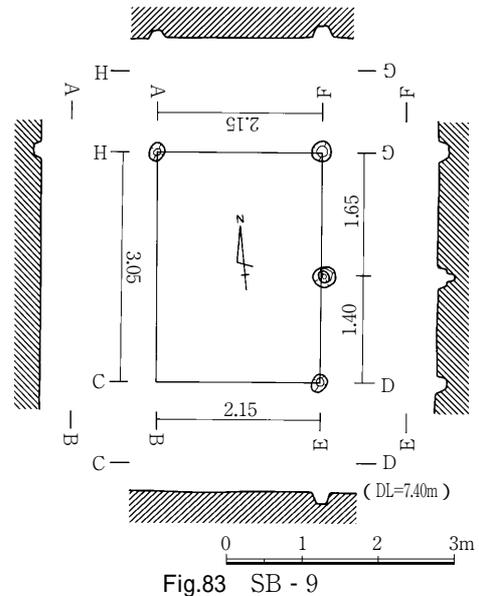


Fig.83 SB - 9

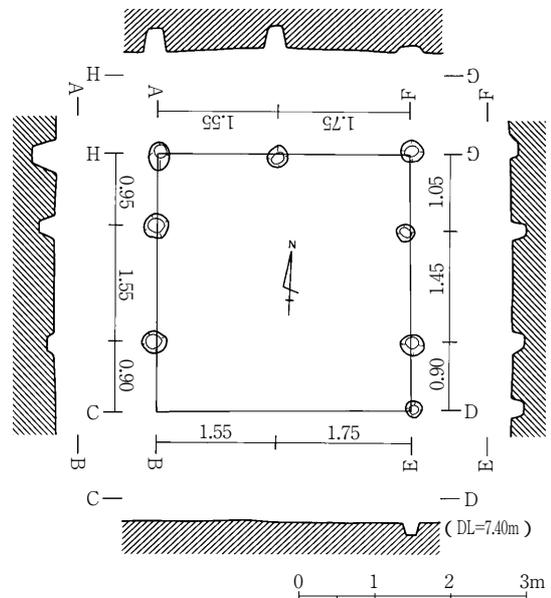


Fig.84 SB - 10

を比較的多く含むものであった。遺物は西端の柱穴から瓦器2点,土師質土器2点,西から2間目の柱穴から土師質土器1点が出土しているが,復元図示できるものはなかった。

SA - 3 (Fig.89)

調査区中央部,SB - 5の東側で検出したL字形の堀である。3間分(8.80m)を検出し,柱間は2.50~3.60mと広い。柱穴は径26~30cmのほぼ円形で,柱径は10cm前後とみられる。埋土は暗灰褐色粘土質シルトでマンガン粒を比較的多く含むものであった。遺物は弥生土器3点,土師質土器12点が出土しているが,復元図示できるものはなかった。

SA - 4 (Fig.90)

調査区中央部,SB - 5の東隣,SA - 5と重なり合った状態で検出した南北堀(N - 2° - W)である。2間分(2.95m)を検出し,柱間は1.35mと1.60mである。柱穴は径28~32cmのほぼ円形で,柱径は約10cmとみられる。埋土は暗灰褐色粘土質シルトでマンガン粒を比較的多く含むものであった。遺物は南端の柱穴から土師質土器4点が出土しているが,復元図示できるものはなかった。

SA - 5 (Fig.91)

調査区中央部,SB - 5の東隣,SA - 4と重なり合った状態で検出した南北堀(N - 6° - W)である。4間分(7.55m)を検出し,柱間は1.80~1.95mである。柱穴は径28~48cmのほぼ円形で,柱径は12~16cmとみられる。埋土は暗灰褐色粘土質シルトでマンガン粒を比較的多く含むものであった。遺物は南端の柱穴から常滑焼1点が出土しているが,復元図示できるものはなかった。

SA - 6 (Fig.92)

調査区南部,SB - 6・7と重なり合って検出した東西堀(N - 82° - E)である。4間分(7.40m)を検出

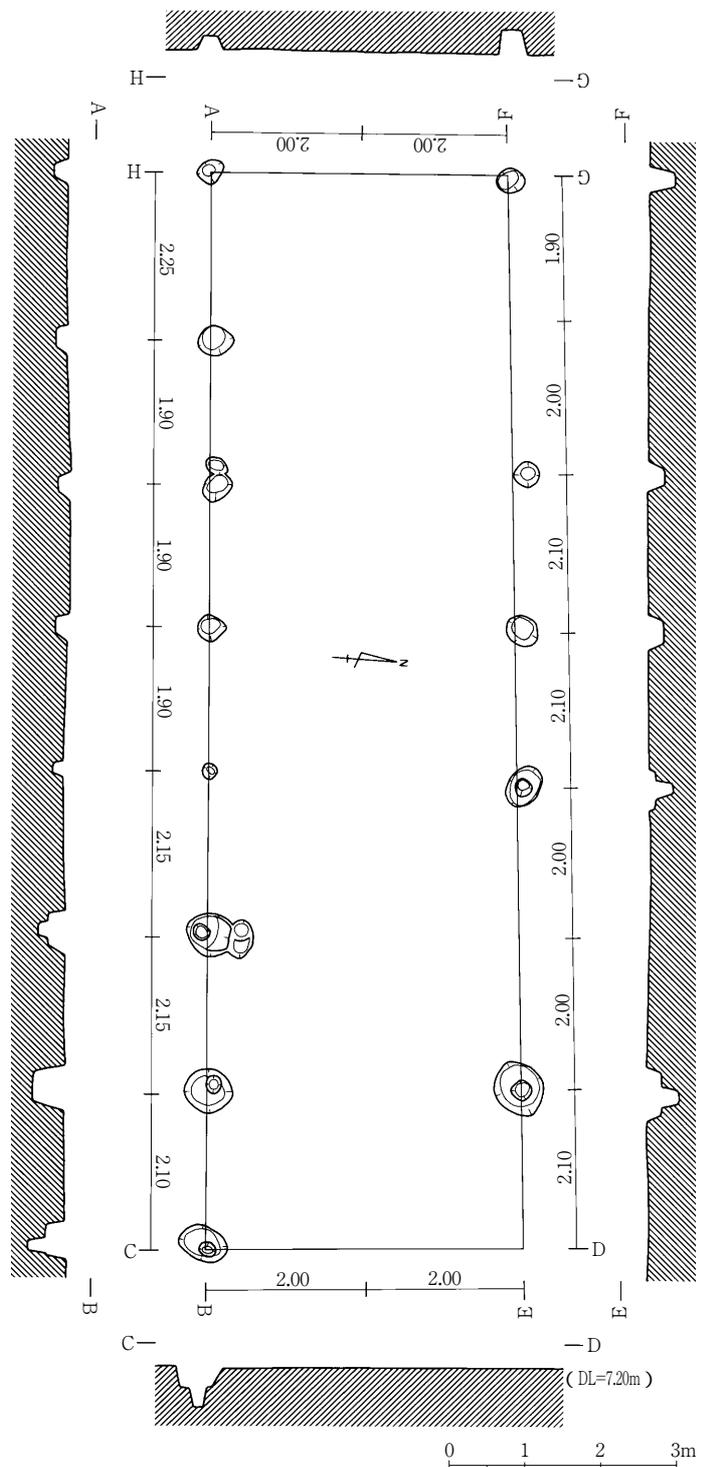


Fig.85 SB - 11

3. 遺構と遺物

し、柱間は1.40～2.20mである。柱穴は径28～34cmのほぼ円形で、柱径は約10cmとみられる。埋土は暗灰褐色粘土質シルトでマンガン粒を比較的多く含むものであった。遺物は東端の柱穴以外から土師質土器38点が出土しているが、復元図示できるものはなかった。

SA - 7 (Fig.93)

調査区南部、SB - 8と重なり合った状態で検出した南北堀(N - 6° - W)である。2間分(4.85m)を検出し、柱間は2.15mと2.70mである。柱穴は比較的大きく径50～58cmの円形で、柱径は20cm前後はあったものではないかとみられる。埋土は暗灰褐色粘土質シルトでマンガン粒を比較的多く含むものであった。遺物は真中の柱穴から須恵器1点が出土しているが、復元図示できるものはなかった。

SA - 8 (Fig.94)

調査区西部、SA - 9の北隣で検出した東西堀(N - 57° - W)である。3間分(5.15m)を検出し、柱間は1.50mと2.15mである。柱穴は径約30cmの円形で、柱径は約10cmとみられる。埋土は暗灰褐色粘土質シルトでマンガン粒を比較的多く含むものであった。遺物は西端の柱穴から瓦器1点、土師質

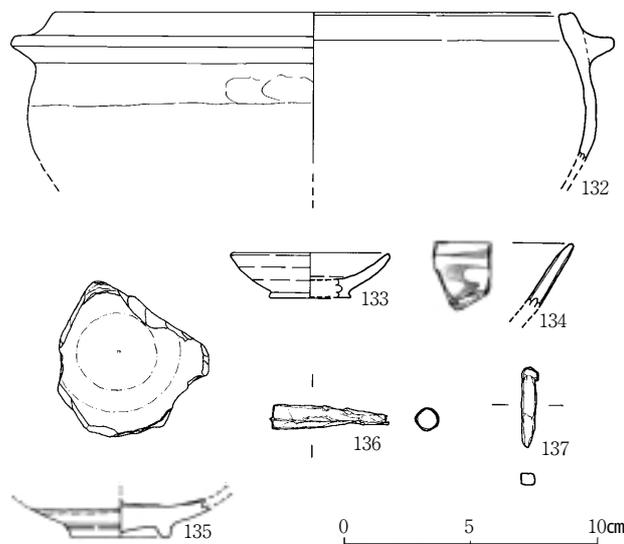


Fig.86 SB - 10・11出土遺物実測図

Tab.2 林口遺跡掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模				面積 (m ²)	棟方向	備考
	梁間×桁行	梁(m)×桁(m)	柱間寸法				
			梁(m)	桁(m)			
SB - 1	2×2	3.85 × 4.10	1.80～2.05	2.05	15.8	N - 84° - E	
SB - 2	2×2	3.75 × 4.60	1.80～1.95	2.30	17.2	N - 89° - E	
SB - 3	2×6	4.10 × 11.60	1.95～2.15	1.80～2.10	47.6	N - 76° - E	
SB - 4	2×5	5.10 × 9.65	2.30～3.00	1.65～2.00	51.1	N - 9° - W	
SB - 5	2×3	3.15～3.25×5.50～5.60	3.15～3.25	1.70～2.10	17.8	N - 10° - W	棟方向は平均
SB - 6	2×2	2.90～3.10×4.25	1.40～1.60	1.70～2.55	12.8	N - 83° - E	棟方向は平均
SB - 7	2×2	2.70 × 4.35～4.45	1.35	2.10～2.25	12.1	N - 82° - E	棟方向は平均
SB - 8	2×2	2.80 × 4.00	1.30～1.50	1.95～2.05	11.2	N - 86° - E	
SB - 9	1×2	2.15 × 3.05	2.15	1.40～1.65	6.6	N - 6° - E	
SB - 10	2×3	3.30 × 3.40	1.55～1.75	0.90～1.55	11.2	N - 5° - E	
SB - 11	2×7	4.00 × 14.35	2.00	1.90～2.25	55.2	N - 84° - E	
SB - 12	2×5	5.00 × 11.50	2.50	3.00	57.0	N - 6° - W	

土器6点,西から1間目の柱穴から土師質土器20点が出土しているが,復元図示できるものはなかった。

SA - 9 (Fig.95)

調査区西部, SA - 8の南隣で検出した東西堀(N - 61° - W)である。3間分(5.85m)を検出し,柱間は1.80~2.10mである。柱穴は径20~30cmの円形で,柱径は10cm前後とみられる。埋土は暗灰褐色粘土質シルトでマンガン粒を比較的多く含むものであった。出土遺物は皆無であった。

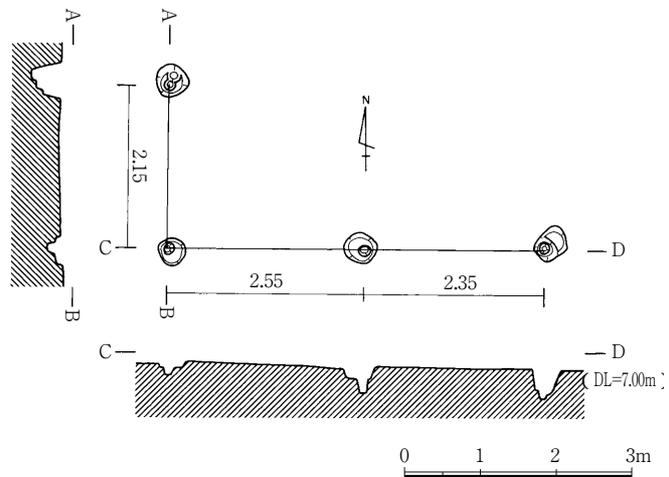


Fig.87 SA - 1

SA - 10 (Fig.96)

調査区中央部, SB - 3・4と重なり合った状態で検出した東西堀(N - 85° - E)である。検出したのは3間分であるが,東から1間目の柱穴は近代の暗渠(SD - 31)によって削

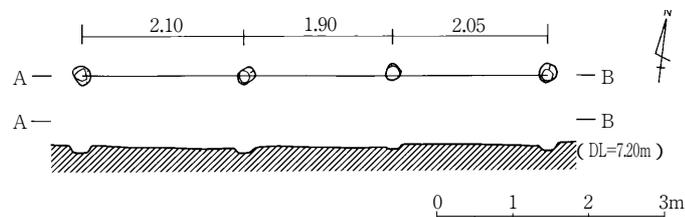


Fig.88 SA - 2

平されたものとみられ,実際は4間分(7.95m)とみられ,柱間は2.05m前後ではないかと考えられる。

柱穴は比較的大きく径40~65cmの円形で柱径は15cm前後とみられる。埋土は灰黄色粘土質シルトでマンガン粒を僅かに含むものであった。遺物は各柱穴から出土しており瓦器1点,土師質土器33点,青磁1点があったが,復元図示できるものはなかった。

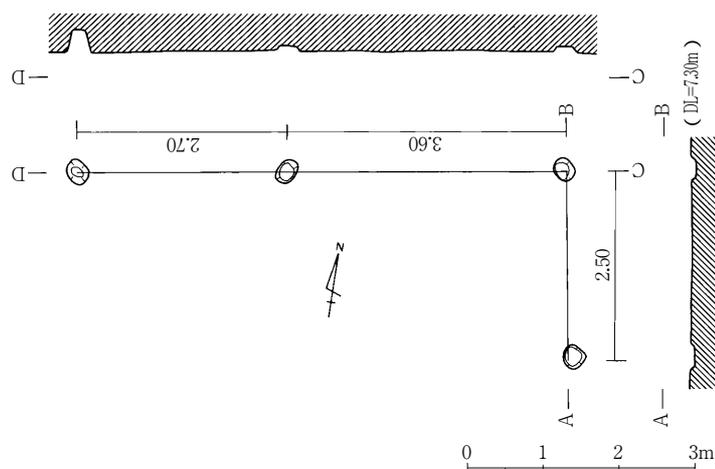


Fig.89 SA - 3

iii 土坑

SK - 1

調査区北部, SK - 2の東側で検出した小さな隅丸方形の土坑である。長辺0.63m,短辺0.62m,深さ17cmを測り,長軸方向はN - 53° - Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は単一で灰黄褐色粘土質シルトにマンガン粒を比較的多く含むものであった。出土遺物には緑釉陶器1点と土師質土器3点がみられ,緑釉陶器(138)1点が図示できた。

出土遺物

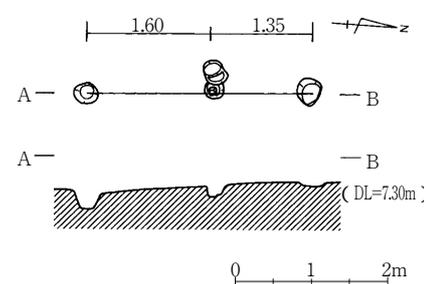


Fig.90 SA - 4

3. 遺構と遺物

緑釉陶器 (Fig.104 - 138)

皿で、底部の一部が残り、底径7.0cmを測る。底部が削り出し高台で、体部は内湾気味に延びる。高台外面から内面にかけて黄緑色の釉を施し、器面はオリブ黄色を呈する。胎土はやや粗く、黒色細粒を多く含む。焼成は良好である。

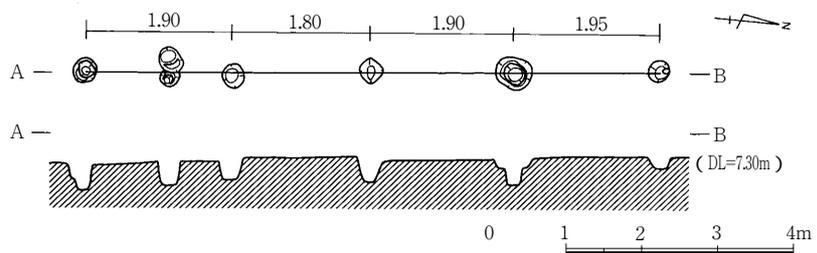


Fig.91 SA - 5

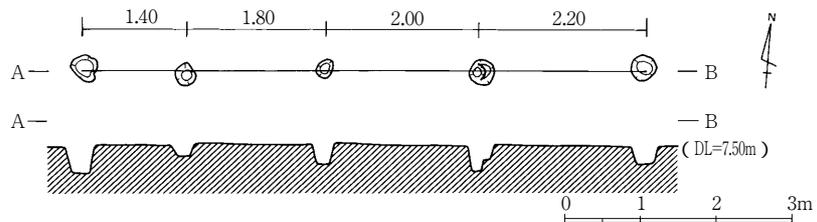


Fig.92 SA - 6

SK - 2 (Fig.97)

調査区北部, SK - 1の西側で検出した土坑で、その大半は調査区外にあり、平面形は不明確であるが、隅丸方形を呈しているのではないかとみられる。長辺3.00m以上, 短辺2.10m以上, 深さ15cmを測り、長軸方向はN - 78° - Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は単一で灰白色粘土質シルトにマンガン粒と褐色粘土質シルトのブロックを僅かに含むものであった。出土遺物には土師質土器18点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

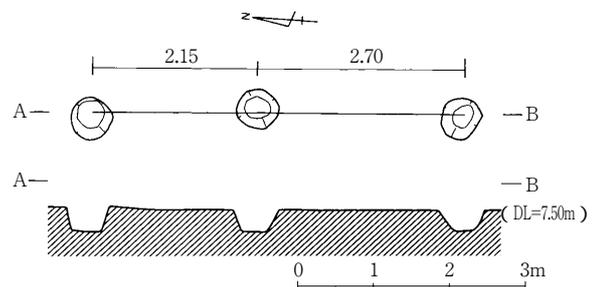


Fig.93 SA - 7

SK - 3 (Fig.98)

調査区北部, SK - 1の東側で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.30m, 短径1.00m, 深さ16cmを測り、長軸方向はN - 67° - Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトにマンガン粒を若干含むものであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

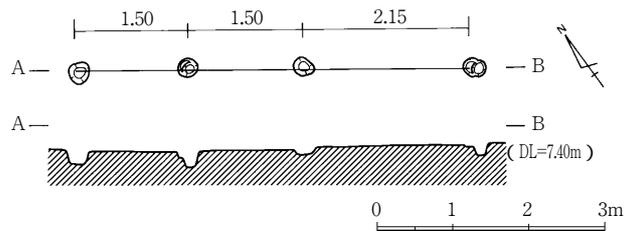


Fig.94 SA - 8

SK - 4

調査区北部, SA - 1の南隣で検出した方形の土坑で、西側を近代の暗渠 (SD - 31)に掘削されていた。長辺1.03m以上, 短辺0.53m, 深さ8cmを測り、長軸方向はN - 67° - Eを示す。断面形

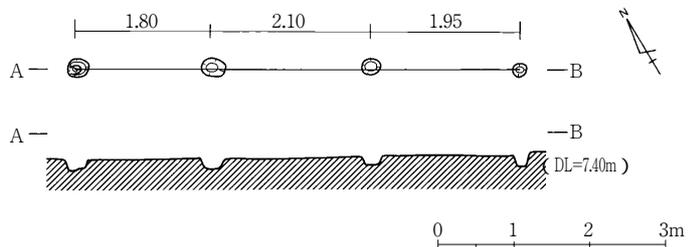


Fig.95 SA - 9

は舟底状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトにマンガン粒を若干含むものであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが、復元図示できたものはなかった。

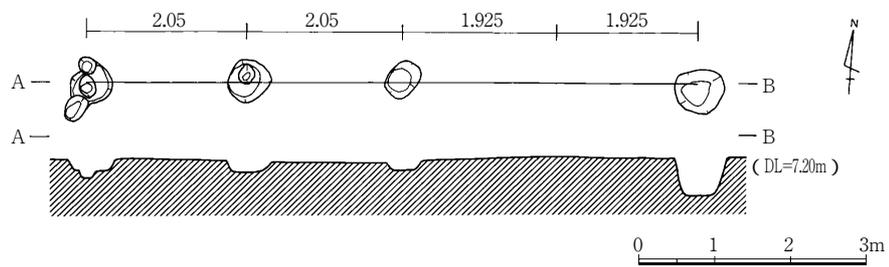


Fig.96 SA - 10

SK - 5

調査区北部, SA - 3の南側で検出した舟形の土坑である。長辺3.21m, 短辺0.51m, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN - 83° - Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトにマンガン粒を若干含むものであった。出土遺物には土師質土器2点, 青磁1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK - 6

調査区中央部やや北より, SK - 5の南側で検出した不整楕円形の土坑で, 西側のピットに切られていた。長径1.01m, 短径0.81m, 深さ12cmを測り, 長軸方向はN - 24° - Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は単一で灰白色粘土質シルトと褐灰色粘土質シルトのブロックでマンガン粒を比較的多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK - 7 (Fig.99)

調査区中央部やや北より, SK - 6の東側で検出した楕円形の土坑で, SK - 27に切られていた。長径0.97m, 短径0.72m, 深さ36cmを測り, 長軸方向はN - 11° - Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は上下2層に分層され, 上層が灰白色粘土質シルトに浅黄橙色粘土質シルトのブロックを比較的多く含むもの, 下層が灰白色粘土質シルトに浅黄橙色粘土質シルトのブロックを多く含むもの

Tab.3 林口遺跡堀・柵列跡計測表

遺構番号	規 模			方 向 (NはGN)	備 考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA - 1	4	7.05	2.15 ~ 2.55		L字形
SA - 2	4	6.05	1.90 ~ 2.10	N - 83° - E	
SA - 3	4	8.80	2.50 ~ 3.60		L字形
SA - 4	3	2.95	1.35 ~ 1.60	N - 2° - W	
SA - 5	5	7.55	1.80 ~ 1.95	N - 6° - E	
SA - 6	5	7.40	1.40 ~ 2.20	N - 82° - E	
SA - 7	3	4.85	2.15 ~ 2.70	N - 6° - W	
SA - 8	4	5.15	1.50 ~ 2.15	N - 57° - W	
SA - 9	4	5.85	1.80 ~ 2.10	N - 61° - W	
SA - 10	4	7.95	1.93 ~ 2.05	N - 85° - E	

3. 遺構と遺物

であった。出土遺物は皆無であった。

SK - 8

調査区中央部西より, SD - 1の東側で検出したほぼ円形の土坑である。径0.98m, 深さ8cmを測り, 断面形は逆台形状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトに黄橙色粘土質シルトの小ブロックを含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SK - 9 (Fig.100)

調査区中央部西より, SK - 8の南側で検出したほぼ円形の土坑である。径1.84m, 深さ20cmを測り, 断面形は逆台形状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトにマンガン粒と黄橙色粘土質シルトの小ブロックを僅かに含むものであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK - 10 (Fig.101)

調査区中央部西より, SK - 9の南側で検出したほぼ円形の土坑である。径1.45m, 深さ10cmを測り, 断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰白色粘土質シルトに褐色粘土質シルトのブロックを少量含むものであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK - 11

調査区中央部西より, SK - 10の南側で検出した不整楕円形の土坑である。長径0.92m, 短径0.82m, 深さ5cmを測り長軸方向はN - 50° - Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰白色粘土質シルトにマンガン粒を少量含むものであった。出土遺物には弥生土器1点, 土師質土器2点がみられ, 弥生土器(139)1点が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.104 - 139)

甕で口縁部から胴部にかけての約三分の一が残存し, 口径17.1cm, 胴部最大径18.8cmを測る。胴部は内湾して上がり, 最大径は上部三分の一にあるとみられる。口縁部は胴部からくの字形をなし, 外反気味に短く延び, 端部は内傾する面をなす。胴部外面には斜め方向のタタキを施した後タテ方向のハケ調整を加える。口縁部から内面にかけてもタテ方向のハケ調整を施す。

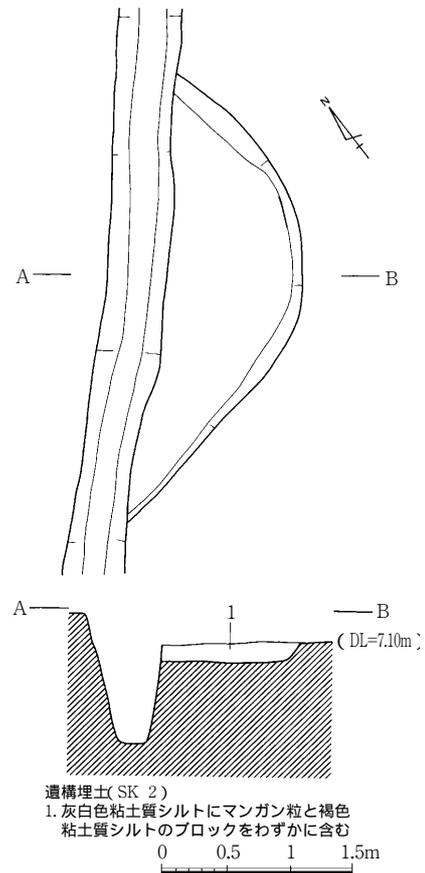


Fig.97 SK - 2

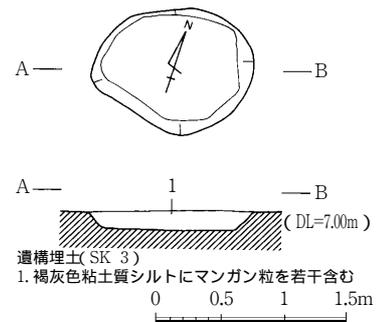


Fig.98 SK - 3

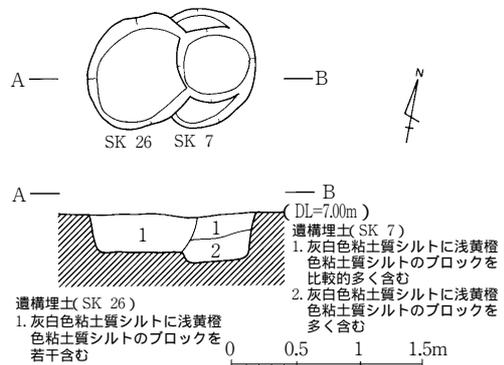


Fig.99 SK - 7・26

色調は、内面が黄灰色ないし暗灰色、外面がにぶい橙色を呈する。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良い。

SK - 12 (Fig.102)

調査区南部，SB - 7とSA - 6と重複して検出した不整形の土坑で，基底面からSA - 6の柱穴を検出した。長径1.32m，短径1.20m，深さ14cmを測り，長軸方向はN - 18° - Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトに炭化物とマンガン粒を僅かに含むものであった。出土遺物には東播系須恵器1点，瓦器1点，土師質土器40点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

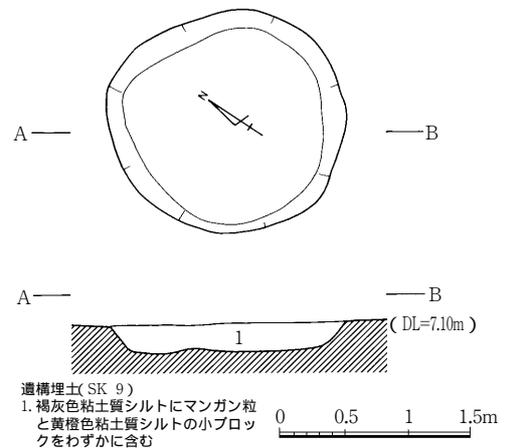


Fig.100 SK - 9

SK - 13

調査区南部，SK - 12の南側で検出した不整形の土坑で，南西壁でSB - 8の柱穴を検出した。長辺1.82m，短辺1.30m，深さ17cmを測り，長軸方向はN - 45° - Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトにマンガン粒を僅かに含むものであった。出土遺物には土師質土器30点がみられ，土師質土器の羽釜(140)1点が図示できた。

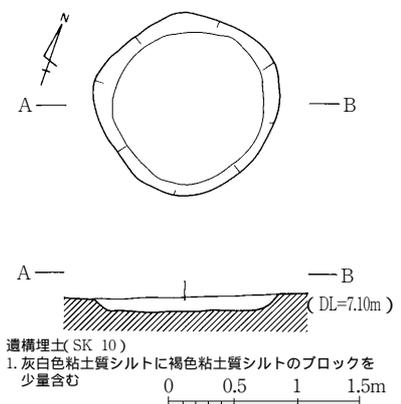


Fig.101 SK - 10

出土遺物

土師質土器 (Fig.104 - 140)

羽釜の口縁部の破片である。口縁部はやや内傾し，外面には断面三角形の鋸が付く。口縁部はヨコナデ調整で，胴部は強いナデ調整を施す。外面には煤の付着が見られる。色調は橙色ないしにぶい橙色を呈し，胎土には0.5～2.0mm大の砂粒を含む。焼成は良好である。

SK - 14

調査区南部，SK - 13の西側で検出した不整形の土坑である。長径1.11m，短径0.66m，深さ25cmを測り，長軸方向はN - 27° - Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は単一で灰黄褐色粘土質シルトにマンガン粒を僅かに含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SK - 15

調査区西部，SD - 2の西側で検出した舟形の土坑である。長辺2.50m，短辺0.28m，深さ8cmを測り，長軸方向はN - 3° - Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰黄褐色粘土質シルトにマンガン粒を僅か含むものであった。出土遺物には須恵器2点，東播系須恵器1点，土師質土器3点がみられ，須恵器(141)1点が図示できた。

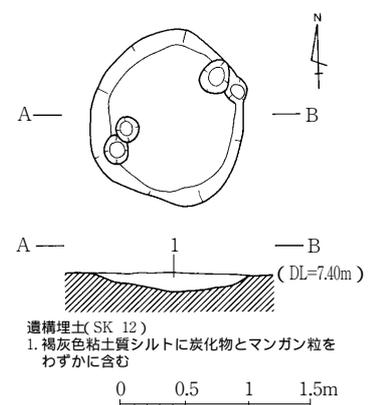


Fig.102 SK - 12

3. 遺構と遺物

出土遺物

須恵器 (Fig.104 - 141)

杯蓋の口縁部の破片である。天井部は丸みを有し、稜は僅かな屈曲によって判別できる程度で口縁部は外下方に下り、端部は丸い。口縁部高は1.5cmを測る。色調は内外面とも青灰色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。焼成は良い。

SK - 16 (Fig.103)

調査区西部, SD - 17を切った状態で検出したほぼ円形の土坑である。径1.90m, 深さ76cmを測り, 断面形は逆台形状を呈する。埋土は上下2層に分層され, 上層が暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を含み, 下層が黄灰色粘土質シルトにマンガン粒を若干含むものであった。出土遺物は比較的多く, 瓦器1点, 土師質土器43点, 備前焼1点, 白磁2点, 青磁6点がみられ, 備前焼の鉢(142)1点と青磁の碗(143・144)2点が図示できた。

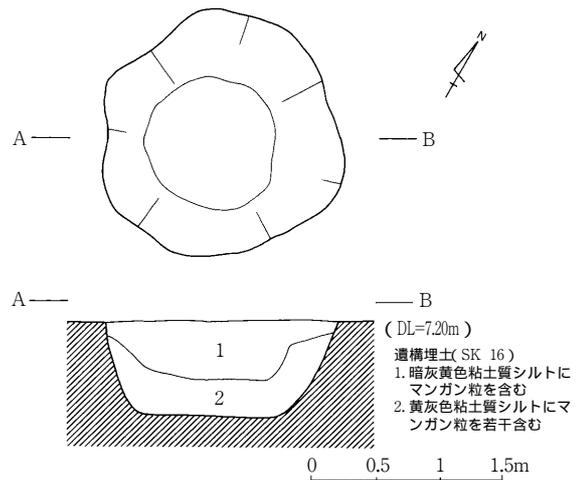


Fig.103 SK - 16

出土遺物

備前焼 (Fig.104 - 142)

鉢で, 約三分の一が残存しており, 口径22.0cm, 器高6.9cm, 底径13.2cmを測る。底部は中窪みで, 体部が斜め外上方に上がり屈曲し, 口縁部は短く内傾する。端部は外傾する凹面をなす。底部外面は未調整, 他は回転ナデ調整を施し, 体部外面下端には静止ヘラ削りを加える。体部上端には重ね焼きの痕跡が残る。色調は, 内面が暗紫灰色, 外面が暗赤灰色を呈し, 胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。

青磁 (Fig.104 - 143・144)

143は龍泉窯系青磁碗の口縁部の破片で, 口径16.1cmを測る。口縁部は内湾気味に上がり, 外面には細蓮弁文が施される。器面には青緑色の釉を施す。胎土は粗く, 黒色細粒を含む。焼成は良い。144も龍泉窯系青磁碗の底部の破片で, 底径5.8cmを測り, 底部は削り出し高台である。器面には青緑色の釉を施し, 高台内面を釉ハギする。胎土には黒色細粒を多く含み, 焼成は良い。

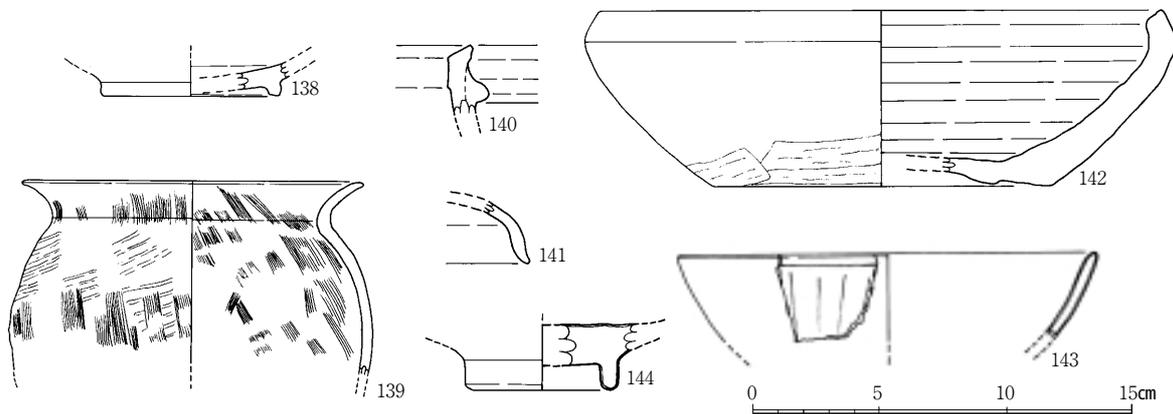


Fig.104 SK - 1・11・13・15・16出土遺物実測図

iv 溝跡

SD - 1 (Fig.105)

調査区中央部西よりで検出した溝で、屋敷跡を区画するものと考えられる。幅1.50～2.60m、深さ0.78～1.59mで、基底面は南から北に向って傾斜し、特に北側では一段深くなっており、標高5.528～6.335mを測り、39.30mを検出した。溝はほぼ同じ位置で掘り返しが行われたものとみられ、部分的に旧溝の側壁と基底面が遺存していた。断面形は基本的に逆台形状を呈するが基底面が一段深くなった箇所も見受けられた。埋土は場所により堆積状態が異なるものの、基本的に上層部が灰黄褐色ないし褐灰色粘土質シルト、下層が灰色粘土となり、当時は水があったものと考えられ、また、砂の堆積が認められる箇所もあり水が流れていた可能性も考慮される。出土遺物は溝の規模の割には少なく、器種の総数は須恵器1点、瓦器2点、土師質土器133点、瓦質土器3点、常滑焼5点、白磁2点、青磁2点、砥石1点であり、瓦器(145)1点、土師質土器(146～148)3点、青磁(149・150)2点、砥石(151)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.106 - 145)

椀で、体部と口縁部が残存し、口径16.0cmを測る。体部は内湾気味に上がり口縁部に至る。内面には連結輪状のヘラ磨き、口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面には指押さえの痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土には黒色砂粒を多く含む。焼成は良好である。

Tab.4 林口遺跡中世土坑計測表

遺構番号	平面形	規 模			長軸方向 (NはGN)	時期	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK - 1	隅丸方形	0.63	0.62	0.17	N - 53° - E	中世	
SK - 2	隅丸方形	(3.00)	(2.10)	0.15	N - 78° - E	"	
SK - 3	不整楕円形	1.30	1.00	0.16	N - 67° - E	"	
SK - 4	方形	(1.03)	0.53	0.08	N - 67° - E	"	
SK - 5	舟形	3.21	0.51	0.10	N - 83° - E	"	
SK - 6	不整楕円形	1.01	0.81	0.12	N - 24° - W	"	
SK - 7	楕円形	0.97	0.72	0.36	N - 11° - W	"	
SK - 8	円形	0.98		0.08		"	
SK - 9	円形	1.84		0.20		"	
SK - 10	円形	1.45		0.10		"	
SK - 11	不整楕円形	0.92	0.82	0.05	N - 50° - E	"	
SK - 12	不整円形	1.32	1.20	0.14	N - 18° - E	"	
SK - 13	不整形	1.82	1.30	0.17	N - 45° - E	"	
SK - 14	不整楕円形	1.11	0.66	0.25	N - 27° - E	"	
SK - 15	舟形	2.50	0.28	0.08	N - 3° - E	"	
SK - 16	円形	1.90		0.76		"	

3. 遺構と遺物

土師質土器 (Fig.106 - 146 ~ 148)

146は杯で、口径13.8cm、器高3.9cm、底径7.0cmを測る。底部が中窪みとなり、体部は斜め上方に上がり、口縁部は僅かに外反する。成形は粘土紐巻き上げロク口成形で、器面は回転ナデ調整を施す。特に内面は丁寧である。底部の切り離しは回転系切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色で、胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良好である。147・148は小皿である。147は口径7.1cm、器高1.5cm、底径4.6cmを測る。底部はやや中窪みで、体部は斜め上方に上がり口縁部に至る。成形はロク口水挽とみられる。器面は摩耗しており調整は不明瞭であるが、底部の切り離しは回転系切りとみられる。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には細砂粒を幾分含む。焼成はやや不良である。148は底部と体部が残存し、底径4.0cmを測る。底部は中窪みとなり、体部は斜め上方に上がる。成形は粘土紐巻き上げロク口成形とみられ、器面には回転ナデ調整が施される。底部の切り離しは回転系切りである。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良い。

青磁 (Fig.106 - 149・150)

149・150は龍泉窯系の青磁碗である。149は口径16.8cmを測る。口縁部は斜め外上方へほぼ真直ぐ上がる。内面にはヘラと櫛による劃花文が施される。器面には淡緑色の釉を施す。胎土は精良で、焼成は良好である。150は口縁部の破片で、斜め外上方を向く口縁部外面には鎬蓮弁文が施される。器面には青緑色釉を施す。胎土は精良で黒色砂粒を若干含み、焼成は良好である。

石製品 (Fig.106 - 151)

砂岩を使用した扁平な砥石である。表面と側面2面を使用している。

SD - 2 (Fig.105)

調査区中央部西より、SD - 1の西隣で検出した溝で、SD - 1とはほぼ並行している。幅3.18~4.40m、深さ0.740~1.328mで、基底面は溝中央部が最も高くそこを境に南と北に向って傾斜しており、標高5.656~6.248mを測り、35.60mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は基本的に上層部が褐灰色ないし黄灰色粘土質シルト、下層が灰色粘土となり、SD - 1同様当時は水があったものと考えられる。出土遺物は溝の規模の割には少なく、器種の総数は弥生土器1点、土師器1点、須恵器17点、瓦器14点、土師質土器321点、瓦質土器1点、常滑焼5点、白磁1点、青磁4点、砥石1点などであ

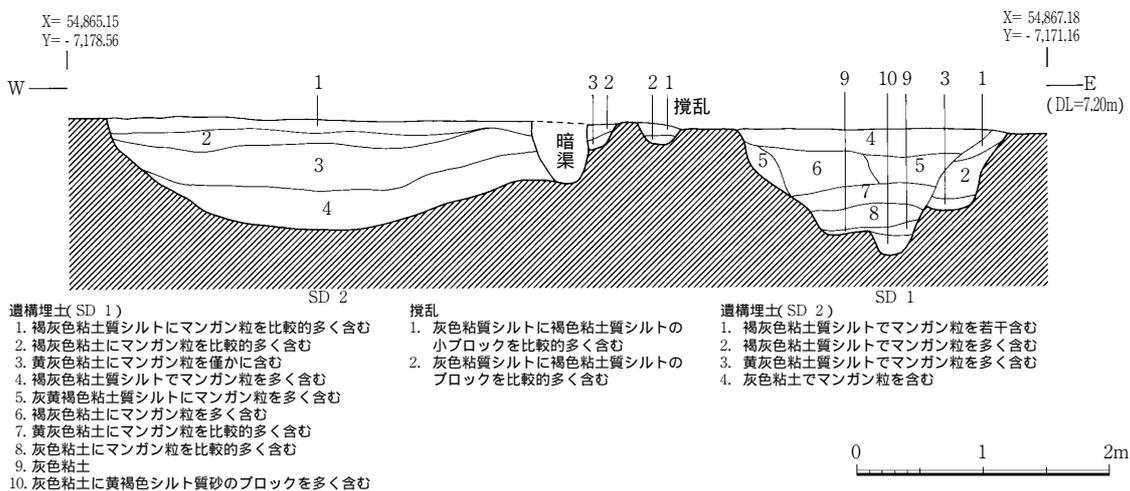


Fig.105 SD - 1・2

り、弥生土器(152)1点、土師器(153)1点、須恵器(154)1点、東播系須恵器(155~157)3点、土師質土器(158~161)4点、瓦質土器(162)1点、備前焼(163)1点、白磁(164)1点、青磁(165)1点、石鍋(166)1点、下駄(167)1点が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.107 - 152)

壺で、約三分の二が残存し、口径16.0cm、器高28.5cm、胴部最大径28.2cm、底径3.0cmを測る。底部は丸底に近く、胴部は球体をなし内湾して上がり、屈曲して外傾する頸部となり、口縁部は大きく外反する。器面は摩耗しており調整は不明である。色調は、内面が黒色、外面が浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は不良である。

土師器 (Fig.107 - 153)

甕の口縁部の破片である。口縁部はくの字形をなし、端部を内側につまみ出す。口縁部はヨコナデ調整で、他は摩耗しており調整不明である。色調は内外面ともにぶい橙色を呈し、胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良い。

須恵器 (Fig.107 - 154)

提瓶の頸部と肩部の約二分の一が残存している。肩部は肩が張り、頸部は屈曲して直立する。肩部外面にはボタン状に退化した把手が付く。器面は回転ナデ調整で、肩部外面にはハダ荒れがみられる。色調は、内面が青灰色、外面が灰白色を呈し、胎土には黒色砂粒を多く含む。焼成は良好である。

東播系須恵器 (Fig.107 - 155~157)

155・156は碗の口縁部の破片である。2点とも口縁部は斜め外上方を向き、端部は丸い。器面は回転ナデ調整で、口唇部から内面に自然釉がかかる。色調は、内面が灰オリーブ色、外面が灰白色ないし灰色を呈し、胎土には黒色砂粒を多く含む。焼成は良好である。157は片口鉢の底部の破片で、底径9.6cmを測る。底部はやや中窪みで、体部は斜め外上方へほぼ真直ぐ上がる。器面は回転ナ

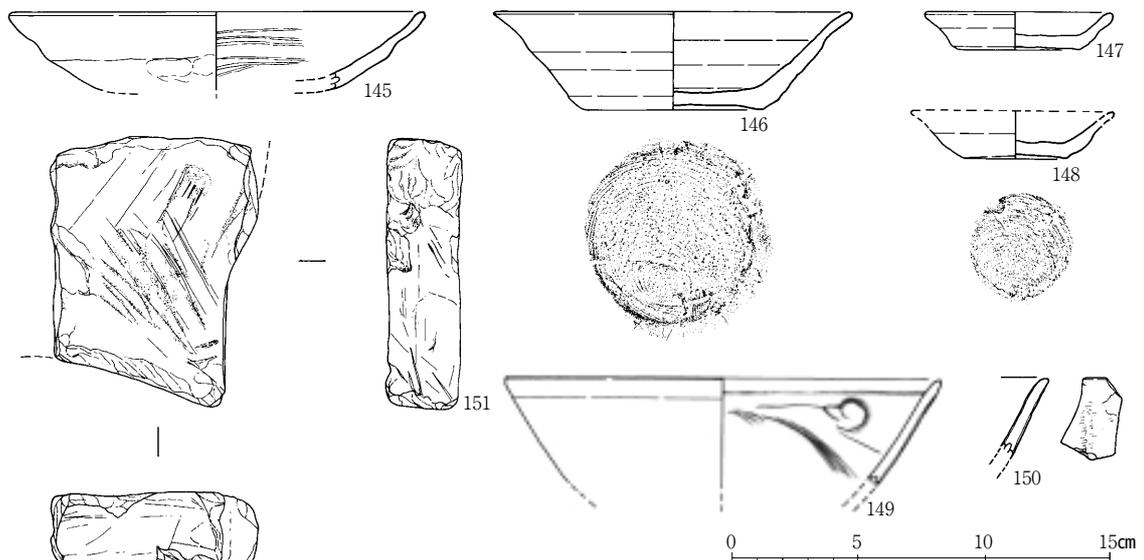


Fig.106 SD - 1出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

デ調整で、底部切り離しは回転ヘラ切りによる。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土には白色・黒色砂粒を多く含む。焼成は良好である。

土師質土器 (Fig.107 - 158 ~ 161)

158~160は杯である。158は口径14.0cm, 器高4.3cm, 底径8.6cmを測る。底部はほぼ平らで、体部は内湾気味に上がり、口縁部は斜め外上方を向く。成形は粘土紐巻き上げロク口成形で、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。色調は内外面とも灰黄色を呈し、胎土には砂粒を比較的多く含む。焼成はやや不良である。159は口径14.5cm, 器高4.1cm, 底径7.5cmを測る。底部は中窪みとなり、体部は斜め外上方へ上がり、口縁部はやや角度を変えて外上方を向く。成形は粘土紐巻き上げロク口成形であるが、器面は摩耗し調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し、胎土は精良で、細砂粒を含む。焼成はやや不良である。160は底部の破片で、底径7.6cmを測る。底部はベタ高台で外底面はやや凸状を呈し、体部は屈曲して斜め外上方へ延びるとみられる。成形はロク口水挽で、外面には回転ナデ調整が施され、内底面には水挽の痕が明瞭に残る。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が浅黄色を呈する。胎土には細砂粒を含み、焼成は良好である。161は羽釜の口縁部の破片である。口縁部は内傾し、外面には断面三角形の鏝がつく。口縁部はヨコナデ調整、鏝下半はナデ調整を施す。また、鏝下半には煤が付着する。色調は、内面が鈍い橙色、外面がにぶい橙色ないし黒褐色を呈する。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

瓦質土器 (Fig.107 - 162)

杯の口縁部の破片である。体部は内湾して上がり、口縁部で外上方を向く。器面は摩耗しており調整は不明である。色調は、内面が黄灰色、外面が暗黄灰色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。

備前焼 (Fig.107 - 163)

甕の底部とみられる破片である。底部は平らで、胴部は屈曲して外上方へ上がる。器面は回転ナデ調整、底部外面にはナデ調整が施される。色調は、内面が灰褐色、外面がにぶい橙色を呈する。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

白磁 (Fig.107 - 164)

皿の口縁部で、口径11.2cmを測る。口縁部はやや外反し、器面には乳白色の釉を施す。口唇部は釉八ギ(口禿)が行われる。胎土はやや粗いが焼成は良好である。

青磁 (Fig.107 - 165)

碗の口縁部の破片で、口縁部は外上方にほぼ真直ぐ延びる。器面には淡青緑色の釉を施し、細かな貫入がみられる。胎土は精良で黒色砂粒を多く含み、焼成は良好である。

石製品 (Fig.107 - 166)

石鍋で、鏝と胴部の一部が残存する。胴部が外上方へ上がり、口縁部外面には断面台形状の鏝を作り出す。器面にはタテ方向、鏝下端はヨコ方向のノミの痕が残る。

木製品 (Fig.107 - 167)

スギの正目材を使用した4連歯下駄で、全長18.4cm, 全幅10.5cm, 全厚3.2cmを測る。前壺は前歯よ

り約1.5cm前の中央、後壺は後歯内側に接してあけている。歯は台とほぼ同じ幅で、断面方形を呈し、左上がりに作られていることから右足用とみられる。平面形は長さに対し幅が狭く前端と後端が半円形を呈する。

SD - 3 (Fig.108)

調査区中央部で検出した南北溝，位置関係，埋土からするとSD - 15と同一の可能性が強い。幅

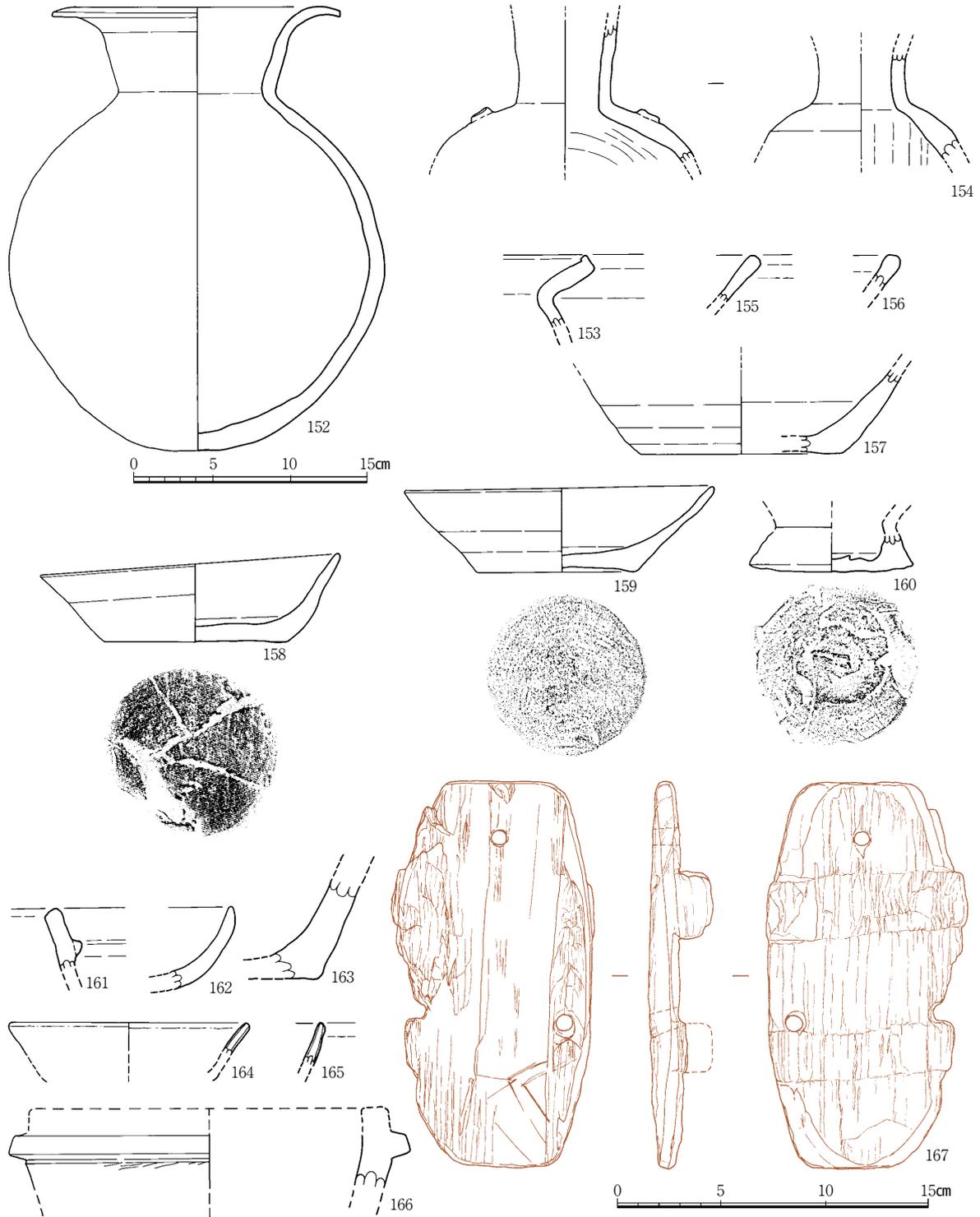


Fig.107 SD - 2出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

0.40～1.40m、深さ7～36cmで、基底面は南から北に傾斜しており標高6.491～6.778mを測り、49.40mを検出した。断面形は舟底状ないし逆台形状を呈する。埋土は溝の遺存状態の良いところでは2層に分層され、上層が灰白色粘土質シルトにマンガン粒を比較的多く含み、下層が灰白色粘土質シルトに黄橙色粘土質シルトのブロックを多く含んでいた。出土遺物には弥生土器5点、須恵器2点、瓦器6点、東播系須恵器1点、土師質土器101点、瓦質土器1点がみられ、弥生土器(168)1点、瓦器(169・170)2点、瓦質土器(171)1点が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.111 - 168)

甕で、胴部と口縁部が残存し、口径14.8cm、胴部最大径21.0cmを測る。胴部は倒卵形を呈し、ほぼ中位に最大径を有する。口縁部は屈曲してくの字状をなし、端部はヨコナデ調整によって下端がややたれる。内面にはヨコ方向ないし斜め方向のハケ調整、外面には胴部にヨコ方向のタタキを施した後口縁部と上胴部にタテ方向のハケ調整を加える。胴部外面中位以下に煤の付着がみられる。色調は内外面とも橙色で、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。

瓦器 (Fig.111 - 169・170)

2点とも小皿である。169は口径8.4cm、器高1.8cmを測る。底部は丸底で、体部が内湾気味に上がり、口縁部はヨコナデ調整によってやや外反する。内面は、剥離と摩耗がみられ、不明瞭で、外面は体部以下に指押えの痕が明瞭に残り、口唇部から口縁部外面にはヨコナデ調整が施される。色調は、内面が黄灰色、外面が灰白色を呈する。胎土には細砂粒を含み、焼成は良い。170は口径8.3cm、器高1.5cmを測る。底部は丸底で、体部が内湾気味に上がり、口縁部はヨコナデ調整によってやや外反する。体部外面には指押えの痕が明瞭に残り、外面口縁部から内面にかけてヨコナデ調整を施す。色調は、内面が灰白色、外面が黒色を呈する。胎土には細砂粒を比較的多く含み、焼成は良い。

瓦質土器 (Fig.111 - 171)

三足鍋の足で、付け根を中心に残る。断面はほぼ円形で、径2.6cmを測る。器面はナデ調整を施す指押えの痕が付け根を中心に残る。色調は灰色を呈し、胎土はやや粗く、焼成は良い。

SD - 4 (Fig.108)

調査区中央部、東よりで検出した南北溝である。幅50～60cm、深さ4～13cmで、基底面は南から北に傾斜しており標高6.751～6.844mを測り、26.40mを検出した。断面形は舟底状ないし逆台形状を呈する。埋土は単一で灰黄褐色粘土質シルトにマンガン粒と黄橙色粘土質シルトの小ブロックを含むものであった。出土遺物には須恵器3点、黒色土器2点、東播系須恵器1点、土師質土器43点がみられ、東播系須恵器(172)1点、土師質土器(173)1点が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.111 - 172)

片口鉢で、体部と口縁部が残存し、口径25.8cmを測る。体部は斜め外上方に上がり、そのまま口縁部に至る。口縁端部は肥厚する。口縁部と体部外面は回転ナデ調整、体部内面はナデ調整を施す。色調は、内面が灰色、外面が明オリブ色を呈し、胎土には砂粒と1cm大の小石を含む。焼成は良好である。

土師質土器 (Fig.111 - 173)

皿で、口径12.4cm、器高2.0cm、底径9.0cmを測る。底部はやや凸状をなし、口縁部は外反する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ、器面は回転ナデ調整を施す。底部切り離しは回転ヘラ切りである。色調は、内面が橙色、外面が浅黄橙色を呈し、胎土には細砂粒を含む。焼成は良い。

SD - 5 (Fig.108)

調査区北部で検出したL字形をなす溝で、途中で途切れるが同一の溝とみられる。幅40～70cm、深さ8～13cmで、基底面は南から北に傾斜しており標高6.687～6.843mを測り、12.80mを検出した。断面形は舟底状ないし逆台形状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物には須恵器3点、黒色土器1点、瓦器1点、土師質土器34点がみられたが復元図示できるものはなかった。

SD - 6 (Fig.108)

調査区北部で検出した東西溝で、西側は調査区外へ続いている。幅40～64cm、深さ8～14cmで、基底面は東から西に傾斜しており標高6.708～6.768mを測り、12.60mを検出した。断面形は舟底状ないし逆台形状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが復元図示できるものはなかった。

SD - 7

調査区北部で検出した短い東西溝で、北端部はSD - 6に切られる。幅30～40cm、深さ8～16cmで、基底面は南から北に傾斜しており標高6.716～6.801mを測り、4.00mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰白色粘土質シルトにマンガン粒を比較的多く含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SD - 8 (Fig.109)

調査区中央部西よりで検出した東西溝で、その位置関係からSD - 11と関連する可能性も考えられる。幅50～76cm、深さ12～26cmで、基底面は南から北に傾斜しており標高6.652～6.788mを測り、16.42mを検出した。断面形は逆台形状を呈する。埋土は単一で灰白色粘土質シルトに炭化物とマンガン粒を含むものであった。出土遺物には弥生土器3点、須恵器2点、瓦器1点、土師質土器48点がみられたが復元図示できるものはなかった。

SD - 9

調査区中央部東よりで検出した東西溝で、途中で途切れるが同一の溝とみられる。幅10～35cm、深さ3～7cmと浅く、基底面はほぼ平坦で標高6.772～6.810mを測り、11.20mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトに黄橙色粘土質シルトの小ブロックとマンガ

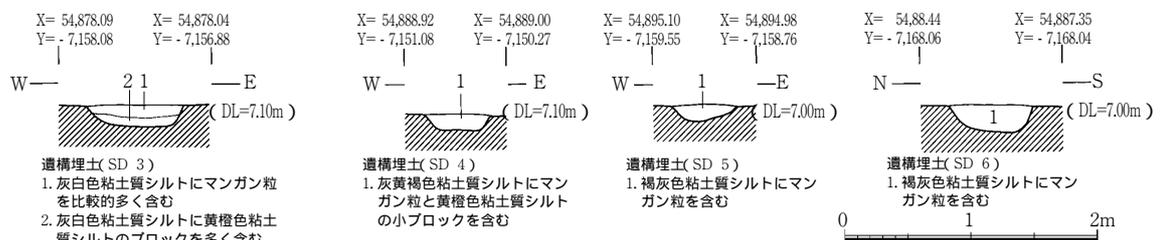


Fig.108 SD - 3～8

3. 遺構と遺物

ン粒を含むものであった。出土遺物には土師質土器28点がみられたが復元図示できるものはなかった。

SD - 10 (Fig.109)

調査区東部で検出した東西溝で、東側は調査区外へ延びる。幅30～35cm、深さ2～11cmと浅く、基底面は西から東へ傾斜しており標高6.711～6.811mを測り、7.00mを検出した。断面形は逆台形状を呈する。埋土は単一で暗灰黄色粘土質シルトに灰色粘土質シルトのブロックを含むものであった。出土遺物には瓦器3点、土師質土器14点がみられたが復元図示できるものはなかった。

SD - 11 (Fig.109)

調査区南部で検出したL字形をなす溝で、東側は調査区外へ延び、前述のようにSD - 8との関連も考慮される。幅30～80cm、深さ22～36cmで、基底面は北から南へ傾斜しており標高6.823～6.967mを測り、8.60mを検出した。断面形は逆台形状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトに黄橙色粘土質シルトの小ブロックとマンガン粒を含むものであった。出土遺物には東播系須恵器1点、瓦器4点、土師質土器11点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 12

調査区南部で検出した短い南北溝である。幅25～35cm、深さ9～13cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.053～7.101mを測り、4.85mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトにマンガン粒と炭化物を比較的多く含むものであった。出土遺物には瓦器6点、土師質土器74点、瓦質土器1点、青磁2点がみられ、青磁(174・175)2点が図示できた。

出土遺物

青磁 (Fig.111 - 174・175)

2点とも龍泉窯系の青磁碗である。174は口縁部の破片で、口径16.0cmを測る。体部は内湾気味に上がり、口縁部でやや外反する。内面にはヘラによる片彫りの劃花文が施される。器面には淡青緑色の釉を施す。また、全面に貫入がはいる。胎土は精良で、焼成は良好である。175も口縁部の破片で、174とほぼ同形態をなし、内面にはヘラによる片彫りの劃花文が施され、外面は回転ヘラ削り調整の痕が確認できる。器面にはやくすんだ青緑色釉を施す。胎土は精良で、焼成は良好である。

SD - 13

調査区南部で検出した南北溝で、南端は調査区外へ延びる。幅25～30cm、深さ9～12cmで、基底面はほぼ平坦で標高7.067～7.097mを測り、6.00mを検出した。断面形は逆台形状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物には瓦器1点、土師質土器6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

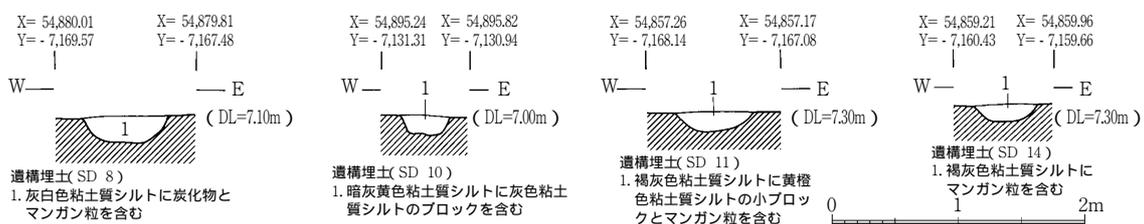


Fig.109 SD - 8・10・11・14

SD - 14 (Fig.109)

調査区南部で検出したL字形をなす溝で、南端は調査区外へ延びる。幅35～70cm、深さ12～16cmで、基底面は南から北へ傾斜しており標高6.987～7.023mを測り、5.20mを検出した。断面形は逆台形状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトにマンガン粒を含むものであった。出土遺物には瓦器4点、土師質土器76点、瓦質土器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 15

調査区南部で検出した短い南北溝で、南端は調査区外へ延び、位置関係からするとSD - 3と同一の可能性ある。幅55～70cm、深さ15～29cmで、基底面は北から南へ傾斜しており標高6.855～6.995mを測り、1.70mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で褐灰色粘土質シルトに暗褐色と黄橙色粘土質シルトの小ブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器1点、須恵器1点、瓦器1点、土師質土器9点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 16

調査区南西端部で検出した東西溝で、近代の暗渠(SD - 28)に切られる。幅15～42cm、深さ9～13cmで、基底面は西から東へ傾斜しており標高6.928～7.145mを測り、13.90mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SD - 17 (Fig.110)

調査区南西端部で検出した東西溝で、北端は調査区外へ延び、SK - 16に切られていた。幅0.60～1.30m、深さ59～71cmで、基底面は東から西へ傾斜しており標高6.348～6.468mを測り、16.70mを検出した。断面形は逆台形状を呈する。埋土は3層に分層され、上層から暗灰黄色粘土質シルト、黄褐色粘土質シルト、暗灰黄色粘土質シルトで、それぞれマンガン粒を含んでいた。出土遺物には土師器1点、須恵器1点、土師質土器6点、常滑焼1点がみられ、土師器(176)1点と須恵器(177)1点が図示できた。

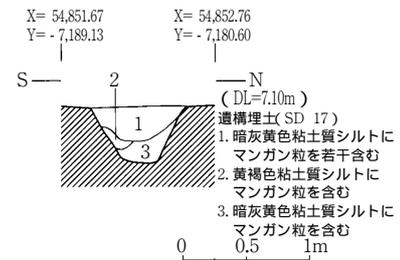


Fig.110 SD - 17

出土遺物

土師器 (Fig.111 - 176)

杯蓋で、天井部と口縁部が残存し、口径15.0cmを測る。天井部は丸みを有し、口縁部で外下方にやや外反し、端部を下方に曲げる。器面はヨコナデ調整を施した後、天井部と内面にナデ調整を加える。色調は内外面とも黄橙色を呈し、胎土には赤色砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。

須恵器 (Fig.111 - 177)

壺の口縁部の破片で、口径7.3cmを測る。口縁部は肩部から屈曲し、外上方へ外反気味に延びる。器面は回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土には白色砂粒を多く含む。焼成は良い。

SD - 18

調査区西端部で検出した南北溝で、北端は調査区外へ延びる。幅20～70cm、深さ9～20cmで、基底

3. 遺構と遺物

面は東から西へ傾斜しており標高6.852～6.966mを測り、4.40mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰黄褐色粘土質シルトにマンガン粒を若干含むものであった。出土遺物には土師質土器7点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 19

調査区西部で検出した南北溝で、北端は調査区外へ延びる。幅23～40cm、深さ3～9cmで、基底面は南から北へ傾斜しており標高6.940～7.060mを測り、7.90mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰黄褐色粘土質シルトにマンガン粒を若干含むものであった。出土遺物には瓦器3点、土師質土器5点がみられ、瓦器(178)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.111 - 178)

小皿で、口径7.0cmを測る。底部は丸みを有するとみられ、口縁部は斜め上外方を向く。内面から口縁部はヨコナデ調整で、底部外面には指押えの痕が残る。色調は、内面が灰白色、外面が灰色を呈し、胎土はやや粗く、細砂粒を含む。焼成は良い。

SD - 20

調査区西部で検出した南北溝で、北端は調査区外へ延びる。幅30～35cm、深さ9～19cmで、基底面は南から北へ傾斜しており標高6.768～6.874mを測り、3.00mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で黒褐色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

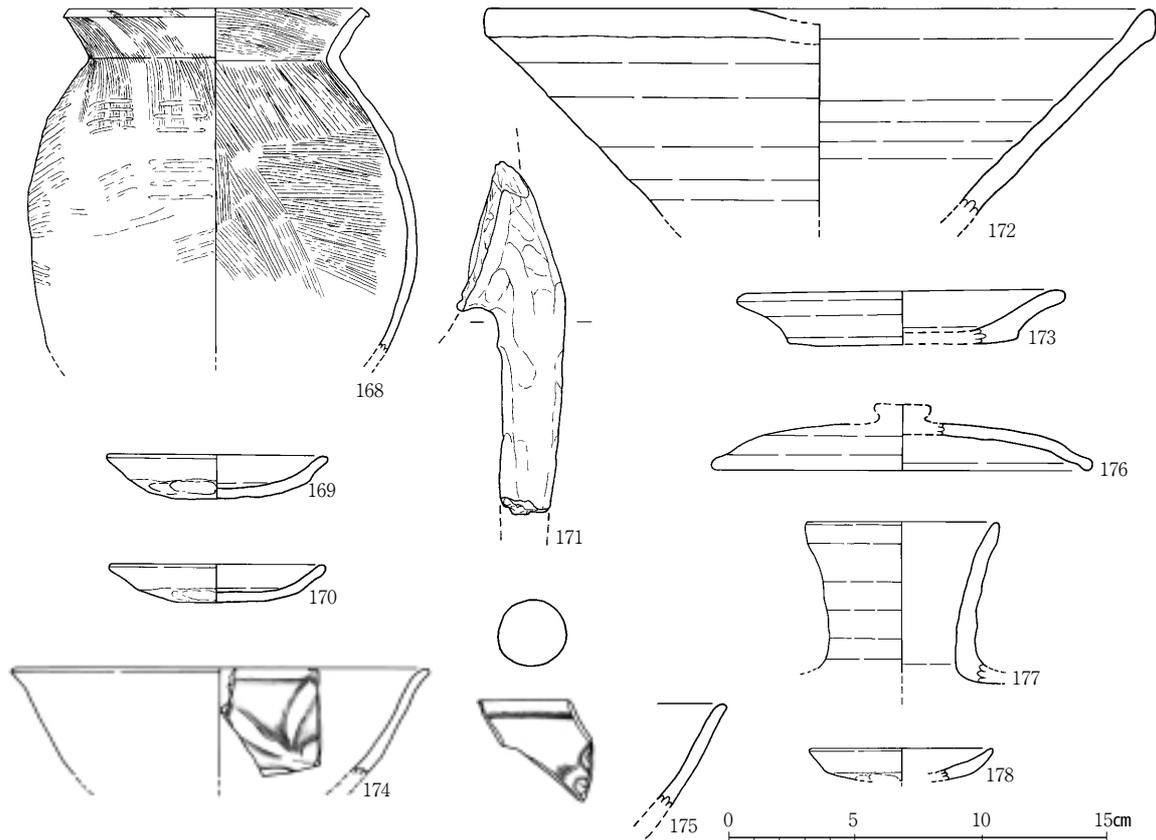


Fig.111 SD - 3・4・12・17・19出土遺物実測図

SD - 21 (Fig.112)

調査区南西端部で検出した南北溝で、南端は調査区外へ延びる。幅0.90～1.15m、深さ30～37cmで、基底面は北から南へ傾斜しており標高6.704～6.772mを測り、4.30mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を若干含むものであった。出土遺物には土師質土器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

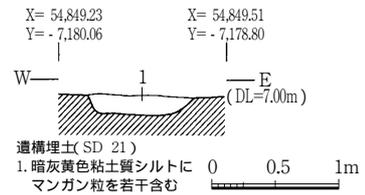


Fig.112 SD - 21

v 井戸跡

SE - 1 (Fig.113)

調査区北部で検出した石組井戸で、北側三分の一は調査区外にある。掘方はほぼ円形で、検出面で東西4.10m、南北もほぼ同じ長さともみられ、深さは3.96mを測り、下層の緑灰色砂礫層まで掘削していた。掘削は、上半分が上端から約54度の角度で斜めに石組の外側まで掘り込み、下半分が石組の部分のみ掘削しており、下半分は井筒を据えてから内側から螺旋状に石を積んだものと考えられる。井戸本体は河原石を主に積んだ石組井戸で、下記に記した五輪塔3個も転用されていた。石組の内径は上部から2.10m、1.75m、1.80mとなっており、中央部が内側に張り出していた。石組の下には井筒(185)を据えていた。埋土は、4層に分層され、上層から灰色粘土、黄褐色砂質シルトが混じる灰黄褐色粘土質シルト、黄灰色粘土質シルト、オリブ灰色砂質シルトで、石組内は上層が灰色粘土質シルトで下層が拳大から人頭大の

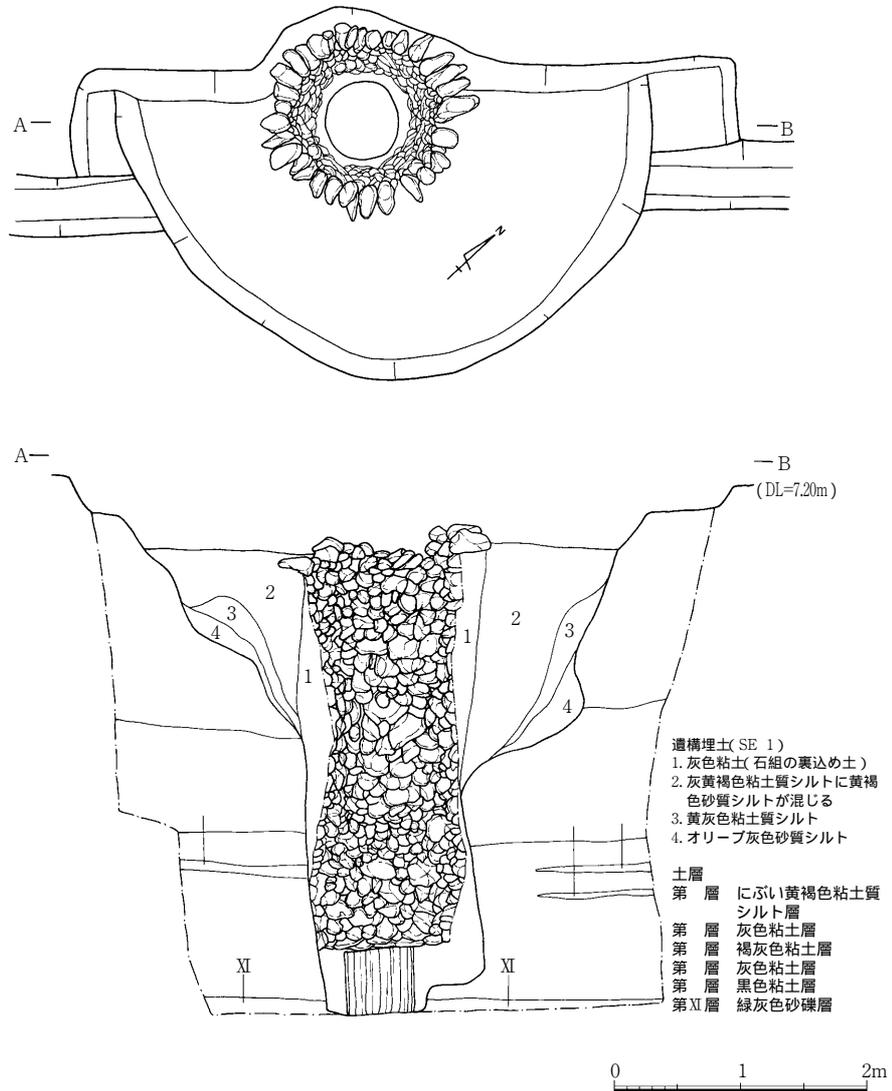


Fig.113 SE - 1

3. 遺構と遺物

石を含む灰色粘土となっていた。出土遺物には須恵器1点,土師質土器13点,備前焼1点,常滑焼6点,青磁1点,砥石1点,石臼1点がみられ,備前焼(179)1点,砥石(180)1点,臼(181)1点と石組に使用されていた五輪塔(182~184)3点と井筒(185)1点が図示できた。

出土遺物

備前焼 (Fig.114 - 179)

甕の口縁部の破片で,ほぼ直立する口縁部は肥厚し玉縁状をなす。器面は回転ナデ調整を施す。色調は,内面が黄灰色,外面が灰赤色を呈し,胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。

石製品 (Fig.114 - 180~184)

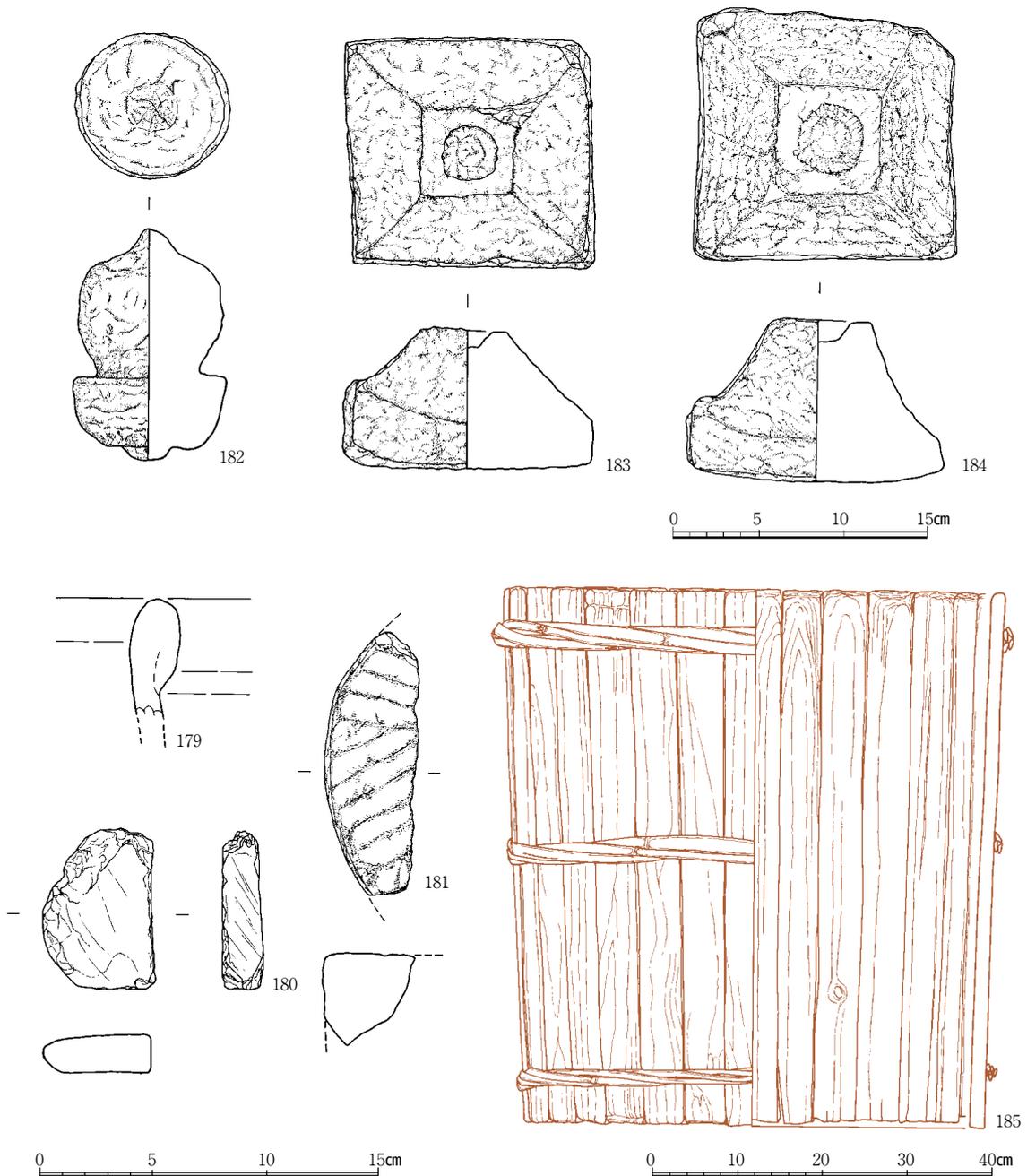


Fig.114 SE - 1出土遺物実測図

180は扁平な砂岩の砥石で、部分的に欠損するものの4面に使用痕が残る。181は砂岩質の臼で、1面に斜めの条線が残る。182～184は五輪塔である。182は空輪と風輪を一体化したもので、高さ20.4cm、全幅13.5cm、重量4.2kgを測る。材質は砂岩である。183・184は火輪で、材質は砂岩であり、2点とも傘の部分がやや反っている。183は高さ12.5cm、全幅21.0cm、重量8.4kgを測る。184は高さ14.5cm、全幅22.6cm、重量10.0kgを測る。

木製品 (Fig.114 - 185)

桶側の井筒で上端径53.6cm、下端径58.7cm、高さ58.7cmを測る。長さ58.0cm、幅4.0～6.6cm(平均5.5cm)、厚さ1.5cmのコウヤマキの板を29枚使用し、箍は竹紐で三ヶ所で固定する。SE - 2に比べると材の散つきがなく、規格化されている。

viピット

調査区中央部を中心に比較的多くのピットを検出した。土層の遺存状態の良かった南部に密度が高く、それ以北については削平の影響がみられ、全般に遺存状況は良くなく、削平されたピットも少なからずあったものと推察される。これらピットの大半は掘立柱建物を復元するには至らなかったが掘立柱建物に伴う柱穴とみられるものである。

P - 1

調査区中央部、SB - 3の北東で検出したピットである。径26～30cmのほぼ円形で、深さは16cmを測る。埋土は暗灰黄色粘土質シルトでマンガン粒を僅かに含むものであった。出土遺物には瓦器3点、土師質土器14点がみられ、瓦器(186)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.115 - 186)

椀底部の破片で、底径3.4cmを測る。底部はほぼ平らで、断面蒲鉾状の扁平な高台が付き、体部は内湾気味に上がる。体部外面には指押えの痕が残る。内面は摩耗しており調整は不明である。色調は、内面が浅黄色、外面が暗灰色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。焼成は良い。

P - 2

調査区中央部、P - 1の東で検出したピットである。径37～42cmのほぼ円形で、深さは18cmを測る。埋土は暗灰黄色粘土質シルトでマンガン粒を僅かに含むものであった。出土遺物には土師質土器5点、白磁1点、鉄釘1点がみられ、白磁(187)1点が図示できた。

出土遺物

白磁 (Fig.115 - 187)

皿の口縁部の破片で、口径11.8cmを測る。口縁部は内湾して上がる体部から続き、端部で大きく外反する。内面には1条の沈線が巡る。器面には乳白色の釉を施し、細かな貫入がはいる。胎土には黒色細粒を多く含み、焼成は良好である。

P - 3

調査区南部、SB - 8の南側柱沿いで検出したピットである。径32cmの円形で、深さは30cmを測る。埋土は、暗灰黄色粘土質シルトでマンガン粒を僅かに含むものであった。出土遺物には土師質土器8点がみられ、土師質土器(188)1点が図示できた。

3. 遺構と遺物

出土遺物

土師質土器 (Fig.115 - 188)

杯で、約半分が残存し、口径13.5cm、高さ4.6cm、底径6.6cmを測る。底部はやや中窪みとなり、体部はやや内湾し、口縁部は斜め外上方に上がった後端部付近でやや外反する。成形は粘土紐巻き上げロク口成形である。器面は摩耗しており調整は不明である。底部の切り離しは回転系切りによる。色調は内外面とも橙色で、胎土には細砂粒を含む。焼成は良い。

P - 4

調査区南部、SB - 8の南側で検出したピットである。径23cmの円形で、深さは15cmを測る。埋土は暗灰黄色粘土質シルトでマンガン粒を僅かに含むものであった。出土遺物には土師質土器8点がみられ、土師質土器(189)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.115 - 189)

杯の口縁部の破片で、口径11.1cmを測る。口縁部は斜め外上方に上がる。器面は摩耗しており調整は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良で、赤色砂粒を含む。焼成は不良である。

P - 5

調査区西部、SB - 12の東で検出したピットである。径28～32cmのほぼ円形で、深さは24cmを測る。埋土は暗灰黄色粘土質シルトでマンガン粒を僅かに含むものであった。出土遺物には瓦器1点がみられ、その瓦器(190)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.115 - 190)

小皿で体部と口縁部が残存する。口径8.3cmを測る。体部は外上方に上がり、口縁部はヨコナデ調整でやや外反する。内面には1条の輪状のヘラ磨き、口唇部から口縁部外面にはヨコナデ調整が施され、体部外面には指押えの痕が残る。色調は、内面が灰色、外面が暗灰色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。焼成は良い。

P - 6

調査区西部、SB - 10の南西で検出したピットで、楕円形のピットに切られていた。径34～40cmのほぼ円形で、深さは32cmを測る。埋土は暗灰黄色粘土質シルトでマンガン粒を僅かに含むものであった。出土遺物には瓦器1点、土師質土器31点がみられ、土師質土器(191)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.115 - 191)

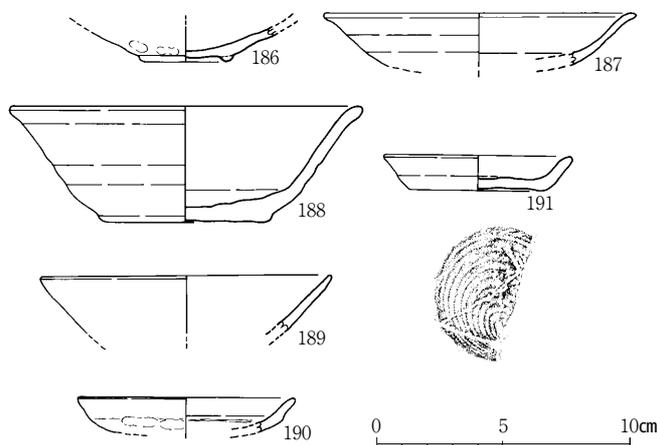


Fig.115 P - 1～6出土遺物実測図

小皿で、口径7.2cm、高さ1.4cm、底径5.2cmを測る。底部は中窪みとなり、体部から口縁部はやや外反する。成形は口ク口水挽とみられ、器面には回転ナデ調整を施し、内底面にナデ調整を加える。底部切り離しは回転系切りである。色調は内外面とも浅黄橙色で、胎土には細砂粒を多く含む。焼成は良い。

近世

i 掘立柱建物跡

SB - 12 (Fig.116)

調査区西部、SE - 2の東隣で検出した梁間2間(5.00m)、桁行5間(11.50m)の南北棟建物とみられるもので、建物を復元するには柱穴数が少ないが、検出した柱穴はどれもしっかりした掘方を有し、石の礎板を使用しているものもあり建物跡として抽出した。未検出の部分については簡単な礎石等を使用していたのではないかと考える。棟方向はN - 6° - Wである。柱間寸法は、梁(東西)が2.50m等間隔、桁(南北)が2.10m、3.00mとみられる。柱穴は径20~45cmのほぼ円形で、柱径は10~15cmではないかとみられる。埋土は灰色粘土質シルトに褐色・暗灰褐色粘土質シルトのブロックを多く含むものであった。遺物は土師質土器15点、東播系須恵器1点、白磁1点、青磁1点、染付1点、肥前系陶器2点が出土しているが、復元図示できるものはなかった。

ii 土坑

SK - 17 (Fig.117)

調査区西端部、SD - 17を切った状態で検出したほぼ円形の土坑である。径2.50m、深さ42cmを測り、断面形は逆台形状を呈し、東西壁が2段

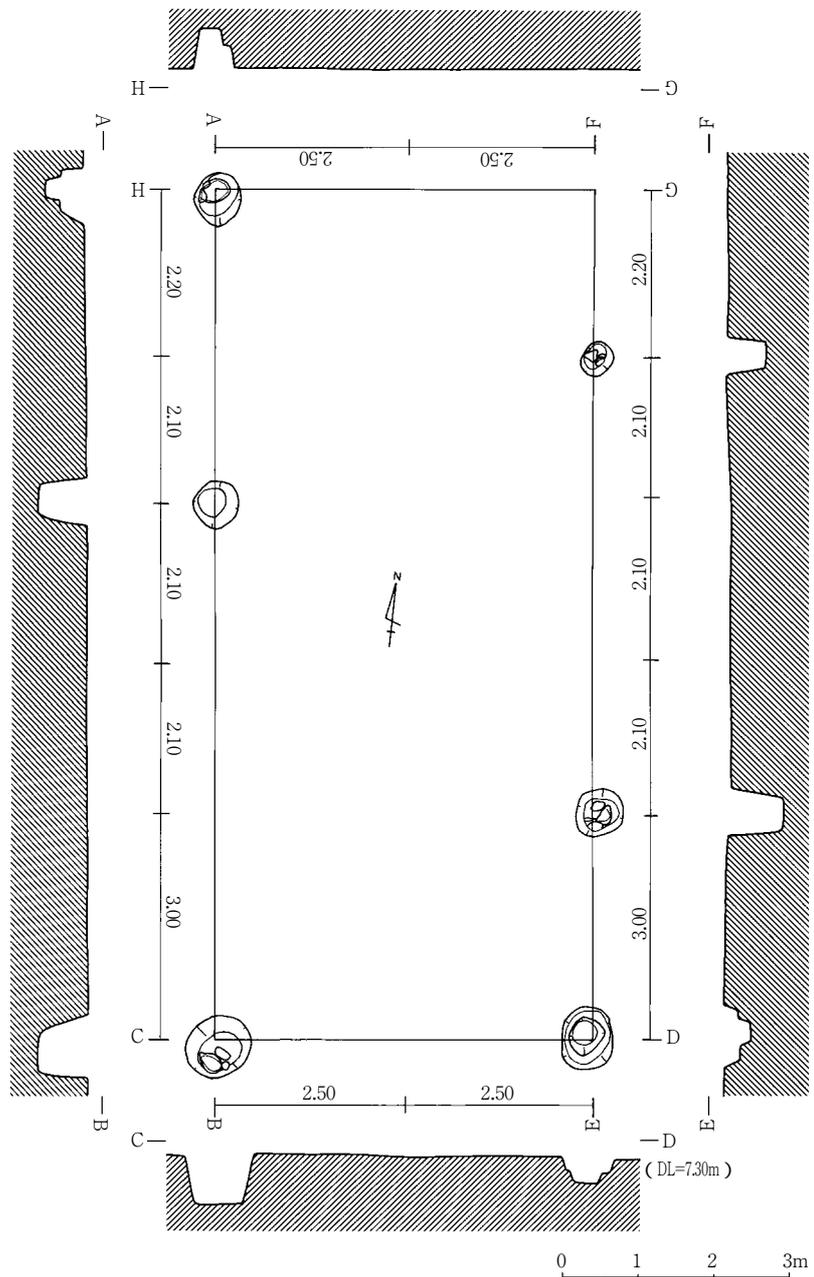


Fig.116 SB - 12

3. 遺構と遺物

掘りとなる。埋土は上下2層に分層され、上層が暗灰黄色粘土質シルトにマンガン粒を含み、下層が灰色粘土で植物遺体を含むものであった。出土遺物は比較的多く、瓦器1点、土師質土器28点、備前焼1点、常滑焼1点、青磁2点、肥前系陶器2点、近世陶器3点、瓦2点がみられ、肥前系陶器の碗(192・193)2点が図示できた。

出土遺物

肥前系陶器 (Fig.125 - 192・193)

2点ともほぼ同形態の碗で、体部は内湾して上がり、口縁部は外上方へ上がる。192は口縁部を欠く。底径は4.5cmを測り、比較的高い削り出し高台となる。器面には青緑色の釉を施し、小さな貫入がはいる。底部は無釉である。胎土は精良で、焼成は良好である。193は口縁部の破片で、口径10.4cmを測る。見込には白色、口縁部から外面には青緑色の釉を施す。胎土には黑色砂粒を多く含み、焼成は良好である。

SK - 18 (Fig.118)

調査区西端部、SD - 17を切り、近代の暗渠(SD - 25)に掘削された状態で検出した楕円形の土坑である。長径1.30m、短径1.08m、深さ17cmを測り、長軸方向はN - 63° - Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は3層に分層され、1層が黄灰色粘土質シルトにマンガン粒を含むもの、2層が黄灰色粘土質シルトで植物遺体を含むもの、3層が暗黄灰色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器1点、肥前系陶器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 19 (Fig.119)

調査区南西端部、近代の暗渠(SD - 28)に切られた状態で検出したほぼ円形の土坑である。径1.55m、深さ51cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は上下2層に分層され、上層が黄灰色粘土で下部に鉄分の沈殿がみられ、下層が同じく黄灰色粘土であった。出土遺物には染付1点、近世磁器1点がみられ、染付の碗(194)1点が図示できた。

出土遺物

染付 (Fig.125 - 194)

碗で、底部と体部が残存し、底径4.0cmを測る。底部は削り出し高台で、体部は内湾して上がる。体部と高台外面に各1条の界線が施される。器面には乳白色の釉を施し、見込は蛇ノ目状の釉ハギ、

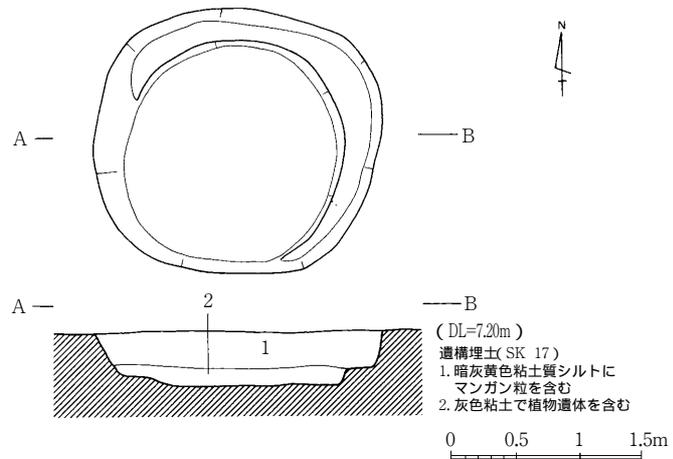


Fig.117 SK - 17

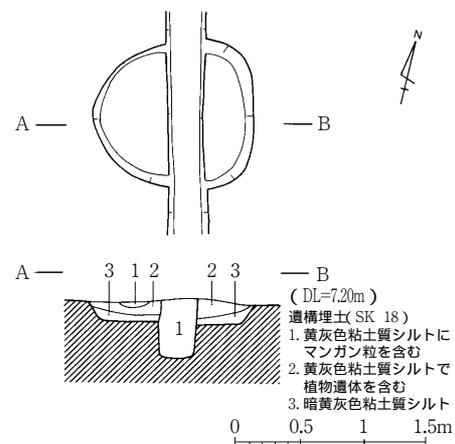


Fig.118 SK - 18

置付は釉八ギを行う。胎土は精良で、焼成は良好である。

SK - 20 (Fig.120)

調査区南西端部で検出した不整楕円形の土坑墓で、桶板とヒトの上下顎歯が検出された。分析の結果、3~4歳の幼児とみられる(第 章の分析結果参照)。長径0.70m、短径0.52m、深さ7cmを測り、長軸方向はN - 16° - Eを示す。断面形は舟底状を呈する。遺存状態が悪く、埋土も下層部とみられる暗灰黄色粘土質シルトが認められたのみであった。出土遺物には先のもの以外に土師質土器8点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 21 (Fig.121)

調査区西部、SB - 10を切った状態で検出した隅丸長形状の土坑で、南北が浅く、中央部が一段深くなった掘方をなす。長辺4.32m、短辺1.20m、深さ34cmを測り、長軸方向はN - 3° - Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は3層に分層され、1層が暗灰黄色粘土質シルト、2層が暗灰黄色シルト、3層が暗黄灰色粘土質シルトであった。出土遺物は比較的多く、須恵器1点、東播系須恵器2点、土師質土器40点、備前焼1点、白磁1点、肥前系陶器1点、瀬戸・美濃系1点、染付1点、中国系磁器2点、近世陶器3点、瓦2点がみられ、肥前系陶器(195)1点、瀬戸・美濃系(196)1点、青磁(197)1点、染付(198)1点、中国系磁器(199・200)2点が図示できた。

出土遺物

肥前系陶器 (Fig.125 - 195)

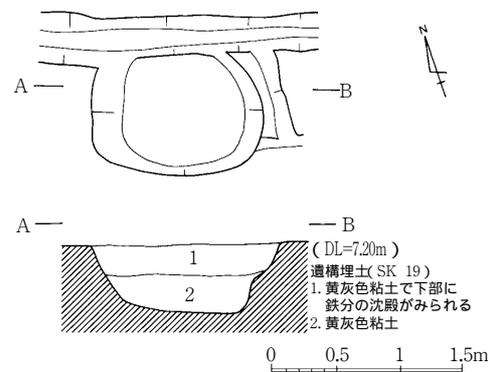


Fig.119 SK - 19

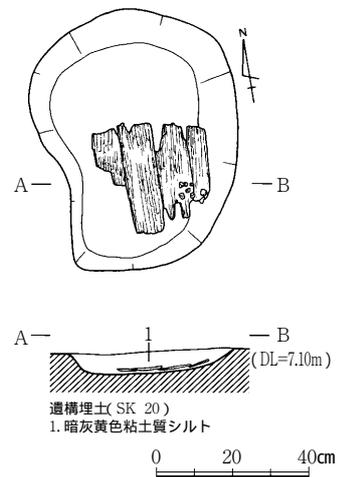


Fig.120 SK - 20

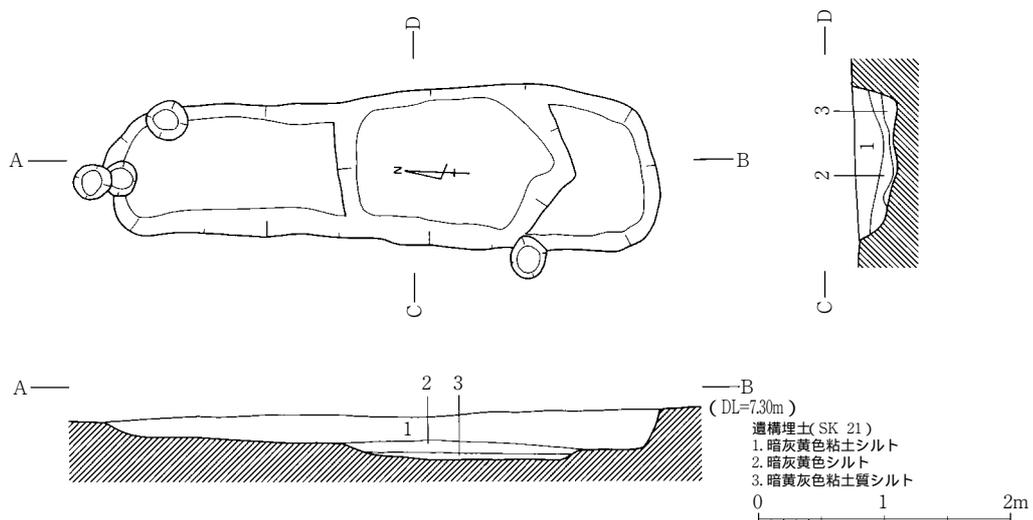


Fig.121 SK - 21

3. 遺構と遺物

碗で、体部の一部と口縁部が残存し、口径12.2cmを測る。体部が内湾して上がり、口縁部は上外方へ延びる。器面には暗灰色の釉を施し、細かな貫入がはいる。胎土はやや粗く、黒色砂粒を含む。焼成は良好である。

瀬戸・美濃系 (Fig.125 - 196)

型作りの菊皿(向付)で、口径13.0cm、器高2.7cm、底径7.6cmを測る。底部は丸みを有する削り出し高台で、口縁部は内湾気味に上がり、口縁部外面には花卉の付け根に凹線を施す。器面には乳白色の釉(長石釉)を施し、畳付は釉ハギを行う。胎土は粗く、焼成はやや不良である。

青磁 (Fig.125 - 197)

褐釉碗で、底部が残存し、底径4.6cmを測る。底部は高い削り出し高台で、露胎となる。内面には淡い青緑色の釉、外面には明黄褐色の釉を施す。胎土には黒色細粒を多く含み、焼成は良好である。

染付 (Fig.125 - 198)

碗で、口縁部が残存し、口径11.8cmを測る。口縁部はやや内湾し、外上方へ上がる。外面には界線に区切られた雲文とみられる文様が施される。器面にはやや青みがかった釉を施す。

中国系磁器 (Fig.125 - 199・200)

2点とも溝縁の灰釉皿で、199は口径12.0cm、200は口径11.0cmを測る。器面には暗灰色の釉を施し、胎土には黒色細粒を含み、焼成は良好である。

SK - 22 (Fig.122)

調査区西部、SD - 2の西側で検出した不整楕円形の土坑で、2段掘りとなっていた。長径1.50m、短径1.32m、深さ84cmを測り、長軸方向はN - 3° - Wを示す。断面形はほぼ逆台形状を呈する。埋土は3層に分層され、灰色粘土質シルトを主体とするものであり、最下層が灰色粘土となっていた。出土遺物には土師質土器9点、青磁1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

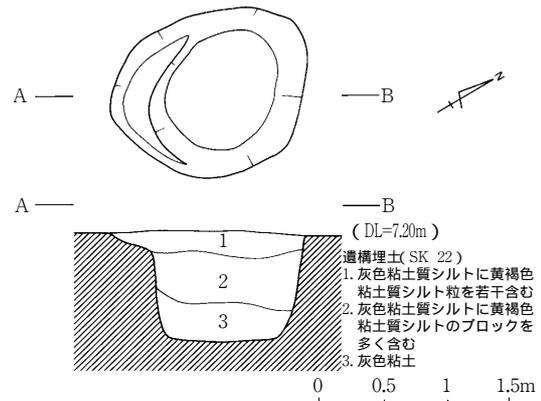


Fig.122 SK - 22

SK - 23 (Fig.123)

調査区西部、SK - 22の南側で検出した隅丸方形の土坑で、北に溝状のものが延び、SK - 22に切られていた。長辺1.44m、短辺0.88m、深さ12cmを測り、長軸方向はN - 13° - Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰色粘土質シルトに黄褐色粘土質シルト粒を若干含むものであった。出土遺物には土師質土器5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

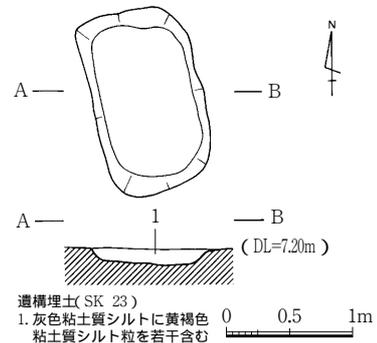


Fig.123 SK - 23

SK - 24

調査区北西部、SD - 20を切った状態で検出した隅丸方形の

土坑である。長辺1.11m,短辺0.43m,深さ13cmを測り,長軸方向はN - 11° - Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で暗灰黄色粘土質シルトで褐色粘土質シルト粒を含むものであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SK - 25

調査区中央部,SD - 1を切った状態で検出した舟形状の土坑である。長辺4.20m,短辺0.64m,深さ13cmを測り,長軸方向はN - 12° - Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰白色粘土質シルトにマンガン粒と褐色粘土質シルトのブロックを比較的多く含むものであった。出土遺物には須恵器1点,土師質土器3点,瓦質土器1点がみられ,須恵器(201)1点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.125 - 201)

椀の底部の破片で,底径11.6cmを測る。底部はほぼ平らで,端部に断面逆三角形の高台が付く。体部は斜め上外方へ延びる。器面には回転ナデ調整を施す。色調は内外面とも灰色を呈し,胎土には黒色・白色砂粒を多く含む。焼成は良い。

SK - 26 (Fig.99)

調査区中央部,SK - 7を切った状態で検出した楕円形の土坑である。長径0.97m,短径0.81m,深さ29cmを測り,長軸方向はN - 10° - Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は単一で灰白色粘土質シルトに浅黄橙色粘土質シルトブロックを若干含むものであった。出土遺物には須恵器1点,常滑焼1点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SK - 27

調査区北部で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.10m,短径0.85m,深さ9cmを測り,長軸方向はN - 86° - Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰白色粘土質シルトにマンガン粒,明黄褐色粘土質シルトの小ブロックを比較的多く含むものであった。出土遺物には瀬戸・美濃系1点,瓦片1点がみられ,瀬戸・美濃系の天目茶碗(202)1点が図示できた。

出土遺物

瀬戸・美濃系 (Fig.125 - 202)

天目茶碗の底部と見られる破片で,底径4.1cmを測る。底部は削り出し高台で,内面には鉄釉が施される。胎土はやや粗く,黒色砂粒を多く含む。焼成は良い。

SK - 28 (Fig.124)

調査区南東部,SD - 4を切った状態で検出したほぼ円形の土坑である。径1.26m,深さ63cmを測り,断面形は箱形を呈する。埋土は4層に分層され,1層が褐灰色粘土質シルトに黄橙色粘土質シルトの小ブロックを僅かに含むもの,2層が淡黄色粘土質シルトに黄橙色粘土質シルトの小ブロックを僅かに含むもの,3層が浅黄色粘土質シルトに黄橙色粘土質シルトの小ブロックを僅かに含むもの,4層が灰白色粘土であった。出土遺物は比較的多く,土師質土器17点,白磁1点,青磁1点,染付2点,肥前系陶器2点,瀬戸・美濃系1点,その他近世陶磁器3点,砥石1点がみられ,白磁(203)1点,青磁(204)1点,染付(205・206)2点,肥前系陶器(207・208)2点,砥石(209)1点が図示できた。

出土遺物

3. 遺構と遺物

白磁 (Fig.125 - 203)

皿の口縁部の破片で、口径11.4cmを測る。斜め上外方を向く口縁部には白色釉を施し、口唇部は釉八ギする。胎土は精良で黑色細粒を含み、焼成は良好である。

青磁 (Fig.125 - 204)

碗の口縁部の破片で、上外方を向く口縁部には淡緑色釉を施す。胎土はやや粗いが焼成は良好である。

染付 (Fig.125 - 205・206)

205は碗の口縁部の破片で、ほぼ真直ぐ上外方を向く口縁部外面には2条の界線と唐草文が施される。呉須の発色は良くなく淡青色ないし緑色を呈する。胎土は精良で黑色細粒を含み、焼成は良好である。206は皿の口縁部の破片で、口径13.0cmを測る。内湾する口縁部内面には四方禪文帯、外

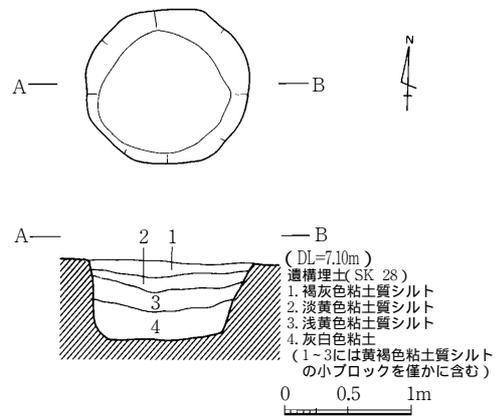


Fig.124 SK - 28

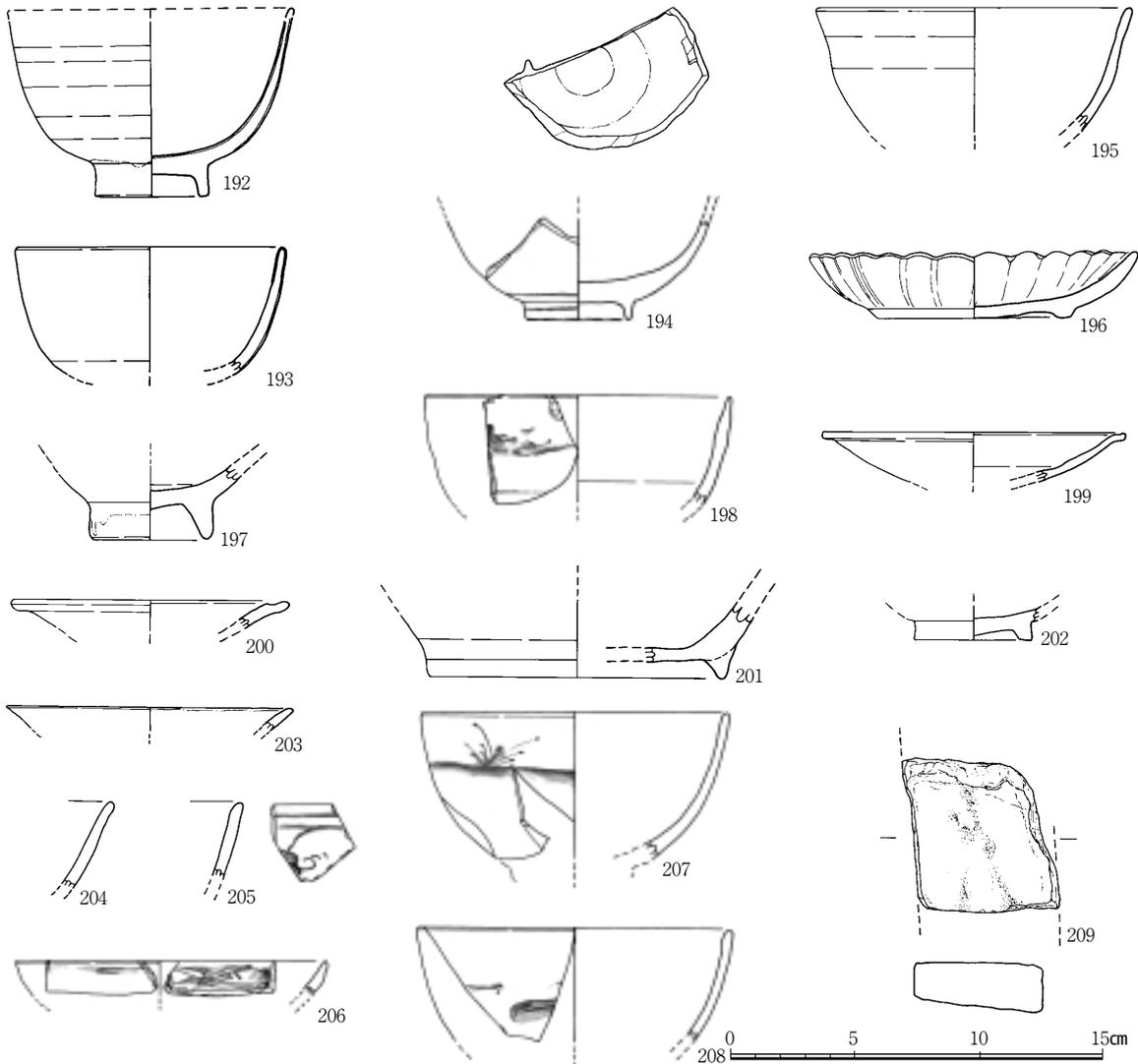


Fig.125 SK - 17・19・21・25・27・28出土遺物実測図

面には幅広の界線が施される。胎土は精良で、黒色細粒を多く含み、焼成は良好である。

肥前系陶器 (Fig.125 - 207・208)

2点とも碗で、体部と口縁部が残存し、207は口径12.0cm、208は口径12.1cmを測る。体部は内湾して上がり、口縁部はそのまま上外方へ上がる。207の口縁部外面には草文、208の外面にも文様が施され、器面には薄い白色釉を施す。208の口縁部にはさらに青緑色の釉がかかる。2点とも胎土は精良で、黒色細粒を含み、焼成は良好である。

石製品 (Fig.125 - 209)

砂岩を使用した扁平な砥石で、両端が欠損するが表面と両側面の3面に使用痕が残る。

Tab.5 林口遺跡近世・近代土坑計測表

遺構番号	平面形	規模			長軸方向	時期	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK - 17	円形	2.50		0.42		近世	
SK - 18	楕円形	1.30	1.08	0.17	N - 63° - W	"	
SK - 19	円形	1.55		0.51		"	
SK - 20	不整楕円形	0.70	0.52	0.07	N - 16° - E	"	
SK - 21	隅丸方形	4.32	1.20	0.34	N - 3° - W	"	
SK - 22	不整楕円形	1.50	1.32	0.84	N - 3° - W	"	
SK - 23	隅丸方形	1.44	0.88	0.12	N - 13° - W	"	
SK - 24	隅丸方形	1.11	0.43	0.13	N - 11° - W	"	
SK - 25	舟形	4.20	0.64	0.13	N - 12° - W	"	
SK - 26	楕円形	0.97	0.81	0.29	N - 10° - E	"	
SK - 27	楕円形	1.10	0.85	0.09	N - 86° - W	"	
SK - 28	円形	1.26		0.63		"	
SK - 29	不整楕円形	1.42	1.15	0.37	N - 11° - W	近代	

iii 溝跡

SD - 22

調査区東部で検出した東西溝である。幅30～70cm、深さ12～15cmで、基底面はほぼ平坦で標高6.703～6.732mを測り、10.35mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器4点と肥前系磁器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 23

調査区東端部で検出した南北溝である。幅20～28cm、深さ2～10cmで、基底面はほぼ平坦で標高6.635～6.707mを測り、4.40mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰白色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SD - 24

調査区東端部で検出した南北溝である。幅25～30cm、深さ2～11cmで、基底面はほぼ平坦で標高

3. 遺構と遺物

6.751～6.807mを測り、7.00mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は単一で灰白色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

iv 井戸跡

SE - 2 (Fig.126)

調査区西部で検出した上下2部構成の井戸で、上部は石組、下部が木製円形桶側6段積みとなっていた。掘方は検出面で東西2.67m、南北3.07mで、深さは3.28mを測り、下層の緑灰色砂礫層まで掘削していた。掘削は上端から70～77度の角度で斜めに基底部近くまで掘り込み、角度を緩め基底部まで掘り込んでいた。基底部から円形桶側を6段積み重ね、最上部の桶側の上に簡単な石組を行っていた。埋土は、上層が灰色粘土質シルトで下層が灰色粘土となっており、拳大から人頭大の石を含んでいた。出土遺物には土師質土器6点、常滑焼1点、白磁1点、青磁1点、染付1点、近世陶器4点がみられ、常滑焼(210)1点、白磁(211)1点、染付(212)1点と木製円形桶側(213～218)6点が図示できた。

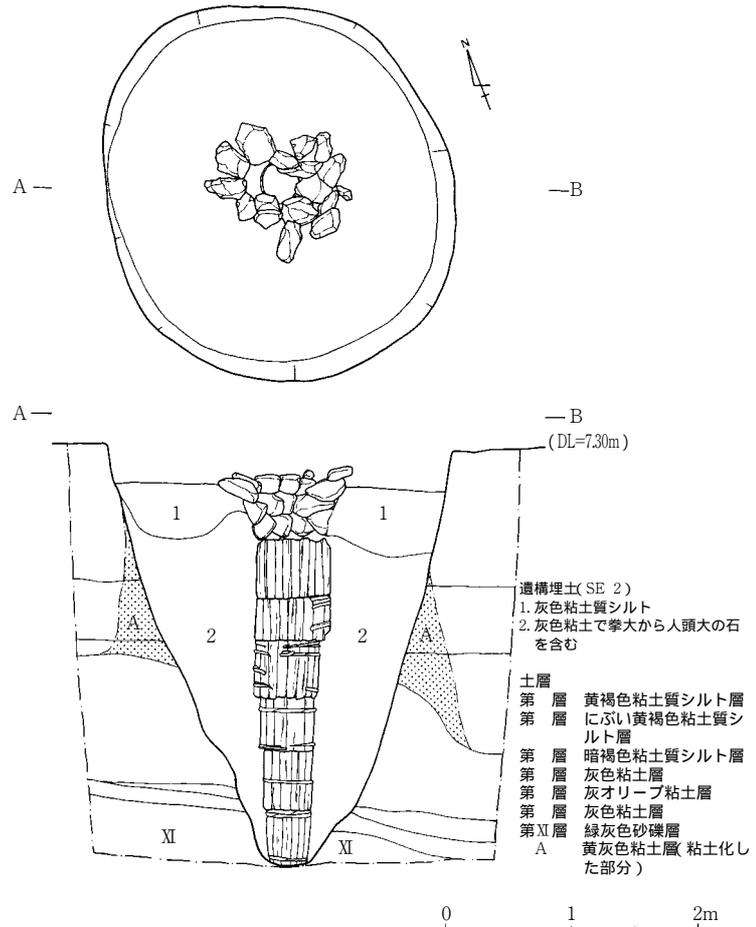


Fig.126 SE - 2

出土遺物

常滑焼 (Fig.127 - 210)

甕の底部で、底径19.8cmを測る。底部はやや凸状を呈し、胴部は斜め上外方へ上がる。底部外面は未調整で、胴部外面はナデ調整を施し、内面には自然釉、外面には自然釉の垂下が認められる。色調は、内面がオリーブ黄色、外面がにぶい赤褐色を呈し、胎土には白色砂粒を多く含む。焼成は良好である。

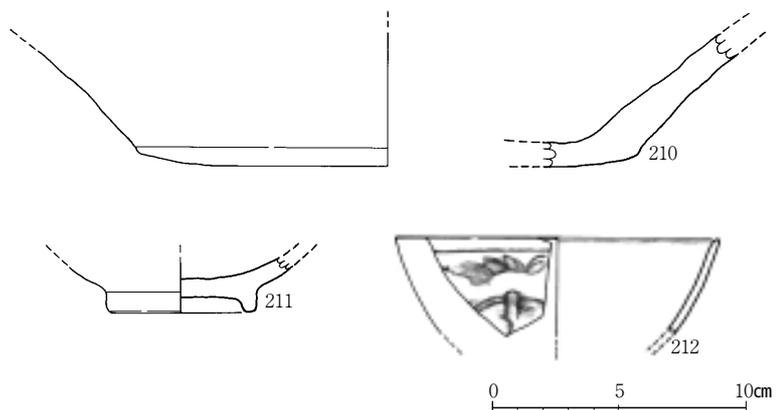


Fig.127 SE - 2出土遺物実測図1

白磁 (Fig.127 - 211)

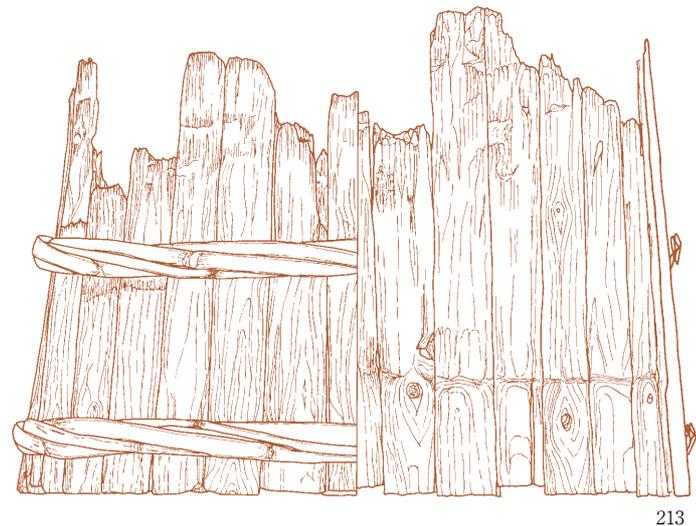
碗の底部で、底径5.4cmを測る。底部は削り出し高台で、体部は内湾気味に上がる。器面には白色釉を施し、畳付は釉ハギが行われ、砂が部分的に付着する。胎土は精良で、焼成は良好である。

染付 (Fig.127 - 212)

碗の口縁部で、口径12.4cmを測る。口縁部は体部から内湾して上がり、内面口縁端部に1条の界線、外面に牡丹唐草文とみられる文様が施される。器面には乳白色の釉を施す。胎土は精良で、焼成は良好である。

木製品 (Fig.128 ~ 130 - 213 ~ 218)

すべて井戸に使用されていた円形桶側で6段(上から順に213 ~ 218)積み重ねていた。材質はコウヤマキを使用し、箍は竹紐で三ヶ所を固定していたとみられるが、213のみ上部が欠損し確認できない。それぞれ桶側を逆さにして使用し、基底部が広く、上部に行くに従って径が狭く端部を丸く仕上げ、下から順に桶側を積み重ねている。213は31枚の板材を使用し、上端径55.0cm、下端径65.0cm、高さ47.5cmを測り、板材は長さ30.0 ~ 48.0cm(平均40.4cm)、幅5.3 ~ 8.0cm(平均6.2cm)、厚さ1.0 ~ 1.8cm(平均1.4cm)のものを使用する。214は33枚の板材を使用し、上端径57.4cm、下端径65.6cm、高さ56.8cmを測り、板材は長さ52.0 ~ 56.5cm(平均54.6cm)、幅5.5 ~ 7.2cm(平均6.2cm)、厚さ0.8 ~ 2.0cm(平均1.5cm)のものを使用する。下部の箍の上に「平右」または「平九」の墨書が認められる。215は32枚の板材を使用し、上端径59.8cm、下端径68.3cm、高さ57.2cmを測り、板材は長さ53.5 ~ 57.0cm(平均55.7cm)、幅4.8 ~ 8.0cm



213



214

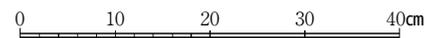


Fig.128 SE - 2出土遺物実測図2

3. 遺構と遺物

(平均6.3cm), 厚さ1.2~1.5cm(平均1.4cm)のものを使用する。216は34枚の板材を使用し, 上端径60.4cm, 下端径67.4cm, 高さ57.9cmを測り, 板材は長さ54.0~58.0cm(平均56.2cm), 幅4.0~7.0cm(平均6.0cm), 厚さ0.9~1.8cm(平均1.4cm)のものを使用する。217は33枚の板材を使用し, 上端径61.3cm, 下端径66.2cm, 高さ55.6cmを測り, 板材は長さ52.0~55.3cm(平均54.0cm), 幅5.3~8.0cm(平均6.4cm), 厚さ0.8~1.6cm(平均1.2cm)のものを使用する。218は基底部の桶側で井筒と考えられるもので, 32枚の板材を使用し, 上端径58.5cm, 下端径64.4cm, 高さ52.9cmを測り, 板材は長さ50.5~52.5cm(平均51.4cm), 幅5.0~7.6cm(平均6.5cm), 厚さ0.8~1.7cm(平均1.2cm)のものを使用している。

ⅴ 性格不明遺構

SX - 1

調査区中央部東よりで検出した染み状の遺構で, 溝状をなす部分もみられるが不明瞭である。長辺10.00m, 短辺6.00m, 深さ4~6cmを測る。埋土は灰白色粘土質シルトににぶい黄褐色粘土質シルトのブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器1点, 須恵器4点, 瓦器1点, 土師質土器64点, 土錘1点, 常滑焼1点, 青磁1点, 染付1点, 瓦1点がみられ, 土錘(219)1点が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.131 - 219)

瓦質の土錘で, 紡錘形を呈し, 約半分が残存する。全幅は1.3cm, 紐径は3.5mmを測る。表面はナデ調整が施される。

SX - 2

調査区南部で検出した落ち込み状の遺構で, 調査区外に延びる。長辺6.70m, 短辺3.30m, 深さ10~14cmを測る。埋土は灰白色粘土質シルトに黄橙色粘土質



215



216

0 10 20 30 40cm

Fig.129 SE - 2出土遺物実測図3

シルトのブロックとマンガン粒を含むものであった。出土遺物には瓦器3点,土師質土器82点,備前焼1点,常滑焼2点,白磁1点,近世陶器7点がみられ,土師質土器(220・221)2点,備前焼(222)1点,白磁(223)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.131 - 220・

221)

220は杯で,口径11.4cm,器高2.2cm,底径6.5cmを測る。底部はやや凸状をなし,体部から口縁部にかけてやや内湾気味に斜め上外方へ上がる。成形はロク口水挽とみられ,器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は,内面が浅黄橙色,外面が灰色を呈する。胎土は精良で,焼成は良い。221は火鉢ではないかとみられるもので,口縁部は直立した後内湾し,外面に粘土紐を貼付して端部に凹面を作り出す。端部はヨコナデ調整,他はナデ調整を施す。色調は内外面ともにぶい橙色で,胎土には砂粒を多く含む。焼成は良い。

備前焼 (Fig.131 - 222)

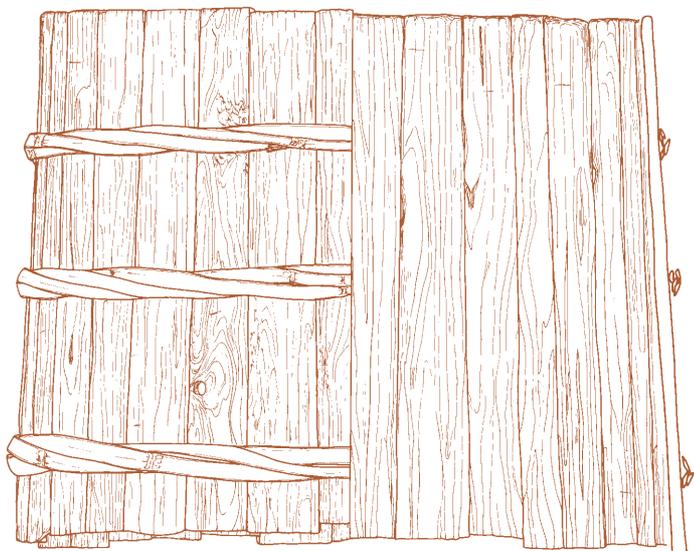
擂鉢で,口縁部の破片である。口縁部を内上方に拡張したもので,内面には5本単位の条線の痕跡が残る。色調は,内面が灰黒色,外面が灰赤色を呈し,胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。

白磁 (Fig.131 - 223)

多角杯で,体部と口縁部が残存し,口径9.0



217



218

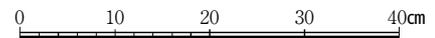


Fig.130 SE - 2出土遺物実測図4

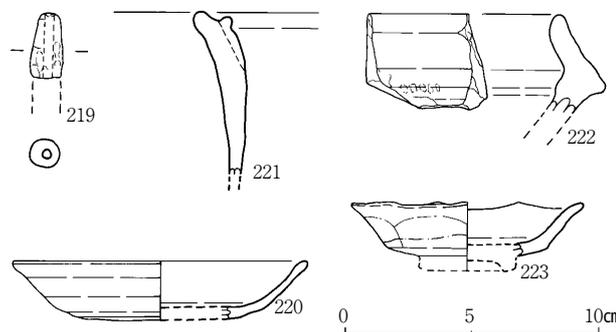


Fig.131 SX - 1・2出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

cmを測る。体部は斜め外方に上がり、屈曲し口縁部は外反する。体部外面は回転ヘラ削り調整が施され、内面から口縁部外面にかけて灰白色の釉を施す。

近代

i 土坑

SK - 29

調査区東部、近代の暗渠(SD - 36)を切った状態で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.42m、短径1.15m、深さ37cmを測り、長軸方向はN - 11° - Wを示す。断面形はほぼ舟底状を呈する。埋土は2層に分層され、上層がオリーブ褐色粘土質シルトに暗オリーブ褐色粘土質シルトのブロックを含むもの、下層が暗オリーブ褐色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

ii 溝跡(暗渠)

調査区全域で認められた昭和20～30年頃に布設されたとみられる水田の排水施設である。全部で12条を検出し、一部重複して布設されていた箇所もあった。実際は、表土層直下で確認できるが、調査の進行上、第 層上面で検出し、近世以前の遺構を掘削しているため取り敢えずその埋土を取り除いたうえで、近世以前の遺構の調査を行った。なお、暗渠は断面箱形に掘削され、基底面に礫を敷いたうえで節を刳り貫いた竹を連結して布設していた。埋土は第 層から第 層、場所によっては遺構の埋土がブロック状に堆積していた。

SD - 25

調査区西端部で検出した南北の暗渠(N - 13° - W)で、SD - 28に繋がる。幅30～40cm、深さ44～47cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.576～6.600mを測り、9.70mを検出した。出土遺物には土師質土器3点がみられたが復元図示できるものはなかった。

SD - 26

調査区西部で検出した南北の暗渠(N - 13° - W)で、SD - 28に繋がる。幅30～40cm、深さ42～43cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.624～6.632mを測り、21.40mを検出した。出土遺物には土師器1点、須恵器2点、土師質土器6点、常滑焼1点がみられ、土師器(224)1点と須恵器(225)1点が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.132 - 224)

杯蓋で、つまみ部分が残存する。つまみは扁平で、径2.2cmを測る。残部にはナデ調整が施される。色調は、内面が浅黄橙色、外面は橙色を呈し、胎土には赤色細粒を含む。

須恵器 (Fig.132 - 225)

杯蓋で、口径11.0cm、器高4.9cmを測る。天井部は高く丸い。稜はなく、口縁部は僅かに屈曲して内下方に短く延び、端部は丸い。天井部外面約二分の一に回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整が施され、天井部内面にナデ調整を加える。色調は内外面とも青灰色を呈し、胎土には白色砂粒を比較的多く含む。焼成は良好である。

SD - 27

調査区西部で検出した南北の暗渠(N - 13° - W)で、SD - 28に繋がる。幅30～60cm、深さ35～40cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.492～6.540mを測り、31.00mを検出した。出土遺物には瓦器1点、土師質土器33点、瓦質土器2点、常滑焼1点、白磁1点、青磁1点、青白磁1点、瀬戸・美濃系2点、近世磁器2点がみられ、瀬戸・美濃系(226・227)2点が図示できた。

出土遺物

瀬戸・美濃系 (Fig.132 - 226・227)

226は波縁の皿で口縁部が残存し、口径13.4cmを測る。外反する口縁部は波状をなす。器面には鉄釉を施す。胎土はやや粗いが焼成は良好である。227は匣鉢とみられるもので、口縁部が残存し口径16.0cmを測る。直立する口縁部外面には2条の凹線が施される。器面は回転ナデ調整で、外面には自然釉がかかる。

SD - 28

調査区南西端部で検出した東西の暗渠(N - 74° - W)で、SD - 25～27と繋がる。幅20～40cm、深さ30～43cmで、基底面は東から西に傾斜しており標高6.620～6.752mを測り、30.02mを検出した。出土遺物には須恵器1点、土師質土器5点、白磁3点、青磁2点、染付1点、肥前系陶器1点、瓦6点がみられ、白磁(228)1点が図示できた。

出土遺物

白磁 (Fig.132 - 228)

碗の底部で、底径4.3cmを測る。底部が削り出し高台で、露胎となり、体部が内湾気味に上がる。内面から体部外面に白色釉を施す。見込には砂目が3カ所に残る。

SD - 29

調査区中央部西よりで検出した南北の暗渠(N - 13° - W)で、SD - 30・33と繋がる。幅25～40cm、深さ37～42cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.461～6.521mを測り、37.00mを検出した。出土遺物には須恵器1点、土師質土器21点、常滑焼1点、青磁4点、肥前系磁器1点、近世陶器2点、瓦1点がみられ、青磁(229)1点と肥前系磁器(230)1点が図示できた。

出土遺物

青磁 (Fig.132 - 229)

碗の底部で、底径5.7cmを測る。底部は削り出し高台で露胎となる。内面から高台外面にかけて淡青緑色の釉を施す。胎土は精良で、黒色砂粒を若干含み、焼成は良好である。

肥前系磁器 (Fig.132 - 230)

紅皿で口縁部が残存し、口径4.5cmを測る。口縁部は内湾し、端部は外傾する浅い凹面となる。外面には放射線状の刻み目が施される。内面から口唇部にかけて白色の釉を施し、口縁部外面にも一部釉が垂下する。胎土は精良で、焼成は良好である。

SD - 30

調査区中央部で検出したL字形をなす暗渠(南北：N - 13° - W)で、SD - 29と繋がる。幅30～40cm、深さ48～58cmで、基底面は北から南に傾斜しており標高6.292～6.384mを測り、29.40mを検出した。出土遺物には須恵器1点、土師質土器1点、常滑焼1点がみられたが復元図示できるものはなかった。

3. 遺構と遺物

SD - 31

調査区中央部東よりで検出した南北の暗渠(N - 12° - W)で,SD - 32・33と繋がり,南半分はもう1条の暗渠と重複する。幅40~80cm,深さ44~57cmで,基底面は北から南に傾斜しており標高6.279~6.400mを測り,37.00mを検出した。出土遺物には須恵器3点,土師質土器47点,常滑焼1点,青磁2点,肥前系陶器1点,中国系陶器1点,近世陶磁器7点がみられ,中国系陶器(231)1点が図示できた。

出土遺物

中国系陶器 (Fig.132 - 231)

皿の口縁部とみられるもので,口縁部は内湾する体部から外反する。器面には薄く鉄釉が施される。胎土は精良で,焼成は良好である。

SD - 32

調査区北部で検出した東西の暗渠(N - 81° - E)で,SD - 31と繋がる。幅30~40cm,深さ47~51cmで,基底面は西から東に傾斜しており標高6.279~6.323mを測り,7.00mを検出した。出土遺物は皆無であった。

SD - 33

調査区南部で検出した東西の暗渠(N - 81° - E)で,SD - 29~31と繋がる。幅30~40cm,深さ35~44cmで,基底面は東から西に傾斜しており標高6.428~6.524mを測り,23.00mを検出した。出土遺物には土師質土器1点,染付1点,近世磁器1点がみられ,染付(232)1点が図示できた。

出土遺物

染付 (Fig.132 - 232)

皿の底部と体部の破片で,底径8.6cmを測る。底部は削り出し高台で,体部は内湾して上がる。見込には2条の界線と牡丹唐草文,外面には3条の界線と牡丹唐草文が施される。器面には乳白色の釉を施し,畳付は釉ハギが行われる。胎土は精良で,焼成は良好である。

SD - 34

調査区南部で検出した東西の暗渠(N - 81° - E)で,SD - 30と繋がる。幅30~40cm,深さ10~20cmで,基底面は西から東に傾斜しており標高6.675~6.772mを測り,16.20mを検出した。出土遺物は皆無であった。

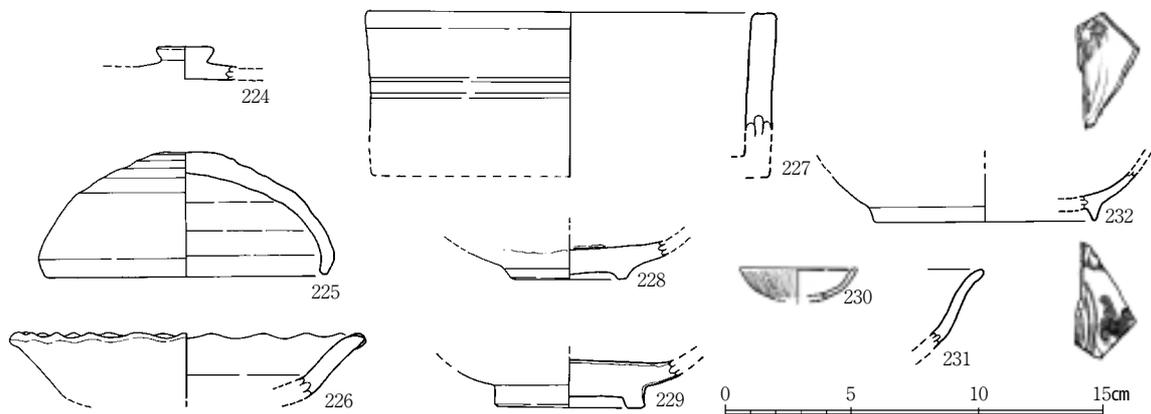


Fig.132 SD - 26 ~ 29・31・33出土遺物実測図

SD - 35

調査区東部で検出した南北の暗渠(N - 11° - W)である。幅25 ~ 40cm, 深さ20 ~ 31cmで, 基底面は南から北に傾斜しており標高6.515 ~ 6.632mを測り, 29.60mを検出した。出土遺物には弥生土器2点, 土師質土器1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SD - 36

調査区東部で検出した南北の暗渠(N - 14° - W)である。幅30 ~ 40cm, 深さ23 ~ 28cmで, 基底面は南から北に傾斜しており標高6.547 ~ 6.599mを測り, 15.30mを検出した。出土遺物には土師質土器7点, 青磁2点, 近世陶磁器4点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

(2) B区

本調査地区では, 明確な遺構を確認することはできなかった。遺物包含層である第 層からは, 10 ~ 11世紀とみられる土師質土器の杯, 椀や須恵器の甕の細片などが出土しているが, 出土遺物は非常に少なく, 図示できるものは1点のみであった。明確な遺構が確認されなかった理由としては, 後世に削平を受けたと考えるのが妥当であろう。また, 下層確認の結果からみると, 中世以前は隣接する調査区よりかなり地形が落ち込んでいたといえる。そのため中世の段階でも隣接する調査区より地形が低く, 沼あるいは低湿地であり, 生活空間ではなかった可能性も考えられるであろう。

(3) C区

縄文時代

i 土坑

SK - 1 (Fig.133)

調査区の東部で検出した遺構である。検出面は第 層上面であるが, 客土下約10cmで検出されており, 削平を受けている可能性が高い。調査区外へ伸びているため平面形態は明確ではないが, 隅丸方形を呈するとみられ, 長辺1.36m, 短辺0.86m, 深さ9.1cmを検出し, 断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄色粘土質シルトで炭化物と礫を含んでいた。出土遺物は縄文土器片270点で, 縄文土器(233 ~ 245)が図示できた。

出土遺物

縄文土器 (Fig.134 - 233 ~ 245)

233は体部の破片で器種は不明である。外面には貝殻擬縄文と沈線がみられる。234 ~ 237は有文深鉢である。234は口縁部の破片で, やや外反して立ち上がり, 口縁部は内面に断面かまぼこ形の粘土帯を貼付している。口縁部の文様帯には1条の沈線とそれに直行する短沈線を配している。調整は全面ナデ調整である。235は口縁部の破片で, 大きく外反している。口縁部には内面に半円形,

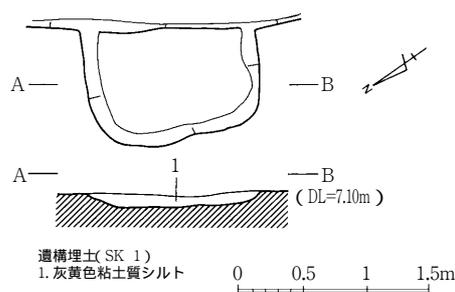


Fig.133 SK - 1

3. 遺構と遺物

外面に扁平な粘土帯を貼付している。口縁部の文様帯は若干幅が細く、1条の沈線と右下がりの短沈線を配している。調整は口縁部がナデ調整、その他は条痕文である。236は口縁部の突起部分である。口縁部の上面には1条の沈線とその外側に直行する短沈線が配されている。調整は全面ナデ調整である。237は深鉢とみられるが、小片のため不明確である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は波状口縁になっている。外面は斜行する沈線による文様が施されている。内面はナデ調整である。238～240は粗製深鉢である。238は体部の破片で、内外面とも幅の広い条痕文が施されている。後期中葉とみられる。239は緩やかに外反する口縁部を有し、端部内面には沈線がみられる。外面は条痕文、内面はナデ調整である。240は直線的に伸びる口縁部で端部を直角に曲げている。口縁には小さな突起を有する。調整は部分的にナデ調整と条痕文がみられる。241・242は浅鉢である。241は浅鉢の口縁部の破片である。内湾して立ち上がり、波状口縁を有する。内面はナデ調整で、外面は縄文地に幅2～3mmの横方向と斜行する沈線文が配されている。242は有文深鉢で、比較的精選された胎土である。口縁部の破片で、やや内湾して立ち上がり、端部を丸くおさめている。全面ナデ調整で、外面には幅4mmの沈線が施されている。243・244は底部である。243は深鉢の底部で、底径9.7cmを測る。上げ底で、調整は内外面ともナデ調整である。244は浅鉢の底部の破片で、底径6.4cmを測る。上げ底で、調整は内外面ともナデ調整である。245は深鉢で、器壁が非常に厚いものである。口縁部は外反し、端部にはキザミ目を有する。外面には太く高いキザミ目突帯が付く。調整は

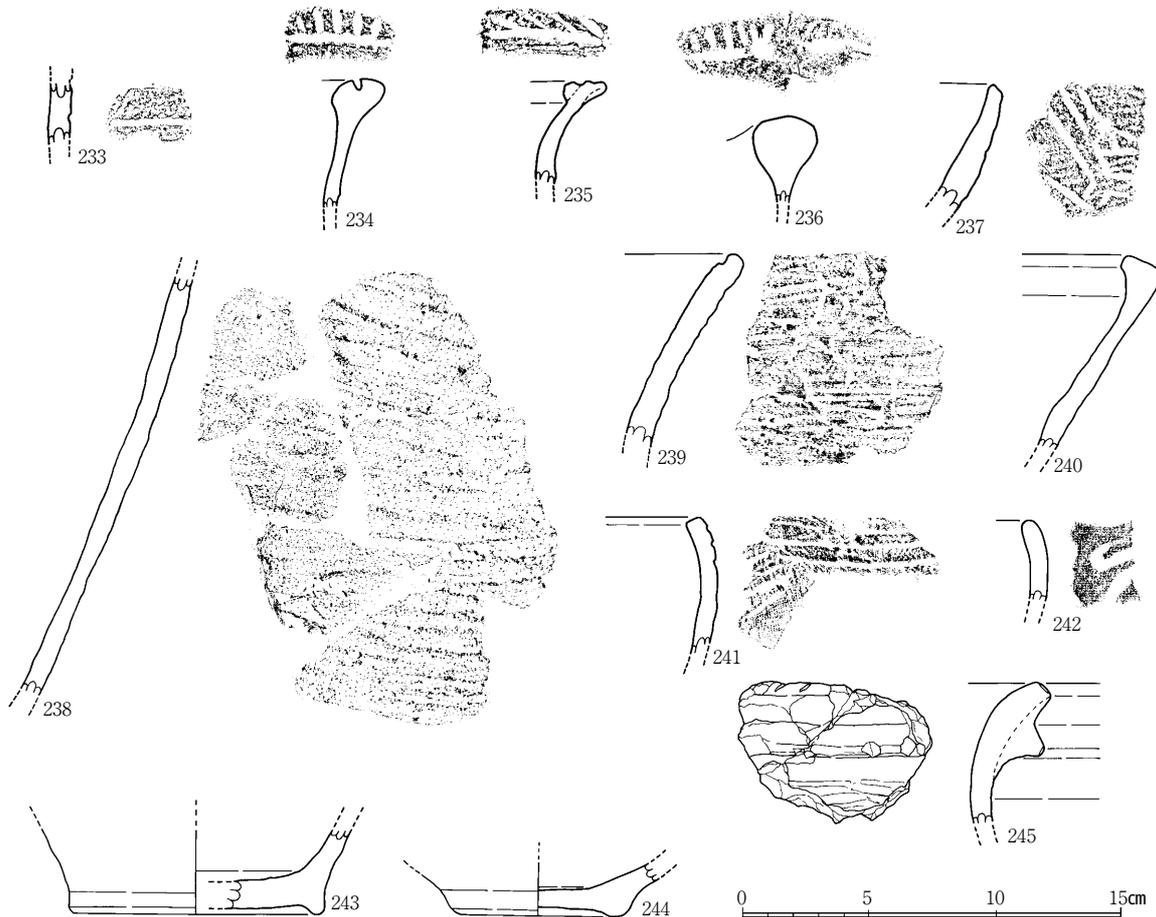


Fig.134 SK - 1出土遺物実測図

突帯より下に条痕文がみられ、その他はナデ調整である。

ii ピット

第XV層上面でピット約80個を検出した。第XV層は調査区の東側では微高地状に高くなっているが、調査区の北西部に向かって著しく地形が下がっていた。ピットが検出されたのは第XV層で最も標高が高い平坦部分周辺で、削平を受けている可能性もある。ピットは円形または楕円形で径20cm前後のものが多く、深さは深いもので51cmを測る。埋土はほとんどが灰黄褐色粘土質シルトで炭化物と5mm大の礫を多く含んでおり、一部灰黄褐色砂質シルトのものもあった。ピットからは縄文時代後期から晩期とみられる遺物が出土しているが、図示できるものはなかった。これらのピットの性格は明確ではないが、非常に密集しており、掘方が不整形で底面が平らでないピットが多いため、木の根の痕跡である可能性も考えられる。

中世

i 溝跡

SD - 1 (Fig.135)

調査区南部の第 層上面で検出した南北溝で、両端は調査区外に続いている。後世の削平を受けており、残存状態は良好ではないが、3.70mを検出し、長軸方向はN - 76 ° - Eを示す。幅140 ~ 200cm、深さ2 ~ 27cmを測り、断面形は舟底形で、基底面は東(6.972m)から西(6.677m)に向かって傾斜している。埋土は2層に分層され、上層が褐灰色シルトで、茶色シルトのブロックが混じり、3mm大の橙色の小礫を少し含むもので、下層がにぶい黄橙色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片6点、土師質土器2点、石製品1点がみられ、石製品(246)が図示できた。

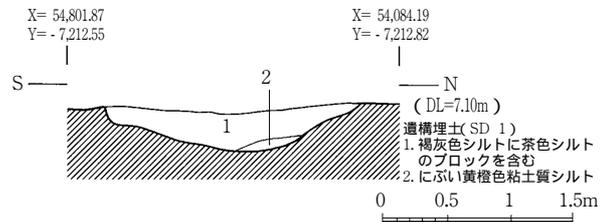


Fig.135 SD - 1

断面形は舟底形で、基底面は東(6.972m)から西(6.677m)に向かって傾斜している。埋土は2層に分層され、上層が褐灰色シルトで、茶色シルトのブロックが混じり、3mm大の橙色の小礫を少し含むもので、下層がにぶい黄橙色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片6点、土師質土器2点、石製品1点がみられ、石製品(246)が図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.136 - 246)

246は砥石で、一部を欠損している。残存部では一面を使用している。石材は砂岩である。

近世

i 溝跡

SD - 2

調査区北西部の第 層上面で検出した溝跡で、一部攪乱を受けている。調査区外に伸びているため、西側の肩は検出できなかったが、3.00mを検出した。長軸方向はN - 32 ° - Eを示す。埋土は上より灰黄褐色粘土質シルト、マンガンを多く含む灰色粘土質シルトの2層に分層できる。出土遺物には瓦質土器片1点、近世磁器片4点、近世陶器片1点がみられたが、図示できるものはなか

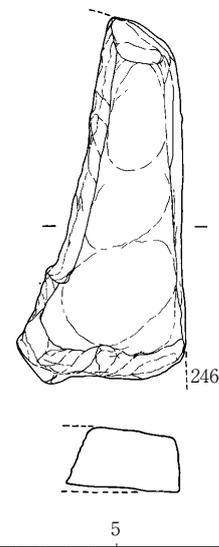


Fig.136 SD - 1出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

った。

近代

i 暗渠

SD - 3

調査区北西部の第 層上面で検出した暗渠で、1.920mを確認した。削平を受けているため残存状態は良好ではなく幅約20cm、深さ5～7cmを測る。断面形は箱形で、基底面は東(7.140m)から西(7.110m)に向かって傾斜している。長軸方向はN - 53° - Eを示す。埋土は灰色砂質シルトで、5cm大の石を多く含んでいた。出土遺物には近代の陶器が1点あるが、図示できなかった。

註

(1) 土佐市教育委員会『林口遺跡』土佐市々道改良工事に伴う発掘調査報告書 1998.1

第 章 考 察

1. 天神遺跡について

今回の調査では、中世以降の遺構が検出された。特に、中世では屋敷の北側部分を確認することができ、また、低湿地との境ではまとまった遺物が出土しており、屋敷の存続時期並びに当該期の土器研究に有用な資料を提供している。中でも、瓦器の在地生産を示唆する資料を新たに得たことは在地での中世土器研究に寄与するものと思われる。以下、各時代ごとに考察するとともに注目される遺物等についてもみてみたい。

(1) 中世

天神遺跡を象徴する時代で、屋敷跡の一角とみられる掘立柱建物跡が10棟、塀及び柵列跡が6列確認された。確認した建物跡SB - 1 ~ 10のうち比較的大きな建物はSB - 2・3・5・6・8・9であり、その中でもSB - 3はしっかりした建物で2間×2間の身舎に1間×2間の南北庇が付いている。また、SB - 2・6・9は2間×3間の建物跡で、1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。これらの掘立柱建物跡から出土した遺物は少量であるが、SB - 3の土師質土器の皿(103)、小皿(104・105)とSB - 9の土師質土器小皿(110)などは同時期と考えられ、12世紀末から13世紀代のものと考えられる。

また、規模的に小さいSB - 4・7・10は屋敷の建物としては珍しい梁間が1間の建物である。中でもSB - 4は柱穴が径40~45cmと大きく、柱間距離も2.85~3.00mとしっかりした造りであるため、倉庫ではないかとみられる。出土遺物の青磁(109)は口縁部の破片であるが、龍泉窯系碗の類で13世紀頃の搬入品と考えられるため、他の土師質土器とも時期的な差がなく、比較的大きな規模の建物跡とほぼ同時期であろう。

また、天神遺跡の中世を代表する溝としてSD - 12が挙げられる。SD - 12は幅60cm、確認延長18m、深さ47cmを測る比較的大きな溝で、遺物も多く出土している。掘立柱建物跡と埋土が類似して

Tab.6 天神遺跡掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模				面積 (㎡)	棟方向	備 考
	梁間×桁行	梁(m)×桁(m)	柱間寸法				
			梁(m)	桁(m)			
SB - 1	2×2	3.60~3.70×4.68~4.85	1.35~2.25	2.15~2.70	17.4	N - 80° - E	
SB - 2	2×3	5.20~5.45×6.70~6.90	2.15~3.15	1.95~2.85	36.2	N - 18° - W	間仕切柱
SB - 3	2×4	3.80 × 7.20~7.25	1.65~2.15	1.35~2.35	27.6	N - 9° - W	南庇
SB - 4	1×3	1.35~1.55 × 8.70	1.35~1.55	2.85~3.00	12.6	N - 79° - E	
SB - 5	2×4	4.15 × 7.15	1.90~2.25	1.75~1.80	30.0	N - 81° - E	
SB - 6	3×3	5.50 × 6.25	1.35~2.10	2.00~2.15	34.7	N - 10° - W	
SB - 7	1×3	2.40 × 4.31~4.35	2.40	1.15~1.58	10.4	N - 88° - E	
SB - 8	2×3	5.50 × 6.35	2.70~2.80	2.10~2.15	34.9	N - 4° - W	
SB - 9	2×3	3.40~3.65×6.60~6.80	1.70~1.85	1.25~3.15	23.2	N - 84° - E	西庇
SB - 10	1×3	1.85~2.00×6.35~6.40	1.85~2.00	1.80~2.65	12.0	N - 45° - E	

1. 天神遺跡について

いることやSB - 3・6の棟方向と同方向であることから、屋敷を囲む溝とも考えられる。

中世の遺構が調査区中央部から南西部に集中して検出されたことからその中心が西南部の調査区外にあったものと考えられる。また、瓦器の搬入や貿易陶磁器等で交流した地域との交通手段を考えてみると、海から仁淀川に入りさらに波介川から火渡川へという水運ルートが推定できるのではなかろうか。(泉)

(2) 近世

この時代の特徴としては、西部で検出した畝状遺構を挙げることができる。前述のとおり、畝状遺構ははたけの畝と畝の間(畝間)の痕跡とみられ、数状で一単位をなしていたものと考えられる。

検出された畝状遺構は東西方向を指向するものと南北方向を指向するものがみられ、さらに方向と間隔から少なくともそれぞれ2時期に分けることが可能である。調査区北西部が後世の削平のため遺存しておらず分布範囲を明確にできないが、検出面の標高からみると調査区の中では標高の高い部分にみられ、SD - 18・19が東の境をなす溝であったことも考慮され、比較的限定された部分に作られていた可能性も考えられる。

畝状遺構から出土した遺物は遺構の状況からして僅かであるが、そのほとんどは中世の遺物包含層にみられる土師質土器と瓦器であり、遺物から近世と明確に断定できるものは確認されなかったが、近世の遺物包含層の埋土と類似していることから近世のもの判断した。また、それぞれ

Tab.7 天神遺跡土坑計測表

遺構番号	平面形	規模			長軸方向	時期	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK - 1	舟形	3.00	0.15	0.06	N - 12° - W	中世	
SK - 2	隅丸方形	(0.80)	(0.30)	0.19	N - 31° - E	"	
SK - 3	楕円形	2.74	0.84	0.07	N - 32° - W	"	
SK - 4	楕円形	7.78	1.62	0.11~0.14	N - 40° - W	"	
SK - 5	楕円形	(2.46)	(1.18)	0.04~0.12	N - 46° - W	"	
SK - 6	楕円形	1.53	1.22	0.04	N - 55° - E	"	
SK - 7	楕円形	0.82	0.60	0.22	N - 84° - E	"	
SK - 8	楕円形	0.80	0.44	0.10	N - 4° - W	"	
SK - 9	隅丸方形	5.95	1.50	0.15~0.20	N - 11° - W	"	
SK - 10	舟形	3.20	0.30	0.06	N - 6° - W	"	
SK - 11	楕円形	1.00	0.30	0.06	N - 79° - W	"	
SK - 12	楕円形	2.64	0.76	0.08~0.13	N - 20° - W	"	
SK - 13	不整形	0.88	0.45	0.06~0.07	N - 89° - E	"	
SK - 14	楕円形	(0.88)	0.45	0.06~0.07	N - 89° - W	"	
SK - 15	楕円形	1.40	0.76	0.15	N - 55° - E	"	
SK - 16	楕円形	0.96	0.63	0.06~0.09	N - 89° - E	"	
SK - 17	舟形	4.50	0.80	0.07~0.10	N - 76° - W	近世	

多少の時期差はあるものの近世の範疇には入るものと考えられる。

なお、平成10年度の調査では東約120mの地点から古代、中世、近世の畝状遺構が検出されている。(泉)

(3) 近代

この時代を特徴付ける遺構は暗渠で、戦後の食糧増産の目的で湿地田を乾田化するために造られたものである。土佐市バイパス関連では、林口遺跡からも多数検出されている。

今回確認した暗渠は、東西方向を基調とし5.50～13.50m間隔で平行に延び、東端と西端で直行する南北の暗渠を連結している。また、13.50mと間隔の広いSD - 24とSD - 26の間には標高の低い部分に1条(SD - 25)追加している。幅や掘方はほぼ同じで、断面は全て箱形をなし、埋土は暗灰色～暗灰黄色粘土質シルトであった。深さは40cm前後を測り、基底面には棕櫚で覆った竹管が布設されていた。

出土遺物は中世・近世の遺物包含層を掘削していたため土師質土器を中心に瓦器、白磁、青磁、近世陶磁器などがあり、弥生土器、土師器、須恵器の混入もみられた。

また、調査区北西部で検出したSX - 1は水田の区画整理を行う際削平した土(その大半は遺物包含層とみられる)を埋めた部分とみられ、古代から近代陶磁器まで遺物を多量に含んでいた。(泉)

(4) 低湿地縁辺部(SS-1)出土遺物について

前述のとおり、土師質土器を中心に比較的多くの遺物が出土している。集落の縁辺に沿って帯状に投棄された状態で出土したもので12世紀から14世紀にかけての遺物がみられる。中心となるのは12世紀後半から13世紀中葉にかけてのもので、西側に展開する集落の最盛期であろう。

ここでは、最も出土が多かった土師質土器について見てみることにする。土師質土器については既に別稿¹⁾にまとめているが、これまで言われていた土師器と土師質土器について考える機会を得たのは本調査においてまとまった資料が出土したことに起因する。

まず、問題となるのはその製作技法であろう。以前南四国では中世のロク口成形したものは古代の土師器と区別し一律に土師質土器と呼称していた。しかし、昭和53年度から平成3年度まで実施した土佐国衙跡の調査(特に平成元年度の調査)で古代、少なくとも10世紀に遡り得る素焼土器にロク口を使用していたことが明らかとなった。当然底部の切り離しには「ヘラ」か「糸」を使用しており、外底面には回転ヘラ切り痕や回転(静止)糸切り痕が残ることになる。換言すれば、外底面にそれらの痕跡が認められればロク口を使用したことになろう。この観点で見ると、南四国においては9世紀頃からロク口の使用が行われていたことも考えられる。

ロク口の使用と言っても水挽成形と須恵器のように粘土紐巻き上げロク口成形とがあり、前者についてはロク口土師器、後者については回転台土師器等とも言われる。内外面にロク口目が明瞭に残り明らかに水挽成形されたと判断できるものは中世山城跡など15世紀以降の遺跡で散見されるようになる。一方、粘土紐巻き上げロク口成形されたものは16世紀(岡豊城跡や姫野々城跡など)になってもみられる。粘土紐巻き上げロク口成形から水挽成形に徐々に移行する傾向は看守される

1. 天神遺跡について

ものの粘土紐巻き上げロクロ成形は古代以降中世を通して一般に用いられた素焼土器の成形技法である。また、丁寧な調整が施されたものはその識別が困難な場合もある。よって、例言にも記しているようにロクロを使用して製作した素焼土器をロクロを使用しない土師器と区別して土師質土器と呼称した。

さて、以上のことを踏まえてSS - 1出土の土師質土器をみてることにする。まず、その製作技法であるが、そのほとんどが粘土紐巻き上げロクロ成形とみられ、断面に粘土紐を接合した痕跡²⁾をみることができる。一方、146の内底面には水挽した痕跡がみられ、147の断面には粘土紐接合痕跡がみられないことからこの2点はロクロ水挽成形ではないかと考えられる。146は体部以上を粘土紐を巻き上げて成形している可能性もあるが丁寧な調整を施しており明確にできない。ただ、少なくとも高台部分は水挽しているものと判断される。

底部の切り離しは回転ヘラ切りのもので回転系切りのものがみられる。南四国中央部では10世紀後半には回転ヘラ切りから回転系切りに代るとみられるが、ここでは少なくとも12世紀代まで底部の切り離しにヘラを使用していたことになり、南四国中央部とは様相を異にする。このことからすると南四国の中でも地域性が存在するようである。

調整技法で注目されるものとして椀の体部外面に施された回転ヘラ削り調整を挙げることができる。ロクロを使用しない土師器では見られない技法であり、土師質土器の杯でも行われていない。この技法を取り入れた経緯は今のところ判然としないが、高台を貼付し易くするために施された手法ではなからうか。なお、須恵器では古くからみられる技法で古代の杯には2～3段ではあるがほぼ同じ箇所にも施されることがある。また、当時搬入した白磁ではよく見かける調整技法である。

最後に、土師質土器の出現経緯について触れてみたい。前述のようにロクロ土師器とか回転台土師器と呼称されており土師器の後継器種のようにみられるが、これは焼成方法が土師器と同じであり色調も同じ黄褐色ないし赤褐色を呈することが大きな要因であろう。しかし、成形技法はそれまでの土師器とは全く異なる技法で製作されている。具体的には古墳時代から続く須恵器の技法と全く同じである。須恵器と異なるのは焼成技法であろう。南四国にあっては9世紀以降須恵器生産が減少するのに伴って土師質土器が出現し、10世紀以降供膳具の主体を占めるようになる。このようにみると須恵器の成形技法と土師器の焼成技法を取り入れたものが土師質土器になろう。量産化の過程で粘土紐巻き上げ技法からロクロ水挽技法に徐々に代っていったものと考えられる。前述のようにロクロ水挽技法が散見されるようになるのは南四国では15世紀以降とみられるが、今回の遺物の中にもロクロ水挽とみられる個体があり、少なくとも12世紀代には採用されていた技法であろう。今後、素焼土器の成形技法を検証する中で明確にされるものと思われる。(廣田)

(5) 瓦器について

天神遺跡の特徴の一つとして、瓦器(低温度焼成によるいぶし焼き)の出土量の多かったことが挙げられる。ここで述べる瓦器は供膳具のことを指し、調理具(羽釜・鍋類)や貯蔵具(壺・甕類)、その他(火鉢・香炉・仏花瓶等)は瓦質土器として取り扱うこととする。土佐市では中世の発掘調査例が少ないため、瓦器が多量に出土した遺跡も少ない。本遺跡は中世が中心となる遺跡のため、中世の土

Tab.8 天神遺跡出土遺物一覧表

器種	弥生土器	土師器	須恵器	瓦器	中世 須恵器	土師質 土器	中世 陶器	貿易 陶磁器	瓦質 土器	近世・近代 陶磁器	その他
合計	65	34	184	546	57	4,254	29	91	55	159	28

器の中心的ともいえる土師質土器の出土が最も多いが、次いで瓦器が多く細片も含めて546点確認できた。内訳は各層から順に示すと 層2点, 層6点, 層266点, 層77点, 層12点であり, 中世の遺構(低湿地遺構含む)から150点, 近世の遺構に混入したものの14点, 近代の遺構に混入したものの19点の総点数546点である(Tab.8参照)。しかし, 復元図示できなかった細片が多いため実測できたのは24点である。

実測した瓦器の中では椀が多く, 22点である。その内の15点が中世の包含層(~ 層)からの出土で, 遺構からは9点と比較的少ない。なお, 瓦器総数では椀が約90%を占め, 小皿は10%にすぎない。椀の中で, 完形に近かったのは7点(24・65・84・85・125・134・138)である。他は口縁部や底部の一部になるためおおよその形がつかめたものを分類してみることにする。

瓦器椀は大量生産のため, ある程度規格されたものが多く, 調整や形態も似ており, 本遺跡から出土したものは畿内の和泉型に類似しているものが多く, 法量的にも規格性があるため畿内の尾上編年^③に照らしながら考えていくことにする。

本遺跡の瓦器椀は大きく4つのタイプがみられる。第1類は畿内の瓦器には見られないタイプ, 第2類は畿内の尾上編年で和泉型 期に類似したタイプ, 第3類は和泉型 期に類似したタイプ, 第4類は和泉型 期に類似したタイプである。第2~4類の中にも和泉型の模倣とみられるものもあるが基本的には搬入品と考えられる。ただし, 第1類は在地生産の可能性が高いものである。

第1類は, 底部から内湾気味に立ち上がり, 底部外面にはやや八の字状に開く断面四角形の高台が付く。器壁が厚く, 口縁部は僅かにヨコナデ調整を施し, 体部は指押えを行っている。134と135が該当する。第 層出土の黒色土器(16)の系統を受け継ぐ器形である。

第2類は内底面にヘラ磨きによる粗い平行暗文が施される。底部外面は断面方形の高台が付く。17が該当し, 高台はやや八の字状に開き, 高台脇は強いナデ調整を施す。残存が底部のみのため, 内外面の調整は明らかではないが, 内面ヘラ磨きがあり, 外面ヘラ削りがないタイプと考えられる。

第3類は内面に圏線状のヘラ磨きを施し, 外面底部には断面三角形から半円状の輪高台が付く。最も多く出土しているタイプで, 18~23・84・116・125・136が該当する。これらは12世紀後半から13世紀前半の範疇に入るもので, この中でさらに小段階(畿内の編年の -1~ -3に類似するもの)に分けてみる。畿内の尾上編年の -1の12世紀後半頃に属するものに84・125・198, -1~2の12世紀末から13世紀前半頃に属するものに18・21が該当し, 198・18は畿内からの搬入品で, 他は和泉型の模倣の可能性も考えられる。 -2の13世紀前後頃に属するものは19・20・136で, -2~3の頃に属するものは116, -3の頃に属するものは22・23が該当し, 116と136が畿内からの搬入品で, 他はこれらの模倣ではないかと考えられる。

第4類は底径がだんだん小さくなり, 初期の頃は断面三角形の輪高台が付くものと付かないもの

1. 天神遺跡について

が存在する。第3類とほぼ同じくらい出土しているタイプで、24・25・63～65・85・137・138・198が該当する。これらは13世紀中葉から14世紀前後の範疇に入るものであり、この中でさらに小段階（畿内の編年の -1～ -3に類似するもの）に分けられる。畿内の尾上編年の -1の13世紀中葉頃に属するものに24・63・64・85、 -2の13世紀後半頃に属するものに65、 -2～3の13世紀後半頃に属するものに138、 -3の14世紀前後頃に属するものに25・137が該当し、これらは胎土に比較的大きな砂粒(石英・長石・チャートなど)を含み、断面は黄灰色から明褐色を呈しており、和泉型を模倣したことも考えられる。

本遺跡の瓦器は和泉型以外は確認されていない。古い時期としては、第1類から第2類の瓦器碗が挙げられる。畿内の編年では -2期にあたるもの(17)が古く、12世紀中葉の搬入品である。しかし、厚い器壁の134・135は黒色土器の系統を継ぐもので、この他の瓦器とは底部外面の成形や焼成方法が異なり

瓦質土器に似ている。

また、本遺跡の瓦器の特徴として、断面が黄褐色から黄灰色を呈する点が挙げられる。これは古代以来の土師器の褐色を基調としたものをいぶし焼きなどの方法により、炭素を吸着させて黒くしたため

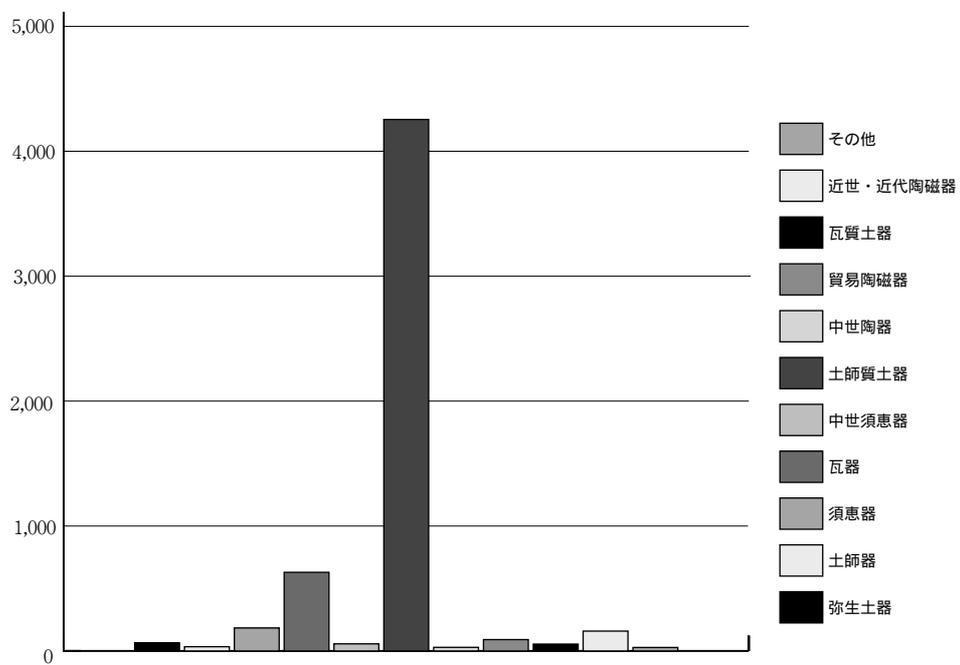


Fig.137 出土遺物グラフ

と考えられる。時期的に畿内では少ない腰の張るタイプが多くみられるのも特徴のひとつである。また、瓦器碗とは言えないが土師質土器の杯の中には炭素を吸着させたものも見受けられる。12世紀末から14世紀までの瓦器が出土しているが、13世紀代が遺跡の中心となる。(泉)

追記：第 章で報告しているように今回の調査に伴って実施した光永・岡ノ下遺跡，林口遺跡，天神遺跡出土の瓦器の胎土分析と蛍光X線分析を行った。その結果，明確に近畿地方で生産されたと判断されるものはなく在地生産または四国内で生産された可能性が指摘されている。中でも和泉地域で生産された土器によく含まれるとされる角閃石がほとんど含まれておらず，形態的には和泉型と指摘されるものも在地生産または四国内で生産された可能性が指摘された。本遺跡を含め少なくとも土佐市バイパス関連の調査では，形態的のみならず科学分析でも在地生産を示唆する資料を得ることができたことは中世の土器様相を考察するうえで重要な意味を持ってこよう。

瓦器生産を決定付けるには生産遺構の発見が不可欠と考えるが、詳細な形態分類と科学分析結果の蓄積を今後も行っていく必要がある。(廣田)

(6) まとめ

今回の調査区からは弥生土器を始めとして古代の遺物も出土するが、検出された遺構は中世以降のものであり、集落として機能したのは中世以降となろう。ただし、天神遺跡全体では弥生後期後半の遺構も確認されており、当時から集落が構成されていたものと推察される。なお、周辺の歴史的環境については『光永・岡ノ下遺跡』で詳述しているのでそれに譲ることにする。

ここでは、まず土地利用の状況をみてみよう。律令制に伴う坪名称は高岡平野では残りが少ない。長宗我部地検帳には「大坪トウシリ」「大坪トヲシリ」「中大坪」などという地名が一部に残っているだけである。ホノギによると高岡町天神の北方の水田に条里制の区画を持ったものが残っている関係上、本調査区周辺も当時は区画を持っていた可能性が考えられる。地検帳時代に残っていないのは以後河川の氾濫が長期に亘ってあったことに起因する⁽⁴⁾ではなかろうか。

土佐市の中世史は蓮池城主蓮池権守家綱の活躍で幕が開く。鎌倉時代は史料を欠くため不詳であるが鎌倉幕府滅亡後南北朝の内乱勃発は在地に大きな変動を引き起こしたものとみられる。本調査区からは丁度史料を欠く鎌倉時代を中心とする遺構が調査区中央部から南西部の微高地上で検出され、中世初期の段階では掘立柱建物跡等も検出され集落が形成されていたものとみられるが、長宗我部地検帳の頃(天正年間1573～1591年)にはすでに下畠・中畠になっており、中世後期までは存続していない。本遺跡の西隣りには虚空蔵山系に水源を有する火渡川があり、東には仁淀川があることから度々の氾濫で集落中心が移動し、放棄された場所がやがて田畑となっていったのだろう。長宗我部地検帳やホノギには調査区外の南側で「森弘」という地名があり、地検帳には下・中屋敷と記述されており、その西にも「和田屋敷」・「御所の内」という地名が明記されていることから集落の中心が南西部に移ったことが窺える。

一方、出土遺物からは一般の農民だけでなく屋敷の一角として一定の経済的に裕福な有力者の住居であることが想定される。掘立柱建物跡(SB-4)から出土した青磁(109)は13世紀頃のもので龍泉窯系の製品であり、SD-12から出土した青磁碗(123)も龍泉窯系の蓮弁文を有するもので、当時としては比較的貴重なものである。また、国内搬入品では前述した畿内産の瓦器や東播系須恵器の片口鉢(115・117)、常滑焼、備前焼、石鍋、近世以降の陶磁器では肥前系陶磁器、瀬戸美濃系磁器などがあり、中世のみでなく近世も続いて他県との国内交流も盛んであったことが窺える。中世の遺物包含層や低湿地状遺構からも多くの搬入品が確認でき、青磁や白磁、刀子や渡来銭などの金属製品も出土していることから当時の生活状況の一部が明らかにできた。また、在地土器と搬入土器が伴出した遺構もあり土器編年を考える上で貴重な資料となっている。そして、多くの搬入品の出土により当時から海外や県内外との商品流通が盛んであったことが推察される。(泉)

2. 林口遺跡について

今回の調査区で確認された遺構は縄文時代、中世、近世、近代のものであるが、遺物にはその間

2. 林口遺跡について

隙を埋めるものも出土しており、周辺部には当該期の遺構が存在するものと考えられる。以下、各時代ごとに考察するとともに注目される遺構等についてもみてみたい。

(1) 縄文時代

今回の調査では、縄文時代後期、晩期の遺物・遺構を確認することができた。縄文時代の遺物が出土したC区は非常に起伏に富んでいたようで、遺物包含層は斜めに堆積しており、流れ込んだ遺物も含まれているとみられる。

遺構は土坑1基(SK-1)を確認した。SK-1が検出されたのは微高地状に地形が高くなった調査区で最も標高が高いところである。調査前の地形は平坦で、また、客土下10cmで検出していることから、削平を受けているとみられる。遺構は土坑1基のみ検出されたが、今回の調査区の南側に微高地が続いているとみられ、遺構が残存している可能性は高い。SK-1の出土遺物は大半が松ノ木式のもので、宿毛式が1点、後期中葉とみられるものが2点、晩期末が1点出土している。晩期末の遺物は混入した可能性も考えられ、SK-1の時期は概ね松ノ木式期と捉えることができる。

遺物は晩期の2点を除き、すべての遺物が後期の範疇で捉えられ、ほとんどは後期前半の松ノ木式とみられる。松ノ木式は高知県本山町松ノ木遺跡を標識とする縁帯文成立期の土器型式である。松ノ木式土器は、松ノ木遺跡のほかに県内では西部で出土しており、県外でも四国や瀬戸内など広い範囲で出土が確認されている。しかし、これまで高知平野では松ノ木式は確認されておらず、今回の出土はその空白を埋めることとなった。

土佐市ではこれまで本格的な発掘調査がなされておらず、縄文時代の遺物は散布地として知られているところが多く、林口遺跡もその一つであった。しかし近年土佐市での発掘調査が増加し、縄文時代の遺物も確認されるようになってきている。後期の遺物が確認されているのは居徳遺跡群で、その他野田遺跡では道路工事の際に後期初頭の中津式が出土している。晩期の遺物は居徳遺跡群、北高田遺跡、倉岡遺跡で出土している。今回の調査で出土した晩期の深鉢は、北高田遺跡で出土している遺物よりも器壁が非常に厚く、突帯の幅が広いもので、一見して異なるものである。この遺物が林口遺跡の特徴であるのかは、晩期の遺物は2点しか出土していないため明確ではないが、周辺の遺跡となぜ異なるのか、資料の増加と共に検討していく必要がある。

また、今回の調査で縄文時代の遺構が検出されたのは微高地状になったところであった。土佐市は起伏量100m以下の残丘(低位段丘の残丘)が非常に多く分布し、谷地形が複雑で微細化している。そのため地形の起伏が激しく、また残丘と谷の傾斜も非常に著しい。その影響は中世においてもみられ、近隣の天神遺跡や光永・岡ノ下遺跡では地形の高いところに集落を形成している。土佐市の縄文時代後期・晩期の景観は平坦ではなく、平野部では今回の調査のように残丘が削平されて埋没しているところや、この時期に地形の高かった残丘上に遺跡が存在するといえそうである。(田中)

(2) 中世

本調査区を特徴付ける時期で、これらの遺構は屋敷跡を構成していたものとみられ、SD-1・2の東側を中心に展開しており、SD-1は屋敷を区画する溝跡であったとみられる。ただ、遺物包含

層が遺存し、比較的良好な状態で検出できたのは調査区南部に限られ、それ以北については少なくとも40cmは削平されており、当時の状況を反映しているとは言い難い。このような状況の中ではあるが、屋敷を区画したとみられる溝跡と石組井戸跡(SE-1)を中心に屋敷の構成をみてみたい。

まず、屋敷を区画すると考えられる溝跡(SD-1)は、数少ないがその出土遺物は12世紀後半から13世紀にかけてのもので、一部には拡張の痕跡もみられることから概ねその期間存続したのではないかと考えられる。一方、位置的にはSD-1の内側、屋敷内と考えられる石組井戸跡(SE-1)は、備前焼第一期と考えられる甕(179)も出土するが石組に182~184の五輪塔が転用されていることや井筒に桶側(185)が使用されていることからすると戦国期末ないし安土桃山期に構築されたものではないかとみられ、SD-1と同時期に存在したとは考え難い。このことから本調査区では、大きくSD-1に伴う時期とSE-1に伴う時期の2時期が存在したものと考えられる。

SD-1の東側(屋敷内)で確認された掘立柱建物跡をみると、SB-1~10は棟方向、埋土、出土遺物からみてSD-1と関連したものとみられるが、SB-11はSB-1~10とは埋土と棟方向がやや異なり、出土遺物も新しい様相を呈することからSE-1とほぼ同時期ではないかとみられる。また、SB-11と埋土が同じSA-10は、SB-11とほぼ同時期で、位置関係からみてSB-11との関連が考慮される。また、ほぼ同時期とみられるSB-1~10でも建物が重複したものや近接したものがみられることから数時期に細分されよう。建物構成をみると、中央部で確認したSB-3・4は規模が大きく、南側と北側で検出した建物は概して小規模であることからSB-3・4は屋敷の母屋であった可能性が高いのではなかろうか。岩井口遺跡⁵⁾の例からみると南側と北側で確認した小規模の建物は家人の住いとみることができ、溝の外側で確認したSB-9・10などは屋敷内の建物より一回り小さいことから下人の住いということになる。ただし、岩井口遺跡のように屋敷全体を調査したわけではなく、今後周辺の調査によってさらに考察を加える必要がある。

次に、溝跡についてみてみたい。今回の調査区で最も規模の大きいSD-2は、SD-1と平行して南北に延びており、その出土遺物もほぼ同時期であることから同時に存続した可能性が高く、その規模からするといくつかの屋敷を区画する大区画溝ではなかったかとみられると共に当時は水を湛えていたものと考えられることから用排水の機能も兼ね備えていたのではなかろうか。特に、周辺部には低湿地が広がることからその機能が重要視されたのではなかろうか。また、本調査では岩井口遺跡などに比べると全体に溝跡が多く、主軸方向からみると直接屋敷に関連していたとは言い難いものもみられるが、その多くは屋敷内の小区画溝として機能していたのではなかろうか。

以上、中世の遺構についてSD-1とSE-1を中心にみてきたが平成11年度に実施した林口遺跡第調査地区の調査では、SD-1の存続時期とほぼ同時期の遺構が検出されており、『林口遺跡』で改めて総括してみたい。(廣田)

(3) 近世

この時代で注目されるのは桶側を6段積み重ねた井戸(SE-2)であろう。このような構造のものは県内初であり、井戸研究における貴重な資料となっている。時期的には数少ない出土遺物からみて17世紀前後とみられ、SE-1が廃絶後に機能したものではないかと考えられる。SE-2の西隣に

2. 林口遺跡について

位置するSB - 12は確認できなかった柱穴もあるが、検出した柱穴との位置関係、掘方、石の礎板の使用等類似性がみられ、建物として復元した。図示できる遺物はなかったものの17世紀前後とみられる肥前系陶器片や染付片が出土しており、SE - 2とほぼ同時期に存続したものではないかとみられる。その他、近世に属する遺構はSE - 2やSB - 12の周囲の調査区西部に集中しており、この付近が屋敷として機能していたのではないかとみられ、SE - 1の段階から屋敷地の移動が行われたものと考えられる。また、土坑墓と考えられるSK - 20は、底面に残存していた板からみて桶を利用したものとみられ、かつ、伴出した歯は3～4才の幼児のものであるとの分析結果(第 2章2-(6))から小さな座棺で埋葬した屋敷墓的な性格のものでなかったかと判断される。

これら遺構は周辺部の調査(西側の確認調査やB区の調査)から北に広がっているものとみられ、今回調査した部分は屋敷の南側ということになる。(廣田)

(4) 近代

天神遺跡第 調査地区同様この時代を特徴付ける遺構は暗渠で、湿田の排水補助施設として乾田化を目的に造られたものである。

確認された暗渠は、南北方向を基調とし4.70～17.20m間隔で平行に延び、4条の東西方向の暗渠と連結している。その連結状態をみると大きく二つのグループに分れ、西側のSD - 25～28、東側のSD - 29～36がそれぞれグループをなすとみられる。丁度、SD - 28とSD - 29の間には土地の境があり、土地ごとに暗渠が埋設されたことが分かる。東側のブロックは一筆の水田であり、SD - 35・36の南側は未調査であるがSD - 33と連結していたものとみられ、SD - 29～36は一続きの暗渠になる。幅や掘方はほぼ同じで、断面は全て箱形をなし、埋土は第 1層から第 2層の土がブロック状に埋まっていた。深さは40cm前後を測り、基底面には棕櫚で覆った竹管が布設されていた。平成11年度に調査した林口遺跡第 調査地区では竹管の代りに砂利を敷き土管を布設しているものもみられた。(廣田)

(5) 井戸について

今回の調査では2基の井戸跡を確認することができた。土佐市バイパス関連ではこの他に平成10年度に調査した天神遺跡第 調査地区(『天神遺跡』)からも木を刳り貫いた井筒を使用した中世の木組井戸が検出されており、合わせて3基の井戸跡が確認されたことになる。ここでは、これまで県内で確認されている井戸跡と比較し、今回確認した2基の井戸跡を位置付けてみたい。

まず、これまで県内では田村遺跡群の中世の溝に囲まれた屋敷跡から石組井戸13基⁽⁶⁾、土佐国衙跡から中世の石組井戸1基⁽⁷⁾、佐川町上美都岐遺跡から近世の石組井戸1基⁽⁸⁾、高知市神田ムク入道遺跡から中世の石組井戸1基⁽⁹⁾、具同中山遺跡群から中世の木組井戸1基⁽¹⁰⁾などが確認されており、構造的には石組と木組がみられ土佐市の2例⁽¹¹⁾と具同中山遺跡群の1例が井戸の木組である以外すべて石組となっている。

これらの内下部構造として井筒が確認されたものは田村遺跡群の石組井戸11例⁽¹²⁾、土佐市バイパス関連の3例及び高知市神田ムク入道遺跡であり、他の井戸跡からは木製の井筒を使用したものは

検出されていない。しかし、井筒の代りに基底層が砂礫層を掘り込んだり、具同中山遺跡群の例のように礫と砂利を交互に敷くなどして過効果を図っている。井筒の形態をみると、田村遺跡群の大半は木を削り貫き、側面に四角い穴を穿っているもので、桶側を使用しているものは前述の1例(15世紀)を数えるのみで、併存するが時期的には桶側のものがやや後出となっている。高知市神田ムク入道遺跡の井筒は県内では珍しい曲物を使用したもので、時期的には室町時代のものである。

以上のような県内の井戸跡から今回確認された井戸跡をみると、SE - 1は田村遺跡群にも例があるように中世を通じて構築された井戸の形態とみることができ、井筒に桶側を使用している点からみて中世でも比較的新しい時期に該当しそうである。一方、SE - 2は県内では類例のないものであるが、石組井戸に比べて簡素化した形態とみられ、石組井戸より後出と考えられる。前述の佐川町上美都岐遺跡の例の如く近世でも石組井戸は併存していることから井戸の構築には屋敷の規模、すなわち構築者の財政的な側面も考慮する必要があるのかもしれない。(廣田)

(6) 屋敷跡と長宗我部地検帳の関連について

ここでは長宗我部地検帳に記載されている屋敷名とFig.4に載せた現在残る小字(ホノギ)との関連をみたうえで、今回確認した屋敷跡(戦国期末ないし安土桃山期に構築されたとみられるSE - 1に伴うもの)を位置付けてみたい。

まず、今回の調査区は、Fig.4の「御所の内」の南半分、「島の後」の東側及び「和田屋敷」の一部に該当するとみられる。このホノギを長宗我部地検帳でみると、「御所の内」が「コシヨノ内」、 「和田屋敷」が「ワタヤシキ」に該当すると考えられ、前後の地名からみて位置的には現在の小字(ホノギ)と大きな変動はなさそうである。

次に、当時の利用状況とその面積(メートル方に換算して)から現在のホノギとの関連をみると、「コシヨノ内」は下畠で併せて約730㎡、「ワタヤシキ」が上屋敷で約1,520㎡となる。現在のホノギでの面積は「御所の内」が約16,000㎡、「和田屋敷」が約4,900㎡であり、「和田屋敷」は長宗我部地検帳の「ワタヤシキ」及び「同じ北ソトかけて」(中屋敷で約2,000㎡)と「ヒ渡ノ西」(中畠で約450㎡)を合わせた部分とみられ、「御所の内」は長宗我部地検帳の面積に比べ20倍ほど広いことから周辺部分³³をも含めたものではないかと考えられる。

また、この箇所では検地の順番が「ワタヤシキ」、「コシヨノ内」、「阿弥陀寺ノ前」(ホノギの「阿弥陀の前」に当たるとみられる)の順に行われていることから南から北に向かって行われたものと推察される。

以上のことからすると前述のSE - 1に伴う建物等は、「ワタヤシキ」や「同じ北ソトかけて」にみられる上屋敷や中屋敷ではなく、「同じ西道コシテ」の中屋敷か「同じ北本土居」の中屋敷辺りが関連してくるのではなからうか。今回の部分では佐川町岩井口遺跡³⁴のように長宗我部地検帳に記載されているものそのものが遺存しているわけではなく推測の域を脱しないが、今後の綿密な調査が長宗我部地検帳との関連を考古学的に立証する手立とならう。(廣田)

3. 結語

(7) まとめ

今回の調査では、縄文時代後期後半を始めとして近代に至る遺構を確認することができた。以下時代を追って本調査区の消長を概観することにする。

まず、人の痕跡がみられるのは縄文時代後期初頭であり、四国一円に広がるとみられる縁帯文土器を持った人々が微高地状を生活場所としている。当時は、低湿地が各所にみられ、生活に適した場所は限られていたものとみられ、東にある自然堤防もまだ安定した生活空間ではなかったとみえてその痕跡は僅かである。

次に人の痕跡がみられるのは弥生時代後期後半の時期で、今回は遺構こそ確認されなかったが、比較的原形を留めた土器も出土しており、周辺部に当時の集落が存在することは間違いのないであろう。続く古墳時代や古代も遺構は確認されなかったものの当時の遺物が出土しており、東の天神遺跡、天神三島遺跡、光永・岡ノ下遺跡、犬ノ場窯跡などとの関連が窺える。

そして、平安時代末から鎌倉時代になると活発な生活痕跡を留めるようになる。周辺部にも各所に屋敷が造られ、各種に搬入品が流通しはじめ正に当遺跡の盛行期を迎える。室町時代にはいと周辺部にあった屋敷が消えて行く中で、ここだけは小規模ではあるが屋敷が存続し続け、近世入っても生活場所となっている。それも近世の終焉と共に生活の痕跡は途絶え、耕作地に姿を変える。その後、戦後の食糧難を克服するために水田下には排水施設である暗渠が企画性を持って埋設されるようになる。それから半世紀、当遺跡は基幹道路に姿を変えようとしている。(廣田)

3. 結語

今回の天神・林口遺跡の両調査区では前述のとおり、縄文時代から近代に至る遺構・遺物を確認することができた。これらの中で注目されるものは、まず、林口遺跡第 調査地区 - C区で検出された縄文後期の遺構と遺物であろう。ごく限られた部分からの出土であり、その全容については推測の域を脱しないが周辺部に集落が構成されていた可能性も伺える。また、高知平野では初めて縁帯文成立期とされる松ノ木式が確認されたことは、その分布を考えるうえで重要であろう。北方約3kmに所在する縄文後期から晩期にかけての多量の土器や木製品が出土し、この付近の中心的な役割を担っていたものとみられる居徳遺跡群との関連も今後考えていかなければならないであろう。

弥生時代から古代にかけての遺構は、今回の調査区からは確認できなかったが、平成9～11年度の調査では弥生時代後期後半と古代の遺構が検出されており、空白期はあるもののこの期間も一定の生活空間になっていたことが窺える。

次に遺構が確認されるのは中世段階である。土佐市バイパス関連遺跡(光永・岡ノ下遺跡、天神遺跡、林口遺跡、蓮池城跡北面遺跡、野田遺跡など)全体でも言えることであるが、12世紀後半から各所で集落が形成され、この付近の繁栄期を迎える。今回調査した天神遺跡第 調査地区、林口遺跡第 調査地区ともその時期から集落、中でも屋敷が造られ、概ね13世紀をとおして存続している。林口遺跡第 調査地区以外ではそれ以後の遺構は検出されず、集落の移動が考えられる。長宗我部地検帳にみる「屋敷」も林口遺跡第 調査地区以外には見当たらず、畠となっている。林口遺跡第 調

査地区では、引き続き15世紀後半以降も屋敷が形成され、長宗我部地検帳にはそれに当たるとみられる前述の屋敷名が窺える。また、確認された当該期と考えられる石組井戸跡は、河原石以外に3個の五輪塔を転用し、井筒に桶側を使用したもので井戸構築の変遷を考えるうえで興味深い。

近世では林口遺跡第 調査地区で引き続き集落が存続する以外、目立った遺構は検出されていないものの火渡川を挟んだ天神遺跡第 調査地区では畠跡と考えられる畝状遺構が検出されている。天神遺跡第 調査地区では集落跡を確認していないが、当然隣接区域に当該期の集落が存在したものとみられる。平成10年度に調査した天神遺跡第 調査地区からは古代、中世、近世の3時期の畠跡とみられる畝状遺構が検出されており、集落との関連を示す資料は確認されなかったものの集落とは別に一定の空間を畠地としていたことが窺える。

近代では、戦後から昭和30年前後にかけて埋設された水田の排水施設である暗渠が多数遺存していた。両地区とも規則的に配置されており、企画性を持って設置されたことが窺える。この付近では光永・岡ノ下遺跡や野田遺跡など自然堤防上に立地する遺跡では確認されず、残丘周辺に位置する遺跡でよく見かけられる。このことは、自然堤防から離れた部分が水捌けの悪い部分であったことを物語っており、隣接して低湿地が存在したこと、換言すれば起伏に富んだ地形を形成していたことに起因するものと考えられる。そして、近世以前はこの残丘の裾部や低湿地に隣接した微高地に居住空間を求めたことが窺える。しかし、その居住空間を追及するには土地の改変が著しく試掘調査で確認する以外難しい状況になっている。(廣田)

註

- (1) 廣田佳久「南四国における古代末の土器様相 - 素焼土器を中心に - 」『考古学論究』第7号 立正大学考古学研究会
- (2) 粘土紐巻き上げロクロ成形の場合は断面に厚い部分(粘土紐を接合した部分)と薄い部分が交互にできる。ただし、丁寧な回転ナデ調整を加えると識別できなくなることもある。一方、ロクロ水挽成形では未調整の場合や回転ナデ調整が雑な場合は器面に細かなロクロ目が残ることがあり識別が容易であるが、丁寧な回転ナデ調整を施している場合は判別しづらい。しかし、器壁が均一か口縁に行くに従って薄くなる傾向がみられ、粘土紐巻き上げロクロ成形のように器面(特に外面)に緩やかな凹凸はできないものと考えられる。
- (3) 尾上実・森島康雄・近江俊秀「瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995.12
- (4) 山本 大「中世編」『土佐市史』土佐市
- (5) 廣田佳久「第 章考察」『岩井口遺跡,二ノ部遺跡・城跡』佐川町教育委員会 1995年3月
廣田佳久「第 章」『岩井口遺跡』佐川町教育委員会 1995年3月
- (6) 高知県教育委員会『田村遺跡群』第6～10分冊 1986年3月 井戸跡として検出されたものは16基で、内石組が確認されたものは13基を数える。
- (7) 高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書第4集』- 府中・太郎ヤシキ地区の調査 - 1983年3月
- (8) 佐川町教育委員会『上美都岐遺跡』1997年3月
- (9) 平成7年度に行った発掘調査で確認されている。1995年10月14日の高知新聞記事など。
- (10) 具同中山遺跡群の平成9年度の県道改良工事に伴う発掘調査で検出されており、『具同中山遺跡群』とし

3. 結語

て刊行される予定である。

- (11) SE - 2は上部のみ3段の石組となり、桶側と併用した形となっているが、上部の石組は形式的なもので基本的には桶側積みである。
- (12) 11例の内、自然木を刳り貫いて井筒として使用していたのは10例で、コキカ内(Loc.31A)のSE1のみが桶側を2段積んだ上に自然木を刳り貫いたものを据え、その上から石組を構築していた。
- (13) 「コシヨノ内」の次には「同じ西道コシテ」(中屋敷)、「同じ北本土居」(中屋敷)、「同じ西内ソトかけて」(下屋敷)の順になり、屋敷名が続く。
- (14) (1)に同じで、佐川町岩井口遺跡では長宗我部地検帳に「土居」に関連した地名が現在のホノギに残っていた「土ゐ」と重なり、さらに発掘調査では在地領主(国人)のものとみられる屋敷跡が検出されている。

参考文献

横川末吉『長宗我部地検帳の研究』1961年 高知市立市民図書館

第 章 自然科学分析

1. 光永・岡ノ下遺跡の自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

光永・岡ノ下遺跡は仁淀川の活動により形成された自然堤防上に立地する。今回の発掘調査では古墳時代・古代・中世の各時代の遺物・遺構が検出されており、古墳時代～中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなっている。今回は、本遺跡における人間の活動の場であった調査区の前環境の変遷を捉え、同時に古植生や稲作に関する情報を得ることを目的とした自然科学分析調査を実施する。前環境の検討は、特に堆積環境ならびに古植生変遷に着目して、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、土壌理化学分析を行う。一方、土坑内の遺体埋納の推定を目的としてリン酸分析が行われる例は多いが、分析結果から明瞭に認められた事例は、火山灰土などリン酸を保持しやすい性質を持った土壌である場合が多い(中根,1992など)。本遺跡のような沖積地では、土壌中にリン酸が保持されにくく、リン酸の富化が明瞭に認められた例は少ない。しかし、東京都北区にある豊島馬場遺跡では、リン酸以外の土壌成分の分析も行って分析値を総合的に判断することによって、周溝内における遺体埋納の推定を行っている(東京都北区教育委員会,1995)。そこで、今回は上記の事例を参考にして、リン酸以外に炭素含量と亜鉛の含有量も測定することによって、遺体埋納の検証を行う。

(1) 試料

試料は、遺跡の土層断面において基本土層を設定し、遺物が出土する層準を中心に採取した。堆積物の模式柱状図と試料採取層位をFig.138に示す。一方、土坑内試料は、A区の12～13世紀頃に構築されたSK-7とSK-11覆土から採取された(Fig.139)。また、土坑覆土の各土壌成分の集積傾向を把握するために、比較試料として両土坑が掘り込まれている自然堆積層からも採取された。

(2) 方法

珪藻分析

試料を湿重で約5g秤量し、過酸化水素水、塩酸の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適量計り取りカバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(珪藻化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot(1986・1988・1991a・1991b),K.Krammer(1992)などを用いる。同定結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。堆積環境の解析については、安藤(1990)、伊藤・堀内(1991)の環境指標種などを参考とする。

1. 光永・岡ノ下遺跡の自然科学分析報告

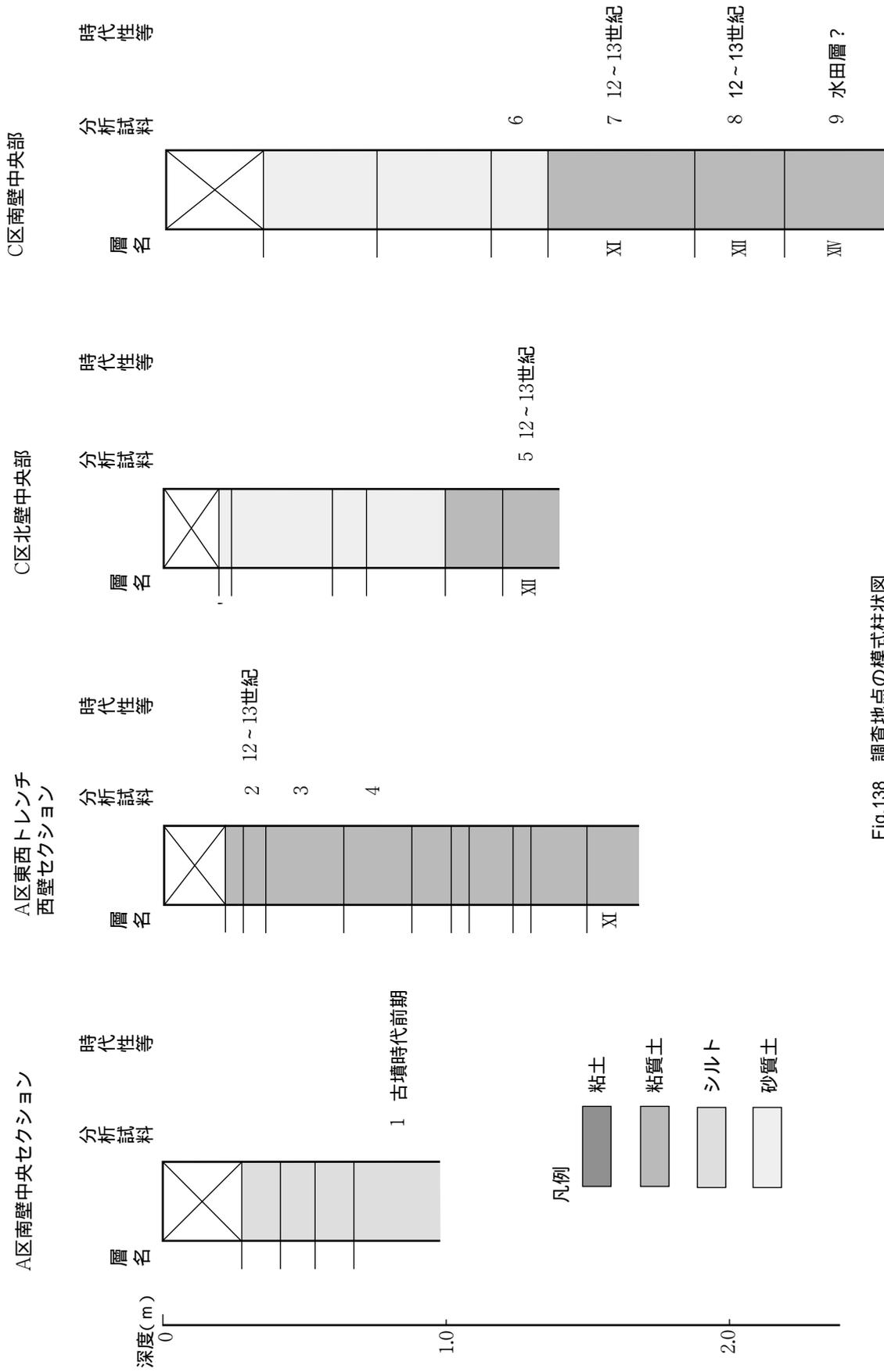


Fig.138 調査地点の様式柱状図

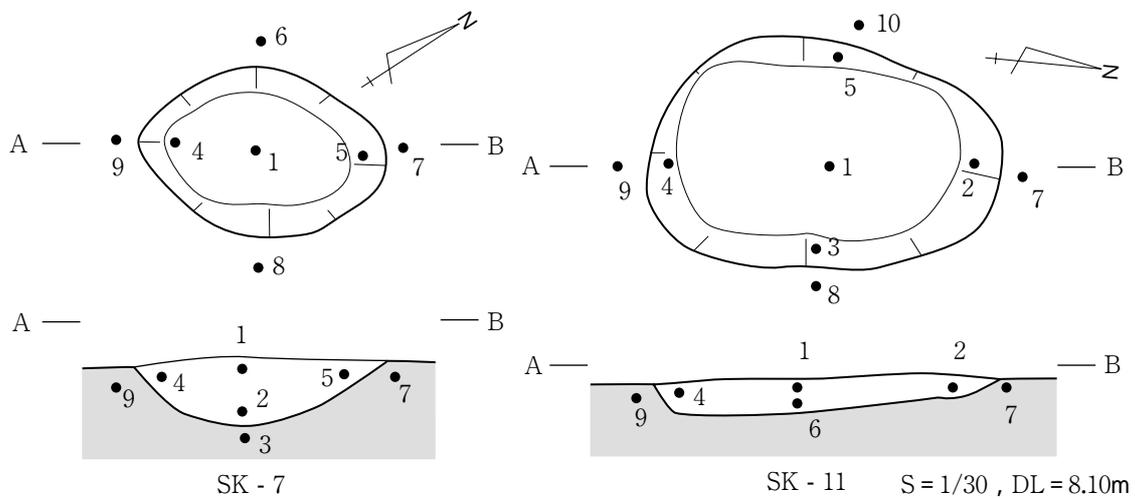


Fig.139 A区土坑内分析試料採取位置

花粉分析

試料約10 g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛：比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とし、百分率で出現率を算出して図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

植物珪酸体分析

試料約5 g について、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理(80W, 250KHz, 1分間)による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム(比重2.5)による重液分離を順に行い、物理・化学処理で植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。その後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部(葉身と葉鞘)の短細胞に由来する植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬(1986)の分類を参考にした。結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。

土壌理化学分析結果

有機炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解 - 水蒸気蒸留法、Melanic Index(MI)は腐植簡易分析法(本名・山本, 1992)、リン酸・亜鉛は共に硝酸・過塩素酸で分解し、リン酸はバナドモリブデン酸比色法、亜鉛は原子吸光光度法(土壌標準分析・測定法委員会, 1986; 渋谷ほか, 1978)でそれぞれ行った。

以下に各項目の分析操作工程を示す。

1. 光永・岡ノ下遺跡の自然科学分析報告

a. 有機炭素量 (Org-C)

微粉碎試料0.100 ~ 0.500 g を100ml三角フラスコに正確に秤りとり, 0.4 N クロム酸・硫酸混液10 ml を正確に加え, 約200 の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後, 0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2 N 硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定した。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org-C 乾土%) を求めた。

b. 全窒素 (T-N)

風乾細土試料1.00 g をケルダール分解フラスコに秤り, 分解剤約3.0 g と硫酸10ml を加え加熱分解した。分解後, 蒸留水約30ml を加え放冷した後, 分解液全量を供試し, 水蒸気蒸留法によって窒素を定量した。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素含量 (T-N 乾土%) を求めた。

c. 全リン酸 (T-P₂O₅)

風乾細土試料5.00 g をケルダールフラスコに秤りとり, はじめに硝酸 (HNO₃) 10ml を加えて加熱分解した。放冷後, 過塩素酸 (HClO₄) 20ml を加えて再び加熱分解を行った。分解終了後, 蒸留水で100ml に定容し, ろ過した。ろ液の一定量を試験管に採取し, リン酸発色液 (バナドモリブデン酸・硝酸液) を加えて分光光度計によりリン酸 (P₂O₅) 濃度を測定した。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P₂O₅mg/g) を求めた。

d. 亜鉛 (Zn)

リン酸測定用分解液について, 原子吸光光度計により亜鉛 (Zn) の濃度を測定した。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの亜鉛 (Znmg/kg) 含量を求めた。

e. Melanic Index (MI)

風乾細土試料約1.0 g を50ml 容遠心管に入れ, 分注器で0.5% NaOH 溶液約25ml を加えた。遠心管に蓋をしてテープで密封し, 室温で1時間振とうした。振とう終了後, 0.1% 高分子凝集剤溶液1~2 滴を加え, よく振り混ぜた後, 4,000rpm, 15分間の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。得られた抽出腐植溶液の約1ml を試験管にとり, 0.1% NaOH 溶液20ml を分注器で加えた (NaOH の濃度は約0.1% となる)。この溶液について, 分光光度計により450・520nm の吸光度を測定した。450nm の吸光度が1 を越える場合には, さらに0.1% NaOH 溶液で希釈して測定した (測定は抽出後, 3時間以内)。結果の表示は, MI = K450/K520 で示した。

(3) 結果

珪藻化石

結果をTab.9に示す。珪藻化石は調査を行った全試料で産出数が少なかった。わずかに産出する珪藻化石の殻の保存状態は悪い。

花粉化石

結果をTab.10に示す。調査を行った全試料で花粉化石が少なく, わずかに産出した花粉化石の保存状態は悪い。シダ類胞子が比較的多くみられるものの, これらも保存が悪く, 表面が壊れている個体がほとんどである。

Tab.9 珪藻分析結果

種 類	生態 性	環境 指標種	A区										C区		
			南壁中央 セクション			東西トレンチ セクション				北壁 中央部			南壁中央部		
			層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層
Gomphonema sumatrense Fricke	塩分 Ogh-ind	r-ph	1	2	3	4	5	6	7	8	9				
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Synedra spp.	Ogh-unk	unk	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
海水生種合計			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
海水 - 汽水生種合計			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
汽水生種合計			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
淡水生種合計			0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	
珪藻化石総数			0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	

生態性の凡例

塩分 : 塩分濃度に対する適応性 : Ogh-ind: 貧塩不定性種, Ogh-unk: 貧塩不明種

pH : 水素イオン濃度に対する適応性 : al-bi: 真加加性種, unk:pH不明種

流水 : 流水に対する適応性 : r-ph: 好流水性種, unk : 流水不明種

環境指標種の凡例

T: 好清水性種(Asai, K. & Watanabe, T. 1995)

1. 光永・岡ノ下遺跡の自然科学分析報告

Tab.10 花粉分析結果

種 類	試料番号	A区				C区				
		南壁 中央セクション	東西トレンチ 西壁セクション			北壁 中央部	南壁中央部			
			層	層	層		層	XII層	XI層	XII層
		1	2	3	4	5	6	7	8	9
木本花粉										
マツ属		-	-	4	2	-	-	-	-	-
スギ属		-	-	2	-	-	-	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属		-	-	-	1	-	-	-	-	-
シダ類孢子										
他のシダ類孢子		44	32	18	37	22	68	18	19	19
合 計										
木本花粉		0	0	6	3	0	0	0	0	0
草本花粉		0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明花粉		0	0	0	0	0	0	0	0	0
シダ類孢子		44	32	18	37	22	68	18	19	19
総計（不明を除く）		44	32	24	40	22	68	18	19	19

植物珪酸体

結果をTab.11に示す。植物珪酸体は各試料から検出されるが、その個数は少なく、保存状態の悪い試料が多い。以下に、各地点の産状を述べる。

A区南壁中央セクション，A区東西トレンチ西壁セクションでは，イネ属，タケ亜科，ウシクサ族などがわずかに認められる。

C区北壁中央部は，タケ亜科短細胞珪酸体とイネ属機動細胞珪酸体，ウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が目立つ。

C区南壁中央部では，試料番号6(層)を除いて，イネ属，タケ亜科，ウシクサ族，イチゴツナギ亜科などが認められ，とくにウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が目立つ。試料番号6では，タケ亜科などがわずかに認められるに過ぎない。

土壤理化学分析

分析結果をTab.12・13，Fig.140・141に示す。以下に各項目ごとに結果について記載する。

a. 有機炭素・全窒素 (Org-C, T-N)

土壤は，一般に無機成分と有機成分に大別され，後者の給源は動植物遺体，根，微生物などである。したがって，地表面が安定で，植生が長く維持されると表層には多くの有機物が集積することになる。有機物は，一般に堆積物あるいは土壤の表層(地表面)へ供給されるだけであるから，埋没現象のない単元土壤では有機物量は下層になるほど漸減する。このことから，下層に有機物量が多い層が認められる場合は，過去に表層であったことが指摘される。一方，遺跡で検出される遺構などの覆土は，人為的な影響も含めて異地性のものが多く，表層から下層へ有機物量が漸減する現象

Tab.11 植物珪酸体分析結果

種類	光永・ 岡ノ下遺跡	A区				C区				
		南壁中 央セクション	東西トレンチ 西壁セクション			北壁 中央部	南壁中央部			
			層	層	層		層	XII層	層	XI層
試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ族イネ属	-	2	5	-	-	-	1	3	1	
タケ亜科	2	5	6	6	16	-	8	19	1	
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	1	-	-	-	1	5	1	
ウシクサ族ススキ属	-	2	-	-	1	-	1	9	3	
イチゴツナギ亜科	-	5	10	1	4	1	12	7	-	
不明キビ型	3	10	2	-	10	1	8	43	10	
不明ヒゲシバ型	-	3	1	1	10	-	3	7	4	
不明ダンチク型	3	3	1	-	12	1	7	22	8	
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属	2	9	3	1	11	-	1	3	2	
タケ亜科	2	9	7	1	3	3	4	5	3	
ウシクサ族	4	17	4	2	12	3	15	28	8	
不明	-	7	4	2	11	3	5	14	9	
合 計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	8	30	26	8	53	3	41	115	28	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	8	42	18	6	37	9	25	50	22	
総 計	16	72	44	14	90	12	66	165	50	
そ の 他										
イネ属類珪酸体	-	4	3	-	3	-	-	-	-	

が必ずしも当てはまらない。しかし、有機物量の多い覆土の出現が特徴的な場合、そこには給源物質として動植物遺体の存在が指摘されることもある。

ところで、土壌の有機物量は分析によって直接測定することはできないので、一般には有機物の構成成分である炭素量を測定し、その測定値から有機物量を知ることができる。但し、土壌中の炭素は有機物の構成成分の他に炭酸カルシウムなど無機成分としても存在する。一般に前者を有機炭素、後者を無機炭素と呼び、その合計を全炭素と呼ぶ。したがって、厳密に炭素量から有機物量を換算する場合は、有機炭素量に係数1.724(土壌有機物中の平均炭素割合が58%である。)を乗じて求める。窒素も有機物の主要な構成成分であるので、窒素量の変化から炭素の場合と同様なことがいえる。ただし、土壌中の窒素の場合は、有機窒素量に対する無機窒素量の割合が無視できるほど少ないことから、全窒素量で測定した値が有機窒素量としてみなしてもほとんど差し支えない。また、有機炭素量を全窒素量で除した炭素率(C/N)は新鮮有機物で大きく(稲わら、落葉で60~100)、土壌

Tab.12 土壌理化学分析結果

調査区・地点名	層名	試料番号	土色	土性	炭素 (%)	全窒素 (%)	C/N	MI	P ₂ O ₅ (mg/g)	Zn (mg/kg)	
A区	南壁中央セクション	1	10YR3/4	暗褐	HC	0.37	0.05	7.4	-	2.33	81.2
	東西トレンチ	2	2.5Y4/3	オリーブ褐	HC~CL	0.63	0.07	8.7	-	2.48	141.7
	西壁セクション	3	2.5Y4/4	オリーブ褐	HC~CL	0.47	0.06	7.6	-	2.34	115.5
		4	10YR5/4	にぶい黄褐	HC	0.45	0.06	7.1	-	2.26	155.8
C区	北壁中央部	XII層	10YR4/4	褐	HC	0.47	0.06	7.3	-	2.28	93.5
	南壁中央部	層	2.5Y4/4	オリーブ褐	HC	0.38	0.05	7.3	-	1.81	84.0
		XI層	10YR4/4	褐	HC	0.47	0.06	7.3	-	2.37	91.3
	XII層	2.5Y4/4	オリーブ褐	HC	0.63	0.07	8.6	1.61	2.48	97.4	
	XIV層	2.5Y5/4	黄褐	HC~CL	0.49	0.07	7.3	-	1.97	89.5	
基本統計量											
平均値					0.48	0.06	0	0	2.26	105.5	
(+95%)					0.55	0.07	0	0	2.41	123.8	
(- 95%)					0.42	0.06	0	0	2.10	87.3	
最大値					0.63	0.07	0	0	2.48	155.8	
最小値					0.37	0.05	0	0	1.81	81.2	
分散					0.01	0.00	0	0	0.05	707.6	

註

(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会監修，1967）による。

(2) 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。

CL：埴壤土（粘土15~25%，シルト20~45%，砂3~65%）

SiC：シルト質埴土（粘土25~45%，シルト45~75%，砂0~30%）

HC：重埴土（粘土45~100%，シルト0~55%，砂0~55%）

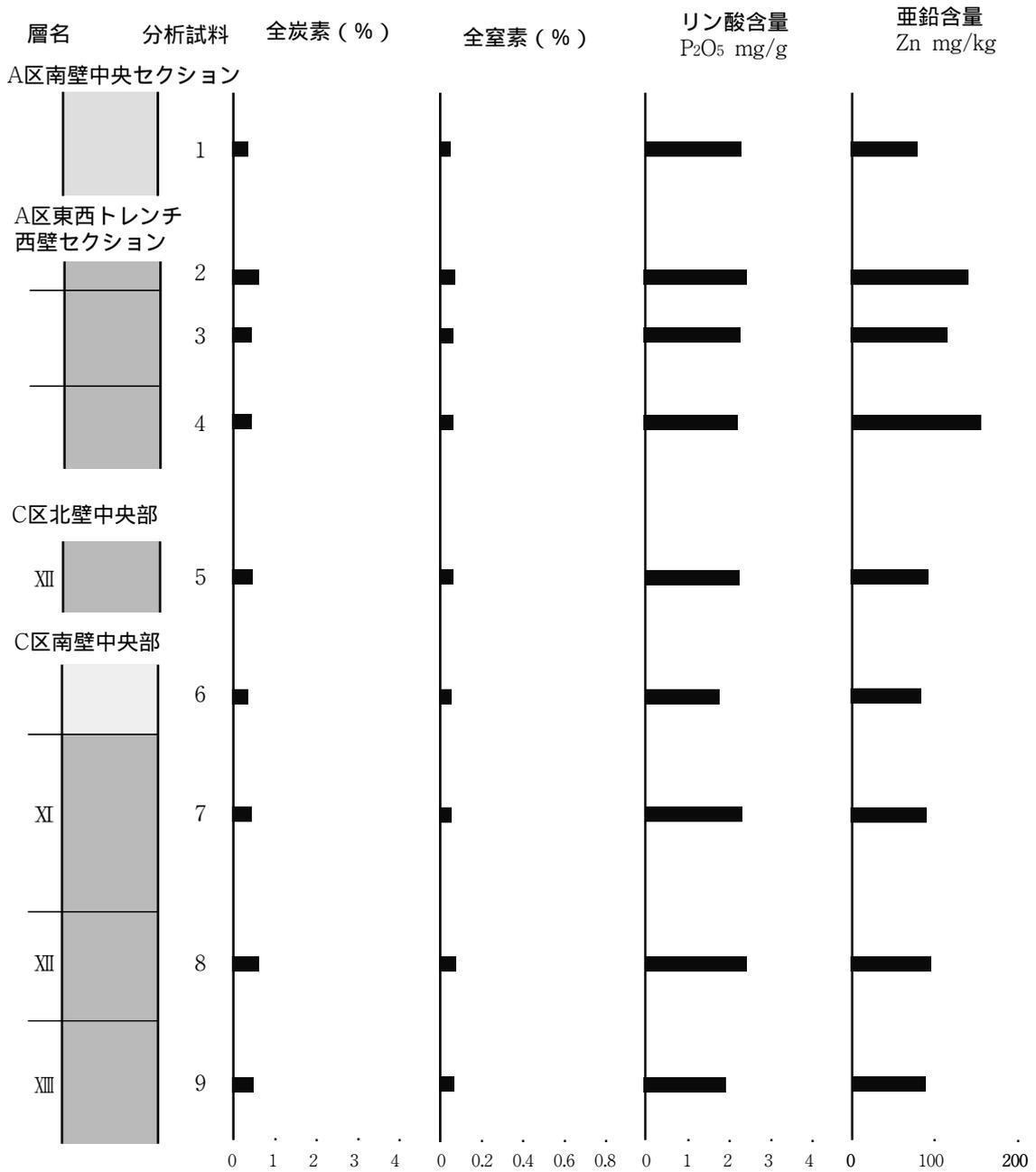


Fig.140 A・B区堆積物断面の土壤理化学性の層位変化

有機物(腐植)で小さい(10~20の範囲)。さらに分解が進行し、腐植化度が上昇すると、C/Nは上昇する。

遺跡の土層断面から採取された試料の結果では、有機炭素含量は全体的に低い。一方、C/Nは10前後の値を示し、有機物含量の少ない土壤の値と変わらない。

一方、A区の土坑から採取された試料は、炭素含量が1%前後であり、土層断面の平均的な値と大きく変わらない。

b. 全リン酸 (T-P₂O₅)

土壤中におけるリン酸の移動性はきわめて小さく、揮散性のリン酸はほとんどない。土壤中のリン

1. 光永・岡ノ下遺跡の自然科学分析報告

リン酸は植物の根によって吸収され植物に移行する。その植物は草食動物に食べられて動物の体に移り、草食動物は肉食動物に食べられる。このようにリン酸は植物から動物へと動植物の死がいや動物の排泄物が微生物によって分解され、リン酸塩となって土壌にもどってくる。自然界におけるリン酸の循環は、岩石 土壌 植物 海 岩石の経路をたどるが、その循環はきわめておそい。ま

Tab.13 A区土坑の土壌理化学分析結果

遺構名	試料 番号	土色	土性	P ₂ O ₅ (mg/g)	Zn (mg/kg)	C (%)
SK - 7	1	2.5Y5/3黄褐	HC	3.98	114	0.82
	2	10YR5/3にぶい黄褐	CL ~ HC	3.32	109	0.70
	3	2.5Y5/4黄褐	CL ~ HC	2.58	96	0.48
	4	10YR4/4褐	CL ~ HC	2.53	106	0.59
	5	2.5Y5/4黄褐	CL ~ HC	2.63	103	0.55
	6	2.5Y5/3黄褐	CL ~ HC	2.27	106	0.74
	7	10YR4/3にぶい黄褐	CL ~ HC	1.99	107	0.84
	8	2.5Y5/3黄褐	CL ~ HC	2.43	115	0.79
	9	2.5Y5/4黄褐	HC	2.42	117	0.71
SK - 11	1	2.5Y4/3オリーブ 褐	CL ~ HC	8.11	128	0.96
	2	2.5Y4/3オリーブ 褐	CL ~ HC	3.65	120	1.30
	3	2.5Y4/2暗灰黄	CL ~ HC	3.24	121	1.14
	4	2.5Y4/3オリーブ 褐	CL ~ HC	3.20	117	1.03
	5	2.5Y4/4オリーブ 褐	CL ~ HC	3.03	117	1.02
	6	2.5Y4/2暗灰黄	CL ~ HC	8.43	143	1.13
	7	2.5Y4/3オリーブ 褐	CL ~ HC	2.56	147	0.89
	8	2.5Y4/3オリーブ 褐	CL ~ HC	2.41	106	0.81
	9	2.5Y4/3オリーブ 褐	CL ~ HC	2.16	108	0.81
	10	2.5Y4/3オリーブ 褐	CL ~ HC	2.30	153	0.90
基本統計量						
平均値				3.33	118	0.85
(+ 95%)				4.20	125	0.95
(- 95%)				2.46	110	0.75
最大値				8.43	153	1.30
最小値				1.99	96	0.48
分散				3.31	238	0.04

註

- (1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修，1967)による。
- (2) 土性：土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編，1984)の野外土性の判定法による。
 CL・・・埴壤土(わずかに砂を感じるが、かなりねばる。)
 HC・・・重埴土(ほとんど砂を感じないで、よくねばる。)

た、わが国の土壌は、火山灰土壌やその影響の強い土壌が多く、リン酸吸収係数(リン酸固定力)の高い土壌では、リン酸の溶脱はほとんどない。したがって、土壌中に高含量のリン酸が認められる場合は、それが動植物、とくに人を含めた動物を給源としている可能性が高い。また、農耕地においてはその給源が人為的な施肥による可能性が指摘される。

土壌中に自然に存在するリン酸含量、すなわち天然賦存量は $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ で、最大でも $5.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ と推定される(Bowen,1983 : Bolt and Bruggenwert,1980 : 川崎ほか,1991 : 天野ほか,1991)。これらの報告例から推定される最高値は0.3%程度とみられる。

土層断面の結果では、多少の変動は認められるものの、全体的にリン酸含量が低く、特徴的な差異が認められない。

一方、A区の土坑をみると、遺構中央部(SK - 7の試料番号1,2 ; SK - 11の試料番号1,6)でリン酸の

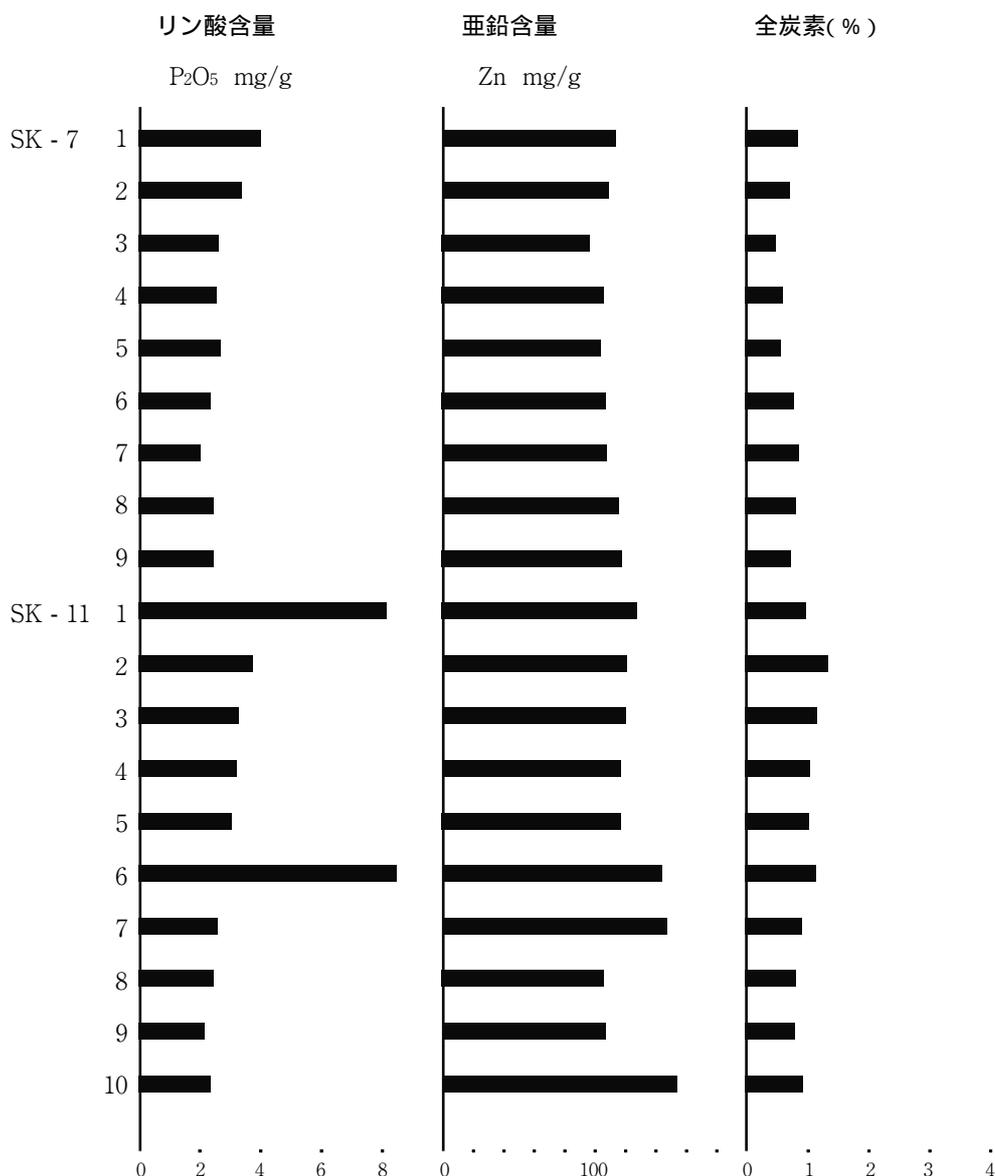


Fig.141 A区土坑の土壌理化学性の層位分布

富化が認められる。

c. Melanic Index (MI)

腐植(土壤有機物)にとって最も特徴的な波長域における2波長の比で、Pg(P型腐植酸に認められる緑色の特殊な吸収をもつ色素)によるスロープが急峻に現れる450nmと520nmの吸光度比を求める方法である。我国の代表的な火山灰土壌についてMIを測定した結果、1.70を境にそれ以下がA型腐植酸、それ以上がP型腐植酸に分類され、腐植化度の高いA型と腐植化度の低いP型が明瞭に判別される。また数多くの分析結果から、MI 1.7の場合はA型腐植酸、 $1.7 < MI < 2.0$ の場合はB型腐植酸、 $2.0 < MI$ の場合はP、Rp型腐植酸と本名・山本(1992)では推定している。

今回の結果では、有機炭素量が全体的に低いために抽出腐植酸液が得られず、C区南壁中央部試料番号8のみ測定対象とした。測定結果は1.61を示し、本名・山本(1992)の分類によればA型腐植酸に分類される。

d. 亜鉛 (Zn)

重金属類元素の土壌中における自然含有量、いわゆる天然賦存量はきわめて微量である。しかし、これら重金属類は人間の生活行為(廃棄物の投棄など)によって局所的濃集が容易に起こる。人間は食物を体内に蓄積し、その成分を排泄物として土壌に還元するが、この行為によって自然界に微量であった成分(重金属類元素)は土壌中に蓄積し、濃集する。重金属類元素の中で、亜鉛は現在の下水汚泥や家畜糞などに多量に含まれており、汚染指標元素となっており、リン酸とともに人の生活行為の痕跡指標となる可能性が高い。

亜鉛の土壌中における天然賦存量は、中央値90mg/kg(Bowen, 1983)との報告がある。遺跡の土層断面の結果をみると、A区東西トレンチ試料番号2と西壁セクションの試料番号4で140~160mg/kgと比較的高い値を示すほかは81~123mg/kgの範囲にあるものが多い。

一方、A区の土坑をみると、SK-11の試料番号6・7・10でやや高い傾向が認められるものの、基本的には自然堆積層の傾向とほぼ同じである。

(4) 古環境変遷

分析の結果、珪酸質である珪藻化石・植物珪酸体は保存が悪かった。近藤(1988)は植物珪酸体の生産量と土壌中の残存量に着目し、土壌中での植物珪酸体量が生産量に比べて大幅に少ないことから、植物に再び吸収されたり粘土の形成に関与したりして、比較的早い段階で消失する可能性を指摘している。また、これらの風化は植物種によって速度に差があるが、これは、表面積や元素の組成等によって差が出るためと指摘している。今回の植物珪酸体組成をみると、タケ亜科が全体的に多い。タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科植物と比較して風化に強く、また生産量が多い点がこれまでの研究から指摘されている(近藤, 1982; 杉山・藤原, 1986)。このことから土壌中での風化が進行していたことが窺われる。一方で、遺跡の立地が河口付近の沖積地であることから、堆積速度が速く、これらが土壌中に取り込まれなかった可能性もある。以上のことから、珪藻化石、植物珪酸体ともに今回少なかった原因としては、堆積速度の関係で土壌中の珪藻化石や植物珪酸体の量が本来少なかったものが、その後の風化によりその数がさらに減少してしまったためと思われる。

一方花粉化石についても保存状態が悪い。花粉や孢子化石は好気的環境に弱く、分解消失するケースが多い。また、花粉化石にはシダ類孢子に比べて風化に弱いことも知られている(徳永・山内,1971)。これらのことから、12~13世紀頃になると氾濫の影響が少なくなって地表面が乾燥化し、生活領域として利用されたと推定される。一方土壌理化学分析の結果をみると、リン酸含量、腐植含量が高い試料はなく、亜鉛含量は光永・岡ノ下遺跡A区東西トレンチ西壁の 層・ 層で比較的高い値となっている。亜鉛やリン酸は人間活動の指標の一つであるものの、リン酸、亜鉛が全て高く、かつ腐植が高いというような全ての条件が揃う層準は今回存在しない。それぞれの元素の値が異なるのは土性や母材の違いによる可能性もあることから、全ての条件が一致しないと当時の地表面であった可能性を指摘することは難しい。したがって、土壌理化学分析から当時の地表面を推定することは差し控えた。

高知県周辺地域では、平野部を中心にいくつかの花粉分析が行われており、その成果がまとめられている(中村・山中,1982)。その成果によれば、今から約6,000年前以降、シイ・カシ類等からなる暖帯林(照葉樹林)が覆うようになる。約4,000年前から1,500年前になると、モミ・ツガ・スギなどの温帯針葉樹林が分布を拡大するが、小刻みに増減を繰り返し、不安定な状況にあった。約1,500年前以降になると、マツ属が増加し、やがて急増するようになる。これは人間の植生干渉による植林や二次林の増加によるものと考えられている。今回花粉化石の保存が悪かったが、花粉化石は広域的な植生を反映していることから考えると、遺跡周辺も山地を中心としてほぼこのような植生変遷をたどってきたことが窺われる。一方高知平野を中心とした栽培植物の消長に関しては、イネ属は約3,000年前から始まり(中村編,1978:山中ほか,1992)、弥生時代前期以降に本格化した(山中ほか,1992)と考えられている。遺物・遺構が多く検出される12~13世紀でも遺跡周辺では稲作が行われていたと推定される。とくに光永・岡ノ下遺跡A区の南壁中央部の 層・ 層では水田の可能性が指摘されている。しかし、植物珪酸体結果をみると、これらの層位は、他の地点や層準と比較しても有意差が認められない。自然科学分析による水田耕土の可能性について検証するためには、堆積物の岩質・混入物・酸化鉄やマンガンの沈着状態などを含めた土層断面観察を充分に行うとともに、引き続き分析調査事例を蓄積しながら過去のデータと比較し、再検討する必要がある。

(5) 土坑の遺体埋納について

リン酸、炭素、亜鉛については光永・岡ノ下遺跡A区自然堆積層(基本土層)で分析を行っている。この分析結果と土坑覆土の分析結果を比較すると、炭素・亜鉛はほぼ平均値や最大・最小値が近似するのに対し、リン酸では土坑の方が最大値と平均値が高い傾向にある。これはリン酸が土壌から溶脱しにくいために残存し、他の土壌との間に有意差が生じたためと考えられる。そこで、遺体埋納の有無を調べる際には、リン酸値を中心とした解析を行う。

土坑外の試料のリン酸値は $2.5P_2O_5mg/g$ 前後で、基本土層の平均値とほぼ一致する。このことから、本遺跡周辺の土壌における天然賦存量はほぼこの程度とみることができる。また、平均値の信頼度や基本土層の最大値を考慮すれば、 $2.5P_2O_5mg/g$ であればその可能性が、 $3.5P_2O_5mg/g$ 以上であればほぼ確実にリン酸の富化が推定される。これに相当するものとしては、SK - 7の試料番号1

1. 光永・岡ノ下遺跡の自然科学分析報告

とSK - 15の試料番号1・6であり、リン酸の富化が考えられる。

土坑内でのリン酸値の分布を考えると、仮に遺体が埋納されていた場合、遺体の中心部ほどリン酸値が高く、周囲になるほど低くなることが予想される。このような傾向は、分散の値の高さでとらえることが可能である。自然堆積層のリン酸値と比較しても、両土坑内の分散は高いことから、遺体が埋納されていたと考えられる。また、土坑内ではリン酸の富化に偏りがみられることが判る。特に両土坑とも中央部で高い傾向を示すことから、遺体は土坑中心部に埋納された可能性がある。

<引用文献>

- Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*,10,35-47.
- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信(1991)中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量 .農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発 ,p.28-36 .
- 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用 .東北地理 ,42 ,p.73-88 .
- Bowen,H.J.M.(1983)環境無機化学 - 元素の循環と生化学 - .浅見輝男・茅野充男訳 ,369p., : p.297,博友社 [Bowen,H.J.M.(1979)Environmental Chemistry of Elements].土壌標準分析・測定法委員会編(1986)土壌標準分析・測定法 .354p. ,博友社 .
- 本名俊正・山本定博(1992)腐植の簡易分析法 .日本土壌肥料学会編 土壌構成成分解析法 ,126p.博友社 : p.7-35 .
- 伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 .珪藻学会誌 ,6 ,p.23-45 .
- 川崎 弘・吉田 濤・井上恒久(1991)九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量 .農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発 ,149p. : p.23-27 .
- 近藤鍊三(1982)Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究 .昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書 ,32p .
- 近藤鍊三(1988)植物珪酸体(Opal Phytolith)からみた土壌と年代 .ペドロジスト ,32 ,p.77-91 .
- 近藤鍊三・佐瀬 隆(1986)植物珪酸体分析 ,その特性と応用 .第四紀研究 ,25 ,p.31-64 .
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.(1986)Bacillariophyceae,Teil 1,Naviculaceae. Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,876p., Gustav Fischer Verlag. Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.(1988) Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae, Bacillariaceae,Suirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.(1991a)Bacillariophyceae,Teil 3,Centrales, Fragilariaceae,Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.(1991b)Bacillariophyceae,Teil 4,Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K.(1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26.p.1-353.BERLIN・STUTTGART.
- 中根秀二(1992)1号方形周溝墓の自然科学的分析 .「田園調布南 2」,p.133-149 ,都立学校遺跡調査会

- 中村 純・山中三男(1982)花粉分析学的研究よりみた四国地方の洪積世後期以降の植生変遷。「日本植生誌 四国」,宮脇 昭編著,p.76-83,至文堂.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修(1967)新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会(1984)野外土性の判定.ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」,156p.:p.39-40,博友社.
- 渋谷政夫・小山雄生・渡辺久男(1978)重金属測定法 - 土壌汚染元素と定量法の解説 -.331p.,博友社.
- 杉山真二・藤原宏志(1986)機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として -.考古学と自然科学,19,p.69-84.
- 東京都北区教育委員会(1995)北区埋蔵文化財調査報告16集 豊島馬場遺跡(本文編),383p.
- 徳永重元・山内輝子(1971)花粉・孢子.「化石の研究法」,化石研究会編,p.50-73,共立出版.
- 山中三男・伊藤由美子・石川真吾(1992)高知平野の岡豊低湿地完新世堆積物の花粉分析.日本生態学会誌,42,p.21-30.はじめに

2. 天神遺跡 区, 林口遺跡 I - A区の自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

天神遺跡と林口遺跡は仁淀川と波介川の合流部にあたる沖積段丘上に立地し,現在は主に水田として利用されている地域である。今回は,これらの遺跡を対象として自然科学分析調査を実施し,古環境変遷に関する情報を得ることとする。

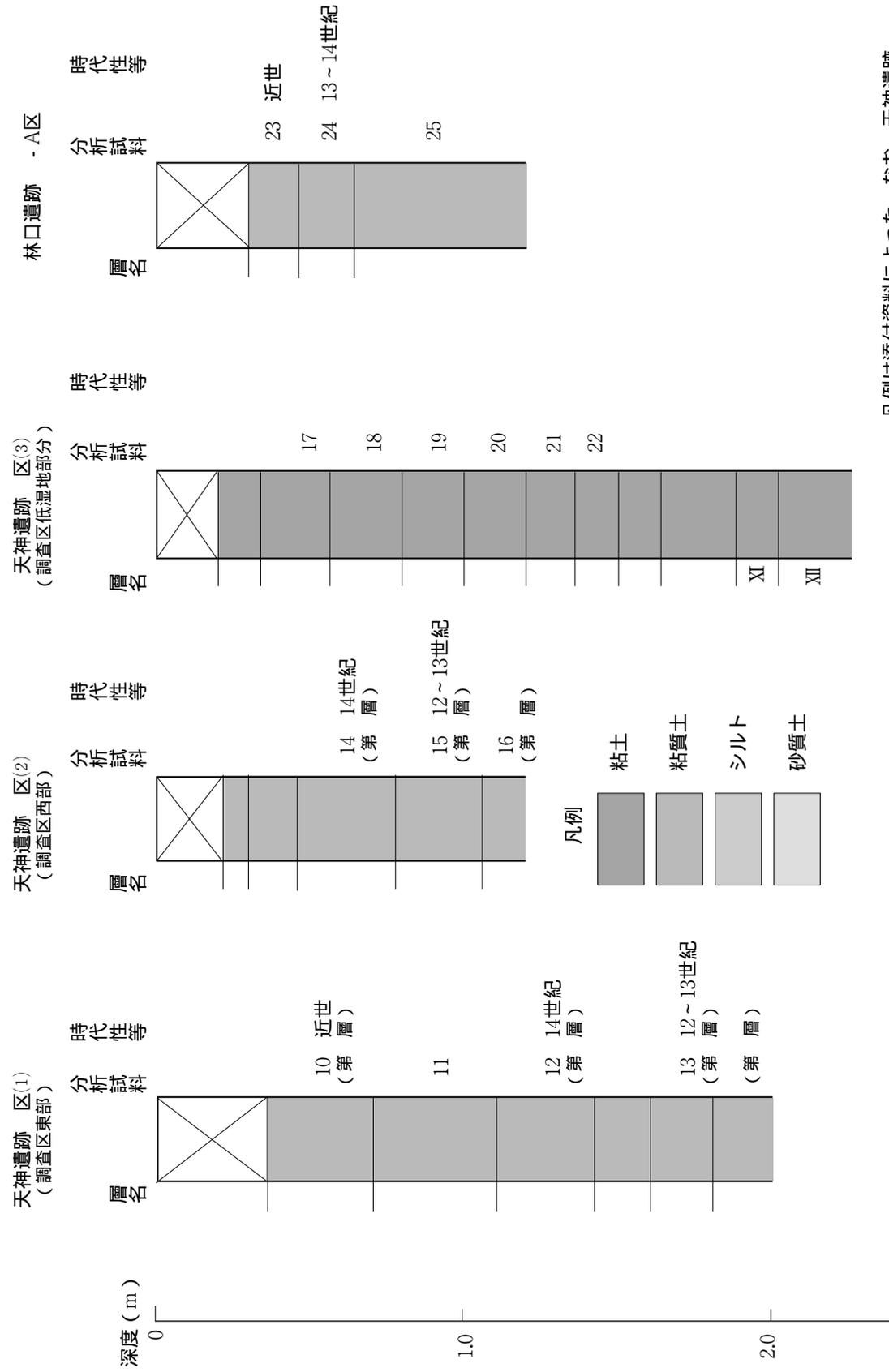
古環境変遷については,堆積環境ならびに古植生変遷に着目する。堆積環境は,とくに遺物包含層付近での旧地表面の推定を目的とした調査を実施する。その方法としては,珪藻化石群集中に含まれる陸生珪藻の割合によって推定する方法がある(伊藤・堀内,1991)。さらに,土壌腐植の形態や分解度,リン酸含量などもその指標となりうる場合がある。そこで,珪藻分析ならびに土壌理化学分析を行う。また,古植生変遷に関しては,花粉分析や植物珪酸体分析が主に応用される例が多く,遺跡周辺の植生や栽培植物に関する成果が多数得られている。本分析調査でも花粉分析と植物珪酸体分析を実施し,古植生変遷について調査を行う。

遺跡の発掘調査時に,中世の遺構内から動物類の歯片が数片検出されたため,種類や歯の部位を明らかにする目的で骨同定を行う。また,同時期の炭化種子も1点検出されたので,これについて種類を明らかにする。なお,動物遺体同定については,金子浩昌先生(早稲田大学)に依頼した経緯から,本報告では署名原稿として掲げる。

(1) 試料

土壌試料は,各遺跡の土層断面から採取された。試料は合計8箇所の地点から遺物包含層を中心に採取され,これらを分析に用いた。各地点の柱状図ならびに試料採取層位に関しては,Fig.142に示す。また,図には示されていないが,林口遺跡第 I 調査地区 - C区(以下「I - C区」といい,他の調査区も同様に記す。)から採取された5点についても珪藻分析・花粉分析を実施する。

2. 天神遺跡 区, 林口遺跡 I - A区の自然科学分析報告



凡例は添付資料によった。なお、天神遺跡区については時代性等に()書きした土層番号が報告書の土層番号に対応している。

Fig.142 遺跡断面の分析資料採取層

一方、種実同定用試料は天神遺跡の中世の掘立柱建物跡(SB - 5)から検出された炭化種子1点(試料名: SB - 5)である。

(2) 方法

珪藻分析

試料を湿重で約5 g 秤量し、過酸化水素水、塩酸の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適量計り取りカバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(珪藻化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot(1986・1988・1991a・1991b)、K.Krammer(1992)などを用いる。同定結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。堆積環境の解析については、安藤(1990)、伊藤・堀内(1991)の環境指標種などを参考とする。

花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・孢子数から不明花粉を除いたものを基数とし、百分率で出現率を算出して図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

植物珪酸体分析

試料約5 g について、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理(80W, 250KHz, 1分間)による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム(比重2.5)による重液分離を順に行い、物理・化学処理で植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。その後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部(葉身と葉鞘)の短細胞に由来する植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬(1986)の分類を参考にした。結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。

種実同定

双眼実体顕微鏡で観察し、その形態的特徴から種類を同定する。

土壌理化学分析

有機炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解 - 水蒸気蒸留法、Melanic Index(MI)は腐植簡易分析法(本名・山本, 1992)、リン酸・亜鉛は共に硝酸・過塩素酸で分解し、リン酸はバナドモリブデン

2. 天神遺跡 区, 林口遺跡 I - A区の自然科学分析報告

酸比色法, 亜鉛は原子吸光光度法(土壤標準分析・測定法委員会, 1986 ; 渋谷ほか, 1978)でそれぞれ行った。

以下に各項目の分析操作工程を示す。

a. 有機炭素量 (Org-C)

微粉碎試料0.100 ~ 0.500 g を100ml 三角フラスコに正確に秤りとり, 0.4Nクロム酸・硫酸混液10 ml を正確に加え, 約200 の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後, 0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定した。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求めた。

b. 全窒素 (T-N)

風乾細土試料1.00 g をケルダール分解フラスコに秤り, 分解剤約3.0gと硫酸10ml を加え加熱分解した。分解後, 蒸留水約30ml を加え放冷した後, 分解液全量を供試し, 水蒸気蒸留法によって窒素を定量した。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素含量(T-N乾土%)を求めた。

c. 全リン酸 (T-P₂O₅)

風乾細土試料5.00 g をケルダールフラスコに秤りとり, はじめに硝酸(HNO₃)10ml を加えて加熱分解した。放冷後, 過塩素酸(HClO₄)20ml を加えて再び加熱分解を行った。分解終了後, 蒸留水で100ml に定容し, ろ過した。ろ液の一定量を試験管に採取し, リン酸発色液(パナドモリブデン酸・硝酸液)を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定した。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)を求めた。

d. 亜鉛 (Zn)

リン酸測定用分解液について, 原子吸光光度計により亜鉛(Zn)の濃度を測定した。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの亜鉛(Znmg/kg)含量を求めた。

e. Melanic Index (MI)

風乾細土試料約1.0 g を50ml 容遠心管に入れ, 分注器で0.5% NaOH溶液約25ml を加えた。遠心管に蓋をしてテープで密封し, 室温で1時間振とうした。振とう終了後, 0.1%高分子凝集剤溶液1~2滴を加え, よく振り混ぜた後, 4,000rpm, 15分間の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。得られた抽出腐植溶液の約1ml を試験管にとり, 0.1% NaOH溶液20ml を分注器で加えた(NaOHの濃度は約0.1%となる)。この溶液について, 分光光度計により450, 520nmの吸光度を測定した。450nmの吸光度が1を越える場合には, さらに0.1% NaOH溶液で希釈して測定した(測定は抽出後, 3時間以内)。結果の表示は, MI = K450/K520で示した。

(3) 結果

珪藻化石

結果をTab.14 ~ 16に示す。珪藻化石が100個体以上産出したのは, 林口遺跡 - A区の試料番号23(層)の1試料のみである。その他の試料は, ほとんど検出されないかあるいは無化石である。唯一検出された試料番号23の産出種の特徴は, 陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持し

Tab.14 珪藻分析結果1

種 類	生 態 性			環 境 指 標 種	天 神 遺 跡										林 口 遺 跡		
	塩分	pH	流水		區										I - A區		
					(1)	(2)	(3)										
	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind													5	-
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind													2	-
<i>Amphora</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk				1										
<i>Bacillaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk								1						
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph													1	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph													3	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind													3	-
<i>Caloneis silicula</i> var. <i>minuta</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind													1	-
<i>Caloneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk													1	-
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind													4	-
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk						1	2							
<i>Cymbella cuspidata</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind					1									
<i>Cymbella japonica</i> Reichelt	Ogh-unk	unk	unk													1	-
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind													4	-
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk				1	3	1	3		1				1	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk														
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind													1	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind						1								
<i>Gyrosigma scalproides</i> (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph													3	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind						1	1		1				10	-

Tab.16 珪藻分析結果3

種 類	天神遺跡										林口遺跡								
	生態性			環境 指標種	区										I - A区				
	塩分	pH	流水		(1)	(2)	(3)			20	21	22	23	24	25				
10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25				
Stauroneis laenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-			
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-			
Stauroneis phoenicenteron var. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-			
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	2	3	3	1	-	1	-	-			
Suriella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-			
Suriella ovata var. pinnata (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-			
Synedra ulna (Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-			
Synedra spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-			
海水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
海水 - 汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
淡水生種合計					0	0	0	4	1	0	5	15	13	12	2	6			
珪藻化石総数					0	0	0	4	1	0	5	15	13	12	2	6			

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性
 Ogh-hil:貧塩好塩性種
 Ogh-ind:貧塩不定性種
 Ogh-hob:貧塩嫌塩性種
 Ogh-unk:貧塩不明種
 pH:水素イオン濃度に対する適応性
 al-bi:真アルカリ性種
 al-il:好アルカリ性種
 ind:pH不定性種
 ac-il:好酸性種
 unk:pH不明種
 C.R.:流水に対する適応性
 l-ph:好止水性種
 ind.:流水不定性種
 r-ph:好流水性種
 r-bi:真流水性種
 unk.:流水不明種

環境指標種

O:沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)
 S:好汚濁性種
 RI:陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群、伊藤・堀内, 1991)
 T:好清水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995)

2. 天神遺跡 区, 林口遺跡 I - A区の自然科学分析報告

た好気的環境に耐性のある陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Pinnularia appendiculata* が約10%産出し, 同じく陸生珪藻の *Navicula mutica*, *Amphora montana*, *Pinnularia schroederii*, 流水不定性の *Craticula cuspidata*, *Cymbella silesiaca*, 好流水性の *Navicula elginensis* var. *neglecta* などが検出される。一方林口遺跡 - C区では, 珪藻化石の保存が悪く, *Cymbella*属, *Navicula*属, *Pinnularia*属がそれぞれ1個体産出する程度である。

花粉化石

結果をTab.17~19に示す。花粉化石が検出されたのは, 天神遺跡 区(3)のみである。他の地点では花粉化石がわずかしか検出されず, 保存も悪い。シダ類胞子は比較的多くみられるものの, これらも保存が悪く, 表面が風化している個体がほとんどである。天神遺跡 区(3)は, 最下層の試料番号22(層)以外で化石が検出される。木本花粉では, アカガシ亜属が多く, シイノキ属, ツガ属, コウヤマキ属, イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科を伴う。とくにシイノキ属は増加傾向を示し, 層ではアカガシ亜属とほぼ同率で出現する。草本花粉・シダ類胞子はイネ科が多く, カヤツリグサ科, ヨモギ属が検出される。また, 栽培植物のソバ属や水生植物の花粉化石も少量ながら検出される。

植物珪酸体

植物珪酸体の種類と検出個数をTab.20に示す。植物珪酸体は各試料から検出されるが, その個数は少なく, 保存状態の悪い試料が多い。以下に, 各地点の産状を述べる。

・天神遺跡 区

区(1)は, 各試料でイネ属, タケ亜科, ウシクサ族, イチゴツナギ亜科などが認められる。このうち, 試料番号13・12・11ではタケ亜科の産出が目立つが, 試料番号10ではイネ属の産出が目立つ。

区(2)でも各試料でイネ属, タケ亜科, ウシクサ族, イチゴツナギ亜科などが認められる。しかし, 区(1)のような傾向は認められない。区(3)では各試料で他の地点と同様な種類が認められる。しかし, 上位の試料でタケ亜科の検出個数が減少する傾向が見られる。

・林口遺跡 - A区

試料番号25(層)では, タケ亜科などがわずかに認められるに過ぎない。試料番号24(層)では, イネ属も認められる。試料番号23(層)では, イネ属の産出が目立ち, 穎珪酸体や短細胞列などの組織片も認められる。

種実同定

試料は, 炭化したモモ (*Prunus persica* Batsch) の核(内果皮)の破片であった。黒色で大きさは2cm程度。一方の側面にのみ縫合線が見られ, 表面は不規則な線状のくぼみがあり, 全体としてあらいしわ状に見える。モモは縄文時代の遺物包含層から検出された例があり, 古くから食用として利用されたことが知られている。今回検出された種子は炭化していることから, 火熱を受けたと考えられる。当時食用とされ, 種実が廃棄されたものと思われるが, 1点のみであるために断定は難しい。

土壌理化学分析

結果をTab.21, Fig.144に示す。以下に各分析の結果を示す。

a. 有機炭素・全窒素 (Org-C, T-N)

Tab.18 花粉分析結果2

種類	天神遺跡													林口遺跡								
	I 区													I - A区								
	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	層	XI層	XII層	XIII層	SK-1	
木本花粉						(2)				(3)												
シナノキ属	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サルスベリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ツツジ科	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
スイカズラ属	-	-	1	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉																						
ガマ属	-	-	-	-	-	-	4	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミクリ属	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サジモモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
オモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科	3	-	1	-	-	3	128	137	437	129	109	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	2	54	46	130	27	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イボクサ属	-	-	-	-	-	-	-	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	1	1	5	1	18	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ギシギシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サナエタデ節 - ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	3	12	9	29	11	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
ソバ属	-	-	-	-	-	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカサ科	1	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ナデシコ科	1	-	-	-	-	-	3	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アブラナ科	-	-	-	-	-	2	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ユキノシタ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アウロンウ属	-	-	-	1	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トウダイグサ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キカシグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

Tab.19 花粉分析結果3

種 類	天神遺跡																			林口遺跡									
	I 区																			- A区					- C区				
	(1)	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	層	XI層	XII層	XIII層	XIV層	XV層	SK-1						
草本花粉	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25													
セリ科	-	-	-	-	-	-	1	8	8	8	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
アサザ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	30	41	84	62	60	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
オナモミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	7	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
キク亜科	-	-	-	-	-	-	1	2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
タンポポ亜科	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
不明花粉	1	-	-	-	-	-	1	6	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
シダ類孢子	12	2	-	8	-	4	68	10	96	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
ミズワラビ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
サンショウウモ	503	375	160	66	55	14	159	632	397	554	157	216	23	47	17	22	10	16	22	6	11	-							
他のシダ類孢子	12	1	3	3	0	0	5	211	211	207	151	116	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0							
合 計	5	0	2	1	0	0	10	238	254	714	253	226	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0							
木本花粉	1	0	0	0	0	0	0	1	6	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0							
草本花粉	515	377	160	74	55	14	163	700	407	650	158	217	23	49	17	22	10	16	22	6	11	-							
不明花粉	532	378	165	78	55	14	178	1149	872	1571	562	559	25	49	17	22	12	16	22	6	11	-							
シダ類孢子																													
総計（不明を除く）																													

2. 天神遺跡 区, 林口遺跡 I - A区の自然科学分析報告

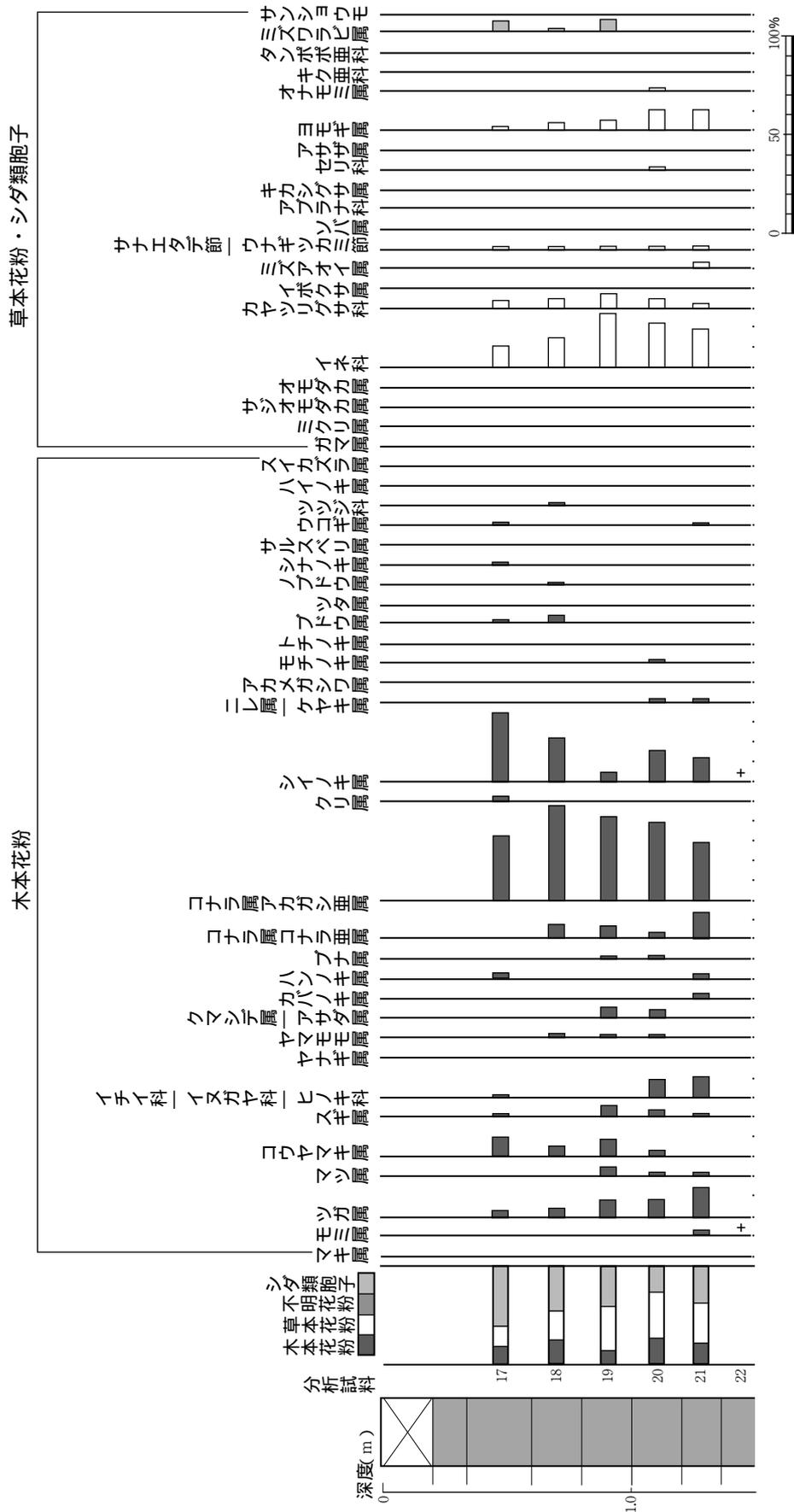


Fig.143 天神遺跡 区(3)の主要花粉化石層位分布図

出現率は、木本花粉が木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子が総数から不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、+ は1%未満、+ は木本花粉100個未満の種類を示す。

Tab.20 植物珪酸体分析結果

種 類	天神遺跡															林口遺跡			
	区															-A区			
	(1)	(2)	(3)	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
試料番号																			
イネ科葉部短細胞珪酸体																			
イネ族イネ属	31	3	2	1	7	2	3	5	3	1	1	1	1	1	1	1	1	90	3
タケ亜科	12	9	9	24	33	7	18	7	31	35	54	57	25	43	25	9			
ヨシ属	-	-	-	2	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族コブナグサ属	2	1	-	2	4	-	3	-	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	-
ウシクサ族ススキ属	4	2	-	2	2	-	2	1	2	3	4	2	-	10	3	-			
イチゴツナギ亜科	7	1	3	5	6	-	-	2	1	1	4	2	-	10	1	1			
不明キビ型	8	4	2	17	22	3	8	7	18	10	11	8	3	27	4	2			
不明ヒゲシハ型	7	5	7	17	10	1	4	7	3	7	3	5	1	22	1	1			
不明ダンチク型	6	7	4	12	10	1	7	2	4	4	1	3	3	19	3	1			
イネ科葉身機動細胞珪酸体																			
イネ族イネ属	5	2	8	2	6	2	8	2	8	3	2	-	1	64	5	-			
タケ亜科	1	7	5	6	16	6	11	8	10	25	53	57	2	26	23	12			
ヨシ属	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族	-	3	-	3	21	2	5	8	2	1	1	4	-	17	3	1			
不明	3	2	1	2	8	1	4	11	3	5	1	1	-	39	5	1			
合 計																			
イネ科葉部短細胞珪酸体	77	32	27	82	94	14	46	32	63	65	79	79	33	222	40	14			
イネ科葉身機動細胞珪酸体	9	14	14	13	53	11	28	29	23	34	57	62	3	146	36	14			
総 計	86	46	41	95	147	25	74	61	86	99	136	141	36	368	76	28			
そ の 他																			
イネ属穎珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17	-	-			
イネ属短細胞列	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	13	3	-			

2. 天神遺跡 区, 林口遺跡 I - A区の自然科学分析報告

土壌は、一般に無機成分と有機成分に大別され、後者の給源は動植物遺体、根、微生物などである。したがって、地表面が安定で、植生が長く維持されると表層には多くの有機物が集積することになる。有機物は、一般に堆積物あるいは土壌の表層(地表面)へ供給されるだけであるから、埋没現象のない単元土壌では有機物量は下層になるほど漸減する。このことから、下層に有機物量が多い層が認められる場合は、過去に表層であったことが指摘される。一方、遺跡で検出される遺構などの覆土は、人為的な影響も含めて異地性のものが多く、表層から下層へ有機物量が漸減する現象が必ずしも当てはまらない。しかし、有機物量の多い覆土の出現が特徴的な場合、そこには給源物質として動植物遺体の存在が指摘されることもある。

ところで、土壌の有機物量は分析によって直接測定することはできないので、一般には有機物の構成成分である炭素量を測定し、その測定値から有機物量を知ることができる。但し、土壌中の炭素は有機物の構成成分の他に炭酸カルシウムなど無機成分としても存在する。一般に前者を有機炭素、後者を無機炭素と呼び、その合計を全炭素と呼ぶ。したがって、厳密に炭素量から有機物量を換算する場合は、有機炭素量に係数1.724(土壌有機物中の平均炭素割合が58%である。)を乗じて求める。窒素も有機物の主要な構成成分であるので、窒素量の変化から炭素の場合と同様なことがいえる。但し、土壌中の窒素の場合は、有機窒素量に対する無機窒素量の割合が無視できるほど少ないことから、全窒素量で測定した値が有機窒素量としてみなしてもほとんど差し支えない。また、有機炭素量を全窒素量で除した炭素率(C/N)は新鮮有機物で大きく(稲わら、落葉で60~100)、土壌有機物(腐植)で小さい(10~20の範囲)。さらに分解が進行し、腐植化度が上昇すると、C/Nは上昇する(Tab.21, Fig.144)。

遺跡の土層断面から採取された試料の結果では、有機炭素含量は全体的に低く、天神遺跡 区(3)の 層・ 層を除いて有意な差が認められない。一方、C/Nは天神遺跡 区(3)の 層・ 層で比較的高い値を示すほか、10前後の値を示し、有機物含量の少ない土壌の値と変わらない。

b. 全リン酸 (T-P₂O₅)

土壌中におけるリン酸の移動性はきわめて小さく、揮散性のリン酸はほとんどない。土壌中のリン酸は植物の根によって吸収され植物に移行する。その植物は草食動物に食べられて動物の体に移り、草食動物は肉食動物に食べられる。このようにリン酸は植物から動物へと動植物の死がいや動物の排泄物が微生物によって分解され、リン酸塩となって土壌にもどってくる。自然界におけるリン酸の循環は、岩石 土壌 植物 海 岩石の経路をたどるが、その循環はきわめておそい。また、わが国の土壌は、火山灰土壌やその影響の強い土壌が多く、リン酸吸収係数(リン酸固定力)の高い土壌では、リン酸の溶脱はほとんどない。したがって、土壌中に高含量のリン酸が認められる場合は、それが動植物、とくに人を含めた動物を給源としている可能性が高い。また、農耕地においてはその給源が人為的な施肥による可能性が指摘される。

土壌中に自然に存在するリン酸含量、すなわち天然賦存量は3.0P₂O₅mg/gで、最大でも5.0P₂O₅mg/gと推定される(Bowen, 1983; Bolt and Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)。これらの報告例から推定される最高値は0.3%程度とみられる。

土層断面の結果では、リン酸含量は天神遺跡 区(3)の 層・ 層および林口遺跡 - A区の 層

Tab.21 遺跡の土壌理化学分析結果

遺跡・遺構名	試料 番号	土性	土色	炭素 (%)	全窒素 (%)	C/N	MI	P ₂ O ₅ (mg/g)	Zn (mg/kg)
天神遺跡 区(1)	10	HC	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	0.56	0.08	7.3	-	1.96	91.7
	11	HC	2.5Y4/2 暗灰黄	0.58	0.07	8.0	-	1.96	104.8
	12	HC	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	0.69	0.08	8.8	-	2.00	101.8
	13	HC	2.5Y4/2 暗灰黄	0.83	0.08	10.2	-	2.27	132.8
天神遺跡 区(2)	14	HC	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	0.77	0.08	9.6	-	1.97	92.6
	15	HC	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	0.77	0.07	11.2	1.67	1.58	92.4
天神遺跡 区(3)	16	HC	2.5Y4/2 暗灰黄	0.84	0.08	10.4	-	2.10	113.0
	17	HC	2.5Y3/2 黒褐	0.86	0.08	10.4	-	1.56	93.3
	18	HC	10YR3/2 黒褐	0.91	0.08	11.4	1.73	2.98	93.6
	19	HC~CL	10YR2/3 黒褐	1.06	0.08	12.5	1.65	3.44	123.0
	20	HC~CL	10YR2/2 黒褐	1.57	0.09	18.2	1.62	3.30	90.0
	21	HC	10YR3/1 黒褐	1.80	0.09	19.8	1.60	2.29	142.4
林口遺跡 - A区	22	HC	10YR2/2 黒褐	1.07	0.07	14.8	1.59	2.42	205.6
	23	CL~SiCL	2.5Y4/2 暗灰黄	0.64	0.07	9.6	-	3.74	93.4
	24	HC	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	0.91	0.07	12.5	-	2.08	83.5
	25	HC	2.5Y4/3 オリーブ褐	0.47	0.05	9.5	-	1.63	72.0
	基本統計量								
平均値									
(+95%)									
(-95%)									
最大値									
最小値									
分散									
註 (1)土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会講習修，1967）による。 (2)土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。 CL…埴壤土（粘土15～25%、シルト20～45%、砂3～65%） SiC…シルト質埴土（粘土25～45%、シルト45～75%、砂0～30%） HC…重埴土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）									

2. 天神遺跡 区, 林口遺跡 I - A区の自然科学分析報告

で $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を上回り, リン酸の富化が認められる。他の試料については多少の変動は認められるものの, 全体的にリン酸含量が低く, 特徴的な差異が認められない。

c. Melanic Index (MI)

腐植(土壤有機物)にとって最も特徴的な波長域における2波長の比で, Pg (P型腐植酸に認められ

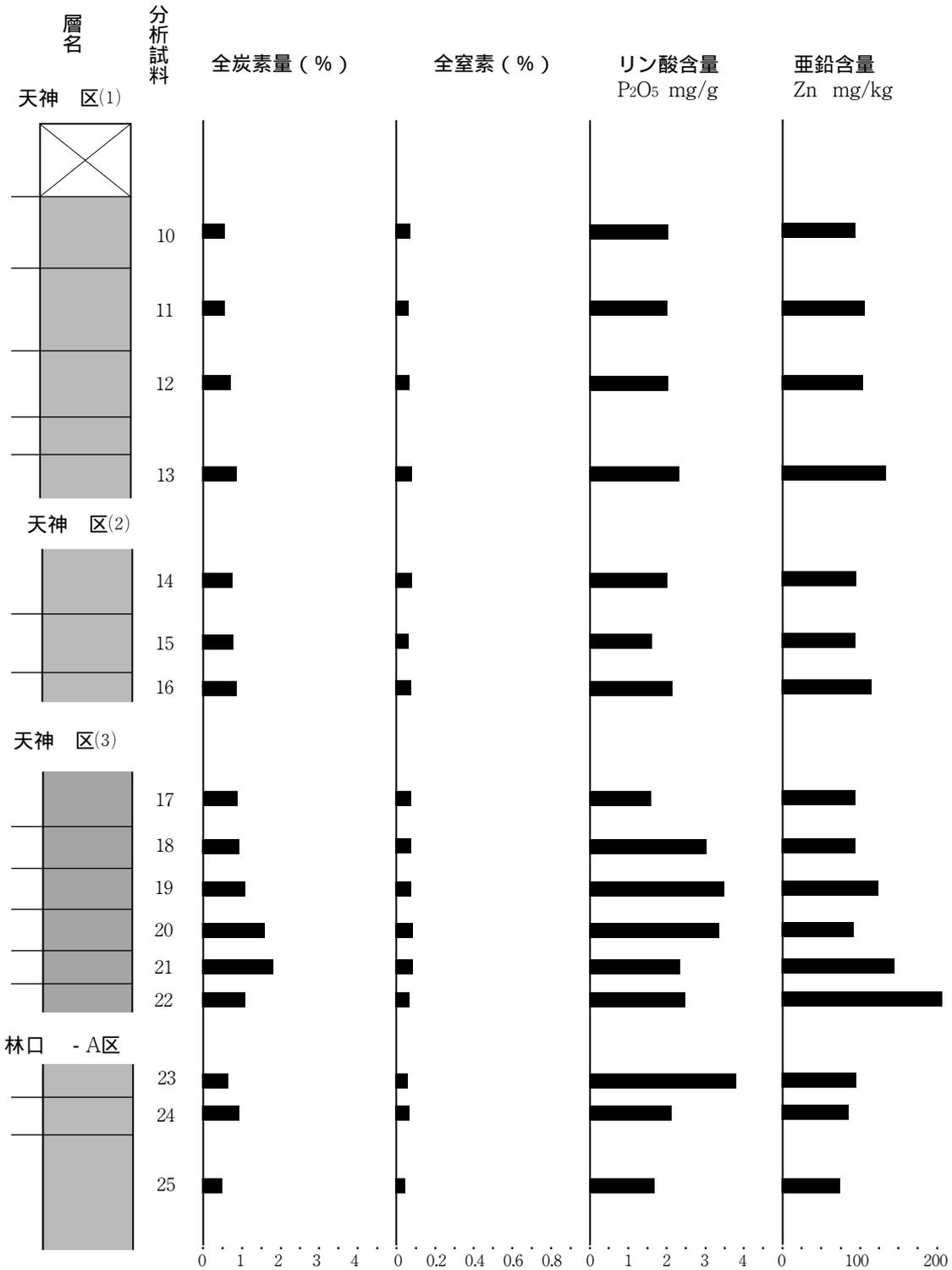


Fig.144 天神遺跡 区・林口遺跡 - A区の土壤理化学性層位変化

る緑色の特殊な吸収をもつ色素)によるスロープが急峻に現れる450nmと520nmの吸光度比を求める方法である。我国の代表的な火山灰土壌についてMIを測定した結果、1.70を境にそれ以下がA型腐植酸、それ以上がP型腐植酸に分類され、腐植化度の高いA型と腐植化度の低いP型が明瞭に判別される。また数多くの分析結果から、MI 1.7の場合はA型腐植酸、 $1.7 < MI < 2.0$ の場合はB型腐植酸、 $2.0 < MI$ の場合はP、Rp型腐植酸と本名・山本(1992)では推定している。

今回の結果では、有機炭素量が全体的に低いために抽出腐植酸液が得られず、Fig.144に示す7点についてのみ対象とした。これらは本名・山本(1992)の分類によれば天神遺跡区(3)の層で1.73を示し、B型腐植酸に分類されるほか、すべてA型腐植酸に分類される(Tab.21, Fig.144)。

d. 亜鉛 (Zn)

重金属類元素の土壌中における自然含有量、いわゆる天然賦存量はきわめて微量である。しかし、これら重金属類は人間の生活行為(廃棄物の投棄など)によって局所的濃集が容易に起こる。人間は食物を体内に蓄積し、その成分を排泄物として土壌に還元するが、この行為によって自然界に微量であった成分(重金属類元素)は土壌中に蓄積し、濃集する。重金属類元素の中で、亜鉛は現在の下水汚泥や家畜糞などに多量に含まれており、汚染指標元素となっており、リン酸とともに人の生活行為の痕跡指標となる可能性が高い。

亜鉛の土壌中における天然賦存量は、中央値90mg/kg(Bowen,1983)との報告がある。遺跡の土層断面の結果をみると、天神遺跡区(3)の層で205mg/kg、同調査区層で140~160mg/kgと比較的高い値を示すほかは70~120mg/kgの範囲にあるものが多い(Tab.21, Fig.144)。

(4) 古環境変遷について

堆積環境

各地点とも珪藻化石はほとんど検出されなかった。一方、同じ珪酸質である植物珪酸体も保存が悪かった。珪藻殻や植物珪酸体など、植物が作る珪酸体が土壌中に埋没されてからの挙動に関しては、研究例が少ない。その中でも、近藤(1988)は植物珪酸体の生産量と土壌中の残存量に着目し、土壌中での植物珪酸体量が生産量に比べて大幅に少ないことから、植物に再び吸収されたり粘土の形成に関与したりして、比較的早い段階で消失する可能性を指摘している。また、これらの風化は植物種によって速度に差があるが、これは、表面積や元素の組成等によって差が出るためと指摘している。今回の植物珪酸体組成をみると、タケ亜科が全体的に多い。タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科植物と比較して風化に強く、また生産量が多い点がこれまでの研究から指摘されている(近藤,1982; 杉山・藤原,1986)。このことから土壌中での風化が進行していたことが窺われる。さらに、近世の堆積層では、植物珪酸体や珪藻化石が比較的多く、時代が古くなると保存が悪くなる傾向があることから、これらの経年変化による分解が示唆される。一方で、遺跡の立地が河口付近の沖積地であることから、堆積速度が速く、これらが土壌中に取り込まれなかった可能性もある。以上のことから、珪藻化石、植物珪酸体ともに今回少なかった原因としては、堆積速度の関係で土壌中の珪藻化石や植物珪酸体の量が本来少なかったものが、その後の風化によりその数がさらに減少してしまったためと思われる。なお、わずかに検出される珪藻化石群集の傾向をみると、様々

2. 天神遺跡 区, 林口遺跡 I - A区の自然科学分析報告

な生態性を持つ種類が混在する。このような群集は河口近くの沖積低地などに見られる傾向で, 集水域から様々な生態性をもつ珪藻が集積したためと考えられており, 混合群集と定義されている(堀内ほか, 1996)。このことから, 本地域では, しばしば氾濫の影響にさらされていたものと思われる。

花粉化石の結果をみると, 各層の堆積時期が不明とされる天神遺跡 区(3)から花粉化石が検出される。これまでに高知県内で行われた花粉分析結果(中村・山中, 1982)と今回の結果を比較すると, 約4,000年~1,500年前の組成(Ra帯)と近似する。この時期は「弥生の小海退」と呼ばれる冷涼・多雨な時期に相当し, 日本各地で扇状地や沖積地の形成が活発化している。花粉化石の中には水生植物の花粉化石も多く見られることからすると, 古墳時代以前の本地域は氾濫が頻繁に起こり, 湿地的環境であったことが窺われる。一方, 12~13世紀を中心とした遺物包含層前後の層準では花粉化石がほとんど検出されず, シダ類孢子が検出されるにとどまった。花粉や孢子化石は好気的環境に弱く, 分解消失するケースが多い。また, 花粉化石にはシダ類孢子に比べて風化に弱いことも知られている(徳永・山内, 1971)。このことから, 12~13世紀頃になると, 氾濫の影響が少なくなって地表面が乾燥化したため, 生活領域として利用されたと推定される。

土壤理化学分析の結果からみると, 天神遺跡 区(3)の 層・ 層において有機炭素の富化が認められ, 腐植も高く, A型腐植酸に分類されることが示唆された。しかし, 天神遺跡 区(3)の 層はリン酸含量が低く, 動植物遺体から有機物が富加された形跡は認められない。一方, 花粉化石の組成をみると, 水生植物の検出などから湿地的な環境下であった可能性が高く, 地表面化したとは考えにくい。本来, 有機炭素の量が多く, 腐植化度も高い場合, 当時の地表面である可能性がある。しかし, 生物活動の指標となる亜鉛やリン酸の値が比較的低いことや, 花粉化石の結果, また地形の立地から様々な由来をもつ土壌が流入しやすい条件下にあったことからすると, 周囲の山地や草地から腐植が流入した可能性が高く, これらの層が地表面であった可能性は薄い。リン酸含量が高いのは天神遺跡 区(3)の 層・ 層および林口遺跡 区の 層, 亜鉛含量は天神遺跡 区(3)の 層でとくに高い値を示すほか, 天神遺跡 区(3)の 層でも比較的高い値となっている。亜鉛やリン酸は人間活動の指標の一つであるものの, 高くなる層準がまちまちで, リン酸, 亜鉛が全て高く, かつ腐植が高いというような全ての条件が揃う層準は今回存在しない。それぞれの元素の値が異なるのは土性や母材の違いによる可能性もあることから, 全ての条件が一致しないと当時の地表面であった可能性を指摘することは難しい。したがって, 土壤理化学分析から当時の地表面を推定することは差し控えた。

古植生変遷

高知県周辺地域では, 平野部を中心にいくつかの花粉分析が行われており, その成果がまとめられている(中村・山中, 1982)。その成果によれば, 今から約6,000年前以降, シイ・カシ類等からなる暖温帯林(照葉樹林)が覆うようになる。約4,000年前から1,500年前になると, モミ・ツガ・スギなどの温帯針葉樹林が分布を拡大するが, 小刻みに増減を繰り返し, 不安定な状況にあった。約1,500年前以降になると, マツ属が増加し, やがて急増するようになる。これは人間の植生干渉による植林や二次林の増加によるものと考えられている。花粉化石は広域的な植生を反映していることが

ら考えると、遺跡周辺も山地を中心としてほぼこのような植生変遷をたどってきたことが窺われる。

今回花粉化石が検出された天神遺跡 区(3)の各層位の堆積時期は、出土遺物が検出されないことから不明とされるが、中村・山中(1982)と比較すると、約4,000年前から1,500年前に相当する。木本花粉の組成は、中村・山中(1982)の結果と近似しており、上記に示したような森林植生が周辺域でも示唆される。また、草本花粉の割合が多く、とくにイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が多い。一方、植物珪酸体でもタケ亜科をはじめ、ウシクサ族やイチゴツナギ亜科が検出されている。したがって、これらが生育するような草地在附近に存在していたとみられる。おそらく、当時は洪水の影響を頻繁に受けていたため不安定な水域環境であり、遷移が進まなかったため草地在維持されたと考えられる。さらに、ガマ属、ミクリ属、イボクサ属、ミズアオイ属、サンショウモ、ミズワラビ属といった水生植物の花粉化石が検出されることから、湿地や沼沢地的な環境も附近に広がっていたものと考えられる。

なお、今回検出された中には、イネ属の植物珪酸体とソバ属の花粉化石が含まれる。これらは両者とも食用のため渡来した栽培植物である。イネ属の植物珪酸体は分析調査を行ったほぼ全地点から検出される。また、ソバ属の花粉化石は天神遺跡 区(3)の 層・ 層から検出される。これらことから、 層・ 層堆積時には調査地点付近での栽培が示唆される。ちなみにソバ属に関しては、高知平野で行われたボーリング試料を分析した結果、約6,300年前に噴出した鬼界 - アカホヤ火山灰の下位からソバ属の花粉化石が検出されたという報告がある(山中ほか,1992)。

高知平野を中心とした栽培植物の消長に関しては、イネ属は約3,000年前から始まり(中村編,1978;山中ほか,1992)、弥生時代前期以降に本格化した(山中ほか,1992)と考えられている。ただし、これらは湿地などを対象にしたボーリング試料に基づくものなので、開始時期に関しては水田遺構や遺物の検出状況なども考慮しなければならない。しかし、少なくとも本地域でも高知平野と同様、古くから稲作が行われていたものと推測される。また、遺物・遺構が多く検出される12~13世紀でも遺跡周辺では稲作が行われていたと推定されるが、分析調査対象地点が水田耕土として用いられていたか否かについては不明である。自然科学分析による水田耕土の可能性について検証するためには、堆積物の岩質・混入物・酸化鉄やマンガンの沈着状態などを含めた土層断面観察を充分に行うとともに、引き続き分析調査事例を蓄積しながら過去のデータと比較し、再検討する必要がある。なお、林口遺跡 - A区の 層では多くのイネ属植物珪酸体が検出される。本層は近世と考えられている。現在調査区付近が水田として利用されているが、それは少なくとも近世まではさかのぼれるものと考えられる。

(5) 総括

遺跡が立地する沖積低地は、縄文時代末~古墳時代頃までは氾濫の影響を受ける不安定な状況下にあり、湿地や草地在広がっていたものと推定される。この時代は「弥生の小海退」呼ばれる冷涼・多雨な時期で、扇状地や沖積低地の発達が全国的に起こった時期であることから、本遺跡が立地する沖積低地の形成もこのような気候変化に関係しているものと推定される。その後、12~13世

2. 天神遺跡 区, 林口遺跡 I - A区の自然科学分析報告

紀になると遺構・遺物が検出されるようになることから、低地は離水し、生業が行われるようになったと推定される。しかし、珪藻化石で混合群種が認められることを考えると、氾濫の影響は多少は受けていたものと推定される。現在、市街地周辺の低地は、水田として利用されているが、林口遺跡 - A区の結果をみると、水田としての利用は近世にまでさかのぼれることが示唆される。また、リン酸値が高いことから、施肥なども行われていた可能性が推定される。

周辺地域の森林植生変化は、既存の結果を考慮すれば、今から約6,000年前以降、シイ・カシ類等からなる暖温帯林(照葉樹林)が覆っていたと推測される。その後約4,000年前から1,500年前になると、モミ・ツガ・スギなどの温帯針葉樹林が分布を拡大するが、小刻みに増減を繰り返し不安定な状況にあった。この時期本遺跡が立地する沖積低地は、氾濫の影響を受ける不安定な状況下にあり、湿地や草地が広がっていた。約1,500年前以降になると、マツ属が増加し、やがて急増するようになる。これは人間の植生干渉による植林や二次林の増加によるものと考えられている。

本遺跡からは、ソバ属とイネ属の化石が検出され、栽培が示唆された。しかし、その開始時期や生産域などは不明な点が多い。周辺地域での資料が少ないことから、今後も事例を増やして展開していきたい課題である。

許諾手続き中

許諾手続き中

3. 土佐市バイパス発掘調査に関わる胎土分析の実例とその展望

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

土器の材質を調べることにより、土器の生産や移動、流通を考える胎土分析は、これまでに縄文土器から近世の陶磁器に至るまで様々なやきものを対象として多くの研究例が発表されている。土佐市バイパス発掘調査では、各遺跡とも12～13世紀頃の中世の時期を示す遺構や遺物が中心的な位置を占めているが、胎土分析の研究例の中では、中世のやきものを対象とした例は比較的少ない。当社における分析例でも、東海地域を中心に広範に分布する煮炊具である伊勢型鍋(南伊勢系土鍋)や羽釜の分析(矢作,1994;伊藤ほか,1996;パリノ・サーヴェイ株式会社,2000)および東海地域における山茶碗の分析(五十嵐・辻本,1994)など、地域・土器の種類ともに限定的な資料に留まっている。ただし、その分析の成果はいずれも考古学的に重要な資料を提示しており、中世を対象とした胎土分析は、例が少ないというだけであり、その効果が低いということではない。

今回の分析対象である中世の瓦器については、近畿地方および九州地方を中心として型式の設定と細分がなされており、両地域の間にある四国地方での瓦器の研究は、西日本の中世を考える上で重要な事項の一つになり得ると考えられる。本報告では、土佐市に所在する林口、天神、光永・岡ノ下の各遺跡より出土した瓦器および粘土を分析することにより、周辺地質との比較などから、土佐地域における瓦器の生産について考える。ただし、高知県における中世瓦器の分析は、当社では初めての試みであることから、分析結果の考察だけでなく、今後の胎土分析の展開と期待できる成果についても述べる。

(1) 試料

試料は、後述する分析項目ごとに設定されており、薄片作製観察用の試料6点と蛍光X線分析用

の試料20点との合計26点である。試料は12世紀後半から13世紀頃の瓦器の破片と見られている。

試料の内訳は、蛍光X線分析用試料番号1,2は林口遺跡、同試料番号3~8は天神遺跡、同試料番号9~20は光永・岡ノ下遺跡の各遺跡から出土したものである。薄片観察用試料は、6点ともに光永・岡ノ下遺跡出土試料である。各試料の出土地点、層位などは注記としてTab.22およびTab.23に併記する。

(2) 分析方法

当社ではこれまでに須恵器のような硬質で高温焼成の土器については、土器片の薄片を作製し、偏光顕微鏡観察により認められる鉱物片や岩石片の種類を同定し、また鉱物の変化から推定される焼成温度を記載して胎土の特徴とし、窯跡試料との比較や遺跡間の比較を行ってきた。また、蛍光X線分析装置により胎土の化学組成を調べ、その分析値から胎土ノルム計算を行い、胎土の鉱物成分を推定するという方法も行っている。今回の試料である瓦器についてもこれらの方法を特に指定された試料について行い、各試料の胎土を把握する。以下に各分析方法の手順を示す。

a. 薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は岩石学的な手法を用いて観察され、構成鉱物および組織を中心に各試料特徴を把握し、鉱物の加熱変化をもとに焼成温度を推定した。

b. 蛍光X線分析

1)装置

理学電機工業社製RIX1000(FP法のグループ定量プログラム)

2)試料調整

試料を振動ミル(平工製作所製T1100:10ml容タングステンカーバイト容器)で微粉碎した後、105℃で4時間乾燥させた。この微粉碎試料から以下の条件でガラスビートを作成した。

溶融装置：自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー(3491A1)

溶剤および希釈率：融剤(ホウ酸リチウム)5.000g:試料0.500g

剥離剤：LiI(溶融中2回投入)

溶融温度：1,200℃ 約7分

3)測定条件

X線管：Cr(50Kv-50mA)

スペクトル：全元素K

分光結晶：LiF, PET, TAP, Ge

検出器：F-PC, SC

計数時間：Peak40sec, Back20sec

4)胎土ノルム計算

一般に陶磁器等の化学組成分析表による品質判定は、 SiO_2 、 Al_2O_3 、 Na_2O 、 K_2O 、 Fe_2O_3 の含有量を比較することでなされることが多いが、的確な判定資料として利用されることを目的としてここ

では胎土ノルム計算法による解析を行った。岩石学の分野では火成岩の化学組成から構成鉱物の種類と量比を計算する目的で1902年以降CIPWノルム計算が用いられてきた。これを応用し、粘土・土壌など堆積物・変質物で形成される含水鉱物・炭酸塩鉱物などを含む天然物質中の鉱物組成を計算するために粘土ノルム計算が考案された(五十嵐,1983)。さらに、本文で用いている胎土ノルム計算法は焼成物等から原土の鉱物組成を推定するシュミレーションプログラムで、陶磁器など含水鉱物を原料とするが、高温加熱により無水状態になっている製品の化学組成から、原料の化学組成と鉱物組成を推定することを目的としている。ただし、粘土鉱物を多く含む岩石や鉱石、陶土等は化学組成が同じであっても生成過程(物理化学条件)の相違により、鉱物組成が異なるため、岩石学におけるCIPWノルム法のように一義的に一定の規則によって計算することはできない。このため胎土ノルム計算法ではいくつかの鉱物の有無により、他の鉱物組成を類推して計算する方式を採用している。従ってこの種の鉱物の有無はX線回折試験・顕微鏡観察などにより予め知られていなければならない。今回はX線回折試験により、前提となる鉱物を確認することとした。

(3) 結果

薄片観察

鉱物片：6点の試料のうち、試料番号2を除く5点はともに少量の石英と微量または極めて微量のカリ長石、斜長石および極めて微量の不透明鉱物を含み、さらにその中で試料番号4~6の3点は微量または極めて微量の黒雲母を含む。試料番号2にはカリ長石や斜長石などの長石類は認められな

Tab.23 各遺跡出土試料のX線回折分析による同定鉱物と回折強度

遺跡名	注記	試料番号	石英	斜長石	クristバライト	カリ長石	セリサイト
林口遺跡	第層	1		±	±	+	-
林口遺跡	第層	2		±	±	+	-
天神遺跡	第層	3		+	±	+	+
天神遺跡	第層	4		+	±	+	-
天神遺跡	第層	5		+	±	+	±
天神遺跡	第層	6		±	±	+	-
天神遺跡	第層	7		±	±	+	-
天神遺跡	第層	8		±	±	+	-
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	9		+	±	+	+
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	10		±	±	+	±
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	11		±	±	+	-
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	12		±	±	+	±
光永・岡ノ下遺跡	第層	13		±	±	+	±
光永・岡ノ下遺跡	第層	14		+	±	+	-
光永・岡ノ下遺跡	第層	15		-	±	+	-
光永・岡ノ下遺跡	第層	16		-	±	+	-
光永・岡ノ下遺跡	第層	17		-	±	+	-
光永・岡ノ下遺跡	第層	18		-	±	+	±
光永・岡ノ下遺跡	第層	19		-	-	+	-
光永・岡ノ下遺跡	第層	20		+	±	+	-

* 回折強度の目安 (: 多量, : 中量, : 少量, + : 微量, ± : 極微量, - : 検出されず)

3. 土佐市バイパス発掘調査に関わる胎土分析の実例とその展望

い。他に試料によっては、極めて微量の角閃石、緑レン石、ジルコンなどの鉱物片が含まれる。

岩石片：6点の試料のうち、試料番号2を除く5点はともに微量のチャートを含む。他に試料番号3と6には極めて微量の砂岩が含まれ、試料番号5には極めて微量の流紋岩が認められる。試料番号2には岩石片は認められない。

基質：石英：全試料の基質粘土中には0.02mm以下の石英破片が少量～微量の範囲で存在し、粘土は砂質またはやや砂質となっている。

粘土鉱物(セリサイト)：セリサイトは鉱物学的には白雲母と同質の鉱物であるが、素地を構成する微細な鱗片状粘土鉱物に対して用いられている。セリサイトは可塑性が高く、陶磁器の素地を構成する重要な粘土鉱物の一つであるが、高温焼成で加熱変化を受けやすく、溶化または非晶質化しているため、焼成物ではその確認は困難な鉱物となる。観察試料のうち4試料はセリサイトとしての光学性が保持されたまま残存しているが、試料番号3と4の2試料は一部が加熱変化し非晶質化していると判定される。セリサイトはX線回折試験では900 前後で非晶質化するのが通常で、セリサイトの大部分が残存する現象は比較的低温で焼成されたことを証明する指針とされる。

酸化鉄：胎土の外観が赤味または暗赤色を帯びる試料に含まれる。粘土中の含水酸化鉄(褐鉄鉱)は、実験的には320～350 の加熱で脱水して赤鉄鉱に転移し、焼成物中では結核状および鉱染状を呈する赤鉄鉱として存在する。観察試料では試料番号5に酸化鉄が少量含まれ、とくに試料表面で濃集している。

酸化鉄結核：素地に不純物として含まれる鉄分が濃集した結核は高温で加熱されると、濃赤褐色～鮮赤色となり、周縁の石英等の鉱物片を包有して膠結する現象がみられる。観察試料では試料番号3を除く5試料に少量～きわめて微量の範囲で酸化鉄結核が含まれる。

推定焼成温度：一般に粘土を高温焼成すると、その温度条件と化学組成に対応した鉱物の晶出(代表的な鉱物はムライト)、溶融・非晶質化などの現象がみられる。観察試料では、焼成温度の推定に次の現象について検討して指針として適用した。

- 1)角閃石が酸化角閃石に変化している試料は800 以上の加熱を受けている。
- 2)素地を構成する主要粘土鉱物のセリサイトが加熱変化を受けていない試料の焼成温度は900 - と推定される。
- 3)セリサイトの一部は加熱変化を受けて非晶質化しているが、大部分は残留している状態を900 ± の焼成温度と推定する。
- 4)セリサイトの大部分は加熱変化を受けて非晶質化しているが、石英・長石類に加熱変化がみられない試料の焼成温度は900 + と見積もる。
- 5)セリサイトは加熱により非晶質化しているが、石英・長石類にあまり加熱変化がみられない試料の焼成温度を1,150 - と推定される。
- 6)石英に高温焼成で生じたクラック(高温クラック)がみられ、カリ長石の周縁部が微溶化している状態の試料の焼成温度は1,150 ± と推定される。
- 7)石英に高温クラック・溶融組織がみられ、カリ長石に顕著な溶融組織が認められるが、曹長石のムライト化は明瞭ではない試料の焼成温度は1,150～1,200 と推定される。

8)ムライトの生成が褐色リムまたは短針状で確認される試料の焼成温度を1,200 ± と推定する。

9)針状ムライトが粗に生成している試料は1,200~1,250 の焼成温度と見積もられる。

10)針状ムライトが密に生成する試料は1,250 + の焼成温度と見積もられる。

上記の現象を基準とすると観察試料はいずれも1)~3)の段階の範囲に属している。焼成温度別には次のように判定される。

900 - (4試料):試料番号1(実測番号267),2(実測番号530),5(実測番号262),6(実測番号250)

900 + (2試料):試料番号3,4(実測番号250)

蛍光X線分析

Tab.23にX線回折分析による同定鉱物とその最強回折線における測定強度を示したが、今回の試験において同定された鉱物は石英(quartz),斜長石(plagioclase),クリストバライト(cristobalite),カリ長石(k-feldspars),セリサイト(sericite)の5種の鉱物である。ここではX線回折試験で確認されたセリサイトを含み、緑泥石,モンモリロナイトを伴い、さらにカリ長石は全て粘土化し、セリサイトに変化したものとする条件で計算を行うこととした。なお、今回のX線回折試験では、試料の大部分については、セリサイトが消失し、長石が残っていることから900~1,100 程度の焼成温度であると推定されるが、セリサイトが検出された試料番号3,10,12,13,18については900 付近またはそれ以下の焼成温度と推定される。

蛍光X線分析結果(化学組成)をTab.24に、計算の途中で得られる原土の推定化学組成をTab.25(補正化学組成)に、胎土ノルム鉱物組成をTab.26に示した。この胎土ノルム鉱物組成結果は、前述のX線回折の石英や斜長石(曹長石)の回折強度との相関が高く、良好な結果が得られたものと考えられる。また、胎土ノルム鉱物組成計算をもとに、石英-粘土鉱物-長石類,カオリン-セリサイト-その他の粘土鉱物の三角ダイアグラムを示した(Fig.146)。石英-粘土鉱物-長石類およびカオリン-セリサイト-緑泥石の各三角ダイアグラムについてそれぞれ遺跡別に見ると、遺跡内での試料間の分散が大きく、各遺跡における胎土ノルム組成の領域は、遺跡間で重複している。

(4) 考察

高知県の地質学的背景

県内各地の遺跡から出土した土器の在地性を検討する場合、その地域の地質学的背景を把握する必要がある。地質学的背景とは、周辺の地質という意味であるが、遺跡が沖積平野にあれば、その平野を作った河川の流域の地質を含む。すなわち、胎土を構成する粘土や砂の由来となる地質のことである。胎土薄片観察により確認された鉱物片や岩石片の種類とその遺跡の所在する地域の背景となっている地質を構成する岩石や堆積物の種類とを比較することにより、その土器の異質性あるいは在地性を判断することができる。

高知県の地質を概観すると、ほぼ東北東-西南西方向にのびる帯状の地質が南北方向に並んでいることがわかる。高知県北部吉野川上流域には三波川帯とよばれる主に緑色片岩や石英片岩などからなる変成岩帯が分布、その南側には古生代末から中生代の砂岩や泥岩からなる秩父帯と呼

3. 土佐市バイパス発掘調査に関わる胎土分析の実例とその展望

Tab.24 各遺跡出土試料の蛍光X線分析結果(化学組成)

遺跡名	注記	試料番号	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Ig.loss	合計
林口遺跡	第層	1	72.19	0.84	18.56	4.87	0.03	0.66	0.22	0.68	1.25	0.72	0.00	100.02
林口遺跡	第層	2	66.29	0.96	22.52	6.40	0.02	0.64	0.22	0.56	1.51	0.81	0.07	100.00
天神遺跡	第層	3	54.90	0.85	21.75	6.33	0.01	0.47	0.54	1.14	1.66	1.14	11.22	100.01
天神遺跡	第層	4	65.81	0.91	21.70	6.92	0.02	0.61	0.20	1.42	1.76	0.65	0.00	100.00
天神遺跡	第層	5	65.23	0.83	21.68	4.30	0.02	0.48	0.27	1.33	1.93	1.20	2.74	100.01
天神遺跡	第層	6	72.24	0.80	18.54	4.47	0.02	0.67	0.34	0.77	2.01	0.14	0.00	100.00
天神遺跡	第層	7	68.24	0.81	21.25	5.63	0.02	0.61	0.31	0.85	1.31	0.97	0.00	100.00
天神遺跡	第層	8	67.91	0.86	22.52	5.68	0.01	0.60	0.14	0.37	1.43	0.49	0.00	100.01
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	9	65.33	1.10	23.38	4.44	0.02	0.87	0.41	1.37	2.43	0.65	0.00	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	10	62.06	0.89	24.28	8.56	0.02	0.69	0.18	0.67	1.40	0.59	0.66	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	11	68.01	0.79	22.08	5.58	0.01	0.59	0.18	0.86	1.47	0.44	0.00	100.01
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	12	66.22	0.98	22.90	5.33	0.01	0.84	0.26	0.99	1.92	0.55	0.00	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	13	64.40	0.77	18.58	6.84	0.01	0.57	0.32	0.69	1.57	1.29	4.95	99.99
光永・岡ノ下遺跡	第層	14	67.69	0.83	22.46	4.71	0.01	0.62	0.31	1.23	1.70	0.42	0.00	99.98
光永・岡ノ下遺跡	第層	15	66.06	0.80	22.07	7.01	0.02	0.73	0.26	0.76	2.14	0.15	0.00	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第層	16	74.22	0.74	18.29	3.73	0.01	0.76	0.07	0.32	1.60	0.25	0.00	99.99
光永・岡ノ下遺跡	第層	17	74.35	0.75	18.11	3.60	0.01	0.76	0.07	0.34	1.77	0.26	0.00	100.02
光永・岡ノ下遺跡	第層	18	67.84	0.78	22.29	5.78	0.03	0.53	0.14	0.58	1.45	0.57	0.00	99.99
光永・岡ノ下遺跡	第層	19	72.66	0.77	17.92	3.68	0.01	0.79	0.07	0.41	1.74	0.23	1.73	100.01
光永・岡ノ下遺跡	第層	20	64.54	0.80	21.07	5.36	0.04	0.64	0.23	1.04	1.80	0.68	3.79	99.99

*単位は重量%

Tab.25 各遺跡出土試料の補正化学組成

遺跡名	注記	試料番号	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	H ₂ O+	合計
林口遺跡	第層	1	68.17	0.79	17.53	4.60	0.03	0.62	0.21	0.64	1.18	0.68	5.55	100.00
林口遺跡	第層	2	61.81	0.90	21.00	5.97	0.02	0.60	0.21	0.52	1.41	0.76	6.82	100.00
天神遺跡	第層	3	57.58	0.89	22.81	6.64	0.01	0.49	0.57	1.20	1.74	1.20	6.88	100.00
天神遺跡	第層	4	61.86	0.86	20.40	6.50	0.02	0.57	0.19	1.33	1.65	0.61	6.00	100.00
天神遺跡	第層	5	63.17	0.80	21.00	4.16	0.02	0.46	0.26	1.29	1.87	1.16	5.80	100.00
天神遺跡	第層	6	68.74	0.76	17.64	4.25	0.02	0.64	0.32	0.73	1.91	0.13	4.85	100.00
天神遺跡	第層	7	63.92	0.76	19.90	5.27	0.02	0.57	0.29	0.80	1.23	0.91	6.33	100.00
天神遺跡	第層	8	63.23	0.80	20.97	5.29	0.01	0.56	0.13	0.34	1.33	0.46	6.89	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	9	61.48	1.04	22.00	4.18	0.02	0.82	0.39	1.29	2.29	0.61	5.90	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	10	57.70	0.83	22.58	7.96	0.02	0.64	0.17	0.62	1.30	0.55	7.63	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	11	63.61	0.74	20.65	5.22	0.01	0.55	0.17	0.80	1.37	0.41	6.47	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	12	62.00	0.92	21.44	4.99	0.01	0.79	0.24	0.93	1.80	0.51	6.37	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	13	63.84	0.76	18.42	6.78	0.01	0.57	0.32	0.68	1.56	1.28	5.79	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第層	14	63.53	0.78	21.08	4.42	0.01	0.58	0.29	1.15	1.60	0.39	6.16	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第層	15	61.97	0.75	20.70	6.58	0.02	0.68	0.24	0.71	2.01	0.14	6.19	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第層	16	70.29	0.70	17.32	3.53	0.01	0.72	0.07	0.30	1.52	0.24	5.31	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第層	17	70.54	0.71	17.18	3.42	0.01	0.72	0.07	0.32	1.68	0.25	5.11	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第層	18	63.30	0.73	20.80	5.39	0.03	0.49	0.13	0.54	1.35	0.53	6.70	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第層	19	70.14	0.74	17.30	3.55	0.01	0.76	0.07	0.40	1.68	0.22	5.13	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第層	20	63.04	0.78	20.58	5.24	0.04	0.63	0.22	1.02	1.76	0.66	6.04	100.00

* 単位は重量%

3. 土佐市バイパス発掘調査に関わる胎土分析の実例とその展望

Tab.26 各遺跡出土試料の胎土ノルム鉱物組成

遺跡名	注記	試料番号	石英	曹長石	灰長石	カオリン	セシナイト	緑泥石	褐鉄鉱	セシナイト	ルル	リン灰石	その他	合計
林口遺跡	第層	1	44.84	5.43	0.00	31.19	9.98	1.72	5.12	0.06	0.76	0.37	0.52	99.99
林口遺跡	第層	2	34.86	4.42	0.00	38.65	11.91	1.65	6.64	0.04	0.87	0.37	0.60	100.01
天神遺跡	第層	3	25.91	10.12	0.00	37.82	14.72	1.36	7.39	0.02	0.88	1.01	0.77	100.00
天神遺跡	第層	4	32.47	11.29	0.00	31.74	13.99	1.58	7.24	0.04	0.83	0.34	0.47	99.99
天神遺跡	第層	5	33.29	10.90	0.00	31.83	15.81	1.28	4.63	0.04	0.78	0.47	0.96	99.99
天神遺跡	第層	6	44.92	6.20	0.73	24.39	16.17	1.76	4.73	0.04	0.74	0.31	0.00	99.99
天神遺跡	第層	7	37.20	6.74	0.00	36.26	10.38	1.58	5.87	0.04	0.74	0.52	0.69	100.02
天神遺跡	第層	8	37.01	2.91	0.00	39.99	11.26	1.54	5.88	0.02	0.79	0.23	0.36	99.99
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	9	30.30	10.91	0.00	30.48	19.34	2.26	4.65	0.04	1.01	0.69	0.32	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	10	28.49	5.27	0.00	43.04	11.01	1.77	8.86	0.04	0.81	0.30	0.42	100.01
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	11	35.99	6.81	0.00	36.92	11.63	1.52	5.81	0.02	0.73	0.30	0.28	100.01
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	12	32.90	7.84	0.00	34.64	15.20	2.17	5.55	0.02	0.91	0.44	0.33	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第XI層	13	39.31	5.79	0.00	30.26	13.16	1.56	7.54	0.02	0.75	0.57	1.04	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第層	14	34.04	9.77	0.00	34.70	13.49	1.60	4.92	0.02	0.77	0.52	0.17	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第層	15	34.60	6.03	0.29	31.79	16.98	1.89	7.32	0.04	0.73	0.33	0.00	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第層	16	48.48	2.56	0.00	29.21	12.81	1.98	3.93	0.02	0.69	0.12	0.19	99.99
光永・岡ノ下遺跡	第層	17	48.82	2.73	0.00	27.42	14.20	1.99	3.80	0.02	0.70	0.12	0.20	100.00
光永・岡ノ下遺跡	第層	18	36.54	4.58	0.00	38.65	11.44	1.36	6.00	0.06	0.70	0.23	0.43	99.99
光永・岡ノ下遺跡	第層	19	47.99	3.35	0.00	27.36	14.20	2.10	3.95	0.02	0.73	0.12	0.17	99.99
光永・岡ノ下遺跡	第層	20	34.66	8.60	0.00	32.61	14.87	1.72	5.83	0.08	0.74	0.40	0.49	100.00

* 単位は重量%

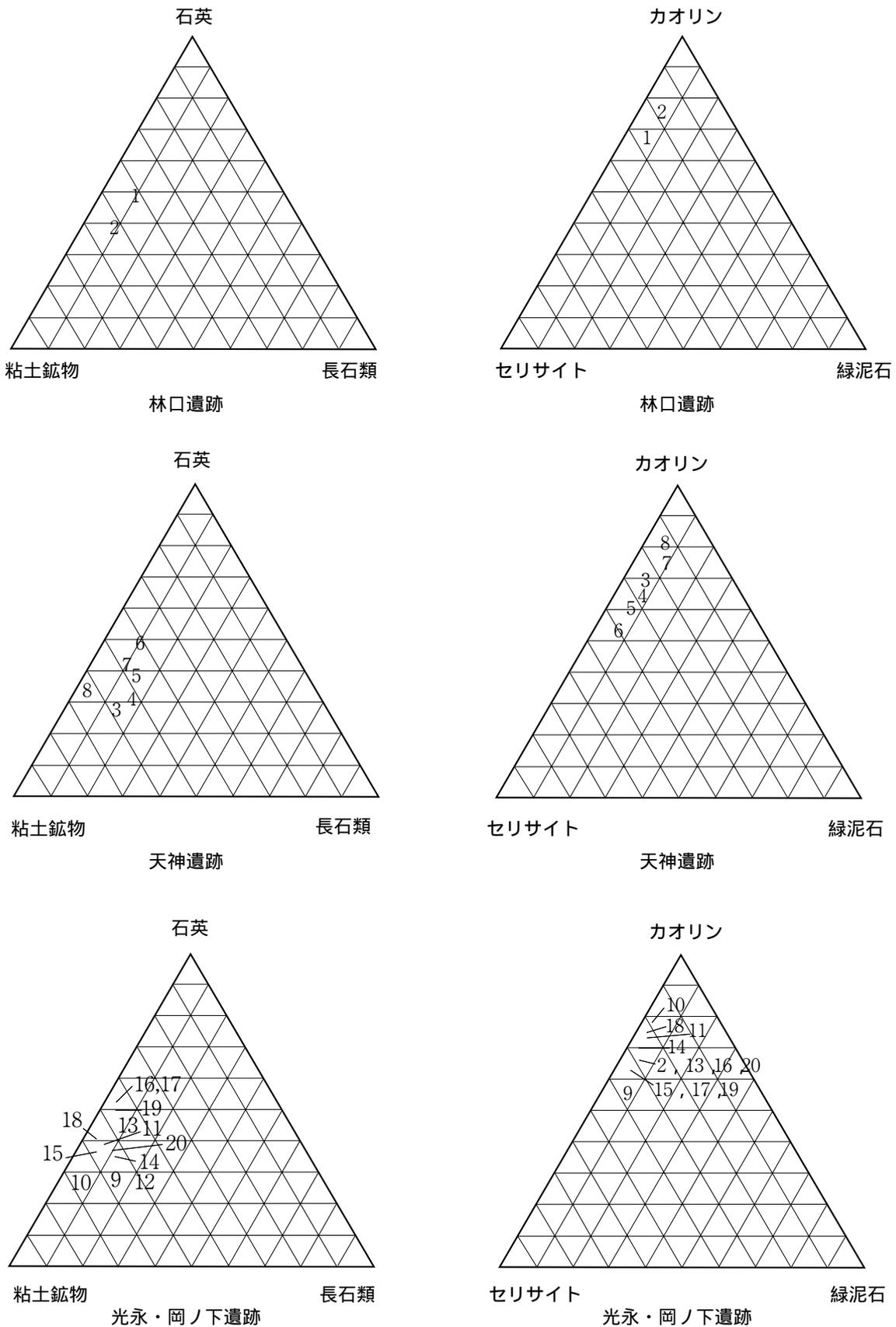


Fig.146 各遺跡出土試料の胎土ノルム鉱物組成三角ダイヤグラム

3. 土佐市バイパス発掘調査に関わる胎土分析の実例とその展望

ばれる地質が分布する。仁淀川上流域や穴内川ダムなどは秩父帯の分布域にある。秩父帯の中には、場所によっては石灰岩やチャートおよび凝灰岩などの分布も認められている。秩父帯の南側には、中生代末から新第三紀の砂岩や泥岩からなる四万十帯と呼ばれる地質が分布する。四万十帯は、土佐湾を挟んだ高知県の南半部全域に分布している。

高知県内の主な河川流域の地質をみると、物部川は、上流域は秩父帯の分布する山地であり、中流および下流は沖積低地、仁淀川も上流域は秩父帯の分布域であり、土佐市付近の中流域も周囲の山地は秩父帯、そして河口部周囲の山地が四万十帯の地質となっている。四万十川は、上流から河口部までほぼ全流域が四万十帯の分布域である。また、四万十川に合流する広見川やその支流である大宿川の最上流部は、チャートと砂岩からなる秩父帯にかかっている(愛媛県地質図編集委員会, 1991)。ここで例えば、これら主要河川沿いの地域で土器が作られたならば、その胎土中に含まれる鉱物片には石英が多く、他の鉱物片はおそらく微量であり、また岩石片では砂岩や泥岩あるいはチャートなどの堆積岩が主となることが想定できる。したがって、花崗岩や安山岩などの火成岩あるいは結晶片岩や片麻岩などの変成岩を多量に含む胎土の土器が、上記主要河川沿いの地域で出土すれば、それはまず流域外からの搬入品とみてよい。しかし、一般に中世の瓦器には、このような多量の岩片を含むような胎土はあまり見受けられず、先述したように各種の岩片が微量または極めて微量認められるということが多い。この場合、局地的な地質に由来する岩片がたまたま含まれている可能性もあることから、より詳細な地質を調べた上で判断をする必要がある。以下に、本報告で取り上げた各試料を対象として、地質学的背景と胎土との関係を述べる。

地質学的背景と胎土

薄片観察を行った光永・岡ノ下遺跡の6点の土器のうち、試料番号2は他の試料と鉱物片や岩片の産状がやや異なり、試料番号5は素地における酸化鉄の含量が異なっていた。すなわち、6点の試料の中で詳細に胎土を分けるとするならば、試料番号2が、まず他の5点と区別され、次にその5点の中でも試料番号5が他の4点とはやや胎土の性質が異なっている。

上記試料番号2を除く5点の試料に認められた鉱物片と岩片のうち、カリ長石、斜長石、チャートは5点全点に認められ、黒雲母が試料番号4～6の3点に、砂岩が試料番号3と6に認められた。これら5点が同質の胎土であると考え、その胎土中に含まれる鉱物片および岩石片の種類とその組合せは、これら5点の胎土の原料となった砂や粘土の採取地の地質学的背景を示唆している。光永・岡ノ下遺跡の所在する沖積低地には、仁淀川と波介川の両河川の流域に分布する地質に由来する碎屑物が堆積している。前述のように仁淀川上流域には四万十帯が分布するが、さらに詳細にみれば、黒瀬川構造帯と呼ばれる地質も分布する(日本の地質「四国地方」編集委員会, 1991)。黒瀬川構造帯には閃緑岩やチャート、片麻岩など様々な岩体が含まれている。閃緑岩はカリ長石や斜長石の由来となり、片麻岩は斜長石や黒雲母の由来となる。したがって、光永・岡ノ下遺跡の位置する沖積低地およびその周辺の砂や粘土中の碎屑物には、上記5点の試料に認められた鉱物片や岩石片も比較的多く含まれていると考えられる。以上のことから、上記5点の胎土に含まれる鉱物片や岩石片の状況は、光永・岡ノ下遺跡の地質学的背景と調和的である。

蛍光X線分析を行った20点の試料については、結果の項で述べたように遺跡間での胎土の差異

を見出すことはできなかった。この結果からは、今回の3遺跡における土器は、いずれも同質の粘土や砂が使われていた可能性のあることが示唆される。ここでいう同質という言葉にまだ厳密な意味を持たせることはできないが、同じ地質学的背景を有する地域内で採取されたものという程度の意味で考えている。例えば3遺跡の所在する仁淀川と波介川の合流する沖積低地とその周囲ぐらゐの広がりを持った地域が想定できる。胎土ノルム組成にみられた試料間での分散(これは特に石英と曹長石との量比の負の対応関係によると考えられるが)は、上記地域内での粘土や砂の組成の違いあるいは、上記地域内で採取された複数種の粘土または砂の混合比の違いなどを示唆している可能性がある。今後も蛍光X線分析を継続することによりさらに解析は深まるとは考えられるが、同時に同一試料の薄片観察も行い、鉍物片や岩石片の状況との比較を行うことができれば、上述のような砂の混合についても考慮できるため、分析の効果をより高められると考える。

(5) 今後の展望

近畿地方産瓦器試料との比較

本報告で取り上げた分析例では、いずれも遺跡の所在する河川の流域の地質学的背景と調和するものが多く、異質とされたものでも四国内で生産された可能性のあることが指摘された。形態的に指摘された和泉型の産地である近畿地方で生産されたことを示唆するような胎土は、今回の試料の中には見出せなかった。

日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)などによれば、和泉の位置する大阪府南部周辺の地質学的背景の主体は、金剛山地から和泉山脈北麓にかけて帯状に伸びる領家帯である。領家帯は花崗岩や花崗閃緑岩などの花崗岩類から構成される地質である。これに溶結凝灰岩などからなる泉南層群や和泉山脈の主体部を構成している砂岩・泥岩からなる和泉層群が背景として加わる。また、泉北丘陵を構成している大阪層群中には、多数のテフラ層が挟在しているが、これらには角閃石が多く含まれている(吉川,1976)。現時点では、和泉地域で生産された瓦器試料の当社による分析例を得ていないため、確実なことはいえないが、おそらく和泉地域で生産された土器には、上述した岩石や鉍物が含まれていると考えられる。したがって、高知県内で生産された土器との区別は、比較的容易であると考えられる。

今後、高知県内における瓦器の分析をさらに進めることができれば、おそらく近畿地方産の土器である可能性の高い試料を見出すことはできると考えられる。しかし、より確実な搬入状況を判断するためには、やはり近畿地方産の試料の分析も必要であるといえる。

高知県内の瓦器の分析

前述のように高知県の地質分布は、基本的には単純であるが、より詳細には様々な種類の岩石からなる岩体が複雑に分布している地域もある。したがって、県内でも地域により土器胎土の特徴は様々であると考えられる。今後、各地域において考古学的な所見から在地性の高いものと搬入品である可能性の高いものとを、考古学的な所見からある程度分類されているような試料の分析例を蓄積することができれば、その地域の詳細な地質学的背景を合わせて考えることにより、県内における胎土の地域性を構築できる可能性がある。

3. 土佐市バイパス発掘調査に関わる胎土分析の実例とその展望

この地域性を確立することができれば、近畿地方との関係だけではなく、高知県内での地域間の関係についても議論することができる。さらに、型式研究などから試料に時間的な要素が入れられれば、地域的な関係の時期的な変遷を捉えるということも可能になると考えられる。

<引用文献>

愛媛県地質図編集委員会(1991)愛媛県地質図(20万分の1)。(株)トモエヤ商事。

五十嵐俊雄(1983)マイクロコンピュータによる粘土ノルム計算について。未開発陶磁器原料資源調査報告書(昭和57年度)。p.119-136,地質調査所

五十嵐俊雄・辻本崇夫(1994)顕微鏡観察による山茶碗等の産地推定。研究紀要 第3号,p.41-82,三重県埋蔵文化財センター。

伊藤裕偉・加藤 緑・柘植信行・中島宏顕・隅田 眞・宮瀧交二・山田尚友・笹生 衛・光江 章・津田芳男・馬淵和雄・橋本真紀夫・矢作健二・永越信吾・谷口 榮(1996)座談会「南伊勢系土鍋をめぐる諸問題」- <共同研究>南伊勢系土鍋胎土分析調査の成果-。博物館研究紀要 第4号,p.121-192,葛飾区郷土と天文の博物館。

パリノ・サーヴェイ株式会社(2000)東海地域における羽釜の胎土分析。(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第8輯,p.89-103。

日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)日本の地質6 近畿地方。297p.,共立出版。

日本の地質「四国地方」編集委員会(1991)日本の地質8 四国地方。266p.,共立出版。

矢作健二(1994)伊勢型鍋胎土重鉍物分析。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第48集 松河戸遺跡,p.60-66。

吉川周作(1976)大阪層群の火山灰層について。地質学雑誌,82,p.497-515。

註

1. 胎土分析を行った個体について、形態や焼成などの肉眼判断では、薄片試料番号4~6・蛍光X線分析番号1~9・13~15・18~20が在地産、それ以外が畿内からの搬入ではないかとみられた。
2. 光永・岡ノ下遺跡について記述の中の遺構・遺物番号は報告書(『光永・岡ノ下遺跡』-土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 -高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 平成12年11月)の番号と同一である。

圖 版

天神遺跡第 調査地区 (天神遺跡 区)





調査前全景(東より)



調査前全景(西より)

PL. 2



遺構検出状態(西上空より)



遺構完掘状態(東上空より)



遺構検出状態(東より)



遺構完掘状態(東より)

PL. 4



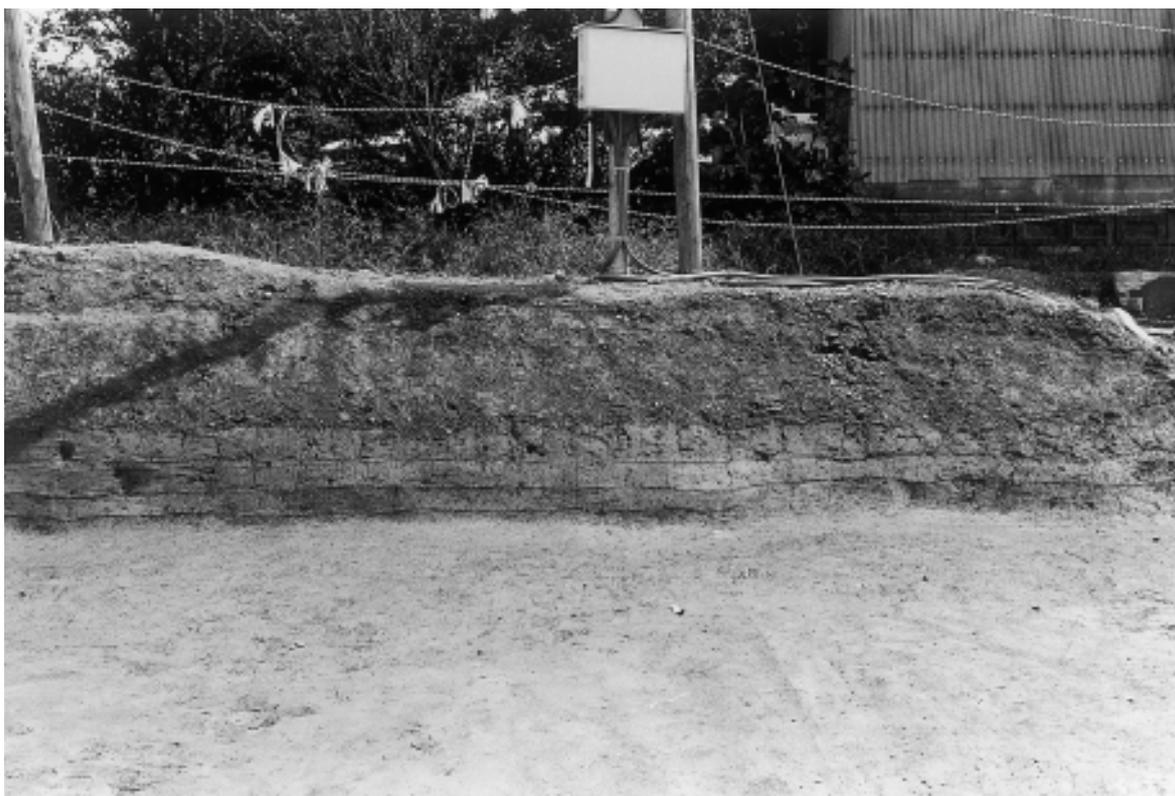
遺構検出状態(西より)



遺構完掘状態(西より)



東壁セクション1

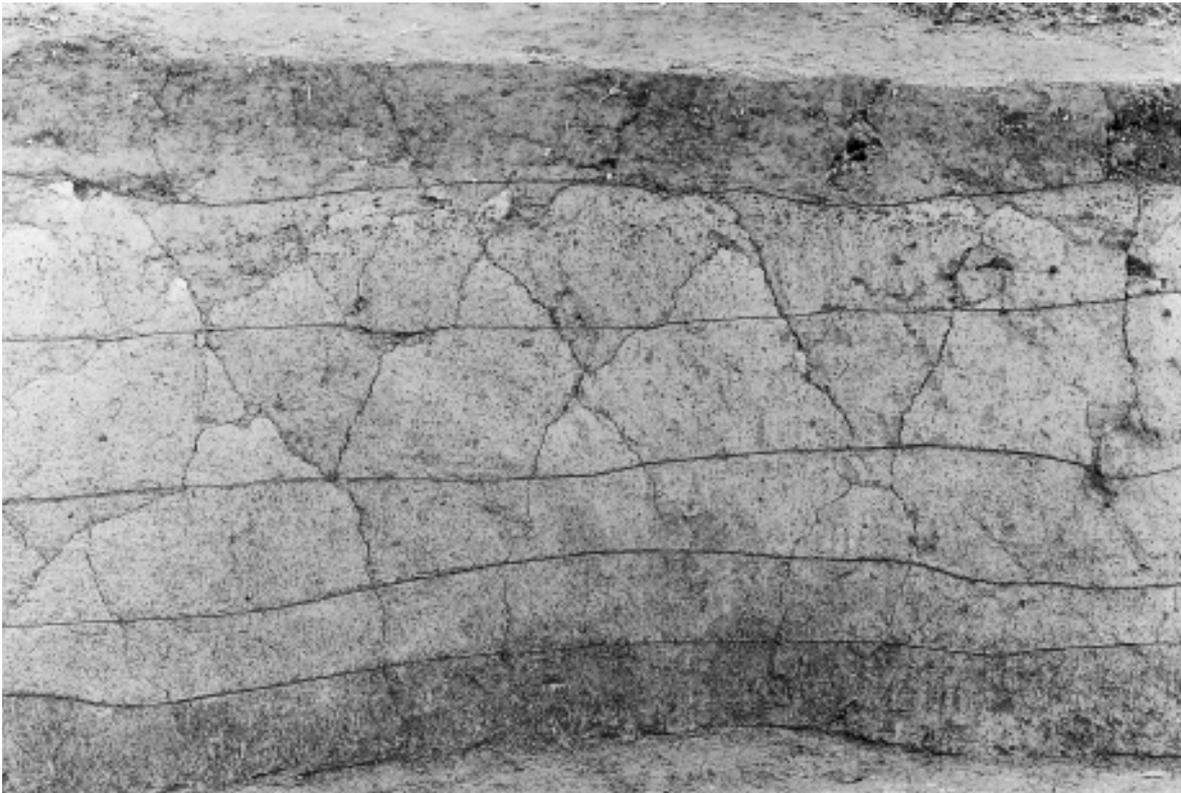


東壁セクション2

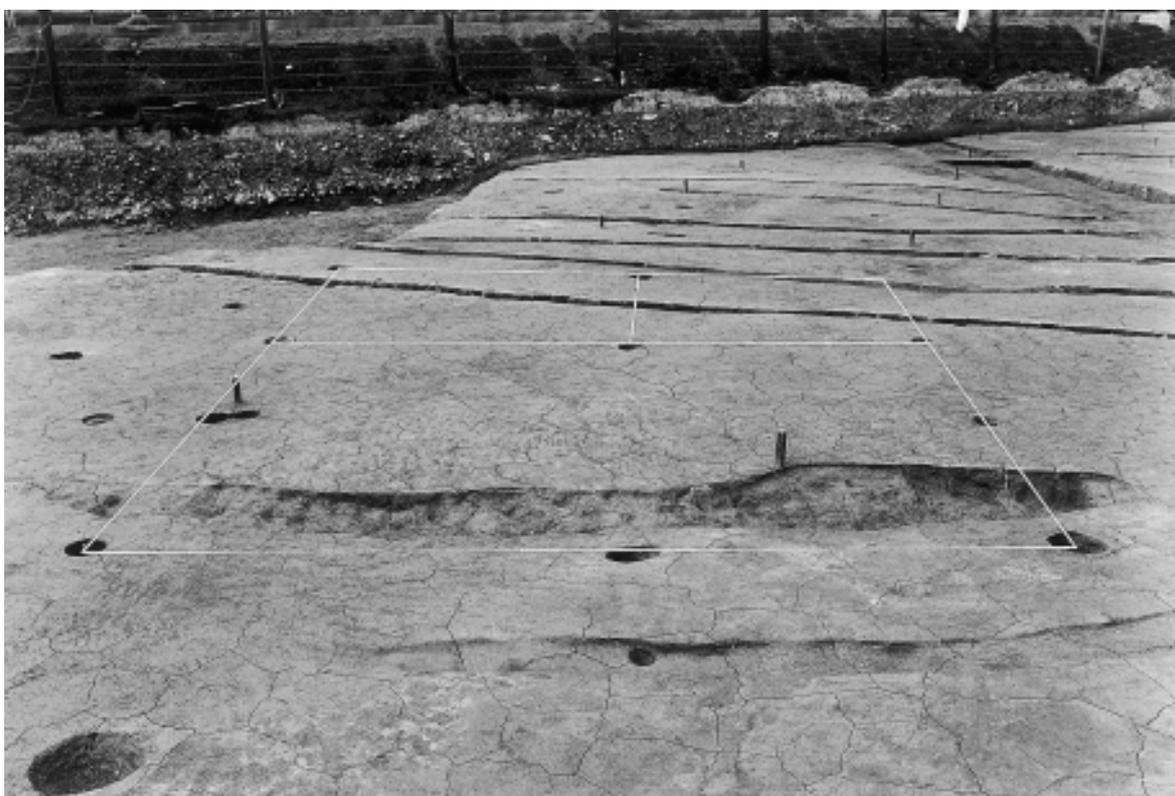
PL. 6



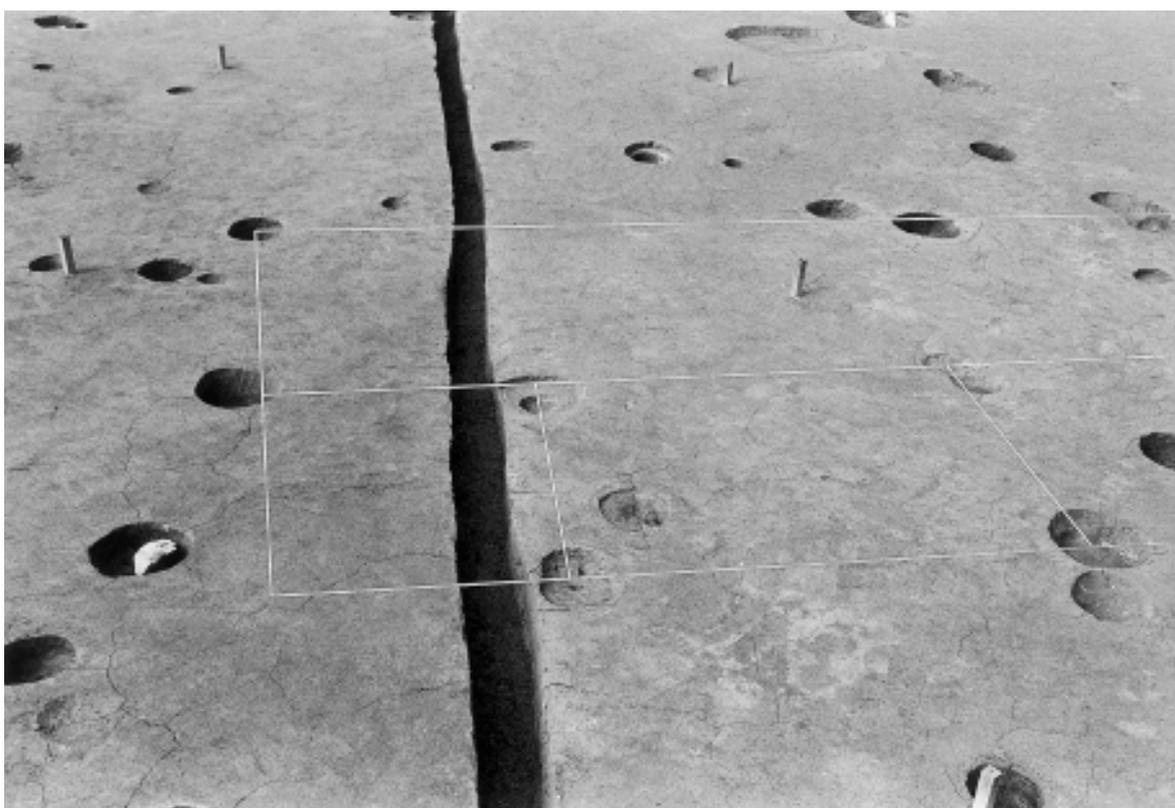
南壁セクション1



南壁セクション2



SB - 2(南より)



SB - 3(南東より)

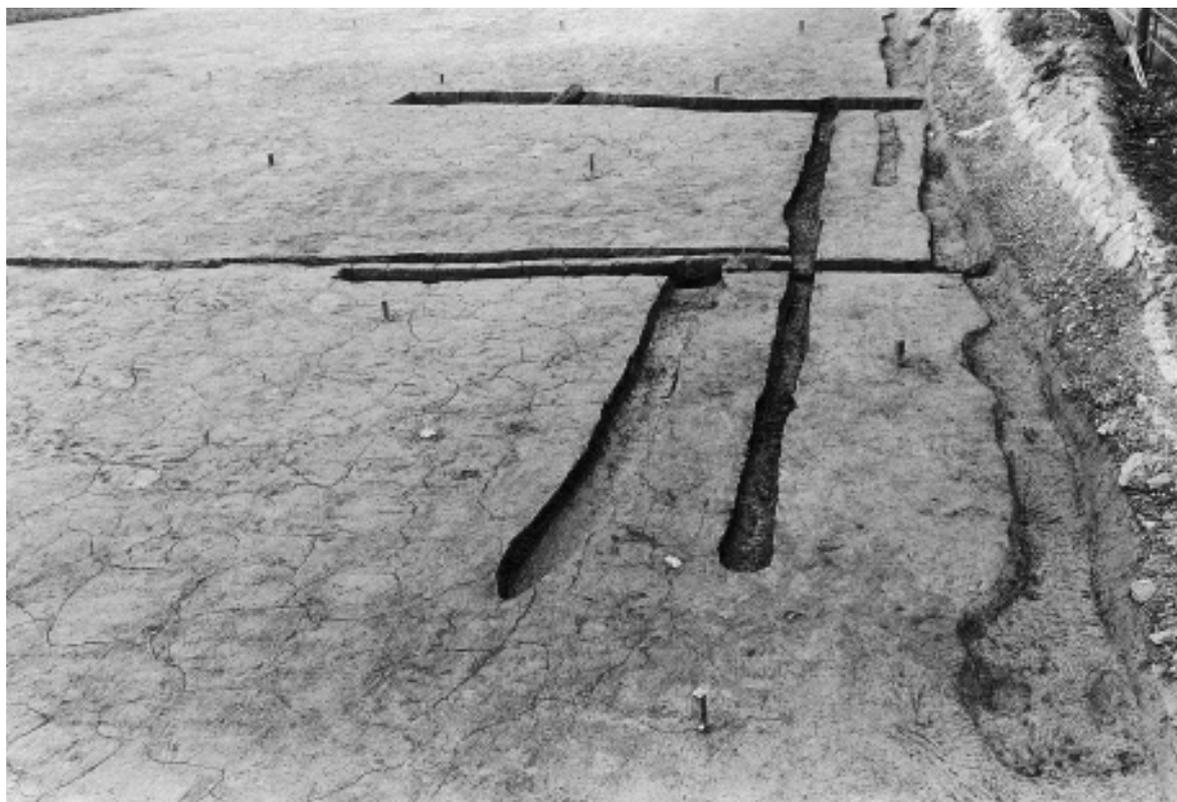
PL. 8



SB - 5(西より)



SA - 1~4(西より)

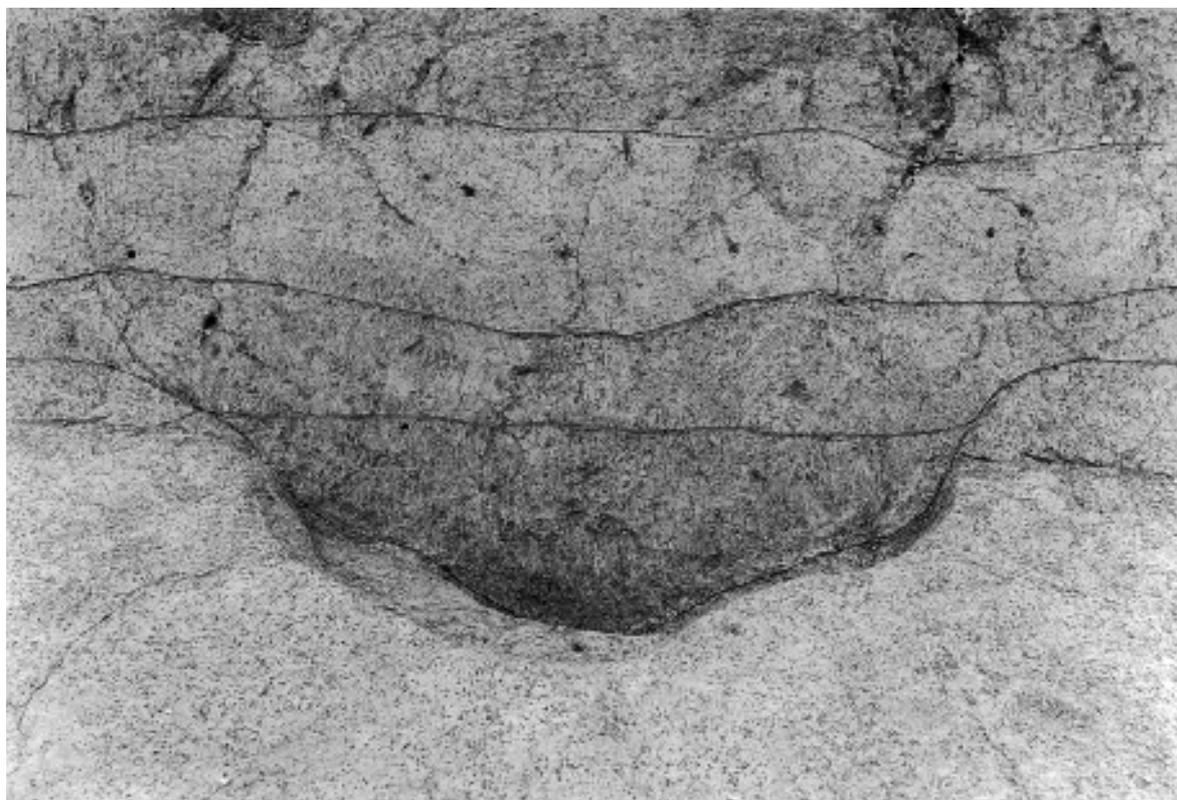


SK - 1 ,SD - 1~3(南より)



SK - 9 ,SD - 11(西より)

PL. 10



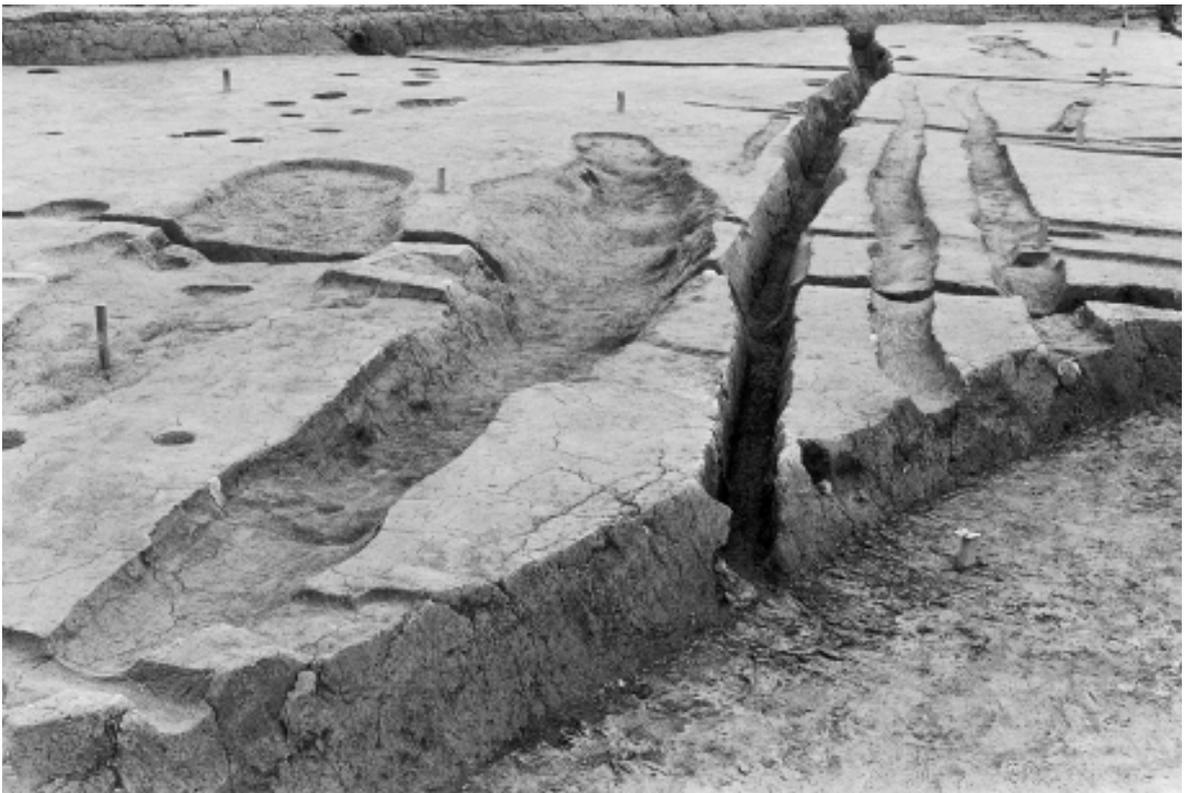
SK - 14(北より)



SK - 16 ,SD - 15~17(西より)



SD - 6 ~ 8 (西より)

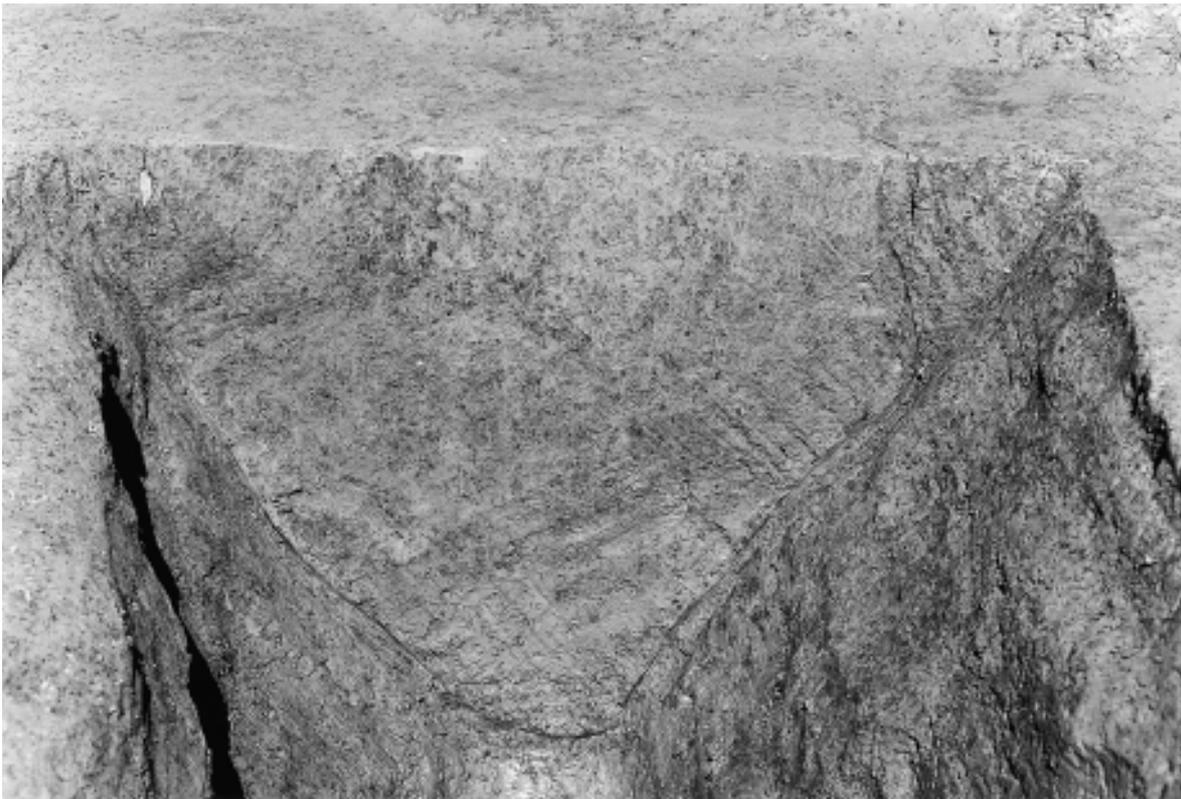


SD - 11・12 (北より)

PL. 12



SD - 11(南より)



SD - 12(南より)



SK - 3 , SS - 1(北西より)



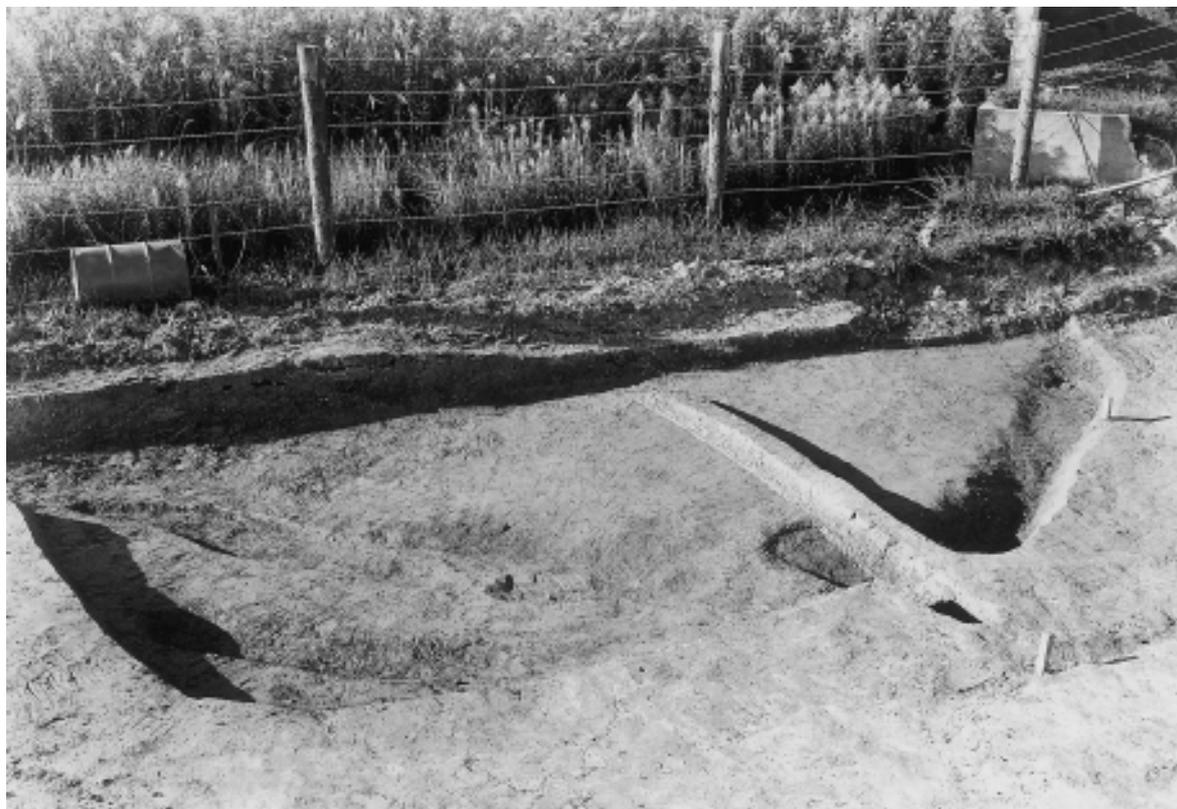
SS - 1(南より)



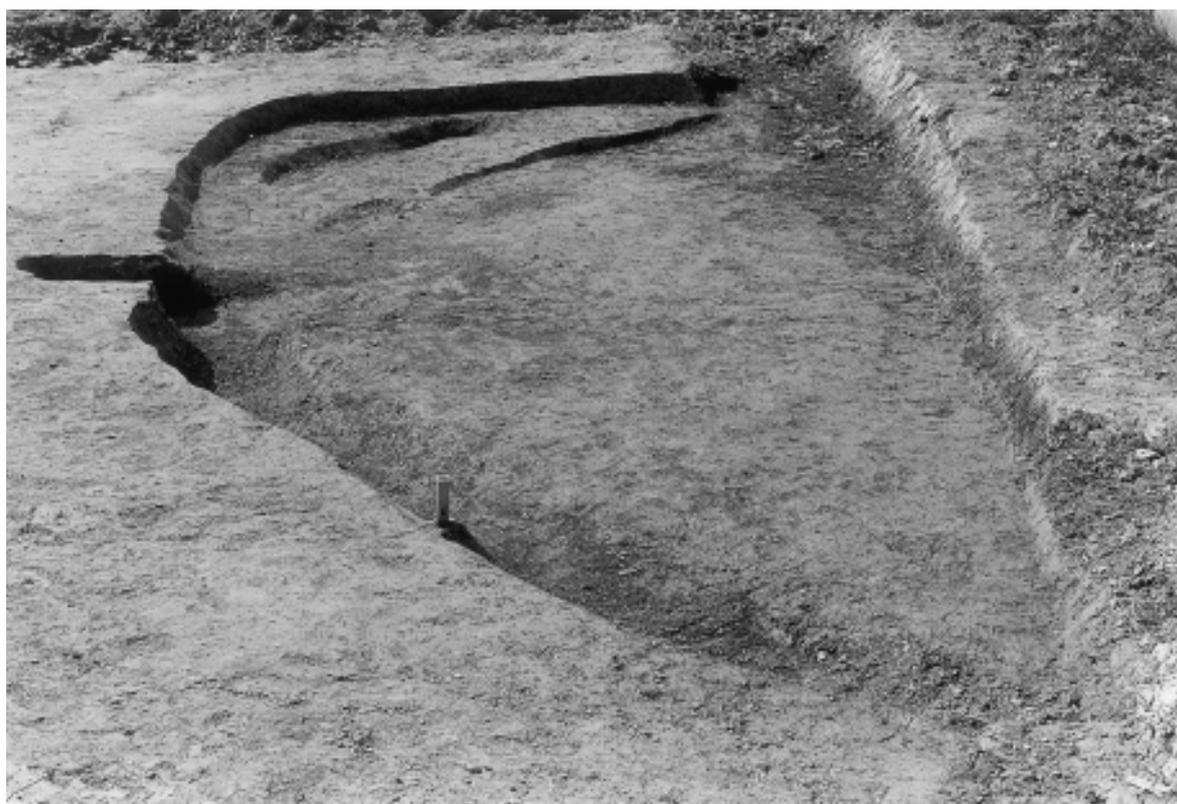
SU - 1~4(西より)



SU - 1~4(北より)



SX - 1セクション(南西より)



SX - 1完掘状態(東より)



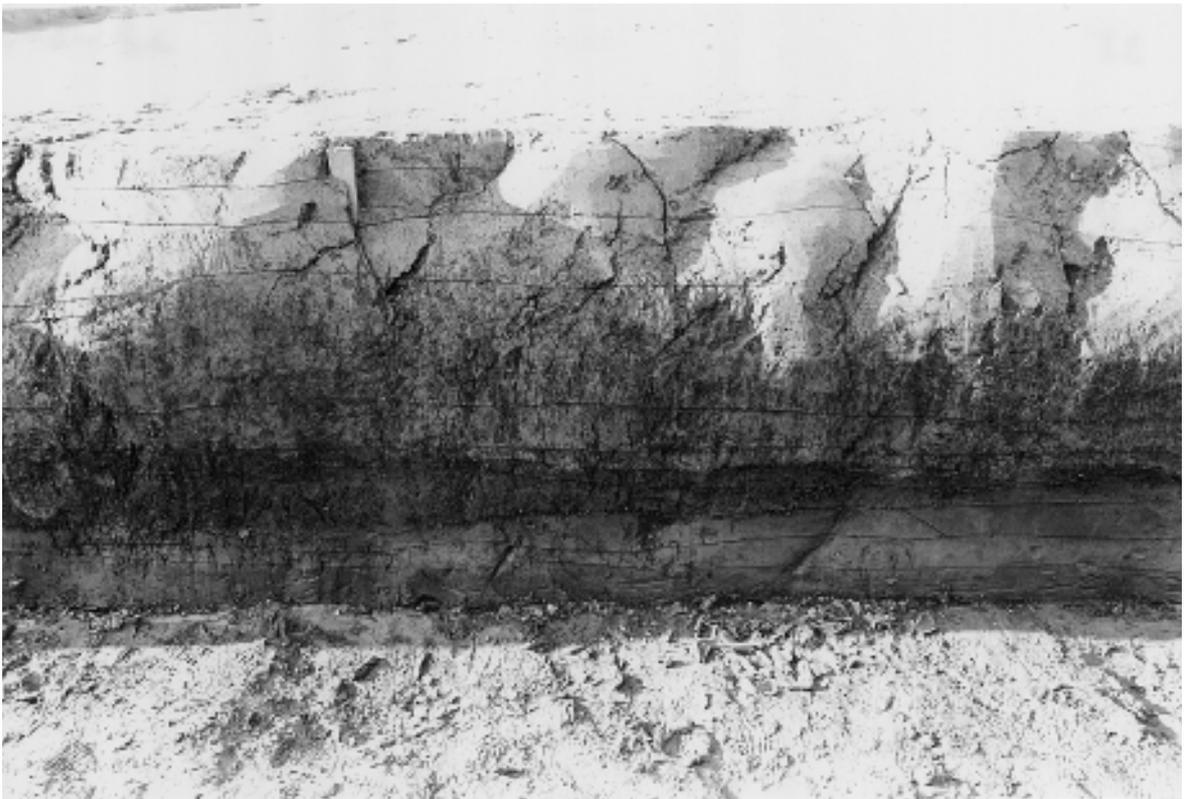
東西トレンチ完掘状態(西より)



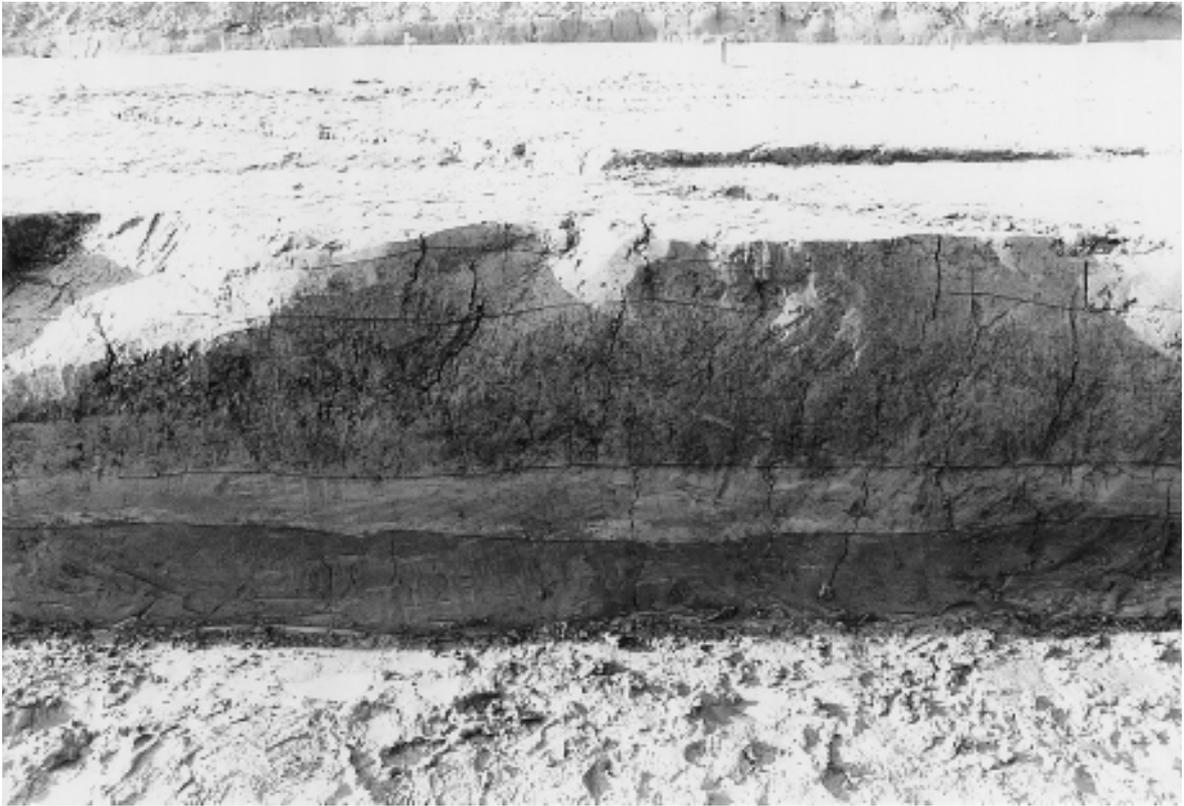
トレンチ中央部北壁セクション1



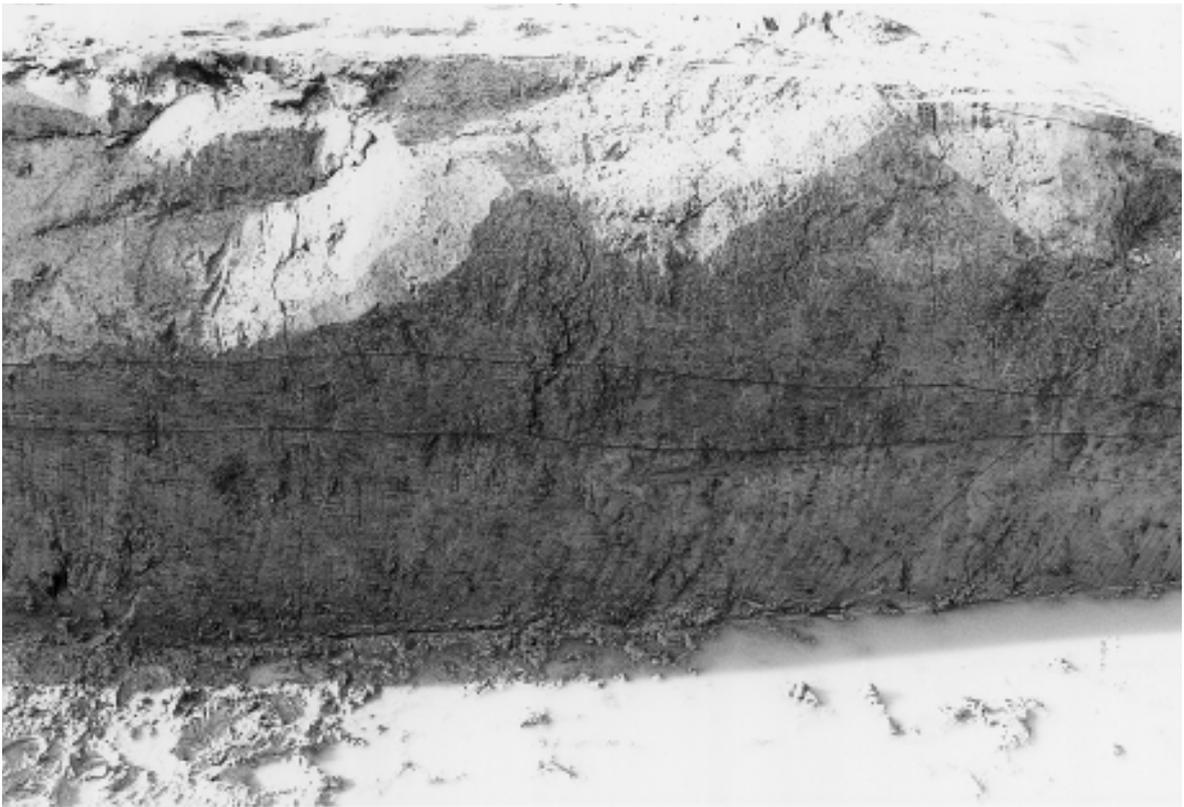
トレンチ中央部北壁セクション2



トレンチ中央部北壁セクション3



トレンチ東部北壁セクション



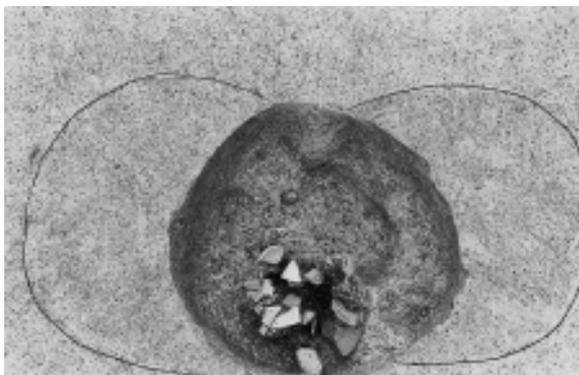
トレンチ西部北壁セクション



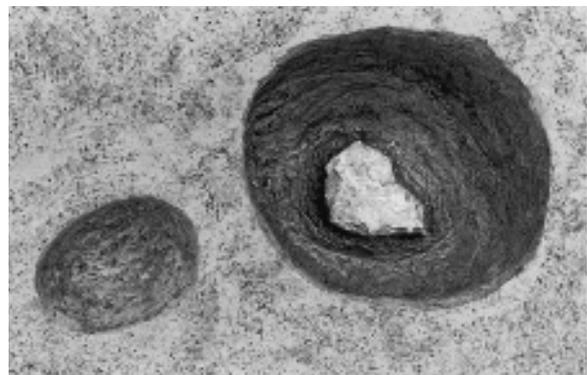
第 層瓦質土器(46)出土状態



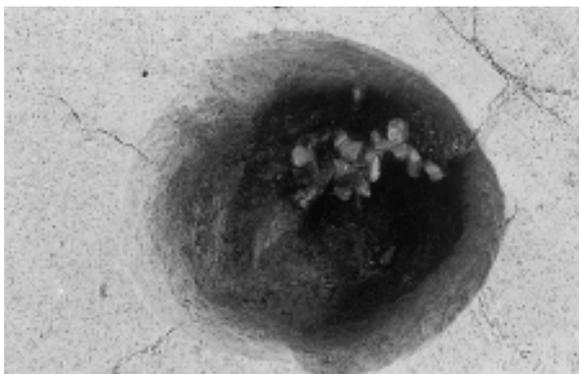
第 層瓦器(85)出土状態



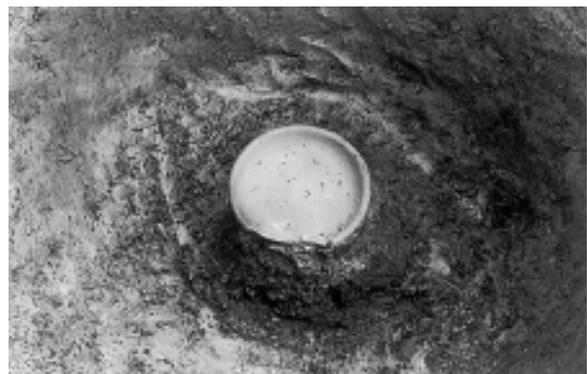
SB - 3土師質土器(103)出土状態



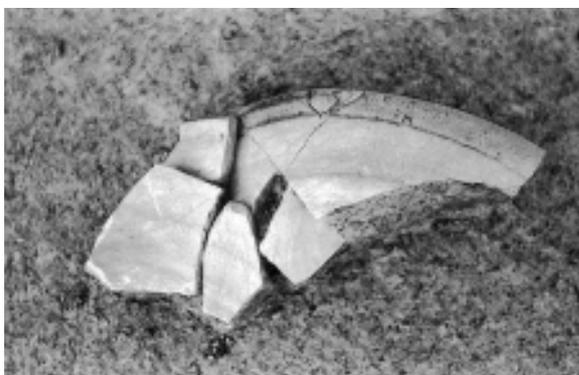
SB - 5礎板検出状態



SB - 9遺物出土状態



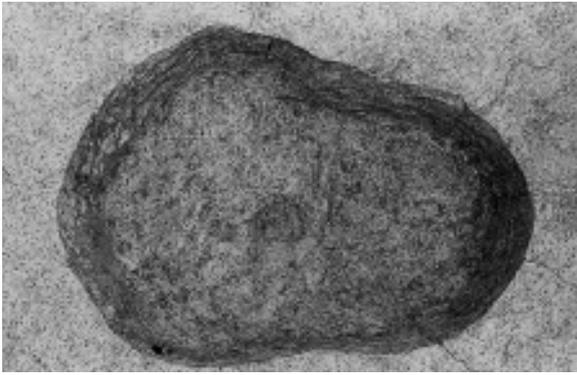
SA - 2土師質土器(113)出土状態



SK - 6東播系須恵器(115)出土状態



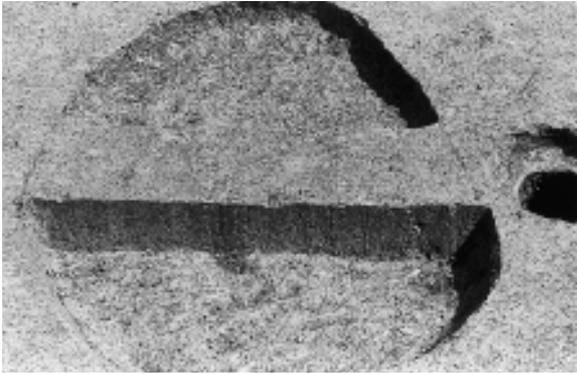
SK - 7(東より)



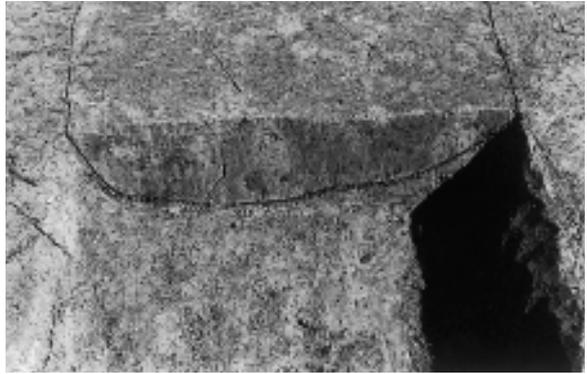
SK - 8(北より)



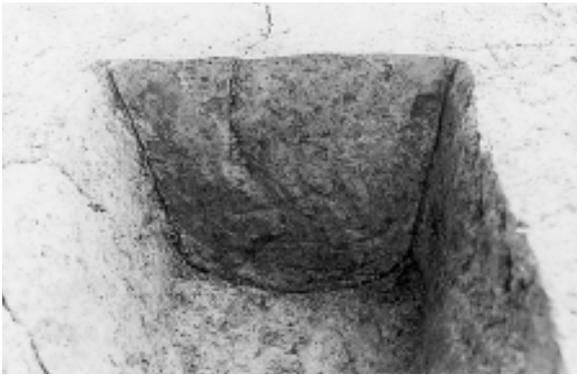
SK - 9(南より)



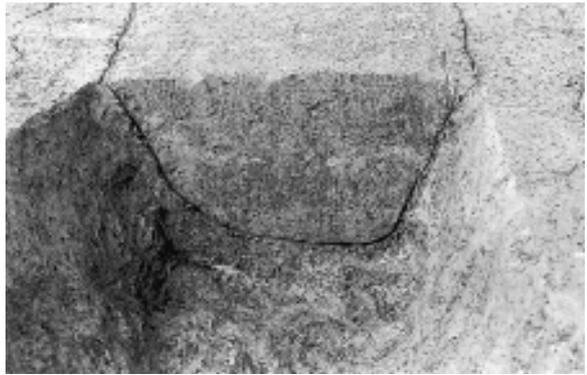
SK - 16(西より)



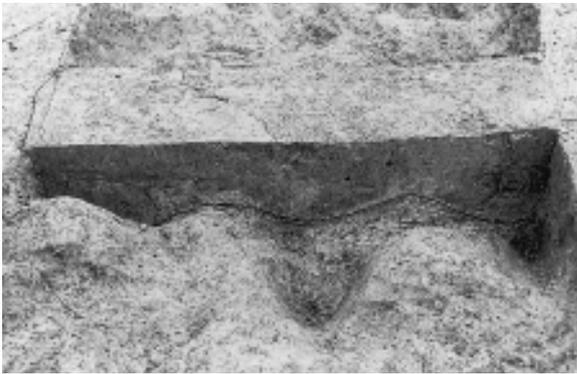
SD - 5(西より)



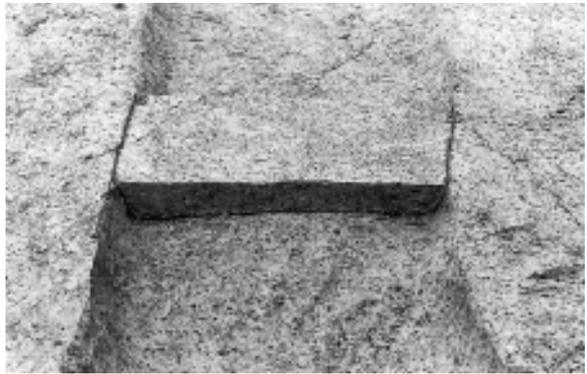
SD - 7(西より)



SD - 8(東より)



SD - 9(東より)



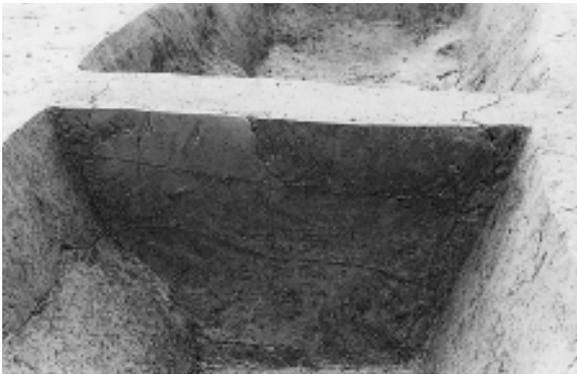
SD - 10(東より)



SD - 11(南より)



SD - 17瓦器(125)出土状態



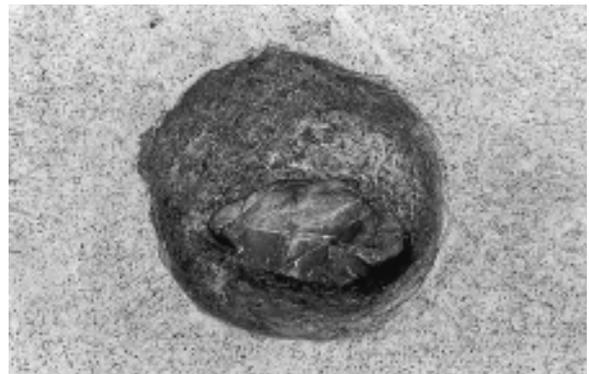
SD - 17(東より)



SD - 18(北より)



P - 1土師質土器(126)出土状態



柱穴礎板検出状態



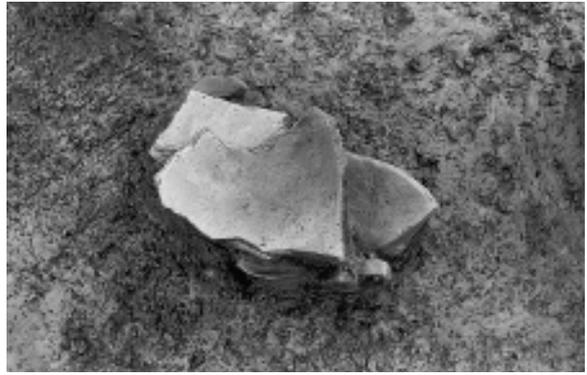
SS - 1土師質土器(147)出土状態



SS - 1土師質土器(150)出土状態



SS - 1土師質土器(161)出土状態



SS - 1土師質土器(163)出土状態



SS - 1土師質土器出土状態1



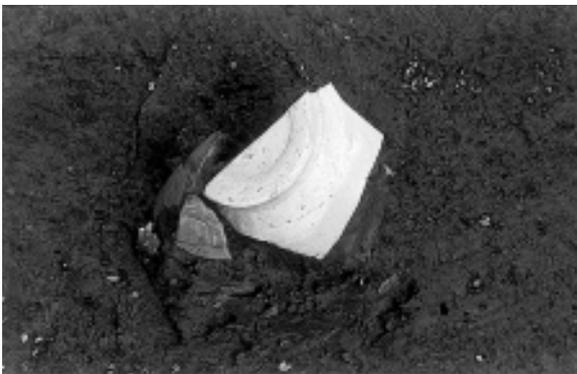
SS - 1土師質土器出土状態2



SS - 1土師質土器出土状態3



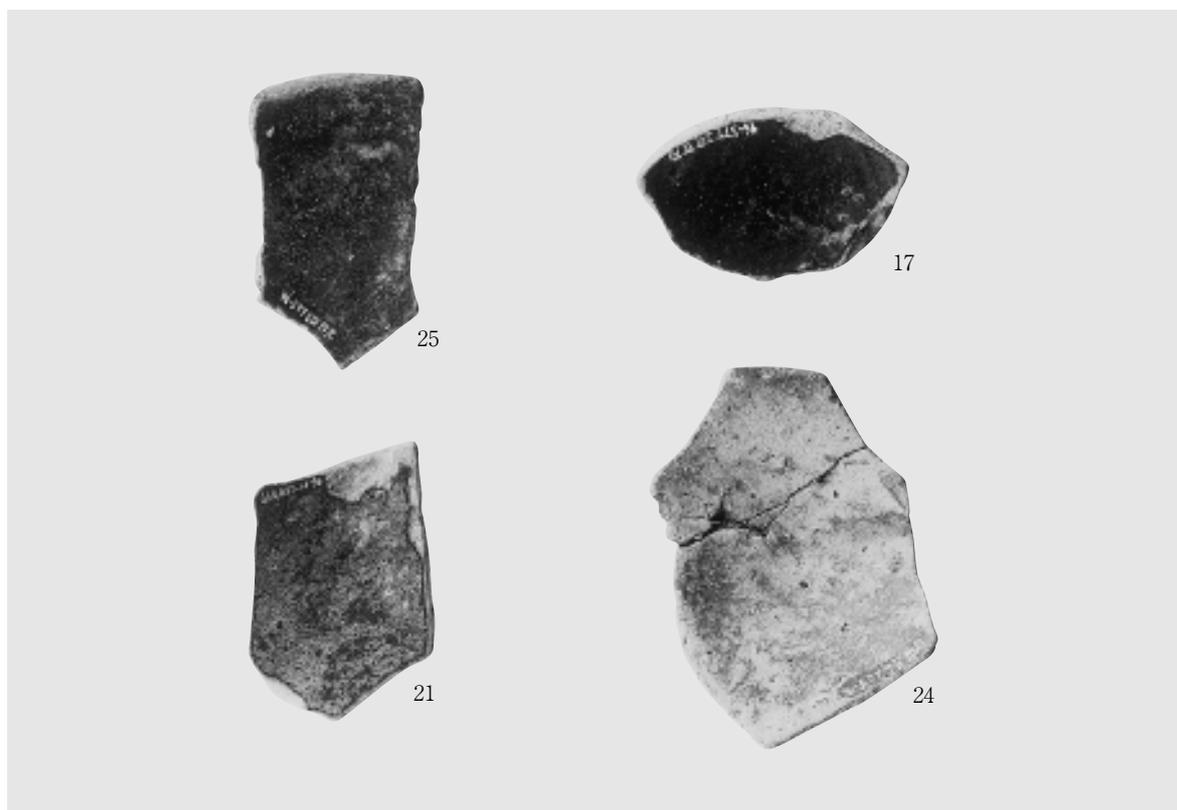
SS - 1遺物出土状態



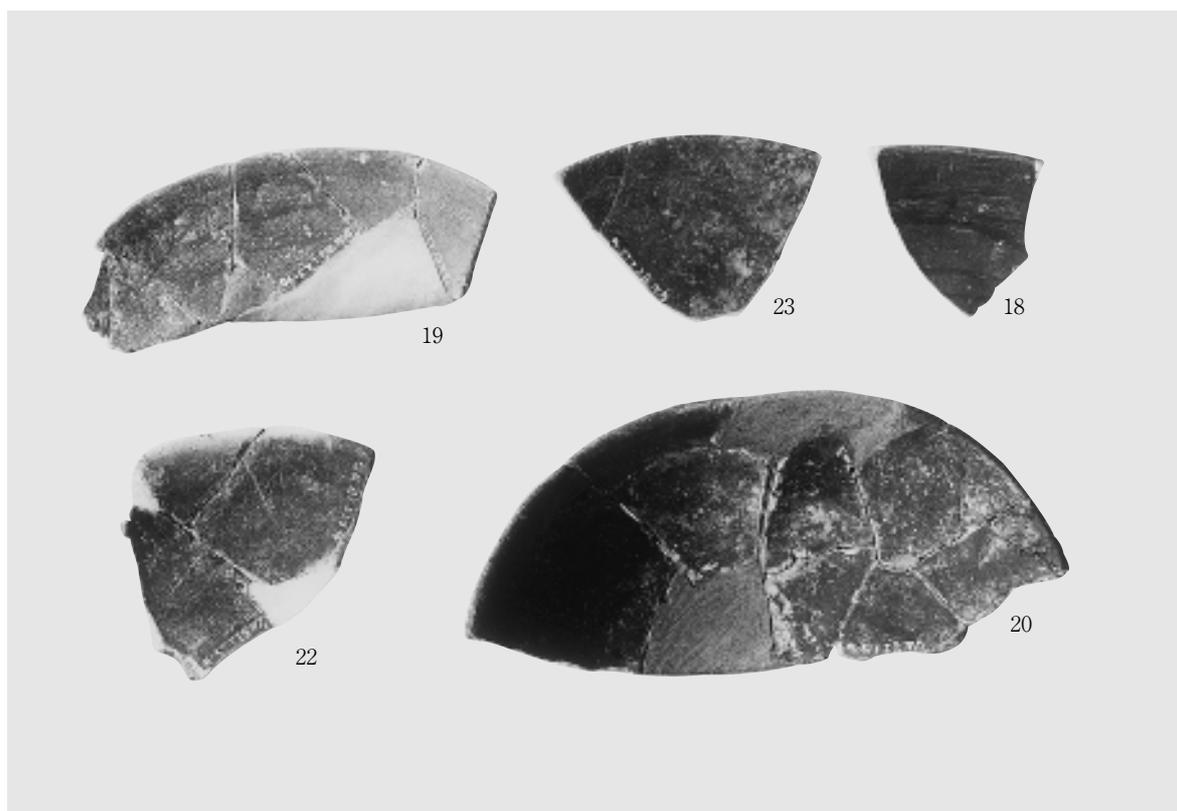
SS - 1白磁(190)出土状態



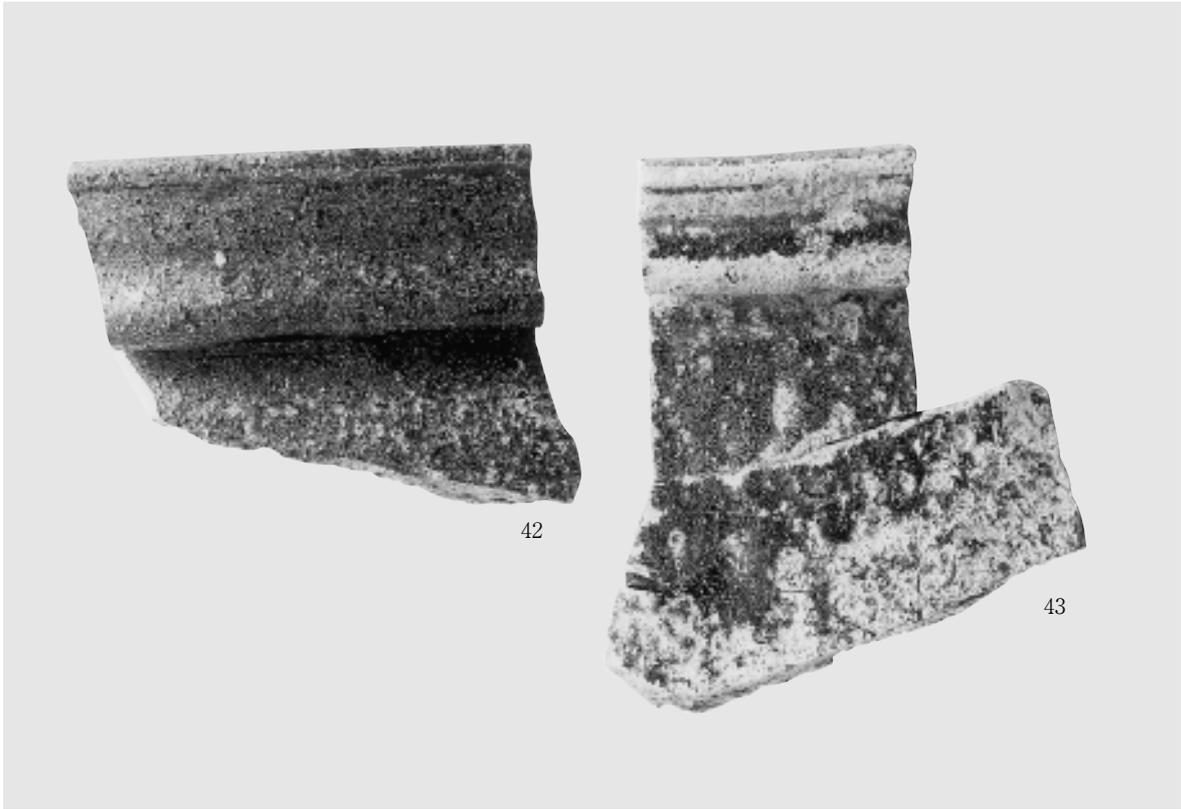
SD - 24(東より)



瓦器(椀)



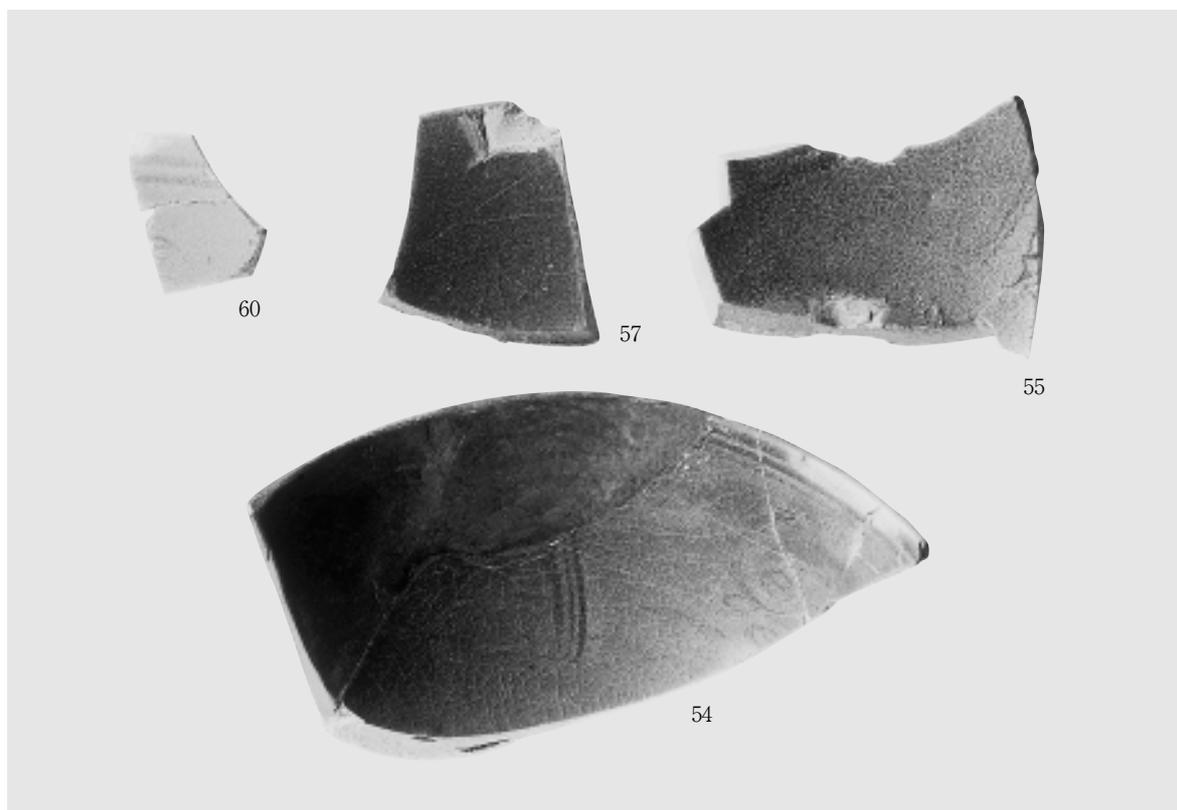
瓦器(椀)



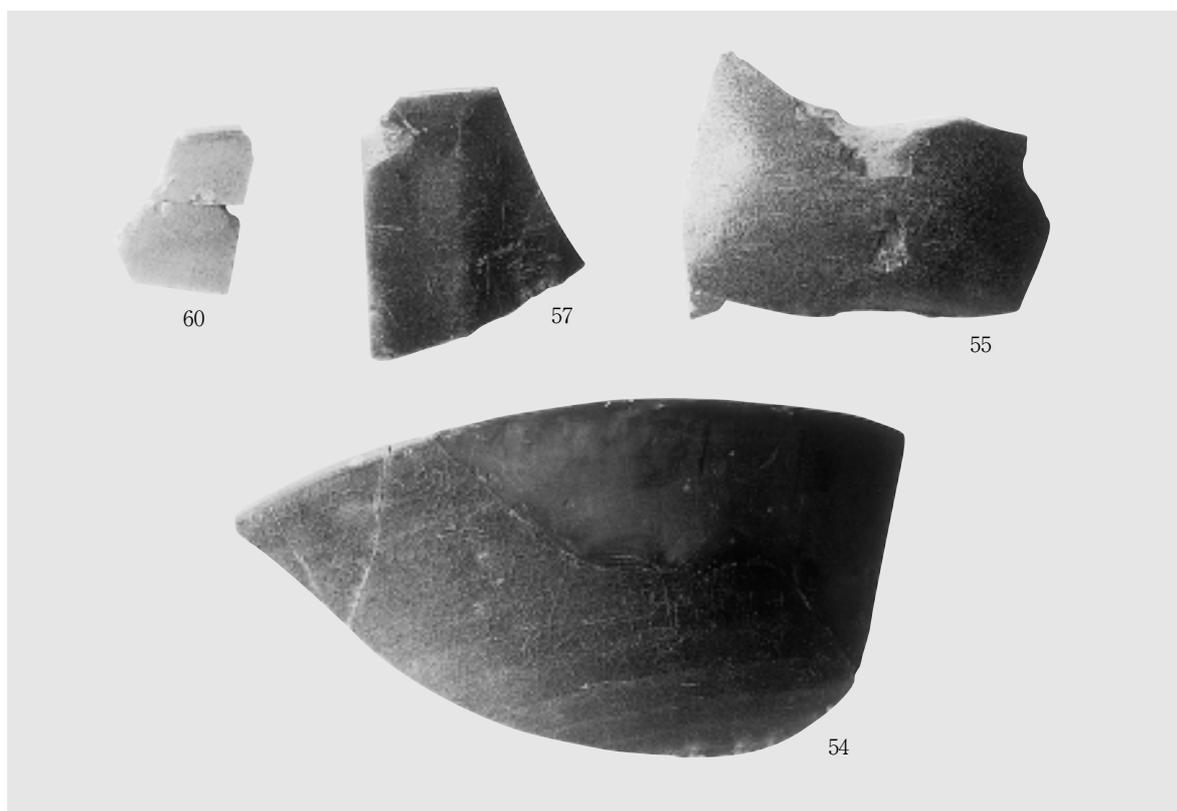
常滑焼(甕)



瓦質土器(甕)



青磁(碗)内面



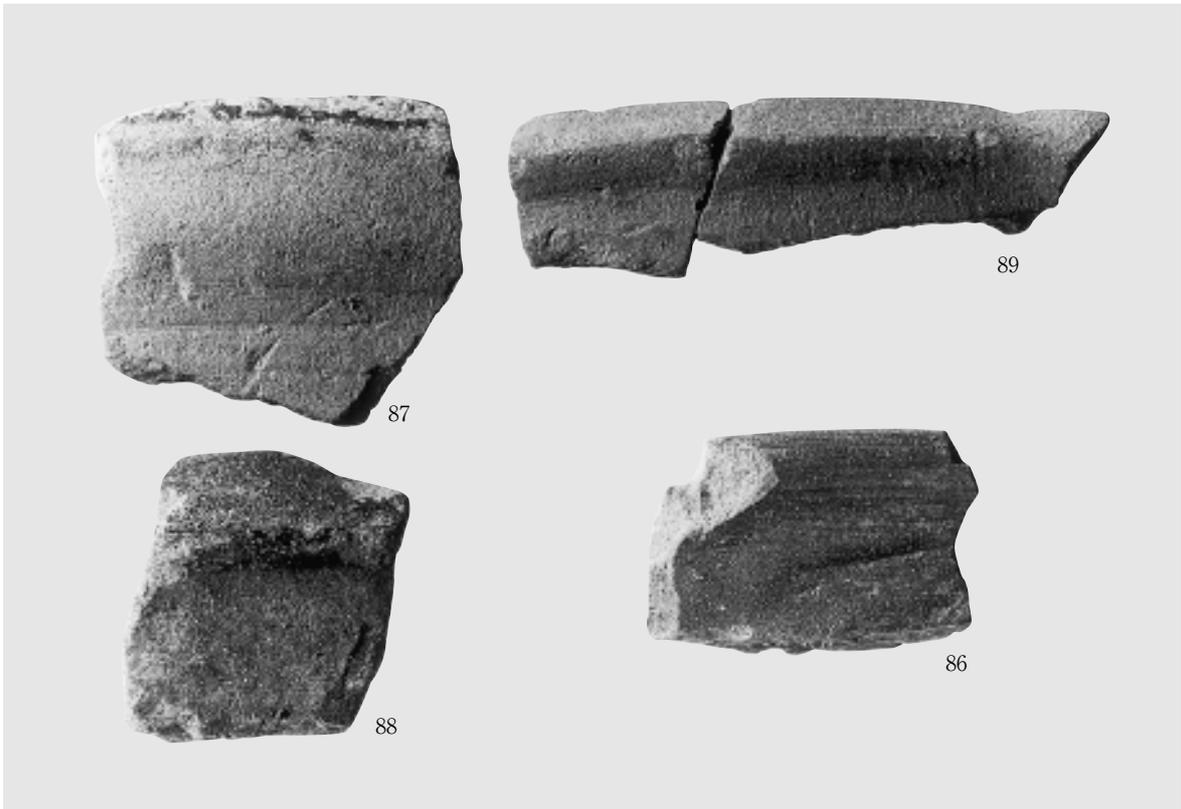
青磁(碗)外面



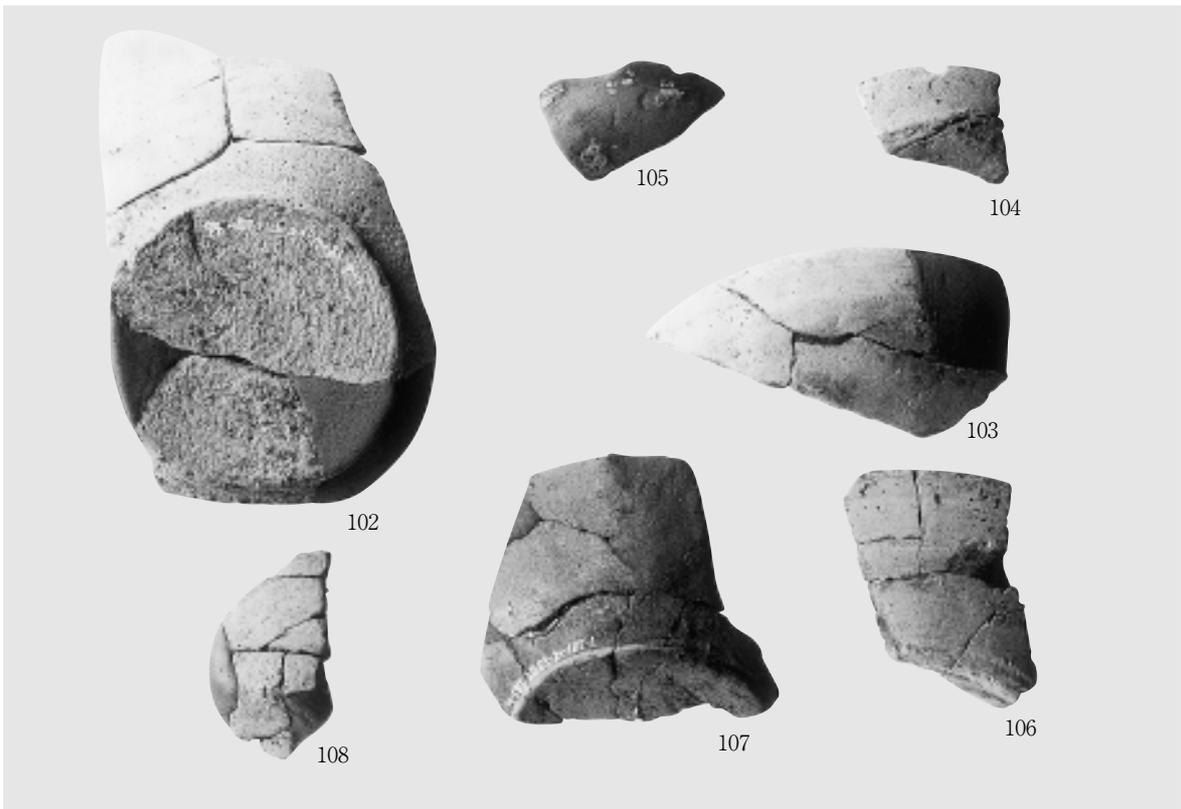
青磁(碗)



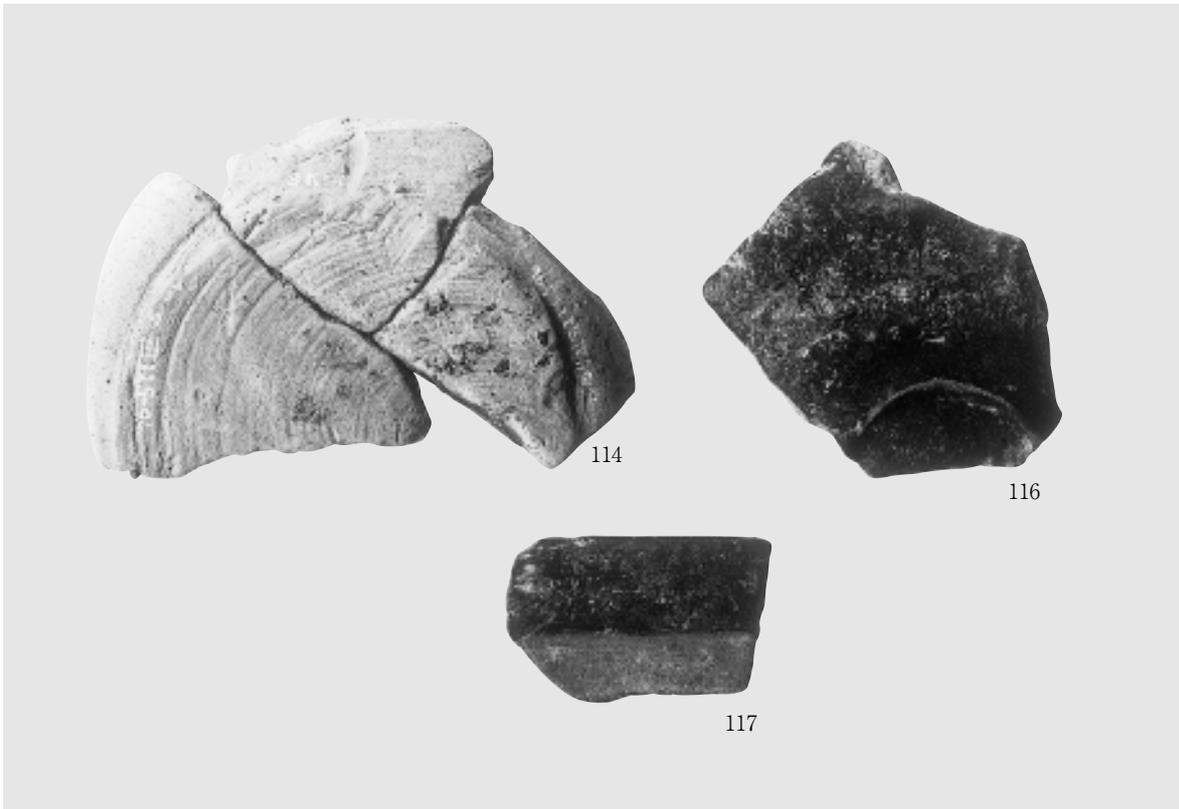
土師質土器(小皿)



東播系須惠器(片口鉢),須惠質土器(甕)



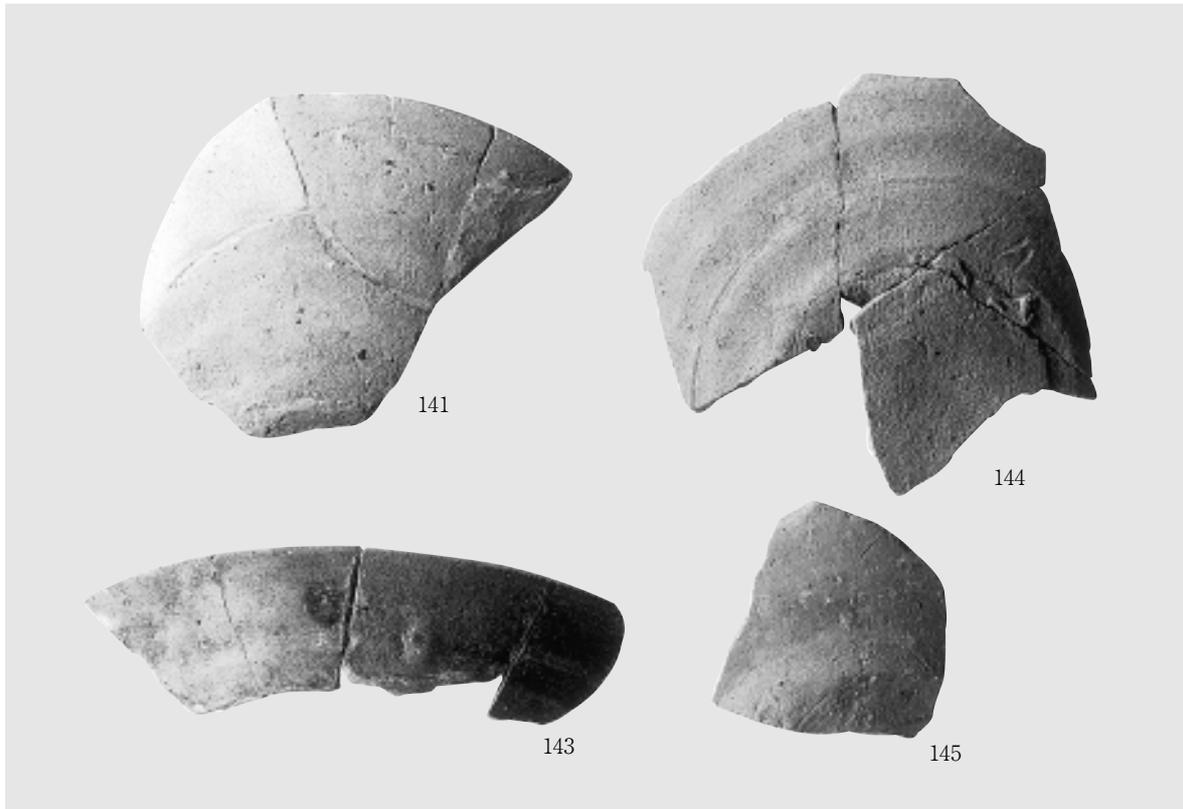
土師質土器(杯,小皿,皿,椀)



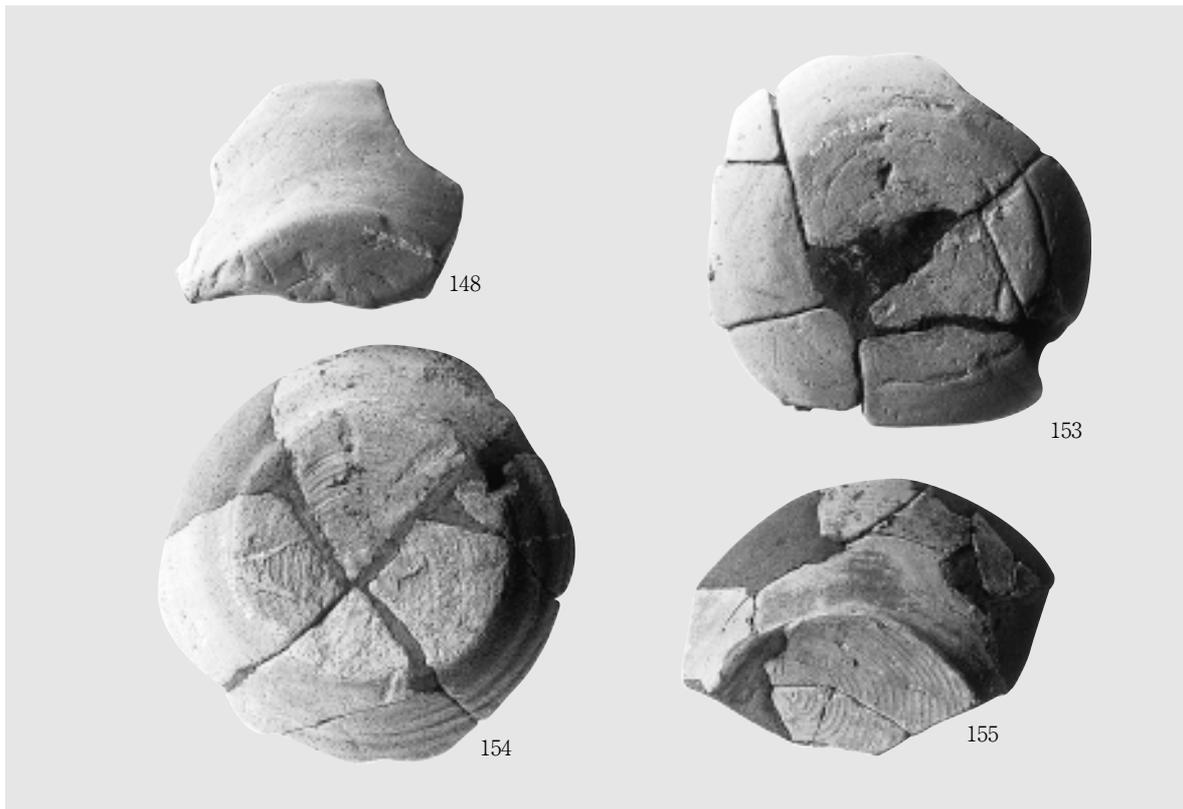
瓦器(碗),東播系須恵器(片口鉢),土師質土器(杯)



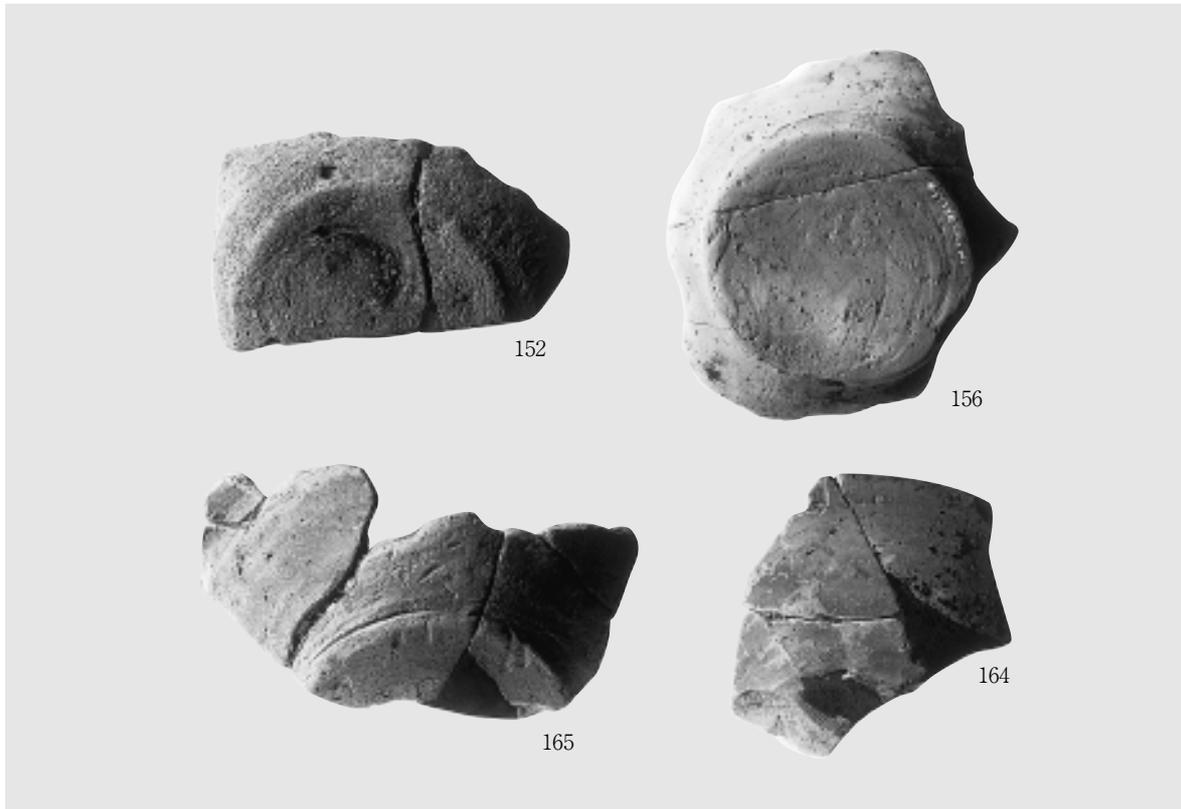
東播系須恵器(片口鉢)



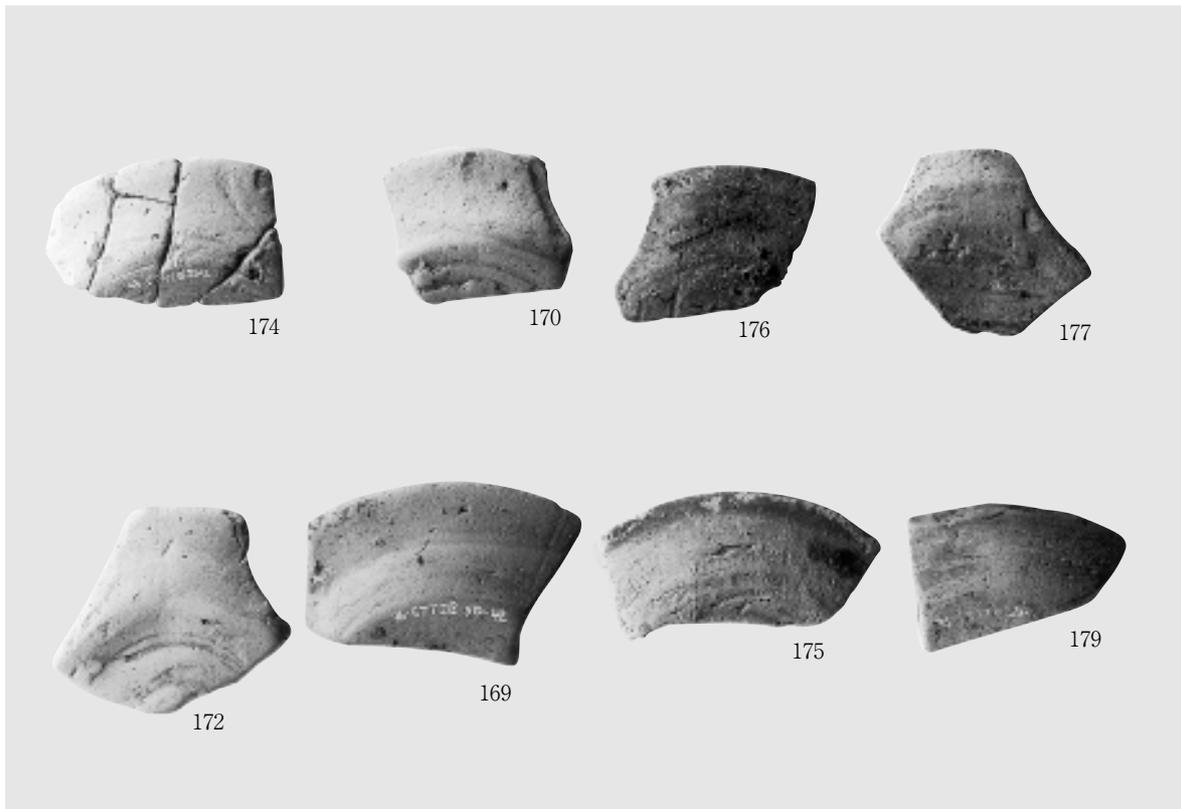
東播系須恵器(椀)



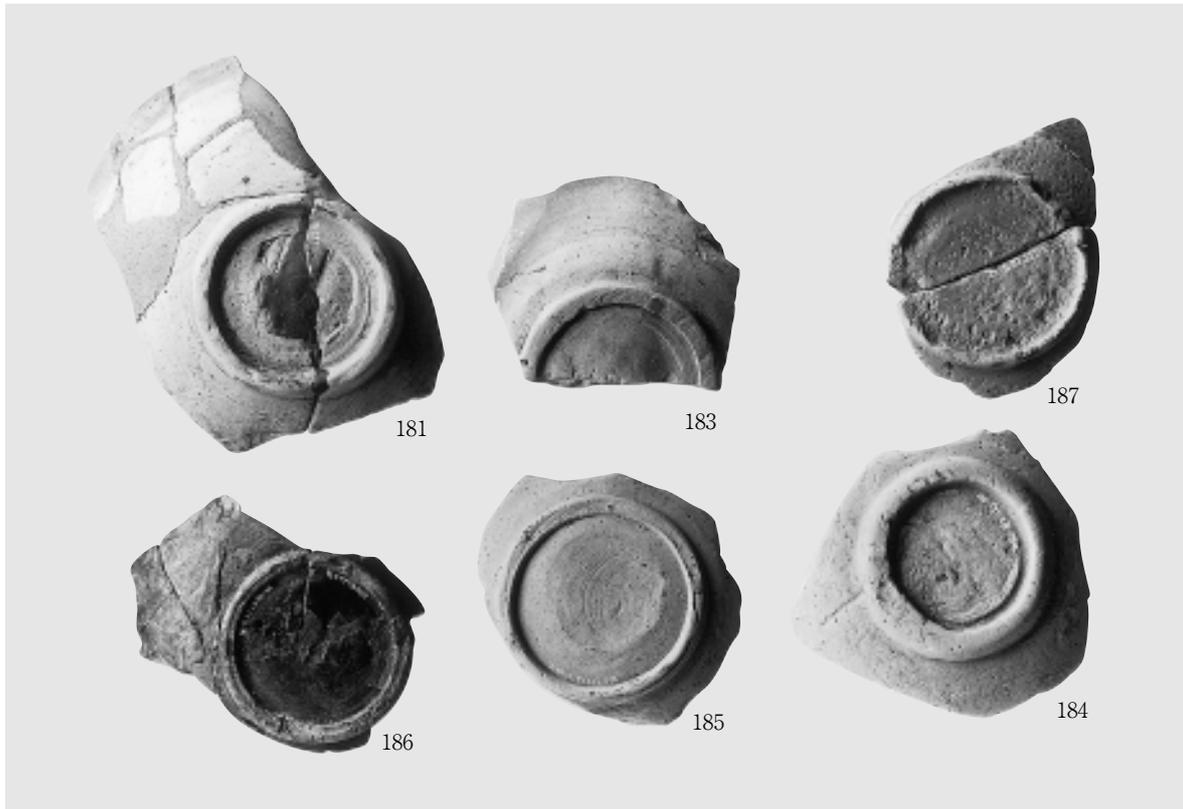
土師質土器(杯)



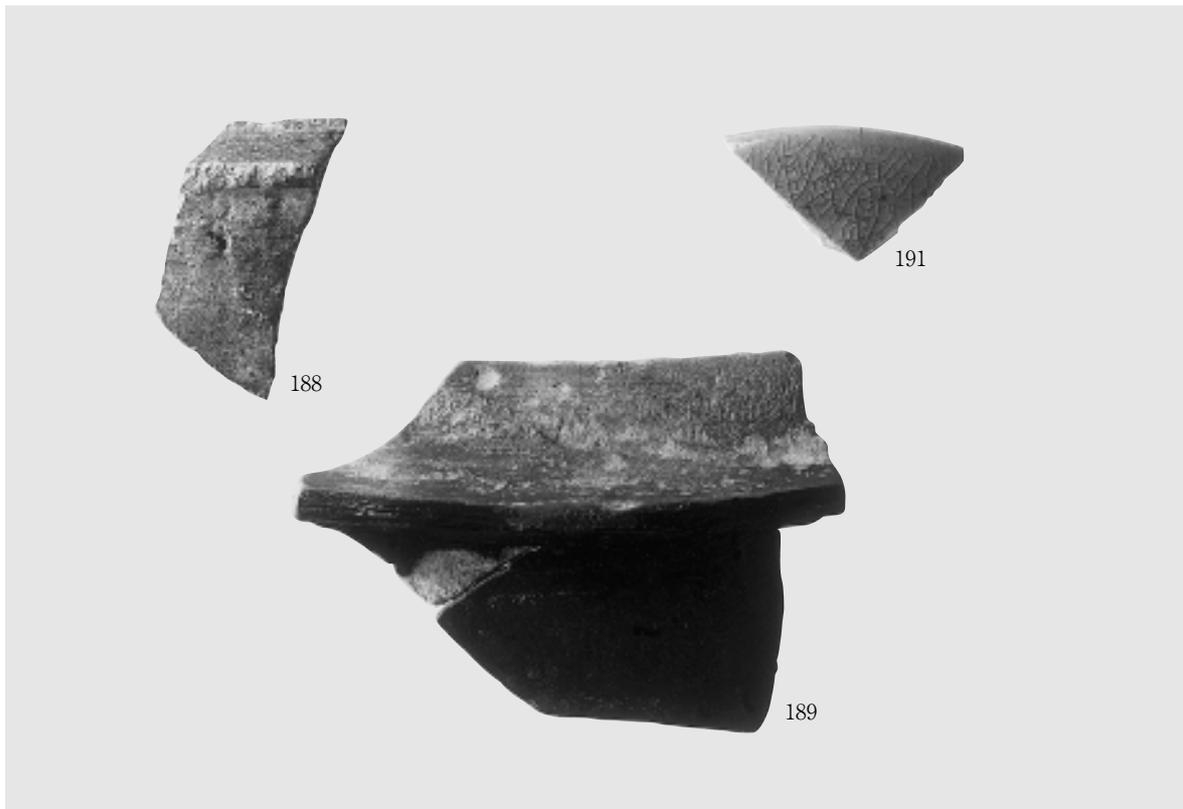
土師質土器(杯)



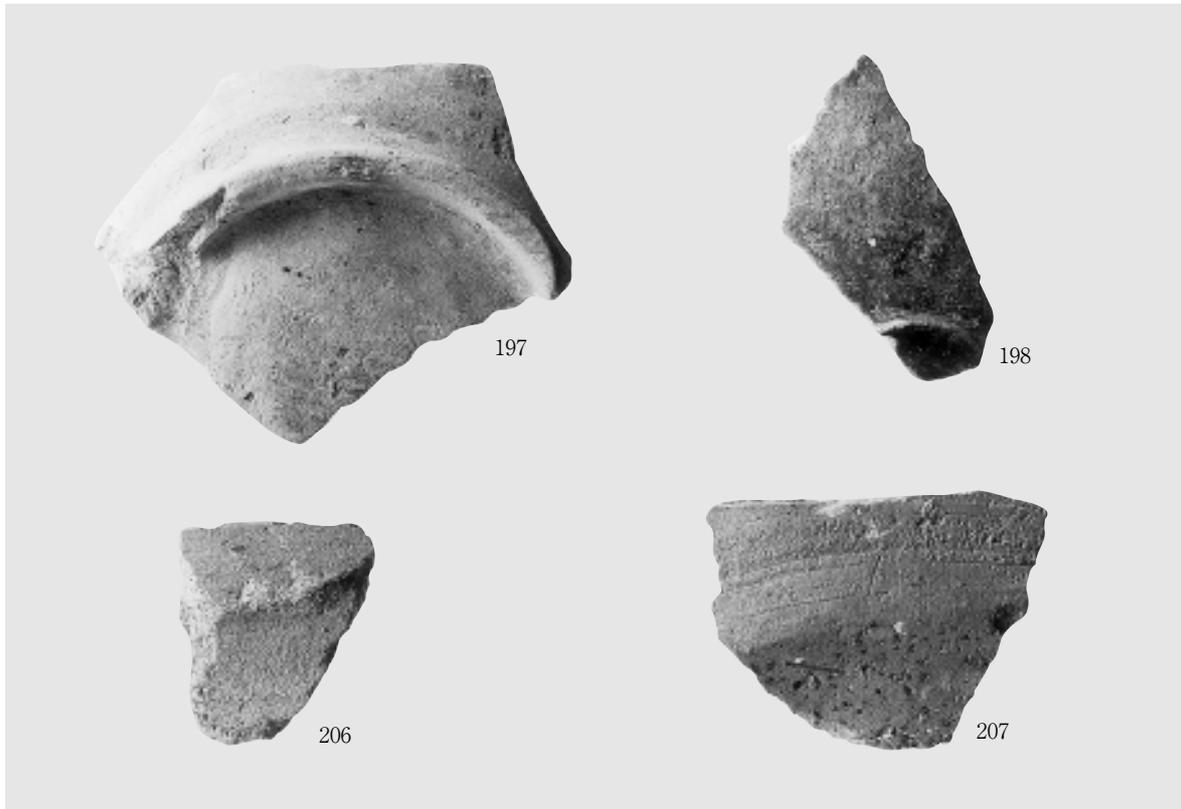
土師質土器(小皿)



土師質土器(碗)



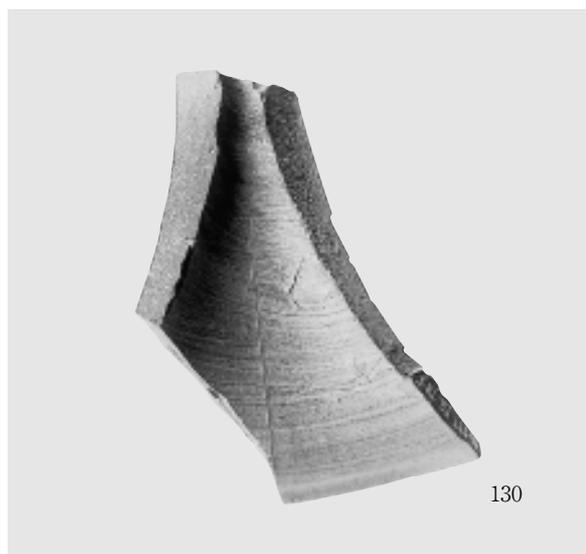
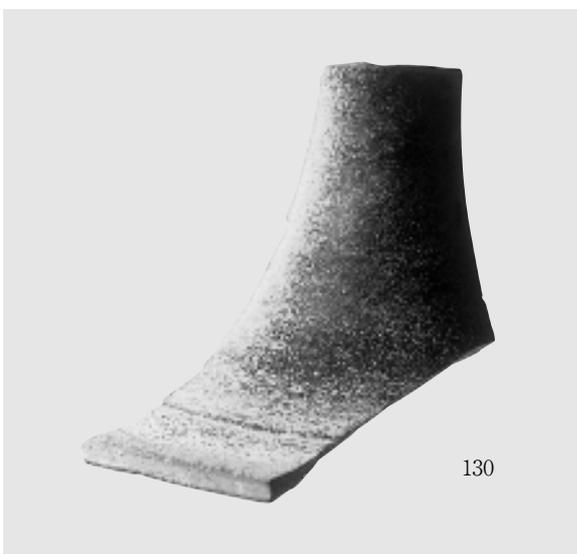
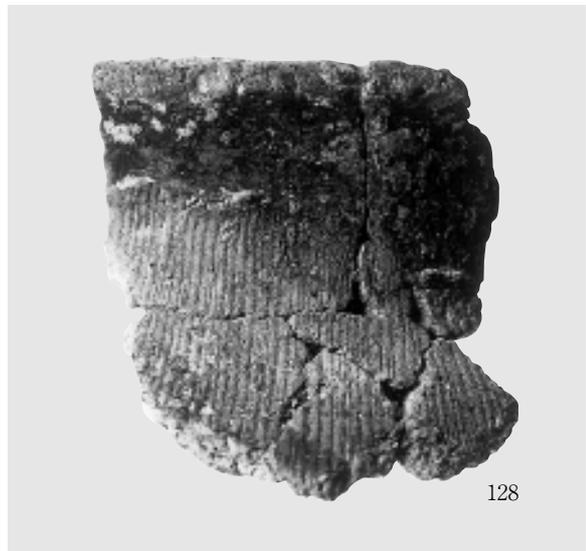
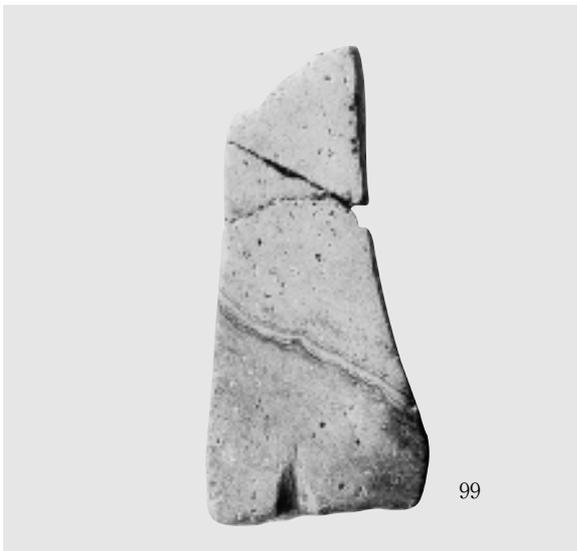
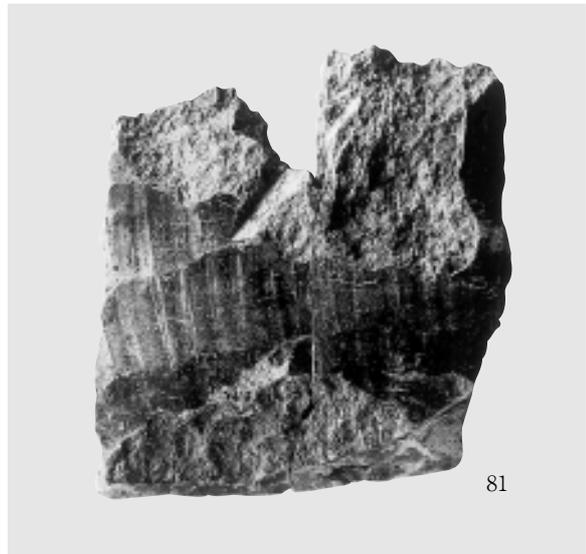
備前焼(擂鉢),瓦質土器(羽釜),青磁(皿)



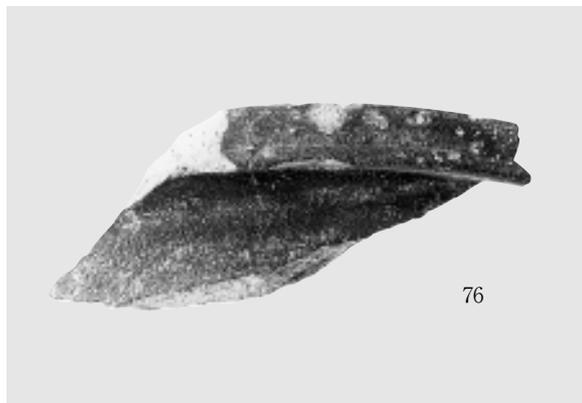
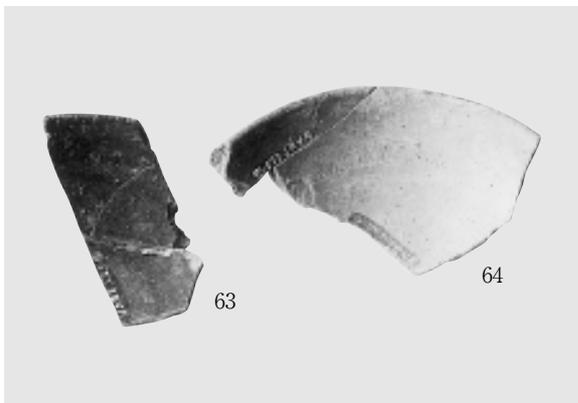
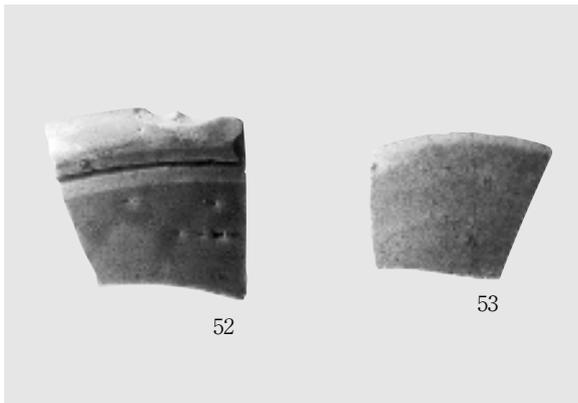
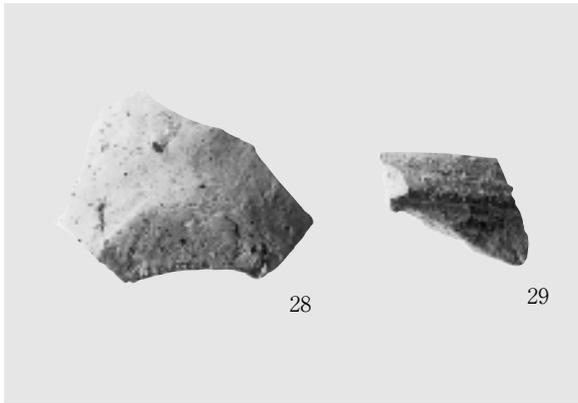
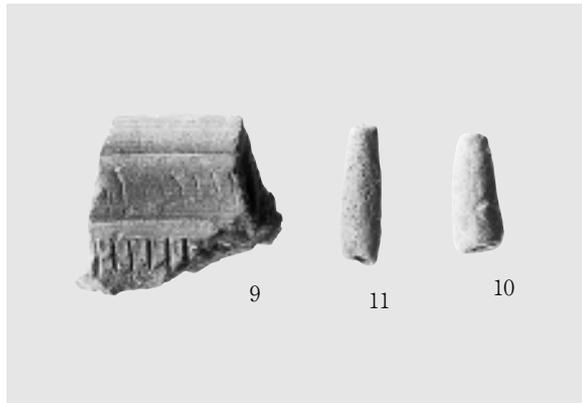
須惠器(杯),瓦器(椀),東播系須惠器(片口鉢)



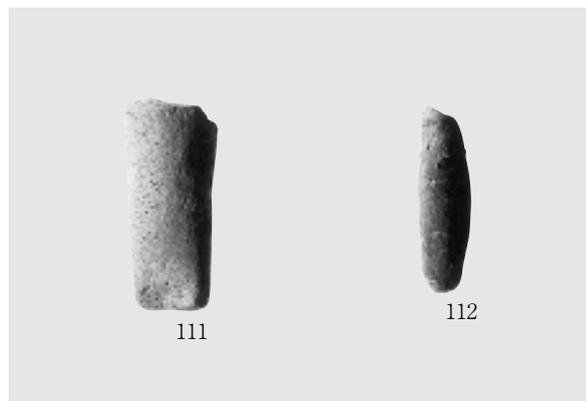
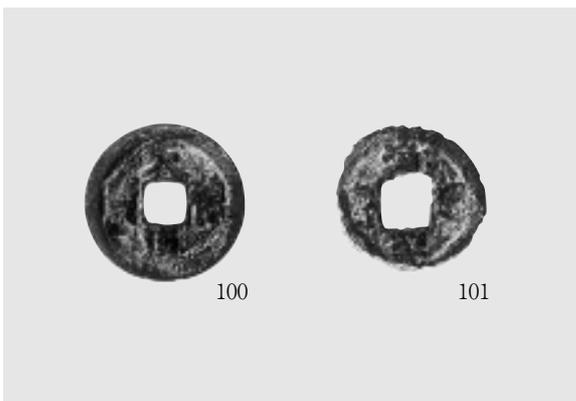
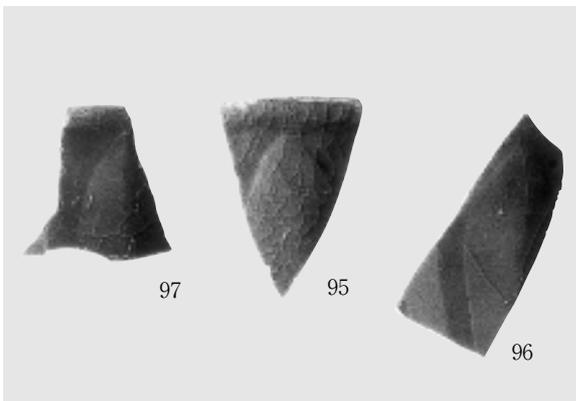
土師質土器(杯,小皿)



弥生土器(甕),須恵器(高杯),土師質土器(杯),石製品(石鍋,砥石)



瓦器(椀),東播系須惠器(椀,片口鉢),土師質土器(羽釜),堺・明石産焼締陶器(搗鉢),近世陶器(鉢),
瓦質土器(甕),白磁(碗,皿),土製品(土錘)



瓦器(椀),土師質土器(杯,羽釜),瓦質土器(三足羽釜),青磁(碗),金屬製品(刀子),土製品(土錘),古錢



瓦器(碗,小皿),土師質土器(杯,小皿),瓦質土器(羽釜),瀬戸・美濃系磁器(皿)



弥生土器(鉢),土師器(甕),瓦器(椀),東播系須恵器(椀),土師質土器(杯,小皿)



土師質土器(杯,小皿,椀)

林口遺跡第 調査地区 (林口遺跡 区)





調査前全景(東より)



調査前全景(西より)



遺構検出状態(東より)



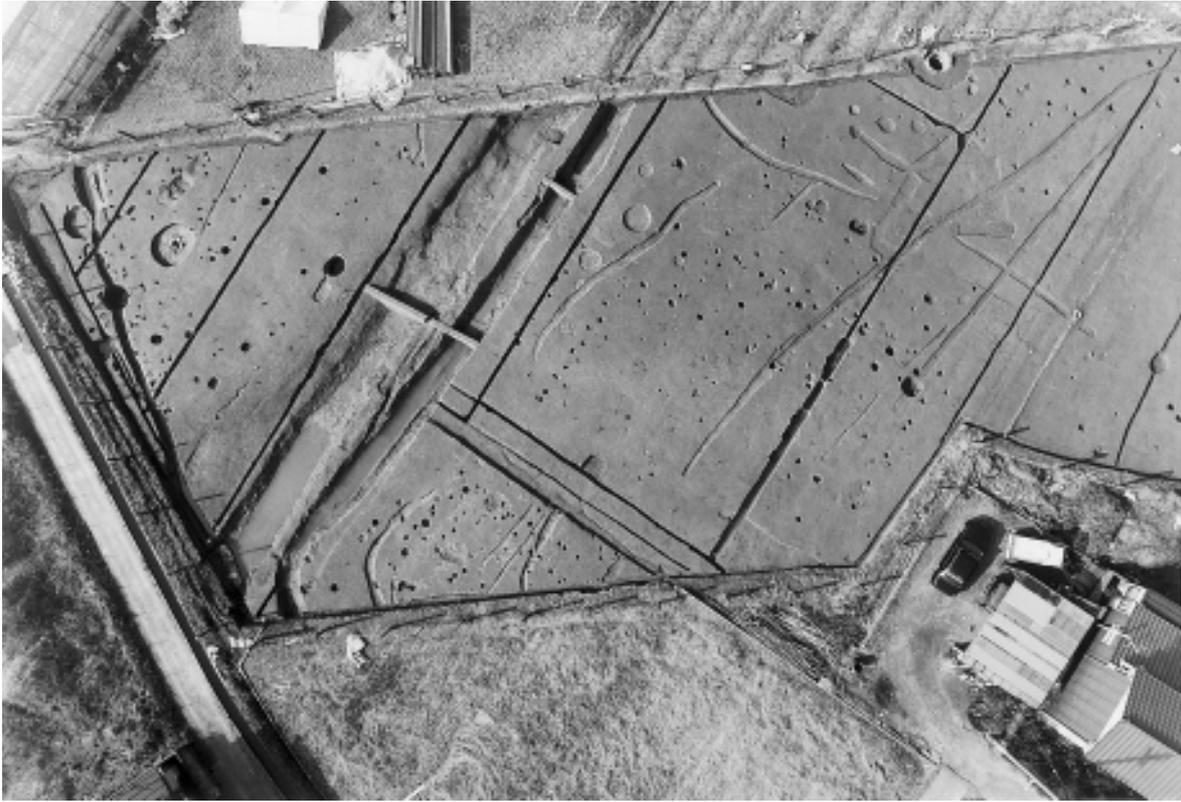
遺構完掘状態(東より)



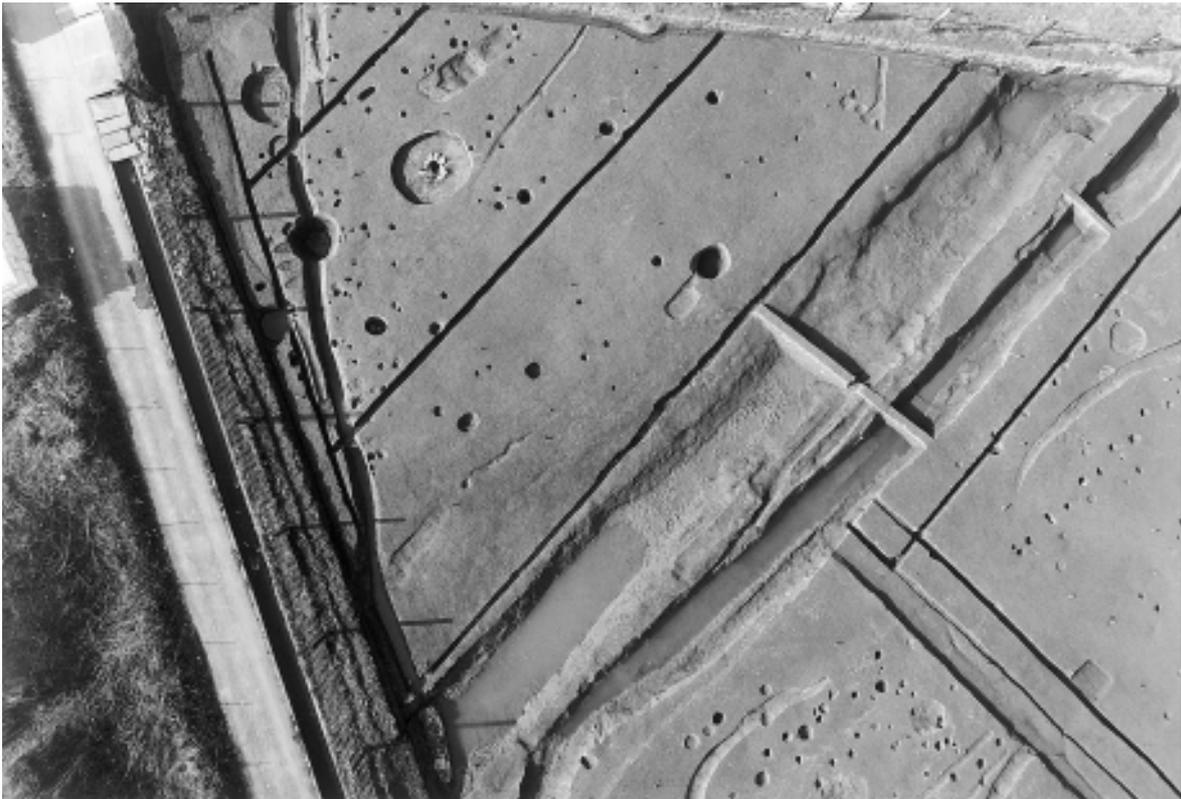
遺構検出状態(南西上空より)



遺構完掘状態(南西上空より)



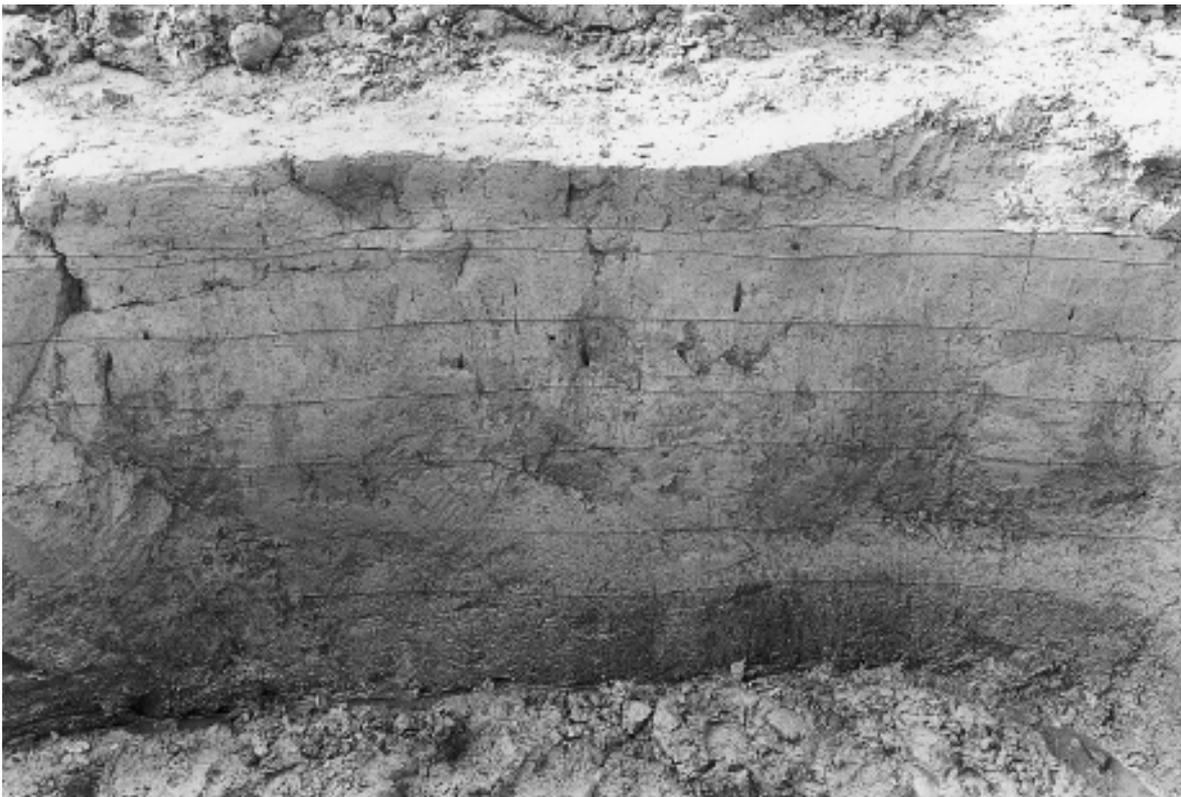
遺構完掘状態(南上空より)



調査区西部遺構完掘状態(東上空より)



A区西側確認トレンチ(北より)

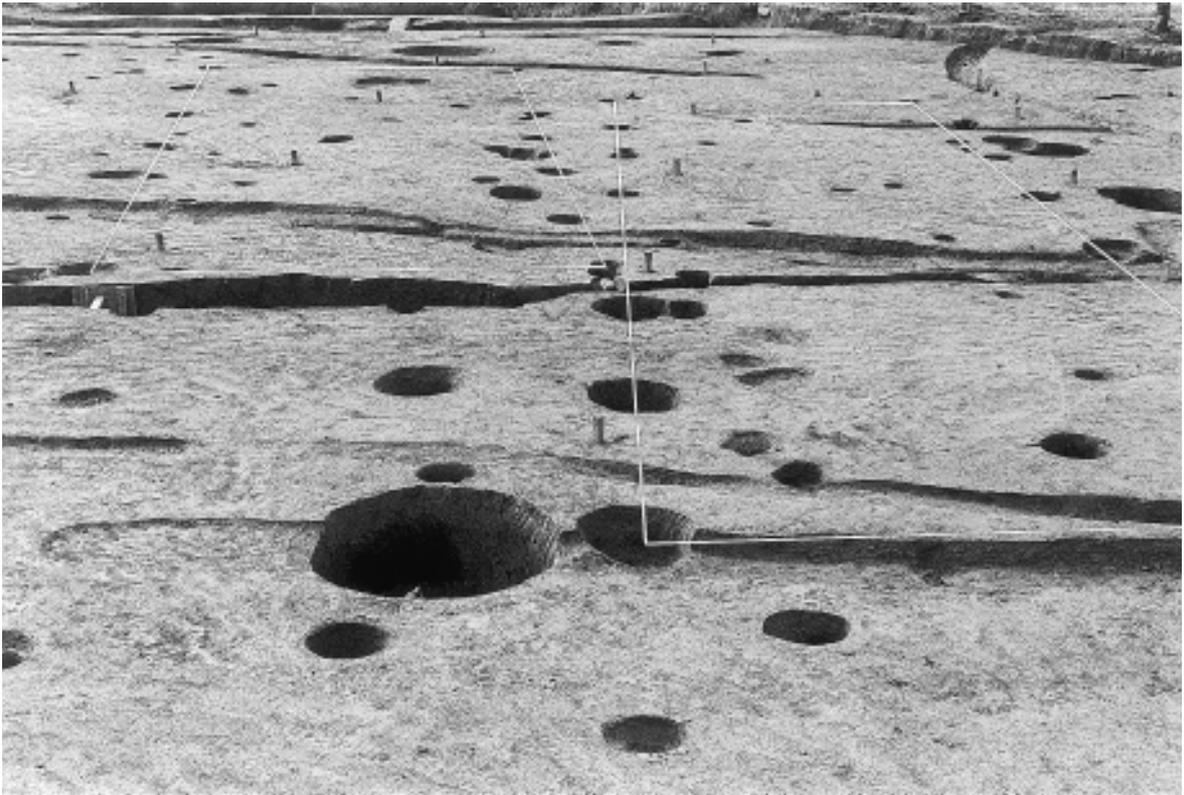


A区西側確認トレンチ西壁セクション

PL. 44



SB - 2(北より)



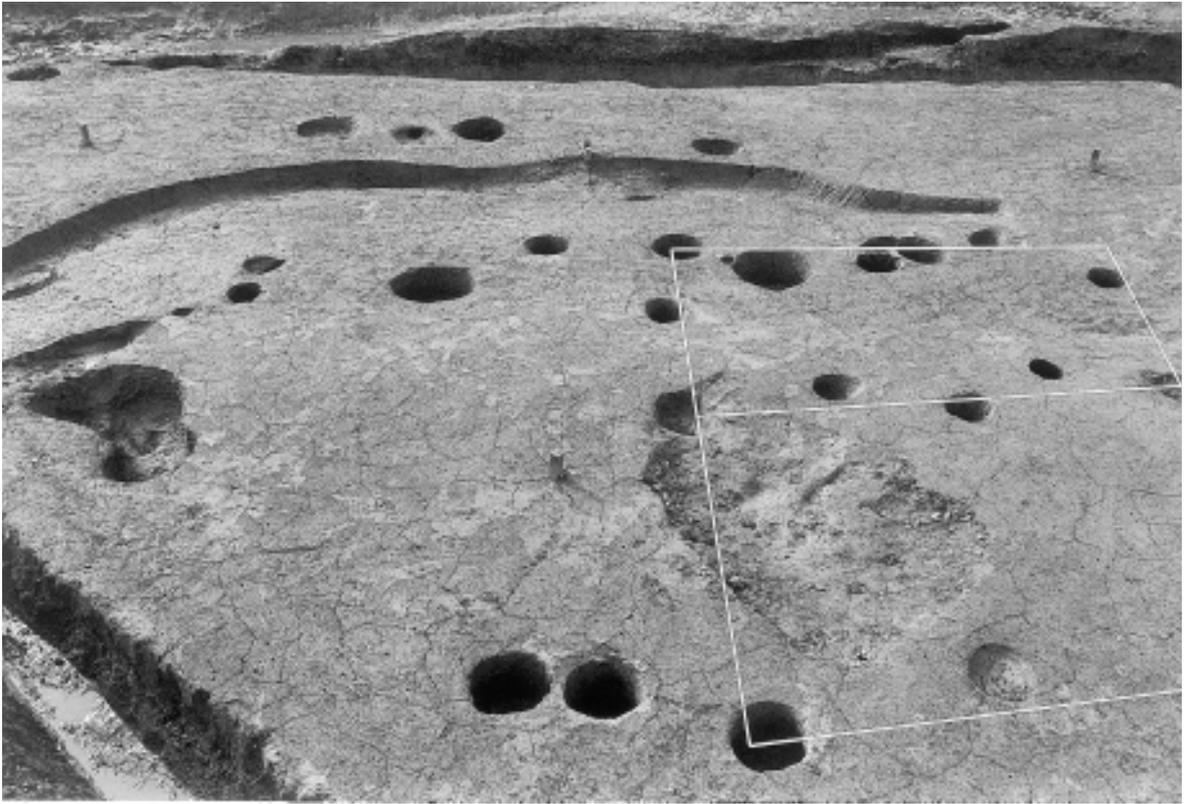
SB - 3・11(東より)



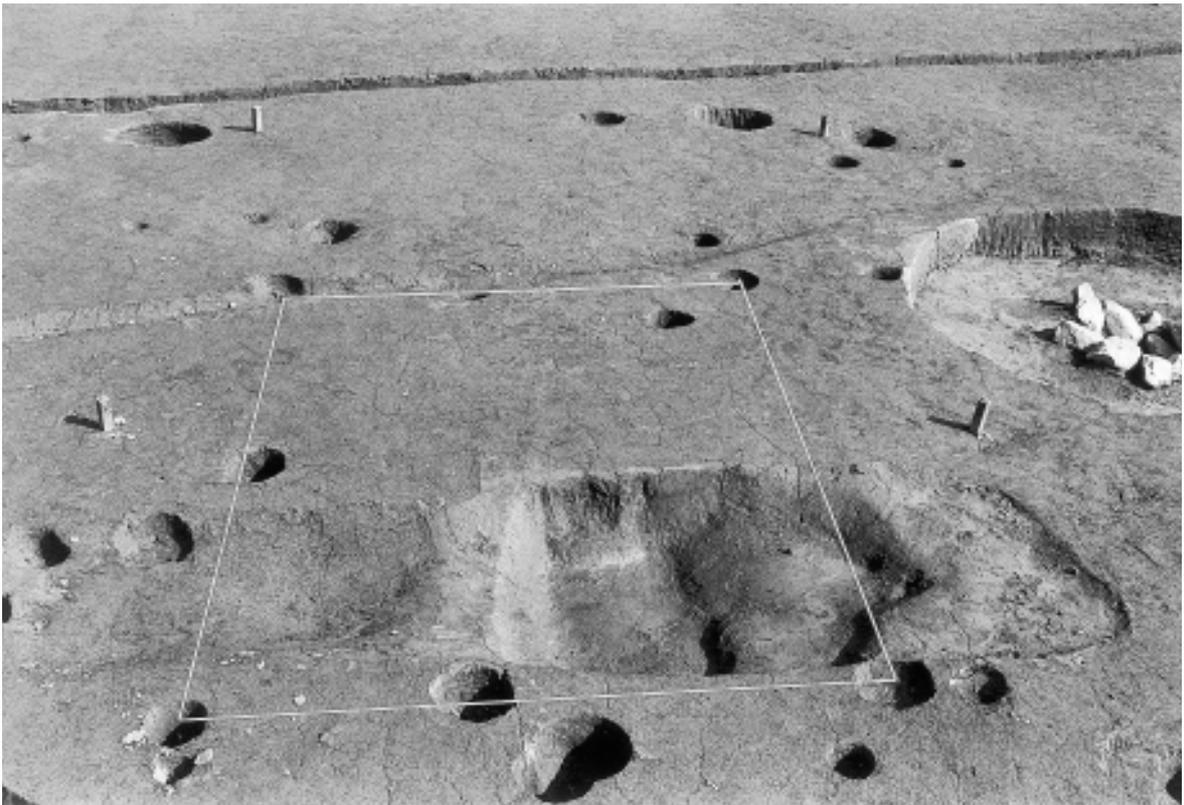
SB - 5(北より)



SB - 6・7(東より)



SB - 8 ,SK - 13(東より)



SB - 10(北より)



SB - 11(南西より)



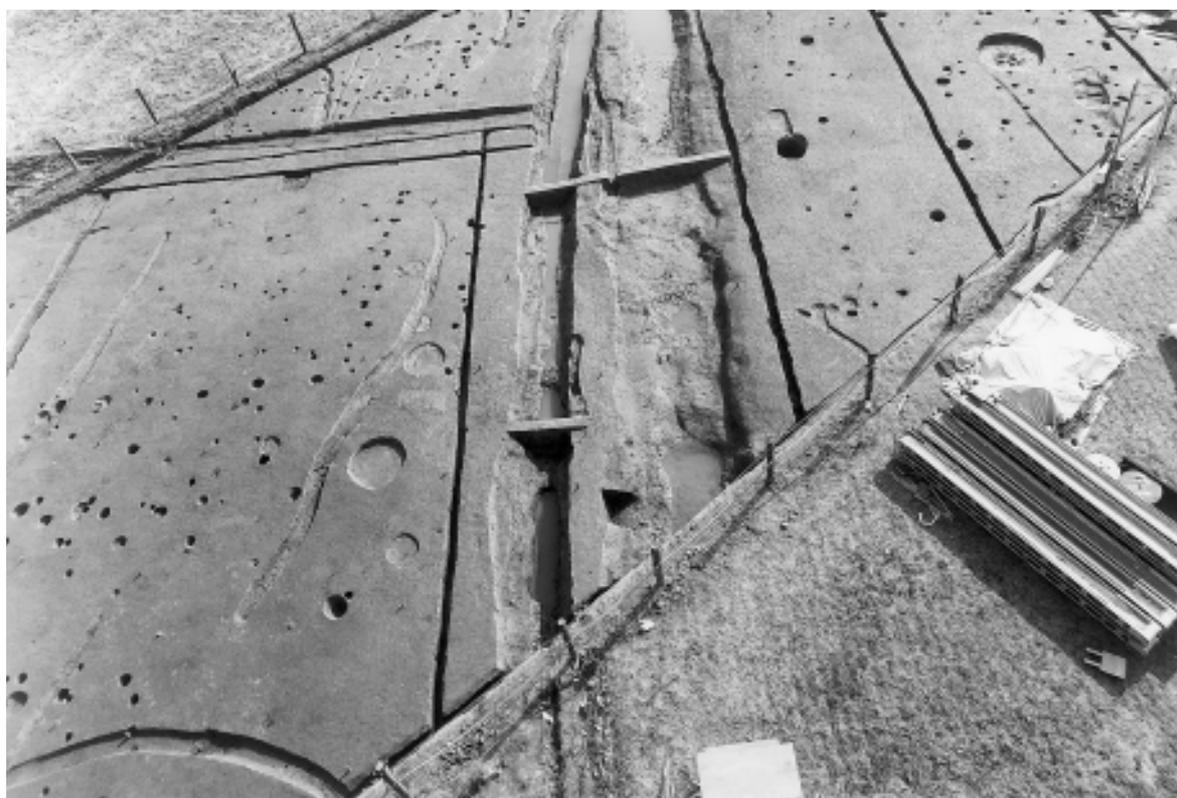
SB - 12(北より)



SK - 20(南より)



SD - 1(北より)



SD - 1・2(南上空より)



SD - 1・2完掘状態(北より)

PL. 50



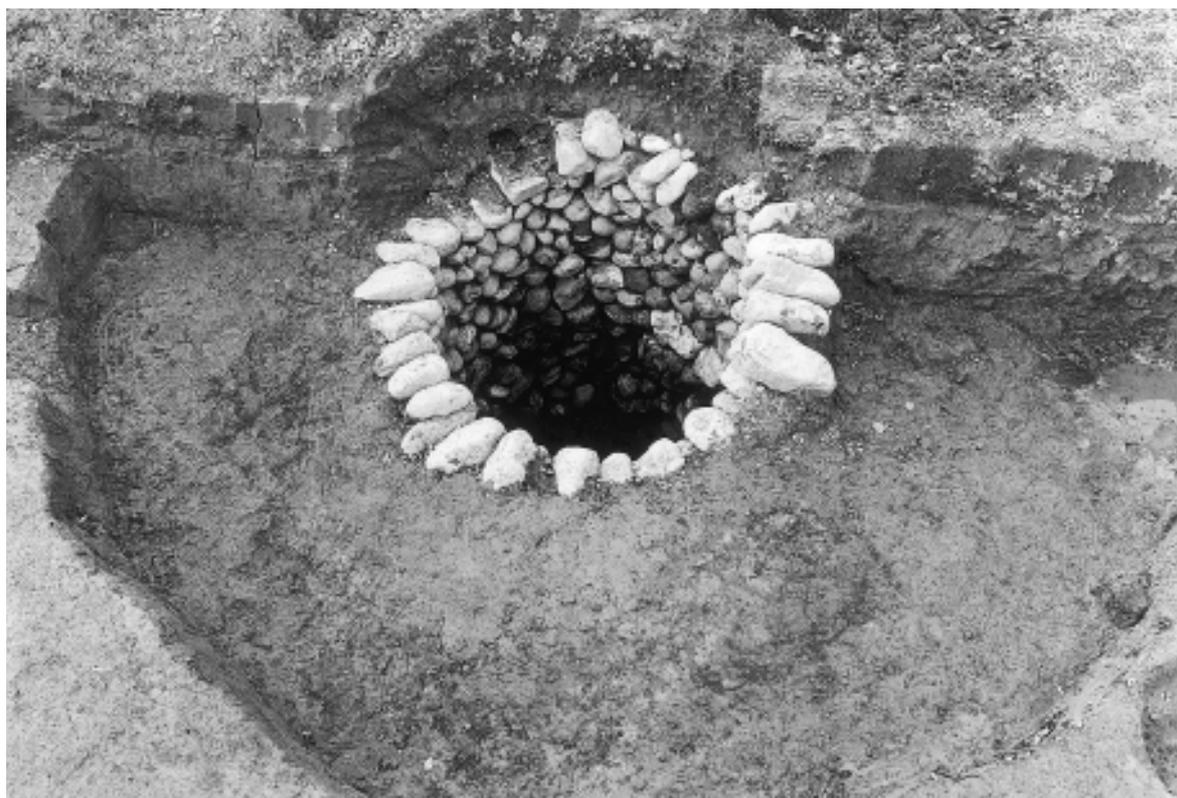
SD - 2北バンク(南より)



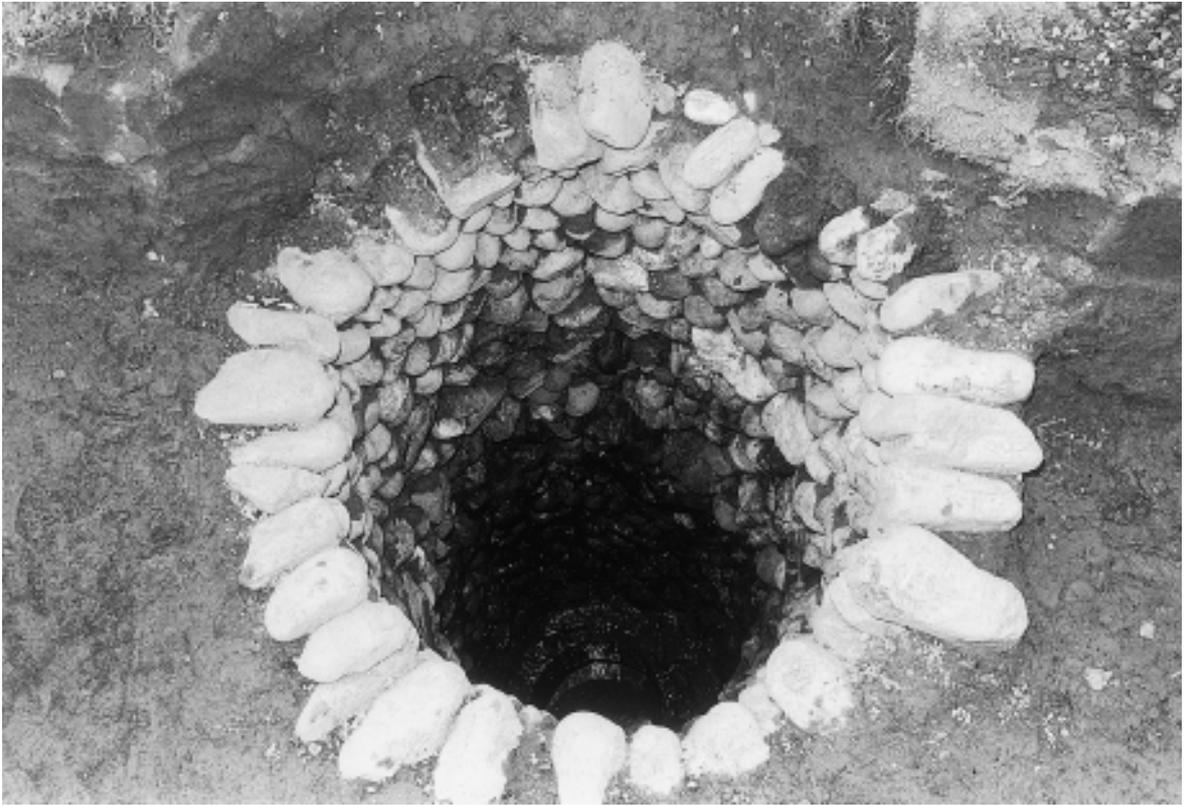
SD - 2南バンク(南より)



SE - 1検出状態(南東より)



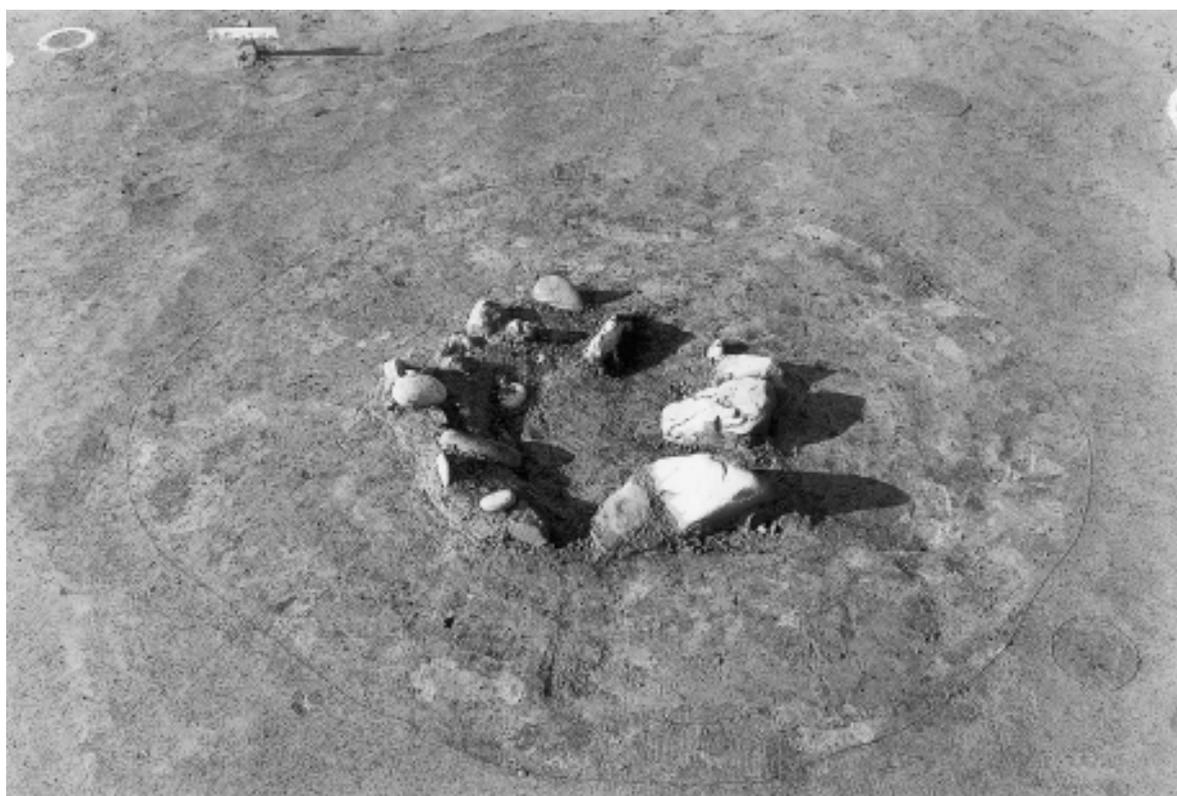
SE - 1完掘状態1(南より)



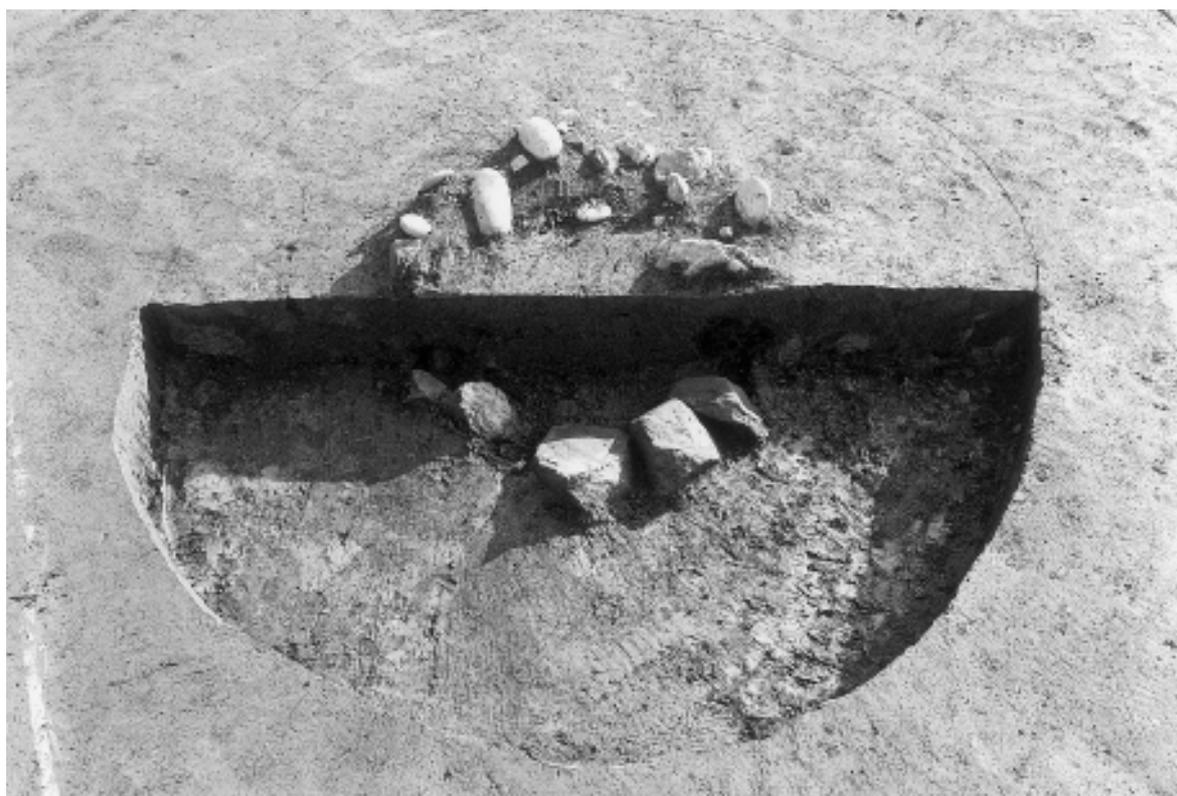
SE - 1完掘状態(南より)



SE - 1半裁状態(南より)



SE - 2検出状態(北東より)



SE - 2掘方半裁状態(北より)



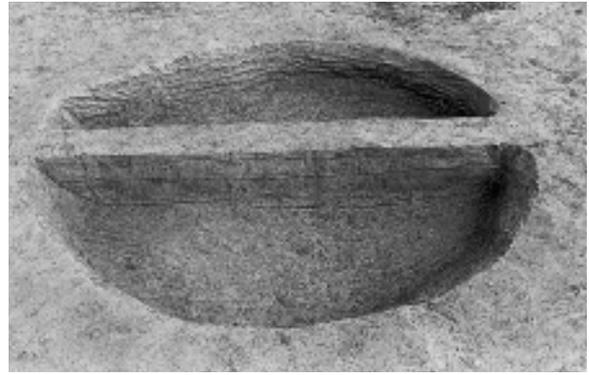
SE - 2(西より)



SE - 2半裁状態(南より)



SK - 8(南より)



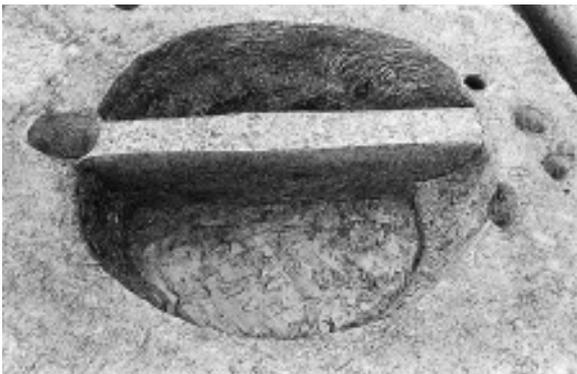
SK - 9(西より)



SK - 12(南より)



SK - 16備前焼(142)出土状態



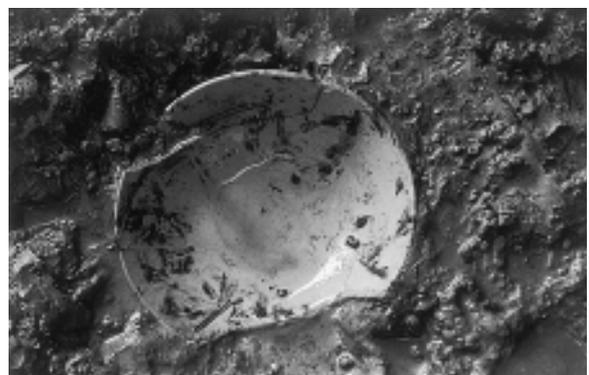
SK - 17(南より)



SK - 23(南より)



SD - 1土師質土器(146)出土状態



SD - 2土師質土器(159)出土状態



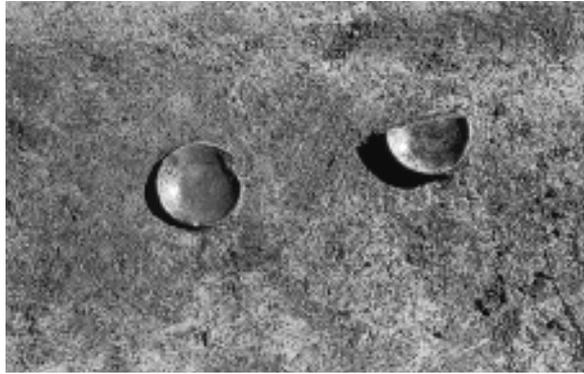
SD - 2下駄(167)出土状態



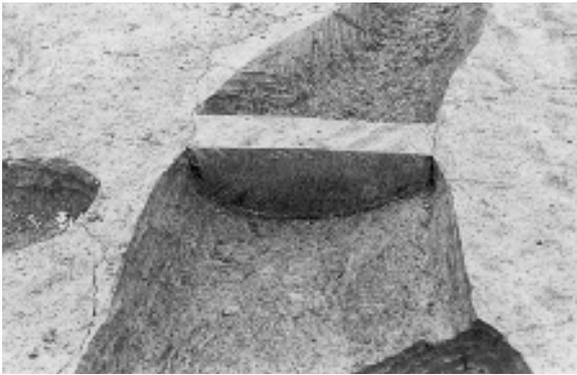
SD - 3(南より)



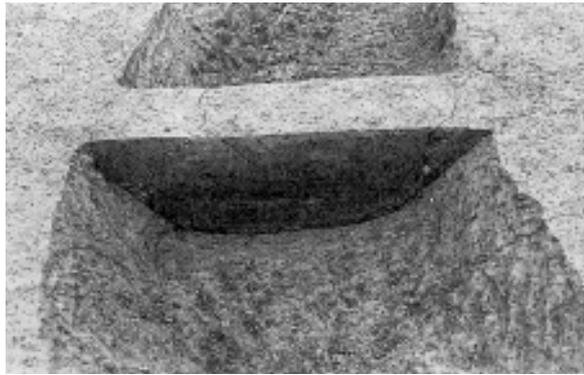
SD - 3遺物出土状態



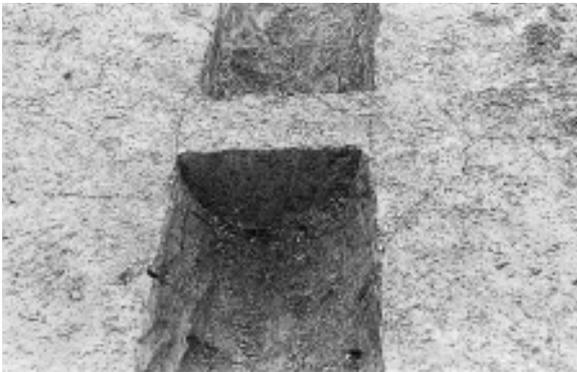
SD - 3瓦器(169,170)出土状態



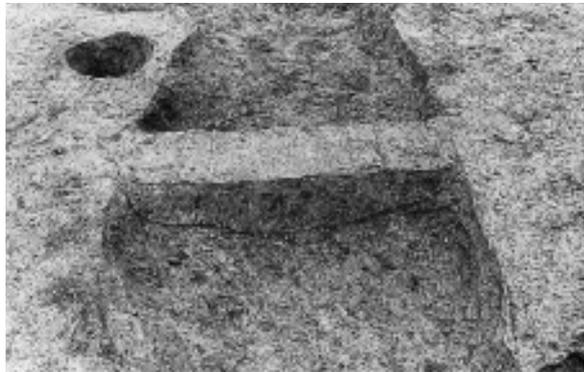
SD - 11北バンク(南より)



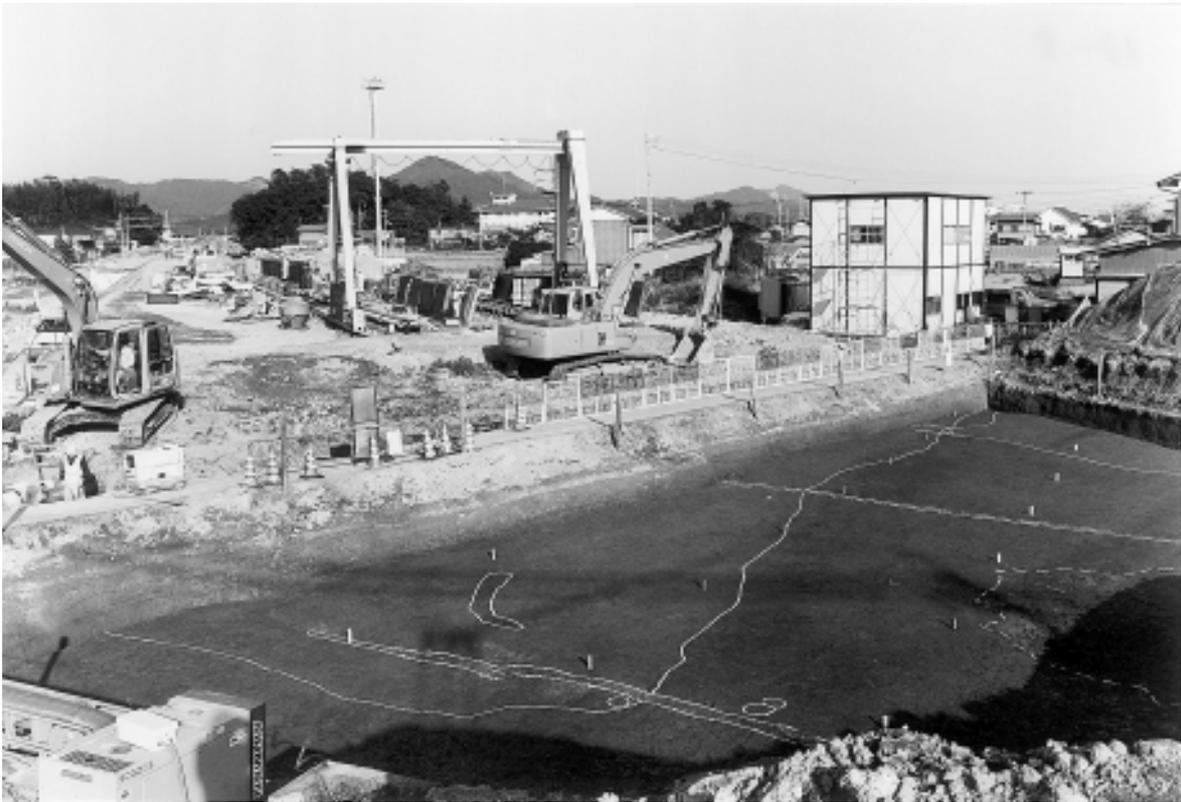
SD - 11南バンク(南より)



SD - 13(南より)



SD - 15(南より)



B区遺構検出状態(西より)



B区遺構完掘状態(北東より)



C区中世遺構検出状態(北より)



C区中世遺構完掘状態(北西より)



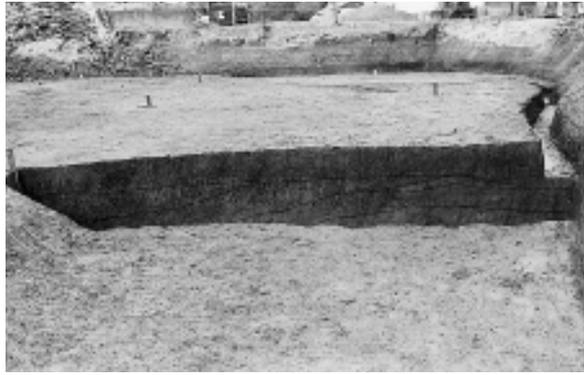
C区第XV層上面遺構検出状態(東より)



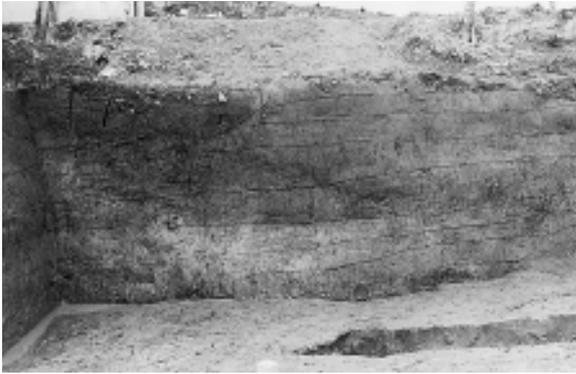
C区第XV層上面遺構完掘状態(東より)



B区北壁セクション



B区下層確認トレンチ(東より)



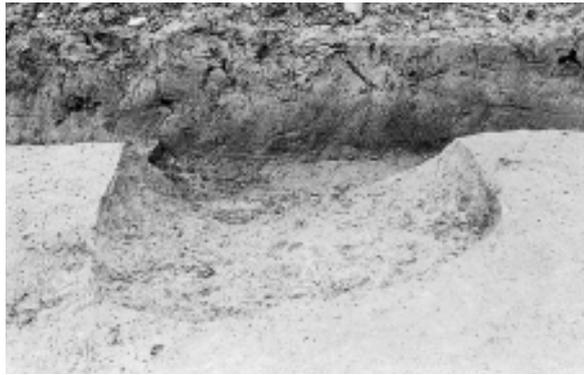
C区北壁セクション西部



C区北壁セクション東部



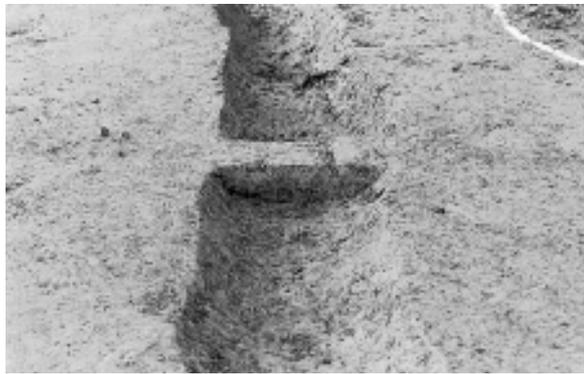
C区下層確認トレンチ(東より)



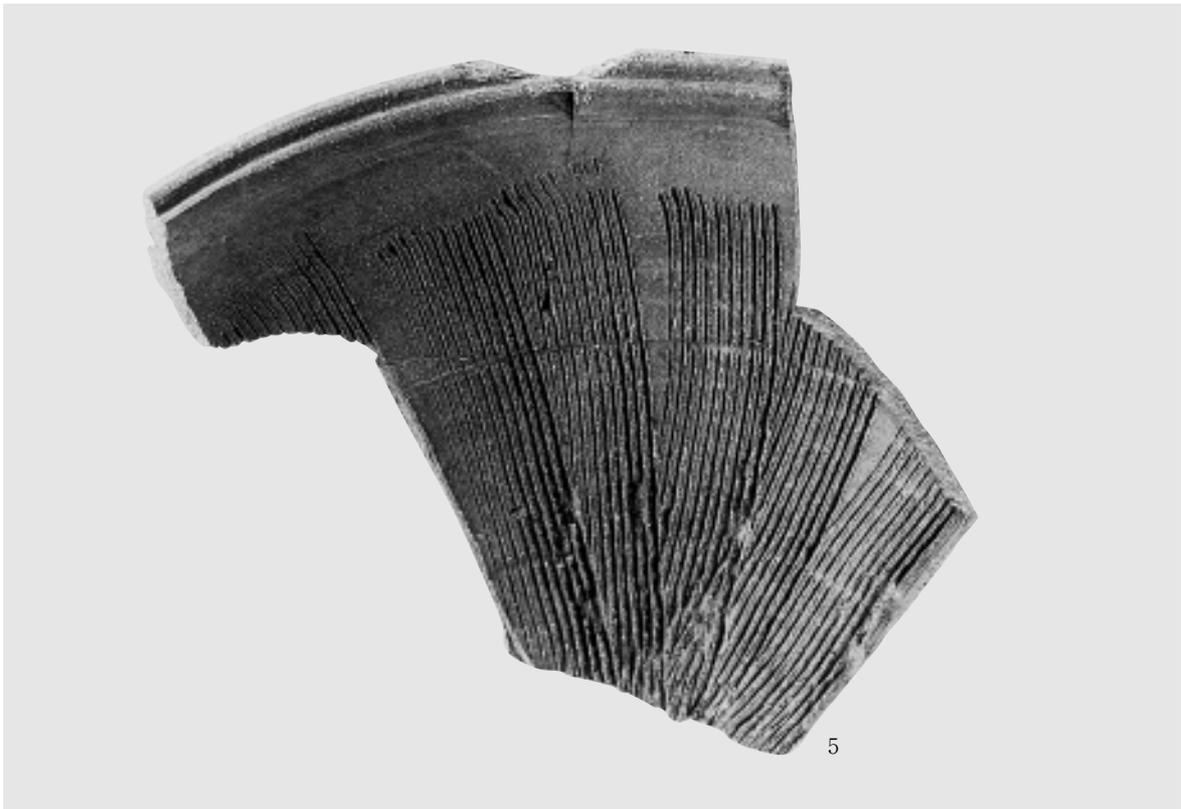
C区SK - 1(北より)



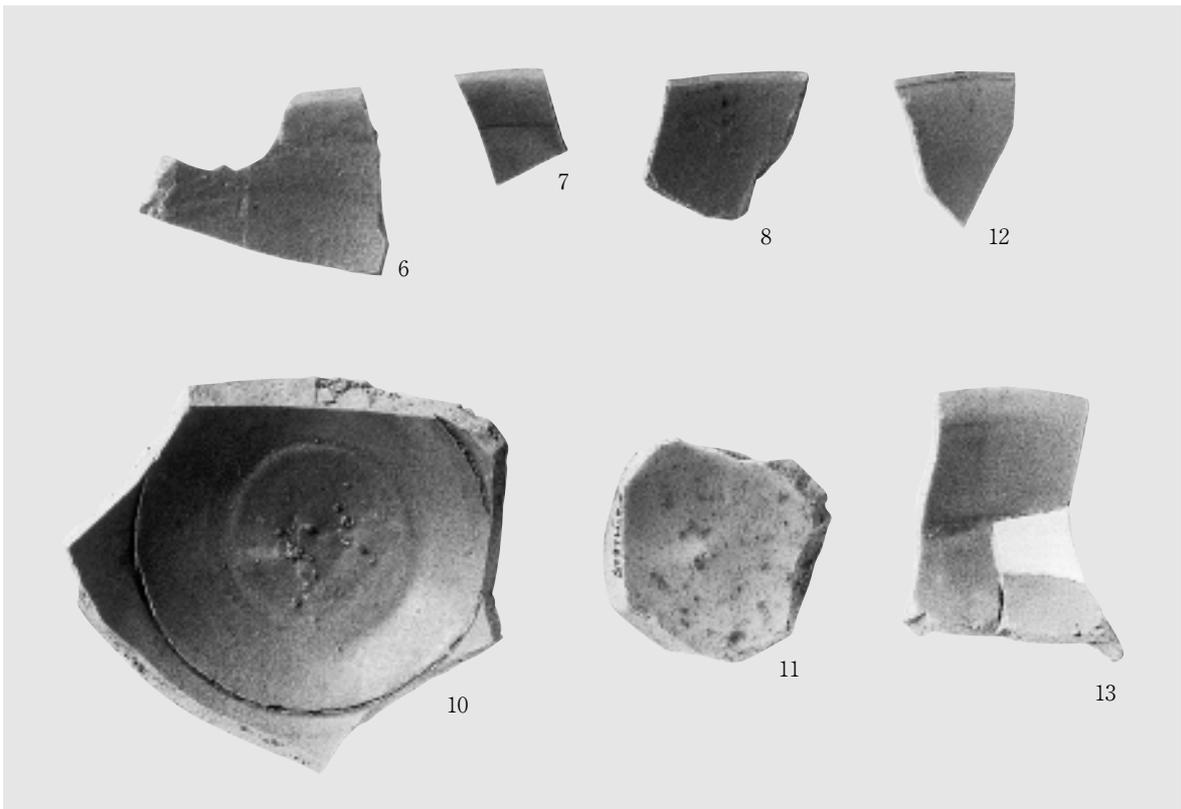
C区SD - 1(東より)



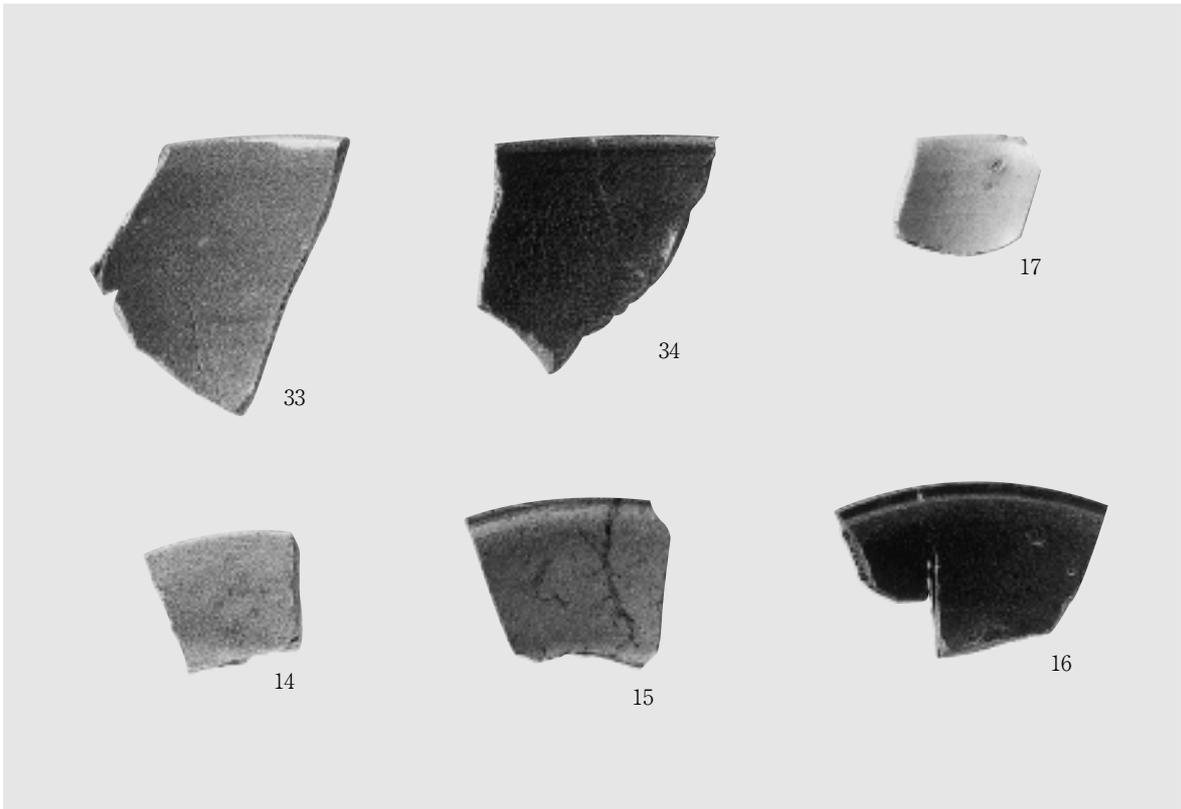
C区SD - 3(西より)



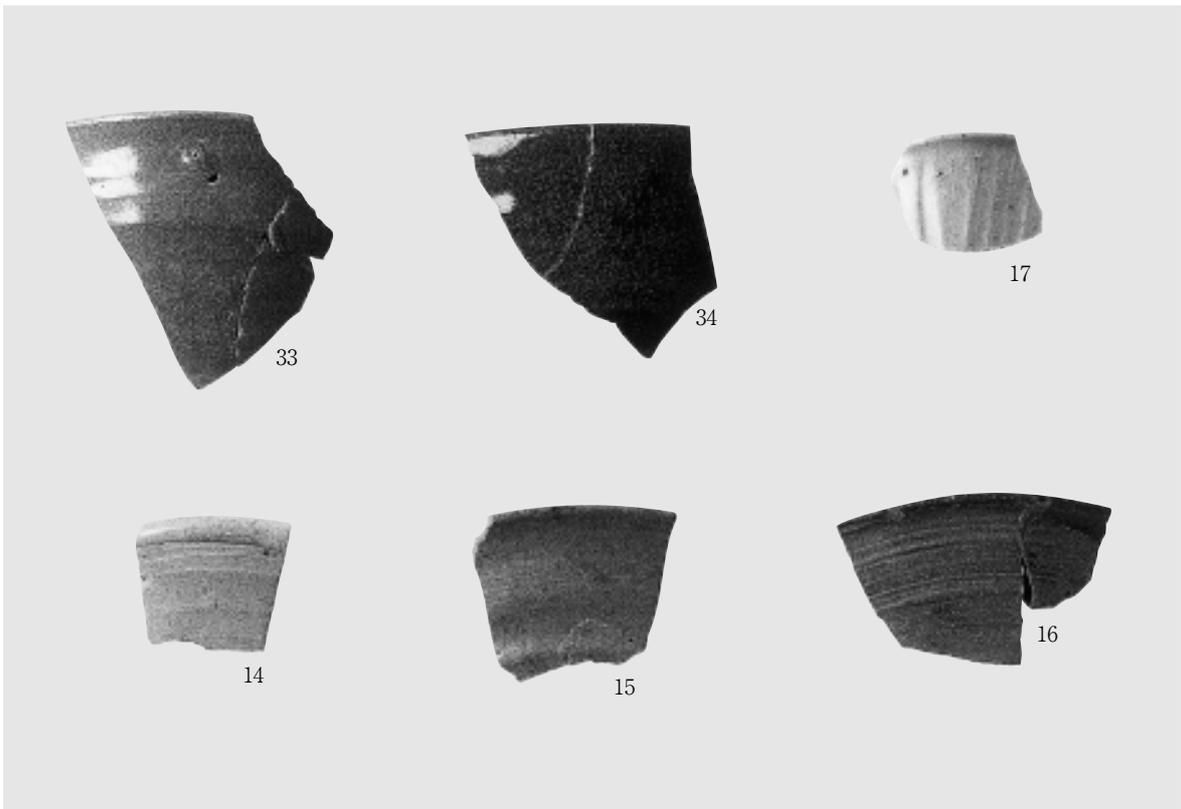
備前焼(擂鉢)



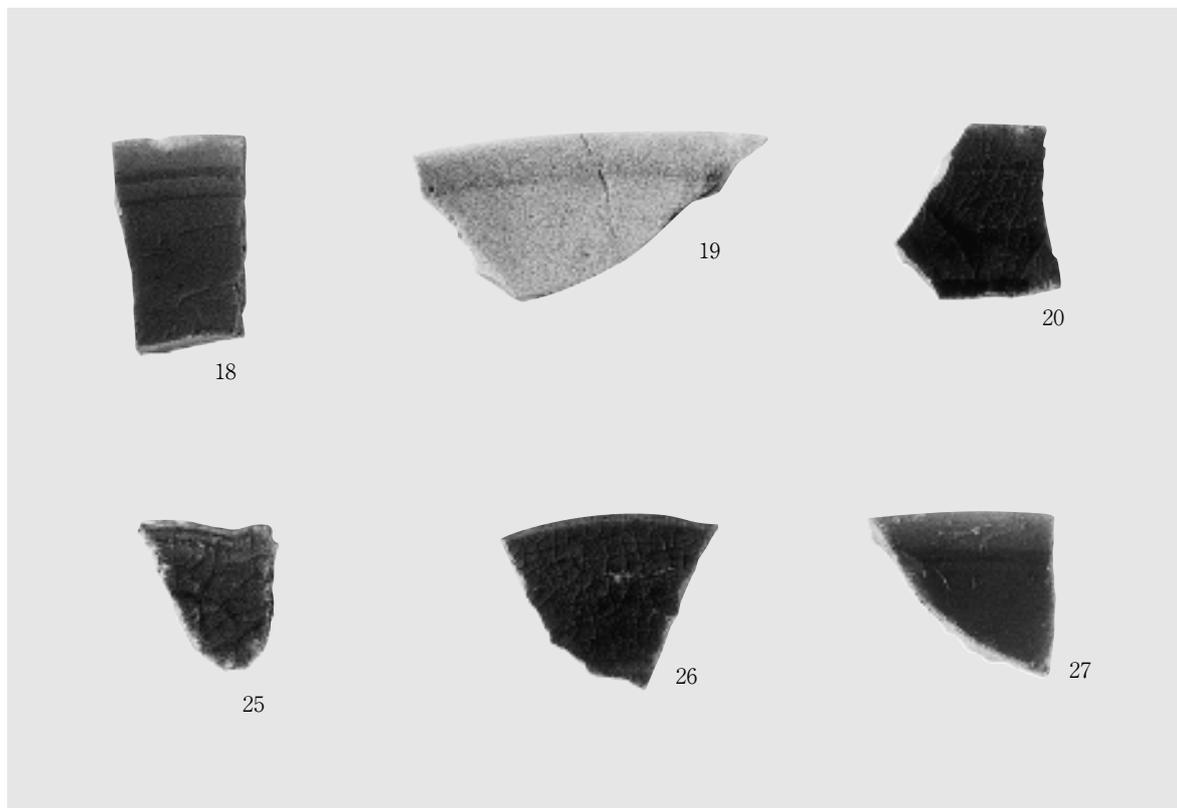
白磁(碗 , 皿)



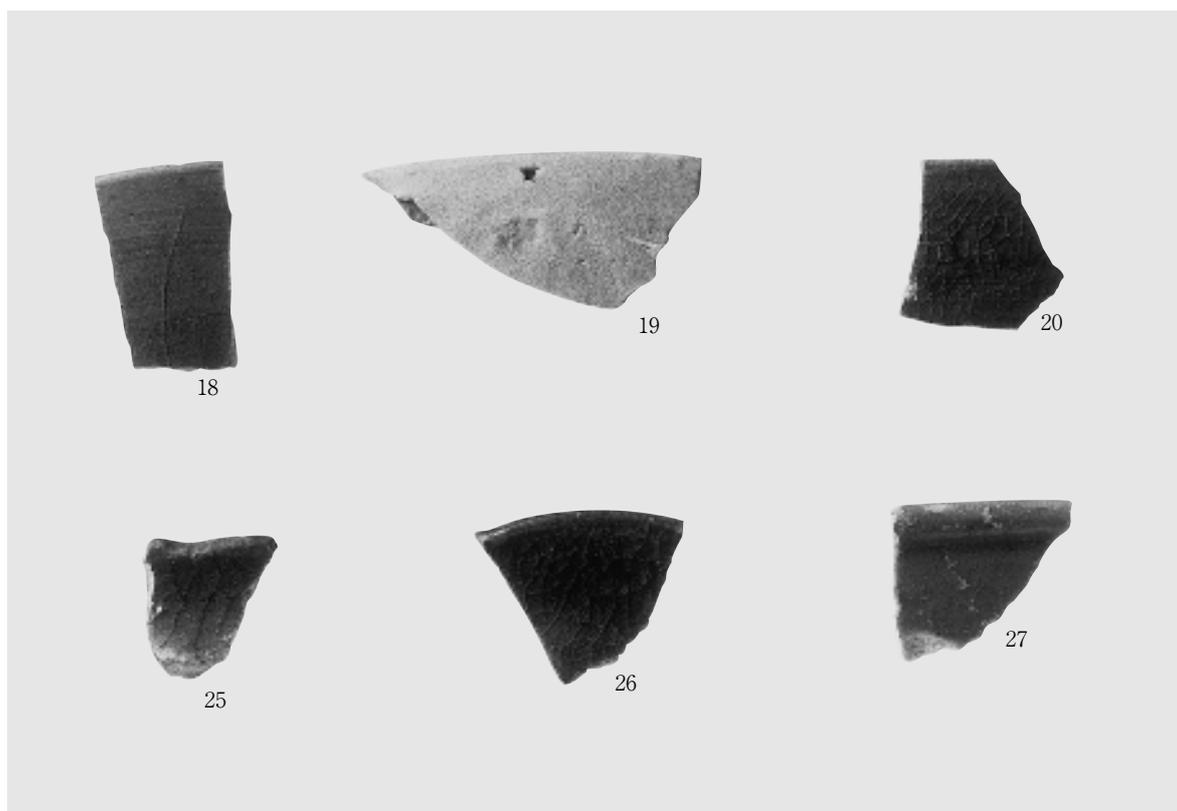
白磁(小杯,皿,溝縁皿),肥前系陶器(碗)内面



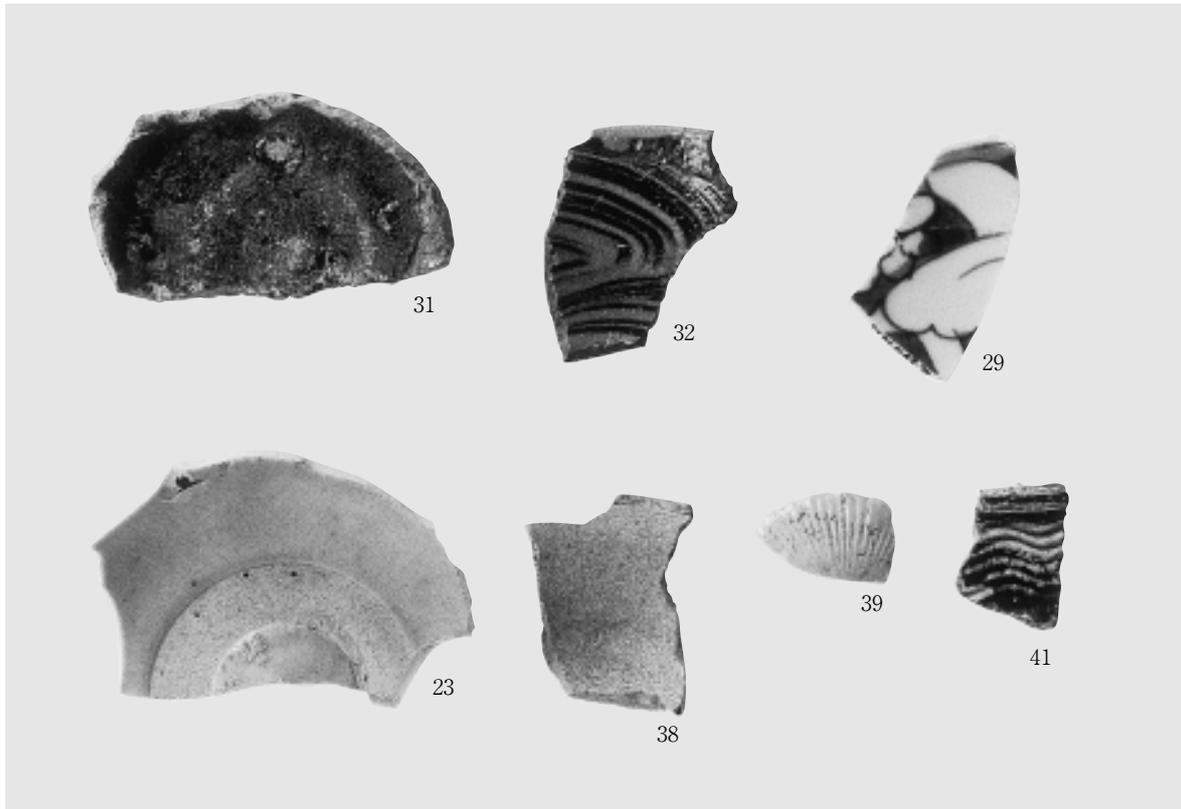
白磁(小杯,皿,溝縁皿),肥前系陶器(碗)外面



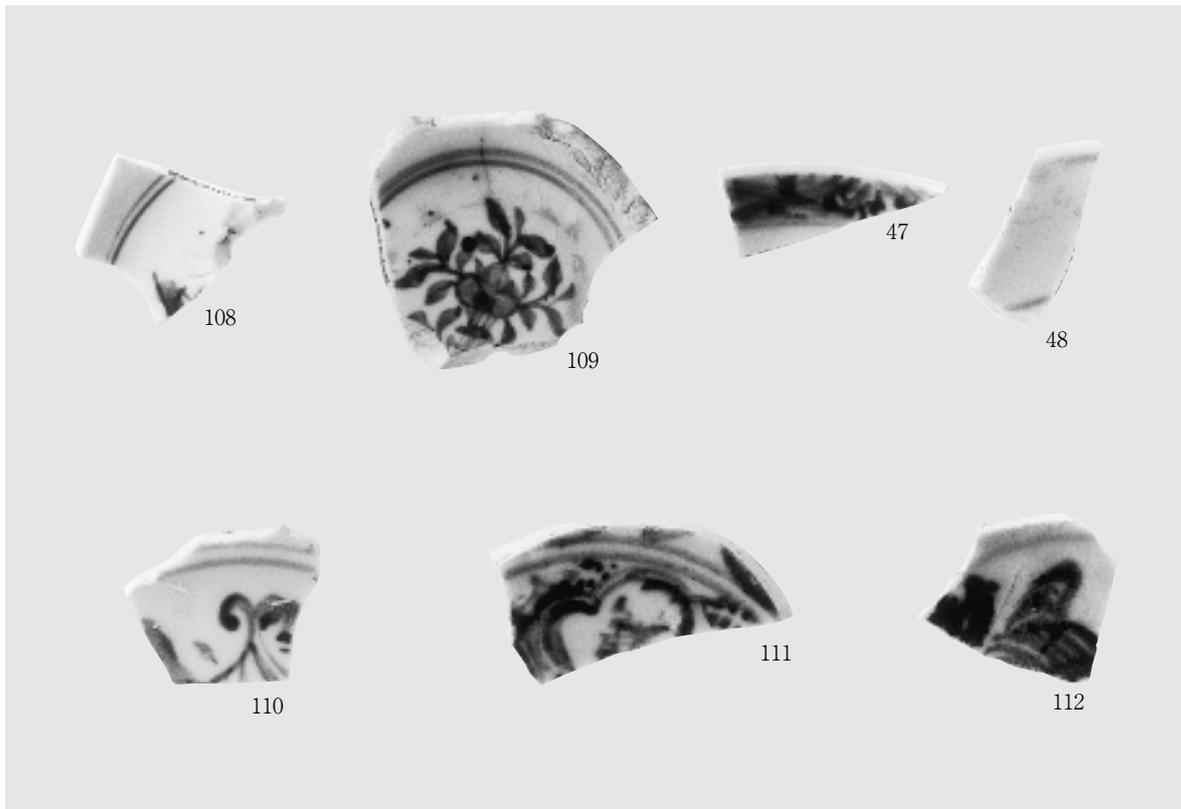
青磁(碗,杯,盤)内面



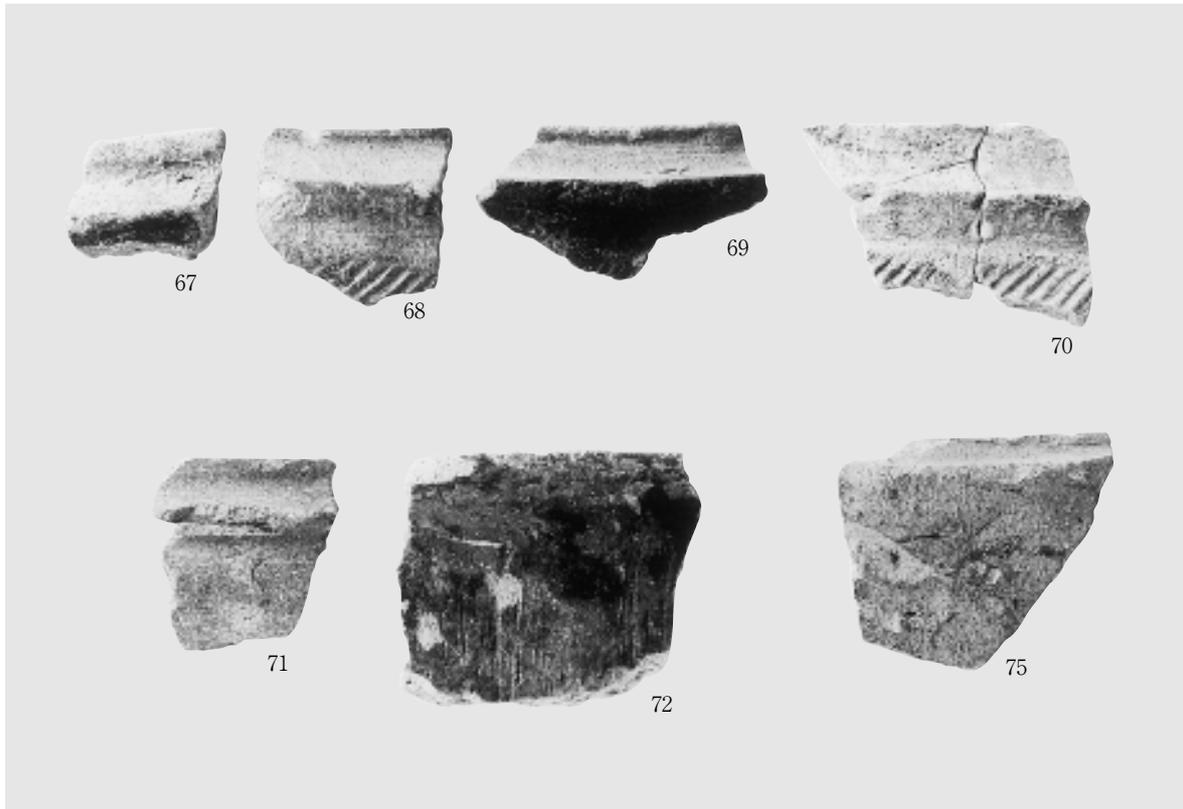
青磁(碗,杯,盤)外面



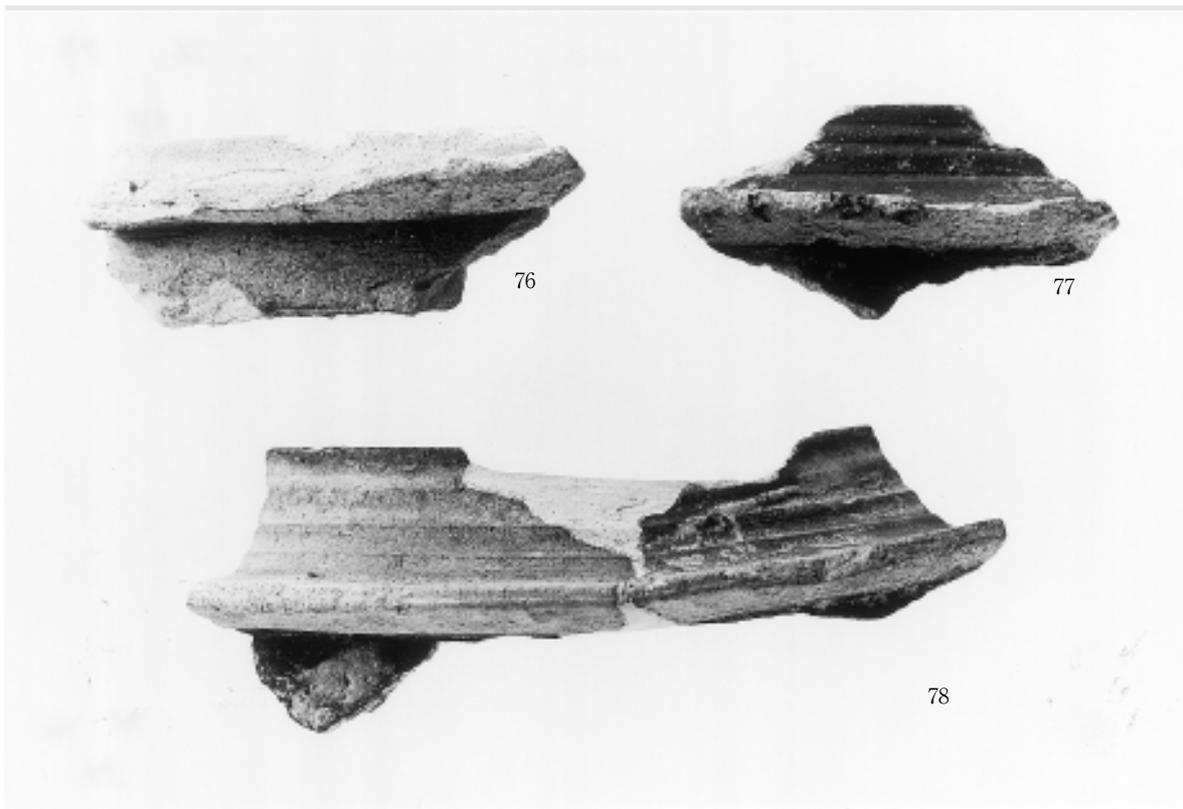
青磁(碗),染付(碗),肥前系陶器(碗,溝縁皿,紅皿,火入)



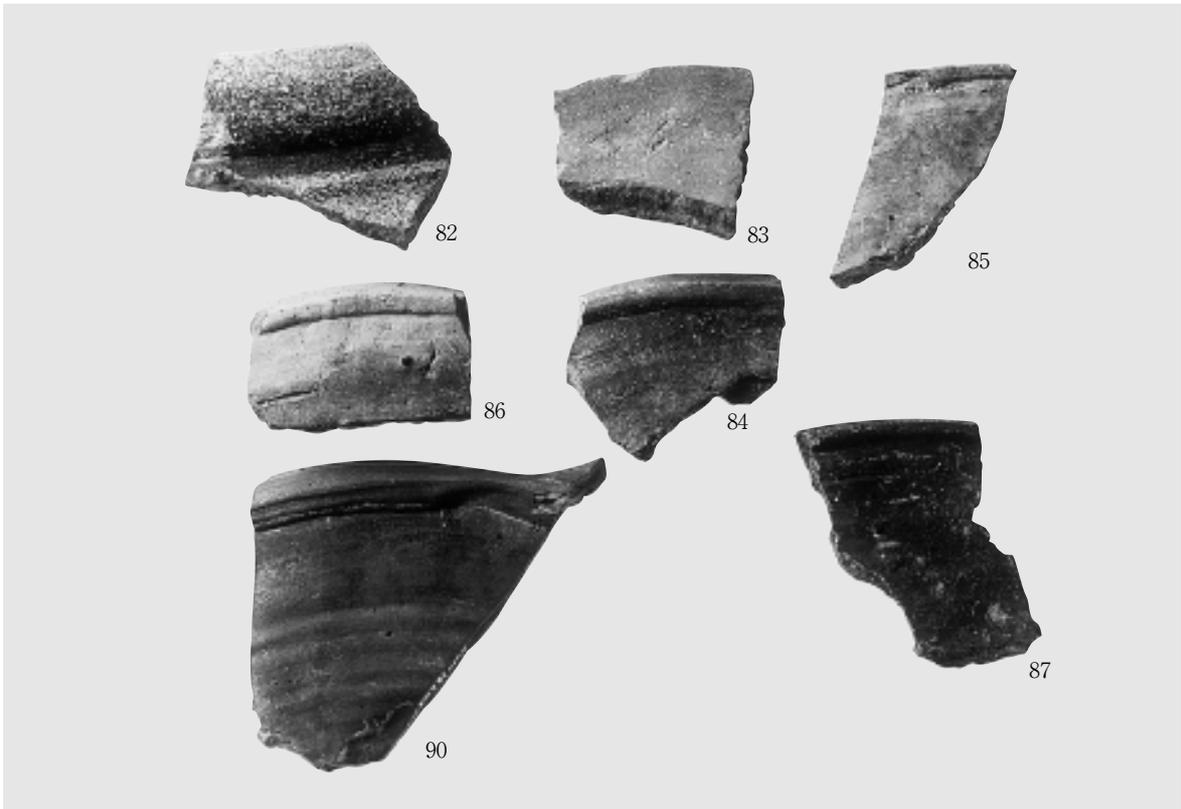
染付(小碗,皿)



土師質土器(鍋,羽釜,火鉢)



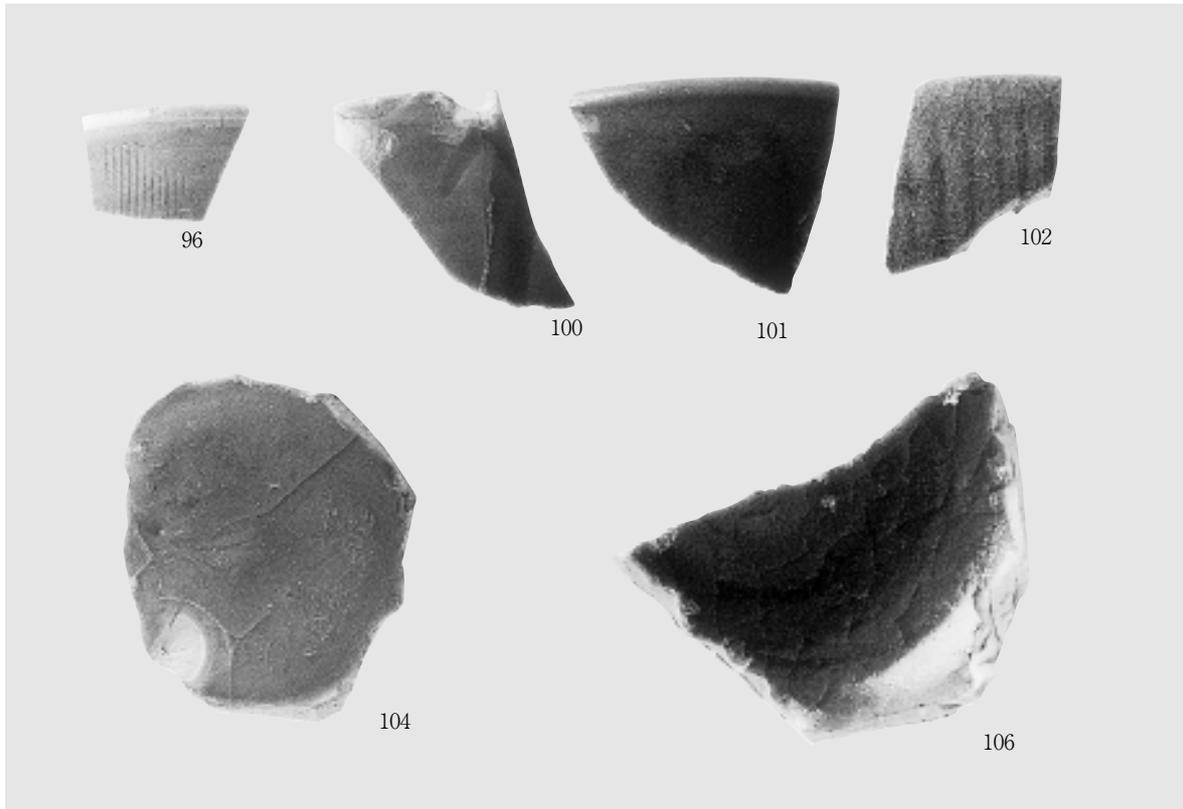
瓦質土器(羽釜)



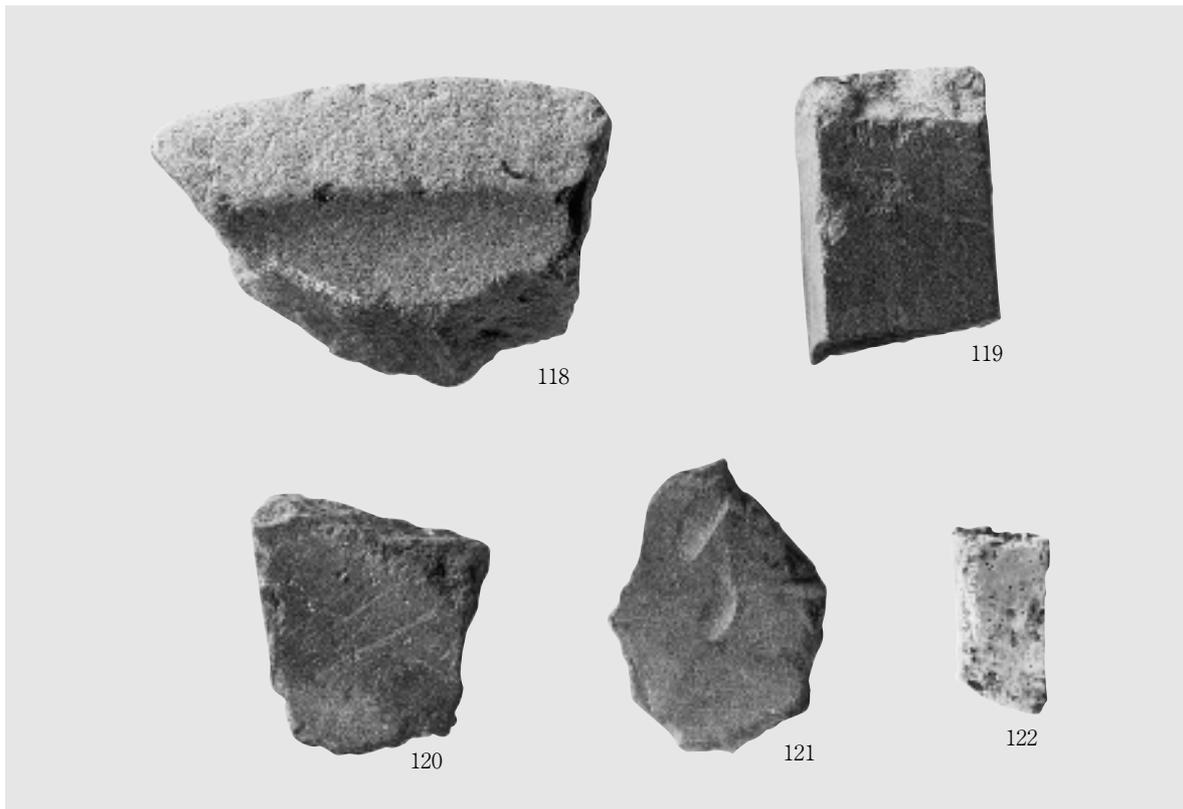
備前焼(甕, 播鉢)



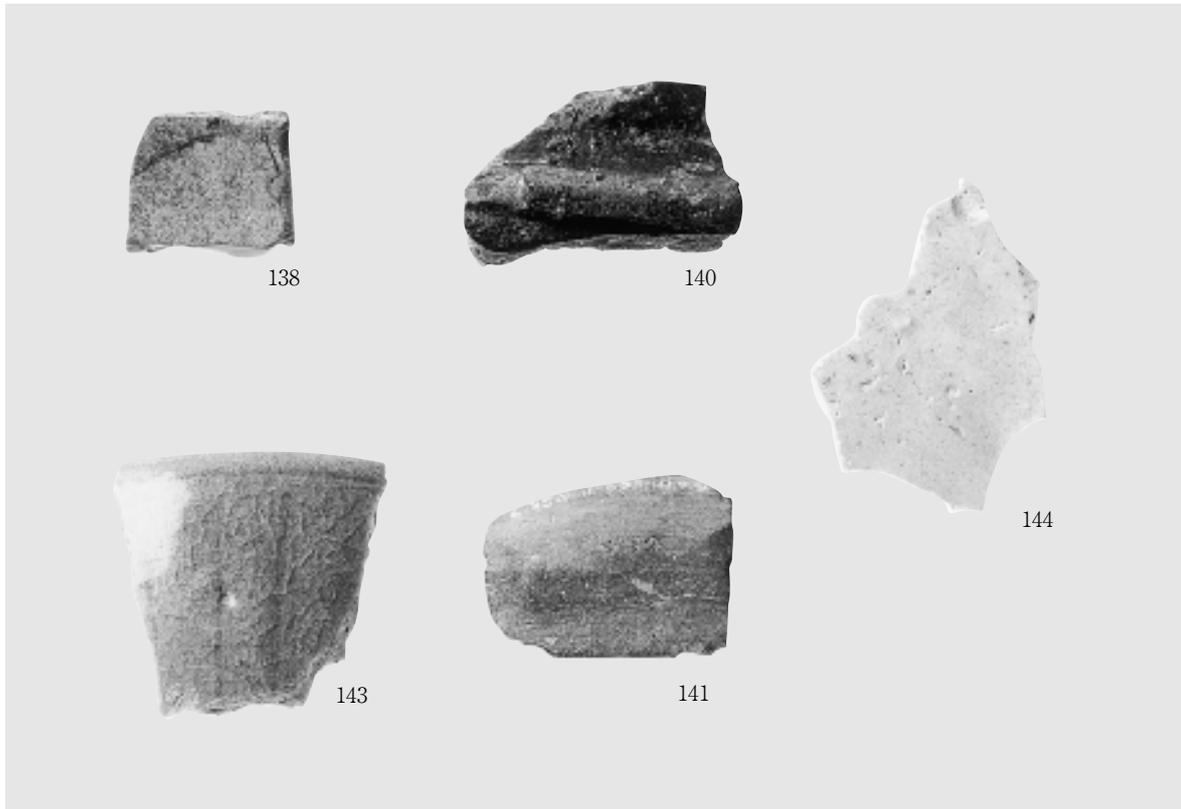
白磁(碗, 杯), 青磁(皿)



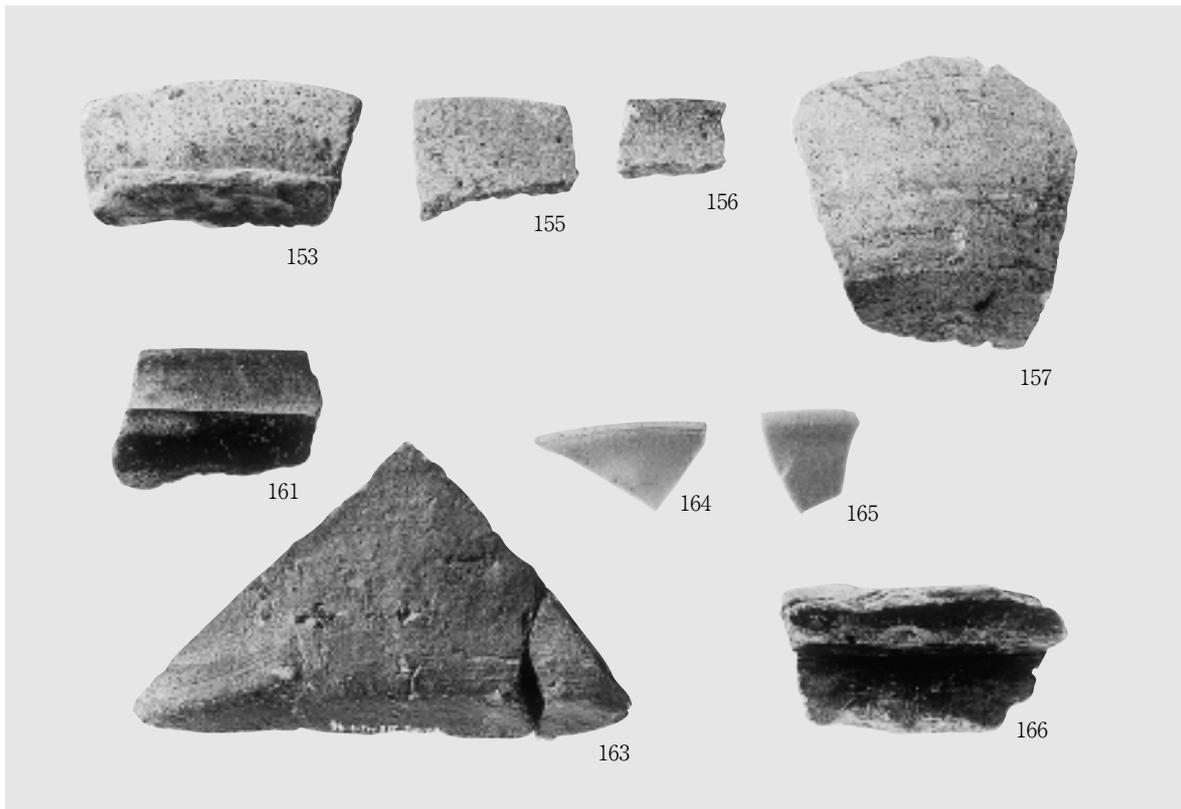
青磁(碗)



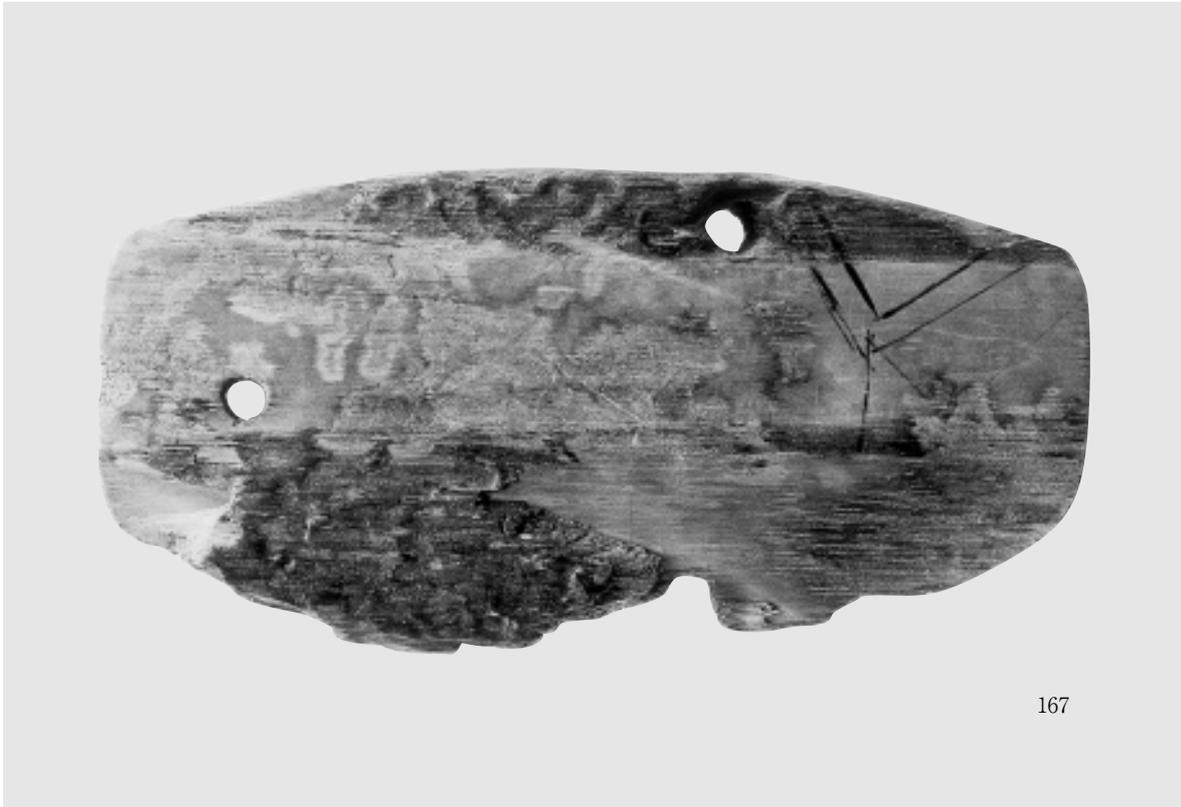
石製品(白, 砥石)



須惠器(杯蓋), 綠釉陶器(皿), 土師質土器(羽釜), 青磁(碗)

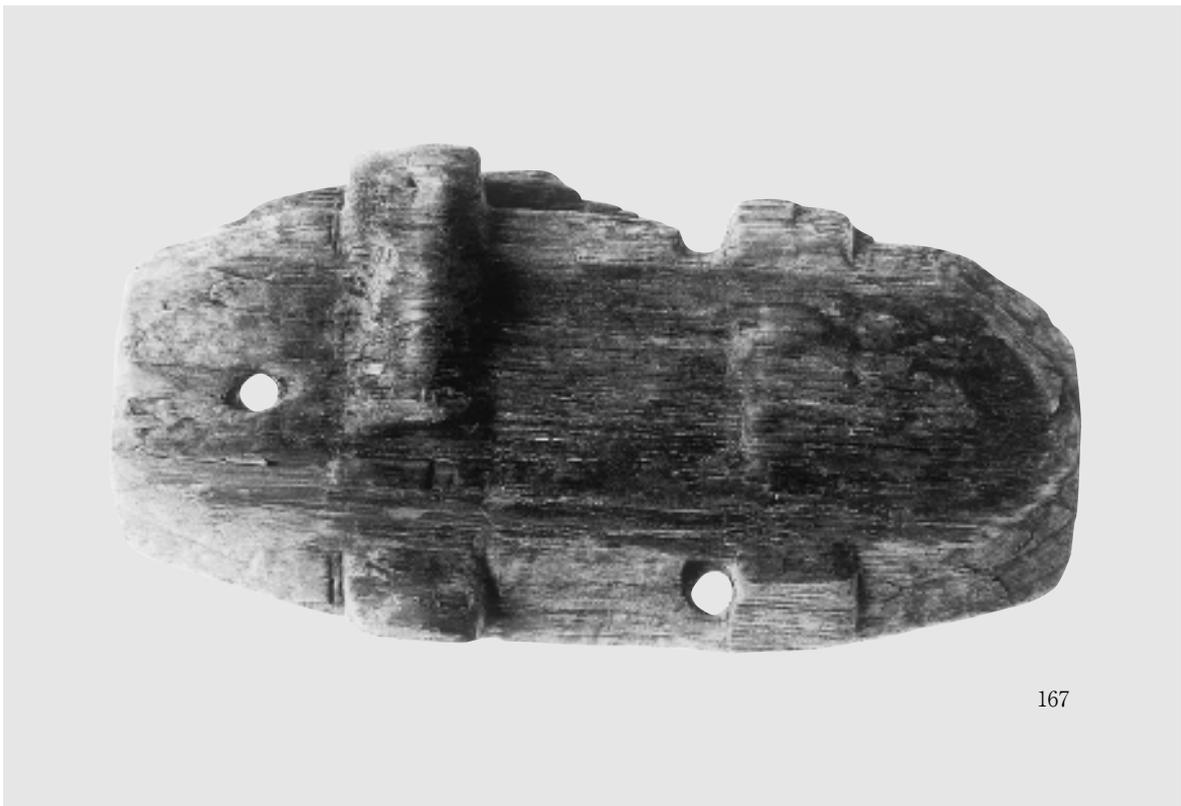


土師器(甕), 東播系須惠器(椀, 片口鉢), 土師質土器(羽釜), 備前焼(甕), 白磁(皿), 青磁(碗), 石製品(石鍋)



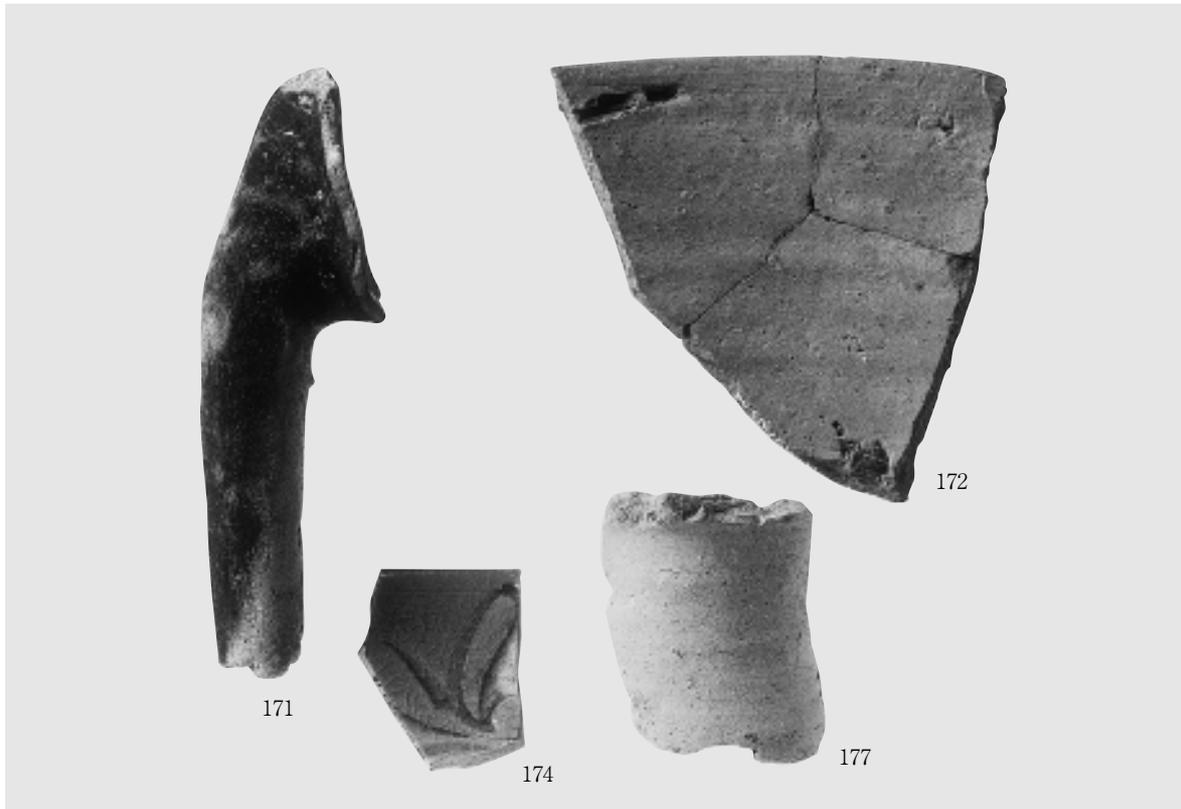
167

木製品(下駄)表面



167

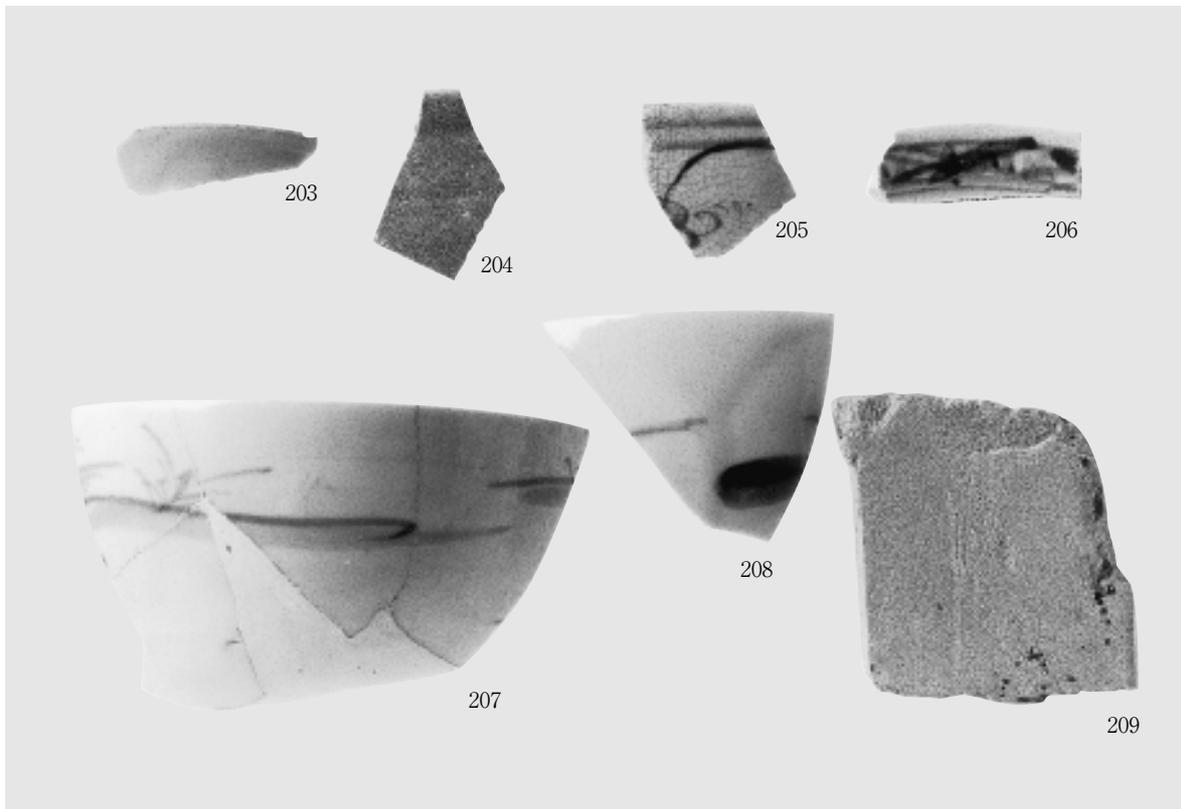
木製品(下駄)裏面



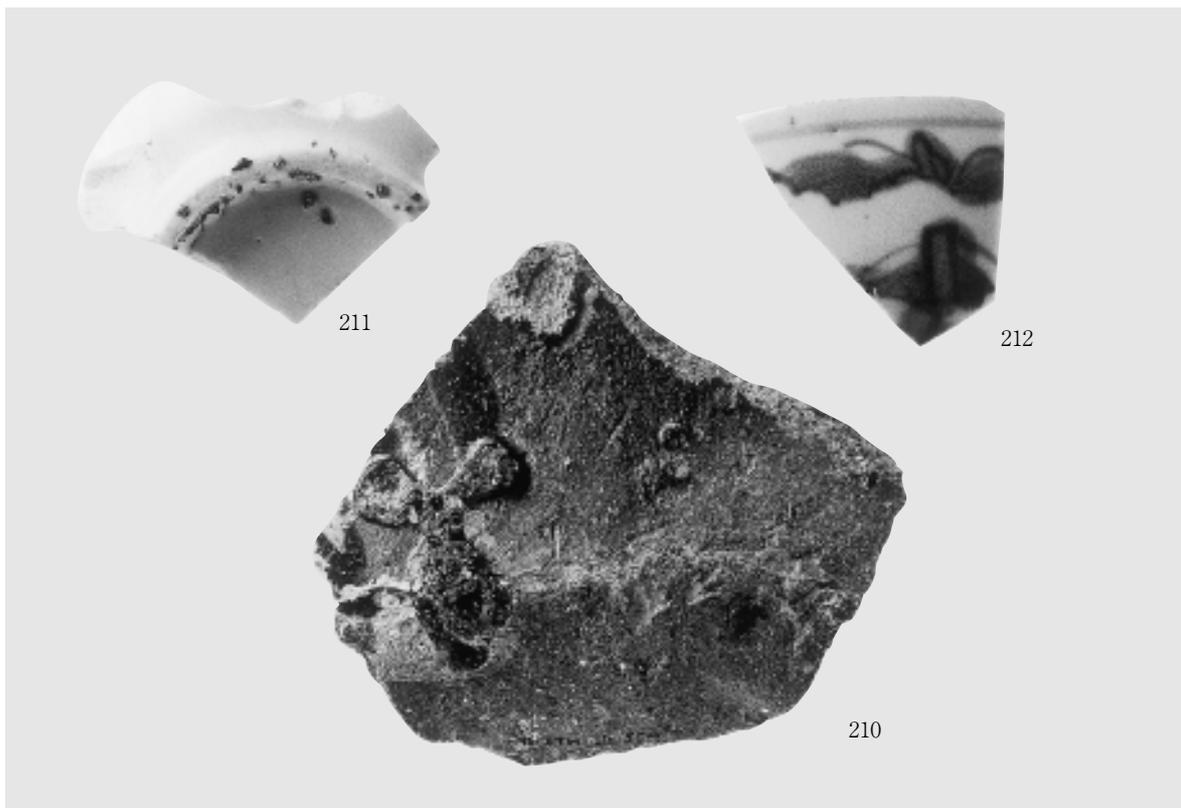
須恵器(壺),東播系須恵器(片口鉢),瓦質土器(三足鍋),青磁(碗)



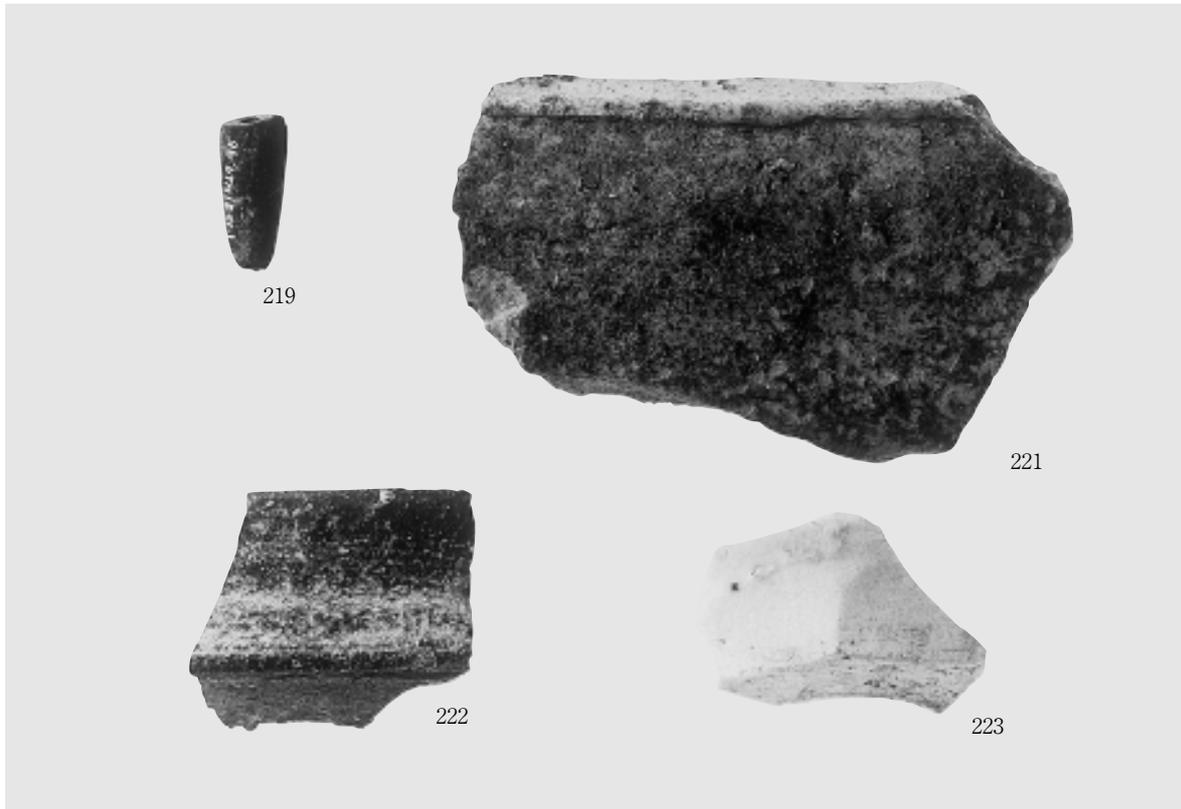
木製品(桶側)



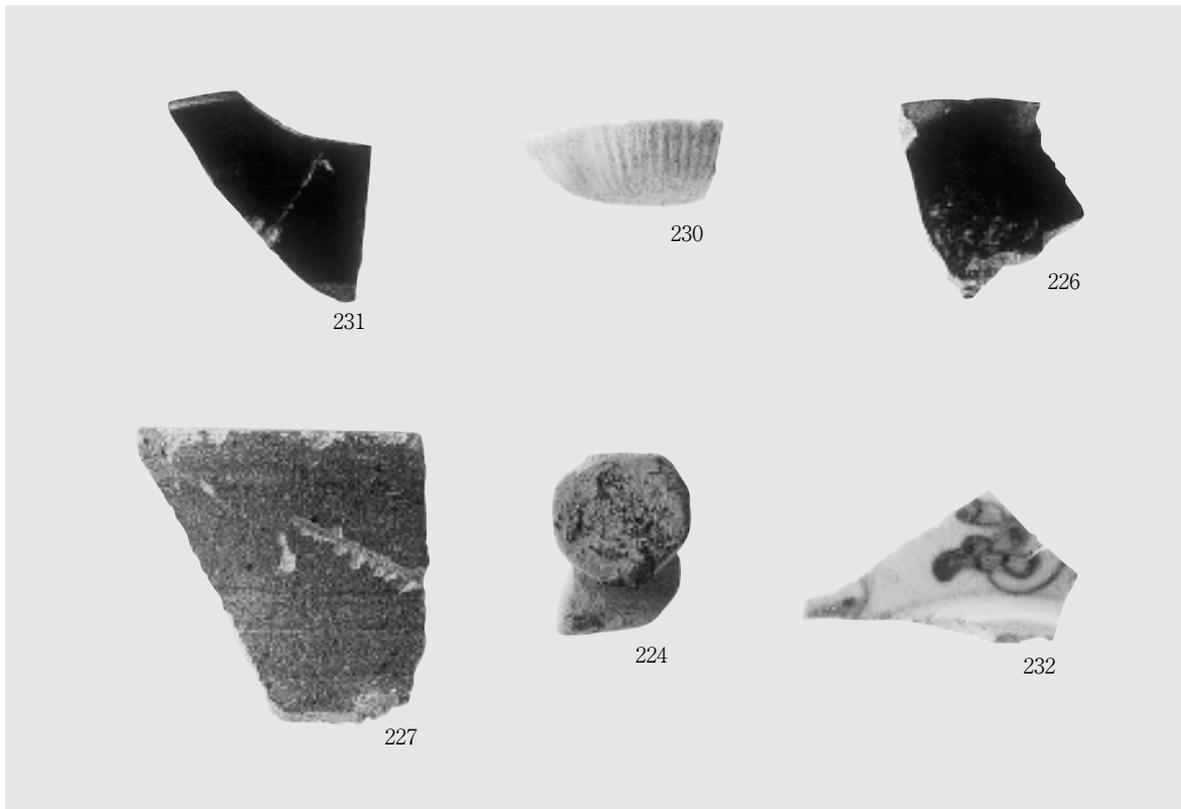
白磁(皿),青磁(碗),染付(碗,皿),肥前系陶器(碗),石製品(砥石)



常滑焼(甕),白磁(碗),染付(碗)



土師質土器(火鉢),備前焼(搦鉢),白磁(多角杯),土製品(土錘)



土師器(杯蓋),中国系陶器(皿),染付(皿),肥前系磁器(紅皿),瀬戸・美濃系(皿,匣鉢)



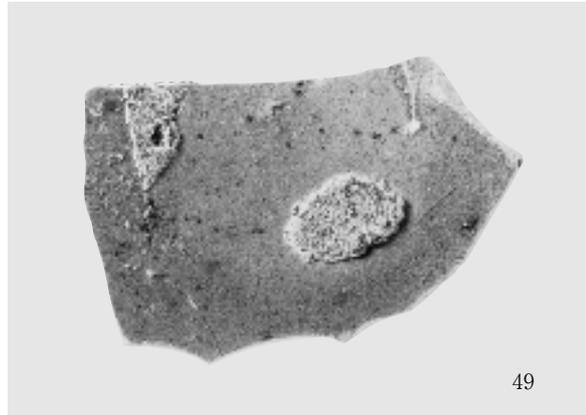
弥生土器(壺, 甕), 土師質土器(小皿), 石製品(空・風輪)



木製品(桶側)



43



49



52



53



54



55



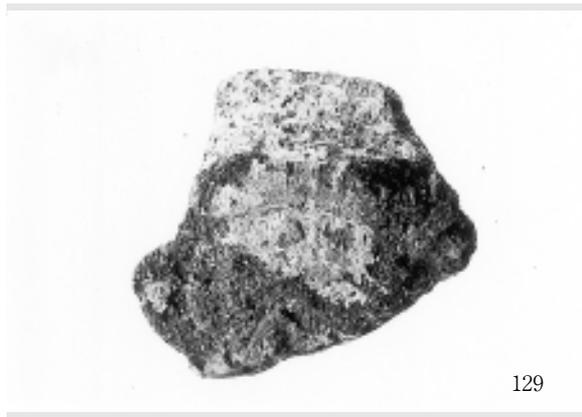
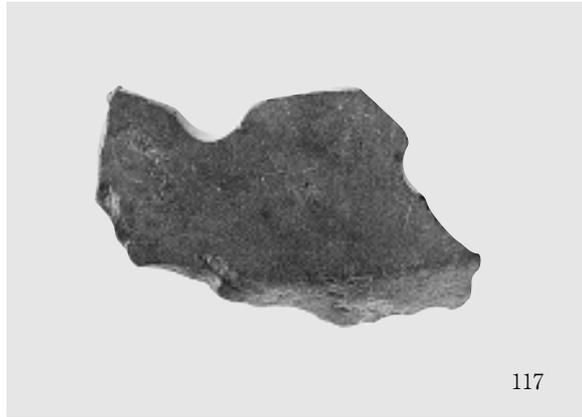
73

74

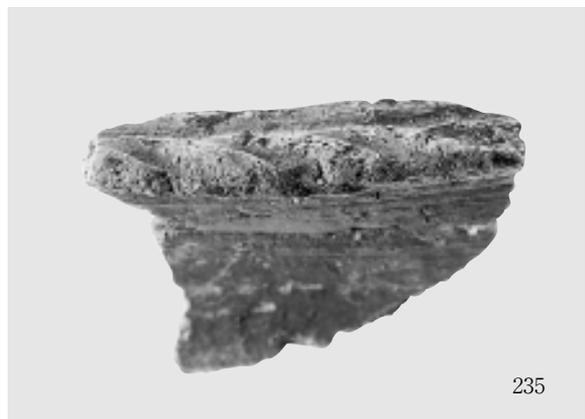
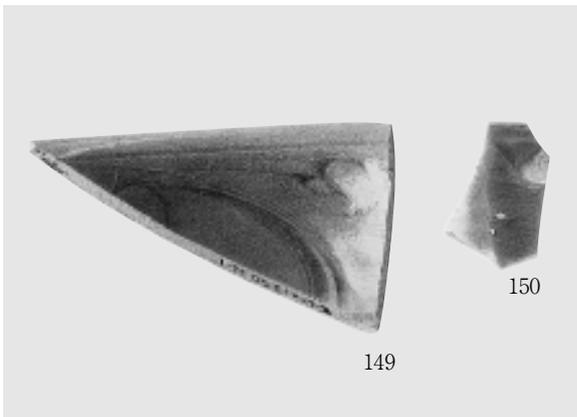


95

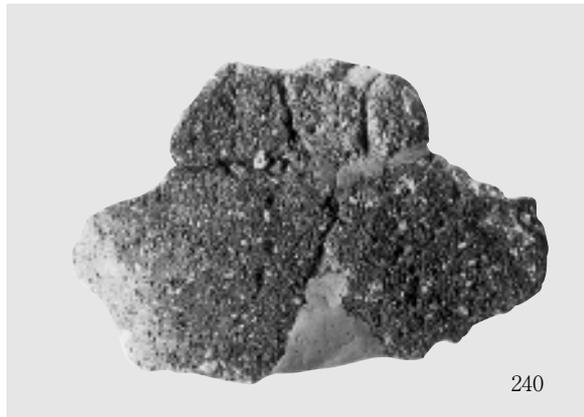
土師質土器(鍋),白磁(皿),肥前系陶磁器(碗),近世陶磁器(搗鉢),古錢



繩文土器(深鉢, 浅鉢), 土製品(紡錘車), 石器(石包丁)



繩文土器(深鉢),土師質土器(羽釜),備前焼(鉢),青磁(碗),石製品(砥石,火輪)



繩文土器(深鉢, 浅鉢), 石製品(砥石)

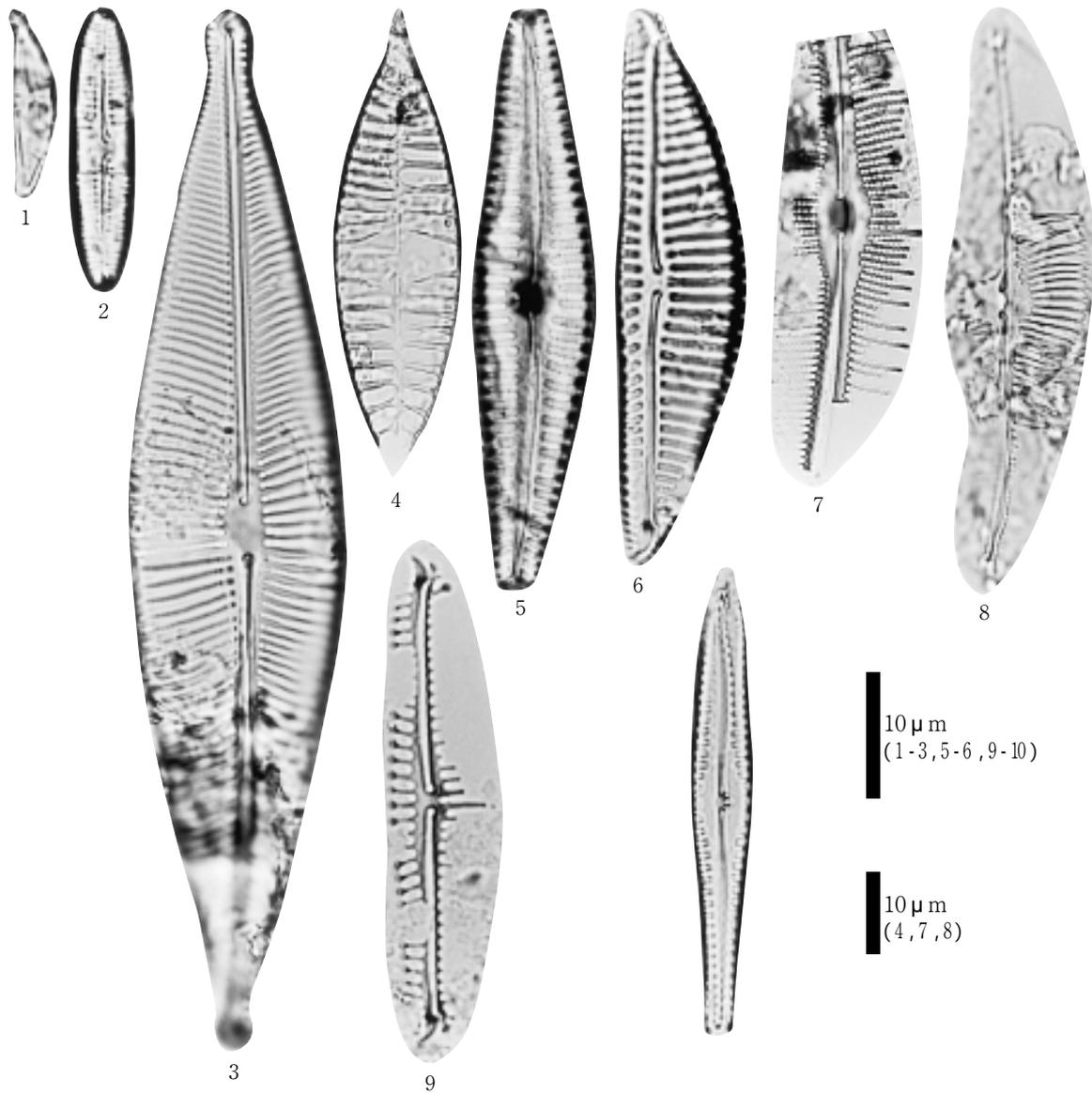


土師質土器(杯,小皿),常滑焼(匣鉢),備前焼(壺),陶器(天目茶碗),肥前系陶磁器(皿,香炉)

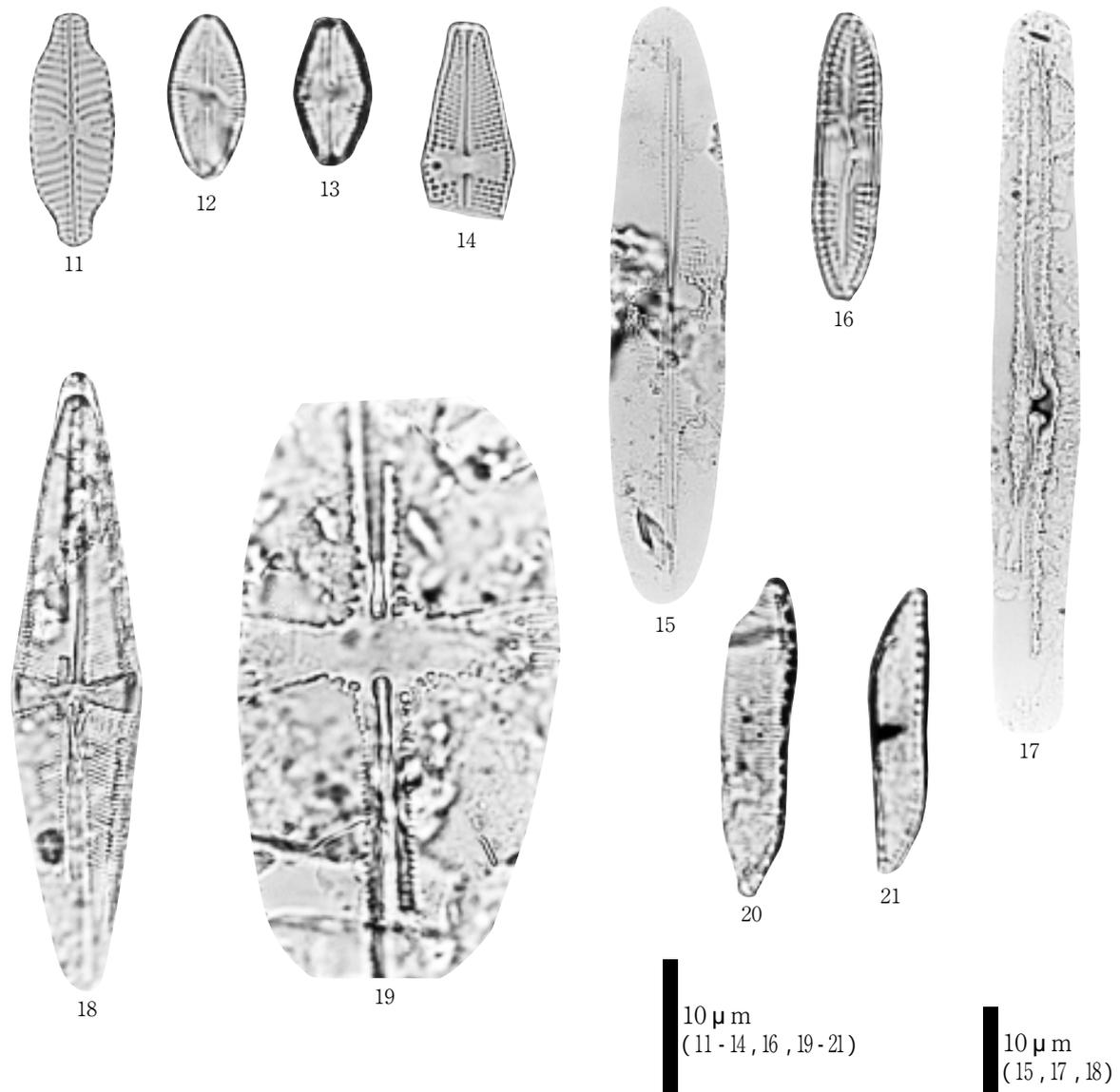


瓦器(小皿),土師質土器(杯・小皿),青磁(碗),瀬戸・美濃系(菊皿)

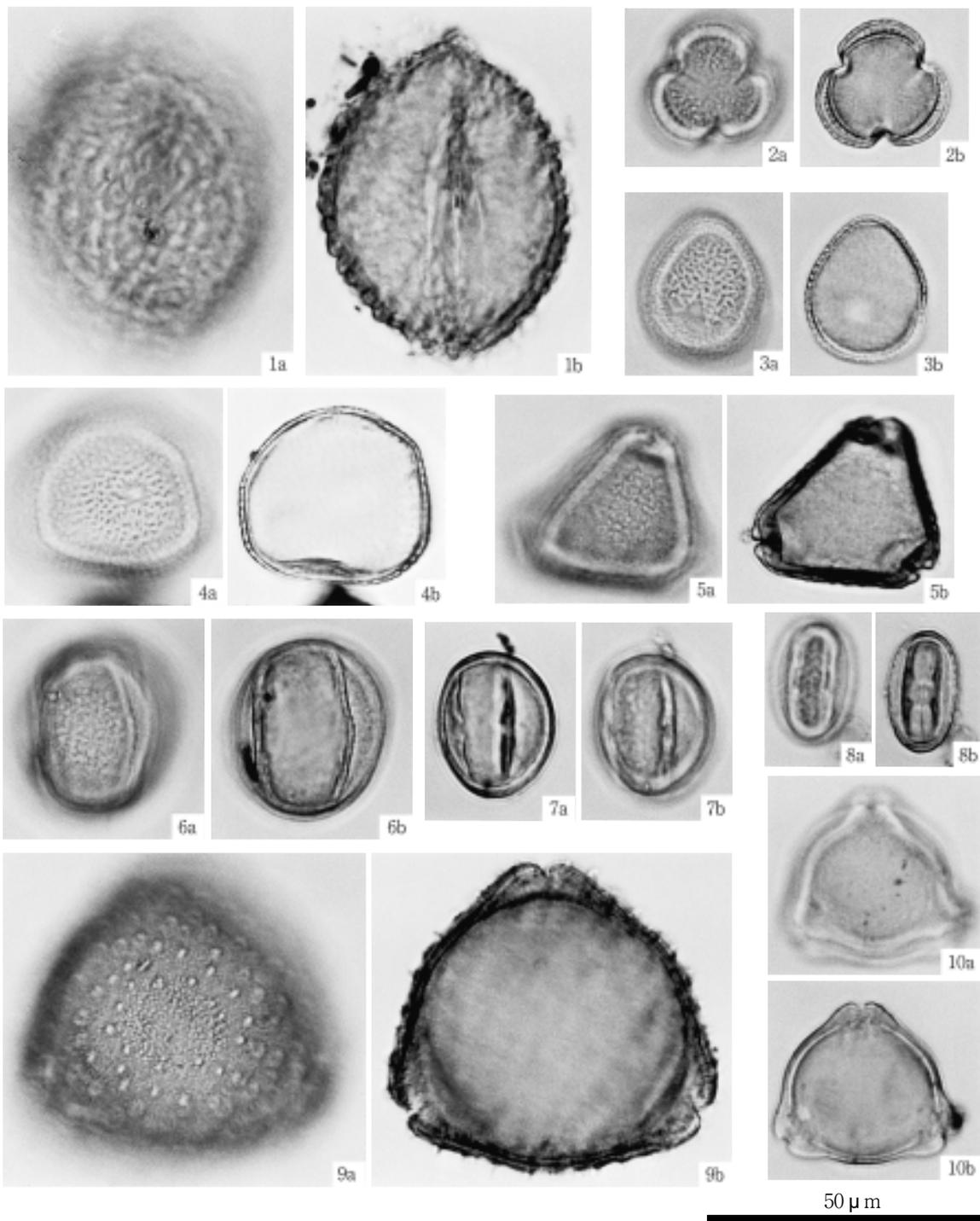
自然科学分析



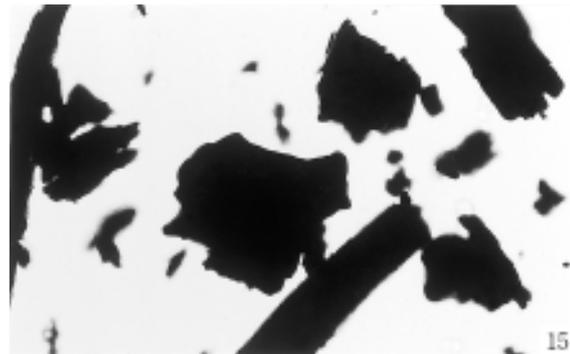
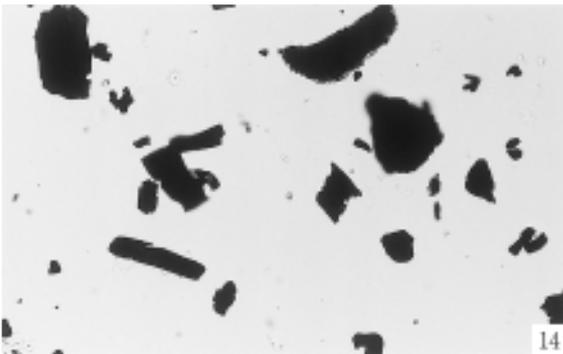
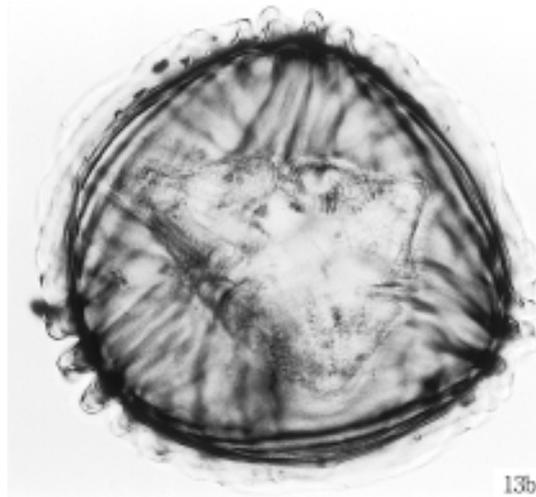
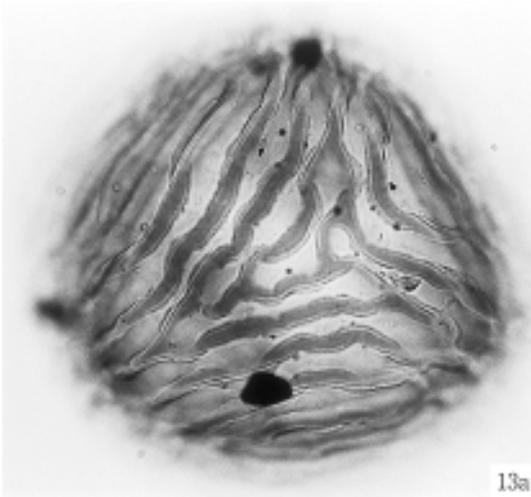
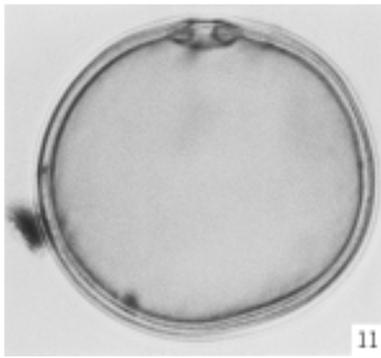
1. *Amphora montana* Kresske(試料番号23)
2. *Caloneis leptosoma* Krammer & Lange-Bertalot(試料番号23)
3. *Craticula cuspidata* (Kuetz.)D.G.Mann(試料番号23)
4. *Craticula* sp.(試料番号19)
5. *Cymbella japonica* Reichelt(試料番号23)
6. *Cymbella silesiaca* Bleisch(試料番号23)
7. *Cymbella* sp.(試料番号19)
8. *Cymbella* sp.(試料番号17)
9. *Cymbella* sp.(試料番号16)
10. *Gomphonema sumatrense* Fricke(試料番号8)



- 11. *Navicula elginensis* var. *neglecta*(Krass.)Patrick(試料番号23)
- 12. *Navicula conferbaces* (Kuetz.) Grunow(試料番号23)
- 13. *Nabicula mutica* Kuetzing(試料番号21)
- 14. *Nabicula mutica* Kuetzing(試料番号23)
- 15. *Neidium* sp.(試料番号17)
- 16. *Pinnularia schroederii* (Hust.) Krammer(試料番号23)
- 17. *Pinnularia* sp.(試料番号12)
- 18. *Stauroneis acuta* W.Smith(試料番号19)
- 19. *Stauroneis* sp.(試料番号12)
- 20. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow(試料番号23)
- 21. *Nitzschia obtusa* var. *scalpelliformis* Grunow(試料番号14)



- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1. コヤマキ属(試料番号17) | 2. ヨモギ属(試料番号17) |
| 3. ガマ属(試料番号17) | 4. ミクリ属(試料番号17) |
| 5. ハノイキ属(試料番号19) | 6. コナラ属コナラ亜属(試料番号17) |
| 7. コナラ属アカガシ亜属(試料番号17) | 8. シイノキ属(試料番号17) |
| 9. スイカズラ属(試料番号19) | 10. ヤマモモ属(試料番号17) |



50 μ m

(11-12)

100 μ m

(13)

100 μ m

(14-15)

11. イネ科 (試料番号19)

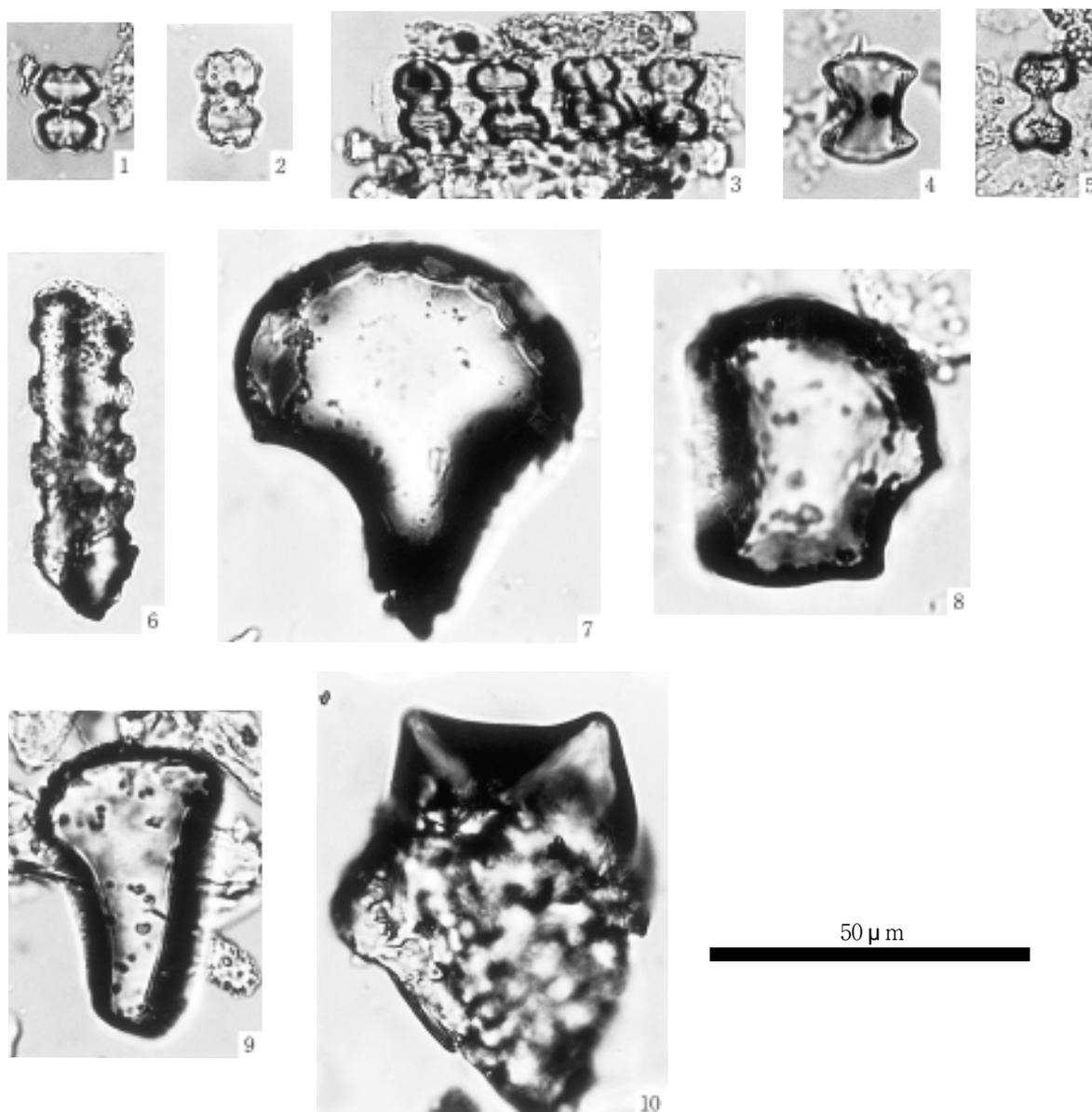
12. ソバ属 (試料番号17)

13. ミズワラビ属 (試料番号17)

14. 状況写真 (試料番号23)

15. 状況写真 (試料番号23)

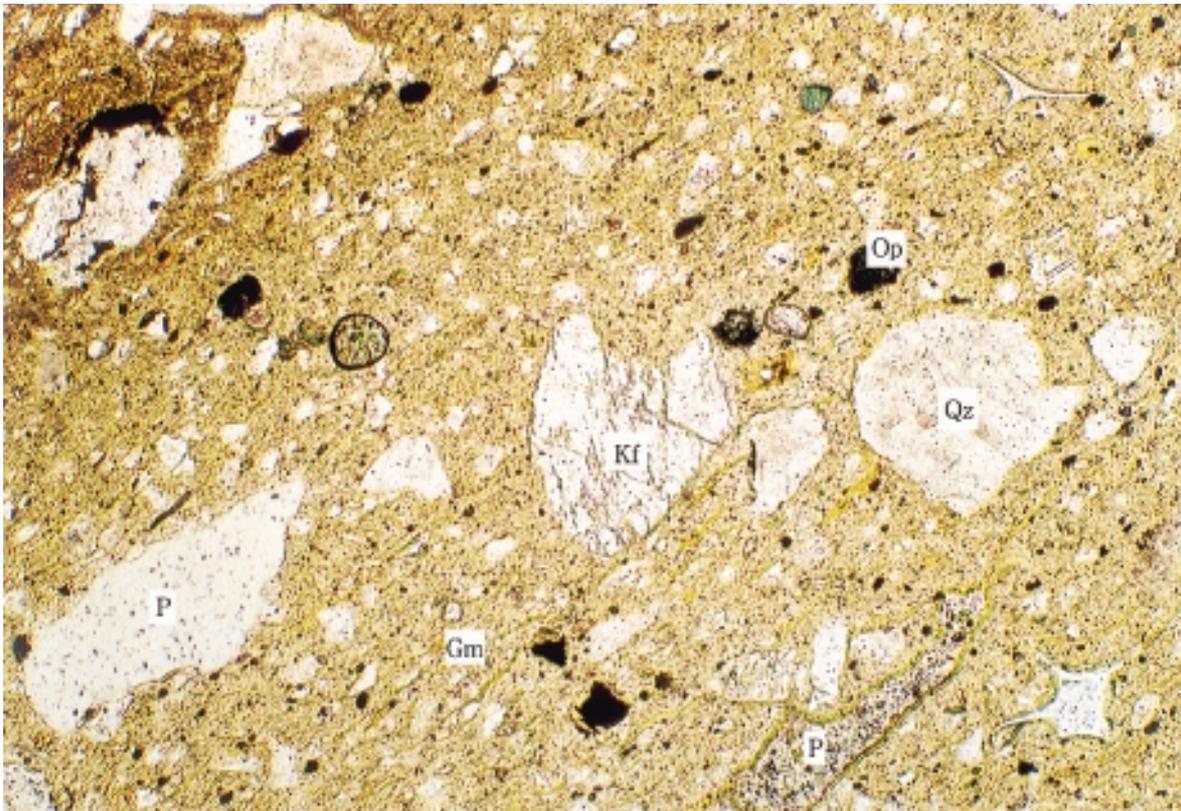
花粉化石2



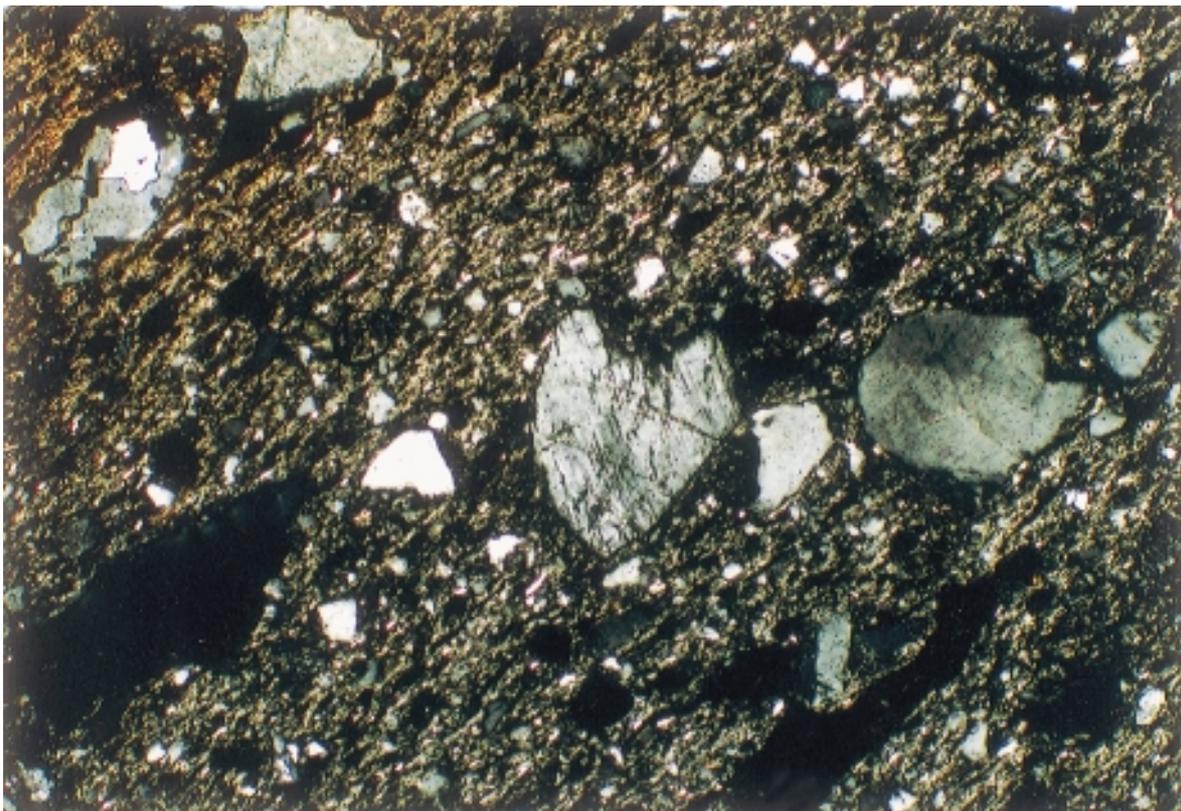
11 4mm

1. イネ属短細胞珪酸体(試料番号10)
2. イネ属短細胞珪酸体(試料番号8)
3. イネ属短細胞列(試料番号23)
4. タケ亜科短細胞珪酸体(試料番号10)
5. ススキ属短細胞珪酸体(試料番号2)
6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号3)
7. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号23)
8. タケ亜科機動細胞珪酸体(試料番号20)
9. ウシクサ属機動細胞珪酸体(試料番号14)
10. イネ属穎珪酸体(試料番号21)
11. モモ(96-5tt 1区 P-5)

植物珪酸体, 種実遺体



平行ニコル

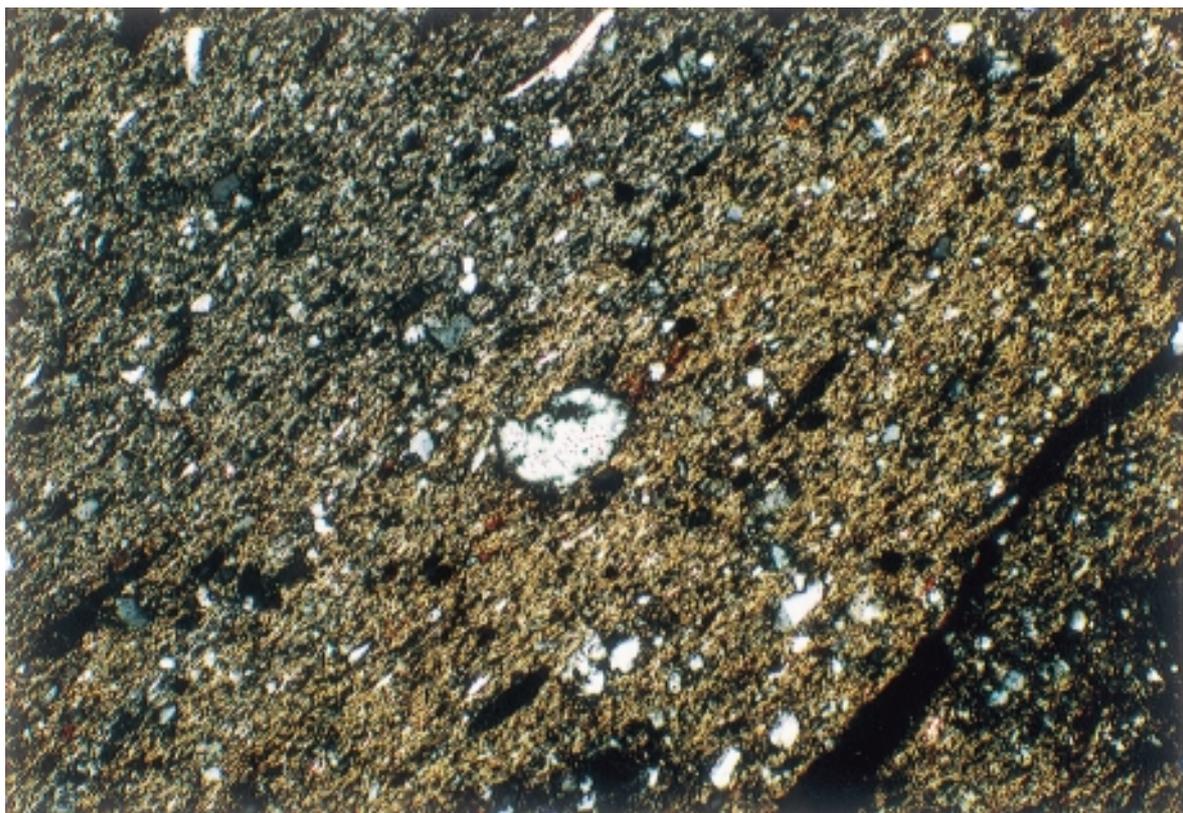


胎土薄片顕微鏡写真1(試料番号1)

0 0.2mm 直交ニコル



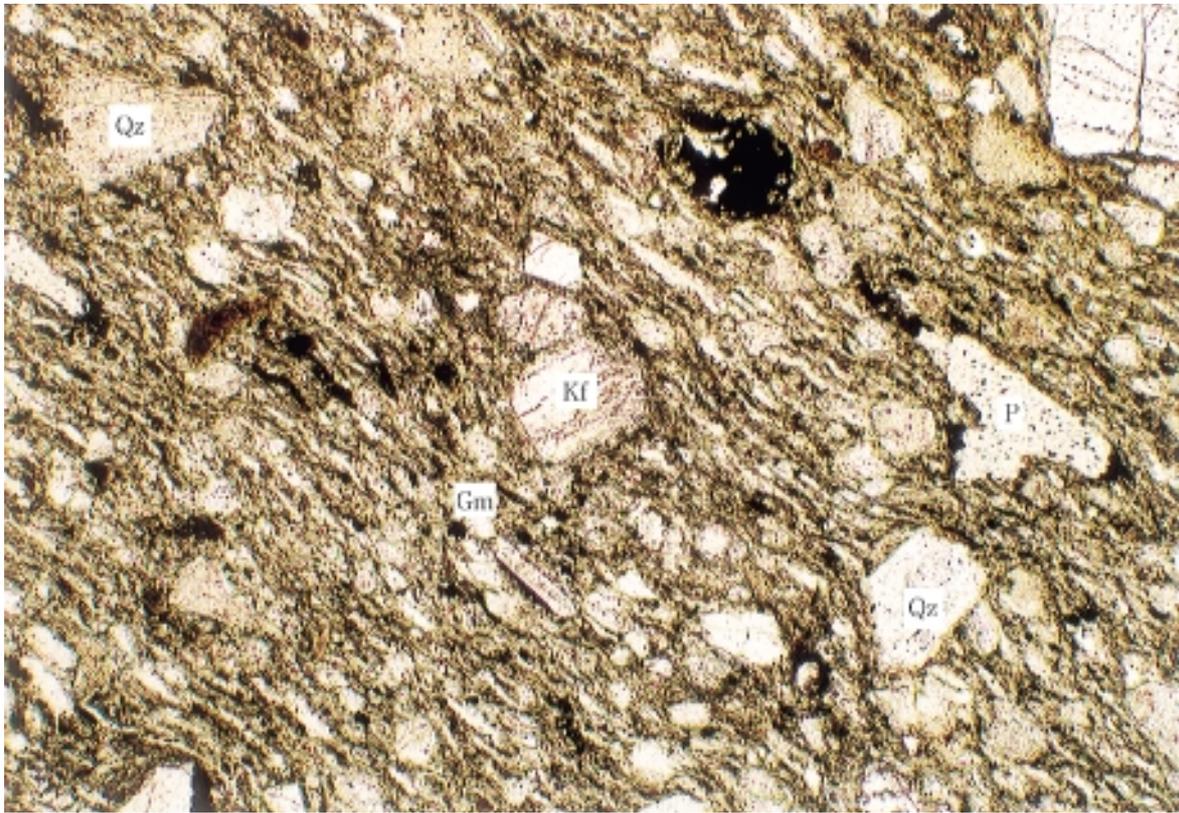
平行ニコル



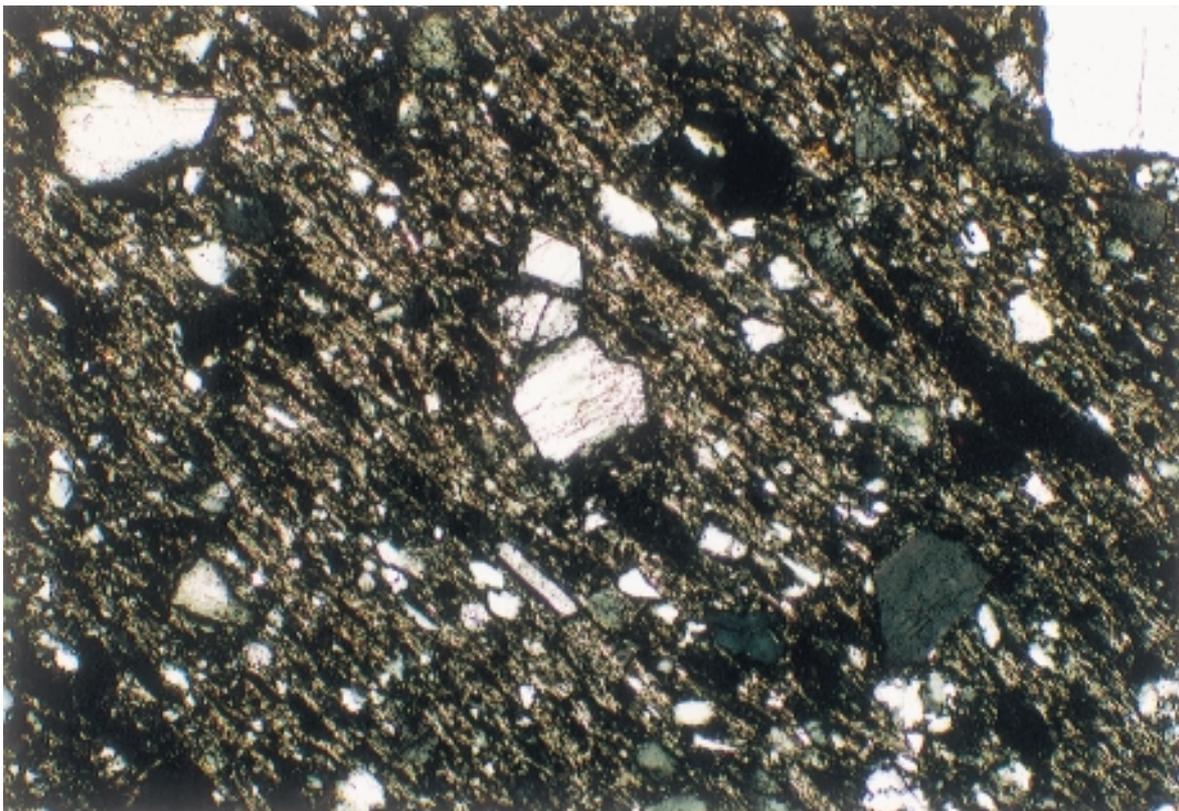
胎土薄片顕微鏡写真2(試料番号2)

0 0.2mm

直交ニコル

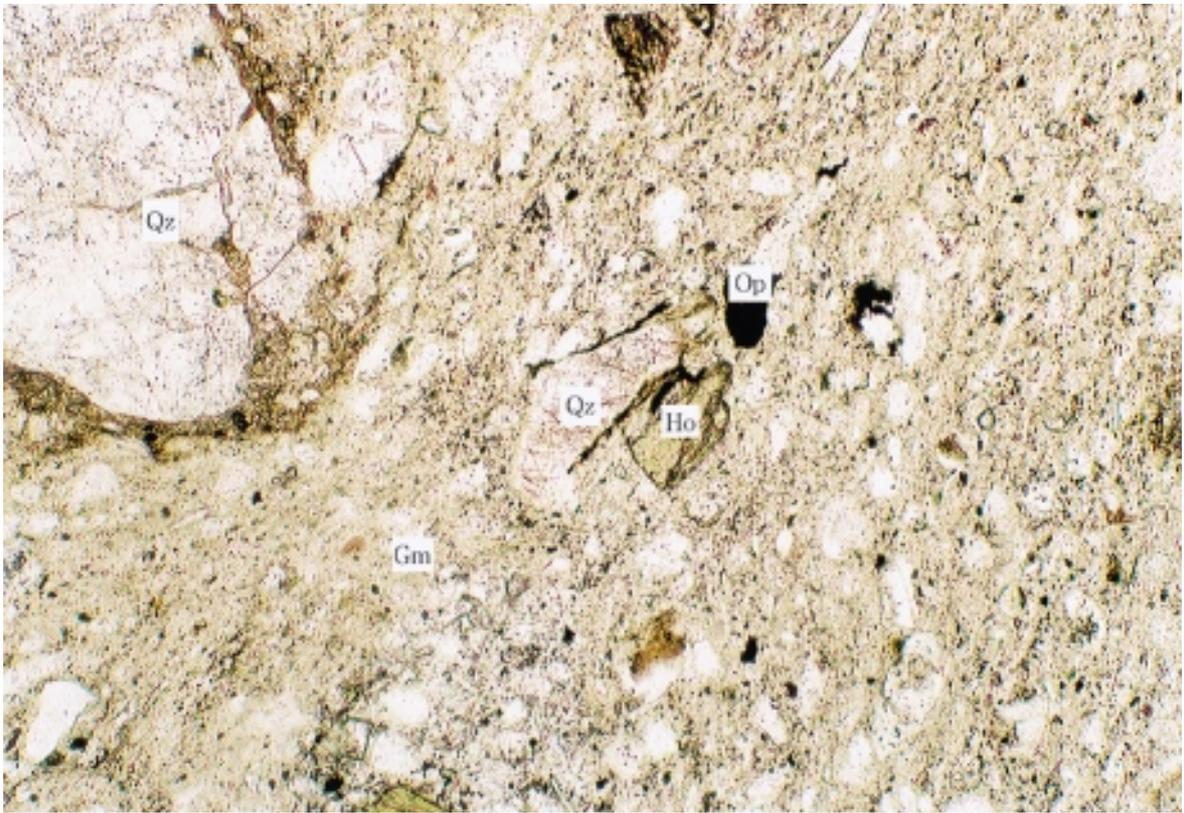


平行ニコル



胎土薄片顕微鏡写真3(試料番号3)

0 0.2mm 直交ニコル

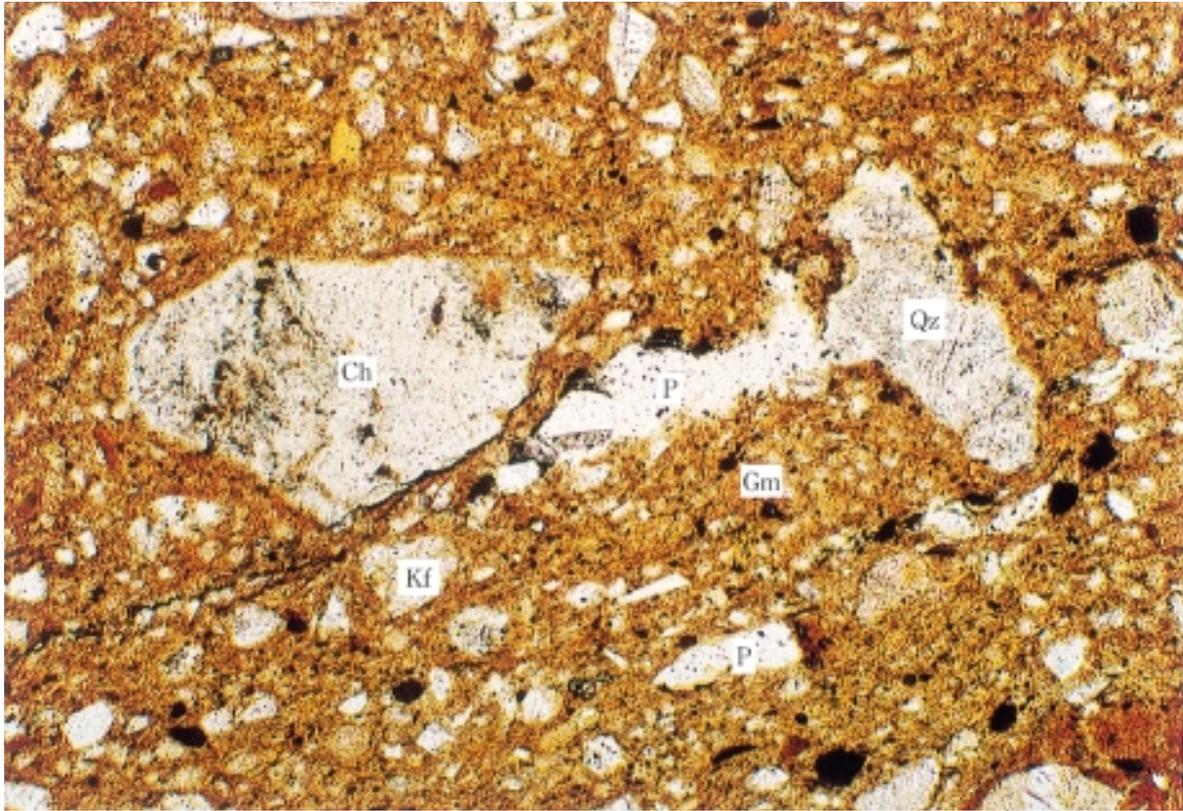


平行ニコル

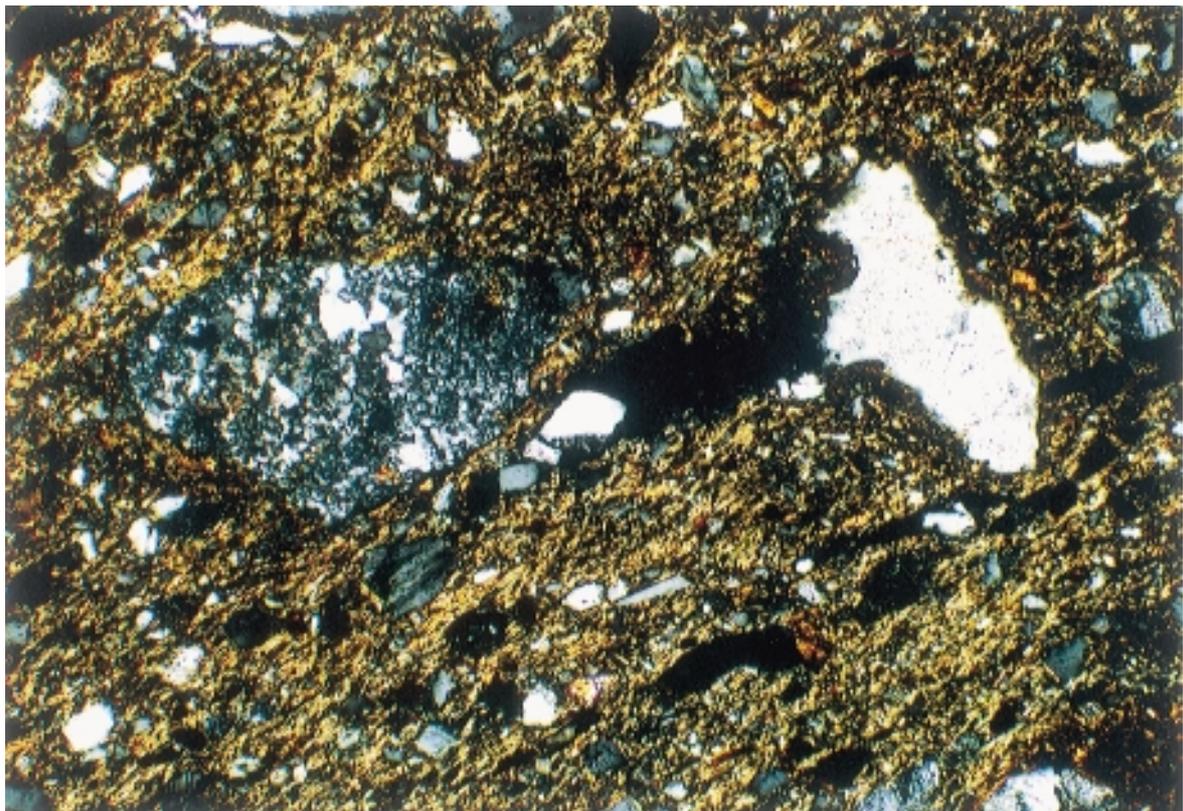


胎土薄片顕微鏡写真4(試料番号4)

0 0.2mm 直交ニコル



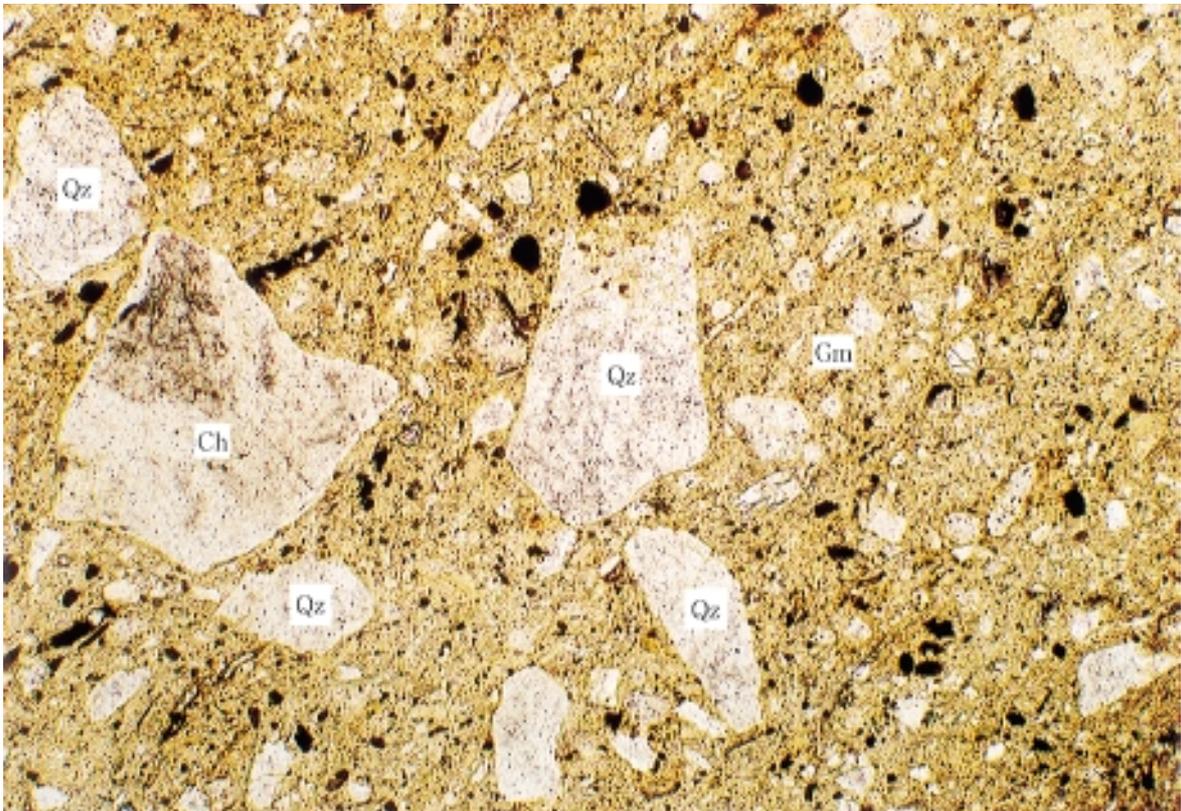
平行ニコル



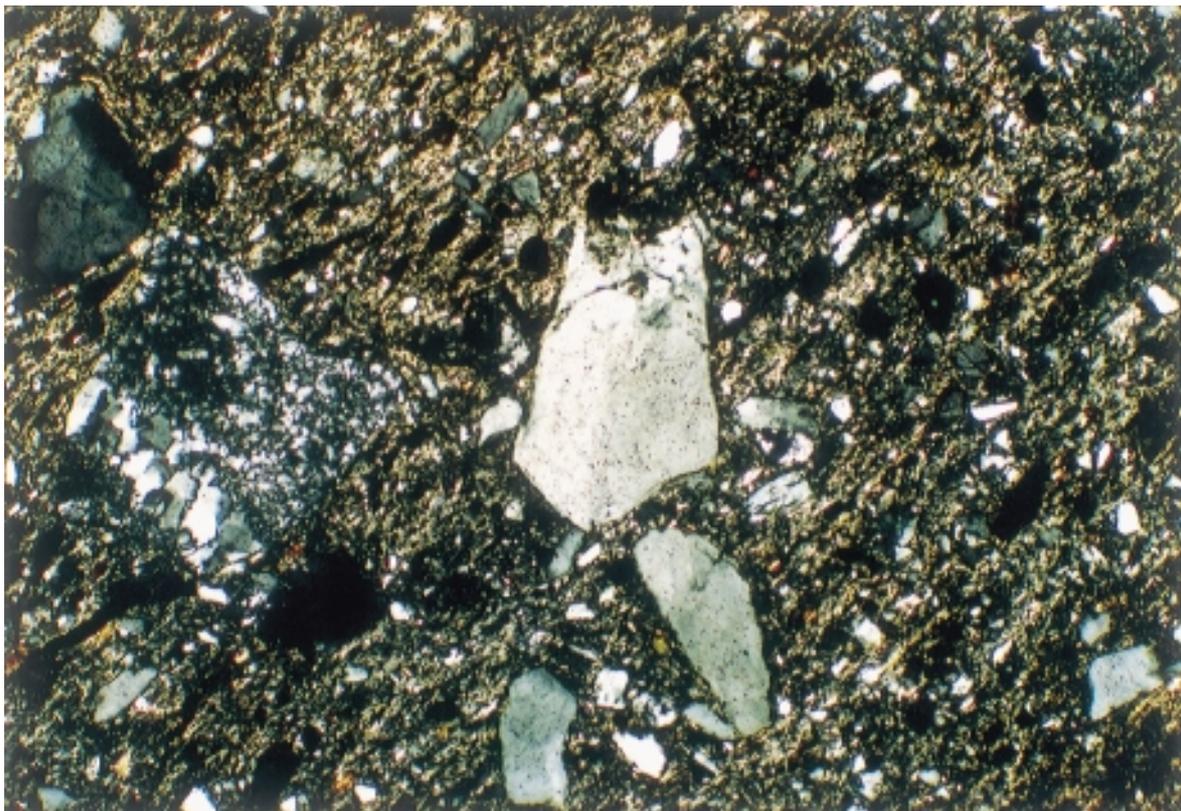
胎土薄片顕微鏡写真5(試料番号5)

0 0.2mm

直交ニコル



平行ニコル



胎土薄片顕微鏡写真(試料番号6)

0 0.2mm

直交ニコル

報告書抄録

ふりがな	てんじんいせきいち・はやしくちいせきいち							
書名	天神遺跡・林口遺跡							
副書名	土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第57集							
編著者名	廣田佳久・泉 幸代・田中涼子							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437-1							
発行年月日	2001年2月28日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 "	東経 。 "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てんじんいせき 天神遺跡	こうちけん 高知県 とさ 土佐市 たかおかちよう 高岡町	39205	050082	33 29 46	133 25 28	19960704 } 19961113	2,584	土佐市バイパス建設
はやしくちいせき 林口遺跡	こうちけん 高知県 とさ 土佐市 たかおかちよう 高岡町	39205	050021	33 29 41	133 25 21	19961119 } 19970218 19981116 } 19981204	3,549	土佐市バイパス建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
天神遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物跡 塀または柵列 土坑 溝跡	10棟 6列 16基 17条	土師質土器 瓦器 瓦質土器 青磁・白磁	屋敷跡縁辺部の 低湿地から多量 の土器出土 瓦器を始めとし た搬入品が多く 出土		
	その他(畠跡)	近世	畝状遺構	4群	肥前系陶器			
	その他(水田)	近代	暗渠	10条				
林口遺跡	集落跡	縄文	土坑	1基	縄文土器	13～14世紀, 15 ～16世紀の屋敷 跡, 石組井戸と 桶側6段積の井 戸を検出		
	集落跡	中世	掘立柱建物跡 塀または柵列 土坑 溝跡 井戸跡	11棟 10列 16基 21条 1基	土師質土器 瓦器 瓦質土器 備前焼 青磁・白磁・染付			
	その他(畠跡)	近世	掘立柱建物跡 土坑 溝跡 井戸跡	1棟 11基 3条 1基	肥前系陶器 中国磁器			
	その他(水田)	近代	暗渠	12条				

本書作成データ

本書の作成に当たっては、以下のシステムとフォントを使用した。

まず、システムは基礎作業にPowerBookG3/400とiBookSE、編集作業にG3/466のアクセラレータカードを装着したPowerMacintosh9515/132及びPowerBookG3/400を使用し、原稿執筆とデータ処理にはJedit(PPC) 1.08bとExcel98を用いた。編集はすべてQuarkXpress3.31Jを使用した。なお、表組はExcel98で作成したものをタブ変換しIllustrator8.0にFlexTableを介して取り込み編集しEPSに保存した。また、表によってはQuarkXpress3.31JのエクステンションTable Works Plus2.3Jに取り込み編集したものもある。

第 章自然科学分析に掲載している表は納品されたExcelのデータをすべてIllustrator8.0で編集し直し、同じく挿図も再度Illustrator8.0でトレースし直し、EPSデータとした。

フォントはすべてCIDフォントで、細明朝、中ゴシック、太ミン、太ゴ、見出ミン、RmAlpha、外字はエヌフォア外字を使用した。なお、字詰めはDr.カーニングを併用した。

なお、入稿までの編集・校正作業はCOLOR LASER SHOT LBP-2260PSで印刷したもので行った。

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第57集

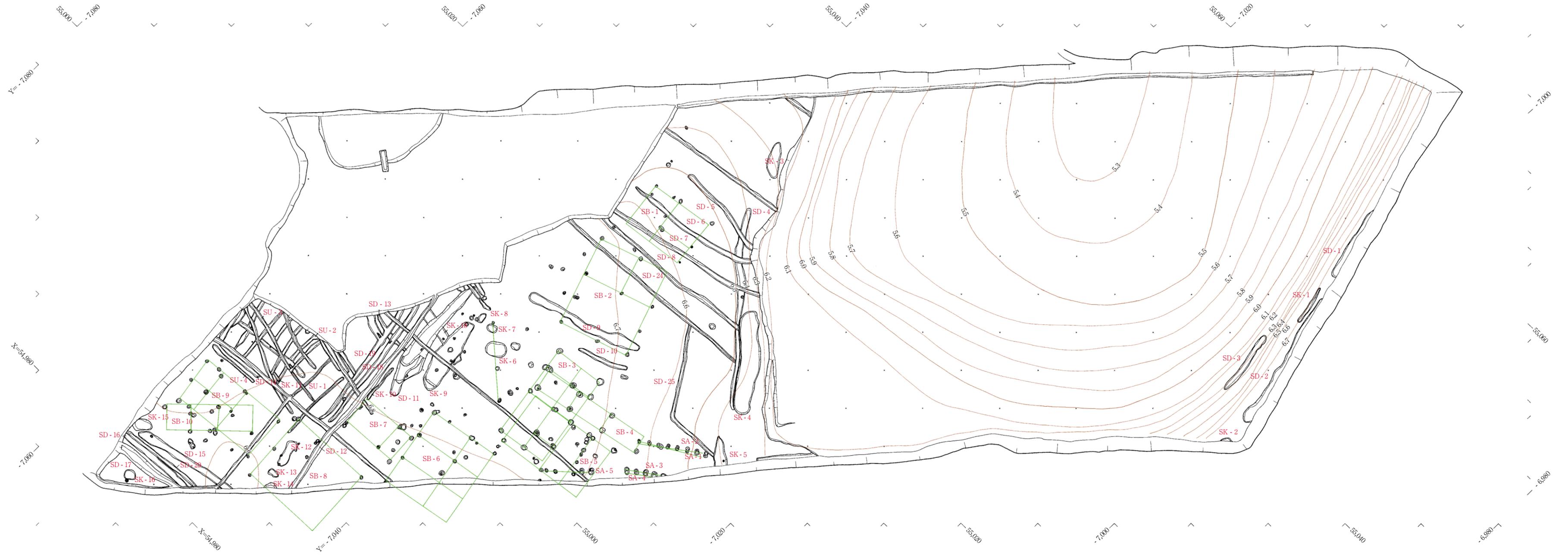
天神遺跡 ・ 林口遺跡

土佐市バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

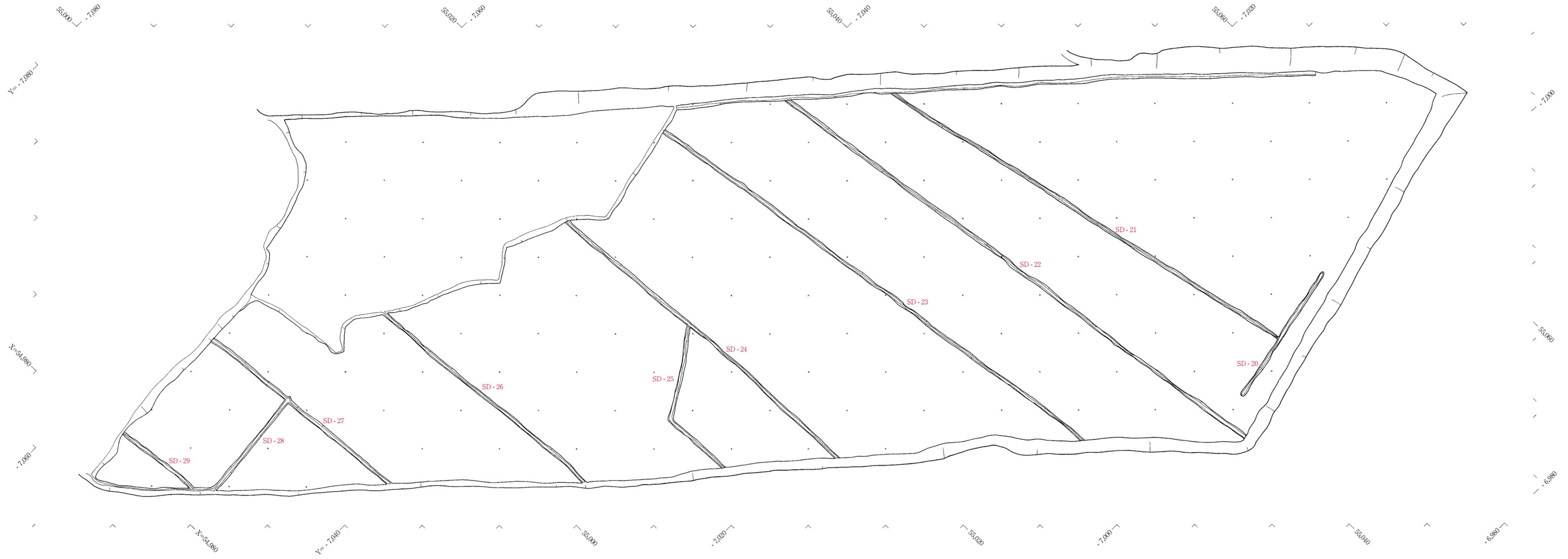
2001年2月28日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437 - 1
Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社



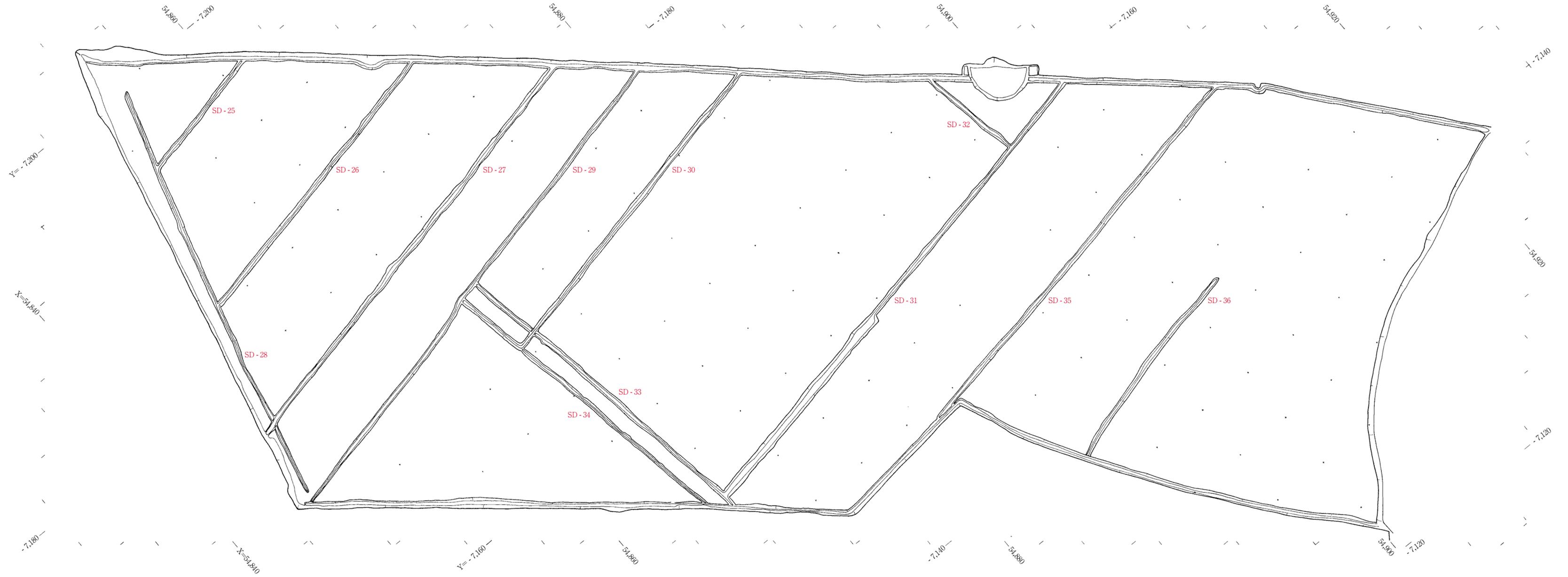
付図1 天神遺跡第 調査地区遺構平面図(S=1/200)



付図2 天神遺跡第 調査地区暗渠平面図(S=1/200)



付図3 林口遺跡第 調査地区遺構平面図(S=1/200)



付図4 林口遺跡第 調査地区暗渠平面図(S=1/200)